

R e n k o n t o - M o n d o
~ D i o - l i b e r i g ^
i ~

芳田尚哉

0 やっと見つけた

今から二年前、止まっていたはずの歯車が動き始めた。それはまさに運命の歯車だった。その歯車が動き始めた時、眠っていたソレは胎動を始めた。その胎動は時間の挟間に一つの雫を落とした。それは波紋となり、大きくなり波となり、普通の生活をおくっていた二人の少年少女を飲み込んだ。

それは、交わることのない平行線の人生のはずだった。だが、歯車の起動を引き金に起こった波が、平行線を交わらせた。

二人には、望む望まないに関わらず、過酷な運命が待ち受けていた。その運命が、二人の今を大きく変えた。

*

「亜依～、待ってよ～」

高尾亜依は、友人の姫川桜に呼び止められた。

「どうしたの？ そんなに急いで」

いつもは一緒に帰るのだが、その日は違っていた。

「……ちょっと……ね」

亜依は言葉を詰まらせた。

「さては、彼氏でも出来たか？」

桜はそんな亜依を茶化す。そんな事は、日常茶飯事だった。

いつもなら『もお～、そんな事ないよお』とか言ってふざけあっているのだが、その日は違った。亜依の様子はいつもと違っていた。

「ゴメン。ホント、ゴメン」

そう言うと、一目散に走って帰ってしまった。一人残された桜は、茫然と見ているしかなかった。

「よう、どうした？」

そんな桜に声を掛けたのは、桜より一つ年上の幼なじみ水沢達之だった。

「たっちゃん……。うん、亜依がさ……」

桜はさっきの事を達之に話した。

「心配しすぎじゃないのか？ 誰だってそんな感じになることはあるって」

しかし返ってきたのは、アッケラカンとした返事だった。桜はその解答に納得せず不満そうな顔をしたが、達之はそれを無視した。

そう、なにも変わらないいつもの風景だった。

自分の部屋で亜依は、いつもとは違う空気を感じていた。それは、はっきりとしたものではなく、漠然としたものだった。そのため、桜に話す事に戸惑いを感じていた。

亜依は、肌身離さず首から下げている金色のロケットを手にした。そのロケットは、小さな青い石が埋め込まれており、その周りに網目状に模様が彫られていた。しばらくそのロケットを眺めたあと蓋を開け、中の写真を見た。それは、三人で写っている――一組の男女が小さな女の子

を抱いている――のだが、顔の部分が欠けていて誰の写真かは判別できない。亜依はその写真について、育ての親からは、本当の両親だと聞かされていた。そう、今の両親は本当の両親ではないのだ。

亜依は、辛い事があるといつもその写真を見ていた。その写真を見ている間だけは、心が癒される感じがしたのだ。

亜依はその写真に関して、今まで詳しい事は一切訊かなかった。だが、今は違った。その写真の事を訊けば、この奇妙な感覚の事がわかるような気がしてならなかった。何故だかそう思えた。

階段を降り、下の階のキッチンに向かった。

「お母さん、この写真の事を教えて欲しいの」

ずっと〈お母さん〉と呼んでいるし、本当のお母さんだと思っている――そう思おうとしている――ので、育ての母親をそう呼ぶ事は、亜依にとって自然な事になっていた。

「どうしたの？ 突然」

夕食の準備をしていた亜依の育ての母親は、思いもしなかった質問に驚きを隠せなかった。

「うん、ちょっと気になって」

亜依は気まずそうに俯いたままそう言った。

「.....その写真はね。あなたの本当の両親なの」

育ての母親は、決まりきったいつもの台詞から言い始めた。

「それは、知ってる。だから、その続きを教えて欲しいの」

「わかった。今夜、お父さんが帰ってきたら話すわ。約束する」

育ての母親はそれだけ言って、夕食の準備に戻った。

その夜、育ての父親を交え、三人での食事が始まった。

「お母さん」

亜依は、夕方の約束を果たしてもらうため、育ての母親に話しかけた。

「.....あなたの本当の両親はね.....」

育ての母親がそう言いかけた時だった。

「やめないか」

育ての父親がそれを制止した。

「ごめんなさい。約束したの。それに、もうそろそろ本当の事を知っておいた方がいいと思
って.....」

そう言った育ての母親の目には涙が浮かんでいた。それを見つけた亜依は、胸が締めつけられるようだった。

「.....仕方ない。話してあげなさい」

育ての父親も、渋々ながら納得した。

「亜依.....あなたの本当の両親は、事故で死んだんじゃないの」

亜依は、その育ての母の言葉に我が耳を疑った。今まで事故で死んだものだと思っていた亜依にとって、それは予想外の事だった。

「あなたの本当の両親は、ある日突然消えてしまったの」

亜依はなにとも言えなかった。突然消えたと言われてどう返事ができるのだろうか。しかし、事実は事実。受け入れるしかなかった。たとえ、それが受け入れづらいものだったとしても……。

育ての母親は、それから詳しく――あまりにも突飛な事なので、育ての母親も事実を知るはずもなく、詳しいといってもそれほどではないのだが――話していたが、亜依の耳にはすでに届いていなかった。

本当の両親の事を聞かされた――聞かされたといっても、ほとんど聞いていなかったのだが――亜依は、魂が抜けたようになっていた。自分の部屋に戻り、ベッドに倒れ込むと何故だか涙が溢れてきた。

「聞かなきゃよかった……。どうして……」

その夜、亜依はずっと泣いていた。それでも、いつの間にか眠っていた。

窓の外には、大きな満月が浮かんでいた。

＊

それと時をほぼ同じくして、椎崎誠司も今までにない違和感を感じていた。

しかし、誠司はまったく気にせず、普段通りの生活をおくっていた。

「誠司、授業サボってなにやってるの？」

学校の屋上で昼寝――まだ午前中だから朝寝か――をしていた誠司は、可愛らしい声がして目を開けた。

「なんだよ、実央かよ」

誠司は気怠そうに、クラスメイトの三朝実央に言った。

「なんだじゃないの。ホントに、誠司は……」

「はいはい。もう聞き飽きましたっての」

「わかってるなら、言われた通りしなさいよ。つとに、もお……」

「……よっと」

「こら、誠司！」

誠司は突然立ち上がって、走り去っていった。残された実央は、呆れて大きなため息をついた。

誠司は学校を抜け出し、近くの川原で寝転んでいた。

「空は高いよな～。それに比べて俺は……」

誠司は晴れ渡った空を見上げた。誠司は空を見上げるのが好きだった。青空はもちろんのこと、曇り空でも好きだった。空は、自由な感じがするからだ。

「なんだろうな、この変な感じは……」

誠司は、左耳のピアスを触りながら言った。このピアスは、よくあるリング状のものでなく、女性が付けるような丸い緑色のビーズのような石のついたピアスだった。このピアスは、誠司が十歳の頃から付けている。それ以来、肌身離さず付けている。外したことがない。

「さてと、どこ行こうかな」

川原をあとにした誠司は、進学予定の高校――星風高校に向かった。そこは、最近改築したら

しく、やけに綺麗な校舎だった。授業中ということもあって生徒の姿はなかったが、どう考えても誠司には似合いそうもない雰囲気だった。

「こんなとこ、よくこの俺が入れたよな……」

誠司は、その校舎を見上げた。

「あと二ヶ月でここに入学だな」

しばらく校舎を見て、その場を去った。

「やっと見つけた」

街をブラブラしていた誠司に実央が声をかけた。

「なんだよ、なんか用か？」

誠司は怪訝そうに言う。

「別に」

実央は満面の笑みで言う。そして、

「誠司こそ、なにしてたの？」

と、続けた。

「別に」

誠司はそう返事した。

「んもう……」

「ところでさ、お前授業どうしたんだよ？」

「サボっちゃった。えへへ」

実央は無邪気に笑っている。誠司は、今までに見た事のない実央に驚いた。誠司にとって、実央は真面目そのものだった。そんな実央がこうしているというのは、なんとも言い難い違和感があった。

「な～んちゃって。授業はもう終わってるんだよ」

「へ？」

「忘れたの？ 今日には舞踏会があるから、参加しない生徒は午前中で授業は終わりなんだよ」

「そういえば、そんな妙なイベントがあったな」

そうだったのだ。誠司が通う中学校――瀬木尾中学では、毎年二月に生徒会主宰で本格的な舞踏会が開かれるのだ。しかし、そのイベントに参加するものは少なく、全校生徒の一割にも満たない。参加するのは生徒会と、本当にそういうのが好きな生徒か、珍しいもの好きな生徒くらいしか参加しない。それでも舞踏会が廃止される事はなく、毎年きちんと開催されている。一部では、学校の七不思議の一つとさえ言われている。

「今年は参加しなかったんだな」

「え？」

「毎年、舞踏会に参加してただろ？ 今年は参加しないのか？」

「……うん。面白くないもん」

実央は、淋しそうに俯いて言った。

(マズイ。忘れてた)

誠司はその事に関して、思い当たる節があった。それは、実央が一つ上の先輩と付き合っているという、どこにでもあるような噂だった。

(実央って……なるほど、そういうことか……)

誠司は、一人で納得した。

「ね、どこか行こうよ」

実央はそう言って、誠司の腕を引っ張って走り出した。

「おわっ……」

誠司は急に引っ張られ転びそうになったが、なんとか立て直した。

「おい、なにすんだよ」

「文句言わない。ほら」

そんな実央を見て、誠司はなにもできなかった。

誠司は結局、陽が暮れるまで実央の相手をする事になった。

「きれいだね」

別れ際、実央は空を見上げて言った。満天の星空だった。ちなみに、月は雲に覆われてよく見えなかった。

「そうだな」

空を見る事が好きな誠司は、もちろん夜空も大好きなのだ。それが興じてか、星座に詳しくなった。

「stelo」

誠司は無意識にその言葉を発した。

「……え？」

誠司の口から出た聞き慣れない言葉に、実央は疑問を持った。

「ねえ、誠司。さっきの言葉ってなに？」

「さっきの言葉？」

誠司は首を傾げた。

「そう、さっきス……なんとかって……」

「俺、なんか言ったのか？」

しかし、誠司にその記憶はない。

「んもう……ま、いっか。……なんでもないの、忘れて」

「変なやつ……」

そんな会話をしつつ、夜道を歩いていた。周りには人影もなく、暗闇は二人だけの空間だった。

「じゃあね」

結局、誠司は実央の家まで行った。

「ああ。じゃあな」

誠司は、何故か照れくさかった。

「どうしたの？」

わざとなのか、実央は下から覗き込んで言った。

「な、な、なんだよ」

誠司はドギマギした。

「んん？」

実央は小悪魔のような笑みを浮かべた。

「今日はアリガトね」

そう言って、家の中に入っていった。

誠司は夜空を見上げた。先程まで隠れていた月が、その姿を現していた。その日は満月だった

。

それからしばらくして、実央は引っ越すことになる。

1 あたしを……迎えに？ Ⅰ

それぞれの序章から二年が経った。

高尾亜依は星風高校に進学した。もうすぐ、二年に進級しようとしている。

椎崎誠司は星風高校に進学したが、去年、汐嶺学園に転校した。そんな誠司も受験生になろうとしていた。

あれからも違和感を感じてはいたが、特に異変はないように思われた。少なくとも二人には……。

しかし、二人の知らない所では、細々とながらも異変は進行していた。足音も立てずに、そっと……。

その頃から、平行線だった二人の人生はねじれの位置に移行しつつあった。

そして、それはやがて交わる。

「亜依～、待ってよ～」

終了式の帰り、亜依は姫川桜に呼び止められて立ち止まった。桜とは同じ学校に進学し、あれからも変わる事なく友達だった。

「おい、桜。待てよ」

もちろん、一年先輩には水沢達之もいた。そう、あの頃と全く同じように時間が流れていた。

「たっちゃん、なにか用なの？」

「あのな……明日から春休みだろ」

「だから？」

「約束しただろ」

「……約束？」

桜はとぼける。それがわざとだと、亜依には一目でわかった。

「おい……」

亜依は二人のいつもの会話を黙って見ていた。

「わかってるって」

無邪気な笑みを浮かべる。

「まったく、お前は……」

「亜依、ゴメンね、呼び止めておいて……」

「いって」

そう言って、二人は帰っていった。一人残された亜依の背後から、

「一体なんやったんや？」

と、声がした。

「誰？」

亜依は振り返ったが、そこには誰もいなかった。辺りを見回しても誰もいなかった。

「誰？ 誰なの？」

キョロキョロと見回すが、状況は変わらない。

「……なんなの？」

亜依はその場から動けなかった。

「わいの声が聞けたんか。お嬢ちゃんなら大丈夫そうやな」

さっきと同じ声だった。

「どこ？ どこにいるの？」

「ここや、ここ。足下よ～見てみ」

そう言われて足下を見ると、そこには小さな人間——そう、白雪姫に出てくるような小人——がいた。

「あなたは？」

亜依はしゃがんでその小人に言った。

「わいか？ わいの名前はグビディいまして、Renkonto-Mondo、通称ミーツワールドっちゅう世界の案内人やってますねん」

その小人は、少し変な関西弁っぽい言葉で言った。

「で、そのレン……」

「ミーツワールドでええでっせ」

言葉の詰まった亜依に助け船を出す。

「そのミーツワールドの案内人が、なんの用なの？」

「ええこと訊いてくれはった。わいは、お嬢ちゃんみたいな人をさが捜しとったんや」

「あたしみたいな人？」

突然の事に驚きを隠せなかった。

「そうや。お嬢ちゃんは選ばれたんや」

「……選ばれた？」

亜依はますます訳がわからなくなった。

(選ばれた？ あたしが？ なにに？ 誰に？)

「この世界にはD i o……えっと、お嬢ちゃんたちの言葉で言えば、神様っちゅうところかな。その

D i oがそれぞれの世界の数人の遺伝子のX染色体に特別な素粒子を組み込んだんや。それが目覚めるかどうかは本人次第やけどな。そんで、お嬢ちゃんは見事目覚めたっちゅうわけや。でもや、お嬢ちゃんはまだ完全には目覚めきっておらん。せやから、もうちょっとしたらまた来るわ。ほなな～」

そう言うだけ言って、グビディと名乗った小人は消えた。亜依は、茫然と立っている事しかできなかった。

*

公立の星風高校に入学したものの、引っ越しの関係で汐嶺学園に転校した誠司は、中学時代の友人、三朝実央と再会を果たした。

「誠司、久しぶり」

二年の進級時に転校したので、ちょうど一年ぶりだろうか。実央は少し変わっていた。昔と違

って、明るくなっていた。

それから一年、実央とはずっと一緒にいる。

「どうしたの？」

学校の帰り道、考え込んでいるような誠司に実央が言った。

「考え事なんて似合わないぞっ」

そう言って、額をチョンとつつく。

「別に考え事してたわけじゃねえよ。ちょっと、実央と再会した時の事を思い出してただけだ」

「あたしと再会した時？ どうして、また急に」

「なんとなくだよ」

「そう……」

実央との再会は、印象的で忘れろと言われても、そう簡単に忘れられるものではなかった。

「誠司、久しぶり」

転入生として教室に入るなり、黄色い声が出た。それが実央との再会だった。幸か不幸か、クラスが同じだったのだ。ちなみに、席も隣。しかも、席に座ろうとした時、急に抱きついてきたのだ。それからは、必然的にクラス公認の仲になっている。実際はそんな関係ではないのだが、誠司が否定しないため、そういう事になっている。誠司に言わせれば、わざわざ否定するのが邪魔くさい、という事なのだが……。しかし、傍目からはそうは見えない。実央も満更でもないようで、こちらも否定しようとしなない。

中学時代の真面目な印象のままだった誠司にとって、それは意外すぎた。そんな再会を忘れる事なんてできるはずもなかった。

いつものように、たわいもない話をしながら歩いていた二人だが、誠司が急に立ち止まり、振り返った。

「K I U !」

誠司が突然そう叫んだ。それは、実央が聞いたことのない言葉だった。そう、二年前に聞いた言葉と同じ……。

「誰だ！」

誠司は日本語で繰り返した。

「あんさん、その言葉は……」

誠司の前に、小人が現れた。それは、亜依の前に現れたあのグビディだった。

この時、ねじれの位置にあった二人の人生が交差し始めた。

「お前は誰だ」

「わいは、グビディいまして、Renkonto-Mondo、通称ミーツワールドっちゅう世界の案内人やってますねん」

「Renkonto-Mondo？」

「ねえ、誠司。誰かいるの？」

どうやら、実央には見えていない——もちろん、グビディの声も聞こえていない——らしく、

実央にしてみれば、誠司が独り言を言っているようにしか見えないのだ。

「ああ、ちょっとな。悪いけど、先に帰っていてくれ」

誠司は、実央の方に向き直って言った。

「……え、ああ、うん、わかった」

実央は、首を傾げながらも誠司の言葉に従った。

「さてと。で、俺になんの用なんだ？」

誠司は、再びグビディの方を向いて言った。

「あんさん、なんでその言葉喋れますねん？　なんでや？」

「こっちが質問しているんだ。俺になんの用だ？」

誠司は、強気な姿勢で睨みながら訊き直す。グビディは、そんな誠司に完全に圧倒されていた

。

「あ、あのな。わいは別にあんさんに危害を加えるつもりはないんや。ただ、あんさんみたいな人を捜してたんや。でも、なんでや？　あんさんはD i oに選ばれた人間やないはずや。なんでや？」

グビディはオドオドしながら言った。

「なに言ってるんだ？　神に選ばれたとか、選ばれていないとか、どういう事なんだ？　ちゃんと説明してもらおうか」

誠司はさらに睨みつけた。

「わ、わかったわ。ちゃんと説明するさかい、そんな怖い顔せんといてくれるか」

「じゃあ聞こうか。手短にな」

「わかりましたがな。あんさん、おっそろしいわ」

そう前置きしてから、グビディは話し始めた。

「D i oっちゅうのは……」

「神だろ」

「そうや。あんさんの世界での言葉では神様や。D i oは、あらゆる世界の人間のX染色体に特殊な素粒子を組み込んだんや。けど、あんさんは違う。なのに、なんでや？　わいにもわからん。ほんまに、なんでや？」

グビディは、頭を抱えた。

「そんな事、俺が知るわけねえだろ～が」

「そうやけど……まあ、ええわ。ほんで、その素粒子を持ってる人捜してたんや。そしたら、あんさんに気付かれたっちゅうわけですわ」

そこで、グビディは話を止めた。

「なるほど。本当に案内人なんだな。あんたの名前もそうだしな」

「ほんまに、なんでわかるんや？　確かにわいの名前の由来、g v i d iは案内するっちゅう意味や。ほんま、わい、こんな事初めてや」

「さっきから、同じ事ばかりうっせえんだよ。どうでもいいだろ。俺が知ってててなになが悪いんだよ」

「悪い、悪くないの問題やあらへん。それよりも、なんであんさんが知っとるのかっちゃうのが問題なんや」

「それこそ、どうでもいいじゃねえか」

「よくあらへん」

グビディは大声で言い返す。

「わかったよ。でもな、どうして俺が喋れるのか、俺だってわかんねえんだよ。気付いたら喋れるようになってたんだ。小さい頃から、無意識のうちに言っちゃうんだよ。それからは、そうでもなかったのに、最近また突然言っちゃってるんだよ」

訴えるように言い続ける誠司の声が、次第に涙声に変わってきていた。

「俺だって、好きで喋ってるんじゃねえんだよ。俺だって、普通にいたいんだよ」

誠司はそれだけ言って、その場に崩れた。

「あんさんは、あんさんで苦しんでたんやな〜。でもや、なんであんさんが喋れるんやろうか？」

グビディは、なおもしつこく言い続ける。

「まあ、なんにせよ、あんさんはかなり目覚めてる。少なくとも、あのお嬢ちゃんよりはな」

「お嬢ちゃん？」

誠司は、グビディの洩らした言葉を聞き逃さなかった。

「D i oが素粒子を与えた女の子や。可愛かったで〜」

グビディは、虚空を見上げて言った。まるで昔を懐かしむようだった。

「マジで？ 俺も会ってみてえな」

誠司は、グビディの言った『可愛い』という一言に反応した。

「あんさんの力が完全に目覚めたら会えるけどな」

「ホントか？」

「ああ、そうや。わい、嘘は言いまへん」

グビディは、自慢気に胸を張って言った。

「ところでさ……」

「……なんでっか？」

「力ってなんなんだ？」

「それはまだ言えまへん。そんな時が来たら言いますさかい」

「そうだよな。案内人だもんな」

「そうでっせ。わいはただの案内人やさかい。でも、安心しなはれ。あんさんの力はもの凄い速さで目覚めてきてまっさかい、お嬢ちゃんに会えるのもすぐでっしゃるな」

「ホントか」

「ほんまや」

「よっしゃ、なんかよくわかんねえけど、やってやるか」

「あんさん、わかりやすいな〜」

グビディは、感慨深く小声で言った。

「ま、えっか」

さらに、そう小声で言ってから、

「ほな、今回の所は帰りますわ。また、そのうち会うでっしゃろ」

と、言い残して消えた。

「……なんだったんだ？ ま、いっか」

そう呟きながら、誠司も家路についた。

グビディと出会ったその夜、亜依は不思議な夢を見た。

「こっち、こっち」

一人の女性が、時折手を叩きながら手招きしていた。それは、母親が歩き始めた子どもと遊んでいる風景だった。亜依は、なぜかその子どもが自分だと判別できた。そして、その女性は育ての母親とは違う。となると、それは本当の母親という事になる。

「おかあ～ん」

小さい亜依は、その女性の所にたどたどしくヨチヨチと歩いていった。現在の亜依は、それを上空から見ている。

「亜依ちゃん、もうちょっとよ。頑張って」

母親は、女の子を呼び寄せる。

「亜依、もうちょっとだぞ」

その隣には、いつの間にか男性——おそらく亜依の本当の父親だろう——がいた。

そのままゆっくりとだが、小さい亜依は母親の所まで辿り着いた。

「あっ」

母親に掴まろうとした時、小さい亜依は転んでしまった。

「うええええん……」

小さい亜依は泣き出した。

「大丈夫？」

母親は小さい亜依を抱きしめた。

「あらあら、足、怪我しちゃったのね」

そう言うと、母親は小さい亜依の右足の傷にそっと口付けした。そして、傷口から出てくる血を優しく舐めた。

「亜依、大丈夫よ。泣かないで」

母親は優しく語りかける。

「……えぐっ……う、うん……」

小さい亜依も次第に泣き止み始めた。

「よしよし、偉いぞ亜依は」

父親はそう言って小さい亜依の頭を撫でた。

「う……うぐっ」

そんな夢だった。

翌朝、目が覚めた亜依の頬には、涙のあとがあった。

その日、寝覚めの悪かった亜依は、近くの公園に散歩に出かけた。そして、一日ぶりの再会を果たす。そう、亜依の前にあの小人——グビディが現れた。

「お嬢ちゃん、久しぶりやな。っちゅうても、一日しか経ってへんけどな」

亜依は、無言で後退りした。そして……逆方向に走っていった。

「お嬢ちゃん、逃げんといてや」

グビディは慌てて追いかける。しかし、明らかに歩幅が違う。圧倒的に亜依の方が有利なはず……が、亜依はあっという間に追いつかれてしまった。

「お嬢ちゃん、わいから逃げようなんて甘いで」

「はあ、はあ、はあ……」

亜依は肩で息をしていた。

「……はあ、はあ、はあ……ど、どうして？ はあ……どうして、きゅ、急に……はあ、はあ……」

亜依は息を整えようとするものの、急に走ったため、それができずにいた。それでも、なんとか治まりつつあった。

「……どうして……はあ……あなたが……ここにいるの？」

「それはですな。お嬢ちゃんを迎えに来たんですわ」

「あたしを……迎えに？」

「そうや。お嬢ちゃんを迎えに来たんや。ほな、早速行きましょか」

グビディはそう言って、さらに、

「そうや、一応やな、確認しておきたいんやけど、あそこに穴が開いてるのがわかりまっか？」

と、続け、亜依の三メートルほど前方を指した。

「え？ 穴？」

亜依は目を凝らしてじっと見つめた。すると、さっきまで見えなかった穴がうっすらとながら見え始めた。

「穴だ！ 穴がある！」

亜依は感激して、思わず大きな声で言った。

「そうでっか。見えますんやな。それはやな『時の口』っちゅうて、様々な世界と通じてるんや」

亜依はそう言われても、全く理解できずにいた。

「とりあえず、詳しい事はあとで話しまっさかい、とりあえず……」

グビディはそう言って、

「あっ」

亜依の背中を押し、無理矢理、穴の中に入れた。

「さてと、あとは……」

グビディはそう言って、誠司の所へ向かった。

＊

「よう、あんさん」

「……ん？ ……………ん……うわっ」

学校も春休みになり、ゆっくりと家で寝ていた誠司は、その声で起こされた。そして、起きた瞬間に見た顔に驚き、つい叫んでしまった。

「おはようさん」

いきなり起こされた誠司にはお構いなしに、グビディはこれでもかというくらいの笑顔で言った。

「あんさんが楽しみにしてた時やで」

「……………」

誠司は、起きたばかりだという事もあり、事態が飲み込めずにいた。

「だ〜か〜ら〜。お嬢ちゃんに会えるで〜」

「……ふえ？ ……ええ！」

誠司は『お嬢ちゃん』という言葉には敏感だった。

「ほんま、わかりやすいやっちな〜」

グビディは、少し不安げに言った。

「ホントか？ ホントに会えるのか？」

誠司は、グビディに詰め寄る。

「ほ、ほんまやって」

「よし、今すぐ会わせろよ」

「その前にや。あんさん、あそこに穴が見えまっか？」

グビディは、誠司の部屋のドアの所を指した。

「穴？」

そう言われて、誠司はドアをじっと見た。

「見えた！ 穴が見えた！」

「よっしゃ！ ほな行きましょか」

そしてグビディは、亜依の時と同じように、誠司を穴の中に入れた。

*

「ここは？」

亜依は、なにもない空間にいた。

「うわっ」

そこに、誠司が落ちてきた。亜依は、ビックリしてへなへなと座り込んだ。

「ようこそ、Renkonto-Mondoへ」

二人の前にグビディが浮かんでいた。二人は、お互いを見た。二人は、そこで初めて出会った。この時、二本の平行線はついに交わった。

「高尾亜依。椎崎誠司。あんさんたち二人には、harmonioになってもらいま。よろしゅう」

「……………」

「……………」

二人は沈黙した。

「さてと、早速……」

「ちょっと待て！」

グビディの言葉を誠司が遮った。

「俺は合わせろとは言ったけどな、こんな所だとは聞いてなかったぞ。だいたい、調和ってなんだ？」

誠司は一息で言った。

「落ち着きなはれ。ちゃんと説明するさかい」

「じゃあ、さっさとしろ」

「わかりましたがな。とりあえず、自己紹介しときまっか。まずは、一度しましたけど、わいからしときますわ。わいはグビディ。ここRenkonto-Mondoの案内人や。ほな、次はお嬢ちゃん頼むわ」

グビディに急に言われ、亜依は驚いたが、一呼吸して自己紹介を始めた。

「えっと、あたしは高尾亜依です。星風高校の一年生です」

「星風高校だって！」

「え？ どうかしました？」

「あ、いや……一年前まで、星風に通っていたんだ」

「本当ですか」

二人だけの空間が出来上がっていた。

「あ、ちなみに俺は椎崎誠司。汐嶺学園の二年だ」

「そうなんですか……」

「今、二年のやつに知り合っていないのか？」

「……いますけど」

二人の会話はまだ続く。

「誰だ？」

「あの……水沢達之先輩なんですけど……」

「達之の知り合いか……って、俺はあいつとあんまり親しくなかったからな……」

「もっしも〜し」

グビディが割って入る。

「あ、悪い、悪い。で、なんだっけ？」

「自己紹介やったんやけど……結果的にできたからえっか。じゃ、本題に入るで」

そう前置きして、グビディは話し始めた。

「さっきも言いましたけど、あんさんたち二人にはharmonioになってもらいま。あんさんたちの世界の言葉で言えば、調和ですわ。そんで、あんさんたちにしてもらうことは一つ。mortoを封印して欲しいんや」

「モート？」

「滅亡？」

亜依と誠司が同時に訊く。

「そうや。滅亡をもたらすもんやから、そう呼ばれとる。さっき、封印して欲しいっちゅうたけど、できるなら倒して欲しいんやけどな。まあ、それはできるかわからんからええわ」

「で、封印するには、どうしたらいいんだ？」

誠司が訊く。

「それですわ」

グビディが深刻そうに頷く。

「f o r s t r e k i っちゅうもんが必要なんですわ。せやけど、問題があつてやな……」

「問題？」

亜依が訊く。

「そうなんや。問題っちゅうのは、そのf o r s t r e k i がなんなんかわからへんのや」

「わからないだつて！」

その言葉に誠司が大声を出した。

「そうなんや。あんさんたちには、それを探して欲しいんや。ちなみに、m o r t o を封印せん限り、元の世界には戻られへん」

「なに！」

「……………」

誠司がまた大声を出した。それに対して、亜依は無言だった。

「それと、同じ世界には72時間以上はいられへん。せやから、空間を移動した時にあんさんらのいた世界に行ったとしても、それを越えたら勝手にここに戻されまっさかい」

グビディは、そう付け加え、そして更に、

「ほんでや、それぞれの世界には、誰か協力者がおるはずや。向こうはそんなん知らん。せやけど、無意識的にあるんやろうな。好意的に協力してくれるはずや。ちょっとは安心したやろ。せやから、まずはその協力者を捜した方がええかも知れんな。その世界の情報を知るには、その世界の住人に訊くのが一番やからな」

と、続けた。

「フォーストレキー―削除か……」

誠司は渋々ながらも納得したのか、それとも開き直ったのか、これからの事を考え始めていた。しかし、亜依はおろおろとしていた。

「とりあえず、さっさと探しに行った方がええんちゃうか？」

「そうだよな」

亜依はまだ納得できていなかった。

「ほら、早く行こうぜ」

誠司は亜依を無理矢理引っ張っていった。

「いってらっしゃ〜い。……つて、ちょっと待ちいや」

早速出発しようとした誠司を、グビディが止めた。

「なんだよ。早く行けて言ったのはお前だろ〜が」

「せやけど、手ぶらでええんでっか？」

そう言われて、誠司は左右の手を見た。

「そう言われてみれば、なにも持ってないんだよな……」

「やる？ ほら、これ持っていき」

そう言って、どこから出したのか、リュックを二つ放り投げた。

「その中に、寝袋とか生活に役立つもんが入ってるさかい、自由に使い。それと、ほとんどの世界で使えるゼニも入れておいたったから使い。ちなみに、10000steloほど入れといたから」

「10000stelo？ ……って、25万円！」

誠司は、その金額に驚いた。

「なんであんさんがわかるんかは毎度の事やからもうええけど、ほんま、なんで知ってるんや？

とりえずまあ、そんだけあれば生活できるやろ」

「そうだけどさ……そんなにいいのか？」

グビディは、無言で頷いた。

「じゃあ、遠慮なく」

そう言って、二人は『時の口』に入った。今、二人の冒険が始まった。

2 見つけてもらうのを待ってるんだよ

Renkontoo-Mondoから『時の口』を通過して移動した世界は、絵本の中に存在しているような世界だった。

「すごいね。本当に別の世界に来ちゃった」

亜依は、やっと納得したのか、世界を移動した事に感動していた。しかし、いきなり森の中という事もあり、誠司は感動できずにいた。

「そうだな。とりあえず、フォーストレキだっけ？ それ、探そうぜ」

誠司はさっさと歩き出した。亜依は、慌ててそれについていく。

しばらく森の中を歩くと、出口が見えてきた。そこは丘だった。

「綺麗だね」

亜依は、その景色に感動していた。都会で暮らしてきた亜依にとって、自然の景色は新鮮だった。

「さっさとやろうぜ」

それに引き替え、誠司は無感動だった。

「どうしたんですか？」

亜依は、少し怯えながら訊いた。

「別に。俺は、さっさと元の世界に戻りたいんだよ。そのために、出来るだけ早く、forstrekkiを探すんだ」

そう言いながらも、足早に歩いていく。

「あ、待って下さい」

亜依は、慌てて後を追う。

「あ〜！」

その時、亜依が急に大きな声を上げた。

「どうした！」

これにはさすがの誠司も驚いて、振り返った。

「ない、ない。どうしよう……」

亜依は、泣きそうになりながら首や胸元を押さえている。

「どうしたんだ？」

誠司が訊くが、亜依の耳には届いていないのか、返事はなかった。

「どうしたんだ？」

もう一度訊いた時、やっとそれに気付いたのか、亜依は顔を上げて言った。

「ないの」

「ない？ なにが？」

「あたしの宝物。あたしの宝物のロケットがないの」

亜依は泣いていた。それでも必死にその事を誠司に伝えようとしている。

「わ、わかった。一緒に探してやるから。だから、泣くな」

誠司は、そんな亜依を見ていたくないのか、説得するように言う。

「……うん、ありがとう」

意外な誠司の姿を見て多少驚いたものの、亜依はお礼を言った。

「礼なんていい。どうせ、forstrecki探しのついでだ」

誠司はそっぽ向いて言った。それが誠司の照れ隠しだという事は、会って間もない亜依にも一目瞭然だった。その時だった。

「どうしたの？」

一人の子どもが、二人に話しかけてきた。その子は目深に帽子をかぶ被っていて、両手でそれを押さえるようにしていた。肩からは大きなカバンを引きずるようにかけていた。

「どうしたの？」

その子はもう一度言った。

「ああ、ちょっと探し物をだな……」

誠司がそこまで言った時、その子は帽子をずらし、はっきりとした目で誠司を見た。

「きゃっぽも一緒に探してあげる。きゃっぽは、探し物が得意なんだよ」

きゃっぽと名乗ったその子は、自慢気に言った。

「なにを探しているの？」

不思議そうに見ている誠司を後目に、きゃっぽは亜依に訊いた。

「……あのね、あたしの宝物のロケットがないの」

一瞬戸惑ったが、亜依はきゃっぽにそう言った。

「ロケット？ ……なに、それ？」

「あのね、このくらいの大きさで、金色をしていて、ペンダントになるの。それで、中に写真が入ってるの」

亜依は、出来るだけ優しく、時折、手できゃっぽにも形がわかるように説明した。

「あのね、なくしたモノは、かくれんぼしていて、見つけてもらうのを待ってるんだよ」

「そうなんだ……」

亜依は、きゃっぽの言葉を感心したように聞いていた。

「そうだ、あなたの名前は？ あたしは亜依、よろしくね」

亜依はそう言って、手を伸ばした。

「きゃっぽだよ」

しかし、きゃっぽは亜依の手を握らずに、『あいは、ロケットをさがしている』とメモを取りだして書いた。なんでもメモに書くのは、きゃっぽの癖だった。

「そうだ、くるるならわかるかも知れない！」

きゃっぽは、突然そう叫んだ。

「くるる？」

亜依が訊いた。

「うん。くるるはね、魔女なの。でも、いい魔女なんだよ」

すると、きゃっぽはそう答えた。

「そうなんだ……」

「くるるに訊いてみよう」

そう言うと、きゃっぽは歩きだした。誠司は、すっかり蚊帳の外だった。

再び森の中に入ると、小さな家があった。きゃっぽが扉をノックすると、小さな可愛らしい女の子が顔を覗かせた。その子は大きな目できゃっぽを見た。

「あのね、くるるにね、お願いがあるの」

きゃっぽは、その女の子に言った。

「お願いってなに？」

「あのね、この人の探し物を……」

そこまで言った時、くるるが、

「この事だったんだ。今日ね、占いをしたら探し物をしている旅人が来るって。いいわよ、あたしが占いで探してあげる」

そう言うと、三人を家の中に入れた。

「さて、早速占いしましょうか」

そう言うと、部屋の中央にあるテーブル上の水晶玉に手をかざした。そして、呪文を唱え始めた。

「くんくるくるる、くんくるるー！」

しばらく、硬直状態が続いたが、くるるのため息で終了した。

「……どう？ わかった？」

亜依は必死だった。

「……うん」

くるるは少し俯いて、

「詳しい事はわからなかったの。ごめんなさい」

と、それだけ言った。それを聞いた亜依は、しょぼんとうつむいた。

「もしかしたら、違う所にあるのかも知れない」

それを見た誠司が、元気づけるように言った。

「……そう……だよな」

「そうだ！ forstreckiが、どんな物で、どこにあるかわかるのか？」

誠司がくるるに言った。そんな誠司に驚きながらも、くるるは、

「……うん。やってみる」

そう言って、再び呪文を唱えた。

「くんくるくるる、くんくるるー！」

くるるが呪文を唱えると、水晶玉に文字が浮かんだ。その文字は『イシ』。それだけだった。

「イシ？」

誠司はそれを見て呟いた。

（イシって、石なのか？ それとも、意思？ ……意志？ ——って、文字じゃなきゃ、違いがわからないか——もしかしたら、医師って事は……なわけないか。他に、イシって……）

「う～ん」

誠司は腕を組んで考えたが、結局は最初に思い浮かんだ石に決定した。

「で、どこにあるんだ？」

「ごめんなさい。わからないの」

くるるは、泣きそうな顔をしていた。

「さてと、どうする？」

誠司は亜依に訊いた。

「え？ ど、どうするって？」

くるるが魔女と言う事で期待していたのだが、結局ロケットが見つからず落ち込んでいた亜依は、急に誠司に声を掛けられ少し驚いた。

「別の世界に行く？ それとも、もうしばらくここでロケットを探す？」

「……ここには、ロケットはないような気がするの。だから……」

「決定。『時の口』を見つけて、別の世界に行こうか」

「はい」

二人は、きゃっぽとくるるにお礼を言って、くるるの家を後にした。

＊

二人は、森の中を彷徨っていた。

「あのさ、世界の滅亡って、本当に止めなきゃいけないのかな？」

誠司が不意に呟いた。

「え？」

亜依は、驚いて誠司の顔を見た。

「だってさ、よく考えてみるよ。世界の滅亡を呼び込んだのは人間だろ。つまり、俺たちじゃないか。……そんな俺たちに、世界の滅亡を止める資格があるのかな？」

誠司は、いつになく弱気だった。

「あたしは止めたい。この世界がなくなっちゃうなんて、イヤ。考えたくもない。だって、大切な人がいるもん。お父さんと、お母さんがいるもん。だから……だから……」

気持ちが高ぶってきたのか、亜依は次第に涙が溢れて止まらなくなっていた。

「……ゴメン。……でも……俺は、そんないい人たちに囲まれていなかった。そりゃ、少しはいたさ。でも、なんか違うんだ。俺には、世界がそんなにいいものに思えない。イヤな部分しか見えないんだ。だから、そう思った。俺は、世界がいつ滅んでも構わないと思ってる」

「……じゃあ、どうして？ どうして、こうやって……」

「元の世界に戻るためさ。そんな世界でも、俺にとっては故郷だ。結局、一番居心地がいいのは、そこだからな」

「うん」

その言葉で、亜依に笑顔が戻った。

「あった。あったぞ」

その時、誠司が『時の口』を見つけた。

「入ろう」

「うん」

こうして、二人は世界を移動した。

3 別にいいですけど.....面白くないと思いますよ |

世界を移動した二人は、また森の中——というよりは山にいた。しかし、明らかにさっきまでいた森とは違う。さっきまでの森は、絵本に描かれている絵のようだったのに対し、今いるのは現実味のある森だった。

今いる場所がわからないのに加え、陽も沈み、周りの様子が全くわからない状況になっていた。それに加え、山という事もあるのだろうか、少し肌寒かった。二人が元の世界にいた時の季節は春先だったので、服も薄着気味の春物だ。完全な防寒は望めない。

そこで誠司は、グビディから渡されたリュックになにかないものかと探し始めた。

そこで初めてリュックの中を見たのだが、中には寝袋とコート、そして缶詰が少々と水の入ったペットボトル。ホントに最小限のものしか入っていなかった。

その中身を見て少し落ち込んだが、仕方ないと吹っ切り——前向きに考えるしかないと思い、誠司と亜依は安全そうな場所を見つけ、寝袋にくるまって眠ることにした。

同じ世界にしていることができるのは72時間。こんな事をしていてはもったいない気もするが、夜に山を動き回るのは危険と判断し、とりあえず疲れを癒すためにも休むことにしたのだ。

こうして、初めての夜は更けていった。

*

翌朝は、山鳥の声で目が覚めた。

「ふあ〜あああ.....朝か.....」

誠司は、大きく伸びをした。寝袋で眠る事が初めてだった誠司は、その窮屈さから解放され、清々しいものを感じていた。それは、山の中——自然の中だという事もあったのかも知れない。誠司にとって、今までにないほどの心地よい目覚めだった。

そんな誠司だったが、隣を見て言葉を失った。

そう、隣には自分と同じように寝袋で眠っている亜依がいるのだ。昨日は疲れていたためそれほど気にしていなかったが、いざ認識してしまうと急に恥ずかしくなった。

そんな誠司はお構いなしといった風に、亜依はまだ眠っていた。亜依の顔を覗き込んだ誠司は、その寝顔に見とれてしまった。まさに、天使の寝顔そのものだった。

誠司は亜依を起こさないように静かに立ち上がると、少し亜依の事も気になったが、辺りを散策してみる事にした。しかし、どこを見ても木が立ち並ぶだけだった。それでも進むと、山道らしき道に出た。そこで誠司は立て札を見つけた。

「なにに『ゴミは持ち帰りましょう 山を綺麗に』か.....って事は、ここは日本。よっしゃあ〜！」

誠司は、ここが日本だという事がわかって嬉しくなり、大きく飛び上がった。

「そうだ、早くこの事を教えてやらねえとな」

誠司は、急いでこの事を亜依に知らせようと走った。しかし、そんな誠司を待っていたのは.....

「どこ行ってたんですか」

口調は怒っているのだが、顔では泣いている亜依だった。

「もう、あたし、置いて行かれたのかと思ったんですよ。すごく淋しかったんですよ。淋しくて、心細くて……」

亜依はそのまま俯いて、大粒の涙をこぼした。

「わ、悪かった。悪かったから泣かないでくれよ、な」

誠司はひたすら謝って、どうにか泣くのだけはやめて欲しいと説得した。こうして、誠司にとって今までで一番よかったはずの目覚めは、一瞬にして最悪な目覚めになってしまった。

「そうだ、いい情報があるんだ」

誠司は、どうにかしようと思っただけで、さっき見つけた事を思い出した。

「いい情報？」

ずっと俯いていた亜依も、気になるのか、顔を上げた。

「ああ、すごい事がわかったんだ。あのさ、ここは日本なんだ」

「……それで？」

喜ぶだろうと期待していた誠司は、その亜依の反応に愕然とした。

「それで、って……日本だけ、日本」

「でも、ここにいられるのも、あと64時間くらいですよ」

亜依は驚くほど冷静だった。

(確かにそうだよな。ここにいても、時間がきたらすぐあそこに戻っちまうんだもんな……結局はぬか喜びか)

「そうだ、先輩。さっき、これを見つけたんです」

そう言って亜依が取り出したのは、懐中時計だった。その懐中時計は金色をしており、小さな穴が二つ空いていた。

「これがどうかした？」

「とにかく見て下さい」

そう言って、誠司に渡した。

「これ、もう一度リュックの中を見ていたら見つけたんです。その懐中時計、私たちがこの世界にいられる時間をカウントダウンしてるんですよ」

そう言われて、誠司は文字盤を見た。一見、普通の懐中時計なのだが、針が逆に回っていた。針は今、4:17を指している。そして、文字盤の〔3〕の所――アナログ時計の日にちが表示されている所に〔5〕という表示が出ていた。

「なあ、この〔5〕ってなんだと思う？」

気になった誠司は、亜依に訊いてみた。

「ずっと考えていたんですけど、それってあと何周残っているかって事じゃないでしょうか？つまり、あと五周――60時間と4時間17分残っているって意味だと思うんです」

「なるほどね」

誠司は腕を組んで大きく頷いた。

(それにしても、ちょっと不便だよな、これ)

「とにかくさ。ここは日本なんだからさ、近くの街に行ってみようぜ」

そう言って、亜依の手を引いてさっき見つけた山道を目指して歩き出した。

*

その頃――

「たっちゃん、早く、早く」

「早くったってな……お前の分の荷物も持ってる……俺の身にもなってくれよな……はあ」

荷物もなく、身軽で元気な桜とは対称に、達之は汗だくになりながら、それでも山道を登っていた。

桜と達之は、春休みを利用して日本アルプスに来ていた。目指すは、北アルプスにある槍ヶ岳。その槍ヶ岳の小槍が最終目的地だった。

それというのも――

それは、春休みの直前だった。

テニス部に所属している達之が、練習が終わり一息ついた時の出来事。

「たっちゃん」

疲れて休んでいた達之の元に、桜が不敵な笑みを浮かべながら近づいてきた。桜がこんな顔をする時は、決まって面倒な事を言われるのだ。十六年間も桜の幼なじみをしてきた達之は、何度もこの笑顔に苦しめられてきた。それも、ここ最近は減ってきたので安心していただけなのに……。

「で？　今回はなんなんだ？」

達之は先手を打って訊いた。

「さすが、たっちゃん。話が早い」

桜は笑顔で手を交差させた。

(断っても無駄だろ)

達之はそう思ったが、口にはしなかった。

「あのね、連れて行って欲しい所があるんだけど……」

(ほらきた。今度はどこですか？)

これまでも達之は、桜に連れ回され色々な場所に行っていた。普通なら、親の許可が必要なのだろうが、家が隣なので兄妹のように育ってきた二人は、言ってみれば双方の親公認の仲なのだ。といっても、達之にはそんな感情はなく、わがまま我が儘な妹の相手をしてやってるといった感覚なのだが……。

「で？　どこなんだ？」

「あのね……」

桜はそこで一息置いて、

「アルプス」

と、言った。

「ア、アルプス？」

(アルプスって、あのヨーロッパの？　冗談だろ？　冗談だよな？　冗談だって言ってくれ)

達之は、突飛な事ながらも、なんとか納得しようと試みた。

「なあ、そんな遠い所マジで言ってるのか？」

達之は桜の肩を掴んで、なんとかやめさせようとした。

「たっちゃん、放してよ」

「……ああ、悪い」

そう言われて、達之は手を放した。

「あたしが言ってるのは、日本アルプスだよ」

「そ、そうか……」

達之は、全身の力が抜けた気がした。

「はい、決定」

桜は、間髪おかずに言った。

「……ちょ、ちょっと待て。誰も行くなんて……」

達之は、無理だとはわかっていても、一応反論しようとした。

「だめえ〜。もう決まったの」

桜は、達之の反論を呆気なく却下した。

(まったく、これだもんな……)

こういった事が、十六年間繰り返されてきたのだ。

「桜、あのさ。俺、お前がどうしてここに来たいのか聞いてないんだけど」

山道の途中で休憩をとり、ほっと一息ついた達之は、些細な疑問をぶつけてみた。すると桜は

「アルプス一万尺 小槍の上で アルペン踊りをさあ踊りましょ〜♪」

と、口ずさんだ。

「あたしね、一度行ってみたかったんだ、この歌に出てくる場所。ずっと昔から行ってみたいなあって思ってたの。まあそんな事、最近まで忘れてたんだけどね」

桜は、舌をペロッと出して笑った。

「で、最近その事を思い出して調べたの。この小槍ってどこだろうって。そうしたら、日本にあるってわかったの。ずっと、スイスにある方のアルプスだと思ってたから、ビックリしちゃった。それがわかったのが、たっちゃんを誘ったあの日なんだ。あの日、ミス研の先輩に訊いて教えてもらったんだ」

(誰だかわかんねえけど、余計な事を……)

「それで、急に行きたくなってさ、たっちゃんを誘ったの。どう？ これが理由」

桜は、ずっと空を見上げて話していた。

「ああ、わかった。アルプス一万尺ね……まあ、槍ヶ岳なら登山者も多いから、ちゃんと登山道があるし。まあ、ダラダラ春休みを過ごすよりはいいだろ」

「ところで、部活は？」

「はあ……今更な……大丈夫、部活は休み」

達之はそう言ったが、実際は部の活動はちゃんとあるのだ。達之は部を休んで――正確にはサボって、今回の旅に来ていた。

「そうか、それならいっか。さて、早く登ろうよ」

そう言って、桜は続きを登り始めた。

「おい、待てよ」

達之は慌てて荷物を担ぎ、桜を追いかけた。

「っていうか、なんで俺たち歩いてるんだ？」

「仕方ないじゃない。降りる場所間違っちゃったんだから。早く、いこ」

＊

「あの～……椎崎先輩？」

「あのさ。その椎崎先輩っての、やめないか？」

「でも……」

二人は、山道を下っていた。

「厳密には、俺は亜依ちゃん先輩じゃないんだし……」

誠司はいつも、初対面であっても女の子の名前は名字でなく、名前にちゃん付けで呼ぶ。それが親しくなると、本人も気付かぬ内に呼び捨てになっている。

「でも昔、星風にいたんですよね？ だったら、やっぱり先輩ですよ」

「う～ん。なんか、俺はそういうのが苦手なんだよな……」

誠司は腕を組んで考えた。

「そうだ！ 誠ちゃんってのはどうだ？」

「……………誠ちゃん……ですか？」

亜依は一瞬沈黙した。

「やっぱ、ダメか……」

誠司は肩を落とした。

「あの……」

亜依は言いづらそうにもじもじしながら、

「誠司先輩じゃ、ダメですか？」

と、か細い声で言った。

「う～ん。先輩って呼ばれるのが苦手なんだけどな……」

それを受けて亜依は、

「じゃあ、椎崎さん」

と、言ったが即座に誠司が、

「椎ちゃん」

と、返した。

「せんぱ……あっ……椎崎さんは、どうしてそんなに《ちゃん》にこだわるんですか？」

「それはズバリ、可愛いからだ！」

誠司は、右の人差し指を立てて力強く言った。

「は、はあ……」

亜依は、そんな誠司を茫然と見た。

「だってだな、畏まった言い方より、そっちの方がフレンドリーじゃないか。それに、あの達之も幼なじみの女の子から……って、知ってるよな？」

誠司は亜依に詰め寄る。亜依は後ずさりした。

「……は、はい。桜ちゃんですよな？」

「あの子、そんな名前だったのか、知らなかった……って、その桜ちゃんからなんて呼ばれてる？」

「確か、たっちゃんって」

「だろ？ フレンドリーな感じがしないか？」

「……します」

亜依はそう言わざるを得ない気になって、そう言った。

「だからだ。わかった？」

「わかりましたけど、やっぱり……」

しかし、どこか違和感のようなものがあった。

「ま、いっか。俺もこれだけ熱く語っておいてなんだけど、強要する気はないからさ。亜依ちゃんが呼びやすい呼び方でいいよ。そのうち、ちゃん付けで呼んでくれよな」

「わかりました。じゃあしばらくは、椎崎さんでいいですか？」

亜依は、少し遠慮気味に訊いた。

「ああ、それでいいや」

誠司がそう言った時だった。

「あー！」

そう叫んだのは桜だった。

「――亜依、亜依じゃない。どうしたの？ こんな所で」

桜は亜依に駆け寄った。

「う、うん。ちょっと事情があって……」

「事情ってなに？」

「そ、それは……」

「って、亜依。その人、誰？」

桜は自分で訊いておきながらそっちのけだった。

「よう、達之」

誠司は桜と亜依そっちのけで、山道を息を荒くしながら登ってくる達之を見つけ、声をかけた。

「え？ ……誠司。誠司じゃないか」

それに気付いた達之は、荷物を置いて誠司に駆け寄った。

「お前、久しぶりだな。元気だったか？」

「ああ、この通り」

お互いの右拳を合わせて再会を喜んでいた。亜依と桜は、不思議な物を見るかのような感じでそれを見ていた。

「たっちゃん、知ってる人？」

「ああ、去年、同じクラスだったんだ」

「でも、そんな人見た事ないけど？」

「ああ、こいつは一年の春休みに引っ越して、転校したんだよ。それ以来だから、ちょうど一年ぶりか……」

「ああ」

誠司も達之も満面の笑みで言った。

「椎崎さん？」

亜依が申し訳なさそうに小声で言った。

「なに？ 亜依ちゃん」

誠司は、その笑顔のまま亜依の方を向いて言った。

「初めて会った時、水沢先輩とはあまり親しくないとか言ってませんでした？」

「ああ、あれ？ あれは冗談。こいつとは親友なんだ。心の友ってやつかな」

「まあな。だけど、その冗談はやめろよな」

「悪い、悪い」

二人は、楽しそうに笑った。

「ねえ、たっちゃん」

桜は達之を取られたような気がして、少し不機嫌だった。

「ゴメン、ゴメン。こいつは……」

「椎崎誠司です。よろしく、桜ちゃん」

誠司は達之の言葉を制し、片膝を付いて桜の手をとって言った。そう、西洋の物語で王子さまがお姫様に自分の名前を言う時によくするアレだ。

「は、はあ〜」

桜は呆気にとられて言葉も出なかった。

「はいはい、そこまで。で、どうしてお前がここにいるんだ？ しかも、亜依ちゃんと一緒に」

「まあ、色々あってな」

「色々って？」

「悪い、それは勘弁」

「わかったよ」

「桜ちゃんたちは、どうしてここにいるの？」

今度は、亜依が桜に訊いた。

「うん。せっかくの春休みだから……」

そう言いながら、達之を見た。

「桜がな、小檜に行きたいって言うから……」

「小檜？」

亜依の頭に疑問符が浮かんだ。それを聞いた誠司は、リュックから双眼鏡を取り出して辺りを見回した。

「あのさ達之。遠くではっきりわかんねえけど、槍ヶ岳って多分アレだよな？」

そう言って誠司が指したのは、達之たちの進行方向から見て、八時の方角だった。

「え？ マジ？」

それを聞いて、達之は魂が抜けたようにその場に崩れた。

「お前、知らずに歩いて来たのか？」

「……ああ」

「ったく」

誠司はため息をついた。

「あの～、ここって？」

亜依がなにがなんだかわからずに訊いた。

「達之たちが小槍――まあ、槍ヶ岳を目指してきたのならここはおそらく長野県って事になる。詳しい場所はわからねえけどな」

そう言って、改めて辺りを見回した。

「多分、あそこが長野市だ。で、太陽があそこだから……ああ、ってことは、アレが黒姫山でこっちが飯縄山か。じゃあ、ここは戸隠山か」

誠司は一人でぶつぶつと言った。

「あの～」

亜依が誠司に声を掛けた。

「ん？ ああ、これか？ これはさっきリュックに入ってるのを見つけたんだ」

誠司は双眼鏡を少し持ち上げて言った。

「そうじゃなくて……どうしてそんなに……」

「亜依ちゃん、こいつは昔から余計な事には詳しいんだよ」

達之が代わりに答える。

「とりあえず、達之が来た道を逆戻りして、麓の鬼無里村に行こうか」

誠司はそう言うと、さっさと歩き始めた。

「椎崎さん」

亜依は慌てて駆け寄って、

「あたしたち……」

「わかってるって。俺たちは石――f o r s t r e k iを探さなきゃいけない、だろ？ それと、亜依ちゃんのロケットも」

「だったら、どうして……」

「鬼無里村には、そういった類の伝説があるんだ」

笑顔でそれだけ言った。

「おい、誠司。待って」

「ゆっくりしてると、置いてくぞ」

「おい、桜。お前も荷物持てよ」

「たっちゃん、頑張ってるね。亜依、いこ」

楽しそうな四人。しかしこの時、四人はこれから遭遇する事件の事など、知る由もなかった。

長野県上水内郡鬼無里村――

北原家――

「やっと葬儀も終わったな」

北原家長男――北原悦雄が煙草を吸いながら言った。

「でも、これからが問題よね」

「ああ」

その隣に座っている女性――悦雄の妻、奈未の言葉に、悦雄が煙草を地面に捨て足で火をもみ消しながら言った。

村で最も古い旧家、北原家では、先日亡くなった隠居――北原淀の葬儀が行われていた。

「アレは誰が継ぐんだか」

「わたしはイヤよ」

「安心しろって、お前にはアレを継ぐ資格がないからよ」

「そうよね.....。資格があるのは.....」

「そう、あの二人だけだからな」

*

「お〜い、たっちゃん、早く早く」

「お前な、俺たちは二人分の荷物持ってるんだぞ」

相変わらず達之は、桜の分の荷物も持っていた。一方、誠司も亜依の分の荷物も持っていたが

「椎崎さん、大丈夫ですか？」

「ああ、全然平気」

その対応には、雲泥の差があった。

「ねえ、あれじゃない？」

桜は達之の事などお構いなしで、一人少し先に行っていた。

「やっと見えた」

桜の声を聞き、少し早足で誠司は桜の所に急いで言った。

「あれが、長野県上水内郡鬼無里村だ」

*

「紗子姉さん、どうしたの？」

「どうしたの？ じゃないわよ。美津子、あんたもちょっとは手伝ってよ」

紗子と呼ばれた女性は、抱えている大きな段ボールから顔を出し答えた。

「い〜や」

「ケ〜チ」

木戸紗子――旧姓、北原紗子は、妹の北原美津子と祖母の葬儀のため、実家に帰ってきていた。もっとも、妹の美津子は東京に住んでいるが、姉の紗子は以前は東京で暮らしていたものの、

今は鬼無里村の近くにある麻績村に住んでいた。

「おばあちゃんのお葬式なんだから、仕事休めばいいのに」

「無理言わないの。レポートのメ切りが近いんだから」

「ホント、紗子姉さんはすごいや。私なんか、レポートを提出した事なんて一度もないのに」

「そんな事自慢気に言わない。だからあんた、大学中退したんでしょ」

「別に、最初から行きたくなかったんだから。これでいいの。むしろ、やめて正解。紗子姉さんこそ、せっかく結婚して東京で……」

「美津子！」

「ゴメン。言わない約束だったね」

「……………」

それからは、沈黙が続いた。二人——特に美津子——は気まずいまま歩き続けた。それでも、しばらくすると北原家が見えてきた。

「みっちゃん、久しぶり」

「奈未おばさん！」

美津子は自分の叔母にあたる奈未に駆け寄った。

「みっちゃん、奈未おばさんはないでしょ」

「ごめんなさい」

「まあいいわ。みっちゃん、最近どうしてるの？ 大学辞めたんでしょ？」

「……うん。まあ、その日暮らし、かな」

美津子は、少しおどけてみせた。

「そう……」

奈未はそれ以上、聞かなかった。

「こんにちは、奈未おばさん」

紗子は段ボールを置いて、奈未に挨拶した。

「もう、紗ちゃんまで……」

奈未はそう言いながらも、常に笑顔を絶やす事はなかった。たとえそれが作り笑いだったとしても……。

「さあ、入って。特に紗ちゃんはその荷物をどうにかしないとね」

「すみません」

「それにしても、その荷物なんなの？」

「今度、大学に提出するレポートの資料なんです」

「見せてもらっていい？」

「別にいいですけど……面白くないと思いますよ」

「アリガト」

そう言って奈未は、子どものように目を輝かせて段ボールを開けた。

「……………」

中に入っていたのは、石だった。様々な色、形をした石がいくつか入っていた。

「だから、面白くないって言ったじゃないですか」

「そ、そうね」

そう言うと、奈未は家の奥に入っていった。

「それにしても紗子姉さん、力持ち」

「あのねえ、もうヘトヘトなんだからね。重いからあなたに手伝ってもらおうと思ってたのに……」

「ゴメン、ゴメン。まさか、そんな物とは思わなくてさ」

「じゃあ、部屋まで運ぶの手伝って」

「は〜い」

美津子は、仕方なく荷物を部屋まで運んだ。

「それにしても、もう一度大学に入り直すなんて、やっぱ信じらんないな〜」

「美津子、昔の事は言わないで。以前はほとんど勉強しなかったから。それに、あの事があって途中で辞めちゃったから……」

「そっか……そうだよ。でも、紗子姉さんは紗子姉さんの好きにしたらいいいじゃん」

「なに、生意気言ってるの、この子は」

紗子は美津子をひじ肘で小突いた。

「へへっ」

楽しい時間が続いていた。が、そこに……。

「紗ちゃん、みっちゃん、二人とも大広間に来て」

奈未が二人を呼びに入ってきた。

「二人ともなんの話だか、わかってるわね」

そう言った奈未は、先ほどとはまるで別人だった。

＊

その頃、誠司たちも鬼無里村に入っていた。

「ねえ、ここに来たのはいいいんだけど、これからどうするの？」

桜が少し前を歩いていた誠司に訊いた。

「さあ、どうすっかな」

一瞬の沈黙――

「誠司！ お前、あてもなしに……」

「道に迷ったお前らが悪い」

誠司は達之の反論を予想していたのか、即座に言い返した。

「まあ、その辺で野宿でもすれば……」

「ヤ！ そんなの絶対イヤ！」

今度は桜が反論する。そんなやりとりの中、亜依は一人どうにかしようと辺りを見回していた。

「ねえ、あの家は？」

亜依は、村で最も大きいであろう家を見つけた。

「あの家なら泊めてくれそうじゃない？」

「う～ん。偏屈な人が住んでそうだな～」

桜は難色を示すが、男二人は乗り気だった。

「さあ、そうと決まれば行きますか」

そう言うなり、誠司はさっさと歩き出した。

「そうだな。野宿よりはいいかもな」

達之もその家に向かって歩き出した。

「つとに……勝手な連中」

「桜ちゃん、いいじゃない。あたしたちも行こう」

「仕方ない、か……」

渋々ながらも桜も歩き出した。

「なんだか、嫌な予感がするんだけど」

それは、桜の誰にも聞こえないくらい小さな呟きだった。

「ごめんください」

誠司が叫ぶ。

「は～い」

中から声が返ってくる。と同時に足音がし、一人の女性――木戸紗子がやってきた。

「あの……あなたたちは……？」

紗子は、見知らぬ人間が二人いたので戸惑った。

「すみません。俺たち槍ヶ岳に行こうと思ってたんですけど、電車を降りる場所を間違っちゃって、今からじゃ陽も暮れるんで、それで近くにあったこの鬼無里村に来たんです。それで、俺たちだけだったら野宿でもいいんですけど……」

誠司がそこまで言った時、亜依と桜が顔を出す。誠司はさらに続ける。

「とまあ、女の子もいるんで、そういうわけにもいなくて……」

こんな事をされて、紗子が断れるはずもなく……。

「いいわ。ちょっとごたごたしてるけど、さあ、上がって」

「ありがとうございます」

四人は声をそろえて言った。

四人は紗子に案内され、客間に通された。

「ごめんなさい。今、ここしか空いてなくて……」

「構いませんよ。この二人なら外で寝ても大丈夫ですから」

桜が誠司と達之を見て言う。

「いえ、大丈夫ですから。泊めていただけるだけで……あ、そうだ。あたしは高尾亜依っていいます」

そう言って、亜依は頭を下げた。紗子はそんな亜依の対応に恐縮してしまう。

「私は木戸紗子。この北原の家は私の実家。今はお婆ちゃんのお葬式があって、帰ってきてるの」

「あの～、それならあたしたち、迷惑じゃ……」

「大丈夫。葬儀があったのは、一週間前だから。それからする事が色々あって……」

紗子はうつむいた。そこで亜依は話題を変えようと、

「そういえば、紗子さんて標準語なんですね」

「ちょっと、東京に住んでた事があったから、でも今はこの近くの麻績村に住んでるんだけどね」

「麻績村ですか……あそのワインは一度飲んでみたいですね。もちろん二十歳を過ぎてから、ですけど」

二人の会話に、誠司が割り込む。

「あ、俺は椎崎誠司です。よろしく」

「はあ……」

紗子は呆気にとられて、なにも言えない。

「あなた、麻績村について詳しくさうだけど、行った事あるの？」

「いいえ、行った事はありません」

キッパリと言う。

「こいつは、そういった事に関して、やたらと詳しいんですよ。あ、俺は水沢達之です。よろしく」

「あたしは、姫川桜です。よろしくお願いします」

慌てて桜も自己紹介する。

「あの……他のお家の方は……？」

亜依が訊く。

「今はみんな忙しそうだから。あなたたちの事は、あとで話しておくから」

そう言うと、紗子は部屋を出ていった。

「ねえ……たっちゃん」

桜は達之の服の袖を持って言った。

「桜、まさか……」

桜は無言で頷いた。

「達之、なんだよ」

誠司が気になって訊く。

「そのうちわかるさ」

誠司の頭上に無数の疑問符が浮かんでいた。

亜依たちは、夕食をご馳走になることになった。しかも、北原家の人たちと同席だ。ただ、紗子はレポートがあるとかで自分の部屋で続きをしていた。その事で亜依たちは少し不安になった。まあ、見知らぬ家で、唯一面識のあった人間がいないのだから仕方ないだろう。

「やっぱり、大勢で食べると楽しいわね」

そう言ったのは奈未だ。彼女は、普段よりも明るく振る舞っていた。

「そうだな。いつも二人で食べていたからな」

悦雄も賛同する。そんな彼も奈未と同じく、普段より明るく振る舞っていた。

「悦雄おじさんの場合は、若い女の子がいるからじゃないの？」

美津子は悦雄を茶化す。悦雄は、その言葉に頬を赤らめたが、隣にいる妻の奈未が視界に入った途端青ざめ、すぐに真顔に戻った。

亜依たちは、そんな三人が少し妙な気がしていた。

亜依たちが夕食を終え、部屋に戻った時だった。

「きゃー！」

奈未の悲鳴が家中に響いた。

「なんだ！」

「なに？」

誠司と亜依は動揺していたが、桜と達之は違った。

「桜の勘、的中だな。名探偵さくらの出番かもな」

「うん」

そう言うと、二人は悲鳴のした方に走っていった。

「なあ、名探偵って……？」

「……うん。桜ちゃん、ミステリー研究会に入ってるから……それに、桜ちゃんのお父さんは……」

「どうしたんですか？」

桜と達之が部屋に飛び込むと、そこには腰を抜かした奈未の姿があった。

「……な、ないの」

「ない？」

「そう、ここにあった石が……」

ちょうどその頃、他の三人もそこに到着した。

「奈未、大丈夫か」

「おばさん」

悦雄と紗子が奈未に駆け寄ろうとしたその時――

「じっとしていて下さい！ 誰も入らないで！」

桜は部屋に入ろうとした二人を一喝した。

「ない！ 石がない！」

あまりの事に言葉を失い立ちすくんでいた美津子が真っ先に気付いた。それを聞いて、他の二人も石があった場所を見て……絶句した。

「すみません。桜の言う通りにしてもらえませんか。その石は俺たちが探します」

「こう言っちゃなんだが、あんたらにできるのかね」

「ええ、少なくともあなたたちよりは……」

桜は挑戦的な笑みを浮かべた。

「むう……」

悦雄は桜の気迫の前に、言い返す事ができなかった。他の二人も、ただ茫然と立っているだ

けだった。

「奈未さん……でしたよね？ 奈未さんはどうしてここに？」

「……………」

桜が奈未に訊くが、奈未はソッポ向いて答えない。

「まあ、言いたくないなら別にいいですけど……。それで、なくなったのはその石だけなんですか？」

「ああ」

悦雄が答える。

「その石ってなんなんですか？」

「それは……」

悦雄も口ごもる。

「私が代わりに答えるわ」

そこへ、紗子がやってきた。

「なくなった石は、北原家に昔から受け継がれてきた呪いの石なの」

「……………」

桜は息を飲んだ。

「その石は、代々北原家の女性に受け継がれ続けてきたの。私たちの母は、それを拒否して亡くなったわ。事故でね。そして、お婆ちゃんが亡くなって、その石を継ぐのは、私か妹の美津子のどちらか。もちろん、私はそんなものを継ぐ気なんてないけどね」

「紗子姉さん……」

「これでいいかしら？」

「……あ、はい。ありがとうございます」

桜はあまりのことに、即座に反応できなかった。

「ところで、その石ってどんなものなんですか？」

今度は達之が訊く。

「えっと……」

そう言いながら、美津子は小さな桐ダンスの引き出しを開けて、なにかを探し始めた。

「あ、あった」

そう言って、一枚の写真を見せた。そこには今はない呪いの石が写っていた。

「綺麗な赤い石……」

桜はその石に見惚れた。それは血のように赤い色で。呪いの石と言われても不思議ではなかった。

「これって、宝石ですか？」

桜が誰ともなしに訊く。

「正確には原石よ。ちゃんと磨けば宝石として使えるんだけど、ね。そのままではたいした価値もないただの石よ」

紗子はその疑問に答える。

「それにしても、この部屋って暗いですね」

「この部屋は、昔からあの白熱電球しかないから」

達之の疑問に美津子が答える。達之は、フンフンと頷いただけだった。

「で、どうなんだね？」

悦雄が訊く。

「どうって言われても……」

「そうですよ。これから色々聞いて、それで……」

達之と桜もそう言われて答えられない。

「だいたいだ。どうして君たちよそ者にこんな事を話さなければならんのだ。奈未、警察だ。警察に届けよう」

「ま、待って下さい」

桜が慌ててそれを止めようとする。

「そうですよ。待って下さい」

そこに誠司が入ってきた。

「明日、明日まで待ってもらえませんか？」

「それでいいんだな？」

「はい。もし明日中に見つけられなかったら、警察なりどこなり連絡して下さい」

そう言った誠司の顔は、真剣そのものだった。

「わかった。明日まで待とう」

そう言うと、悦雄は奈未と一緒に部屋を出ていった。それに続いて、美津子も出ていった。

「本当に大丈夫なの？」

紗子は心配そうに言った。

「男に二言はありません」

誠司は自信満々でそう言った。

「じゃあ、頑張ってるね」

そう言い残し、紗子も部屋をあとにした。

「さてと、どうしたんだ？ この程度で諦めるのか、警視監の御息女さん」

「え？ どうしてそれを？」

「あたしが教えたの」

「亜依……」

「ほら、捜査でしょ、名探偵さくらちゃん」

桜は無言で頷いた。

「なあ、一ついいか？」

「なんだよ、誠司」

「この石って……」

「さて、みんなの持ち物を見せてもらいましょ」

誠司が最後まで言わないうちに、桜はさっさと部屋を出て、紗子の部屋に向かった。

「ちょっと、桜ってば」

亜依は慌ててそれを追っていった。

「で、なんだ？」

「あとでいい」

「……………」

府に落ちないものを感じつつ、達之も誠司と一緒に二人のあとを追った。

「紗子さん、入っていいですか？」

桜は紗子の部屋に向かって言った。

「どうぞ」

「お邪魔します」

そう言って、桜は部屋に入っていった。亜依と誠司、達之もそれに続く。

紗子の部屋は、レポートを書くための資料が散乱していた。もちろん、あの石の入った段ボールも置いてあった。

「散らかっててゴメンね」

「こちらこそ、急に……あれ？ これって……」

桜は例の石の入った段ボールを見つけた。

「それは、レポートの資料なの。ああ、もちろんその中に呪われた石はないわよ」

紗子の言葉通り、白や土色をした石や、なにかの原石が含まれているのだろうか、緑色をした石が入っているものの、呪いの石と同じ赤い石は入っていなかった。

「紗子さんは、どうしてあの石を継ぎたくないんですか？」

亜依が訊く。

「イヤじゃない？ あの石を継いだら、ずっとここであの石を守らなきゃいけないのよ。そんな生活はできない。少なくとも私はね。多分、美津子も同じじゃないかしら？」

「あの……紗子さんのお母さんは……？」

亜依は言いづらそうに言った。

「母さんは、あの石を継ぐのを拒んだの。その一ヵ月後かな、交通事故だった。見通しのいい直線の道路なのに、母さんは反対車線に……」

紗子は、そこで言葉を切った。

「そんな事故だったから、私を含めてみんなあの石の呪いだって思ってる。でも、やっぱり継ぐのはイヤかな……」

四人はなにも言えなかった。

「ありがとうございました。次は美津子さんの所に行きましょう」

そう言って部屋を出ると、そこには悦雄の姿があった。

「悦雄さん、どうしたんですか？」

「あ、いや……」

亜依が声をかけると、悦雄はバツが悪そうにした。

「あ、わしらは持ってないからな」

悦雄は慌てて自己弁護する。

「怪しい……」

桜は悦雄を下から睨む。

「違うと思うぜ」

誠司が言う。

「だって、よく考えてもみろよ。この人があの石を盗んだって、なんの得にもならないんだから。呪われるだけだろ。ハイリスク・ノーリターンってやつだ」

「そ、そうだ。わしがあの石を盗んだって、呪われるだけでなんの得もないんだ」

悦雄が誠司の意見に便乗する。

「もちろん、奈未さんにも同じ事が言えるんだけどね」

「じゃあ、美津子さんしか……」

「いいや。美津子さんと紗子さんだ」

誠司が桜の言葉を訂正する。

「紗子さんは……」

「彼女も容疑者だ」

桜はなんとかそれを否定しようとするが、誠司は一步も引かない。それどころか、逆に強調されてしまった。

「とにかく、美津子さんにも話を聞こう」

達之がその場を収めようと、提案した。

「そ、そうよね」

亜依も慌てて便乗する。

「俺はちょっと調べたい事があるから……」

そう言って、誠司は一人でどこかに行ってしまった。

誠司以外の三人は、美津子の部屋を訪ねた。しかし誰もおらず、三人はこっそりと無断で部屋を搜索することにした。すると桜が、部屋の中から呪いの石とおぼ思しき赤い石を見つけた。

「これって……」

その赤い石を手にしながらかいた。

「美津子さんが……？」

「亜依ちゃん、これが出てきたんだから……」

「でも……」

その頃、誠司は以前に撮影された呪いの石の写真を見ていた。

「う～ん」

誠司は、漠然とながら考えがあるのだが、確証はなかった。そこで、無断で桐ダンスの引き出しから他に写真がないか探し始めた。

「あ、あった」

それは、別の部屋で撮影された写真だった。

「やっぱり」

誠司は、自分の考えが正しかった事を確信した。

「桜、これって単純すぎないか？」

呪いの石があった部屋に向かう途中、達之が言った。

「物的証拠があったんだから、決まりでしょ。だいたい、人が実際に犯罪を犯す時は、そんなに手の込んだ事しないって」

「俺は違う気がするんだけどな……」

達之は腕を組んで、首を傾げた。

「あたしも違う気がする」

亜依もそれに賛成する。そんな二人を見て、桜は不満そうに顔を膨らませた。

「そういえば、椎崎さんはどうしたんでしょう？」

「そういや……そうだな」

「どうでもいいじゃん。それより、真犯人を明らかに……」

その時――

「そっちはどうだった？ なにかわかった？」

「誠司！」

「椎崎さん！」

亜依たちの前方から、誠司が歩いてきた。

「もちろん。真犯人もバッチリ」

桜が一步前を出て、自慢気に言う。

「じゃあ、お手並み拝見といきましょうか、名探偵様」

呪いの石があった部屋――

桜は北原家の四人を集めた。

「みなさん、今から今回の事件の真相を明らかにしたいと思います」

探偵物で使い古された台詞から始まった。

「誰なんだ！ さっさと教えろ！」

悦雄が桜をどなりつける。

「わかってます！ 今から言いますから黙ってて下さい！」

桜も負けじと大声を出す。

「……ふう」

桜は大きく息を吸って、

「犯人はあなたです」

と、その中の一人を指した。

「犯人はあなたですね。美津子さん」

美津子に視線が集中した。美津子は指名され、俯いた。

「美津子！ お前が盗んだのか」

悦雄が美津子を問いつめる。しかし、美津子は俯いたまま動こうとしない。

「あなたの部屋でこれを見つけました」

桜は、美津子の部屋で見つけたあの赤い石をみんなに見せた。

「それは……」

紗子がそれを見て驚いた。

「やっぱり」

誠司はそれを見て、さらに自分の考えが正しいことを確信した。

「美津子さん、説明してもらえますか？」

桜はさらに詰め寄る。

「……そうよ！ 私が盗んだの！ もう、こんな事イヤ！」

美津子は部屋を出ていった。残された三人は、それを茫然と見ていた。

「それにしても、美津子ちゃんが……」

奈美は、まだ信じられないといった感じだ。

「……………あの……」

「桜ちゃん」

紗子がなにか言おうとしたその声に、誠司がかぶせて言った。

「なんですか？」

「桜ちゃん、君は本当の事をなにもわかつちやいない。美津子さんの事も、そして、紗子さんの事も」

その声に、紗子は誠司を見た。

「あたしに先に真相を暴かれたから、嫉妬してるんですか？」

「いや、違う」

「じゃあ、なにが違うんですか！」

プライドを傷つけられたからか、桜の口調は喧嘩腰だった。

「あの時、あそこにあった呪いの石とされていたものは、確かに美津子さんが盗んだ」

「ほら、あってるじゃない」

桜が話の途中で割り込む。

「まあ、最後まで聞いてくれ。あの時、あそこにあったのは、本物の呪いの石じゃなかった。違いますか？ 紗子さん」

誠司が紗子を見る。紗子は、うつむいたまま答えない。

「あの時、あそこにあったのは、前もって妙子さんが用意しておいたニセモノだったんだ。そして、本物は妙子さんが持っている」

すると、今までなにも言わなかった紗子が口を開いた。

「そこまでわかってるんだ。すごいね、君。こんな短期間でわかるなんて。あなたの言う通りよ。あれは私が用意したニセモノ。本物は私の荷物の中にあるわ」

「紗子、どうしてそんな事をしたんだ！」

悦雄が怒鳴る。

「こんな伝統を終わらせるために決まってるでしょ！」

紗子も悦雄に負けにくいくらいの声で言い返す。

「妙子さん、本物はこれでしょ？」

そう言って、誠司は緑色の石を出した。

「誠司、それは全然色が違うじゃないか」

「達之、まあ黙って見ていてくれよ」

そう言って、石を元あった場所に戻した。

「あ、色が……」

亜依が驚きの声を上げた。誠司と紗子を除く全員が絶句した。ただ、桜だけはそれを見ようとはしなかった。

「これでわかっていただけましたか？」

「これは一体どうなってるんだ」

悦雄が誠司の肩を掴んで揺する。

「は、放して下さいよ」

「あ、ああ、スマン」

誠司は乱れた服装を整える。

「そもそも、この石が呪いの石と呼ばれるようになったのは……」

「奇跡の石よ」

紗子が言った。

「この石の本当の名前は奇跡の石。昔は、邪悪なものをはね除けると信じられて、破魔の石とも

言われていたの。昔の人は、石の色が変わるのは神の力によるものだと考えたんでしょうね。と言っても、この石がこの北原家に祀られるようになってからだけどね、そう呼ばれ始めたのは。古い文献を調べてわかったわ。私の先祖が今みたいにした時、石の色が急に変わった。それからなの」

「でも、どうして石の色が……？」

亜依が誠司に訊いた。

「俺が説明してもいいんだけど……」

そう言いながら紗子を見た。

「私が説明するわ」

誠司は無言で頷いた。

「この奇跡の石に含まれているのは、アレキサンドライトという鉱物なの。この鉱物は、白熱電球の下では赤色に見えて、太陽光や蛍光灯の下では緑色に見えるというちょっと珍しい特徴のある鉱物なの」

「その証拠がこれです」

そう言って、誠司は一枚の写真を出した。それは、さきほどこの部屋で見つけた写真だった。その写真には、亡くなった北原淀が、縁側で緑色の奇跡の石を持っている姿が映されていた。

「勝手に持ち出してゴメンナサイ。とにかく、これを見て下さい」

そう言われ、全員が覗き込むように見た。

「本当だ！ この写真では、あの石は緑色だ」

悦雄が大声を出した。ホント、この人はすぐ大声を出す。

その時、誠司が唐突に話し始めた。

「紗子さんが、この石を盗んだのは、これ以上この伝統を続けたくなかった。できるなら、自分で終わらせようと思った。それは、美津子さんも同じ思いだった様ですけど。ただ紗子さんの行動の方が早かったわけです。よそ者の俺が言うのもなんですけど……」

「……ありがとう」

紗子の目には、涙が溢れていた。

「紗ちゃん……」

「仕方ない。こんな事になるとはな……」

その時だった――

ズドン！ と銃声がした。

一瞬、全員の時が止まった。

次の瞬間、全員が銃声がした方に走っていった。

「この家、銃なんてあったんですか？」

道すがら、誠司が悦雄に訊いた。

「ああ。昔使っていた猟銃が一丁。蔵の奥にしまってあったんだ」

「くそっ」

（どうしてこんな事になるんだ。俺が桜ちゃんより早く真相を言っていたら……。あの時、彼女

を止めていたら……俺たちがこの家に来なければ……)

誠司は後悔の念でいっぱいだった。

「急いで！」

達之が叫ぶ。

七人が現場に着くと、美津子が壊れた猟銃を持ったまま倒れていた。

「美津子！ 美津子！」

紗子が駆け寄って、美津子を抱きかかえる。

「美津子さん……」

亜依と桜は泣いていた。達之は、そんな二人に美津子が見えないように、後ろを向かせた。奈美はその場に崩れ落ちた。悦雄はそんな妻を抱きしめ、支える。ただ、誠司はその現場をじっくりと見回した。そして、その不自然さに気付いた。

「紗子さん、美津子さんは死んでない。おそらく、気絶しているだけだと思います」

そう言って、優しく肩に手を置いた。

「……え？」

「だって、よく見て下さい。全く血が出ていない。それに、猟銃が壊れている。これから推測される事、それは――この猟銃は詰め物でもして弾が出ないように細工されていた。だから、美津子さんが弾を入れて撃とうとしたが、暴発して銃は壊れてしまった。そして、その衝撃で気絶してしまった。ちなみに、弾は銃と一緒に保管されていたんでしょう。まさか、ずっと入れっぱなしだったなんて事はないと思います。ほら、わずかに胸が動いているでしょ」

そう言われよく見ると、確かに美津子の胸は規則正しく上下して、わずかながら呼吸音もあった。胸に耳を当てたが、ちゃんと心臓の音も聞こえた。

「よかった……」

生きているとわかった途端、紗子は急に力が抜けるのを感じた。

＊

北原家で起こった事件は、その日のうちに解決した。

「すげえじゃねえか、誠司」

「たまたまだって」

「そんな事あるかよ」

達之は誠司の背中をバシバシ叩きながら言う。

「偶然よ」

ただ、桜はご機嫌斜めだった。それもそうだろう。自信をもって推理したのに間違っていて、そのあとすぐに誠司に真相を言われてしまったのだ。桜のプライドはズタズタ、修復不可能状態だった。

「桜ちゃん……」

亜依はそんな桜にどう声をかけていいのかわからなかった。

「桜、機嫌直せって、な」

そこは幼なじみ。達之がいつもと同じように接する。

「今度は負けないんだから」

どうも、桜は誠司に負けず劣らず負けず嫌いらしい。

「いつでもお相手しましょう、名探偵様」

「くう……………」

桜は唇を噛んだ。

「ちょっと、椎崎さん……」

「悪い、悪い。そうだ、達之たちは槍ヶ岳に向かうんだろ？」

「ああ、明日の朝早くに出発しようと思う」

「だったらさ、一つ頼みがあるんだけど」

「なんだ？」

「家に帰ったらさ、亜依ちゃんは桜ちゃんの家泊まってるって事にしてくれないか」

「それはいいけどさ……お前は？」

「俺は大丈夫だ。問題ない」

「それはいいけど、どうして……？」

「わけは訊かないでくれ、頼む」

誠司は顔の前で手を合わせた。

「しゃーない。わかったよ」

「恩に着る。自分たちの家には、ちゃんと連絡しとくからさ」

こうして、鬼無里村での夜は過ぎていき、朝を迎えた。

「じゃあな」

「ああ」

翌朝、達之と桜は槍ヶ岳目指して出発した。

「さてと、俺たちも行こうか」

北原家で電話を借り、家に連絡した亜依と誠司も、北原家のみんなに礼を言って出発した。

「これからどうするんですか？」

「そうだな、とにかく鬼無里村を見て回ろうぜ。なんたって、この村には石の伝説がいくつもあるんだから」

「そういえば、そんな事言ってましたね」

亜依は、誠司がこの村に行こうと言った時の言葉を思い出した。

『鬼無里村には、そういった類の伝説があるんだ』

「やっと静かになったな」

唐突に誠司が言った。

「え？」

「達之たちだよ」

「.....？」

「初めて会った時、達之とはあまり親しくないって言っただろ。あれは、まんざら嘘でもないんだ」

「でも.....」

亜依はなにがなんだかわからなかった。

「別に嫌いじゃないんだ」

「じゃあ、どうして？」

「似てるんだ」

「え？」

「似てるんだよな、俺と達之。だからかもな。波長が合いすぎてるんだろうな。だから逆にそうなっちゃうんだと思う」

亜依はなにも言えなかった。だけど、なんとなく誠司の気持ち、言いたい事がわかるような気がした。

「ほら、最初の目的地に到着だ」

*

誠司と亜依は、上水内郡と北安曇郡との郡境となる嶺方峠にやってきた。そこには、道を挟んで二つの大岩があるのだ。その名も夫婦石。言ってしまえば、縁結びの石なのだ。誠司がここに来た理由は特にない.....と思われる。

「あの～、これって.....？」

亜依は不思議そうに誠司を見る。

「ああ、これは夫婦石って言って、その名前からもわかると思うけど、縁結びの石なんだよね……って、別にそんなつもりで来たんじゃないから。ただ、forstreckiって、世界を滅亡から救う石だって言ってたから、もしかしたらって……」

誠司はこれでもかというほど、慌てていた。亜依はそんな誠司が可笑しかった。

「まだ、そんな事言ってないですよ。それに……」

「あのさ」

亜依の言葉に誠司の言葉がかぶる。

「なんですか？」

「ああ、forstreckiってどうやったらわかるんだ？」

誠司がそう訊いた時だった。

「そんな時こそ、わいの出番やな」

久しぶりに聞く陽気な声がした。その声の主は――

「久しぶりでんな。覚えてまっか？ グビディでっせ」

二人の前に、突然グビディが姿を現した。

「なんなんだよ」

「あんさんら、困ってましたやろ？ セヤから、ちょっと手助けしたろうと思って来ましたんや」

グビディは、マイペースで続ける。

「で？ なにを困ってましたんや？」

「それが……」

一瞬、呆気にとられたものの、亜依が答える。

「そうでっか。それはやな。あんさんらが近づいたらわかりまっせ」

「近づいたら？ それだけで？」

誠司が訊く。

「そうや、あんさんら、時計持ってるやろ？ それが反応しまっさかい。ほな、これで解決やな。またな」

そう言うだけ言って、グビディは消えた。

「なるほど……じゃあ、夫婦石は違ってたって事か……」

「そうみたいですな。でも、せっかく来たんですから……」

「じゃあ、次の場所に行こうか」

またしても、亜依の言葉を遮る。

「んもう……あ、ちょっと待ってくださ〜い」

亜依は怒る暇もなく、歩き出した誠司のあとを追いかけた。

＊

戸隠の西方の山中に岩下という人里がある。そこの裾花川の西のほとりに岩下の機織石という岩があり、それを見に行ったのだが、そこでも反応はなかった。

「もう、これ以上〈石〉に関するものはないしな〜」

「あと、だいたい40時間くらいありますね」

「じゃあ、観光でもしていくか？」

「でも……」

「急がなきゃ、だろ？ 最初から急ぐとあとで辛くなるよ。それに、色んなものを見ておくのもいいんじゃない？」

「……………」

そう言われ、亜依はそれに従う事にした。

＊

二人は、今いる裾花川の源流部にある木曾殿アブキと呼ばれる巨大な岩屋を見に行く事にした。

「すごいですね～」

亜依はその巨大さに驚きを隠せなかった。

「まあ、すごいよな。ただ岩があるだけどさ。江戸時代はもっと大きかったらしいんだけどね」

誠司の言う通り、岩屋なので岩しかない。昔は今よりも大きく、すいれん水簾の滝が落ちていたらしい

のだが、今はそんな滝はない。大きさも、間口が約半分、奥行も約1/4と規模は小さくなっている。だが、現在でも決して小さいというわけでもない。

「それでも、すごいじゃないですか」

「まあな」

それから二人は一晩野宿をし、翌日、最初にいた戸隠山から『時の口』を通り、長野県に別れを告げた。

4 あの……どうして俺の名前を？ |

一人の女性が普通に街を歩いていた。それは、普段どこにでもある情景だった。

その女性は、全身白づくめの服を纏っていた。それに加え、つばの広い帽子に手袋まで身に付け、全身が覆われていた。

「出てけ、化け物！」

「モンスターめ！」

街の住人は、その女性に罵声を浴びせた。中には、石を投げつける人もいた。

「黙れ！」

そんな女性を庇い、側にいた男性が周りを一喝する。

「……もう、いいから」

女性が小声で言う。

「でもな……」

「いいから」

女性は小さくなりながら言う。

「なんだったんだろう？ 変な夢見ちゃった」

鬼無里村をあとにし世界を移動した二人は、公園で野宿していた。そこは、亜依と誠司が住んでいた時代と、そう変わりがなかった。しかし、微妙なところで違っていた。

歩いている人が時計に喋りかけたり、変なゴーグルを付けていたりする。

「ここって、どこなんだろうな？ 見たところ日本っぽいけど……」

時折、聞こえる言葉が日本語だった事が、二人を少し安心させた。

「どこでしょうね……」

そう言うと亜依は、何気なく懐中時計を見た。

「あっ……」

勢いよく蓋を開けたため、文字盤の部分も外れてしまった。

「おい、なにしてるんだよ！」

誠司はつい怒鳴ってしまった

「ご、ごめんなさい……」

亜依はしょぼんとする。

「わ……悪かった、怒鳴ったりして。……亜依ちゃん、それ……」

誠司は懐中時計を指した。

「え？」

亜依も懐中時計を見る。

懐中時計は元々文字盤も開くようにできていたらしい。蝶番があった。そこにはデジタル画面があり、『セイレキ 2021/07/21』と表示されていた。

「これって、今あたしたちがいる時間……でしょうか？」

「……多分」

二人は偶然ながら、懐中時計の隠された機能を発見した。

*

その頃――

「ねえ、これ……」

一人の女性が金色をしたペンダントを拾い上げ、隣にいる男性に見せる。それこそ、亜依のロケットだった。

女性はロケットを開けた。そして、中の写真を見て絶句した。

「！ ……………」

女性は、男性にも写真を見せた。

「！ ……………」

男性も言葉を失う。

「……あ、い……」

女性は、確かにそう言った。涙を流しながら……。

それは、女性にとって日常茶飯事だった。

女性はある種の病気だった。それはあまりにも稀な病気なので、全く市民権を得ていなかった。その病気の名は――ヘマトフィリア、血液嗜好症。症状は、その名の通り血液を欲する病気。いわゆる、吸血鬼のような感じなのだ。最近では、次第に理解されつつあるのだが、それでも理解しない人の方が多い。その人を見ると開口一番〈ドラキュラ〉〈化け物〉などの言葉が出てくる。

ドラキュラ伝説に出てくる者たちも、決して魔物などではなく、この血液嗜好症だったのだろう。だが、時代的背景などから魔物とされ――十五世紀の魔女裁判（異教徒狩り）と同じだ――蔑まれてきたのだろう。その事が深層意識にあるからなのだろうか、現在でも化け物扱いされる事もある。

そのため、彼女はその事を隠し通してきた。両親もその事を知らない。

どうしても血が欲しくなった時は、自分の指を少し切ってそれを舐めていた。だが、ある男性に会って、それは変わった。

そして、一緒に旅をしている男性も、ある種の障害を持っていた。

男性はサヴァン症候群。サヴァンとは、フランス語で天才という意味だ。サヴァン症候群は、脳に障害を持つ者――言語障害が最も多い――が、主に芸術的分野において特異な才能を発揮するというものだ。その才能はまさに千差万別で、一瞬見ただけの風景を正確にスケッチできたり、一度聞いた音楽をその場で再現したり、芸術分野以外では、時計を見ずに正確な時間が言えたり、日にちを言われて即座に曜日が言えたりなどだ。

サヴァン症候群に関して、詳しい事はほとんどわかっていない。仮説はいくつかあるのだが、証明されていないのが現状だ。

その仮説の一つに、〈脳の再配置〉という考えがある。それは、なんらかの影響で脳に障害

を負った場合、周りの機能部分はその部分を侵食して、自分の領域を増やしてしまうという競争原理だ。この考えでは、領域が増えることによって、その侵食した機能の使用できる記憶力などの量が増え、その機能においては能力が増すというものなのだ。最もこの仮説が有力なのだが、証明されていない以上仮説でしかないのだが――

この男性の場合は言語障害でなく、左半身の感覚がほとんど無いというものだった。左耳が聞こえず、左目もうっすらとしか見る事ができない――いわゆる弱視だ。さらには、左手は動くには動くのだが、触覚がない。ただ動くだけなのだ。それは、左足においても同じだ。

そんな彼に、特異な才能が突然現れたのは十歳の時だった。《障害児》と言われてきた彼だったが、一夜にして《天才》と言われるようになったのだ。

女性の方は久門梨架、男性の方は富所史和といった。

*

今いる時代がわかった二人は、とりあえず街に繰り出していった。

街は朝のラッシュなのだろうか、やけに人が多い。

街の風景も、亜依たちの時代――2001年――とたいして変わっていない。街にはビルが立ち並び、道路には車が走っている。

ただ違うのは、走っている車からエンジン音がしないという事である。耳を澄ませば、かすかにモーター音がするのだが、この雑踏の中では不可能に近い。

それでも、時折ではあるものの、エンジン音を鳴らしながら走っている車もあった。

どうやら、モーター車とガソリン車の二種類の車が走っているようだ。もう少し時代が進めば、ホバー車も出現するであろうが、この時代はそれには少し早かった。

もう一つ違うといえば、最近（2001年）でも新しく作られた街には見られるが、電信柱がなかった。電線などの有線類は、全て地下に埋め込まれているのだ。

亜依と誠司の二人は、そんなちょっと近未来の世界にいた。

「すごいな～」

誠司はその光景に感動していた。

「ホントですね～」

それは亜依も同様だった。

亜依と誠司の二人はその人込みを掻き分け、逆行する形で進んだ。

そんなこんなで進み、なんとか人の波からはずれたビルの谷間で休憩をとった。

「今から二十年後は、こんななんだ」

「新しい機械が発明されているみたいですけど、人の暮らしてそんなに変わってませんね。みんな忙しそうにして……」

「そうだな。一番、進歩しないのは人間かもな」

そう言って誠司は、二十年後にも見る事になるであろう空を見上げた。

ところで、先ほど二人が見た時計に話しかけている人だが、彼は会社の上司と連絡を取って

たのだ。

この時代、携帯電話は形を変えて進化していた。現在の形状でモニター部分が大きくなり、映像が映るようにしたものもあるが、ちょっと変わった物好きの人は、時計型の物を使っていた。

時計型というのは、現在のアニメなどでも通信ブレスなどとして登場するが、この時代においてはそれが実際のものとなり、売れゆきも好調の人気商品になっていた。

もう一つ、変なゴーグルだが、あれはパソコンの画面なのだ。ゴーグル部分に映像が表示される。もちろん、向こう側は透けているので、前方も見ることが出来る。

そのゴーグルをつけていた人も、会議の書類をまとめていたのだった。

誠司の言葉ではないが、人間が一番進歩しないのかもしれない。

二人がそんな街を彷徨っていると、変な男女の二人組が亜依たちの方に歩いてくる。目標が亜依たちではないのだろうが、進んでいる方向が明らかに亜依たちなのでそう見えた。

「なあ、ミユ。ホントにこの辺で変な力があったのか？」

少年の方が、隣の少女に言った。

「ほんとですよ。信じてくださいよお」

少女は、手をバタバタさせて言う。なんとも、のんびりとした雰囲気だ。

で、なにが変なのかというところ――

「ねえ、あの女の子……」

亜依が、誠司に小声で言う。

「亜依ちゃんにも見えるのか？」

亜依は無言で頷く。

「あの子……羽が生えてる」

亜依は恐る恐る言った。

亜依の言う通り、その少女の背中には小さな羽があった。それも、真っ白な羽が。その風貌は天使のそれだった。

周りの人には見えていないのだろうか、それともこれが当たり前なのだろうか、特に驚いた人がいるというわけでもない。

だが、誠司は好奇心が押さえきれずにいた。

「ねえ……」

誠司はその二人に歩み寄り、声をかけた。

声をかけられた二人は、驚いた風に誠司を見た。しかし、誠司はそんな事は気にせず、

「ねえ、君のその羽……」

そこまで言った時だった。

「ちょ、ちょっと、あなたにも見えるんですか」

少年が声を上げた。

「……あ、ああ」

一瞬、少年の言葉に戸惑ったが、

「その子の羽……それって、本物？」

続けてそう訊いた。その時には、亜依もそこにいた。

「本当に、見えるんですね」

少年は、念を押すように訊いた。

「当たり前だろ！ そんな嘘、どうやってつくんだよ！」

その訊き方が気に障ったのか、少し言葉を荒げた。

「……すみません。ミユの羽が見える人がいるなんて……」

「ミユ？」

「はい、私でえすう」

少女――ミユが、間延びした口調で言った。

誠司はそれに苛立ちを覚えたが、なんとか亜依がなだめてその場は収まった。

「じゃあ、ミユが力を感じたっていうのは、もしかしたらあなたたちですか？」

「……力？」

「でも、きっとあたしたちの事じゃないかな？」

亜依が誠司に言った。

「まあ、多分そうだろうけど……」

「あの……あなたたちは？ 俺は紅祐、二条紅祐っていいます。こっちはミユ」

「よろしくですう」

紅祐に紹介されたミユが、ペコリと頭を下げた。

「俺は椎崎誠司。でもって……」

「高尾亜依です。よろしくね、ミユちゃん」

亜依は、ニコッ、と微笑んだ。それに応えミユも、エヘッ、と笑い返した。

「そうだ。これからなにか用でもあるんですか？」

紅祐が二人に訊いた。

「ある。……でも、ちょっと君たちに興味もある」

「なるほど、ストレートですね。俺もあなたたちに興味があります。よければ、俺の家に来ませんか？」

紅祐も誠司と似たタイプのような。

「そうだな。お邪魔させてもうらおうかな」

こうして、四人は二条紅祐の家に向かった。

*

そんな四人をこっそりと見ている二人がいた。

「ねえ……」

「ああ……」

短い会話だが、二人には充分だった。

この二人こそ、例の二人だった。

そう——久門梨架と富所史和だ。

二人は亜依と誠司——正しくは亜依だけなのだが——のあとを追っていた。そんな梨架の手には、あの亜依が探しているロケットがあった。

「あの子……」

「今はまだだ」

「わかってる」

「その前に……」

「でも……」

「いいから」

「気が進まないけど」

気持ちが通じ合っている二人の会話はそんな長さで続く。

*

そんな二人が尾行しているとも露知らず、亜依と誠司は紅祐の家を目指していた。

「へえ～、ミユちゃんって、天使なんだ」

そう言われたミユは照れて、

「そんなあ、まだまだ見習いですからあ」

「そうそう。もしかしたら、悪魔になるかもしねえんだから」

紅祐が口を挟む。

「そうなの？」

「はあい、見習いはあ、日ごろの行いによってえ、天使にもお、悪魔にもお、どっちにでもなれるんですう。でもお、私は天使になりたいんですう」

どうしてだろうか、ミユは喋りだけでなく、行動全てにおいてゆっくりだ。そこが、誠司には馴染めない。そのため、会話には参加しないようにしている。

「あ、ここです」

どうやら、紅祐の家に着いたようだ。

紅祐の家は一軒家だった。大きさは一般的……というよりは、少し大きめだった。

「へえ～、こんなところに住んでるんだ」

誠司はその二階建の家を見上げた。煉瓦を模した外壁に瓦屋根、庭にはちょっとした草花が、整然と咲いている。手入れが行き届いていて綺麗だ。

「どうぞ」

紅祐はドアの鍵を開け、二人を呼んだ。

中に入ると、広い玄関に一枚の絵画が飾られていた。ひょっとしたら、紅祐はかなり裕福な家庭なのかもしれない。

「とりあえず、二階の俺の部屋で待ってて。ミユ、案内頼むな」

「はあい」

ミユの先導で、玄関の正面にあった階段で、二階へ上がっていった。

二階は廊下を挟んで三つずつ、計六つの部屋があった。ミユは、左手、一番奥の部屋に入っていた。どうやら、その部屋が紅祐の部屋らしい。

その部屋はフローリングなのだが、どうしてだか、一帖分だけ畳の部分があった。

その他には、部屋に入って左側にベッドがあり、右手には机がある。机の上にはノートパソコンが置かれてあり、その横には、ぎっしりと詰まった本棚があった。漫画も多々あるが、小説や専門書などもある。

だが、やはり一番気になるのは、一帖だけある畳だろう。

(変わった部屋だな～)

誠司がそんな事を考えていると、四人分のジュースを持って、紅祐が入ってきた。

「一つだけ訊きたい事がある」

紅祐が入ってくるなり、誠司が言った。

「どうぞ」

「この畳はなんだ？」

「.....趣味だ」

「.....」

紅祐の答えに、誠司は言葉を失った。

「趣味って、畳が、か？」

「悪いかよ。って、お前ん家には、畳があるのか？」

「ああ、六帖と八帖の和室がな」

すると紅祐は、

「すげえ～、今度お前ん家に連れてってくれよ」

と、目を輝かせて言った。

「和室がそんなに珍しいのか？」

「なに言ってんだよ。珍しいなんてもんじゃねえぞ。滅多に手に入らない、激レアじゃねえか。それをそんなに.....。かあ～、行ってみてえ～」

紅祐は、異常なまでに興奮していた。

「でも、あたしの家にも和室があるけど.....」

「ホントか！ くう～、なんて羨ましいんだ」

畳一つでここまで興奮する紅祐は、二人の目には奇妙な生き物に見えただろう。

実はこの時代、畳を使用する家はほとんどなかった。かなりの田舎にでも行けば多少ある——しかしそれも一部で、そういった地域でも昔からの物を使っているにすぎない。つまりは、新しいものは一切存在していない——のだが、紅祐が住んでいる地域には全くといっていいほどなかったのだ。存在していたとしても、それは田舎の古い家を改装した時に、不要になった物をリサイクルとして、こういった需要者に販売しているにすぎないのだ。

その話を紅祐から聞いて、二人も納得した。

「ところで、あんたらはどこから来たんだ？」

紅祐が本題に触れた。

「ああ……」

誠司は、今までの事をかいつまんで説明した。

「へえ～、その forstrek i ってのを探してるのか……。ミユは聞いた事ないのか？」

ミユは、申しわけなさそうに無言で頷く。

「そっか……。まあ、俺たちでよければ協力してもいいぜ。どうせ暇だったし。なんかこう、面白い事はないかって思ってたところなんだ」

「そっか……でもな……」

「遠慮するなって」

（そうじゃないんだよな……俺と似てる奴はどうも苦手だ。それに、このミユって子の喋り方も、な……）

こうして、誠司が苦手にするタイプ二人との探索が始まった。

亜依は嬉しくて、はしゃいでいた。

そして、梨架と史和は遠く離れて見守っていた。

*

「あの子たち……」

梨架が呟いた。

「だったら、近寄ってみようじゃないか」

「でも……」

「大丈夫だって。あの子は、僕たちの事はわからないと思うよ」

「……うん」

梨架は決心し、四人の所に歩いていった。

そして、すれ違う瞬間――

懐中時計が光った。

しかし、それに気付く者はいなかった。

*

「ところでさ、 forstrek i って、どんなものなんだ？」

紅祐が二人に訊く。

「さあ……」

誠司が首を傾げながら答える。

「じゃあ、どんなのかわからないのか？」

「言ってしまえば、そうだな」

「……………」

「……………」

紅祐とミィユが絶句した。

「仕方ないだろ。俺たちだって、詳しい事は聞かされてないんだから」

「じゃあ、どうやって見つけるんだよ」

「ああ、それは大丈夫だ。f o r s t r e k i が傍にあれば、この時計が反応するらしいから」

誠司は懐中時計を見せた。その時、既に懐中時計は光を失っていた。

「へえ〜」

紅祐は感心したように言う。

「それって、時計なんだ〜。初めて見た」

「まあ、俺だってあまり見た事なかったけどよ……」

それにしても、紅祐の感心の仕方は尋常ではなかった。

「ホントに時計？」

「ええ、時計だけど」

亜依が答える。

「すっごいな〜。ホント、君たちが羨ましいよ。そんな物、百科事典にでも載ってないんじゃないかな。ホントすごい。豊にしろ、君たち最高だよ！」

こんな具合だ。

(そんな事で、これだけ喜べるなんて……すっげえな……)

誠司は誠司で感心していた。

「ところでさ。ミィユちゃんは、どうして人間界にいるの？」

亜依がミィユに訊く。

「それはあ……」

「あー！」

ミィユの言葉を誠司の叫び声が遮った。

「ど、どうしたんですか？」

「こ、ここだよな……」

亜依は一瞬わからなかった。が、ここはこの世界の『時の口』なのだと、時間がかかったが理解した。

「な、ない……」

しかし、そこに『時の口』はなかった。

「ホントだ……」

亜依も言葉がない。

『時の口』は、滅多な事では移動しない。まして、消える事もない。ずっと、その地点に存在するものなのだ。

なので、長野の時も同じ場所から移動したのだ。

『時の口』がなければ、世界を移動する事ができない。しかし今、その重要なものが消えてしまっていた。

「どうしよう……」

「どうしようたって、な……」

「あたしたち……」

亜依の目には、涙が浮かんでいた。

「泣くなって」

そう言う誠司の言葉に力はなかった。

「どうしたんだ？」

会話の内容が全くわからない紅祐が訊いた。

紅祐でなくとも、この不思議な会話をして、しかも涙を浮かべている姿を見れば質問もしたくなるだろう。

「俺たち、移動できない」

か細い声だった。やっとの事で絞り出したような、そんな声だった。

「移動できない？」

「ああ、俺たちは世界を移動できない」

疑問符が浮かぶ。紅祐は、二人の話を聞いてはいたものの、詳しい事は全く理解していなかった。

「とりあえず、俺たちは別の世界に行けないんだよ」

「それってえ、大変なんですかあ？」

気の抜けた声でミュウが訊く。

「ええ、とっても大変なの。あたしたちが移動できないって事は、自分の世界にも戻れないって事なの。それって、大変でしょ？」

亜依が答える。ミュウとのやりとりは、全て亜依がしていた。

誠司は、辺りを見回していた。が、しかし、『時の口』は見つからなかった。

「探し物が増えちゃったな」

誠司が呟く。亜依は、無言で頷いた。

その様子を、梨架と史和が心配そうに見ていた。たとえそれが、自分たちがわざとした事だとしても……。

4 あの……どうして俺の名前を？ II

「ん？ なんか、お嬢ちゃんら、大変な事になってますな。あれは……」

その頃、グビディは、水晶玉を覗きながら呟いた。

「――あの二人、確信犯やな。まあ、あの二人やったら大丈夫やろ。なんせ……」

そこで、一度言葉を切った。

「でも、ちょっとお嬢ちゃんたちにはきついな。こんな事、慣れてへんやろから。でも、あの二人も考えての事やろ。まあ、ほんまにやばなったら行けばええやろ」

結局は動こうとしないグビディであった。

*

「ねえ、どうしよう」

「どうしようたって、な……」

この事態に、二人はどうする事もできずにいた。

紅祐とミィユも、どう言ってもいいものかわからずにいた。

「……もう、とりあえず探そうじゃないか。それしかない」

誠司は、半分自分に言い聞かせるように言った。

「ミィユも手伝いますう」

「あ、ああ、よろしくな」

誠司は顔をしかめた。

「そうと決まったら俺も手伝うぜ」

紅祐はやけに乗り気だ。

「だって、こんな事、滅多に体験できねえからな」

(天使と一緒にいるだけで充分だろ……)

誠司はそう思ったが、口にはしなかった。

「そうですよね。前向きに、前向きに……」

亜依は、自分に暗示をかけるように言った。

「そうですう。ぽじていぶう、ぽじていぶう」

「そ、そうよね。ポジティブよね」

「そうですう」

誠司は、その会話を聞くだけで疲れるような気がした。

「で、どうする？」

「そうだな、とりあえず街を歩いてみたいんだけど」

「了解。案内がてら、歩こうか」

「助かる」

「困った時はお互い様、ってね」

「情けは人のためならず、だな」

「そうそう」

最初は怪訝に思っていた誠司だが、紅祐には好感が持てた。理由はわからないが、そうなのだ。達之とは《似ている》だったのだが、紅祐とは《同じ》という事なのかもしれない。中途半端な同調では反発も起こるが、完全な一致の場合、それはないらしい。

その事が、誠司の心を軽くしたようだ。誠司に笑顔が戻ってきた。

「さてと、前向きにやりましょうか」

「はい」

そんな誠司につられるように、亜依にも笑顔が戻ってきていた。

覇気を取り戻した今、目の前の試練に向かって、第一歩を踏み出した。

そんな二人の側には、常に富所史和と久門梨架がいた。

*

四人は地の利という事で、紅祐を先頭にとりあえず歩き出した。目的地はない。じっとしているよりはいい、という誠司の意見で、歩いていた。

歩き続ける四人に、会話はなかった。先程までは笑顔もあったのだが、それもしばらくの間だけだった。誠司は難しい顔をして黙っているし、亜依も同じだった。紅祐とミュウも、そんな雰囲気ではとても会話などできるはずもない。

『時の口』が消えた。

その事が、これほどまでに四人を暗くした。

そんな状態のまま、気付けばオフィス街を出ていた。オフィス街を抜けると、そこは閑静な住宅街だった。紅祐の家がある所は、どちらかといえば高級住宅街的なところがあつたが、この辺りはそことは違い、一般的な住宅街だった。ほとんど車が通らないのだろう、道路は子どもの遊び場と化していた。

「ところでさ」

突然、誠司が言った。

「なに？」

紅祐が振り向く。

「紅祐の両親って……」

誠司が最後まで言わないうちに、

「両親は、ずっと海外に出張さ。俺が小さい頃からずっとだよ。昔はお手伝いさんとかがいたけど、今は実質一人暮らし。まあ、今はミュウがいるけどな」

「淋しくないの？」

亜依が会話に加わる。

「淋しい、か……」

紅祐は大きくため息をついた。

「淋しい、っていうのはさ、前は優しくされた事があったけど今はそうじゃない、って事だろ？俺は違うから。昔も今も両親が側にいた事なんてない。だから、両親がどんな仕事をしているかもわからない」

紅祐は、無理矢理にでも笑おうとした。しかし、それは全く笑顔に見えなかった。

「わかるよー」

その言葉に、紅祐が亜依を見た。

「――あたしも、両親がいないから」

「……え？」

「あたしの両親ね、あたしが小さい頃にどこかに行っちゃって、そのままなの。今は親戚の人の世話になってるけど……それとね、椎崎さん。今までずっと黙ってたけど、あたし……本当は高尾亜依じゃないの。本当は富所亜依なの。便宜上、高尾亜依って名乗ってたの……育ての親の叔父さんと叔母さんが、高尾って名前だから……」

亜依は、今にも泣き出しそうだった。話題が話題だけに、無理もないのだが……。

「亜依ちゃん……」

誠司が優しく亜依の肩を抱いた。

「……ありがとう」

亜依は誠司の胸に顔を埋めた。

「亜依ちゃん、きっと会えるよ。いや、絶対に会うんだ。一緒に捜そうよ、ね」

誠司が優しい言葉をかける。

「椎崎さん……」

亜依は誠司の胸で泣いた。悲しい涙と、嬉しい涙が混じった涙だった。

「ゴメン。俺がこんな話したから……」

それを見て、紅祐が謝った。

「紅祐が悪いわけじゃない。俺があんな質問をしたから悪いんだ。亜依ちゃんの事、知ってたのに……ゴメン」

「ううん、いいの。あたしが自分で話したんだから。泣いちゃって、ごめんなさい」

亜依は顔を上げて言った……瞬間、自分が誠司に抱きついていたらとわかり、慌てて離れた。

「チェッ、もうちょっとこのままだよ良かったな……」

残念そうに言った誠司が、再び明るさを取り戻させた。

「で？ ここにはなにかあるのか？」

「あ、ああ。ここに、ちょっとした知り合いが住んで……」

紅祐がそう言った時、目の前の家から一人の女性が出てきた。

*

「亜依……」

ずっと尾行していた梨架は、亜依の言葉を聞いて涙した。

「梨架……」

そんな梨架を、史和が優しく抱きしめた。

「あの子は強い子だ。あの子なら、きっと大丈夫」

「でも……」

「大丈夫。あの子を信じよう」

「ええ」

二人は強く抱き合った。

「あの子に、笑顔で会える日が早く来るように……」

「ええ。一日でも早く」

*

「あー！」

目の前に現れた女性が驚いて、大きな声を出した。四人は、その声に一步下がった。

「誠司……誠司でしょ？」

その女性が誠司の名前を呼んだ。

「あの……どうして俺の名前を？」

さすがの誠司も、びくびくしながら訊いた。

「あれから二十年だもんね、わからないか」

そう言われて、誠司はその女性をじっくりと見た。

(ん？ どこかで見た事があるような……)

その顔は、記憶のどこかにあるような気がした。そして、記憶を辿っていくと……。

「え、えー！」

誠司がこの女性に負けにくいぐらいの大きな声を出した。

「わかった？」

「……実央、三朝実央！」

「ピンポーン、正解」

その女性——三朝実央は、手を叩いて喜んだ。

「まあ、今は結婚して、椎崎実央だけだね」

実央は意地悪な笑みを浮かべた。

「……………えっ？ ええっ？ マジ？」

誠司は力が抜けるような気がした。亜依はそれを聞いて、なんだか胸が痛むような感じを受けた。

「な～んてね、冗談よ、冗談」

実央は、アハハ、と笑った。

「へ……？」

誠司はもちろん、亜依もホッと胸をなでおろした。

「相変わらずね。ホント、信じやすいんだから。まあ、純粹バカっていうのかな。それが取り柄だったからね――」

実央は空を見上げた。

「――でも、そこが好きだったんだけどな……」

「……………え？」

誠司にとって、それは衝撃的な事だった。

(実央が俺の事を好き？ って、現代に戻ったら、どうすりゃいいんだ？)

実央の言葉に、誠司は完全に動揺していた。この時代では問題ないのだが、やはり現代の実央は……。

「まあ、そんな誠司も今じゃ……あ、これは言っちゃいけないよね」

実央は慌てて口を押さえた。

「それにしても、ホントだったんだ……」

実央は一人で喋り続ける。

「二十年後に今の俺に会う事になるだろうからその時はよろしく、なんていきなり言われても、ね……。普通、信じないでしょ。信じないっていうか、わけわかんないでしょ。でも、この健気な実央様は、ちゃんと覚えていたんだな、これが。まあ、好きな人の事だったから、って事もあるんだろうけど。それにしても、懐かしいな……。あの人から奪っちゃおうかな……って、ん……？」

実央の勢いは、止まるところを知らないかのようにだった。が、それも垂依を見て止まった。

「なるほどね。それでか……。納得」

と、一人で頷いた。

「あの……」

紅祐が申しわけなさそうに実央に言った。

「なに？」

「実央さんと誠司……さんって、知り合いだったんですか？」

「まあね。無二の親友で、片想いの相手」

「あのさ、それって、ホントなの？」

誠司が実央に訊く。

「それ、って？」

「実央が俺の事好きだ、って事」

「ホントもホント。いくらなんだって、こんな事、冗談で言えるわけじゃない」

「そうなんだ……」

「でも、片想いで終わったんだけどね。お蔭であたしは、この歳で一人身なんだけど。なんなら、責任取ってくれる？」

そう言いながら、誠司に詰め寄っていく。

「……え、ちょ、ちょっと……」

誠司は後ろに一歩、また一歩と下がっていく。

「実央さん、今はそんな事より……」

そこへ、紅祐が割って入った。

(紅祐、サンキュ)

誠司は心の中で礼を言った。

「実央さん、あの……」

亜依が遠慮がちに言った。

「なに？ 亜依」

「え？ あたし、まだ名前言ってない……」

「あ、そうだった？ まあ、気にしない、気にしない」

「はあ……」

「ね？ 気にしない、気にしない」

「……わ、わかりました」

亜依は無理矢理、納得した。

「じゃなくって、実央さんは知ってるんですよね？」

「知ってるって、なにを？」

「この世界から移動する方法」

「なに、それ？」

「……え？」

「あたしはなんにも知らないの。ただ、力になってやってくれ、って言われたただけだから」

「そうですか……」

亜依は肩を落とした。

「な～んてね。あんたら、二人揃って……まあ、仕方ないか。ホントは知ってるよ。その、なんとかが移動した場所。二十年前に誠司に言われて、メモっといたから。ちょっと待ってね……」

そう言って、首元をゴソゴソとさせ、なにかを探し始めた。

実央は、首にさげていた御守りを取り出した。そして、その御守りから、一枚の紙切れを取り出した。そこには、地図が描かれてあった。

「この場所らしいよ」

「なんだか、宝探しみたいだな」

紅祐は、みんなを元気づけようと、明るく言った。しかし、誠司は実央の事で悩んでいて、亜依も同じく実央の事を考えていた。

どうも、この重い空気は取り払われないようだ。しかし、

「とりあえず、その地図の場所に行こうか」

誠司が歩き始めた。亜依は、無言でそれに続いた。

「ちょ、ちょっと待てよ」

紅祐とミィユは少し出遅れた。どうも、このパターンばかりだ。

「いってらっしゃい」

実央は、そんな四人を笑顔で見送った。

*

四人が行ったあと、一組の男女が蔭から出てきた。

「実央さん、ありがとう」

女性の方が言った。

「まあ、あんたたちの頼みだしね。ホント、あたしってお人好し」

「実央……」

「誠司の選んだ道でしょ。でも、わざわざ二十年前にもらった、なんて言わなくても……あれは、さっきもらったものじゃない」

実央が男性の方に言った。

「ああ……まあ、いいじゃないか」

三人は、ずっと四人の歩いていった方を見つめていた。

「お父さん、お母さん……あたしたちをよろしくね」

女性が、物蔭に隠れている二人に言った。

*

実央に渡された地図を頼りに進むと、そこには小さな祠があった。

「……ここ？」

紅祐が訊いた。

「ああ。地図では確かにここなんだけど……でも……」

誠司は地図を見ながら言うが、確信はないようだ。

「でも？」

「ないんだよ」

「ない？」

「なあ、亜依ちゃんには見えるか？」

亜依は無言で首を横に振った。

「そうか……」

誠司は、がっくりと肩を落とした。

「なあ、ミユはなにか感じないか？」

紅祐はそんな二人を見て、なんとかしようと、ミユに訊いた。それというのも、紅祐自身は別になんの能力もない。強いて挙げれば、天使が見える、というだけなのだ。それだけでも凄いのだが、この場合、その力は無意味だった。

「うう～ん……」

この祠になにかを感じたのか、突然ミユが目を閉じ、小さく唸り声をあげはじめた。

「うう～ん……むう～ん……」

「……ミ、ミユ？」

「うう～ん……むう～ん……くう～ん……」

紅祐が心配そうにミユを見る。しかし、ミユは微動だにせず、固まったまま唸り声をあげ続ける。

「うう～ん……むう～ん……くう～ん……ふう～ん……」

どのくらい続いただろう。その間、紅祐、亜依、誠司の三人は、じっと見守っていた。その時――

「あっ！」

亜依が祠を指さした。

「どうした？」

誠司もそう言って祠を見、固まった。

「ど、どうしたの？」

しかし、紅祐だけは、わけがわからずにいた。

「ひ、光ってる……」

亜依の言う通り、祠が光っていた。いや、正確には祠の扉の奥が光っているのだ。

「ううううう～ん……！」

ミユの唸り声が大きくなった。

――バァァン！

大きな音とともに、祠の扉が開いた。

「うわっ！」

「きゃあ！」

それと同時に、一陣の風が吹き抜けた。

「ミユ！」

紅祐が叫んだ。亜依と誠司が声の方を見ると、ミユが倒れていた。

「ミユ！ ミユ……！」

紅祐は、ミユの身体を揺すり、声をかけ続ける。

しかし、ミユはなんの反応も示さない。

「ミ……ミユ……ちゃん……」

亜依の目から涙が溢れる。その涙が、ミユの羽に落ちた……瞬間――

パァァン、と羽が光った。

「ミ、ミユ……？」

紅祐がミユの手を握った。ミユは、それに反応して、指を動かした。

「ご、ごしゅ、じん、さまあ……」

弱々しい声だったが、紅祐は嬉しくて涙が止まらなかった。

「よかった。ホントよかった」

今まで滅多に涙など流さなかった紅祐だが、この時ばかりは、今までの分も流すかのように泣いた。

「……ん？」

誠司は、足下に転がっている赤い石を見つけた。

「これって……」

誠司は嬉しそうに、それを亜依に見せた。

「なあ、これって……」

「え……？」

亜依は涙を拭い、それを見た。

「これって……もしかして……」

亜依は、慌てて懐中時計を取り出す。そして、コクリと頷いて、石に近づけた。

「……………」

「……………」

二人は言葉を失った。懐中時計はなんの反応も示さなかった。この石は f o r s t r e k i で
はなかった。

二人は、ガックリと肩を落とした。

「あ……それ……」

ミユは、まだ意識が朦朧としているのだが、その石に反応を示していた。

「誠司、それは？」

「ああ。これは、さっきそこに落ちてたのを拾った……」

誠司が言い終わらないうちに、

「ちょっと貸してくれないか」

「あ、ああ。いいぜ」

誠司は、そんな紅祐に、茫然となった。

誠司から赤い石を受け取った紅祐は、それをミユに握らせた。

「……紅石い」

ミユは、絞り出すような、か細い声で言った。

「コウセキ？」

「……はあい。これはあ……涙……なんですう。……綺麗な……涙が……天使……に……触れ
るとお……石に……なるんで……すう……」

途切れ途切れだが、はっきりと紅祐に伝えようとしている。

「……その石はあ……その……天使……によってえ……色が……違う……んですう。……嬉
しい……ですう……。あたしの……石は……紅……でしたあ」

ミユはたおやかに微笑んだ。その頬には一筋の涙が伝っていた。

紅色の羽の天使を夢見るミユにとって、自分に触れた涙の石が紅色だったという事が、なに
よりも嬉しかったに違いない。

「……………えへっ……」

ミユは笑って、目を閉じた。

「……ミユ？ ……ミユ？ ……なあ、ミユ！ ……ミユ！」

紅祐は空に向かって叫んだ。

「ミユちゃん……」

亜依も誠司の胸で涙を流した。誠司は、そんな亜依を優しく抱きしめた。

「くふう～」

静かな声が、誠司の耳に届いた。

「なあ、紅祐さ、ミユって、もしかして……」

「……え？」

誠司の言葉で落ち着きを取り戻したのか、紅祐はミユをじっと見た。

「っあ……………」

紅祐は言葉を失った。と同時に、さっきまでの自分が急に恥ずかしく思えた。

「紅祐……？」

「ね、眠ってる……」

紅祐は、急に力が抜けた。

「え……？」

その言葉に、亜依が間の抜けた声を出した。

「よかった……あっ……」

亜依は、またしても誠司に抱きついていたらとわかり、慌てて離れた。

(っていうか、いくら恥ずかしくても、そこまで慌てられちゃ……ちょっと傷つくな……)

などと、誠司が思っているとは露知らず、亜依は、なにをというわけでもないが、どうにかしようと思死だった。

「で、だ。問題はこの祠なんだが……」

誠司はそう言って、祠を見た。祠はまだ光っていた。

「あ、そうそう。祠よね、祠」

その亜依の慌てぶりが滑稽で、誠司は笑いそうになったが、なんとか押さえた。

「とりあえず、これは『時の口』じゃないのは確かだ」

「じゃあ、これは？」

「さあ？ こればかりは、ミユに訊いてみないと……」

そう言って、誠司は眠っているミユを見た。ミユは、スヤスヤと気持ちよさそうに眠っていた。

「起きるまで待っていきましょう」

「そうだな。それしかないか。それまで、このままだといいんだけどな」

*

ミユが目を覚めたのは、それから三時間ほど経った頃だった。

「よかった。ミユ、よかった」

紅祐は、ミユに抱きつき喜んだ。

「ご、ご主人様あ、く、苦しいですう」

そんなミユは、相変わらずのマイペースだった。

「ミユ、早速で悪いんだが、これはなんなんだ？」

誠司が訊く。そして、亜依も。

「教えて、ミユちゃん」

「はあい。わかりましたあ。これはあ『時の扉』なんですう」

「……え？ 『時の扉』？ なんだ、それ？」

「ねえ、ミユちゃん。『時の扉』ってなに？」

「はあい。『時の扉』っていうのはあ、天使の世界への扉なんですう」

「て、天使の世界だって！」

思わず、誠司は大声を上げた。

「んなトコ行ってどうするんだよ。俺もちゃんとした地図残せっての」

誠司は、自分に悪態をついた。

「ねえ、なにか書いてあるんですけど」

亜依が誠司に地図を見せた。誠司は、亜依の持っている地図を覗き込むようにして見た。そこには、『時空渡りの能力を解放しろ』と書かれていた。

「はあ？ 時空渡りの能力？」

「なんの事でしょう？ 能力って、やっぱり『時の口』が見えるって事でしょうか？ それとも、さっきのミユちゃんの……？」

「いや、両方違うと思う」

「では……」

亜依と誠司は、額を寄せ、声を潜めて話をしていた。

「あっ……」

亜依がそれに気づき、顔を離した。

「あ……」

誠司もそれに気づき、頬を赤らめた。

「あのお～」

そんな二人に、ゆっくりとミユが近づいてきた。

「これを使ってくださあい」

そう言って、誠司に紅石を渡した。

「でも、これは……」

「紅石にはあ、秘められた能力を引き出す力もあるんですう。使ってくださあい」

ミユは優しく微笑んだ。その向こうで、紅祐も頷いた。

「わかった、ありがとう」

一瞬迷ったが、誠司は礼を言って、右手に紅石を握りしめ、その手を左手で包むようにして念じた。

(俺か亜依に時空渡りの能力があるなら、目覚めてくれ)

すると、紅石が光を発し、その光が誠司を包んだ。

「……え、え？ どうなってんだ？」

誠司はただオロオロとするばかりだ。右手を開くと、紅石は消えていた。

「その光はあ、能力に目覚めた証拠ですう」

「じゃあ、俺が……」

「はあい」

ミユが大きく頷いた。

「誠司さん！」

亜依が思わず誠司に抱きついた。

「じゃあ、これで……」

「きっと、時空渡りの能力が……」

亜依の言葉にミユが頷く。そこで、亜依が誠司から離れた。しかし、今までのような反応はなかった。

「ってことは、ここから移動できる……んだよな？」

「……きっと」

そう言って、二人は頷いた。

「紅祐、ミユ、ありがとうな」

「ありがとう」

誠司と亜依は、紅祐とミユに礼を言った。

「俺たち、行くわ」

誠司は、笑顔で別れを告げた。

「俺、なんにも出来なかったけどさ。誠司たちといて楽しかった」

紅祐の目には、うっすらと涙が滲んでいた。

「ミユちゃん、天使になれるように頑張ってね」

「はあい、頑張りますう」

「じゃあな」

誠司と亜依は、紅祐とミユに手を振って、『時の扉』に入った。

*

「あの子たち、やっと……」

「ああ。やっと自分の持つ能力——時を渡る能力に気付いた」

「あとは、亜依が……」

「そうだな。二人とも、無意識には使っていたんだが、これで意識的に使える。だが、亜依の能力は……」

「ええ。亜依を不幸にするかもしれない」

「だが、幸福にするかもしれない」

「ええ。でも、亜依なら大丈夫。私にあなたがいるように、亜依にも……」

「そうだな。僕たちは見守る事しかできないけど、あの二人なら、きっと……」

「とにかく、僕たちも追いかけないと。梨架、『時の口』を……」

「ええ」

梨架が目を閉じ念じると、二人の前に『時の口』が現れた。二人は、亜依と誠司を追って、世界を移動した。

5 あの時の能力をそのまま受け継いでいるんだ

「セースケ、もう行っちゃうのか？」

「スラッド、世話になったな」

丘の上の一軒の家が建っている。周りには畑と空が見えるだけである。離れた所に小さな街があるが、ここからは見えない。そんな場所で一組の男女と一組の父子がいた。

「セースケがいなくなったら淋しくなるな」

少年が言った。

「できれば、ずっといたいんだけどな」

少年――スラッドにセースケと呼ばれた青年、椎崎誠介が笑いながら言った。しかし、その笑顔には淋しさが混じっていた。

「カリムさん、スラッドさん、ありがとうございました」

女性が丁寧に頭を下げる。

「ヨーコも元気でな」

スラッドの父、カリムが言う。

「はい」

カリムにヨーコと呼ばれた女性、椎崎容子が笑顔で答える。

「じゃあな、スラッド。お前にもらったこれ、大事にするよ」

誠介が左耳のピアスを触りながら言った。

「大事にしるよ」

「わたくしも、この首飾り、大切に致します」

容子は、同じくスラッドにもらった首飾り――ロケットを、右手に乗せて言った。

「じゃあな、セースケ。A d i a u !」

「G ^ i s r e v i d o ! セースケ、ヨーコ」

「さようなら、スラッド、カリムさん」

「さようなら、カリムさん、スラッドさん」

二人に別れを告げ、誠介と容子は『時の口』に入っていった。

「.....ただ」

亜依はゆっくりと目を覚ました。世界を移動するたびに、亜依は妙な夢で目を覚ましていた。

「亜依、どうかした？」

誠司も目を覚ました。

「あ、誠司さん。.....また、変な夢を見たんです」

亜依は、誠司に夢の事を話した。

「セースケ、せいすけ.....わかんないな.....。でも、その人、俺と同じピアスを付けてたんだろ？」

「ええ。それに、あたしのロケットも」

「どういう事なんだ？」

誠司は腕を組んで考えた。しかし、「う～ん」と唸るだけだった。

「とにかくさ、その場所、探してみないか？」

それが誠司の導き出した結論だった。それに亜依は無言で頷いた。

「それにしても不思議だよな。毎回、変な夢を見てるんだもんな」

「ええ」

二人は今、砂漠——というよりは荒野を歩いていた。まばらに草が生えているが、その他に生命はないように思われる。近くに街らしきものが見えるので、その点での不安はない。

ただ、ここがどこなのかがまったくわからないという事が不安ではあった。懐中時計の時代表示機能を見たが、そこには『クリスターナ・エラー口 2469 / 237』と表示されていた。こんなものは、見た事も聞いた事もない。前回の表示——『セイレキ 2021 / 07 / 21』と同じ並びだと考えると……しかし、それでも理解できなかった。なんとなく、クリスターナ・エラー口という暦の2469年である事はわかるが、あとの237というのが全くわからない。結局それは、クリスターナ・エラー口暦2469年の237日目というだけだったのだが——

そんな不安を抱えつつも、二人は今日に見える街に歩を進めた。

「にしても、ホントどこだろうな」

「ええ。グビディさんは、色々な世界と繋がっている、とか言っていましたよね？」

「そういや、そんな事言ってたような……」

誠司は首を傾げた。

「という事は、ここは地球じゃない別の世界、って事かもしれないんですよね」

「……そうなる」

「大丈夫なんですか？」

亜依が不安そうに言った。

「大丈夫？ って、なにが？」

「急に襲われたりしませんよね？ それに言葉だって……」

「あっ……！」

言われて、誠司はその事に気付いた。見たところ、ここは地球ではない。誠司たちは完全に異邦人という事になる。だとすると、突然襲われる可能性だってある。そういう風習のある世界かもしれない。それに、地球以外で日本語が通じるはずもない。

そう考えた途端、急に不安に押しつぶされそうになった。

「……とりあえず、進むしかないんじゃないかな」

そう言った誠司に、今までのような余裕は感じられなかった。

そんな不安を抱えつつも、二人は街——おそらく村の方が正しい——に入った。幸い、途中で襲われる事はなかった。

街は、地理や気候の問題だろう、石造りの建物が街の中央通りらしい大きな通りに並んで建っていた。

まばらだが人もいる。穏やかそうな雰囲気だ。いきなり襲われたり、人を食うような感じは受けない。先程まで、変な化け物や妖怪がいたら、などと考えていた二人は、この光景を見てホッ

と胸を撫で下ろした。

その街の人たちはというと、皆、麻でできた服を着ている。装飾品などはなく、落ち着いた感じがする。ファンタジーものの村、そのものだ。

時折、祈祷師のような老婆が、

「D i o s a v u m i n !」

と、叫んでいたり、

「P a c o a l l i o j c i n d r o j !」

などと叫んでいる声が聞こえる。

中には、

「V e n u a l m i」

と、道行く人を手招きしている人もいる。

亜依と誠司は、その大通りを物珍しそうにキョロキョロしながら進んだ。一方その街の人も、物珍しそうに亜依と誠司を見ている。

「ん？ あれは……」

一人の男が誠司を見て目を丸くした。そして、亜依と誠司に近づいていった。

「セースケ？ セースケじゃないか！」

男は、誠司にそう言った。

「……え？ いや、俺は……」

「いや、セースケ、久しぶりだな。覚えてるか？ 俺だよ、俺。スラッド」

戸惑う誠司を無視して、スラッドは誠司の肩を叩きながら言う。

「ん？ セースケ、ヨーコはどうした？」

男は亜依を見て言った。

「あ、あの……人違いですって」

誠司は男の身体を離しながら言った。

「人違い？ あ、そういや、ちょっと違うような気が……」

「あなた、誰ですか？ だいたい、俺はセースケじゃなくて、誠司ですけど……」

「セージ？」

スラッドは首を傾げた。

「セースケじゃないのか。それにしても似てるな……。それにその耳飾りも……」

スラッドは上から下まで舐めるように見た。

「いや、ですから、あなたは……」

誠司は恥ずかしくなり、それを紛らわそうと訊いた。

「すまない。俺はスラッド・クラスター。いやはや、あんたが俺の昔の友達のシーザキ・セースケに似ていたもんだから、つい。まあ、許してくれや」

スラッドは、誠司の肩を叩きながら笑顔で言った。

「あの……今、椎崎って……」

「ああ、確かそんな名前だったな。変わった名前だったから覚えてる」

「あの……俺、椎崎誠司っていいます」

「じゃあ、お前さん、セースケの息子か？」

「いえ、違います。他人のそら似じゃないんですか？」

「いや、間違いない。今、お前さんが付けている耳飾りは、俺がセースケにやったもんだからな」

言われて、誠司は左耳のピアスを触った。

「誠司さん」

亜依が誠司の服の袖を引っ張って言った。

「この人、あたしが夢で見た人じゃないかしら」

「夢の？」

亜依は頷いた。

「まあ、なんだっていいや。とりあえず、俺ん家に来ないか」

「……………」

誠司は頭がいっぱいでパニック寸前だった。

「よし、決まり。ついてこい」

誠司の返事を待たず、歩きだした。誠司と亜依はお互いを見て頷き、スラッドのあとをついていった。

＊

「ねえ、ここって……」

「ああ、ここは……」

二人のあとを追って、富所史和と久門梨架も同じ世界にやってきていた。

「あの子たち……」

「いよいよだな」

梨架が頷いた。

「もうすぐ、あの子たちは全てを知ることになる」

「そして、僕たちの旅も終わる」

「そうしたら、また家族で……」

「そうだな。家族三人で」

二人は肩を寄せ合い、亜依と誠司を見ていた。

＊

二人は、街を出て再び荒野を歩いていた。二人の少し前をスラッドが歩いている。

「あの夢の通りだとすると、あの人があたしのロケットを……」

「そうだろうね。きっと、なにかわかるはず」

街を出てどのくらい歩いたらろう。辺りの景色は変化する事なく、相変わらずの荒野が続いていた。

「もうすぐ俺ん家だ」

スラッドに励まされ、二人は限界まで歩いていた。もうヘトヘトだ。

「ほれ、あそこだ」

スラッドの指さす先には、丘があった。そして、その丘の上には家が……。

「あそこだ。あの家です、誠司さん」

亜依は嬉しそうに誠司に報告した。

「じゃあ、もう一踏ん張りだな」

「はい」

夢の場所だとわかり、二人は力が戻ってくるような気がした。

「ラミン、帰ったぞ」

家に着くと、スラッドが家の中に向かって言った。

「おかえり」

家の中から、声が返ってきた。そして、その声の主は玄関の所までやってきた。出てきたのは、十三歳くらいの少年だった。

「父さん、おかえり」

「ラミン、客だ」

スラッドの影から誠司と亜依が顔を覗かせた。別に隠れていたわけではないのだが、ドアがそれほど大きくない事も手伝って、自然とスラッドに隠れてしまっていたのだ。

「父さん、誰？」

「まあ、いいじゃないか」

「……うん……」

ラミンは納得いかない顔をしたが、スラッドは気にすることなく二人を招き入れた。

「まあ、そこの椅子にでも座っていてくれ」

スラッドは、部屋の真ん中にある四角いテーブルを指した。テーブルには六脚の椅子があった。誠司と亜依は、それぞれ隣に座った。そして、誠司の向かいにスラッドが、亜依の向かいにラミンが座った。

「紹介しておこう、俺の息子のラミンだ」

ラミンは頭を下げた。

「俺は、椎崎誠司。で、こっちは」

「高尾亜依です」

そう言って、二人は頭を下げた。

「さて、さっきも言ったが、その耳飾りは俺がセースケにやったもんなんだ。あんた、それをどこで？」

スラッドは早速訊いた。

「これは、俺のじいちゃんから貰ったんです。そういえば、じいちゃんに昔、ひいじいちゃんか

ら貰ったもんだから大切にしろ、って言われたような……」

誠司は腕組みしながら考え込んだ。そこへ――

――コンコン！

と、ドアをノックする音がした。

「開いてるよ。勝手に入ってきてくれ」

スラッドがドアを見ずに言った。

「お邪魔します」

男女の声が同時に聞こえた。

――キィィィ！

ドアの音がして、一組の男女が姿を現した。

「僕たちが話そう」

そう言って入ってきたのは、富所史和と久門梨架だった。

「亜依、久しぶりね」

梨架は亜依に微笑みかけた。

「え……？ あ、それ……」

亜依は、梨架の胸のロケットを見つけた。

「そうだ、これを返さないかね」

梨架は首からロケットを取り、亜依に手渡した。亜依が手にした瞬間、懐中時計が光を発した

。

「これって……」

「f o r s t r e k i」

その様子を、スラッドとラミンは無言で見ている。

「座らせてもらっていいですか？」

和史が申し訳なさそうに言った。

「あ、どうぞ」

「では」

史和と梨架は椅子を移動させ腰を下ろした。長方形のテーブルの長い方に亜依と誠司、その向かいにスラッドとラミン、そして史和と梨架が短い方に席を並べて座った。

「さて、真実を知る時が来たみたいだな」

そう言って、テーブルに肘をついた。

「その前に亜依、ロケットの中を見てみなさい」

史和が優しい声で言った。亜依は、言われたとおりにした。

「あ……」

見て、亜依は驚いた。ロケットの中の写真が、亜依の記憶のものと違っていた。今まで消えていた両親の顔が戻っていた。そして、史和と梨架に目をやり、写真と見比べる。

「……お父さん……お母さん……？」

史和と梨架は無言で頷いた。

「このロケットと誠司君のピアスは、元々私たちの先祖、あなたたちから数えて、五代前の椎崎誠介さんと容子さんが、こちらのスラッドさんとそのお父さんのカリムさんから貰ったものなの」

「やっぱり、そうなのか……」

スラッドが頷く。

「ちょっと待って下さい。私たちって、もしかして俺と亜依は……」

梨架が頷いて、

「遠い親戚という事になります」

「……え？」

誠司は言葉を失った。亜依は無言のまま、両親の話を聞いていた。

「本来の目的は、亜依とあなたを会わせる事なの」

「俺と、亜依を……」

「昔、二つに分かれた *f o r s t r e k i* を出会わせる事。それは、誠介さんの力を最も強く受け継いだ誠司君、君の時代でなければならなかった」

「私たちは、その事を十五年前に聞かされ、ずっと二人を見守っていたの」

「そして、ついに二人は出会った。そして、秘められた能力を解放した」

「お父さん、お母さん、誠司さんは能力を解放したけど、あたしは……」

亜依が割って入る。

「亜依——」

史和が亜依を見て、

「——亜依の能力は目覚めているんだ。それは、亜依がそれを自分の能力だと気付いていないだけでね」

「でも……あたし、能力なんて……」

「亜依、あなたの能力は、時空を見る能力。先見の力、というものがあるけれど、それとは全く違うの。いいえ、それ以上の能力なの。亜依の力は、過去、現在、未来、全てを見る事ができる。今までも見ていたはずよ」

言われて亜依は、今まで見た夢の事を思い出し、頷いた。

「そして、誠司君」

史和が誠司を見る。

「君の、時空を渡る能力——自分が望む世界に行ける能力だが、これは、僕が知っている中では、椎崎誠介さんしか持っていなかった能力なんだ。いわば、最も使える者が少ない能力だ。その次に位置するのが、亜依の時空を見る能力。これは、椎崎容子さんが持っていた。わかるだろ？」

二人は、あの時の能力をそのまま受け継いでいるんだ」

「そんなに凄い能力だったんですか……」

誠司は、自分の両手を見ながら言った。

「元来、僕たち *h a r m o n i o* は自分で世界を決める事ができない。行き当たりばったりなんだ。だが、君の能力があれば最短で目的を達成できる」

「現に、あなたたちは、無駄なくここにやって来た。全ての始まりの、この街に」

誠司と亜依は黙っていた。

「さあ、亜依のロケットの石と誠司君のピアスの石を懐中時計に入れるんだ。その前に、家の外に出た方がいいな」

家の外に出、亜依と誠司は言われたとおりにした。

すると、時計の針が不規則に回りだした。

「ここから先は、誠司君、君の能力でなければ行く事ができない。亜依を頼んだよ」

亜依は、誠司の手を握った。誠司も頷いて、亜依の手を握り返した。

「僕たちは、ここで待っている。無事に戻ってきてくれよ。梨架、『時の口』を」

梨架は頷いて、『時の口』を操る能力を解放した。二人の前に『時の口』が現れる。

「行ってきます」

亜依は、笑顔で両親に手を振った。

「行こう、m o r t oを封印するために」

「はい」

二人は互いに頷いて、『時の口』に入った。

「行ってらっしゃい」

史和と梨架は、ずっと見ていた。ただ、スラッドとラミン——特にラミンは、なにがどうなっているのか、全くわからずにいた。

6 目の前にいてるやんか

上も下も右も左もない。二人はそんな世界を浮遊していた。

なにも見えない暗闇の中、二人はギュッと手を繋いでいた。決して離れないよう。過去からの絆を知った二人は、もう離れない、ずっと一緒にいたい、そう願った。

この世界に未練などなかった誠司だったが、今、護りたい人ができ、その気持ちは変化していた。

懐中時計を取り出すと、針が正回転したかと思えば逆回転したりと、時計としての機能はなかった。今まで時代が表示されていた部分も明滅するだけでなにも表示されない。

どうしようもない不安だけがそこにはあった。

「よう！」

そこに突然グビディが姿を現した。

「うわっ！」

「きゃあっ！」

それに驚き、二人は悲鳴をあげた。

「やっと、ここまで来たんやな。それにしても知らなんだわ。せやけど、なんでわいが知らんで、あの二人が知ってたんや？ まあ、ええか」

二人を無視して独り言のように話した。そして一息ついて二人を見た。

「さあ、あんさんらの仕事や。m o r t oを封印してもらおか」

「でも、そのm o r t oってのはどこにいるんだ？」

「目の前にいてるやんか」

言われて、誠司と亜依は凝視した。しかし、それらしいものは見えない。

「ここがそうなんや。この世界全体がm o r t oなんや」

「……………」

「……………」

二人は言葉を失った。

「さあ、今のあんさんたちなら出来るはずや。頼むで」

そう言って、グビディは消えた。

誠司と亜依は互いを見て頷いた。そして、懐中時計を二人で掲げた。

「世界を滅ぼさんとする者」

「とき時空の糸を喰らおうとする者」

誠司のあとに亜依が続く。言葉は自然と浮かんできた。

「ここに姿を現せ！」

二人が同時に叫んだ。すると、世界がグニャリと歪んだ。

暗闇が消えていく。そして、それは次第に形を成していく。同時に、暗闇だった世界に光が現れる。

暗闇が消え、現れたのは糸だった。『時空の糸』――時間を紡ぎ、歴史を編みあげるもの。そ

れがそこにはあった。

暗闇は球体へと姿を変えた。球体はフワフワと漂うように浮かんでいる。その球体から触手が伸びた。

触手が二人の持つ懐中時計をはじき飛ばす。

「あっ！」

亜依はそれを追う。

触手は亜依に狙いを定める。

亜依に当たる瞬間、誠司が飛び込んだ。

「うわっ」

触手は誠司の肩をかすめた。誠司は肩を押さえながら亜依を見た。

(よかった……)

誠司は、安堵のため息をついた。

亜依は懐中時計を取った。そして、それを掲げ、願った。

「消えて！」

しかし、懐中時計はなんの反応も示さなかった。

「どうして……」

亜依は涙を流した。

「……亜依……」

よろけながらも、誠司は亜依の所まで辿り着いた。

「亜依……二人で……」

誠司が懐中時計を持つ亜依の手を握った。

その時、触手が再び襲いかかった。が、二人に当たる瞬間、なにかに阻まれるように触手が砕けた。

「消えろ！」

「消えて！」

懐中時計を掲げ、二人は願った。

――石の呪いから逃れられない悲しい一族。それでも従おうとした、悲しくも心優しい姉妹。

――純粋な心を持ち、天使になりたいと願う少女。そして、それを支え、温かく見守る少年。

――護りたい人。

――大切な人。

この旅を通じて出会った人たちとの思い出が甦る。

全ての想いが、一つの意志となる。そして、二人の意思となる。

「世界を消させはしない！」

「みんなが生きる世界を！」

叫んで二人は、懐中時計をm o r t oに向け投げた。

m o r t oは触手を以てそれを払おうとするが、懐中時計から発せられた光により触手は消滅する。

そして、懐中時計はm o r t oの中心に命中した。
m o r t oは大きく膨張と収縮を繰り返す。
そして、それはやがて大きく膨らみ、消滅した。
その光を浴び、不思議と誠司の傷は癒えていた。
誠司と亜依は顔を見合わせ、笑った。

7 この石は世界を救う

「おかえり」

「おかえりなさい」

「ただいま」

亜依は両親に抱きついた。

「誠司君、ご苦労様」

「ーはい」

史和に言われ、少し照れながら言った。

「なるほどね……。ずっと昔、親父が言ってた、この石は世界を救う、ってのはこの事だったのか……」

スラッドは、父、カリムの言葉を思い出し、頷いた。相変わらずラミンだけはなにもわからないでいた。

「さあ、帰ろう。スラッドさん、お世話になりました」

そう言い、史和は誠司を見た。

「誠司君、君の能力でグビディのいる所まで我々を連れていってくれないか」

「わかりました」

誠司の返事と同時に、梨架が『時の口』を出現させた。

「さようなら」

「G ^ i s r e v i d o ! セージ、アイ、フミカズ、リカ！」

スラッドは力いっぱい手を振った。よくわからなかったが、ラミンも手を振った。四人は、クラスター親子に見送られグビディの所に向かった。

「おつかれさん」

グビディは四人を笑顔で迎えた。

「おつかれさん、じゃねえ！ 俺たち、もうちょっとで死ぬとこだったんだぞ！」

その笑顔を見て安心した誠司が叫ぶ。

「まあ、無事やったんやからええやんか。結果オーライってやつや」

グビディは、いつものおちゃらけた態度で返す。

「まあまあ」

そんな誠司を亜依がなだめる。

「それにしても、あんたら、なんでわいも知らなんだ事知ってたんや？」

グビディが史和と梨架に訊く。

「企業秘密」

「そうそう。教えられません」

「くう～……あんたら、わい以上やな」

グビディは悔しくて地団駄を踏む。

「まあ、とりあえず終わりや。元の世界に戻りや」

「やったー！」

それを聞いて、亜依と誠司は抱きあった。それを見て、

「お、おい、誠司君」

「いいじゃないですか」

「だが……」

史和は複雑な父親の表情を浮かべた。

「そうそう。一つ言っとかなあかん事があるんや」

四人はグビディを見た。

「現実の世界に戻ったら、この世界におった時間分進んどるから、注意しいや」

それを聞いて、亜依と誠司は目を丸くした。

「まあ、お疲れさんや。ほなな」

こうして、四人は元の世界に戻った。

9 俺が苦手なの知ってるだろ

四人は元の世界に戻ってきた。四人の目の前には、亜依の本当の家があった。

「ここがあたしの家……」

亜依はその家を見上げていった。

そこは、小さな庭がある一軒家だった。十五年という月日が経っていたが、亜依を預かっていた梨架の実妹、高尾雅恵がこっそりと亜依に内緒で手入れをしていたので、年月を感じさせない。

「誠司君、亜依が世話になったね」

「いえ、俺なんて……」

「誠司君、ありがとう」

誠司は照れくさそうに笑った。

「誠司さん、ありがとう」

「また、会えるよね」

亜依のお礼の言葉を聞いて、急に淋しくなった。

「ええ」

亜依は笑顔で頷いた。

「もちろんだ」

史和が言い、梨架は無言で頷いた。

「そうだ。訊きたかったんですが、お二人の能力ってなんだったんですか？」

誠司が思い出したように訊いた。

「そうだ。それ、あたしも訊きたい」

「まあ、隠すものでもないしな。僕の能力は、時空を辿る能力。誰かが時間を移動したあとを追う能力だ。この能力で、二人に出会ってからあとを追っていた」

「それって、ストーカー能力？」

亜依が、腫れ物を見るかのように父である史和を見た。

「そして、私の能力は『時の口』を操る能力。一度、あなたたちの前から『時の口』が消えた事があったでしょ？ それ、私がした事なの。ごめんなさいね」

「あれって、お母さんだったの？」

「でも、そのお蔭で俺は自分の能力を知る事ができたんだし。この能力があれば、『時の口』以外でも、歪みがあれば移動できるんだし」

「でも……」

両親の能力に納得がいかないのか、亜依は憤慨したままだった。

「じゃあ、俺はこの辺で。亜依、またな」

あまり長居をしない方がいいと考え、誠司が言った。

「誠司、また……」

憤慨していた亜依だったが、涙が出そうだった。

「亜依、泣かないでくれよ。俺が苦手なの知ってるだろ」

「ごめんなさい。でも……」

「じゃあ」

誠司はそのまま背を向け、手を挙げた。そして、姿を消した。

「お父さん、お母さん」

亜依は両親に優しく抱かれ、泣いた。

亜依は、富所亜依に戻り、本来の生活に戻った。

UNU FINO

わいの名前はグビディ。このRenkonto-Mondoの案内人や。今回は、わいの日常を教えたるでえ。

わいは、人間でいう所の妖精とか精霊とか、あるいは天使とかに近いんや。実際、Dioの命令.....命令っちゅうたら大袈裟やな。指令？ 指示？ まあ、そんなもんで行動してんのや。せやけど言いなりってわけでものうて、ちゃんと自分の意思で行動する事もあるんや。実際、お嬢ちゃんたちと出会ったのはわいの自由行動の範囲やからな。

ほんで、普段はなにをしてるのか気になるやろ？ なに、気にならん？ ちょっとは気にせえっちゅうんじゃ！ はあはあ.....。スマン、スマン。ちょっと興奮してもうた。普段は.....
...なあんもしとらん。ちょ、ちょっと帰らんといえや。冗談やって、冗談。ほんまは、harmonioの手助けや。harmonioはお嬢ちゃんたちだけやないんや。いっぱいおるんやで。その全員を見なあかんやから、大変や。

っちゅう事でわかってくれたか？ 遊んでるようで、めっちゃしんどいねんで。

さてと、お嬢ちゃんたちがどうしてるか見に行こか。

ほんなら、またな。

「よいしょっと」

椎崎誠司と高尾亜依は、『時の口』を通して空間を移動した。そして、辺りの景色をぐるりと見回して、

「ここって……俺が昔暮らしていた街じゃねえか」

そこは、紛れもなく誠司が暮らしていた星見野地区だった。

「星見野だったんですね。じゃあ、あたしの住んでいる美空野の近くですね」

「ふう～ん……」

誠司は懐かしさで、亜依の言葉はいまいち聞こえていなかった。

「さて、ここはいつなんだ？」

誠司は隣にいる亜依に訊いた。

「えっと……」

そう言って、亜依はリュックの中から懐中時計を出した。この懐中時計はリュックの中に入っていたもので、今いる世界にいる事ができる残り時間を表示し、さらに――これは最近発見したのだが、文字盤も蓋のように開き、そこに今いる世界の年代と月日とその世界の暦で表示されるのだ。

その懐中時計によると、今二人がいるのは西暦1994年8月30日であることがわかった。

「1994年……七年前か……」

それを聞いた誠司は、遠い目をして言った。

「どうしたんですか？」

亜依は、誠司の様子がいつもと違うので訊いた。

「ああ、なんだか懐かしくって……」

そう前置きして、

「この年は、俺のじいちゃんが死んだ年なんだ。じいちゃんが死んだのが8月17日だから、まだそんなに経ってないんだ。だから、なんかその時の気持ちを思い出してさ……ちょっと……」

誠司はそこで言葉を切った。いつもは一人で突っ走る感のある誠司だが、昔の事を語っている今の誠司は、いつもとは全くの別人だった。そんな誠司を見て、亜依も自分の事のように悲しくなってきた。

「おいおい、泣くなって。もう、七年前の事だし、このピアスを付けている限り、いつもじいちゃんは側にいてくれてるんだから」

今にも泣きそうな亜依を見て、女の子の涙が苦手な誠司は、なんとか亜依が泣かないように言った。

（つつく……一番泣きたいのは俺だろ～が。なのに、なんで俺がなだめなきゃいけないんだ？普通、逆じゃねえのか？）

そんな亜依をなだめているうちに、いつもの誠司に戻っていった。

「……うん。ごめんなさい」

誠司の努力が実ったのか、亜依はなんとか泣かずにすんだ。

「じいちゃんは確かに死んじゃったけどさ、ちゃんとこのピアスの中に入れて、ずっと見守っていてくれてるんだ」

誠司は左耳にしているピアスを見せた。そのピアスはよくあるリング状の物ではなく、緑色の丸い小さな石が付いているタイプの物だった。

「じいちゃんが死ぬ少し前に俺にくれたんだ。その時、ピアスの穴もあけてもらって、それ以来、ずっと……」

「どうしたんですか？」

「いや、ずっと付けていたんだけど、一度だけ無くした事があったんだ。確か夏休みの終わり頃だったような……」

誠司は少し考え込んで、

「あー！ 今日だ！ 今日なんだよ、その日」

「……」

誠司の叫び声に、亜依は言葉を失った。そして、誠司は自分の家のある方角目指して走り出した。

亜依は慌ててそれを追う。

「確かあの時、すっげえ泣いたんだ。泣いて泣いて……じいちゃんにもらった宝物を無くしちゃまったって。だから、そんな思いをさせたくないんだ」

「……」

亜依は追いかけるので精一杯だった。

誠司は、そんな亜依を気にする様子もなく、ひたすら走り続けた。

どのくらい走っただろう。亜依は疲れて歩いていた。少し前に見失ってから、ずっと一人で歩いている。

「……はあ、はあ……どこにいったんですかあ～」

亜依は、力なく言った。しかし、返事はない。

「はあ～」

歩き続けていれば会えるだろうと思いそうしているのだが、先程の全力疾走のせいでほとんど体力が残っていない。歩く事すら限界だった。

そんな時、亜依の目に飛び込んできたのは公園だった。助かったと思い、公園のベンチで休む事にした。

公園では、小学生くらいの子どもが数人、野球をして遊んでいた。最初は、特に気にも止めなかったのだが、その中の一人に目を奪われた。その子どもの左耳には、あのピアスがあったのだ。

「椎崎さん……」

それは、間違いなく七年前の椎崎誠司だった。

亜依は、じっと誠司を見ていた。

(かわいいな……)

亜依がそんな事を考えていたその時だった。休憩だろうか、子どもたちが亜依のいる隣のベンチに集まってきた。

「ふう～、疲れた……」

その中の一人がベンチの側の草むらに寝転がって言った。よく見れば、みんな汗だくだった。

(まあ、こんな暑い日にあれだけ動けば、ね)

亜依は自分の子どもでも見るかのようだった。

「ん？ 誠司、なんだよそれ」

そのグループのリーダーらしい子どもが、誠司のピアスを見つけた。

「なあ、それ見せてくれよ」

「イヤだ。これは大切な物なんだ」

「いいじゃんか、ちょっとくらい」

その子が誠司の耳に手を伸ばす。

「イヤだ！」

誠司はその手を必死で振り払う。

「ちょっと押さえとけ」

周りの子に言う。周りの子たちは、一瞬ビクンと震える。

「でもさ、かっちゃん……」

「うっせえ、いいから押さえろ」

かっちゃん――克広にそう言われた周りの子たちは、恐怖には勝てずそれに従う。

「ちょっと、やめなさい！」

そのやりとりを見兼ねた亜依は、それを止めに行く。しかし、

「うっせえ！」

「きゃっ」

亜依ははじき飛ばされてしまった。

「さてと……」

克広はそう言って、誠司のピアスを取ってしまった。

「お前、こんなの付けてるんだ」

克広はピアスを太陽にかざした。

「なあ、しばらく貸してくれよ」

「イヤだ！」

そう叫ぶと、誠司は押さええていた手を振り払い、克広に突進した。

「うわっ」

思いも寄らない事に、克広は後ろに倒れた。その時、克広は誠司のピアスを放してしまった。そして、克広の手から離れたピアスは、草むらの中に落ちた。

「お、俺のせいじゃないからな。お前が突っ込んでくるのが悪いんだからな」

そう言って、克広はその場から逃げた。他の子どもたちも気まずいのか、一緒に帰ってしま

った。

「ちくしょー！　ちくしょー！」

誠司はピアスを無くした自分が赦せなかった。誠司は、その場に泣き崩れた。

「一緒に探そ、ね」

亜依は、そんな誠司の肩に優しく手を置いた。

「……え？」

誠司は顔を上げて亜依を見た。

「宝物なんでしょ？　だったら探さなきゃ」

「うん」

亜依と誠司は一緒に草むらを探した。しかし、小さいうえに緑色という事もあってか、なかなか見つからない。

「見つからないね」

「俺、諦めないよ。絶対見つけるんだ。だって、宝物だから」

「うん、がんばろ」

そんな二人の所に、十七歳の誠司がやってきた。

「全部思い出した。あの時、克広のやつにピアスを取られて、そして、それを取り返そうとしたら草むらに……そしたらみんな帰っちゃって、泣いたんだ。その時……あれは亜依ちゃんだったんだ……」

誠司は公園の入口で見守っていた。

「やっぱ、ここで行ったらマズイよな……」

誠司は、手伝いたい衝動を必死で押さえていた。

「あった！」

誠司はついにピアスを見つけた。

「あったよ」

誠司はピアスを亜依に見せた。

「よかったね」

亜依は笑顔で応えた。

(ありがとう、亜依ちゃん)

誠司は心の中で礼を言った。

「ありがとう、お姉ちゃん、バイバイ」

そう言って、誠司は手を振って帰っていった。

「うん、バイバイ」

亜依も手を振って応えた。

「アリガトな」

過去の誠司がいなくなったのを見計らって、十七歳の誠司がやってきた。

「し、椎崎さん……」

亜依は幽霊でも見たかの様に驚いた。

「ずっと見てたんですか？」

「ああ」

「だったら……」

「それはマズイ」

亜依の言葉を止める。

「同じ時間に同じ人物が二人いるのはマズイ。そうだろ？」

「……はい」

そう言われて亜依も納得した。

「とにかくアリガト」

誠司は少し照れて言った。

「はい」

誠司は亜依の満面の笑みを見て、さらに照れた。

「ここにはなにもないし、次の世界に行こうか」

そう言って、さっさと歩き出した。

「待ってください」

亜依は慌てて追いかける。

そして二人は『時の口』を見つけ、別の世界へと向かった。

それは、一見なにもなかった様に思えた。しかし、それこそが、二人が出会うきっかけとなった出来事だった。そう、この事がなければ、今、この二人と一緒に旅をする事はなかったのだ。

お父さんとお母さんがいなくなって、どのくらい経つんだろう？ 全然わかんない。

紅祐君に話しながら考えたけど、よくわかんない。

まあ、それも仕方ないか。だって、その時あたしは一歳かそれくらいだったもんね……。覚えてる方がすごいよね。

お父さんとお母さんがいなくなってから、お母さんの妹の高尾（旧姓、久門）雅恵さんの娘として育ててもらってきたんだよね……。どうも戸籍上では、養女って事になってるみたい。

その時から、あたしは本名の富所亜依って名前を封印しちゃったんだっけ。

だいたい、その本名を知らされたのが小学校に入った頃だったかな。あたしがロケットを見つけて、その時、雅恵お母さんが教えてくれたんだって。その写真に写っているのがあたしの本当のお父さんとお母さんで、あたしの本当の名前が富所亜依だって。

ショックだったな……。正直。急に、この人が本当の両親なの、なんて言われたんだもんね……。あれは、幼心にもショックだった。今までお父さん、お母さんって呼んでた人が実はそうじゃなかったんだもん。

それにしても、あたしの本当のお父さんとお母さんはどこに行っちゃったんだろう？

でも、もし街中で偶然会ったとしても、きっとわからないだろうな、あたしも、お父さんとお母さんも。

どんな声なんだろう？ 会ってみたいな……。

あ、涙が出そう。ダメだな、あたし。もっと強く……強くならなくっちゃ……。でないと……。

。

「亜依ちゃん、きっと会えるよ。いや、絶対に会うんだ。一緒に捜そうよ、ね」

優しいんだ、椎崎さん。つい甘えたくなっちゃう。ホント、泣けちゃうよ……。

「椎崎さん……」

「ゴメン。俺がこんな話したから……」

ううん。紅祐君が悪いんじゃないの。ちょっと、羨ましいけど。お父さんとお母さんがどこにいるかわかってるだけでも、あたしよりは……。

「紅祐が悪いわけじゃない。俺があんな質問をしたから悪いんだ。亜依ちゃんの事、知ってたのに……ゴメン」

「ううん、いいの。あたしが自分で話したんだから。泣いちゃって、ごめんなさい」

ホントに、ごめんなさい。ダメだよ、こんなんじゃ。

あっ、あたしったら……。

「チェッ、もうちょっとこのままだよ良かったな……」

もう、恥ずかしくなるじゃない。

でも……どこか好きになりそうな気がするんだよね、椎崎さんって。

富所史和は小高い丘の上にあった。そこからは、真っ白な灯台が見え、その先には海が見える。史和はそこに座り、スケッチブックに筆を走らせていた。

史和は絵が上手かった。それは、左半身の感覚と引き替えに得た才能だった。そう、彼の左半身は動きはするが、触覚がない。その為、右脳の芸術的分野がその部分を侵食し、絵に関する才能が飛躍的に突出することとなった。少し変わってはいるが、一種のサヴァン症候群だった。

しかし彼は、この景色を描いてはいなかった。

「ねえ、なにを描いてるの？」

久門梨架がそれを覗き込む。

彼女は、史和が目の前の風景を描いているとは限らない事を知っていた。いや、長年一緒にいて知ったのだ。

「誰？」

その絵を見て、梨架は首を傾げた。そこには、ロッキング・チェアに座っている髪の長い少女が描かれていた。

「さあ？ 僕にもわからない」

「.....わからないって？」

「なんとなく浮かんできたんだ」

いつもこんな感じだった。

「この子って、亜依？」

十年間会っていない、娘の亜依の成長を想像したものかと思いたくて、毎回訊く。

「違うと思う」

「そうよね.....」

こんな会話が幾度となく繰り返されてきた。それというのも、これが初めてではなかったのだ。史和は、過去に何度もこの少女の絵を描いていた。

「僕も、この子が誰なのか知りたいと思うんだ。でも、僕は見た事もない。ただ、頭に浮かんで来るんだ」

史和なりに苦しんでいた。梨架はそんな史和の肩を優しく抱いた。

史和は風景画を主に描いている。梨架以外にはほとんど見せない。しかし、風景画だけでなく肖像画でも抽象画でもなんでも、ジャンルは問わずに常に一定水準以上のものを描く。

そんな彼がふと描いてしまうのが、この少女の絵だった。しかも、毎回同じ様な構図の絵なのだ。

――レースのカーテンが揺らいでいる窓辺で、ロッキング・チェアに腰掛けた少女が本を読んでいる。

多少、動きが違う時もあるが、ほとんど同じだった。

梨架はもちろんの事、描いている史和もその少女に見覚えはなかった。

「で、この風景はどう？」

気分を変えようと梨架が訊く。

「バッチリ」

そう言い、スケッチブックのページをめくった。そこには、目の前の風景が写真で撮ったかのように描かれている。

史和は、行く先々で絵を描いてきた。旅行者が旅先で記念に写真を撮るように、史和はそれをスケッチブックに記してきたのだ。

「さてと」

少女の絵を描き終え、史和はその場を立った。

涼しい風が吹く。

「これからどうする？」

「そうねえ……海岸に行かない？」

「了解」

二人は、海岸を目指して駆け出した。

0 相変わらずですこと

その洋館は高い塀で囲まれていた。その敷地は広く、塀の周りを一周すると十分はかかるだろう。塀の上から突き出た木がつくる蔭が心地いい。

正面の門から中を覗くと、奥にある建物まで大きな道が続いている。建物は敷地と比べるとそれほど大きくない。むしろ小さい。その道に沿って花壇が造られ、四季折々の花がそれを飾っている。その周りは大半が芝生で、その芝生の海に浮かぶ小島のように花壇が点々とある。それらは全て、きちんと手入れされている。

正門の前に、一組の若い夫婦が立っていた。

青年は一礼してから門を開け、中に入った。その三步あとを女性が続く。青年と女性は、ゆっくりと時間をかけ、建物を目指して歩いた。時折、花壇に目をやり、その美しさを堪能しながら……。

普段の五倍ほどの時間をかけ建物にたどり着くと、青年はゆっくりと扉をノックした。コンコン、という乾いた音が響いた。しばらくすると、ギィィ！ と錆びたような低いうな唸り声をあげ

扉が内に開いた。

「ようこそ、椎崎様」

扉の蔭から、眼鏡を掛けた優しい顔の老人が姿を現した。この屋敷で働く執事、橋田一郎だ。橋田は深々と頭を下げ、客人である椎崎誠介、容子夫妻を招き入れた。

中に入ると、まず大きな階段が目に入った。玄関の正面にあるその大きな階段を登り切った所に、大きな肖像画が飾ってある。この館の主、吉田武暁氏の絵だ。そこで左右に廊下が分かれている。

玄関に目を戻すと、広い玄関ホールの左右に、立派な甲冑が飾られている。さらにその壁には、いくつか風景画が飾られている。

「どうぞ、こちらです」

そう言い、橋田は二人を先導し、階段を上り始めた。上りきった突き当たりを右に折れ、さらに進んだ。廊下の両端に二つずつ、計四つの部屋があった。部屋数が少ないのは、その一つ一つが大きいからだ。橋田は、右手前の部屋の前で立ち止まり、一礼してから扉をノックした。

「旦那様、椎崎様がお見えでございます」

しばらくして、

「通せ」

と、低い声が返ってきた。

「承知しました。失礼いたします」

橋田が言い、ゆっくりと扉を押した。開けると扉の側に立ち、深々と頭を下げた。

「どうぞ」

そう言われ、椎崎夫妻は部屋の中に入った。

部屋の中は調度品の類はほとんどなく、どちらかといえば殺風景に思えた。唯一あるとすれば、入って左手にあるコレクションボトルを飾るための棚だけだった。

やはり、ここにも絵画が飾ってある。そこに描かれているものは普通の風景画なのだが、どこか闇にでも吸い込まれそうな不気味さを漂わせていた。それは、部屋全体が薄暗い事も手伝っているのだろうが……。

この部屋の光源は、扉を入れて正面にある窓だけだった。その窓からの光を背に受け、一人の男が椅子にどっしりと腰を下ろしていた。男の前にある机には、書類やら小説がきちんとせいとん整頓されて積まれている。

「失礼いたします」

そう言い、橋田が一礼して部屋を出た。

「今日は、なんの用ですか？」

橋田が出ていったのを確認し、誠介が言った。

「相変わらず、気の早い」

吉田武暁は自慢の口髭を撫でながら、鼻で笑うように言う。

「私だって、あなたにそう付き合ってる暇はないんです」

誠介は机に勢いよく手を置き、大声で言った。その声は、屋敷中に聞こえるのではないかというものだった。それと同時に机を叩いた音も、その声に負けないほどだった。

容子はその様子を少し離れて静観しているだけだった。誠介の大声にさえピクリとも動かなかった。

「まあ、落ち着いて」

吉田武暁もすっかり慣れており、全く動揺しない。

「今回のものは、本当に君たちに見てもらいたいんだ」

そう言い席を立ち、コレクションボトルを飾っている棚に近づいた。

「これなんだが……」

棚の引き出しを開け、一巻きの紙を差し出した。

「これは……」

そう驚いたのは、容子の方だった。その声に、誠介が容子を見た。容子はただ頷くだけだった。しかし、それで全てを悟ったのか誠介は、

「それは誰にも見せてはなりません。門外不出にして下さい。誰の手にも触れぬよう、厳重にお願いします」

そう言った。

「わかった。言われた通りにしよう。これは、このまま金庫にでも入れて埋める事にする」

「それがいいでしょう。鍵は複数付けて下さい。その一つを私がお預かりします」

吉田武暁は頷き、すぐに橋田を呼び、大ききの違う金庫をいくつか用意するように言った。

橋田が用意した金庫は全部で五つだった。それらの金庫は、当時はもちろんの事、現在でも鍵を使わずにこじ開ける事は難しいものだった。

吉田武暁は、橋田に命じ、それらを庭にある洋風の家には釣合の松の木の所まで運ばせた。さらに、橋田に穴まで掘らせた。

「この事は口外無用です」

誠介は念を押すように言った。そして、一番小さい金庫に紙を入れ、その金庫を一回り大きな金庫に、さらにそれを一回り大きな金庫にと、まるでマトリョーシカのようにして入れた。それを埋め終えると、

「先程、あなたは鍵を一つだけ預かると言ったが、よければ全てを預かって欲しい。そして、それを誰の目も届かないように隠して欲しい。頼めないだろうか」

「いいでしょう。あれはある人のための物。それ以外の者が手にしてはならぬ物。その者だけが鍵を揃えられるようにしておきましょう」

吉田武暁は、鍵を全て誠介に渡した。

「あなたは、あれがなにか知っているのか？」

「ええ。あれは地図です」

「地図？」

予想もしなかった意外な答えに、吉田武暁は間の抜けた声を出した。

「もちろん、ただの地図じゃありません。もっとも、ただの野党が手にしてもなんの価値もないものですけどね。そういった者が手にしても、ただの紙と同じでしょうから。ある者が手にして初めて意味のある物なんです。ただ、簡単に手に入ってしまったら面白くない。これはそのためなんです」

「相変わらずですこと」

自慢気にそう言った誠介を見て、容子はクスクスと口元を押さえて上品に笑った。

「まあ、よくわからんが……とにかく、今日のご苦労だった」

「次回も、こんな物だといいますが。あっ、でも、こんな物ばかりあると大変だ。程々にしないと」

誠介は子どものように笑った。

吉田邸をあとにした誠介と容子は、h a r m o n i oの力を使い、一つを残し、様々な世界に鍵をばらまいた。

＊

その日、富所梨架は久しぶりの街を歩いていた。h a r m o n i oとして違う世界を転々とした十五年間。その時間は、記憶の中の街をすっかり変貌させていた。

「変わったものね～。十五年って、やっぱり長いわ……。全然違う。そりゃ、私もおばさんになるわけだ」

梨架は、ショーウィンドウに映る自分を見て呟いた。そして再び街を見渡した。その様子は、初めての街に来たかのようなようだった。

「ねえ、梨架？ 梨架でしょ？」

すれ違った女性に声をかけられた。

「えっと……」

梨架は記憶の抽斗を開けていった。しかし、それらしいものは見つからない。

「忘れたの？ わたしよ、わたし。秋子、柊秋子」

その女性は、自分の顔を指しながら言った。

「ひいらぎ……あきこ……」

一瞬止まって、

「あー！ 秋子！」

その大声に、街行く人が止まり、視線が二人に集中した。

「ちょっと、梨架、恥ずかしいじゃない」

顔を赤らめながら、秋子は梨架の手を取り近くの喫茶店に入った。

「カプチーノとトマトジュース」

道路に面したテーブルに着くと、秋子が注文した。そして、梨架をじっと見た。

「最近、全然連絡なかったけど、どうしてたの？」

その質問に梨架はギクツとした。もちろん、本当の事を話すわけにもいかない。

「ちょっと、主人の都合で海外に行ったの」

梨架はそう答えた。

「そうなんだ……。ご主人の仕事ってなんなの？ どこかの会社のエリート？」

秋子は興味津々といった感じで、楽しそうに訊いた。

「そんなんじゃないの。主人は絵を描いてるの」

「絵？」

「そう。主に風景画を、ね。名前は売れてないけど、結構いい絵を描くんだ」

梨架は、夢見る少女のように言った。その言葉は、まんざら嘘ではなかった。夫である富所史和は、harmonioとして立ち寄った先々で、絵を描き続けていた。左半身の障害の代償として得た才能だった。

「そうなんだ……。一度見てみたいな」

「ええ、喜んで。そういう秋子は？」

今度は逆に質問した。その時、注文したものが運ばれてきた。秋子は、カプチーノを一口飲んだ。

「三年前だったかな……。主人が亡くなって……。今は、娘二人と暮らしてる」

秋子は遠くを見るような目で言った。

「ごめんなさい」

梨架は自分がした質問を後悔した。

「いいの。もう過ぎちゃった事だし。それよりさ、ちゃんと持ってる？」

そう言い、鍵を取り出した。そして梨架も取り出し、

「もちろん。これは私たちのお守り。そして――」

「――友情の証」

二人が同時に言った。

(そして、あの子たちにとっても特別なもの)

しかし、それは口にはしなかった。

「思い出すな……」

梨架が当時の事を思い出して笑みを浮かべる。

「そうそう、あの頃は若かったよね……今でも若いけど」

「秋子も私も。……そういえば、あの伝統って、まだあるの？」

「あるみたい。チラッとだけど、娘の夏菜が例の鍵を持ってるのを見たから」

「そうなんだ、まだ……」

二人の表情が暗くなった。

「女の子って、好きじゃない、そういうの。だから、続くんだろうね……」

「私たちの時も楽しかったしね」

「そうそう。結構ムキになるんだよね」

「秋子、頑固だったから」

「それは、梨架も同じでしょ」

二人は楽しく笑っていた。

しばらく雑談をしたあと、二人は店を出た。

「じゃあね」

「また、ゆっくり話しましょう。それと、ちゃんと連絡ちょうだいよ」

「わかりましたってば」

「ホント？ また、音信不通なんていやだからね」

「はいはい」

「じゃあ」

秋子は手を振って別れた。

(音信不通はいや、か……大丈夫よね、もう……)

そう思いながら、梨架は小さな透明の石が付いたキーホルダーのにぶら下がっている鍵を見た

。

*

椎崎誠司は誰もいないマンションの一室にいた。誠司はここに一人で暮らしていた。両親はそれぞれに愛人をつくり、離婚した。それが半年前。両親の都合でわざわざ引っ越したというのに……。前の学校に戻ってもよかったのだろうが、負けたような気がしてそうはしなかった。

ちなみに、誠司は鬼無里村を出る時電話をかけたが、あれは演技だった。

第一、誠司の部屋には電話がない。電話が嫌いなのだ。電話は相手の顔が見えない。だから、言葉の真偽がわからない。そこが嫌いだった。なので、電話をあまりかけないし、そのためかかってもこない。携帯電話を常に持ち歩いて、仕事でもないのに電話をかけ、もしくはメールを打ち、くだらない会話しかしない同世代の連中が嫌いだった。

誠司は全てを憎んでいた。こんな世界なんてなくなればいい、あれは本気だった。

しかし、今は違う。護りたい人ができた。

旅から帰ってきた時、戻ろうかとも思った。しかし、それはできなかった。負けだとかそんなものではなかった。今の自分の居場所はここだと思ったからだった。

かといって、あの笑顔が頭から離れるわけもない。ベッドに横になり天井を見上げるとよみがえ甦る。

「そうだ」

誠司は起きあがった。そして、リュックを背負うと部屋を出ていった。

五時間後、誠司は列車の中にいた。車窓の向こうには畑が広がっている。都会らしい雰囲気は全くなかった。

「もうすぐだな」

誠司は、代々の墓がある詩稀村――いや、昔そう呼ばれていた場所といった方がいい――にある先祖の墓を目指していた。三年前、詩稀村は燃えてなくなったのだ。谷間にあったのでダムにする計画があったのだが、その計画はまだ実行されていない。

駅前の花屋で花束を購入した。墓前に供えるのだと言うと、一緒に線香とマッチもくれた。その花束を見ながら、ゆっくりとその場所に向かって歩いていた。

誠司は、村の入り口である木で造られた朱色の鳥居の前に立った。その鳥居は年月によってほとんど朽ち果てていたが、それでもなんとか原形を留めている。誠司はその鳥居をくぐった。すると、目の前に地蔵の列が並んでいた。これらの地蔵は、流行病で亡くなった多くの村人を弔うためだと云われている。しかし、百メートル近くも並んでいれば、決して気分のいいものではない。村人も恐れていたらしいが、この道が村と外の世界との唯一の道だったため、気乗りしないながらも仕方なかった。

誠司も、昔に一度だけ来た事があったが、その時に初めてこの光景を目の当たりにし、それ以来近付く事さえなかった。しかし、今は無性にここを訪れたい気持ちになっていた。なにかがそうさせていた。

誠司は、恐る恐るながらその地蔵の道を進んだ。まっすぐに進めば集落があった場所なのだが、誠司が目指す墓はその道からはずれた場所にあった。

だいたい、誠司の先祖はこの村に住んでいたわけでもなんでもない。誠司が昔、祖父に訊い所、祖父の曾祖父、椎崎誠介がこの場所を気に入ったためらしい。たったそれだけの理由だと、誠司は聞かされている。しかし、真実は別にあるのだが、誠司はそれを知らない。

「しかし、遠いよな～。確かに神秘的で面白そうな村だけど、やっぱ面倒だよな～」

誠司は愚痴りながらも歩き続ける。しかし、道などあるわけもなく、道なき道を草をかき分けて進むしかない。

しばらく進むと、目的の場所が見えてきた。

「うわっ、なんだこれ？」

誠司は目の前の様子に驚いた。椎崎家の墓は十年近くそのまま放置されている。もちろん、誰も来ていない。来るはずもないのだ。なぜなら、この場所を知っている人間で生きているのは、誠司と誠司の両親だけなのだ。誠司の両親は、そんな事をするような人間ではない。過去に一度来た時も、誠司の祖父にしつこく言われて、渋々来たのだから。なのに、目の前の墓の周りは草一本生えていない綺麗な状態だった。

(誰か、掃除したのか？ いや、違う。こんなトコ、誰も来るはずがない。それになんだろう、この変な感じは……)

誠司は墓石に近づいていった。墓石の周りは、まるで時間が止まったようだった。いや、実際に進んでいなかった。

「……虫が止まってる」

墓石の近くに、数匹の甲虫が空中に静止していた。人が来ない場所でよかった、と思った。人がここに来れば、きっと虫のようになってしまおうと想像できた。

(でも、どうして俺は大丈夫なんだ？)

一瞬考えたが、すぐに結論が出た。

(俺がharmoniだから？ それに、誠介さんの能力を受け継いでいるからか？)

だが、それが正解とは限らない。その疑問に正解を与えてくれる者はいなかった。

花と線香の束を墓石の前に置いた。そして、目を閉じ、手を合わせた。

(ありがとうございます)

この場所に眠っている自分の先祖、椎崎誠介と容子に礼を言った。

「でも……このピアス、石がなくなっちゃったな……」

誠司は、石がなくなった左耳のピアスを触った。石がないそのピアスは、なんとも物淋しかった。

誠司は墓の周りを一周した。その時、墓石の後ろに誠介と容子の名前を見つけた。誠司はそれを指でなぞった。

「俺と亜依って、この二人の生まれ変わりなのかな……」

そう思うと、なんだか不思議な感じがした。本当に生まれ変わりなのだとする、昔の自分がこの中で眠っているのだ。そして、それを自分が見ている。

生まれ変わりなんて信じていなかったが、今なら信じる事ができた。

「なんだ？」

その時、誠司は墓石に埋め込まれている小さな石を見つけた。誠司がその石に触れると、石は光を発した。

「な、なんだ？」

誠司は数歩下がった。

その石は光を発したまま墓石から離れ、空中に浮かんだ。そして、その石は誠司に近づき、左耳のピアスに収まった。

「え？ どうなって……」

状況が飲み込めない誠司はただ、うろたえるばかりだった。

石がピアスに収まった瞬間、止まっていた時間が動き出した。

＊

富所亜依は自分の部屋の机に頬杖をついていた。

「誠司さん……」

しばらくは、引っ越しで忙しく、旅の事を思い出す暇もなかったのだが、一段落がつくと無性に思い出される。

机から移動し、窓辺に立つ。そして、空を見た。空はどんよりと曇っていた。

「会いたいな……」

どうしてだろう？ すぐに会いに行けばいいのに、それができない。特に用事もないのに。なにも亜依を引き止めるものはない。しかし、亜依は会えずにいた。その理由は、亜依にも、誰にもわからない。

「あっ……」

自然と、亜依の目から涙が溢れる。

「ダメなのに。泣いちゃダメなのに……」

そう思うほどに、涙は溢れてくる。

「ダメだな、あたし……」

亜依は、涙が流れないように上を向いた。しかし、止まらない。

ぽつりぽつりと、雨が降り出した。次第に雨足は強くなり、どしゃ降りになった。

雨が大地を潤していく。しかし、亜依の心が潤される事はなかった。

亜依はただ、誠司の事を想っていた。

＊

窓から吹き込む爽やかな風が、白いレースのカーテンを揺らしていた。優しい光が差し込んでいる。その場所で、ロッキング・チェアに腰掛けた少女が本を読んでいた。その本のタイトルは――『白紙という名の物語』。しかし、その本にはなにも書かれていない。これから書き込まれるのだ。

「どんな話にしようかしら」

少女は本を見ながら呟いた。

「どうすればいいと思う？」

少女の手には、あの懐中時計があった。少女はそれに話しかけているのだ。

「どうしようか？」

少女は首を傾げた。

「そうだ！」

悩みが解決されたその少女は、嬉しそうに笑った。

*

「ねえ、どうするの？」

一人の少女が眼鏡を外しながら言った。

「どうする、ったって、な……」

少年が言う。

「あの二人、かなり手強いからね……」

少女はコンタクトレンズをつけながら言う。

「おい、どうしてコンタクトにするんだ？」

「だって、こっちの方が可愛いじゃない」

少女は、当然でしょ、といった態度で言う。

「自分で言うか、普通」

「いいでしょ」

「お前って、ホント言い方が可愛くないな」

「あら、それって、見た目は可愛いって事？」

少女が意地悪そうに笑う。

「ま、まあ、それなりに可愛いんじゃないか」

少年はドギマギしながら答える。

「照れるな、照れるな」

完全に少女のペースだった。

「……照れてなんかない」

誰が見ても強がりだった。

「ちゃんとやりなさいよ、舜平」

「てめっ、本名で呼ぶな」

「あら、ごめんなさい」

わざとらしく笑う。

「じゃあ、ちゃんとやりなさいよ、ヨハネス」

「わかってるよ、ジョセフィーヌ」

ヨハネスはそっぽ向いて答えた。

1 お母さんの好きなもの知らないんじゃ.....

新学年の朝、亜依は爽やかな朝日で目を覚ました。柔らかい春の日差しが窓から差し込む。夢に誠司が出てきた。最近、よく出てくる。亜依はそれだけで幸せだった。

ベッドから起き、カーテンを開ける。窓を開けると、まだ冷たい空気が流れ込む。その冷たさが目を完全に覚ましてくれる。だが、亜依は思う。誠司との事だけは覚めないで、と。

大きく伸びをして、深呼吸をする。新鮮な空気が身体に取り込まれる。全てが浄化されるかのようだ。

パジャマのまま階段を下り、キッチンに向かう。キッチンでは、母の梨架が朝食の準備をしていた。

「なにか手伝おうか？」

「いいわよ、先に着替えたらどう？」

「食べてからでいいよ。先に着替えて、汚しちゃったらイヤでしょ」

「それもそうね」

「おふあよう」

そこに、大きなあくびをしながら父の史和がやって来た。

「また徹夜だったの？」

「ああ。コーヒー、もらえないか」

「亜依、お願い」

「はい」

亜依はコーヒーをカップに注ぐ。史和はそれを一気に飲み干す。

帰ってきてから、史和は連日連夜キャンバスに向かっている。描いているのは、今までの世界の風景だった。今まで描いたスケッチ、そして記憶の中の風景を全て描こうとしているのだ。

「今日から新学期か.....」

史和は感慨深く言う。

「でも、不思議な感じだな。小学生の亜依も、中学生の亜依も知らないんだからな。いきなり高校生だからな.....。不思議なもんだ」

「そういえば、そうね。でも、いいじゃない。一緒にいれるんだから」

「まあな」

その会話を聞いて、亜依は、自分は幸せだと思った。

亜依も、自分のカップにコーヒーを注ぐ。そして、梨架のカップには紅茶を淹れた。丁度その時、テーブルにハム・エッグとトーストが運ばれてきた。

「いただきます」

全員が席に着き、そろって朝食を食べる。当たり前の光景なのだろうが、今まではそれがしたくてもできなかった。食事というのは、ただ食べ物を口に入れるだけでなく、思い出も一緒に食べるものなのだ。

最近の会話は、もっぱら旅の事だ。亜依はほんの十日程度だったが、梨架と史和は十五年。話

が尽きる事はなかった。亜依は、その話をいつも楽しそうに聴いた。そして、自分の旅の事も話した。

「あ、そろそろ準備しないと。ごちそうさま」

楽しい時間というものは、あっという間に流れる。亜依は食器を片付け、洗面所に行き、洗顔、整髪し、部屋に行き制服に着替える。制服を着るのも久しぶりだ。まるで、何年も着ていなかったかのような気分だ。

鏡を見て、おかしな所がないかチェックする。

「よし、大丈夫」

亜依は満足げに頷く。

亜依が通っている星風高校の制服は紺のブレザーで、男子はネクタイ、女子はリボンを首元に結ぶ事になっている。それらの色は学年毎に違っており、亜依の学年は緑色、三年生は赤、一年生は青という具合だ。来年は一年生が赤、二年生が青、そして三年生が緑という具合にローテーションされていく。

「ってきます」

亜依は元気に飛び出していった。

「そういえば、初めてだな、亜依の制服姿」

「そうね」

初めて見る娘の制服姿。二人は、感動に似た感情を抱いていた。

*

亜依は、電車で通学している。最寄り駅――美空野駅から三つ目、時間にして約十五分にある。さらにそこからバスに乗って五分――たまに歩いていく事もある――そして、学校近くのバス停から三分ほどかけて坂を上った所にある。

久しぶりの電車に乗ると、すぐに反対側のドアの所まで移動した。星風高校の最寄り駅――楓ヶ丘駅はこちらのドアが開くのだ。なので亜依は、席が空いていてもいつもドアの所に立つ。

電車が走り出す。

「あ、そういえば……」

亜依が呟いた。美空野駅の次の駅は星見野駅なのだ。星見野といえば、誠司が昔住んでいた所だ。亜依にとって、今までとは全く印象の違う、そして大事な場所の一つだった。

(どうしてるのかな……)

窓越しの風景を見ながら思った。

次第に星見野駅が近づいてくる。亜依は、どうしてだか誠司がひょっこり姿を現すのではないかと思っていた。しかし、それはなかった。

電車は星見野駅を出発する。

次の駅――尻駅で桜と達之が乗ってきた。いつもの光景に、安心するものを感じた。

「亜依ちゃん、久しぶり」

桜が大きな声で言い、抱きつく。

「ちょ、ちょっと……」

亜依は顔を真っ赤にして言う。その様子に桜が周りを見ると、視線が亜依と桜に集中していた。

「ゴメン」

それに気付いた桜は、顔の前に手を合わせて謝った。

「そうだ。あのあと、ちゃんとアルプス登ったの？」

「うん、小槍に行ったけど、なにもなかったね。それに、アルペン踊りって、いまだにわからないし」

「ホント、大変だった。桜、もう無茶な事言い出すなよ」

達之はその時の事を思い出したのか、疲れた顔をしてため息をついた。

そんな会話をしているうちに、電車は楓ヶ丘に着いた。電車を降りると、始業まではまだ時間があった。そこで、三人は学校まで歩いていく事にした。

「でさ、亜依ってあの人とどういう関係？」

歩き出した途端、桜は核心をついた質問をした。

「おい、桜……誠司は……」

達之は桜をたしなめるように言う。

「誠司さんは、あたしの大切な人、かな」

亜依は恥ずかしそうにうつむきながら、そう言った。

「大切な人、ね……。ちょっと意地悪してやろうと思ったんだけど、まさか直球で言うとは……。亜依、変わったね」

桜は淋しそうに言った。その言葉には、どこか羨ましいという感情が込められていた。自分だけが置いていかれたような、そんな淋しさが……。

「ほう……、亜依ちゃんと誠司がそんな関係になってるとは……驚いた……」

「まあ、まぐれでもあたしより先に事件を解決した人だし、たっちゃんよりも頼りになりそうだし……お似合いかもね」

桜は「まぐれ」をやけに強調した。推理には自信があった桜は、先に真相を暴かれたのが相当悔しかったようだ。

「誠司さんのお蔭で、また家族三人で暮らせるようになったし。絶対、あたし一人だったら無理だった。やっぱり誠司さんがいたから……」

「あ～あ、ノロケか……」

「桜が振ったんだろ」

「そうだった」

桜はペロッと舌を出した。

「そうそう。亜依、やっと両親が帰ってきたんだよね」

「うん」

「よかったじゃない。それにしても、娘を置いて、十五年間も絵を描くためにあちこち行ってた

なんてね……すごいよ」

桜が頷きながら言う。

「それって、褒めてるのか、けなしてるのか、どっちなんだ？」

「両方」

「あっそ」

「でも、帰ってきてくれたし……それだけでいいんだ。元気でいてくれただけで。過去なんて関係ない。今、一緒にいるんだもん。それでいいの」

「前向きですこと。亜依、絶対強くなったよ」

桜は亜依の肩をポンポンと叩いた。

それからは無言が続いた。なんとなく会話が尽きてしまったのだ。

それから十分ほどが経った頃、ようやく学校近くのバス停に着いた。学校は、このバス停の側の坂を上った中程にある。三人は無言のまま坂を上り始めた。

ゆっくりと歩いていたので五分ほどかかって校門をくぐった。校門を入り、右に進むと生徒のロッカーがある。学年が違う達之と別れ、亜依と桜は靴を履きかえ、二年の教室がある三階に行った。

星風高校の校舎は四階建てで、上から順に、一年生、二年生、三年生の教室となっている。ちなみに一階は、保健室や家庭科室といった教室などがある。

それぞれの教室の前に、新しいクラスの名簿が貼ってある。亜依と桜は五組で同じだった。

「同じクラスだね」

桜が亜依を見て喜ぶが、亜依はといえば、無表情だった。決して、桜と同じクラスなのがイヤだったのではない。第一、亜依はその名簿を見てもいないのだ。亜依の心はここになかった。亜依の心は誠司の事でいっぱいだったのだから……。

「亜依？ 聞してる？」

「……………」

桜が亜依の顔を覗き込むが、亜依は気の抜けた顔をしたまま、桜に全く気付かない。

「大丈夫？」

「……………」

しかし、反応はない。

「もっしもーし」

「……………」

「はあ……」

大きくため息を吐いて、

「あ、あれ、あの人じゃない？」

「え？」

やっと、反応した。

「ウソ、ゴメン」

すぐに桜は両手を顔の前で合わせた。

「え？ ウソ？」

「ゴメン。亜依がボーっとしてたから。亜依、あの憎らしい……じゃなかった。あの人の事考えてたの？」

亜依は無言で頷いた。

「それにしても、あの人の、羨ましいね。亜依にこれほど想われてるなんて……」

「からかわないでよ」

「まあ、いいじゃん。それよりさ、亜依とあたし、同じクラスだよ」

「ホント？」

亜依は、嬉しくて跳びはねた。

「喜びすぎだって」

「いいじゃない、嬉しいんだから」

「そうだね」

亜依と桜の明るい声が廊下に響いた。

*

退屈な始業式。いつも思うのだが、こんな事をする必要があるのだろうか？ この時間が一番の無駄に思える。

いくらそう思っても、決してこの儀式はなくなるらないのだ。

しばらくは黙って聞いていた生徒たちも、それが長くなるにつれ小声で話し始める。そうになると、もう止められない。その一点から発せられた声は次第に広がり、全体を包み込む。

「ねえ、亜依……」

そして、その波は桜と亜依も包み込む。

「なに？」

「どうしたの、ぼうっとして。もしかして、あの人の事を……？」

「……………」

亜依は無言で首を横に振った。

「違うの？」

「ただ、退屈な話だな、と思って……」

「そっか……」

桜は残念そうに視線をずらした。

「桜、いい加減しつこいよ」

「……ゴメン」

「……………」

桜の謝罪に、亜依は無言で頷いた。

会話は途切れた。亜依は、ぼうっとして、話を聞いていない。桜も同じだ。そのまま、退屈な始業式は終わった。

「亜依、どうしたの？　なんか、変だよ？」

教室に帰るなり、桜が話しかけた。

「……別に……いつもと同じだって」

「恋する乙女、か……」

「もう……そういう桜も、水沢先輩の事好きなんですよ」

亜依は反撃に出た。

「あ、あたしは……たっちゃんは別に……そんなんじゃ……」

明らかに動揺している。

「ほら……じゃあ、わかるんじゃないの？」

「だから、あたしとたっちゃんは……」

桜は精一杯に否定する。

「ふうん……じゃあ、水沢先輩にそうっておいてあげるね」

「……ちょ、ちょっと……亜依、ゴメン。もう言わないから……」

「わかればよろしい」

そう言って、亜依は笑った。久しぶりの笑顔だった。

「……………」

桜は、亜依が元気になって嬉しいのと、自分が亜依に言い負かされた悔しさとが混ざった、複雑な気持ちだった。

(まあ、亜依が元気になってよかった)

桜も一緒になって笑った。

教室で担任の先生の話も終わり、亜依は帰路についていた。

「亜依、一緒に帰ろうよ」

後方から、桜が手を振りながら走ってきた。

「あれ？　水沢先輩は？」

しかし、そこにいつもいるはずの達之の姿はなかった。

「ああ、たっちゃんは、まだ用事があるとかで教室にいる。だから、今日はあたし一人なんだ。だから、さ」

桜は、亜依の手を引っ張って歩き出した。

二人はたわいもない話をしながら歩いて駅まで行った。ゆっくり話したい、と桜が言った事もあったが、バス停が混んでいて乗れそうになかった、というのも理由だった。

「じゃあね」

凧駅で桜は降りる。

「うん。また明日」

亜依は手を振った。

一人になった途端、急に淋しくなった。

「はぁ〜」

亜依は窓の外の風景を見ながらため息をついた。

「ただいま」

「おかえりなさい」

家の中から母親の梨架の声が返ってくる。それを聞くと、なんだか淋しさが吹き飛んでいくような気がした。

(そういえば、初めてなんだ、あたし)

そう、本当の家で、本当の両親とそんな会話をするのはこれが初めてなのだ。

(なんだか、くすぐったいな……)

「おかえり、亜依」

玄関でぼうっとしている亜依の所に、梨架が小走りでやってくる。

「どうしたの？ 玄関にぼけっと突っ立ってないで……」

そう言われて、亜依は現実に戻った。

「どうかした？」

「な、なんでもない。お母さんに『おかえりなさい』って言われるの初めてだなと思って……まさか、こんな会話ができるなんて思わなかったから……」

「そうね、私も」

当たり前会話——しかし、それが当たり前ではなかった親子。その当たり前の行為がすごく新鮮だった。

*

平凡だった。今まで手に入らないと思っていた平凡な日々。亜依にとっては、最高の幸せだった。

「お母さん、早く行こうよ」

学校が始まって初めての休日、亜依たちは高尾家に行く事にした。

「早く、早く」

「もう……亜依、そんなに慌てなくても……」

梨架はたおやかに笑う。

「だって……懐かしいんだもん」

「懐かしいと言ってもな……まだ十日ほどだろう」

父親の史和が、やれやれ、とため息をつく。

「だって……」

「はいはい、じゃあ行きましょうか」

「うん」

梨架の言葉に亜依が笑顔で頷く。

「ふんふ〜ん♪」

亜依は楽しそうに鼻唄を歌う。

「なんかショックだな……」

「どうして？ お父さん」

「だってな……僕たちといるより嬉しそうにするからな……」

史和は言葉を濁す。

「亜依、お父さんは淋しいのよ。亜依ったら、雅恵に会いに行こうって言ったらすんごく喜ぶんだもん。そりゃ、お父さんじゃなくても淋しいわよ」

梨架は笑顔を浮かべながら言う。

「じゃあ、お母さんも？」

「そうね、少し淋しいかな」

「ごめんなさい」

亜依は、しょぼんとして謝った。

「別に謝らなくてもいいのよ」

「そうそう。別に亜依を責めてるわけじゃないんだから」

「……………」

「まあ、十六年も一緒にいれば本当の家族も同然か……」

梨架が淋しそうに呟いた。

「そんな事ないよ。確かにそうかもしれないけど……じゃなくて、やっぱり本当の家族は今だから……えっと……」

梨架の言葉に亜依はなんとかしようと言う。

「あはは、仕方なかったんだもん」

亜依がそう明るく言ったが、梨架は急にトーンを下げて、

「ゴメンネ、淋しかったでしょ」

そう言い、梨架は亜依を抱きしめた。

「もう、淋しい思いはさせないから」

「……………うん」

亜依は泣きながら梨架の胸に顔を埋めた。

「あのさ、そろそろ出発しないか」

ずっと見ていた史和が言った。

「そうね、行きましょう」

その日、二つの家族はまるで一つの家族のようだった。

*

その日、亜依は初めて学校をサボった。

「う～ん、いい景色」

亜依は街を一望できる丘の上にあった。丘の頂上には、大きな木が立っている。亜依にとって、夏にこの木蔭で読書をする事が最高の贅沢だった。

亜依は、そこから見る景色が好きだった。少し遠くには海が見える。運がよければ船が見える事もある。

夜は、街の夜景がまるで星のようだ。

雨上がりにここに上ると、海の上に大きな虹を見る事もできる。

だが、この場所を訪れる者は少ない。知らないはずはないのだが、わざわざ来る者はいないのだ。

「いい風……」

春の柔らかい風が吹き抜ける。

亜依の髪がふわっと舞う。

「気持ちいい……」

亜依は草の上に寝転がった。

空を見上げると、雲がゆっくりと流れている。

(そういえば、誠司さんって、空を見るのが好きだったっけ……)

亜依は誠司の顔を思い浮かべる。優しく微笑んでいる誠司。なにかに怒りを感じている誠司。色々な表情が思い出される。

「誠司さんもこの空を見てるのかな……」

そんな事を考えていると、雲が誠司の顔に見えてくる。

「昔の人も、空を見上げてなにか考えてたのかな……」

ずっと空を見上げていると、睡魔が襲ってくる。亜依は大きなあくびをした。

「……このまま寝よっか」

亜依は、柔らかな草の上で眠りについた。

亜依は夢を見た。それは悪夢ともいえるものだった。

夢の中で誠司は、亜依の知らない少女と一緒にいた。一緒に楽しそうに笑っている。

その少女は金色の髪をしていた。

「イヤな夢……」

うなされるように、亜依は目を覚ました。

陽はまだ高い。それほど時間は経っていなかった。

(あれは夢だよな。本当なわけない。そう、夢。夢なんだから)

亜依は、そう自分に言い聞かせた。正夢ではありませんように……。

五月の始め、亜依は父親の史和に呼ばれた。

「どうしたの？」

史和の部屋兼アトリエに入った。入ると、油絵の具の匂いがした。

キャンバスには、丘から見える白い灯台が描かれていた。遠くには海が見える。

「ああ、散らかってて悪いな」

言われて足下を見ると、確かにすごい散らかりようだ。失敗したスケッチやら、絵の具のカスやらがあった。

「もしかして、これを片付けろ、とか？」

「違う、違う」

史和は笑いながら言う。

「じゃあ、なに？」

「ああ、亜依は知らないだろうけど、今月の二十日はお母さんの誕生日なんだ」

「……え？」

亜依は、全く予想していなかった史和の台詞に言葉を失った。

「ホントに？」

「嘘を言ってどうするんだよ。本当だよ」

史和が優しく笑う。

「で、お母さん、いくつになるの？」

史和は一瞬悩んで、

「それは、本人に訊いてもらわないと」

「もしかして、忘れたんじゃないか……」

「それはないよ。覚えてるさ。女性の年齢は、本人の口から、ね」

亜依は残念そうな顔をした。

「そういえば、お父さんっていくつなの？」

考えてみれば、父親の年齢も知らないのだ。

「教えて欲しい？」

「うん」

「三十九だよ。今度の八月二十二日で四十」

「へえ……そうなんだ……っていうか、若い」

「お褒めの言葉、ありがとうございます」

史和は子どものように笑った。つられて亜依も笑う。

「話が脱線したけど、もうすぐお母さんの誕生日だから、なにかしてあげようかと思うんだけど……亜依はなにかいいアイデアないかな？」

史和は、亜依を呼んだ本来の用件を話した。

「アイデアか……」

初めて祝う母の誕生日である。なにかしてあげたい。

「そういえば、その前に母の日があるんだ」

亜依は突然その事を思い出した。

「初めての母の日か……なんか照れるな……」

「そういえば、そんなイベントもあるんだな。ずっと二人で旅をしていたから、すっかり忘れてたよ」

「カーネーションか……」

亜依はカーネーションの花束を思い浮かべていた。

亜依は毎年、育ての母である雅恵にカーネーションを贈っていた。

「今年はお母さんと雅恵お母さんに贈るんだ……大変だ」

しかし、その言葉は大変そうでなく、むしろ嬉しそうだ。

「そういえば、大変だな。父の日も忘れずにな」

史和は、さりげなく父の日という言葉を使った。

「あ……そうなんだ……父の日ってのもあったんだ……」

亜依は顔をしかめた。本当の親と育ての親がいて幸せ二倍、だと思っていたが、母の日や父の日といったイベントも二倍、と意外に大変なのだ。

「おいおい、忘れてたんじゃないだろうな」

「覚えてるよ。ただ、母の日よりは存在が薄いけど」

確かに、父の日というのは母の日よりも何故か存在が薄い。母の日にはカーネーションと決まったアイテムがあるのに対して、父の日にはそれがないからかもしれない。会社勤めの父親にならネクタイなのだろうが、絵描きである史和には無用の長物だ。

（こりゃ、父の日は大変だ）

亜依は先の事を考え、頭を抱えた。

「まあ……今は父の日なんてどうでもいい。今は、だぞ。……それよりも、お母さんの誕生日だ」

気付けば、またしても脱線していた。

「お母さんの誕生日か……」

亜依は腕を組んで考えた。

——コンコン！

誰かが——亜依と史和が一緒にいるのだから梨架に決まっているのだが——ドアをノックした。

「入るわよ……あら、亜依も一緒だったの」

梨架はお盆にコーヒカップを乗せて部屋を入ってきた。

「二人してなんの相談？」

「あ、いや……なんでもないんだ」

史和は慌てる。

「あら……」

その言葉に亜依と史和はドキッとした。

「なに？」

史和が訊く。

「この絵、あの時の……」

梨架はうっとりとした目でキャンバスを見た。

「ああ……」

言葉は短い、二人には充分だった。

史和は梨架が持ってきたコーヒーを啜った。

「……………ん、うまい」

「どうも」

簡単な会話が交わされる。

「で？ 二人でなんの悪巧み？」

その言葉に、コーヒーを吹き出しそうになる。

「……だ、だから、なんでもないって」

「亜依、なんの相談？」

梨架は、こういう時、史和がなにも言わない事を知っている。なので、今度はターゲットを亜依に変えた。

「……え？ え、ええ……」

急な事に亜依は言葉が出ない。そして史和に、助けて、とでも言わんばかりの視線を向ける。

「り、梨架……亜依が困ってるだろ」

亜依の視線を受けて、史和はなんとかフォローしようとする。

「じゃあ、あなたが言ってくれるの？」

「そ、それは……」

史和は口ごもる。

「ね、亜依。教えて」

「……ダメ」

亜依が小さな声で言う。

「お父さんとの約束だから」

実際、きちんと約束したわけではない。しかし、話が話だけに、今知られるわけにはいかない。

「仕方ない。わかったわよ。じゃあ、あなたたちの悪巧み楽しみにしてるわね」

そう言って、梨架は部屋を出ていった。

「ふう～」

梨架が部屋を出たと同時に、史和は大きく息を吐いた。そしてコーヒーを一口含み、

「やっぱ、慣れないな……。どうも、あの状態の梨架は……」

誰ともなしに呟く。

「とりあえず、それまでになにか考えておくね」

「ああ、頼む」

「そうだ、お母さんって、なにが好きなの？」

「そうだな……なんだろうな……」

史和は腕を組んで考える。

「お父さん？ もしかして、お母さんの好きなもの知らないんじゃない……」

亜依がジトーと史和を見る。

「そ、そんな事はないぞ。ただ思い出せないだけだ」

「ホントに……？」

「あ、ああ。本当だ」

史和は、額に汗しながら答える。

「まあ、それはお父さんに任せるよ。あたしは、自分でなにか考えるね」

そう言い、亜依は史和の部屋を出ていった。

「梨架の好きなもの、か……」

史和は腕を組んだまま、天井を見上げ、呟いた。

結局、亜依は梨架の誕生日にペンダントを贈った。ちなみに史和は、あの丘の絵を贈った。

そのお返しにと、亜依は梨架からあの小さな石がついたキーホルダーをもらった。そこには、古い鍵が二つと、新しい鍵が一つ付いていた。

「これは？」

それを受け取った亜依は、梨架に訊いた。

「その新しい鍵は、この家の鍵。そして、あとの二つは……大切な鍵。だから、ずっと持っていて。必ず役に立つ日が来るから、ね」

*

平和な時間が過ぎていった。

亜依の知らない所で、それは着々と進んでいた。

そして季節は流れ、夏を迎える。

2 君は痛いところをついてくる

始業式の日、誠司はまだ詩稀村にいた。自分の先祖――椎崎誠介と容子の墓参りをしたあと、ふと詩稀村を見たいという衝動に駆られ、詩稀村に足を運んだ。

詩稀村があった場所は、今はなにもなかった。その場所には、焼けた家の残骸がわずかにあるばかりだ。しかし、その廃墟も再生を始めた森に覆われようとしていた。

生命というものは恐ろしく強い。たとえ灰となっても、そこから新しい命が生まれていく。

誠司は、雑草に覆われた廃墟に近づいた。柱は完全に炭のようになっており、力を加えれば簡単に崩れるだろう。誠司は慎重に中に入った。

火事というものは、これほどまでに恐ろしいものなのか。

火事というものを実際に経験したこともなければ、見た事もないので、いまいち実感というものがなかった。

家の中も完全に燃えており、なにがあったのか全くわからない。

誠司はその家を出ると、改めて村を見渡した。すると、さっきは樹の蔭に隠れていて気付かなかったのか、村の四隅に柱が立っていた。不思議な事に、その柱は全く燃えた形跡がなかった。

誠司は、その柱の一本に向かって歩き出した。

「なんなんだ、これは？」

柱の根元に立ち、見上げると、それはさらに異様な物に見えた。直径にして五メートルほどのそれは、まるで御神木のようなようだった。

近くで改めてみると、燃えた形跡どころか、焦げた形跡すらなかった。しかも、その周りですら、それらの形跡がないのだ。

「どうなってるんだ？」

誠司は柱の周りを一周してみた。

高さはどのくらいなのだろうか。三十メートルはあるように思える。

特に変わったものは……あった。

柱を見上げた時、柱の中程が光った。

「あれは、なんなんだ？」

しかし、どうする事もできない。柱は木製のようなのだが、垂直に建っていて、出っ張りなどは一切ない。しかも、塗料が塗ってあり、滑りやすそうだった。

(まるで、漆塗りだな、こりゃ……)

無理と判断し、その場所を離れた。

「にしても、不思議な村だな……。俺の御先祖様が気に入っただけの事はあるな……」

空を見上げると、綺麗な青空だった。

「ふう～、いい天気だな……。でも、なにか忘れてるような気がするんだよな……」

誠司は腕を組んで考えこんだ。

「なんだっけかな……」

その時、腕時計のカレンダーに目がいった。

「あ、今日から学校じゃねえか！ いきなりサボっちゃった」

一瞬慌てたが、

「ま、いっか。学園長のくだらねえ話なんか聞いてもしょうがねえからな」

と、開き直った。

誠司は再び空を見上げた。相変わらずの青空だ。

「ちょっとは、のんびりしないと.....。旅から帰ってきたらすぐ学校なんて、やってらんねえからな.....」

誠司は、草の上に寝転んだ。

「そういえば、どうしてるかな.....亜依」

空に向かって呟く。

「会いに行こうかな.....。でも.....」

言葉が続かなかった。

(でも？ でも、なんだってんだ？ 会いに行けばいいじゃないか。いや、いきなり行ったら迷惑だろうし.....)

誠司は、自問自答を繰り返していた。しかし、明確な結論は出ない。そのまま、ずっと空を見上げていた。

*

気付けば眠っていた。誠司が目を覚ましたのは、暗くなってからだった。

(おいおい、やばくねえか、こりゃ)

そう、辺りに光はない。昼間は晴れていたが、今は雲に覆われている。月も星もないのだ。完全な暗闇だった。

(どうすんだ?)

誠司は慌ててポケットを探った。

(ん?)

誠司の手になにかが触れた。それは、花屋で貰ったマッチだった。

(ラッキー)

誠司は、マッチを擦ってわずかな明かりを得た。しかし、そこはマッチ。すぐに消えてしまう。

(無駄か.....)

誠司は明かりを諦め、そのまま野宿する事にした。

(懐かしいな.....野宿なんて)

そう思いながら、誠司は眠りについた。

*

翌朝、誠司は顔に冷たいものを感じて目が覚めた。

「……ん？」

また、ぽつり、と冷たいものが落ちてきた。

「……え？」

そう思った瞬間の出来事だった。突如、雨が降り出した。

「うわあ！」

誠司は慌てて荷物をまとめ、さきほど見つけた廃墟を目指して走りだした。

「いきなりかよ……」

廃墟ではあるものの、雨ぐらいはなんとか凌げる。

「やみそうもないな……」

廃墟の窓から外を見ると、全くやむ気配はない。

結局、雨は夕方まで降り続いた。

「やっと、やんだか……」

誠司は空を見上げた。まだ、ぽつりぽつり、と小雨が降っていた。

「綺麗だな……」

誠司は感嘆の声を上げた。

空には大きな虹が架かっていた。茜色に染まり始めた空と、まだ昼間の様子を残す青空に跨っていた。昼と夜の世界を繋ぐようだった。

「なんにしても、今日も泊まりか……」

誠司は肩を落とした。

＊

翌朝は快晴だった。朝靄の中にうっすらと虹が架かっている。

「いい朝だ……」

誠司は大きく伸びをした。

朝の冷たい空気を吸い込む。身体の中がすっきりとする。

「今日こそは家に帰らないとな……。第一、食料がもうないからな……」

そうなのだ、誠司はすぐに帰るつもりでこの村を訪れた。そのため、途中で買った菓子パンが二、三個あっただけで、あとはペットボトルの清涼飲料水だけだった。しかし途中でなくなったので、雨水を飲んだのだが。

それだけで、この二日を過ごしたのだった。

「グッバイ、俺のサバイバル生活」

誠司は、お世話になった廃墟に手を振って村をあとにした。

＊

自分の部屋に帰ってくる頃には、すでに陽が高くなっていた。

しばらく帰ってなかったので、郵便が溜まっている。一通一通見たが、どれもくだらないダイレクトメールだった。

「今日も学校はサボりか……。ま、いっか」

そして、ベッドに倒れ込んだ。

「この石、なんなんだろうな……」

誠司は自分のピアスを触った。

そのピアスの石は、以前のものとは違うのだが、感じるものは同じなのだ。

「この石も f o r s t r e k i だったりして」

そんな事を考えながら眠ろうとした時、

——ピンポン！

インターフォンが鳴った。

「誠司、いないの？」

誠司はゆっくりと起き上がった。

(この声は……実央。あんな事があったしな……やっぱ、居留守しかないか)

「おい、こら！ 居留守しても無駄よ！ いるのはわかってるんだから！」

実央はドンドンとドアを叩く。

(どうして俺がいる事を……あ——)

誠司は気付いた。

(——郵便。しまった……)

誠司は自分の行動を後悔した。

「仕方ないか……」

誠司は渋々ドアを開けた。

「よっ！ 久しぶり！」

ドアを開けると、満面の笑みを浮かべた実央が立っていた。

「……あ、ああ……」

実央に会った瞬間、以前の旅で出会った二十年後の実央の言葉を思い出した。

『純粹バカっていうのかな。それが取り柄だったからね——でも、そこが好きだったんだけどな……』

(実央は俺の事……)

そう考えると、どうも普通ではいられない。その対応がギクシャクしてしまう。

「どうしたの？ ずっと家にいなかったじゃない」

「あ、ちょっと、な……」

「春休みも何回か来たのに……どこに行ってたの？」

「どこ、って……」

(まさか、色々な世界に行って、二十年後の実央に会った、なんて言えないよな……)

「御先祖様の墓参り」

「……は？」

声が裏返っていた。

「だから、墓参りしてきたの」

「ハカマイリ？ それって、お墓にお参りする……？」

「そう。それ」

「めっずらしー」

実央は、明らかに大袈裟に驚いてみせた。

「あのなあ、俺だって墓参りくらいするさ」

「でもさ、どうしてまた急に？ 別にお盆とかじゃないのに……」

「いいだろ。ちょっと行きたくなっただよ。一応、世話になったし……」

「世話？」

(やっべえ……つい言っちゃった……)

「ま、まあ、俺がここにいるのは……」

誠司はなんとか理由をつけて説明しようとしたが、

「まあ、そんな事はどうでもいいのよ。問題なのは、学校を休んだって事」

と、実央は誠司の話を全く聞いていない。

「どうして、学校を休んだ事がそんなに問題なんだ？ だいたい、義務教育じゃないんだし……」

そこまで言って、実央に視線を向け、言葉を失った。

「……ぐすっ……問題だよ……だって……あたし……すっごく心配したんだから……事故に遭ったんじゃないかとか、病気なんじゃないかとか……」

実央は涙を浮かべていた。

「お、おい……泣くなって……」

誠司はなんとかしようと、あたふたする。

「悪かった、謝るから……」

「……………心配したんだから……」

「ああ、悪かった」

誠司はそれ以外の言葉が思い浮かばなかった。

それから、実央は誠司の部屋に勝手に入った。

「なんにもない部屋ね」

実央は誠司の部屋を見回して言った。確かに、誠司の部屋はなんにもないに等しい。学校の教科書くらいしかない。

「ったく……人の部屋に入って、感想がそれかよ」

「ホントの事じゃない」

実央は、さきほどの涙はどこへやら、涙など知らないかのような笑顔だった。

「まあ、な」

その様子に誠司は啞然とする。

「やっぱ、女の涙って信じらんねえ」

誠司が呟いた。

「ん？ なにか言った？」

「いや、別に」

「ふう〜ん」

実央は頷きながら言った。

「お前、絶対、納得してねえだろ」

「うん」

実央は笑顔で答える。

「どうせ、訊いても教えてくれないでしょ？」

「うっ……………」

誠司は言葉に詰まった。

「だったら訊かない方がいいじゃん。そうでしょ？」

「まあ、な」

「だから訊かないの」

「そいつはどうも」

「で？ どこ行ってたのよ」

「お前、さっき訊かないって……」

「ケチ」

ここまでくると、まるで漫才だ。

「それより、なんで来たんだ？」

「言ったじゃない、あんたを心配して……」

「だから、俺は元気だってわかっただろ。じゃあ、もう帰ってもいいんじゃないか？」

「そんな事言わないでさ……今日は帰りたくないな……」

そう言い、実央は誠司に擦り寄った。

「お、おい……落ち着けて」

誠司はどうしていいのかわからず、ただうろたえるばかりだ。そんな誠司を見て、実央はそれをわざとやめない。

「ま、待て……な、よそう」

「な〜んて、ジョーダン。本気なわけないでしょ」

(ホントは結構本気だったりするんだけど)

内心ではそう思っていた。

「だ、だよな……」

誠司は安心して大きなため息をついた。

「でもさ、あそこまで拒否することないんじゃないの？ もしかして、好きな人がいるとか……」

」

実央は意地悪気に、下から覗き込むように誠司を見た。

「え？ あ……あのさ……」

あまりに核心をついた質問に、誠司の思考が止まる。その様子に、

「……いるんだ……」

呟いて、実央は淋しそうに俯いた。

「あ、あのさ……だから……」

誠司は慌ててどうにかしようとする。

「はあ～……ホント、誠司ってこういうの弱いよね。すぐわかっちゃう」

実央は大きなため息をついた。

「あ……っ……」

「もうちょっと、嘘つけるようにならないとね。女の子、傷つけちゃうよ」

「……………」

「正直も程々にね」

そう言い残し、実央は部屋を出ていった。

「あっ……」

誠司はなにも言えず、ただ見ているしかできなかった。

「また失恋か……」

実央はトボトボと歩いていた。空はうっすらと赤くなってきている。

「ホント、あたしって恋愛運ないのかな……。去年まで好きだった先輩にはふられるし、ちょっとは気にしてもらおうと思ってあんな噂まで流したのに……それがいけなかったのかな。ホント、あたしって恋愛下手だな……。不器用なのかな……」

ゆっくりとした足取りで、夕暮れ前の道を一人淋しく歩いていた。

「俺……実央を傷つけちゃったな……。どうすりゃいいんだ？ 急にあんな事訊くんだもんな……。やっぱ俺、嘘が下手なんだろうな……。すぐ顔に出るからな……」

誠司は、ガランとした部屋で、一人悩んでいた。

「実央の気持ちはわかってたけど、やっぱり……ああ、どうすりゃいいんだ」

誠司は頭を抱えてうずくまった。

*

翌朝はどんよりとした天気だった。

「空って不思議だな……今の俺の気持ちピッタリ」

と、ぼやきながら学校への道を歩いていた。以前は電車通学だったのだが、両親の離婚をきっかけに一人暮らしを始めた時、学校の近くのマンションを借りたので、今では徒歩で通学して

いる。

「天気がよければ、どこか見晴らしのいい所にでも行くんだけどな……」

誠司は空を見上げて呟く。

「亜依はどうしてるのかな……」

誠司は、決して亜依の事を忘れていないわけではない。気が付けば考えている。

(そんなに気になるなら会いに行けばいいじゃないか)

そう、自分に言う。

(でもな……亜依はずっと離れ離れになってた両親と……それに、実央の事だってあるしな……)

そんな事ばかり考えていて、結局会いに行けないのだ。

(にしても、どうしてこう車って多いのかね……ここ、住宅街だぜ)

誠司は住宅街の細い道路を我が物顔で走る車にうんざりしていた。

(少しはゆっくり走ればいいものを……ちょっと空いてるからって……)

そう思った瞬間、細い路地から子ども――小学校低学年くらいの男の子が出てきた。

そこに車が走ってくる。

その子は石を蹴っていて、車に気付いていない。

(ぶつかる！)

そう思うと同時に、誠司の身体が動いていた。

誠司はあと五メートルという所でその子どもを抱えた。

しかし、ブレーキが間に合わない。車は止まらない。

(やばい！)

誠司は目を閉じて祈った。

その瞬間、誠司のピアスが光った。

(あれ？ ぶつかってない……?)

誠司はゆっくりと目を開けた。

(……あっ)

誠司は我が目を疑った。

止まっていた。そう、周りの全てが止まっている。車も鳥も……そして、自分が抱えている子どもも。

(今のうちに)

誠司は子どもを抱えたまま、その場を離れた。

(助かった……)

そう思った瞬間、時間が動き出した。

キキーッと急ブレーキの音がして、少し進んだ所で車が停止する。あの時、もし時間が止まらなければ二人とも車に轢かれていた。その音を聞きつけて、周りの家から人が出てくる。しかし、なにもしない。ただ見ているだけである。

「……うっ……うえ～ん……」

自分が危なかったとわかり急に怖くなったのか、男の子が泣き出した。

「大丈夫だ。大丈夫だから、泣くなって」

誠司が優しく声をかける。

「……う、うん……」

誠司は自分の腕の中にいる男の子に笑いかける。そして、車を睨んで、

「にしても……危ねえじゃねえか！」

しかし、車からはなんの反応もない。

「ここにいろよ」

誠司は子どもを残して、ゆっくりと車に近づいていった。

「……………っ」

誠司は言葉を失った。運転者は、ハンドルにもたれかかるようにして倒れている。どうやら、急ブレーキの際、ハンドルに胸を強く打ちつけたらしい。わずかだが、唸り声が聞こえる。生きてはいるようだ。

「誰か、救急車を呼んでくれませんか」

誠司は野次馬たちに言った。しかし、誰も動こうとしない。関わり合いになりたくないのだ。自分はただの傍観者であって、関係者ではないのだから。そう、責任のない観客でありたいのだ。

「あたしが連絡するわ」

どこかで誰かがそう言い、携帯電話を取り出した。誠司は、礼を言おうとその声の方を向いた。

「ありがとうございます……って、実央じゃねえか」

そう、それは実央だった。実央は、電話で話しながら、誠司にウインクしてみせた。

「五分くらいで来るらしいよ」

「そうか……」

誠司は少し安心した。

「で、誠司が助けた子どもはどうなの？」

「あ、そうだ……」

言われて、誠司は子どもに歩み寄った。

「どこか痛くないか？ 怪我してないか？」

「うん、大丈夫だよ」

男の子は笑顔で言った。

「実央、電話、貸してくれねえか」

「え？ いいけど……」

実央は携帯電話を差し出した。誠司はそれを受け取ると、

「なあ、君の家の電話番号は？ それと、君の名前も」

「え……？ えっと……室田孝志です。電話番号は、えっと……」

男の子——室田孝志は、戸惑いながらも誠司に伝えた。誠司は孝志の家に電話して、事故の事

を伝えた。一瞬、不安そうな母親の声がしたが、怪我はしていないようだと言えど、安心した声ですぐにここに来ると言った。

「お母さん、ここに来るってよ」

そうこうしているうちに、救急車が到着した。その救急車に車を運転していた男性はもちろん、誠司と孝志も乗り込んだ。念のため病院で検査してみるらしい。

(母親はどうするんだよ)

その考えが通じたのか、

「その子のお母さんが来たら、一緒に病院まで行くよ」

実央が言った。

「頼むな」

三人を乗せた救急車は病院に向け出発した。

検査の結果、孝志に異常はなかった。誠司もかすり傷だけだった。

「ありがとうございます。ありがとうございます……」

病院に着き、息子の無事を確認するなり、孝志の母親はずっとそう言いながら、孝志を抱きしめ、泣いていた。

「よかったね」

隣で実央が言った。誠司が頷く。

「これで、また学校サボりか……」

「まあ、今回はしょーがないでしょ」

実央が場違いな明るさで言った。

「ところでさ、誠司、携帯持ってないの？」

「あ？ ああ……。必要ないから」

「でも……」

「誰にもかけないし、電話をかけてくるような奴もいない。だから必要ない」

「緊急の時とか……」

「親いないのに、誰に電話するの？」

「それは……」

実央はなにも言えなかった。

「ところで、あの車を運転していた人は……？」

ふと思い出し、誠司は医者に訊いた。

「現在、手術中です」

「そんなにまずいんですか？」

手術中だと聞き、誠司が問い詰めるように訊く。

「肋骨が何本か折れていたようです。まだ、どうなるかはわかりません」

と、俯きながら言った。

「すいません、警察ですが……」

その頃になって、ようやく警察が到着した。誠司は、その二人の警官に事故の事を話した。年配の警官が誠司に質問をし、メモをとっている。もう一人の若い警官が孝志にも話を聞こうとするが、警官が怖いのか、それとも事故を思い出したのか、震えているだけでなにも話さない。

「怖がってるんだ、もういいでしょう。経緯は俺が話した通りなんですから……そうだよな？」

誠司は孝志を見る。孝志は小さく頷く。

「わかったでしょ。怖がってる子どもに無理にそんな事しないでさ……」

誠司の言葉に、年配の警官が若い警官の肩に手を置いた。若い警官は諦めたように肩を落とした。

「まあ、現場の状況からも車の速度超過だという事がわかってますし……ボウヤ、怖かっただろう……」

年配の警官が優しい声で言った。

「あの……」

申しわけなさそうに、孝志の母親が誠司に声をかけてきた。

「はい、なんですか？」

「あ、いえ……お名前聞かせてもらってもかまいませんか？」

「あ、はい。椎崎誠司ですけど……」

「椎崎……」

それを聞いた時、孝志の母親は口を両手で覆った。

「どうかしました？」

「い、いえ……なんでも……」

疑問に思いながらも、それ以上は訊かない事にした。

＊

室田親子は、治療を終えると、そそくさと帰っていった。誠司と実央は、運転手の手術が終わるまで、ずっと病院にいる事にした。

「あのさ、どうしてお前まで残るんだ？」

「いいじゃない。電話したの、あたしだよ」

近くの廊下にソファを見つけ、二人はそこに座っていた。

「それはそうだけどよ……」

「なら、いいじゃない。それに、今から学校行きたくもないし」

「お前、本音はそれだろ」

「えへっ、ばれた？」

場所に不釣り合いな明るい声で小さく笑い、ペロッと舌を少し出した。

「まあ、いっか」

「そうそう」

二人は、手術が終わるのを待った。別に待つ必要はないのだろうが、二人は待った。

「それにしてもさ、あの運転手の身内の人、誰も来ないよな」

「そういえば、そうだね」

「彼は、天涯孤独なんだよ」

ガラガラな低い声が答えた。二人はその声の主を見た。

そこに立っていたのは、あの年配の刑事だった。

「彼の名前は倉沢俊昭。神崎証券に勤務していた」

「……していた？ 今は違うんですか？」

「ああ」

年配の刑事はゆっくりと頷いた。

「彼は、二ヵ月前にリストラされている。それからは、仕事もせず気ままな生活をおくっていたようだ」

「で、どうしてそれを俺に話すんですか？」

「ホント、君は痛いところをついてくる。そう、普通ならそんな事は話さない。だが、この事は君にも関係あるんだ」

年配の刑事は、ポケットからタバコを取り出した。

「すみません。タバコは遠慮してもらえますか」

「ああ、悪い。つい、癖でな」

年配の刑事は、タバコをポケットに戻した。

「彼の部屋からこれが見つかったよ」

そう言って、ポケットから一枚の紙を取り出した。それはどこにでもあるコピー用紙だった。そこには一行――

藻音に殺される。椎崎様、助けてください。

そう、ワープロで書かれてあった。

「これは……？」

誠司はそれを見て驚愕した。

(この名前……藻音って……もおと……モート……m o r t o なんじゃ……)

「確か、君の名前も椎崎だったね。なにか、思い当たる事はないかね？」

刑事の問いかけに、誠司は首を横に振った。

「そうか……君の両親は……？」

「いません」

誠司は力強く言う。

「それより、この藻音っていうのは？」

「ああ、それはすぐにわかった。藻音時弥、神崎グループの会長秘書だ」

「神崎グループ……？ って、あの？」

年配の刑事が無言で頷いた。

神崎グループ―それは、普段ニュースをあまり見ない誠司でさえ知っている企業だ。日本有数の大企業でありながら、この手の会社でよくある汚職事件などが全くなく、クリーンな会社として知られている。

「なにか、心当たりは？ 君の両親や知人が神崎グループの傘下の企業にいるとか」

誠司は首を振った。

「……そうか。じゃあ、なにか思い出したらここに電話してくれないか」

そう言って、刑事は名刺を差し出した。

「へえ……刑事さんも名刺持ってるんですね」

誠司はそれを受け取り、しげしげと見た。

「それは、個人的に作ったものだ」

そこには、個人の携帯電話の番号が書かれていた。なにかわかったら、警察ではなくここにかけろ、という事らしい。よく見れば、明らかに警察支給のものでない事がわかった。何故なら、そこには、見た事はないが、黄色くて丸いキャラクターの絵が描かれていた。

「いい趣味をお持ちで、小林圭士警部」

「じゃあな、頼むぞ」

そう言って、刑事は病院をあとにした。

＊

それからしばらくして、倉沢俊昭の手術が終わった。彼は、一命を取り留めたが、まだ意識は戻っていない。

「これじゃ、話を聞こうにも聞けないな」

誠司は、手術が終われば話が聞ける、と置いていただけに残念そうだった。

＊

誠司と実央は、帰路についていた。真っ赤な夕陽が二人を照らしている。

「ねえ、なにか知ってるの？」

「……ああ」

誠司は上の空だった。誠司の頭の中は、あの藻音という名の者の事でいっぱいだった。

「ホントに知ってるの？」

「……ああ」

「……ん？ 聞いている？」

「……ああ」

「聞いてないの？」

「……ああ」

「どっちなの？」

「……ああ」

実央の中に殺意が芽生えた。

「グフッ！」

その瞬間、実央の肘が誠司の鳩尾に決まった。

「ゲホッ……お前、いきなり……なにすんだよ」

「人の話、聞いてないからでしょ」

「ちょっと考え事してたんだよ」

「考え事？」

「そう、考え事。あの手紙の事だよ」

「手紙？」

実央は首を傾げた。

「警部さんが持ってきてくれただろ」

「ああ……あれ」

実央は大きく頷いた。

「あそこには、確かに椎崎と書かれてあった」

「別の椎崎って人じゃないの？」

誠司は首を振った。

「それはないと思う。あの倉沢という人は、あの時〈椎崎〉に会いに行こうとしていたんだと思うんだ。そう考えると、納得がいくんだ。そして、あの辺にいたという事は、その〈椎崎〉もあの辺にいるという事になる。そして、あの辺にいる〈椎崎〉は……」

「考えすぎだって。違うかも知れないじゃん。それって推測でしょ？」

「だけど……」

言いかけた誠司の口の前に、実央は人差し指を立てた。

「綺麗だね……」

唐突に言い、実央は空を見上げた。つられて、誠司も空を見上げる。

夕陽の赤、そして反対には夜の藍、その中間には昼の青の空。一日の色大集合だ。

(そうだよな。m o r t oは確かにあの時倒したんだ)

「じゃあ、あたしん家まで競走ね」

言うなり、実央は走り出した。

「おい、待てって」

誠司は慌ててそれを追いかける。

そして、季節は移ろいでいく。

山間の村、詩稀村――

しかし、その名前は地図から消えた。今から三年前、炎に包まれた。

村と外界との唯一の道が燃えたため、村人は逃げる事ができずに、死に絶えた。そう、一部の一族以外は――

*

「どうされました、莉緒様」

男が膝をついて、窓際に座り、本を読んでいる少女に言った。男はサングラスをかけ、黒のスーツに身を包んでいた。そして、手には黒いシルクハットがあった。

「いいえ、別に」

少女――神崎莉緒は平然と答える。

「そうですか。わたしには、あなたがあの村の事を思い出しているようにみえましたので」

男がそう言った瞬間、莉緒の目が鋭くなった。

「時弥、その事を口に出してはならぬ」

「申しわけありません」

藻音時弥は恭しく頭を下げた。

「失礼します」

深々と頭を下げ、時弥は部屋を出た。

藻音時弥と神崎莉緒は一回り以上も歳が離れている。しかし、藻音家は代々神崎家に仕えてきた。そのため、今でも時弥は莉緒には敬語で話し、接する。神崎家と藻音家は、あの詩稀村の生き残りだった。

古来より、詩稀村は二つの大きな家に支配されていた。その二つというのが、神崎家と吉田家だった。

その吉田家も詩稀村の生き残りだったのだが、五年前に強盗に襲われ、当時家にいた全員が犠牲となった。唯一生き残った直系の吉田家の血を引く者も自分がそうとは知らず、ひっそりと生活していた。その者の今の名は木元綾乃といった。しかし、彼女は一族の能力を受け継がなかった。

時弥は、長い時間をかけ、やっとの事で彼女を見つけだした。綾乃は『博愛館』という児童施設にいた。

時弥は早速そこを訪れた。そこは意外なほど明るかった。児童施設と聞いて、暗い場所と勝手に思い込んでいたのだ。

「木元綾乃、という人はいますか？」

時弥は門の側にいた少女に声をかけた。

「……………」

しかし、その少女は答えない。時弥は、その少女にただならぬものを感じた。

「美空、どうしたの？」

その様子を見て、少女が小走りでやってきた。美空と呼ばれた少女は時弥に視線を向ける。

「あの……………」

走ってきた少女が訊く。

「あ、あの……………木元綾乃という人はいますか？」

時弥はさっきと同じ事を言った。

「はい、いますけど……………あなたは？」

少女が怪しそうに時弥を見る。

「こういう者です」

時弥は名刺を取り出した。

「神崎グループ専務……………」

少女は名刺と時弥の顔を見比べた。

「ホントに？」

時弥は無言で頷いた。

「神崎グループっていったら、日本有数の大企業じゃない。そんなトコの専務がどうして……………」

「まあ、今回来たのは、会社と直接関係のある事ではありませんので……………」

「でも……………」

「私用ですので、お願いできませんか」

時弥がそう言うが、少女は納得できずにいた。それもそうだろう。こんな所にある児童施設に、日本有数の大企業の人間が来るなど、誰が想像できるだろうか。しかし、時弥のその名刺は本物ではなかった。事実、時弥は専務ではなく秘書なのだから。秘書といっても、社長や会長ではなく、令嬢である神崎莉緒の秘書なのだが。しかし、表向きは会長秘書という事になっている。専務の名刺は去年のものだった。

「アタシがどうかしたの？」

そこに、問題の木元綾乃がやってきた。その側には美空がいる。どうやら彼女が呼んできたらしい。

「君が木元綾乃？」

「……………はい」

綾乃は頷いた。

「君に話がある。ちょっと来てもらえないだろうか」

少し迷って、

「……………わかりました」

そう答えた。

「じゃあ、行こうか」

時弥は綾乃を連れ出す事に成功した。

*

時弥と綾乃は、『博愛館』の近くにある浜辺に来ていた。シーズンではないので、浜辺に人はいない。ただ、寄せて返す波の音だけが支配していた。

「話って、なんですか？」

浜に着くなり綾乃が訊いた。

「急に呼び出して申しわけないと思う。ただ……どうしても君の力が必要なんだ」

「アタシの力？ アタシ、なんにも……」

「大丈夫。それはわたしが授けるから」

そう言うと、時弥は綾乃の額に手をかざした。その手から光が溢れ、綾乃を包み込んだ。時弥の能力『授与』だ。

「これでいい。君にはこの力を使って、地図を集めてもらいたい」

綾乃は自分の手を見た。しかし、なんら変化は見られない。

「地図……ですか？」

突然の事に呆気にとられる。

「そう、地図だ」

「そうですか……」

「先に言っておくが、あまり詮索しない事だ。それが一番安全だ」

その言葉に、綾乃は顔を引きつらせた。

「わかりました」

綾乃はその恐ろしさに、断る事ができなかった。

「でも、それをアタシ一人で、ですか？」

綾乃の声は震えていた。

「そうだな。もう一人いた方がいいかもな。君と同じ施設の誰かと一緒に探してもらおうか」

「『博愛館』の誰か……？」

「そう、男の方がいいな」

「男……ですか」

「どうもharmonioというのは、男女のペアのようだからね。誰かいないかね」

そう言われて、綾乃は考え込んだ。しばらく考えて、

「舜平。舜平なら……」

「ほう……。その舜平とやりに頼もうか。呼んできてもらえるかな」

「はい」

綾乃はそう言うと、駆け足で『博愛館』に戻っていった。

綾乃は、今までの退屈な毎日から抜け出せそうで、ワクワクしていた。時弥が神かなにかのように見えた。全てが時弥の思うままに進んでいた。

*

しばらくして、綾乃が少年を連れて戻ってきた。

「連れてきました」

綾乃は嬉しそうに言った。

「そうか、この少年か」

時弥はその少年――竹内舜平にも綾乃と同じ事をした。

「さて、二人で地図を集めてもらおうか」

「ちょっと待って下さい。集めるって、その地図はどこにあるんですか？ それに、どんなものなのか……」

綾乃が訊く。

「それはわからない。だが、君たちなら見つけられるはずだ。健闘を祈る」

そう言うと、時弥は立ち去った。

残された綾乃と舜平は、茫然とその場に立ち尽くしていた。

*

時弥は莉緒のいる屋敷に戻り、事の報告をしていた。

「莉緒様、準備はできました。あとはあの者たちがどうするか……」

「ホント、ご苦労な事で」

そこへ一人の男が入ってきた。その男はラフなアロハシャツに短パン、そしてボサボサの髪を掻きながら煙草をくわえていた。

「お前は……」

時弥はその男を睨んだ。

「そんなに睨みなさんなって」

男は煙草をくわえたまま笑う。

「お前がどうしてここにいる！」

「気の短い。まあ、細かい事は気になさんなって」

「前から訊きたかったんだ。だいたい、お前は吉田の側の人間じゃないか。そのお前が、どうして吉田を滅ぼそうとする神崎の側にいるんだ。何故、自分たちの一族を滅ぼそうとする側にいるんだ」

「そうだな……確かに吉田に仕えてきた。おれの母親も吉田の出だしな。でも、そんなのはおれにとってなんの関係もない。それにおれがいる限り、吉田は滅びないしな。あっ、そんな時はおれも消されるのか」

その男――吉住健一という言葉は、どこか戯けていて、重みというものが全く感じられなかった。

「まあ、たいした用があるでもなし、おれは失礼するとしましょうか」

そう言い、健一は部屋を出ていった。

「ったく、なにをしにきたんだか」

時弥はその後ろ姿に悪態をついた。

「時弥、ご苦労でした。あなたもゆっくり休みなさい」

「はい」

時弥は深々と頭を下げ、部屋を出た。

*

「さてと、どうしたもんかな……」

時弥が立ち去ったあと、綾乃が呟く。

「どう、ってなんだよ」

「だあかあ、どうすればいいのかって事」

「どう、って？」

「あのね。アタシたちは、これからなにをすればいいのかって事」

「なに、って……地図を集めるんだろ？」

「あんたねえ！ 地図っていわれても、どんな地図で、どこにあるのかもわからないんだよ。それをどうやって集めるっての！」

物分かりが悪い舜平に腹がたって、つい声を荒げてしまう。

「あ、そっか」

ようやく綾乃の言いたい事がわかり、舜平はポンッと手を叩いた。

「とりあえずさ、家に戻らない？」

「そうね、それがいいかもね」

とりあえず、綾乃と舜平は自分の家である『博愛館』に帰る事にした。

*

「なんの用だったの？」

帰ってきた二人に、工藤成海が訊いた。

「なにって……たいした用じゃなかった」

「たいした用じゃないなら、あんな人が来ないでしょ、普通。それに、舜平を連れて行って……なんだったのよ。教えてよ」

成海は執拗に迫る。

「綾乃が教えてくれないなら……ねえ、舜平、教えてよ」

猫撫で声を出して訊く。

「ああ……」

そう言いかけた舜平は、鋭い殺気まじりの視線を感じた。もちろん、その発信元は綾乃だった。舜平は、その綾乃の形相を見て、言葉が出なかった。

「……ゴ……ゴメン……」

それが精一杯だった。

「そんな事言わずにさ」

成海はさらに舜平に迫る。舜平はちらりと、助けを求めるかのように綾乃を見る。綾乃は、そんな舜平を睨む。それを見て、舜平は震え上がる。

ここまでくると、成海もわざとなのだ。それがわかっていて、あえて舜平に訊く。舜平にしてみれば、絶体絶命の状況というやつなのだ。こんな事が、これまでも何度となく繰り返されてきた。綾乃と成海にしてみれば、舜平は最高のオモチャなのだ。

「まあ、いいわ」

そう言い、成海は舜平に近づき、

「二人っきりの時に教えてね」

そう耳打ちした。そして、どこかに行った。

成海の姿が見えなくなってから、

「舜平、さっきの事は絶対に秘密だからね。誰かに言ったら――」

声を落として、

「――どうなっても知らないからね」

そう言い、綾乃は自分の部屋に向かった。

舜平は、しばらく茫然と立ちつくしていたが、極度の緊張から解放され、その場にヘナヘナと崩れた。

そんな三人の様子を、建物の蔭から美空が見ていた。

*

しばらくは、何事もなく日々が過ぎていった。その変化は突然だった。

「あれ？ なんだろう……」

あれから一週間ほどが経った朝、庭を散歩していた綾乃は、空中に変な穴を見つけた。それはまさしく『時の口』なのだが、綾乃が知っているはずもない。

「あんな所に穴なんてあったっけ？」

綾乃は首を傾げるばかりだった。

――ジャリ！

綾乃の後ろで砂を踏む音がした。

(――誰かいる)

綾乃は振り返る事ができなかった。

「やあ、久しぶりだね」

聞き覚えのある声だった。綾乃は勇気を振り絞って振り返った。

「――あ……」

そこに立っていたのは、藻音時弥だった。

「やあ」

藻音は右手を挙げた。綾乃は小さく頷く。

「やっと見えたようだね」

「あなたにも見えるんですか？」

綾乃は時弥と同じ世界に立てたような気がして嬉しかった。これが初恋だったのかもしれない。しかし、初恋はすぐに消える。

「いや、わたしには見えない」

時弥は、さらっと言った。その言葉に、今までの幻想が全て崩れた。

「じゃあ……」

じゃあ、どうしてあなたはここに？ そう訊きたかったが、言葉にはできなかった。

「そろそろだと思ってね。ただそれだけだ」

綾乃の夢が崩れていく。

「今回来たのは、君に君の能力について説明するためだ」

「アタシの能力？」

「そう。わたしが与えた能力——時空を見る能力のね」

時弥は口元を歪めた。不気味な笑顔だった。

「その前に……今、君が見ている穴だが、それは『時の口』というものだ。『時の口』は様々な世界と繋がっている。君たちには、それを使って世界を移動してもらおう。さて、本題だが——」

そこまで言って、時弥は急に振り返る。

「——そこにいるのはわかってるんだ。出てきなさい」

すると、そこから舜平が顔を覗かせた。舜平は脅えながら、ゆっくりと綾乃の横まで歩いていった。

「綾乃も見えていたんだ」

舜平は小さな声で言った。

「じゃあ、舜平も……」

舜平は頷いた。

「昨日の夜、突然……」

「さあ、どうやら二人とも見えているようだね。こっちにとっては好都合だ。さっきも言ったが、君たちが見ている穴——『時の口』に入って、様々な世界にある《ロザリオ》の在りかを示す地図を探してもらいたい」

「それはどこに？」

舜平が訊く。

「その情報を集めるのも君たちの仕事だ。そのために君には、時空を渡る能力を授けたのだから」

「時空を渡る能力？」

「さあ、できるだけ早く仕事を終わってもらいたい。わたしたちも時間がないのでね」

「どういう事ですか？」

綾乃が訊く。

「詮索はしない方がいいと言ったはずだが」

時弥は綾乃を睨む。普段、舜平に同じ事をしている綾乃だったが、その時弥の眼は綾乃には到底かなわないものがあった。

「……すみません」

そう言った綾乃の声は震えていた。いや、声だけでなく全身が震えていた。

「綾乃……」

舜平が綾乃の手を握る。

「……行こう」

舜平は綾乃の手を握ったまま、『時の口』に向かって歩き出した。

「地図は、君たちなら見分けられるはずだ」

二人が『時の口』に入る瞬間、そう言った。

「わかりました」

舜平が震えながら言った。

目を閉じ、二人は中に入った。

綾乃の目の前には、暗闇が広がっていた。
どこまでも続く闇。
果てしない闇。
その暗闇の中に、四角い箱が浮かびあがる。

*

「綾乃、どうかした？」

世界を移動した途端、綾乃は倒れてしまったのだ。舜平は心配で、ずっと側にいた。

「大丈夫……」

そう言うが、大丈夫そうには見えない。青い顔をしている。

「……なんか、変なもの見た」

綾乃がぼつりと呟く。

「変なもの？」

「そう……暗闇に変な箱があるの……」

苦しそうな表情で言う。額には汗が滲んでいる。

「わかったからさ、ちょっと寝てなっ」

「……そんな事より、ここはどこなの？」

「……さあ？」

言われて、舜平は改めて辺りを見回した。

綾乃と舜平の二人は、見渡す限り岩しかない所にいた。ここが岩山なのか、採石場かなにかなのか、二人にはわからない。

「早く、地図を探しましょう」

そう言い、綾乃はゆっくりと立ち上がった。が、足下がおぼつかなく、よろけた。

「大丈夫なのか？」

慌てて舜平が支える。

「大丈夫。ちょっと気分が悪いだけだから。少しすれば、よくなる」

しかし、舜平にはそうは思えなかった。綾乃は苦しそうに肩で息をしている。

「じゃあ、綾乃がよくなるまでここで休もう」

舜平が座らせようとしたが、綾乃はそれに逆らって立ち上がろうとする。

「大丈夫だって言ってるでしょ」

そう叫んだ途端、足の力が抜けてその場に崩れた。

「ほら、言わんこっちゃない」

舜平は呆れていた。

*

綾乃が元気を取り戻したのは、三時間後の事だった。

「よかったよ、綾乃が元気になって」

舜平は喜ぶが、綾乃はそれを無視して歩き始める。

「ほら、さっさと行くわよ、ヨハン」

舜平は綾乃の言葉に目を丸くした。

「よ、ヨハン？」

そんな舜平の疑問を解決するかのように、

「そう、ヨハン。せっかく、不思議な力を手に入れたんだから、名前も変えちゃおうと思ってさ。コードネームっていうの？　なんか、カッコイイじゃん。憧れてたんだ……」

綾乃は空を見上げた。

「だから、あんたはヨハン。ヨハネスを略してヨハン。通称っていうの？」

「で、オレがヨハンなのはわかった。まあ、いい。で、綾乃はなんなんだ？」

「アタシ？　アタシは、フィー」

「フィー？」

「そう。ジョセフィーヌ、略してフィー」

「……………」

舜平――ヨハンは、あまりの事に声がでなかった。

「綾乃……」

「フィー」

本名で呼んだが、すぐに訂正された。

「フィー」

今度はそう呼ぶ。

「なに？」

綾乃……いや、フィーは嬉しそうに返事をした。

「なんでまた、ジョセフィーヌなわけ？」

「別に。理由なんてないわよ。なんとなく。可愛いでしょ？」

「……………」

「どうして、そこで黙るかな……」

綾乃――フィーは、ヨハンを睨つけた。

「か、可愛いんじゃないかな」

ヨハンの声は震えていた。

「まあ、いいわ。わかったら、ヨハン、さっさと行くわよ」

そう言い、フィーは岩だらけの場所を歩き始めた。

「待ってくれよ」

そのあとを、ヨハンが慌てて追いかけた。

*

しばらく進んでわかったのだが、そこは岩山だった。植物などが一切ない。生命というものが感じられない山。死んだ山だった。

「どこなの、ここ？」

「だから、岩山だって」

「どこの？」

「わからない」

そんな会話が繰り返されてきた。

「ホントに地図なんてあるの？」

「さあ？」

「さあ、って……あんたね」

「わかるわけないだろ。だいたい、巻き込まれたのはオレの方じゃないか。元々は綾乃だけだったのに」

「仕方ないじゃない。あの人にもう一人男の子がいたほうがいい、って言われたんだから。それとね、アタシの名前はフィーだからね、わかった？ 舜平。あらゴメンナサイ、ヨハン」

フィーはわざとらしく言った。完全にフィーのペースだ。

「まったく……わかりました、フィー様」

「それでよし」

(ホント、このままでいいのか、オレ?)

ヨハンはため息をついた。

*

岩山を進むと、小さな小屋があった。

「綾乃、あんな所に小屋があるけ……ど……」

ヨハンは殺気を感じて振り返ると、ものすごい形相のフィーがいた。

「言わなかったっけ？ アタシの名前はフィー！ フィーなの！」

その勢いに、ヨハンは尻餅をついた。

「ご、ゴメン、フィー」

「わかればよろしい」

そう言うが、目が赦していない。

「ホント、どうしてあんな所に小屋なんか……。もしかして誰かいるかも」

そう言うフィーの言葉に、どこか怒気が含まれている。

「ほら、さっさと行くわよ、舜平！」

不機嫌そうに言う。しかも、わざと舜平と呼んでいる。

(いつもの事だけど……怒らせると……)

そんな事を考えていると、

「遅い！ さっさと来る！」

フィーの怒声が響く。ヨハンは慌てて走り出す。

「はいはい」

「はい、は一回！」

「はい！」

「よろしい」

フィーは満足そうに頷いた。

*

小屋は窓が割れていた。フィーはそこから中を覗いた。

「……………」

小屋には誰もいなかった。

「それじゃ、お邪魔します」

躊躇する事なく、フィーが中に入る。

「フィー、勝手に入るのって、まずいんじゃない……」

ヨハンが恐る恐る忠告する。しかし、

「いいの」

「は、はい」

フィーの睨みには勝てない。

小屋の中にはテーブルと古い本棚以外なものもなかった。しかも、長い間使われていないのだろう、埃が全てを埋め尽くしている。

「ゴホッゴホッ……………」

ヨハンが咳き込みながら中を見渡す。フィーを見ると、ハンカチで口を覆っていた。

(いつの間に……………)

ヨハンがフィーを恨めしそうに見る。

「なによ？」

その視線に気づき、フィーがヨハンを見る。

「な、なんでもないよ」

「あっそ」

そう言うと、フィーは本棚を物色し始めた。

「フィー、勝手に漁るのは……………」

「なによ」

フィーはヨハンを睨む。

「別に、無人なんだからいいじゃない。誰のものでもないんでしょうし、いいじゃない、どうしようよ」

ヨハンはなににも言えず、黙って見ていた。

「ヨハン！ 黙ってないで、あんたも手伝いなさいよ」

「あ、ああ……」

ヨハンは、フィーに言われるがまま、一緒に小屋を物色し始めた。

「でもさ、なにを探せばいいのさ？」

「さあ？ でも、地図の手がかりになりそうなものよ」

「……………」

(無策だな……)

そう思いながらも、フィーには逆らえないヨハンだった。

「なんにもないわね……」

文句を言いながらも、フィーは探す手をやめない。

「フィー」

その時、ヨハンがなにかを見つけた。

「どうしたの？」

「この本棚なんだけどさ……」

ヨハンが言っているのは、この部屋に入った時からずっとある本棚だった。

「これがどうしたのよ」

「それがさ……」

ヨハンは本棚を横にずらした。

「え……？ ちょっと、すごい……あんた、そんなに力あったっけ？」

フィーは、本棚を押しているヨハンに感心していた。

「別にすごくないよ」

「でも、そんな本棚を動かすなんて……」

フィーは、初めてヨハンを尊敬の眼差しで見ていた。

「すごくなんかないんだってば。この本棚の本、ケースだけの本がほとんどなんだ」

言われて、フィーは本棚の本を手にとってみた。

「……ホントだ」

それは本ではなく、本のケースだった。

「だから、軽いんだよ。それに、ほら……」

本棚をずらすと、そこに扉が現れた。

「ここは……？」

「さあ？ とりあえず入ってみる？」

フィーは頷いた。

フィーはその扉を開けた。すると、その後ろに通路があった。

「通路がある……」

フィーが誰ともなしに言った。

二人は互いに頷き、その通路を進んだ。

その通路は石でできていた。壁にランプがあるが、もちろん明かりは消えている。

「暗くて、よく見えない……」

先頭を歩いていたフィーが言った。

「……確かに」

二人は、恐る恐るゆっくりと進んだ。そのうち目が慣れてきて、ぼんやりとだが見えるようになった。

しばらく進むと、木でできた扉があった。

フィーが振り返り、ヨハンを見て頷いた。ヨハンも頷き返す。

フィーは心を決めてその扉を押した。ギィィ！ という音が通路に響く。二人はゴクンと唾を飲み込む。

「入るわよ」

フィーが意を決して中に入る。

そこは部屋だった。しかし、なにも見えない。

「フィー、ランプがあった」

ヨハンは入口にランプを見つけた。その横にはマッチのようなものもあった。ヨハンはそれをフィーに渡した。

「アリガト」

フィーはそれを受け取り、明かりをつけた。

「ひゃっ！」

明かりをつけた瞬間、フィーはヨハンにしがみついた。それと同時に、ランプが床に落ちる。

「ちょ、ちょっと……」

突然の事に、なにがなんだかわからず、ヨハンはうろたえた。

「あ、あああ……」

フィーはヨハンの胸に顔を埋めたまま、震えた手で部屋の中心を指さす。

「……ん？」

ヨハンは落ちたランプを拾い、それを掲げた。

「……うわっ！」

ヨハンもソレを見てランプを落とした。

「が、ががが……ががガイコツ……」

ヨハンは震えながら声に出した。

その部屋の中央にあるテーブルに、向かい合う者がいた。だが、それは生きている者ではなかった。すでに、白骨と化していた。

二人は抱き合ったまま震えていた。

「ね、ねえ……」

フィーがヨハンの背を押す。

「ちょっと、見てきてよ……」

「えっ……………イヤだよ」

ヨハンはフィーを前に押す。すると、今度はフィーがヨハンを押す。するとまた……と、堂々巡り。

「わ、わかったよ」

しばらく繰り返したあと、結局、ヨハンが近づく事になった。

ヨハンは足がガクガクと震えている。

「ヨハン、大丈夫？」

自分も恐怖してたくせに、自分が行かないでいいと思うと、急に強気になる。

ヨハンは恐る恐る白骨に近づいていく。フィーは、それを震えながら見守る。

(つたく……どうしてオレが……)

一歩、また一歩……。

「ふい、フィー、ちょっとはオレを見直したか」

恐怖を紛らそうと強気な発言をする。しかし、その言葉もやはり震えている。

「わかったから……あ、危ない！」

後ろにいるフィーを見ていたため、ヨハンは白骨が横たわっているテーブルにぶつかった。

「うわっ！」

そして、そのまま……ヨハンは白骨に覆い被さるように倒れた。

「わ、わわわ。わ……」

ヨハンは尻餅をつき、そのまま後ろにさがる。

「あわわわわわ……」

そのままさがり、壁に背中が当たった所で止まった。

「はあ、はあ、はあ……」

ヨハンは肩で息をしていた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……………」

「よ、ヨハン……大丈夫？」

フィーがヨハンの顔を見る。

「あ、あ、あ……あ……」

ヨハンはガタガタと震えて、真っ青な顔をしていた。

「ヨハン？」

フィーが声をかけても、ヨハンは肩を抱き、うづくまって震えていた。

「……ヨハン？」

フィーは、そんなヨハンに罪悪感を感じながら、心配そうにそれを見ていた。

*

しばらくして、ヨハンはやっと平静を取り戻した。その頃になると、フィーもその部屋に慣れ

てきた。

「ヨハン、落ち着いた？」

「.....ああ。なんとか.....」

しかし、それでもまだわずかに震えている。

「.....もう一回.....行くから.....」

そう言い、ヨハンは再びテーブルに向かって歩き出した。

「舜平、もういいよ。アタシが行くから」

「綾乃.....大丈夫。.....やってやるよ。オレは舜平じゃない、ヨハンなんだ。そうだろ、フィー」

ヨハンは力強く笑った。

「舜平.....」

ヨハンは無言で頷いた。その頷きは今までと違い、力強かった。

ヨハンは、一步一步を踏みしめテーブルに近づいていった。

恐る恐るながらも、ヨハンは白骨を移動させた。

「ヨハン！」

その行動に、フィーは思わず声をあげた。

「な、大丈夫だろ」

ヨハンは右手を親指だけ立てた。しかし、その手もわずかに震えている。

「もう.....無茶するんだから」

フィーは安堵のため息を洩らす。

「オレだって、いいトコ見せておかないとな。フィーに威張られてばかりってのは癪だからさ」

「.....バカ」

フィーはヨハンに聞こえないような小声で呟いた。

白骨を移動させると、その下には小さな箱があった。どうやら白骨はそれを隠すためのものだったようだ。

ヨハンはその箱をゆっくりと開けた。

「.....っ」

中を覗くと、小さな鍵が入っていた。フィーも中を覗く。

「なんの鍵だろう？」

「さあ？ この箱、アタシが見た夢に出てきた箱じゃない気がする。アタシが見たのは、金庫みたいな感じだったから.....」

「じゃあ、これはその鍵？」

ヨハンはその鍵を見ながら言った。

「.....多分」

「じゃあ、その箱を探さないと」

「ねえ.....」

意気揚々とするヨハンを止めるかのように、フィーが小さな声で言った。

「なに？」

「一度、戻らない？」

「戻る？」

「うん。アタシたちの家に……」

その声は、先程までと違い、弱気だった。完全に立場が逆転していた。

「戻ってどうするんだよ？」

「……うん。どうするってわけでもないけど、なんか戻りたい」

(こんな綾乃見た事ない……)

ヨハンは、いつもと違うフィーに戸惑いを感じていた。

*

「莉緒様、あの二人はどうなっていますか？」

時弥は、いつもと同じようにロッキング・チェアに揺られている莉緒に訊いた。

「鍵を手に入れたみたい」

「そうですか。では、もうすぐあの地図が手に入るのですね」

「……………」

莉緒は無言のまま頷いた。

「あの地図があれば、鍵を探しやすくなる」

莉緒は嬉しそうに笑みを浮かべた。

*

フィーとヨハンは、自分たちの家——『博愛館』に戻ってきた。

「はあ～、やっぱり落ち着くな……」

フィーは大きく深呼吸をした。

「確かに」

ヨハンも同じように深呼吸をした。

「で、どうするんだ？」

「さあ、どうしよっか……」

「あのな～」

「まあまあ」

ヨハンをなだめるようにしてそう言い、そして視線を据えて、

「地図を探すに決まってるじゃない」

と、当たり前の事を言った。

「だから、それをどうするんだ？」

「わからない」

フィーは首を横に振った。

「……だよな」

ヨハンはその場にしゃがみ込んだ。

「なんとかなるって」

「楽観的だな」

と、そこに藻音時弥が現れた。

「あ、ああ……」

フィーは、突然の藻音の登場に声を失った。

(っていうか、ご都合だな……)

「鍵を手に入れたようだな」

唐突に言った。

「あ、は、はい。これです」

フィーは、持っていた鍵を渡した。

「これか……」

時弥は、しげしげとその鍵を見た。

「これは、地図が収められている場所の鍵だ。これから二人には、その場所を探してもらおうか」

「地図が収められている場所……」

フィーは自分に言い聞かせるように復唱した。

「じゃあ、その場所を探せばいいんですね」

「そうだ」

その声には、感情というものがなかった。

「わかりました。フィー、行こう」

ヨハンは、フィーの手を取った。

「う、うん……」

「いや、待て」

時弥は、それを止めた。

「なんですか？」

ヨハンが不愉快そうに言う。

「君たちの力だけでは難しいだろう。君たち二人は、それぞれ最強の *h a r m o n i o* の二人を利用するんだ」

「最強の *h a r m o n i o* ?」

「そうだ。最強と言われた者の血を継ぐ者——」

時弥は、その二人の名前を告げる。

「わかりました」

二人は同時に答えた。

あれからどのくらい経ただろう。季節は変わり、夏になっていた。

「もうすぐ夏休みだな。今年はどこ行く？」

「ああ、悪い。今年は、親に夏期講習に行け、って言われてて……」

「あたしも。ホント、サイアク」

「なんだよ、それ」

「でもよ、宿題あるだろ……。かったりーよな」

「宿題さえなければ天国なのにね」

「今年こそ、夏を満喫するぞー！」

「なに言ってんの！ わたしら受験生でしょ」

「夏休みもお勉強ってか。はあ……」

「でよ、達之はどうすんだ？」

「そうだな……」

(っていうか、なんかイヤな予感が……)

などと話していたそこに、まるで見計らったようなタイミングで、

「たっちゃん、今年はどこに行くのかな？」

桜が話に入ってきた。

(はい、予感的中。百発百中だな、ホント)

「どっこも行かねえぞ。俺は受験生なんだからな」

「そんなの関係なし。あたしは受験生じゃないもん」

「でも、俺は受験生なんだ」

「だから、あたしには関係ないもん、たっちゃんが落ちようが、落ちようが」

桜は満面の笑みで言う。

「……ん？ お前、それって落ちるしか選択肢が……」

その様子に、周りにいた達之のクラスメイトたちが笑いだし、手を振って先に帰っていった。

「まあ、お前らの痴話喧嘩に付き合ってるほど、俺たちも暇じゃないんでね」

「そゆこと」

「じゃあね」

(薄情なやつらめ……)

しかし、どんなに悪態をつこうと、今の状態がどうこうなるわけでもなかった。

「で、今年はどこ行く？」

「だから……」

達之は、そこで初めて亜依がいる事に気付いた。亜依は両手でカバンを前に持ち、じっと立っている。

「おい、亜依ちゃん淋しそうだぞ」

「……うん。あの憎らしい奴いたでしょ？」

「憎らしい奴？」

達之は少し考えた。が、すぐに誰の事だかわかった。

「あのな、誠司をそんな風に言うなって。お前も、根に持ちすぎだぞ」

「いいじゃん。まあ、今度はあたしが先に事件を解決してやるけど」

「そうそう事件があったら、こっちの身がもたんわ」

「そう？ あたしは楽しいけど」

「ヤな性格。で、亜依ちゃん、どうしたんだよ？」

達之が強引ながらも、話を戻した。

「ああ。だから、あの憎らしい奴……」

「誠司」

達之が訂正する。

「いいじゃない」

「よくねえ。……で、誠司がどうしたんだ？」

「もう……。そいつが、どうもしないから……だから、亜依は……。ああ、なんて言ったらいいのかな。慣れてないからな……」

桜は頭を抱え込んだ。

「つまり、誠司からなんの連絡もない、って事だろ？」

「そうそう。そういう事」

「でもさ、電話とか……」

「知らないって」

「え？」

「だから、番号知らないの」

「……はあ……。ったく……」

達之は亜依を見て、

「亜依ちゃん、言ってくれば、誠司んトコの電番くらい教えてあげたのに……。ほれ……」

そう言って、達之は自分の携帯電話を投げた。その画面には、誠司の電話番号が表示されている。

「あいつ、携帯は持たないやつだからさ。それ、自宅の番号」

「ありがとうございます」

亜依は、自分の携帯電話でさっそくそこにかけてみた。

「……………」

しかし、繋がらない。携帯電話を見ると、どうも電波の調子がよくないようだ。そこで、近くの公衆電話からかけてみる事にした。

『お客様がおかけになった電話番号は、現在使われて……』

そこまで聞いて、亜依は受話器を置いた。

「……番号、変わってるみたいですよ」

「マジで？」

これには達之も驚いた。

「ゴメン、結局、なんの役にも立てなくて……」

「いえ、いいんです。……ありがとうございました」

達之に礼を言って、亜依は駆け出した。

「ホント、たっちゃんって役立たず」

*

亜依は、どうしてだか涙が止まらなかった。連絡がないのは元気な証拠、などという言葉があるが、それは奇麗事で、連絡がないというのはイヤなものだ。

ただ、連絡したくても連絡できないのだが……。

先ほどの電話も、亜依は繋がらない事を知っていた。電話番号を調べる事なんて、簡単にできる。そんな事は既にしているのだ。それでも、誠司の親友だった達之なら、と思い、もう一度かけてみたのだった。しかし、その結果は――

「会いたい……」

考えれば考えるほど悲しくなってくる。自分が無力に思える。

だいたい、住所がわからないので、会いにも行けない。いっそ『時の口』を使って……とも思ったが、思った通りの世界に移動できるとは限らない、という事を思い出し、それは諦めた。自分が思った通りの世界に移動できる能力を持っているのは誠司なのだ。誠司ならできる。とどのつまり、誠司から会いに来ない限り、無理というものなのだ。

(誠司さんは、あたしに会いたいとは思わないのかな……)

考えたくないが、どうしても考えてしまう。

(あたしは……)

自然と涙が溢れる。

(泣いちゃダメなのに……)

拭えば拭うほど溢れる。涙で視界がにじ滲む。

「どうして泣いてるんだ？」

突然、声がした。亜依は涙を拭って声の方を見る。

「やあ」

そこには、一人の少年が立っていた。少年が右手をあ挙げて微笑んでいる。

「……あ、あなたは？」

「オレかい？ オレは、ヨハネス。ヨハンって呼んでくれ、富所亜依さん」

「……………」

亜依は言葉を失った。

(え？ どうして？ どうして、あたしの名前を……)

「なに？ ああ、どうしてオレがあんたの名前を知ってるのかって？」

訊く前から答える。

「それは、オレも h a r m o n i o だからさ。そして、オレはあんたを必要としている」

「.....あなたも h a r m o n i o なの？」

亜依は信じられなかった。

「じゃあ、あなたのパートナーは？」

亜依は周りを見たが、誰の姿もない。

「オレのパートナーはあんたさ」

ヨハンは亜依を指さした。

「.....え？ ちょっと待ってよ。あたしのパートナーは、せい.....」

どうしてだか、亜依はその名前を言うのをためらった。

「椎崎誠司、時空を渡る能力を持った h a r m o n i o」

「.....どうして、それを？」

亜依は驚いたが、ヨハンは平然と、

「言っただろ？ オレも h a r m o n i o だって。そして、オレも同じ能力を持っている」

そう言った。

「.....」

亜依は絶句した。

「そんな驚く事ないだろ。.....確かに珍しいけどさ。.....まあ、いいや。そういうわけだ、オレと一緒に来てもらうよ」

そう言い、亜依の手を引っ張った。

「ちょ、ちょっと.....」

亜依は留まろうとするがヨハンの力にはかなわない。

「は、はな.....して.....」

亜依はなおも抵抗する。

「ちょっと、静かにしていてよ、ね」

ヨハンは亜依の腹部にこぶし拳を当てた。

「.....っ」

亜依は意識を失った。

「ゴメンネ」

ヨハンは亜依を抱えると、近くにある『時の口』に入っていった。

*

「ヨハンは目的を達したんだ.....。アタシもしないとね」

汐嶺学園の校門前にいたフィーが笑みを浮かべた。

「椎崎誠司.....アタシたちの目的のために、利用させてもらうわよ」

フィーは、ここで誠司を待っていた。

「それにしても、遅い……」

他の生徒は既に帰っている。なのに、誠司は校舎から出てこないのだ。

学校に来ているのは確認済みだ。

「もしかして、早退？」

そう思った時、やっと誠司が校舎から出てきた。フィーは咄嗟に姿を隠した。

「誠司、あんたね、授業中居眠りして……」

「あー！ うっさい！ もう言わないでくれよな！」

実央と久しぶりに会った時はさすがに意識したが、それも時間が解決してくれた。今では以前のように接している。

「ったく……。ホントにだらしがないんだから……」

「……………」

その時、誠司は不思議な視線に気付いた。

「どうしたの？」

急に歩みを止めた誠司を、実央は不思議そうに見る。

誠司は校門の方を睨んでいる。

「実央、先に帰ってくれないか」

「え？ でも……」

「いいから」

「……わかった」

実央は渋々ながらも従った。

(そういえば、前にもこんな事あったような……)

そんな事を考えながら、実央は一人で帰っていった。

「さてと、あんたは誰なんだ？」

誠司が言うと、隠れていたフィーが姿を現した。

「さすがね。時空を渡る能力を持つharmonio、椎崎誠司さん」

「……………うっ……」

誠司は言葉を失った。

「どうしてそれを……」

「決まってるじゃないー」

フィーは笑みを浮かべた。

「ーアタシもharmonioだからよ」

「……………」

「驚いた？ そうそう、自己紹介がまだだったわね。アタシの名前はジョセフィーヌ。フィーって呼んでね。ちなみにアタシの能力は、時空を見る能力」

「……ジョセ……フィーヌ？ あんた、日本人じゃないのか？ ……そういえば、目も青いし、金髪だし……」

誠司はフィーをじっくりと見た。

「日本人よ、れっきとした」

「じゃあ、ジョセフィーヌってのは？」

「コードネームってやつ」

フィーは無邪気に笑った。

「……………」

誠司は呆れた。

「まあ、気にしないで。さて、さっそくだけど、アタシと一緒に来てもらうわよ」

「ちょっと待て。どこへ行くんだ？」

「……あなたの能力が必要なの」

「俺の能力？ それって、時空を渡る能力、ってやつ？」

「物分かりがいいわね。じゃあ、そういう事だから」

フィーが誠司を引っ張る。

「ちょい待ち。俺のパートナーは、あ……」

「今回はアタシなの」

誠司が言い終わる前に言う。

「じゃあ、行きましょうか」

こうして、誠司も無理矢理『時の口』に入った。

*

完全に閉鎖された部屋に、その少女はいた。そこは、まさに監獄のようだった。檻はないのだが、どうも雰囲気監獄を彷彿とさせる。彼女の力では、出る事は不可能なのだ。

そんな所に少女は平然と座っている。まるで、ここが自分の居場所だ、とでも主張するかのよう……。

事実、少女は生まれてからずっとこの場所にいる。外、というものを知らない。太陽さえ知らないのだ。

それが逆に彼女の精神を安定させていたのかもしれない。人は、あるとわかれば欲するが、その事を知らなければ欲する事はない。だから、彼女は光を欲しない。太陽を知らないから……。

だが、彼女は自分を不幸だと思った事はない。むしろ、幸せだと感じている。

「……………大変……………」

その少女は、抱きしめている人形の頭を優しく撫でた。その人形は、昔話に出てくるHumpty Dumptyに似ていた。

少女はその人形を、グビディ、と名付けた。

「グビディ、あの人たちを助けてあげて」

少女は、ふわっ、っと人形を空中に投げた。すると、その人形は姿を消した。

「……………」

少女は、人形が消えた空間をずっと見ていた。

*

ヨハンに連れられ、亜依はあの洋館に来ていた。そう、椎崎誠介と容子が金庫を埋めた吉田邸だ。

しかし、もちろんあれから時間が経っている。その証拠に、庭は荒れ果て、建物にも蔦がはっているありさまだ。当時の美しさはなく、そこにあるのは不気味さだった。

「……ここは？」

ここがどこかわからない亜依は、ヨハンに訊いた。

「なにも見えないのか？」

「……？」

「あんたは時空が見えるんだろ？ だったら、なにか見えるはずだ」

しかし、亜依はなにも見えないし、なにも感じない。

「ここにあるはずなんだ」

「ちょ、ちょっと、なにがここにあるの？」

「本当になにも見えないのか？」

「だから、なんの事なの？」

「オリジナルなら見えると思ったんだがな……」

亜依の質問にヨハンは全く耳を貸さない。

「ちきしょー！ ここに間違いはないんだけどな……」

ヨハンは地団駄を踏む。

「なにかあるの？」

その不思議なヨハンの様子に、亜依が首を傾げる。

「ああ、ここには地図があるはずなんだ……」

「地図？」

ヨハンは、あっ、と口を塞ぐ。

(言ってよかったのかな……？ まあ、教えないと探せないしな……)

「ああ、オレが探してるのは地図なんだ」

「地図……ですか……それって、どんな地図なんですか？」

「……………わからない」

「え？」

亜依の声は裏返った。

「わからないって、どうやって探すんですか？」

「まあ、そのために、あんたの能力が必要なんだ」

「あたしの能力？」

「そう、オレの能力でその世界に行く。そして、あんたの能力でその場所を特定する」

「なるほど」

亜依は納得して頷いた。

(ただ、オレの能力は本来のものじゃないから、いまいち正確じゃないんだよな.....)

そう思ったが、それは亜依には言わなかった。

「でも、ごめんなさい。あたし、なにも見えない.....」

亜依は申しわけなさそうに言う。

「仕方ない。いきなりだったしな.....。じゃあ、しばらくここにいるとすつか」

そう言い、木の根元に腰を下ろした。亜依もそこに座った。

「ヨハンさんは地図を探してどうするんですか？」

「え？」

ヨハンは、亜依の突然の質問に声が裏返った。

「そ、それは.....」

亜依がヨハンの顔を見る。

「わからない」

ヨハンは頭を最高にまで回転させて考えたが、結局出た結論はそれだった。

「わからないんですか？」

「ああ」

「じゃあ、どうして？」

「ある人のため、かな」

ヨハンは空を見上げた。

「その人、ヨハンさんの大切な人なんでしょうね」

亜依が笑顔を浮かべて言った。

「.....大切な人、か.....そうなのかな.....」

「違うんですか？」

「わからない。そうなのかもしれないし、そうじゃないかもしれない」

「そうなんですか.....」

「あんたにはそういう奴がいるのか？」

今度はヨハンが訊いた。

「.....はい、います」

亜依は俯き、頬を赤らめて言った。

「そうか.....」

(椎崎誠司.....だろうな)

ヨハンは直感でそう思った。

*

同じ頃、誠司とフィーはどこかの学校のグラウンドにいた。ただ、昼間ならいいのだが、今は夜だった。どこか不気味なものがある。

「どこなんだ、ここ」

この学校は境東学園といって、垂依の母親である梨架の母校なのだが、そんな事を誠司が知っているはずがない。

「さあ？ あなたの能力で移動したんだから、アタシが知ってるはずないでしょ」

「まあ、そうだな」

誠司はフィーの言葉に納得し、頷いた。

「ところで、君の目的ってなんだ？」

その言葉にフィーは固まる。

「も、目的なんて……いいじゃない、別に」

「よくねえ。だってだな、少なくとも今回は君とコンビなんだ。それに、なにをすればいいのかわからなかったら……」

「どうして、それをアタシに訊くの？」

誠司は一呼吸して、

「君は知っている。むしろ、これは本来君たちの任務だろ？ 俺はそれに巻き込まれただけ、そんな気がするんだけど」

フィーは震えを隠せなかった。

「どうも、ビンゴだったみたいだな。なんとなくそんな気がしてたんだけど、まさか本当とはね」

「謀ったの？」

「それは想像にまかせるよ」

フィーは下唇を噛んだ。

「どうして、わかったの？」

「なんとなくさ。言っただろ？」

「なんとなくって……」

フィーはその返事に納得がいかない。

「だってさ、今度の事にあいつが出てこない」

「あいつ？」

「そう、生意気なあいつーグビディが」

「グビディ？」

聞いた事のない単語に、フィーは首を傾げた。

「やっぱり、か……。今回の事にグビディは関与していない。もししていれば、こんな事はしない。本人が出てくるからね」

「……………」

フィーはなにも言い返せない。

「君は誰に言われてこんな事をしてるんだ？ それに、君の本当のパートナーは？」

「……………」

フィーは完全に口を閉ざした。

「まあ、いいや。そのうち教えてくれれば。安心していいよ。別に、俺だけ帰ろうとか思ってないから。ちゃんと最後まで付き合うよ。でも、なにが目的なのかだけは今すぐ教えて欲しいけどね」

「……………」

「さあ……」

誠司はフィーを促す。

「わかったわよ。言えればいいでしょ」

「そうそう」

「アタシが探してるのは地図なの」

「地図？ なんの？」

「わからない。アタシは、ある人のためにそれを探してるの。」

「ある人、か……」

「今はこれ以上は言えない。さあ、目的は言ったでしょ」

「了解。とにかく、その地図を探せばいいわけだ」

フィーは無言で頷く。

「で、俺がここに来たって事は、この学校にそれがあるってわけか……」

「おそらく」

「っていうか、無理矢理連れてこられて、いきなり夜の学校探検とはな……ホントついてない」

「いいじゃない。アタシみたいな美人と一緒になんだから」

フィーは、恥ずかし気もなく言う。

言われて、誠司は改めてフィーを見る。青色の瞳、金髪のポニーテール……。

(まあ、確かに可愛いかも……って、いかん、いかん。俺には亜依が……)

「行きましょうか」

そんな誠司を無視して、フィーはさっさと歩き出した。

「ちょ、ちょっと待って……」

誠司は慌ててあとを追った。

＊

「あ……っ」

少女は、物語に介入させたはずのグビディが戻ってきた事に、驚きの声を出した。

(どうして……?)

「璃織魚様、大丈夫ですか？」

吉住健一が、鉄の扉越しに声をかける。

「いつもありがとうございます」

監禁された少女――神崎璃織魚は平静を装って答える。

「どうして、あなたは私の事を……？」

「おれは、あなたがここに監禁されている事が納得いかないのです。あなたはれっきとした神崎の血を継ぐ方。しかも、第一継承者だ。なのに、どうしてあなたがここにいて、双子の妹である莉緒様が表に出ているのか」

「それは……」

「双子は禍をもたらず、ですか？ そんな根拠のない……」

「いいえ、あるのです。昔、神崎家に双子が生まれました。しかし、その双子は互いの能力故にお互いを消してしまったんです」

璃織魚は優しい声で言う。その話し方からは、その少女がわずか十三歳の少女だとは思えない。

「そんな……」

健一は自分が知らなかった事実に驚く。

「本当なのです」

「ですが……」

「いいのです」

「……」

その、全てを悟ったかのような言い方に、健一はなにも言えない。

「……あのharmoniおたちなら、あの二人なら必ずあなたをここから連れ出してくれるでしょう――」

少女はゆっくりと頷く。

「――あなたの父君、神崎禎昭氏の能力――時空を閉ざす能力を打ち破れるのはあの二人以外にはいないでしょう」

「そうですね」

そう言い、璃織魚は抱いている人形を撫でた。そして、再び空中へと投げた。

亜依とヨハンは、吉田邸の庭を歩き回っていた。

「なんだよ、この家。やたらと広いじゃんか」

「そうですね。それにしても、随分と放置されていたようですね。草は伸び放題だし、木も手入れされていない。かわいそう……」

長年放置された吉田邸の庭は広がった。敷地の割に、建物は小さい。ほとんどが庭なのだ。

「まったく……この家を建てた人間は、なに考えてたんだ」

「それに、どこへ行ってしまったんでしょうね」

「さあな」

ヨハンは無愛想に答えた。

「ヨハンさんが地図を隠すとしたら、どこに隠します？」

突然、亜依が訊いた。

「そうだな……家の中なら、隠し扉とか、隠し部屋とか……そんな所かな」

「じゃあ、外なら？」

「外？ そうだな……どこかに埋めるしかないだろうな……そう、なにか目印になるようなものがある場所」

「じゃあ、そこを探しましょうか」

「え？」

ヨハンは間の抜けた声を出す。

「闇雲に探すよりはいいと思うんですけど」

「そ、そうだな」

「じゃあ、家の中、家の外、どちらから探します？」

「そうだな……」

*

誠司とフィーは、恐る恐る夜の校舎に足を踏み入れようとしていた。

「あのさ、どこから入るんだ？」

誠司は校舎を見上げて言った。

「さあ？ どこか開いてるでしょ」

フィーは、簡単そうに言った。

「いいのか、それで……」

誠司はぶつぶつとぼやいた。

「あ、開いてた」

フィーは、鍵がかかっていない窓をあっさりと見つけた。

(おいおい、この学校やばいんじゃないの?)

などと思いながらも、フィーに続いて誠司も校舎の中に入っていった。

*

「そうだな……外だな」

「じゃあ、外から探しましょうか」

「そうだな……って、どこから探そうか」

そう言い、ヨハンは庭を見渡した。

「って、広すぎるな、この庭」

「確かに……」

「お手上げか」

「そうでもないですよ。外に埋めるとしたら、なにか目印になる場所か、目印を残すはずですから」

「そっか……」

ヨハンは、ポンと手を叩いた。

*

夜の学校というのは、どうしてこうも不気味になるのだろうか。内装は同じなのに、全くの別世界だ。そう、学校というものは、昼と夜では正反対の顔を持っている。穏やかな昼と、その昼のストレスを発散させるかのごとく人を恐怖に陥れる狂暴な顔を。

誠司とフィーは、夜の廊下をゆっくりと歩いていた。さっきまでの強気はどこへやら、フィーは誠司の腕にしがみついていた。

「あんまりくっつくなくて、歩きにくいだろ」

「だって……」

猫撫で声を出す。

(うっ……そんな可愛い声出すなっの)

「しゃーねーな……」

そのまま廊下を歩いていくと、階段があった。

「どうする？」

誠司が訊く。

「どうするって……どうする？」

(おいおい、さっきまでとえらくキャラが違うんじゃないか?)

「やっぱ、順番に進んだほうがいいよな。でもな……学校中って……無理だろ」

「う……」

「なんか、ヒントみたいなものはないのか？」

フィーは首を振った。

「じゃあ、じっくり探すしかないのか」

誠司は肩を落とした。

*

「目印……やっぱ木だよな。ってなわけで、木の根元を全部掘ろうか」

「……え？ 本気で言ってます？」

「当然」

「無理ですって」

「やればできるって。不可能なんてない」

「はあ……」

「さてと、さっさとやろうか」

*

「どうしてこんな目に遭わなきゃいけないの？」

「それは俺の台詞だって。巻き込まれたのは俺だぞ」

「アタシだって、こんなんで聞かされてないもん。ただ、地図を探せって……」

「それで、二つ返事？」

「……うん」

「はあ……」

*

ヨハンは倉庫を見つけ、そこからスコップを持ってきて、木の根元を掘り始めた。

「結構簡単だな。これなら、すぐに見つかるかもよ」

ヨハンは、一人で土を掘り返していた。亜依も掘ると言ったのだが、力仕事はオレに任せろ、と一人で掘る事を自ら言い出したのだ。

「大丈夫？」

亜依が心配そうに声をかけるが、

「平気、平気。全然ノープロブレム」

と、笑顔で返す。しかし、その額には汗が光っている。

「そんな心配そうな顔しないでくれよ。オレは全然平気なんだからさ」

「でも……」

そう言い、亜依は庭を見渡した。庭にはここだけでなく、まだまだ木がある。見えているだけでも二十本はあるのだ。

「本当に大丈夫？」

「まっかせなさいって」

しかし、それも長くは続かなかった。

楽勝だと高をくりハイペースで掘っていたので、あっという間に力尽きてしまった。

「あとは、あたしがするから……」

「駄目だ」

スコップを持って掘ろうとする亜依の手を握る。

「でも……」

「言っただろ。大丈夫だって……。オレに任せろって……。平気さ、これくらい」

ヨハンは口元だけの笑みをつくった。そして、再び掘り始めた。その頃にはすっかり陽も落ち、あたりは闇に包まれていた。

「今日は、これくらいでいいんじゃないですか？」

「そうだね」

今日はここまでとなった。

＊

フィーと誠司は、近くの教室に足を踏み入れた。その教室のドアにはなにも書かれていない。

「ここ、なんの部屋だ？」

暗くて、なにも見えない。かといって、電灯を点けるわけにもいかない。

誠司はゆっくりと歩を進める。フィーはといえば、誠司の背中に抱きつくようにしがみついていた。

「まったく……歩きにくいんだって」

「怖いんだもん……」

フィーは震えた声で言った。

「なんだ、ここ？」

その声に、フィーは恐る恐る誠司の背中から覗き見るように教室を見た。

「なに？」

二人の目の前には、机やら椅子やらが積み重ねられていた。よく見ると、そこは教室ではなかった。そんなに広くもなく、しかも窓はわずかな小窓しかない。

「もしかして、ここって……倉庫？」

「みたいだな。で、ここにはあるのか？」

「さあ……？」

「……………」

誠司は固まった。

「もしかして、この中から探せってのか？ その、あるかどうかもわからん地図を」

フィーは申しわけなさそうに頷いた。

「ったく……これじゃ、学校荒らしみたいだな……。でも、それしか方法がないんなら、仕方ないな」

そう言いながら、誠司はそれらしい物がないか探し始める。フィーは、そんな誠司にくっついたままだ。

「おい、探しにくいって。それに、一緒に探してくれよ。元々、フィーの……」

そこまで言った時、誠司はフィーが泣いているのに気付いた。

「お、おい。悪かったって。だからさ、な。泣かないでくれよ」

「……怖い」

フィーは囁くような声で言った。

「怖いんだもん。お化けとか出そうじゃない。夜の学校って怖いんだもん……」

「仕方ないな。じゃあ、そこでじっとしているよ。すぐに終わらせるから」

誠司は、フィーを部屋の隅にいるように言った。

*

「さてと、今日はここに泊まりか……」

「……え？」

「だって、仕方ないじゃないか。今日はこの屋敷で寝ようか」

そう言い、ヨハンはスタスタと中に入っていった。

考えてみれば、二人はまだこの中に入っていないのだ。という事は、中がどうなっているのかわからない。そんな所で一晩明かそうというのだ。亜依は恐怖を感じていた。

「大丈夫だって」

根拠のない断言だった。

「別に、幽霊とか出るわけじゃなし。平気、平気」

(平気、平気って、どこからそんな……)

亜依はビクビクしながらも、ヨハンのあとをついていった。

洋館の中は、埃だらけだった。真っ黒な猫が一晩で白猫になってしまうだろう。

「ホントにここで？」

「外で寝る？」

「う……」

亜依は心を決め、ここで寝る事にした。

「二階にも部屋があるみたいだな。ちょっと行ってみる？」

亜依は首を振った。

「探検なら、明るい時に行かない？」

「……仕方ないか」

「じゃあ、あたし、ここで寝るから」

亜依は玄関を入れてすぐ右にあるリビングに入っていった。

「わかった。オレはここで寝るから」

ヨハンはその部屋のドアの所に座った。

「ほら、これ使いなよ。それとこれも」

そう言い、ヨハンは亜依に寝袋と缶詰を渡した。

「なんも持ってねえだろ？ それに、なにも食べてないし。オレはもう寝るから。おやすみ」

ヨハンは、ドアの前に座り、膝を抱えて目を閉じた。

「ありがとう」

亜依は小さくお礼を言った。

*

結局、倉庫からはそれらしい物が見つからなかった。

「つとに……どこにあるんだ？」

「ごめんなさい。アタシ全然役に立てなくて」

「いいって。無理する事ないよ」

「優しいんだね」

「……………」

誠司は、照れ臭くなって鼻の頭を掻いた。

「他の部屋も見てみるか」

そう言って、倉庫の隣の部屋に入っていった。そこには、大量の本があった。

「ここ、資料室ってやつか？」

「……そうみたい」

「じゃあ、いっちょやりますか。フィーは、またそこにいてくれよ。ついでだから、その近くにある本を調べてくれると有難いんだけど」

「……わかった」

誠司は、手当たり次第に本をバサバサと逆さに向けて、なにか挟まっていないか調べた。フィーも近くにある本を手に取り、ペラペラとめくってなにかないか調べた。

しかし、なにも見つからなかった。もちろん、本棚を動かせば隠し扉がある、なんて事もなかった。

そのあと、一階にあった部屋——倉庫や資料室ばかりだった——を半分ほど調べたが、結局なにも見つからなかった。

「そろそろ朝だ。終わりにしようか」

「……うん」

そして、夜は明けていった。誠司とフィーは、夜が明ける前に学校をあとにした。

*

翌朝作業を再開したが、結局、一本目にはそれらしいものはなかった。

「手伝おうか？」

「大丈夫だって」

(くう～、それにしても、フィーにはない優しさだよな……)

そんな事を考えながらも、ヨハンは穴を掘り続けた。しかし、目的の物は全く顔を見せない。

「見つからないな……」

「そうですね……」

ヨハンは汗を拭いつつ、次の木へ向かう。亜依は自分の無力さが我慢できなかった。亜依は無言でスコップを取り、別の木の根元を掘り始めた。

「富所さん……」

「いいの。あたしだって出来るんだから」

「……」

ヨハンは、そんな亜依を見てなにも言えなかった。

「無理はしないでね」

亜依は頷いてみせた。

「さてと、オレもうかうかしてられないな」

亜依の態度に、ヨハンも力が戻ってくるような気がした。

*

「明るいうちになにもできないってのは、なんか辛いな」

「確かに。明るければ、あんなに怖い思いしなくてもいいのに」

誠司とフィーは、近くのファストフード店で朝食を摂っていた。

「なんでもいいけどさ、これ、俺の金なんだからな」

「ごちそうさま」

フィーは美味しそうに食べ続けている。

(まあ、それだけ美味しそうに食べられたら、なんか文句も言えないな)

誠司はコーヒーを一口飲んだ。

「やっぱり、不自然かな？」

「なにが？」

「アタシたちがここでこうしている事」

言われて、誠司は店内を見渡した。確かに、この時間は誠司たちと同年くらいの客はいない。なにより、客自体が少ない。

「そうだな、ちょっと不自然かもな」

「でしょ」

「でも、いいんじゃないか、別に」

フィーは無言のまま頷き、ハンバーガーを齧る。

「ん、美味しい」

フィーは、満面の笑みを浮かべる。それもそのはず、フィーはずっと施設にいたため、ファストフード店に来る事などほとんどなかった。フィーにしてみれば、最高のご馳走なのだ。

「さて、これからどうする？」

誠司が訊いた。

そう、学校は夜になって、誰もいなくなるまで入る事はできない。つまり、昼間はする事が無いのだ。

「どうしよっか……」

フィーはため息をついた。

*

「はあ、はあ、はあ……」

亜依は、少し掘っただけで息が切れてきた。

「大丈夫？」

「う、うん……だい、じょうぶ」

息も切れ切れに言う。

「休みなよ」

「……だいじょう、ぶ……だって……あっ……」

亜依は、膝の力が抜けて、その場に座り込んだ。

「大丈夫？」

ヨハンは、亜依の所に駆け寄った。そこには、汗だくで、泥にまみれた亜依の姿があった。

「やっぱり、慣れない事はしない方がいいね」

亜依は無邪気な笑みを浮かべた。

「あとはオレに任せろって」

「ごめんなさい」

「いって」

ヨハンは気合いを入れ直し、再び穴を掘り始めた。

亜依も、ゆっくりとながらも掘り続けた。すると――

「あった！」

亜依は、金属の箱を見つけた。

「ホントか」

ヨハンが慌てて駆け寄ってくる。

「あ……」

そこには、確かに金属の箱――金庫があった。

「ん……」

ヨハンは金庫を出そうとするが、重くて運び出せない。

「仕方ない。鍵を開けて……」

しかし、もちろん施錠されており、扉は開かない。

「そうだ、鍵」

ヨハンは、自分が持っている鍵を鍵穴に差し込んだ。扉が開いた。

「やった！」

と、喜んだのも束の間。その中には、また金庫が入っていた。

「マジかよ……」

ヨハンは肩を落とした。

「また、鍵探しか……じゃあ、これはここに置いて、別の鍵を探しに行こうか」

そう言ってヨハンが立ち上がった時、亜依は母親の梨架にもらった鍵を思い出した。

「これ……」

亜依は鍵を差し出した。

ヨハンは、早速その鍵を試した。が、結局ダメだった。

「やっぱり、行くしかないか」

亜依は頷いた。

二人は『時の口』で世界を移動した。

*

夜になった。昼間は公園で暇を潰していた二人の行動時間だ。

「やっと探せるな」

「あ～あ、退屈だった」

フィーは、大きな欠伸をした。

「確かにな。で、今日は手伝ってくれるのか？」

「う……」

フィーは言葉を詰ませた。

「いいよ、別に」

二人は夜の学校に忍び込んだ。それにしても、この警備体制はどうだろう。

相変わらず、フィーはビクビクしながら廊下を進んでいく。

二人は、階段の近くまで来ていた。

「おい、大丈夫なのか？」

フィーは、誠司にしがみつくようにして歩いていた。

「だって……」

昼間の強気はどこへやら、夜のフィーは昼とは正反対だ。

「お化けとかって、怖いんだもん」

フィーは、目を潤ませながら言う。

「大丈夫だって、そんなもの出やしないよ」

「でも……お化けと幽霊とゴーストはダメなの」

フィーは、指を折って数えながら言う。

「……どこが違うんだ？ 一緒じゃないのか？」

「とにかく、ダメなものはダメなの！」

「そんな、ムキにならなくても……じゃあ、亡霊とか、ゲシュペンストとかは？」

「……いぢわる」

フィーは、目を潤ませて言う。

「でも、大丈夫だって。俺がいるからさ。側にいるから」

誠司が優しく肩に手を置きながら言う。フィーは誠司の顔を見て、

「アリガト」

と、小さな声で言った。誠司は頷いた。

——カタッ！

「ヒャッ！」

物音に驚き、フィーは誠司に抱きついた。

「ちょっと見てくる」

言うと、誠司はフィーの身体を離し、音がした方向に歩いていった。

「ちょっと待ってよ」

フィーが慌てて追いかける。

「側にいるって言ったのは、どこのどいつよ！」

フィーは、怖さを紛らわせるため、わざと大きな声を出した。

音がしたであろう場所は、階段の下だった。

「こんな所にドアがある」

誠司は、階段下のスペースに小さなドアを見つけた。それは、壁とほとんど区別が付かない。

「ちょっと……」

追いついたフィーが、むくれ顔で文句を言いたそうに誠司を見た。誠司は、これを見ろ、と顎でドアを指した。

「ん……？」

フィーは、恐る恐る誠司が指した所を見た。

「ドア……」

そう言い、誠司の顔を見る。誠司は頷いた。

「音はこの中からだと思う」

誠司はドアに手を掛けた。フィーが息を呑む。誠司は手に力を入れ、ドアをゆっくりと開けた

。

「キャッ！」

ドアを開けた瞬間、中から少女らしい声がした。その声の主は、懐中電灯を誠司に向けた。誠

司は眩しさのあまり、目を手で覆った。

「どうしたの？」

フィーがゆっくりと中を覗く。

「だ、誰……？」

少女は、光を誠司に向けたまま、腰を抜かしたように座って言った。手が震えているのか、光も小刻みに震えている。

「君こそ誰なんだ？ って、その前に、ライト、ライト……」

「あ、ゴメンナサイ」

気付いて、少女は懐中電灯の光を天井に向けた。

「あなたは？」

フィーが少女に訊いた。

「あ、あなたたちこそ。普通、人にものをたず訊ねる時は、自分から名乗るものでしょ」

「それもそうだね。俺は椎崎誠司。この学校のどこかにある地図を探している。そして、こっちがパートナーの……」

「ジョセフィーヌ。フィーって呼んで」

フィーは笑みを浮かべて言った。

「で、君は？」

少女は一瞬戸惑って、

「あたしは、夏菜。楓夏菜」

そう、囁くような声で言った。

「で、その夏菜ちゃんは、ここでなにをしてるの？」

初対面にもかかわらず、誠司は相変わらずのちゃん付けで呼ぶ。

「な、夏菜ちゃん……いきなり、ちゃん付け……」

夏菜は頬を赤らめた。

「そんな事はどうでもいいから……」

「よくない。恥ずかしいじゃない」

「わかったから。夏菜ちゃん、どうして君はここに？」

「わかってない！」

「ゴメンね、夏菜ちゃん。この人、こういう人みたいよ」

フィーが、なんとかフォローする。

「……………」

夏菜は頬を赤らめながら、誠司を睨むように見た。

「まあ、いいわ」

「で、夏菜ちゃんはどうして？」

夏菜の機嫌を損ねないように。今度はフィーが訊く。

「あたしは……番人だから」

言っているものか戸惑いながら言った。

「番人？」

誠司が首を傾げる。

「そう、番人。この扉の、この部屋のね」

そう言い、夏菜は部屋—部屋というよりは階段下の倉庫のような空間なのだが—を見渡した。

「ここは扉の中。開かずの間ってところかな」

夏菜はしれっと言う。それを聞いた瞬間、フィーの背筋が凍った。

「そ、それって、マズインじゃ……」

フィーは肩を抱いて震えている。

「大丈夫。番人のあたしがいるんだから。それに、この扉を見つけれたのなら大丈夫」

「それって……？」

最後の方が気になり、誠司が訊いた。

「あなたたちも、なにかの能力があるんでしょ？」

「……………」

「……………」

その言葉に、誠司とフィーはなにも言えなかった。

「違うの？」

夏菜が不思議そうに訊いた。

「そ、それは……どうして？」

フィーがうろたえる。

「この部屋は開かずの間だって言ったでしょ」

「それが？」

「普通の人には見えないの。この部屋が見えて、そして入れるというのは、この鍵を持っている人か、なんらかの普通じゃない能力を持っている人だけなの」

夏菜は、自分のポケットから古い鍵を出した。

「君の能力って？」

誠司が、唐突に訊いた。一瞬、夏菜がうろたえる。

「ちょっと……夏菜ちゃんは鍵を持っているからで……」

「違うね」

フィーがフォローするが、誠司はそれを即座に否定する。

「君はなんらかの能力を持っている。しかも、同じように能力を持っている誰かとここに来た事がある。違う？」

夏菜はため息をついた。

「理由は？」

落ち着いたのか、動揺する事なく訊き返す。

「理由か……。そうだな……」

誠司は少し考えた。

「ひっかかったのは、君がなんの抵抗もなく『なんらかの普通じゃない能力を持っている人』と言った。これは、君もなにかの能力があるから自然に言えたんじゃないの？ 能力がなければ、尋常でいられないだろうし、それにそんな発想がなにもないところから出てくるなんて思えない」

夏菜は肩をすくめた。

「残念ね。それはハズレ。この学校にはね、そういう伝統があるの。そんな事、みんな知ってるわ」

夏菜が反論する。

「じゃあ、鍵が無くても能力を持った者なら入れるというの？」

「え、ええ……」

「ふう～ん、そうなんだ。俺はてっきり、夏菜ちゃんの友達に能力者がいるのかと思ったんだけどな……。違ったか」

誠司は、残念そうに言った。

「わかったでしょ。だから、あたし以外ではなにかの能力を持った人しか入れないの。それを知ってたから、驚かなかっただけ。もう、いいでしょ」

「そうか……でもね、夏菜ちゃん是这样言ったんだよ。『あなたたちも、なにかの能力があるんじゃないの？』って。『あなたたちも』ってね」

夏菜は、あっ、と手で口を被った。

「反論は？」

「……ないわ」

夏菜は、覚悟を決めたかのように言った。

「確かに、あたしには能力がある。輝という能力がね」

「ユニオ？ それって、どういう能力なの？」

フィーが訊く。

「人の心を輝かせるの。仲間と三人で力を合わせて……」

「へえ～。そんな能力もあるんだな……。あ、ちなみに、俺は時空を渡る能力なんだ」

誠司は、この不思議な能力に心底感心した。

「アタシは時空を見る能力」

フィーも自分の能力を告げた。

「それはそうと、夏菜ちゃん」

誠司が、本来の目的に戻そうと話を切り出す。

「だから、ちゃんは……」

「じゃあ、夏菜」

「それはもっとイヤ」

「どう呼べばいいんだよ」

「楓さん、とか……」

夏菜は、照れながら言う。

「やっぱ、夏菜ちゃん」

「……………」

一瞬、沈黙が支配する。

「で、あんたはなにが言いたかったの？」

「そうそう。地図の事、なにか知らないか？」

やっと言えた。

夏菜は、首を振った。

「でも……この扉がどうしても開かないの」

夏菜は、懐中電灯の光を当てた。それは、古ぼけた棚だった。それは南京錠で施錠されていた。

「開かないって……壊してしまえばいいじゃん」

「ダメ！」

夏菜が力いっぱい言う。

「これはダメなの。昔から伝わってきた伝統だから」

「伝統ね……」

誠司は、長野県鬼無里村での事を思い出した。あの村の姉妹も、伝統という名の鎖で縛られていた。誠司は、伝統というもののチカラを改めて感じた。

「この鍵があれば……」

夏菜は淋しそうにその南京錠を見た。こんな鍵は伝統にはないのだ。という事は、この鍵は過去の番人の誰かがした、という事になる。夏菜は、大切な伝統が汚された様な気がしたのだ。

「鍵、ね……」

フィーはヨハンが持っている鍵を思い出していた。

「ねえ、鍵を探しましょうよ」

「探す？ 鍵を？」

「そう、あなたの力を使って……」

誠司は一瞬迷ったが、

「しゃーないか、ここに地図があるかもしれないだし。鍵を探しますか」

フィーは頷いた。

こうして、誠司とフィーも『時の口』を使い、世界を移動した。

亜依とヨハンは、『時の口』を通して移動した世界は――

「……………」

「……………」

――ジャングルだった。いきなりの光景に、二人は絶句した。

「どうする？」

ヨハンは周りを見渡した。しかし、どこを見ても同じ景色だった。ただ、木があるのみだ。三百六十度、どこを見ても木しかない。上を見ても、わずかに隙間から光が差し込むだけだ。上も木に覆われている。下はといえば、木の根が地面から顔を覗かせている。二人は、完全に木に包まれていた。

「どうするって言われても……」

亜依も戸惑いながら周りを見た。

「なにも見てない……よな」

亜依は申しわけなさそうに頷いた。それを見て、ヨハンはため息をついた。

「どうしよっか……無闇に歩き回るのは、ヤバイよな」

ヨハンは、独り言を言うかのように呟いた。そして、近くの木を見た。木には、なにかの蔓が巻きついている。なんとか足場になりそうだ。

(登れるかな……)

ヨハンは、その木を軽く叩いてみた。軽い音はしない。空洞の木ではないようだ。それから、軽く揺さぶってみる。ほとんど揺れない。根もちゃんとしているようだ。

(大丈夫そうだな)

頷くと、ヨハンはその木に巻きついている蔓に手をかけた。

「ヨハンさん……」

亜依は、ヨハンのしようとしている事に気付き、声をかける。ヨハンは、大丈夫、とでも言うかのように笑みを返した。

ヨハンは、蔓に足をかけた。これで、足が地面から離れた。ヨハンは、慎重に確認しながら、少し上にある蔓に手をかける。そして、ゆっくりと足をかける。慎重に、慎重に登っていく。

「大丈夫ですか？」

半分ほど登った所で、亜依が声をかける。

「ああ、大丈夫」

蔓にしがみつきながら、なんとか返事をする。

(でも、やっぱきついな……)

ヨハンは上を見た。

(……………)

そこには、もうほとんど蔓がなかった。もう少し登れば、そこからは純粹に木登りをしなければならない。しかし、ヨハンは木登りなどした事がない。

(どうしようかな……)

ヨハンは、途方に暮れて上を見ていた。ただ、蔓がある限界の所で見渡せるのを祈るのみだ。しかし、見た限りでは、それは無理というものだった。

(……………)

ヨハンは、上を見上げたまま固まった。

(とりあえず、登るしかないか)

ヨハンは、蔓がある限界まで登ってみる事にした。

熱帯の湿気と汗が混ざって、ヨハンのシャツはベトベトになっていた。そんな気持ち悪さを感じつつ、ヨハンは少しずつでも登っていく。暑さと湿気で、体力の消耗が普段とは比べものにならないくらい激しい。温帯気候での木登りならまだしも、熱帯での木登りは想像以上に辛いものがある。ヨハンは、息も絶え絶えになりながらも、なんとか蔓の限界まで登った。

(……やっぱ無理か)

そこまで登ってみて、改めて肩を落とした。そこからでは、周りを見渡す事など、まるでできない。地上と変わる事なく、ただ木が見えるのみだ。

ヨハンは意を決し、さらに登る事にした。

先程までは蔓があったので登りやすかったが、ここからは、そうはいかない。自力で登るしかない。

ヨハンは、木に抱きつくようにしがみついた。手足をばたつかせるだけで、ズルズルと下がってしまう。

(……………)

ヨハンは赤面した。そんな醜態を亜依に見られてしまったのだ、無理もない。

それでも、亜依はそんなヨハンを優しく見守っていた。そこに、揶揄の感情は微塵もない。ただ、必死になっているヨハんに感謝こそすれども……。

ヨハンは、どうにかしようと必死で考えた。枝はあるにはあるのだが、折れてしまいそうな気がして足をかける事ができない。ここから落ちたらどうなるんだろう。そんな考えがよぎる。それでも、なんとか勇気を出して、少し上の枝に手をかけてみる。少し体重をかけてみると、ミシッとイヤな音がした。ヨハンは慌てて手を放す。慌てて放したため、バランスを崩して危うく落ちそうになる。

その様子を見て、亜依は慌てて目を手で覆う。

ヨハンは、手近にあった蔓を掴み、なんとか落ちる事だけは免れた。しかし、状況がよくなったわけでもない。全く変わっていないのだ。ヨハンはバランスを取りながら、手に滲んだ汗をズボンで拭う。ずっとこのままでいるだけでも辛い。動かなくとも、バランスを取るだけで体力が奪われていく。

(ヤバイな……)

次第に、暑さと疲労から、意識が朦朧としてきた。

身体から力が抜けていく。しがみついている手が、蔓から離れていく。蔓にかけて支えている足からも力が抜けていく。そして、ヨハンの身体は……。

「キャーッ！」

亜依は目を手で覆いながら、叫び声を上げる。

ヨハンの身体が地上めがけて落下していく。

(もうダメだ)

ヨハンは死を覚悟した。落ちただけでは死ぬ事はないだろう。だが、ここは都会ではない、ジャングルなのだ。どんな小さな怪我でも、そこからどんな病原菌が侵入するかわからないのだ。ジャングルでの怪我は、死に近い。しかも、季節が夏だった事もあって、半袖というジャングルでは致命的ともいえる服装なのだ。

落ちている瞬間、ヨハンの脳裏によぎったのは、フィーこと木元綾乃の顔だった。

(綾乃.....)

――ガクッ！

その時、ヨハンの身体がうつ伏せに、項垂れるような格好で枝に引っかかった。

(オレも相当悪運が強いみたいだな)

ヨハンは、自分の運に感心した。

「ヨハンさん.....」

ゆっくりと手をどけ、その様子を見た亜依は、安堵のため息を洩らした。

「へへっ」

ヨハンは、下にいる亜依に、ボロボロになりながらも、笑ってみせた。

その笑顔を見た時、亜依の目からは大粒の涙がこぼれた。

*

ヨハンは枝の上に座り、しばらく休んだあと、ゆっくりと降りてきた。そして、降りてくるなり、ドシッと腰を下ろした。

「大丈夫ですか.....？」

亜依は、まだ涙を浮かべたまま心配そうな顔で訊く。

「ああ、大丈夫。それより、ゴメンな」

自分の無力さがイヤになった。

「え.....？」

亜依は、ヨハンがなにを謝っているのかがわからなかった。

「ゴメン、結局なにもわからなかった。その上、心配させて.....」

亜依は首を横に振った。

――ゴロゴロ！

その時、雷鳴が響いた。鬱蒼と覆っている木の隙間から見ると、わずかに空が暗くなってきている。スコールだ。しかし、二人はそんな事を知っているはずもない。ただ、亜依が震えているだけだ。

「なんだ？」

ヨハンは、わけがわからず、うろたえていた。

そうこうしているうちに、ポツポツと降り始めたかと思うと、次の刹那、ザーっと滝のように降りだした。

「うわっ！」

「きゃっ！」

二人は慌てて走り出す。これといった目的地もなく、ただ闇雲に走った。雨がしのげる場所を探して。しかし、ジャングルにそんな場所など、どこにもなかった。あるのは木だけなのだ。熱帯雨林に囲まれた地において、洞窟などの場所は全くとっていいほどないのだ。

いくらか走って、二人は大木に寄りかかるようにして座った。この大木は、他よりも葉が密集していて、それが傘のようになっているのだ。

「ふう〜」

ヨハンは、そこに座るなり安堵のため息をついた。木に登ったあとに、自然界のシャワーの中を全力で走ったのだ、もう体力が残っていない。フルマラソンとトライアスロンを連続でしたような気分だ。

それに少し遅れて、亜依もその木にやってきた。何度か見失いそうになったが、それでもなんとかヨハンのあとを追ってきたのだ。

「はあ、はあ、はあ……」

亜依は、息を荒げながら、その場に倒れた。

「大丈夫か」

ヨハンは、慌てて声をかける。

「はあ……はい、大丈夫です。ちょっと、全力で走ったから……」

亜依は胸を大きく上下させていた。まだ、息が落ち着かない。それでも、しばらくすると息が整ってきた。その頃には、スコールもおさまっていた。と同時に、夜が訪れた。急に真っ暗になる。二人は、その場で眠る事にした。しかし、服がびしょ濡れだ。そのまま眠れば、間違いなく風邪をひいてしまう。亜依は手ぶらで来たので、もちろん着替えなどない。

「別の世界に一度行って……」

ヨハンはそこまで言って、それが無理である事に気付いた。先程のスコールで、闇雲に走ってしまった。これでは『時の口』がどこにあるかわからない。しかも今は夜。この暗闇の中、どんな猛獣がいるかもしれない中を歩くのは無謀だ。亜依もそれに気付いたのか、なにも言わない。そうこうしている間にも、どんどん体温が奪われていく。

なにかないか、ヨハンは必死で辺りを見回す。すると、少し先で木が途切れている。二人は、その場所に向け、ゆっくりと歩き出した。

*

そこには、なんとか文明の遺跡だろうか、小さなピラミッドがあった。その場所だけ、大きく拓かれている。

「ここなら、なんとか大丈夫そうだな」

ヨハンはそれに近づいていった。

「そう、ですね……」

亜依は、真っ赤な顔をして言った。

「顔が赤いけど……大丈夫？」

亜依は、力なく頷いた。

「あたし、日焼けするとすぐ赤くなるから……きっと、ジャングルにいて日焼けしたんだと思う」

「そう……」

そう言い、ヨハンは神殿の中に入っていった。中は薄暗く、足下さえ見えない。

「はあ、はあ、はあ……」

亜依は、息を荒げて、壁にもたれかかった。ここに誠司がいれば、体温を奪われるからあまりもたれない方がいい、とでも言うのだろうが、ヨハンはその事を知らないし、言わない。

「今日はここで休もう。オレは、入口の方を見張ってるから、富所さんは、この辺りで寝て」

「ありがと……」

亜依は力なく返事をし、そのまま横になった。

*

翌朝、ヨハンは目を覚ますと、亜依の様子を見るために奥に入っていった。

「……………っ」

ヨハン、亜依を見て声が出なかった。亜依は、真っ青な顔色で、息を荒げ、異常に汗をかいていた。

「富所さん！」

ヨハン、どうしていいのかわからず、ただうろたえるばかりだった。

「風邪？ それとも、なにか別の……？」

しかし、ヨハンに判断できるものではなかった。

(どうしよう……どうしたらいいんだ……)

ヨハン、なにをどうすればいいのか全くわからず、オロオロとするばかりだ。

(どうするんだ？ ……とにかく、ここじゃダメだ。もし風邪だとしても、ここじゃヤバイ)

ピークを越えると、逆に落ち着いてきた。冷えた頭で、ヨハン、必死にどうすればいいのか考えた。

(このまま富所さんを置いて、オレ一人で『時の口』を探す。そして、それから戻って……ダメだ。それじゃ、二度手間になる)

ヨハン、唸りながら頭を抱えた。一刻も早くなんとかしないと、亜依の命が危ない。その事は、無意識的ながらも感じていた。

(危険は増すし、歩くのも時間がかかるかもしれないけど、やっぱりここは富所さんを担いで行

く方が……)

ヨハンは大きく頷いた。

「よいしょっ」

ヨハンは、亜依の手を自分の肩にかけて起こす。

「富所さん、もう少しだけ我慢してくれよ。絶対『時の口』を見つけて、なんとかするから」

その言葉に、亜依は力なく頷いた。その時、わずかに亜依は口を歪めて笑顔をつくったが、ヨハンはそれに気付かなかった。

ヨハンは、亜依を背負う事にした。荷物のリュックは、手に持つ事にした。動けない人間というのは、実際の体重以上に重く感じる。最初ヨハンは、小柄な亜依なら大丈夫だ、と思っていたが、いざ歩き出すと、その考えは間違っていたと悟った。だいたい、ヨハンもどちらかといえれば小柄の部類に入るのだ。

「……だい、じょう、ぶ、です、か……」

亜依は、途切れ途切れに、か細い声で言う。

「大丈夫だって。これくらい、なんでもないって」

ヨハンは、亜依を心配させまいと、精一杯の笑顔で言う。亜依は、その笑顔の中に苦悶の表情を見つけたが、一生懸命なヨハンを見て、甘える事にした。

(ありがとうございます。ごめんなさい)

ヨハンは、ずれてきた亜依を元の位置に戻しながら、草をかき分けて進んでいく。亜依にはリュックの底にあった薄手のパーカーを着せているが、自分は半袖である。どうしても草や木の枝で手を切ってしまう。しかし、そんな事に構っている余裕はなかった。もちろん、そこからどんな菌が入るかわからないのだが、ヨハンの頭の中は亜依を助ける事でいっぱい、自分の事など全く気にも留めていなかった。

(多分、こっちの方だよな……)

スコールの際、闇雲に走ったので、正確な方角がわからない。なんとなくの記憶を頼りに進むしかないのだ。あの時、冷静になっていれば、と後悔するが、すでに遅い。

時々、亜依の顔を見るが、苦しそうな表情は変わらない。むしろ、前よりも苦しそうにしている。それを見て、ヨハン焦ってしまう。冷静さを失う事が命取りになる事はわかっているのだが、冷静にならなければと思う度、逆に熱くなっていく。

ジャングルの中で方向を知る術は、ほとんどない。同じような景色が続くし、空も木に覆われていて見えない。よほどわかりやすい目印でもない限り、元の場所に戻る事は難しいのだ。

それでも、ヨハン必死で走った。言葉通り、そこには、死が背中合わせにある。一步間違えば、もしかするともうすでに、死へのカウントダウンが始まっているかもしれないのだ。

ヨハンがどれだけ必死で走っても、一向に『時の口』が見えてこない。それどころか、自分がどの辺りにいるのかさえわからない。

「ヨハンさん、あたしは……いいから……」

背中から、力のない亜依の声がした。

「大丈夫。絶対なんとかするから」

ヨハンは、息を荒げながらも、必死で走っていた。

(ちくしょー！ オレの体力も限界か……)

ヨハンの足はもう限界だった。先程から、地面の窪みや木の根に足をとられるのが多くなってきた。亜依を背負いながら、全力疾走をしているのだ。普通に走るのとは比べものにならない。第一、整備された場所ではないのだ。バランスをとりながら走るだけでも相当なものだ。

「あっ……………」

もうダメだと思った時、ヨハンはこの世には神様がいると確信した。神様でなくとも、それに類するものがあると思った。諦めかけたヨハンの目の前に、それはあった。

「富所さん、もう大丈夫だ」

「……………あ」

亜依は、わずかに息を洩らしただけだった。ヨハンは頷いて、目の前にある『時の口』に入っていた。

*

二人は、ヨハンが住んでいる児童施設——『博愛館』の中庭にいた。ここは、ヨハンとフィーが初めて通った『時の口』がある場所だった。

「ここなら大丈夫だ。待ってて。すぐに保健室に連れていくから」

ヨハンは、こっそりと中に入り、保健室へと向かう。突然、家出をした事がうしろめたかったのだ。幸い、廊下にも、保健室にも、誰もいなかった。

なんとか誰にも見つからずに保健室に来たのはいいのだが、どうしていいのかさっぱりわからない。とりあえず、亜依をベッドに寝かせる。

「ああー、どれがなんだか、さっぱりわかんねえ」

ヨハンは、とりあえず色々な薬を出して、その効果を見ていく。しかし、さっぱりわからない。

その物音を聞きつけて、誰かが保健室に入ってきた。

「誰？ 誰かいるの？」

若い女性の声だった。ヨハンはビクビクしながらその声の方を向いた。

「あ……成海」

そこにいたのは、同じく施設で暮らしている工藤成海だった。

「舜平、どうしたの？ あんた、急に出て行ってさ。みんな心配したんだよ。舜平、綾乃は？ 綾乃は一緒じゃないの？ それに、その格好。泥だらけじゃない」

「それよりさ、風邪薬ってどこにあるのかな？」

「あんた、風邪でもひいたの？」

「オレじゃなくって……」

ヨハンは、視線をベッドに向けた。

「え……？ え……？ ちょっと、舜平、誰？」

成海は困惑の表情を浮かべる。見ず知らずの少女がそこにいたのだから、無理もないだろう。しかも、その少女はなにかの病気で苦しんでいるのだ。

成海は亜依をじっと見て、

「舜平、救急車呼んで」

と、いきなり言った。

「え……？」

ヨハンは、予想だにしていなかった言葉に驚いた。

「そんなに悪いの？」

「わからないわよ。わからないから、なんの病気だかわからないから呼ぶの。ほら、さっさと電話して」

「あ、うん」

ヨハンは、急いで電話をかけた。それから十分ほど経った頃、救急車が到着し、亜依は病院に運ばれた。

検査の結果、亜依はただの風邪だった。しかし、肺炎をおこしかけていて、もう少し遅ければ危険だっただろう、と医者に言われた。

「よかったじゃない、大丈夫で」

「ああ」

ヨハンは、安堵から、気の抜けた返事をする。

「で、あの子は誰なの？」

成海は、じと一とした目でヨハンを見る。

「あ、富所さんは、あの……」

ヨハンは、どう言えばいいのかわからず、口ごもる。

「へえ～、あの子、トドコロさんっていうんだ。で、どこで知り合ったの？ あんたにはもったいないくらい可愛いじゃない」

「だから、その……。なんつったらいいのか……」

「ほれ、はっきりしなさい。それとも、綾乃に知れたらマズイとか思ってるの？」

「いや、それは違う」

ヨハンは、それははっきり否定した。

「だったらなによ。それならいいんじゃないの？」

「いや、ただ……」

「ただ、なによ？」

「その……」

「言いなさいよ」

「それよりさ、園長先生は？」

ヨハンは、なんとか話題を変えようと試みた。

「ああ、園長先生は出掛ける。で、あの子は？」

その作戦は、無駄に終わった。

「ゴメン、言えない。でも、フィー……いや、綾乃も知ってる」

成海は、なにも言わなかった。二人は、しばらく病院の廊下にいた。

だが結局、入院する事になった亜依をおいて、二人は『博愛館』に戻った。

*

『博愛館』に戻ると、二人は園長室へ行くように言われた。園長室では、園長先生が二人を待っていた。

「二人とも、なにがあったんですか？」

優しく微笑みかける。

「その……ごめんなさい。園長先生にも言えません」

園長先生は、ゆっくりと頷いた。

「わかりました。言えないのなら、無理には訊きません。もし、言える時が来れば、その時に聞かせてください」

「ありがとうございます、園長先生。それと、ずっと黙って外出していて……その……ごめんなさい」

「いいですよ。それは心配でしたけど、なにもここに拘束するつもりはありません。ここは、なにかあった時にでも、いつでも帰ってこれる《家》なのですから」

園長先生は、語りかけるように、優しく言った。ヨハン—舜平は、それを聞いて涙が止まらなかった。

「先生、あたし、あの子の看病に病院に行ってきます」

「お願いします」

「では……」

「あ……っ」

出ていこうとすると、それを止めるかのように、舜平は声を出した。

「なに？」

「それは、オレが……。だって、オレの責任だし……」

「いいわよ。あたしが行く。あの子だって、女同士の方が楽でしょうし。ところでさ、あの子の親には報らせなくてもいいの？」

言われて、舜平は、初めてその事に気付いた。

「そっか……でも、オレ、彼女の両親なんて知らないんだ。それに、連絡先とかも」

「ホント？ あんたさ、なにやってんの？ なんか、ヤバイ事とかやってんじゃないでしょうね」

「それはない。信じて」

「だったら……」

「だから、ゴメン。なにも言えないんだ」

「もう……」

「成海さん、あの子の所へ行っておあげなさい」

「わかりました」

園長先生に言われ、成海は園長室を出ていった。

「あなたも、自分の部屋に戻って、今日はゆっくり休みなさい」

「……わかりました」

舜平も園長室を出、自分の部屋に向かった。

今まで自分が使っていた部屋は、以前と全く変わっていなかった。誰かが掃除してきてくれたのだろう、埃が積もってもいなかった。むしろ、以前より綺麗になっているくらいだ。

「多分……成海だろうな……」

舜平はなんとなくだが、そう思った。事実、成海が掃除をしていたのだが。

成海もここでお世話になった一人なのだが、彼女は高校に通いだすと同時に、彼女が最年長者

であった事もあってか、ここで暮らす他の小さな子どもたちの面倒を自然とみるようになった。それ以来、高校を卒業したあとも、ここで働いている。舜平だけでなく他の子どもにとっても、成海はよきお姉さんなのだ。

舜平はベッドに横になった。ここにいる間は、自分はヨハンとして旅をしていた時とは違い、今までの平凡な普通の高校二年生の竹内舜平になれるような気がした。

「そういえば、綾乃はどうしてるのかな……」

舜平は、どこか別の場所で椎崎誠司と地図を探しているであろう、木元綾乃の事を自然と考えていた。

「これから、どうしたもんかな……」

天井を見上げ、舜平はこれからの事を考えていた。

＊

しばらくして、病院のベッドの上で亜依は目を覚ました。

「……あっ……」

見慣れない光景に戸惑う。しばらくボケーツとしたあと、亜依は自分がおかれている状況をなんとか把握しようとした。体が重く、頭もぼんやりしている。ゆっくりと、周りを見る。

自分はベッドに寝ている。天井は白い。周りは白いカーテンで囲われている。そして自分の左手には……点滴。

(びょう……いん?)

なんとか身体を起こそうとしたが、できなかった。

「あら、目が覚めた？」

成海は、その物音に気付いて、カーテンを開けた。

「え……っ？」

亜依は、見た事のない女性がそこに立っていたので、驚いた。どう見ても医者には見えない。「ゴメンね。驚かせちゃった？ あたしは工藤成海。舜平と同じ施設にいるの。まあ、あいつは弟みたいなもの……かな」

成海は、底抜けの笑顔で言った。

「え……？ シュン……ペイ……？」

亜依は首を傾げた。

「あれ？ 名前知らなかったの？ てっきり知り合いだと思ったんだけど……」

亜依は一瞬考えて、

(ああ、ヨハンさんの本名……)

「あ、いえ……」

「知り合いじゃないの？」

「その……舜平……さんから聞いてないんですか？」

成海は頷いて、

「そうなの。あいつ全然教えてくれなくて。そうだ、ご両親に連絡しておいた方がいいんじゃないの？」

「あ、いえ……その……あまり心配かけたくないから……」

「そっか、わかった。無理には訊かないから安心して。まあ、秘密は女を女にする、って言うし。じゃあ、先生呼んでくるから」

そう言うと、成海は病室を出ていった。

(そっか……あたし、倒れて……それで、ヨハンさんが連れてきてくれたんだ……)

亜依は無機質な天井を見上げて感謝した。

(迷惑……かけちゃったな……)

そんな事を考えていると、コンコン、とドアをノックする音がした。

「はい」

亜依が返事をする、カチャン、という音がし、ドアが開いた。そこにいたのは、先ほどの工藤成海と、白衣を着た女性だった。どうやら、彼女が亜依の担当医らしい。

(なんか、お医者さんっぽくないな……)

それが、第一印象だった。

「富所亜依さん、私は担当の吉住可南子。よろしくね」

可南子は、明るい声で言った。どうやら、亜依の第一印象通りの人間らしい。

「は、はい……」

亜依は、横になったまま、少しだけ首をもたげた。

「それにしても、危なかったのよ。あなた、もう少しで肺炎よ。もう少し遅ければ、ポックリ逝ってたかもしれないんだから」

可南子は、どこか冗談交じりで言う。

(不安……)

その言葉に、亜依は途端に不安になった。元気づけようとしての事だろう。助かったからの冗談なのだろうが、実際病院のベッドに寝ている患者に対して、その冗談はたまったものじゃない。

「先生、その冗談はマズイんじゃないですか？」

そこへ、体温計を持った看護婦さんが入ってきた。どうやら、この冗談ならぬ冗談は毎度の事なのだろう、扱いが慣れている。

「はい」

看護婦さんは、笑顔で亜依に体温計を渡す。亜依は無言でそれを受け取り、左腋に挟んだ。名札を見ると、浅井若菜とあった。

「ホント、先生のその冗談はシャレになりませんよ。患者さんを不安にさせてどうするんですか」

「まあ、大丈夫だからこそその冗談でしょ」

このやりとりは毎回行われているのだろう。可南子の横に立っている成海も、不安そうな顔をしている。

「そんな心配そうにしなくても大丈夫ですよ。吉住先生の腕は確かですから」

そう言うが、目の前の姿を見る限り、説得力がない。

「そろそろかな……」

若菜は、亜依から体温計を受け取った。可南子もそれを見て、

「うん、熱も下がったようね。一応、明日まで入院してもらうけど……まあ、もう心配ないわ」

「ありがとうございます」

亜依は礼を言った。

「じゃあ、私はこれで。お大事に」

可南子と若菜は、一礼して病室を出ていった。

「ありがとうございました」

二人が出ていったあと、ベッドの脇の椅子に腰かけた成海に言った。

「……え？ お礼なんて、あたしは……」

「いえ、ご迷惑かけてしまって……」

「いや、そんなにたいした事ないって」

「でも……」

「そこまで恐縮されると……」

「ごめんなさい。でも、お礼だけは言っておきたかったから」

「まあ、あんたは……えっと富所亜依さんだっけ？ 亜依ちゃんは病人なんだから、遠慮しないで、病気を治す事だけ考えていればいいの」

「はい、ありがとうございます……」

成海が亜依の口の前に人差し指を立てた。

「お礼はなし、ね」

「……はい」

*

舜平は、ベッドに横になったまま窓の外を見た。窓の外は赤く染まっている。

(もう、夕方か……)

少し黄昏た気分浸っていた。

「よっ、舜平。なに、ぼさっとしてんの？」

ベッドに横になっていたところに、成海がノックもなしにいきなり入ってきた。

「ちょ、ちょい待て。ノックもなしに……おわっ」

舜平は、慌てふためいてベッドから落ちた。

「なに慌ててるの？ なんか、いきなり入ってこられたらマズイ事でもしてたの？」

成海は、意地悪な笑みを浮かべる。

「なんもしてないって。それよりさ、病院は？」

「あ、そうそう。亜依ちゃん目、覚めたから。明後日には退院できるってさ。よかったね」

「そっか……よかった」

「それとね……」

成海は一瞬口ごもる。

「なんだよ」

「もう少し遅ければ、肺炎でもしかしたらポックリだったかもしれないんだって」

「マジッ？」

舜平は、それを聞いて慌てる。

「まあ、先生の冗談なんだけどね」

あはは、と笑うが、とてもヨハンに笑う事はできない。

「最初、あたしもそう言われた時は心臓が止まるかと思ったけど、あんたにも同じだったみたいね。あんたの方が驚いたみたいだけど」

「ったりめえだろ……」

「まあまあ。大丈夫だったんだから、よしとしましょう」

「ホント、いい性格してるよ」

「お褒めの言葉ありがとう」

そう言うと、成海は部屋を出ていった。

「ったく……」

舜平は悪態をつくが、

「でも……よかった……富所さんが無事で……」

舜平は、ホッと胸を撫でおろした。

＊

二日後、亜依は無事退院した。病院の玄関には、亜依を見送るために担当医の吉住可南子と看護婦の浅井若菜がいた。

「よかったわね」

若菜が笑顔で言う。

「ありがとうございました」

亜依も笑顔で応える。

「まあ、私が担当医だったからね」

可南子は、いつもの冗談を言うような口調で言う。しかし、その中には確かな自信が含まれていた。

「先生……」

若菜は、可南子を咎めるような目で見ると、

「ありがとうございました」

亜依は、可南子の方を向いて頭を下げた。

「いえいえ、それほどでも……あるけどね」

可南子は胸を張って言う。

「もう……」

若菜は呆れて肩を落とす。

「じゃあ、行きましょうか」

「はい」

成海に言われ、亜依は二人に手を振りつつ病院をあとにした。

「亜依ちゃん、とりあえず『博愛館』に行こうか」

「……はい、お世話になります」

「でさ、気になってたんだけど、両親に連絡しなくてもいいの？」

道すがら、成海が訊く。

「……はい」

「家出とかじゃないんだよね？」

「……はい」

「信じるよ？」

「……はい」

「そっか……じゃあ、いいけど」

「……はい、すみません」

「いいのよ。両親がこの事知ってるなら、別にね……」

「……………」

「にしても、どこで舜平と出会ったの？」

「それは……」

「まあ、あいつの事だから、ろくでもない場所でしょうけど」

亜依は、はははっ、と苦笑いを浮かべた。

「でもさ、あいつって結構いいヤツだから……」

「そうですね」

「もしかして、あいつに惚れた？」

「……い、いえ、そんな……その……あたしには……」

「ふうん……いるんだ、他に」

「で、ですから、そんな……えっと……」

「まあ、そんなに慌てなくてもいいよ」

「は、はい……」

「そういえば、もう一人さ、舜平と仲良かった女の子がいたんだ、亜依ちゃんと同じ年の。でも、その子どもどっか行っちゃって……最初は二人で駆け落ちかなって思ってたんだけど、どうも違うみたいね……って、なに話してるんだろ、あたし」

「……………」

そんな話をしているうちに、『博愛館』に到着した。

*

『博愛館』に到着すると、舜平が笑顔で二人を迎えた。

「よかった、無事で」

舜平は亜依に抱きつこうとしたが、成海がそれを阻止した。

「ちょっと、あんたはなにしてんの」

「……あ、ゴメン」

舜平は、自分がしようとした行動を冷静に考え、頬が紅潮した。

「ごめんなさい。心配させちゃって……」

「い、いや……そんな……」

舜平は、亜依のその態度にうろたえる。

「そうそう。こんなやつ、心配させておけばいいの。別に、亜依ちゃんが気に病む事はないんだから」

「それはちょっと言い過ぎじゃないか？」

「そう？」

そのやりとりを見て、亜依はクスリと笑った。

「そうそう。その笑顔、可愛いよ」

成海の言葉に、亜依は頬を赤らめる。

「舜平も、そう思わない？」

「……え、えっと……」

舜平は、すぐに答えられない。

「なに照れてんのよ、ガキンちょが」

「……………」

舜平は、それに言い返す事ができない。

「あのさ……」

舜平が成海に視線を向けた。

「なによ？」

成海はそれに気づき、訝しそうに言う。

「ちょっと、富所さんと話したい事があるんだ」

成海は亜依を見た。亜依は頷いた。

「わかった」

そう言って、成海はその場を離れた。

「オレの部屋に行こうか」

亜依は素直に頷いて、舜平のあとについていった。

部屋に着くまでの間、舜平はずっと緊張していた。それは、部屋に着いても変わらなかったが。

「話っていうのはさ……」

「行きましょう」

舜平の言葉を遮って、亜依が言った。

「早く鍵を探さないと、でしょ？」

「あ、ああ……そうなんだけど……」

舜平は、自分が言おうとしていた事を先に言われてドギマギした。

「じゃあ、急ぎましょう。あたしなら大丈夫ですから」

「でも……………やっぱ……………」

「大丈夫ですから」

舜平は考え込んだ。

(このまま行っていいんだろうか？ それとも……………)

しかし、決めるしかなかった。迷う暇なんてない。

「わかった。行こう」

亜依は笑顔で頷いた。

二人は、再び『時の口』であのジャングルへと向かった。

*

再びジャングルに来た二人は、以前と少し違う事に気付いた。

「誰か来たのか？」

ヨハンは、周りの木を見て言った。木の幹には、明らかに人間の手で蔓が結びつけられていた。

さらによく見ると、わずかに踏みしめられて道のようにになっている場所にも同じようにされた木があった。

(……………目印か？)

ヨハンは首を傾げた。

「これって、目印でしょうか？」

亜依も同じ事を考えていたらしい。しかし、誰がこれをしたかはわからない。

「行ってみるか」

ヨハンは意を決して歩き出した。ヨハンは気付いていないが、その道は亜依を背負って走った道なのだ。つまりその道を辿ると……………。

「あ……………っ」

そこには、あのピラミッドがあった。

(間違いない。誰かがここに来てる)

ヨハンは、慎重に中へ入っていった。

「ヨハンさん……………」

亜依が不安そうに声をかける。

「大丈夫だって」

そう言いながらも慎重に歩を進めていく。

できるだけ音を立てないように先に進む。すると、別れ道があった。

「どっちに進む？」

「……………う～ん……………」

「……………」

「……………」

沈黙が支配する。

「左に行ってみる？」

「いいですけど……どうして？」

「いや、なんとなく」

「そうですか……………」

というわけで左へ進んだが、すぐに行き止まりだった。

二人は先ほどの分岐点に戻り、右へと進んだ。

しばらく行くと、再び別れ道があった。

「今度はどうする？」

「一回一回考えてたら、迷っちゃうじゃないですか。だったら、さっき右に行ったんですから、ずっとそうしませんか？」

「なるほど……………」

ヨハンは、必要以上に納得した。

何度か別れ道があったが、二人はずっと右の道を選んで進んだ。

変化のない通路を進んでいく。変化のない景色が疲労を増す。

「どこまで続いているんでしょうね」

亜依は疲れているのだろうが、笑顔で言った。

「さあ……………？」

ヨハンが疲れていて、気の利いた返事ができない。そのため、ぶっきらぼうな返事になってしまう。それでも、亜依はその辺を考慮して、笑顔で頷く。

「……………ん？」

ヨハンが突然足を止めた。

「どうしたんですか？」

「誰かいる」

ヨハンが、小声で言う。

言われて耳に神経を集中させると、確かに話し声が聞こえる。男と女のような。

ゆっくりと、足音を立てないように注意して歩く。どうやら、話し声の人物は亜依とヨハンに気付いてはいないようだ。

ゆっくりと、ヨハンが先頭で、声の方へと近づいていく。

近づくとつれ、空気が埃っぽくなっている。亜依とヨハンが口を手で覆いながら進んでいく。それらしき場所に着くと、その原因がわかった。壁が崩れていたのだ。その中心に一組の男女が

いた。

「…………っ！」

それを見て、ヨハンは息をのんだ。そこにいる人物に見覚えがあったのだ。

「どうしたんですか？ ……………あっ……」

亜依は、思わず声を出しそうになった。そこにいたのは……。

「誠司さん……」

椎崎誠司がそこにいた。しかも、誰かと抱き合っている。亜依はショックを隠せなかった。亜依は、それを見るなり、外へ向かって走り出した。

「あっ……」

ヨハンは、慌ててそれを追う。

(フィーのやつ、なにやってんだ？ ある意味、間違っではないんだが……って、なんでオレ、こんな事考えてるんだ？ そうじゃないか。あれが本来の……でも……)

ヨハンが亜依を追いかけながら、そんな事を考えていた。

*

ピラミッドを出ると、亜依は急に立ち止まり泣き出した。

(富所さん……)

ヨハンが、優しく亜依の肩に手を置いた。

「行きましょう」

「でも……」

ヨハンがそう言った時、突然、大地が揺れ始めた。

二人は、よろけながらも近くの木にしがみついた。

「あ…………っ」

亜依は、茫然とどこかを見ている。

「どうしたの、富所さん」

その質問に亜依は答えなかった。おそらく、耳に届いていないのだろう。ヨハンが、亜依の視線の先を見た。

「あ…………っ」

ヨハンが、その光景が信じられなかった。先程までいたピラミッドが崩れている。全壊はしていない。だが、それも時間の問題だろう。

(なにがあったんだ？ それに、あの中には綾乃が……)

しかし、動く事はできなかった。揺れはおさまってきたが、ピラミッドの倒壊している所に行く事などできるはずがない。なにもできず、ただ見ているしかできないのだ。ヨハンが、そんな自分がイヤになった。

それは、亜依も同じだった。あの中には、誠司がいるのだ。なのに、自分はなにもできない。たとえ、行けたとしても、自分にはなにもできない。それが、苛立たしかった。

しばらくして揺れがおさまった。

それと同時に、ピラミッドの倒壊もおさまった。おさまった、というよりは、もう崩れる事ができないのだ。全壊したのだ。

亜依は、がくぜん愕然として膝をついた。

ヨハンも、魂が抜けたように、立っていた。視線だけは、じっとピラミッドがあった場所を見ている。

ただ、時間だけが流れていた。

しばらく見ていたが、なんの変化もない。誠司とフィーが無事なのか、それはわからない。

「行こうか」

亜依は小さく頷いた。

二人は、来た道を重い足取りで戻っていった。

『時の口』に入る直前、ヨハンがフィーに宛てた手紙を、近くの木に巻きついている蔓に挟んだ。

(フィー、無事でいてくれよ)

ヨハンは、ただそれだけを願った。

「……………」

『時の口』で移動した世界を見たフィーは、ブルブルと身体を震わせていた。

「フィー、大丈夫か？」

誠司がわざとらしく訊く。

今、二人の目の前には、不気味な廃ビルが聳えている。しかも、例によって夜なのだった。

「どうして、また、こうも怖い所なのよ！」

フィーは誰ともなしに叫ぶ。その声が、廃ビルに反響して響く。

「ひゃっ……」

フィーは、その声に驚いて誠司にしがみつく。

「あのな……自分の声に驚くなよ」

「う……」

それにしても、フィーはとことん運が悪い。行く所行く所こういう場所ばかりだ。

「にしても……」

誠司は廃ビルを見上げる。それは五階建ての小さなビルだった。しかし、周りには駐車場があるだけで建物が無い。それが、不気味さ、奇妙さを増している。言うなら、見渡す限りの大草原の真ん中にビルが建っているようなものだ。

そのビルは、各階に、ビルの正面だけに大きな窓があった。その窓の上には小さな窓があり、それは全面に同じようであった。

「ねえ、やめない？」

フィーが小声で言う。

「じゃあ、そうしようか。ここなら明るいうちでも大丈夫だし」

「そうそう。決定。今日はおしまい」

フィーは、誠司の提案に即答で賛成する。

「でもな……今日はここで寝る事になるけど」

「……………」

その言葉に、フィーはフィーは固まった。

「……寝るの？ ……ここで？」

「仕方ないだろ。他にどこで寝るんだ？」

「う……」

改めて見渡しても、なにもない。

誠司がフィーの顔を見る。フィーはうつむいて、小さく頷いた。それは、諦めて項垂れたようにも見えた。

「じゃあ、おやすみ」

誠司は、ゴロンとそのまま駐車場に寝転がった。

「……………」

フィーは諦めて、寝袋に入って目を閉じた。

――ビョウ！

風が吹くと、ビルが唸り声のような音を出す。その音に、フィーは目を覚ます。そんな中でも、誠司は何事もないかのように眠っている。

「その性格、うらやましいよ……」

フィーは、うらめしそうに誠司を見た。

結局、フィーは眠る事ができなかった。

*

翌朝は、爽やかだった。北の方なのだろうか、夏だというのに涼しい。

「ふあ～、よく寝た」

誠司は、気持ちよさそうに大きなあくびをした。

「……おはよう」

フィーは、その横でげっそりとしていた。

「どうした？」

「眠れなかったの」

フィーがぼやくように言った。

「どうして？」

「風がうるさかったの」

「そうなんだ……」

フィーは、そんな誠司に、殺意に近いものを覚えた。

「さてと、さっさと終わらせて、こんな所オサラバしましょうか」

そう言い、誠司はさっさとビルに向かって歩きだした。

「ちょっと……」

フィーが慌ててついていく。

「おいてかないでよ」

フィーは頬を膨らませながら愚痴る。

誠司は、そんなフィーに見向きもせず、ビルの中に入っていく。床には埃が積もっている。中は柱があるだけで、壁がない。おそらく、スーパーのような店舗が入っていたのだろう。剥き出しのコンクリートの壁がつるつるとしてている。

「あわっ」

ビルに入った途端、誠司が急に立ち止まったので、フィーは誠司の背中に思い切り顔をぶつけてしまった。

「いたたた……」

フィーは鼻を押さえる。

「ちょっと、急に……」

最後まで言う前に、誠司が手を出して遮る。

「え？ なに？」

「おかしい……」

「なにが？」

フィーは首を傾げる。

「よくわからないけど、おかしいんだ」

フィーは、誠司の言っている事が全くわからなかった。ただ、疑問符が浮かぶのみである。

「別に、普通の、怖くて、なにかが出そうな、不気味な廃ビルだと思うけど」

怖くて以降を強調して言う。

「ははは……」

誠司は呆れてしまった。だが、それが誠司を和ませた。

「まあ、なんとなくだから。とりあえず、鍵を探そうか、暗くなる前に」

フィーが無言で頷く。

明るいうちなら大丈夫だと思ったのだが、窓の少ないビルだ、昼間であっても暗い。この建物の中に、昼夜の区別はなかった。

フィーは、夜の学校の時と同じように、誠司の腕にしがみついて、震えながら歩いている。

「やっぱ、外で待ってるか？」

フィーは首を大きく振る。

「一人の方が怖い」

消えるような声で言うのだが、反響して小声で喋っている時とあまり変わらない。

「でもさ、こう真っ暗だと明かりが……って、懐中電灯とか持ってないの？」

「あ、あったかも……」

そう言い、フィーは今は誠司が背負っているフィーのリュックの中をガサゴソと探し始めた。しかし、暗いため、なかなか見つからない。

「こんな時、懐中電灯があったら、すぐに懐中電灯を探せるのに……」

と、つい矛盾している事を言ってしまう。

「あった」

しばらくリュックを探して、やっと懐中電灯を見つけた。誠司がスイッチを入れる。

「わあ～」

その明かりを見て、フィーは感嘆の声を洩らす。

誠司は、足下を照らしながら、ゆっくりと歩を進める。明かりがあるためか、フィーも誠司の腕にしがみつく事なく歩いている。

一通り歩いたが、一階にはなにもなかった。二人は、二階へと上がった。

*

二階には、小さく区切られた部屋がいくつもあった。廊下の窓からは、ガラス越しに光が差し

込んでいる。ただ、部屋に入ると、そこは光の届かない空間だ。

いくつか並んでいる事務机の上には、大量の埃が積もっている。

「なんにもないね」

その事務机の引き出しを一つ一つ開けながら、フィーが言った。

「ああ」

誠司は、フィーを見ずに、気の抜けた返事をする。そして、フィーに背を向けたまま別の場所を探す。

一歩歩くごとに、埃が舞う。相当の間、放置されていたようだ。

(やっぱり、なにか変だ。でも、なんだろう……)

誠司は、自分が感じている違和感の事をずっと考えていた。しかし、ぼんやりとしていて、それがわからない。

(それとも、ただの気のせいなんだろうか?)

モヤモヤとしたものが、誠司の中で蠢いていた。

結局、二階にもなにもなかった。

*

その調子で、三階、四階ともになにもなかった。どうやら、二階以上は全く同じ造りのようだ。まったく同じ光景がそこにあった。そして二人は、最上階である五階までやってきた。

「ついに最後か……」

「つまり、鍵はここにあるってことよね」

「多分……」

誠司は自信なさげに言った。それもそうだろう、今までなんの手がかりもなかったのだ、誠司の能力からして、ここになにかあるに違いないのだが、どうも確信が得られない。

「絶対あるって」

それに対して、フィーは自信に満ちていた。

(その自信は、どこからくるんだ?)

フィーは、懐中電灯を持って、スタスタと歩いていく。今までなにも起きなかった事で余裕が出てきたのか、誠司を置いて一人で歩いていく。誠司が慌ててそれについていく。今までの立場が逆転してしまった。

五階は、他の階とは異なり、大きなホールだった。そう、冠婚葬祭の際に使用するような、そんな感じだった。ただ、今はテーブルも椅子もなく、なんにもない空間があるだけだ。

「ここにはなさそうだけど」

「でも、あなたの能力が確かなら……」

フィーは、諦めきれずに、あちこち歩き回った。しかし、なんにも見つからない。

「なんにもないだろ？」

「でも……」

フィーは、諦めきれずにしつこく歩き回る。

「もしかしたら、見落としたのかもしれないし……」

名残惜しそうな顔で、訴えかけるように言う。

「しゃーねー。探すよ」

そう言い、誠司が探し始めたその瞬間、

「あった！」

フィーが叫んだ。

「な、なんだ？ なにがあったんだ？」

誠司は、慌ててフィーの所に行く。

「どうした？ なにがあったんだ？」

「これ」

フィーは、嬉しそうに壁を指した。そこは、壁の四隅の一つだった。

「なに？」

誠司はわからず、首を傾げる。

「ほら、これ」

フィーは、もう一度その場所を指す。

「……あ」

今度は誠司にもわかった。壁に接する所に、取っ手のようなものがある。二人は、顔を見合わせ頷くと、一緒に手をかけ引っ張った。すると、一メートル四方の蓋が開いた。

中を覗くと、そこには《空間》があった。誠司が懐中電灯で照らしてみると、それはビルの一階まで続いているのではなく、二メートルほどの所に底があるようだった。よく見ると、垂直に梯子がかけられていた。

まず、誠司がそこに降りた。そこは、人が一人通るのがやっとの細い通路があった。意外と明るい。よく見ると、足もとに光源があるようだった。しゃがんでみると、そこには小さな窓があった。そこから外の光が入ってきているのだ。

(なるほどね……)

誠司は、最初に感じた違和感がなんだったのかを理解した。

入った瞬間、確かに小さいながらも窓があったのに、中は暗かった。もしかすると、蔭で光が入ってきていないのだろうかと思ったが、それは二階に上がった時に違うとわかった。二階の窓を見た時、小さな窓がどこにもなかったし、区切られた部屋のどこにも窓がなかった。つまり、それぞれの部屋の外側には、この通路があったのだ。大きな窓の部分は、その窓の上の所に通路があるのだろう。そのため、外からではその存在がわからないのだ。

「どう？ 大丈夫そう？」

頭の上からフィーの声がする。

「ああ、大丈夫そうだ。蓋は開けたままで降りておいでよ」

誠司がそう言うと、フィーはストーンと降りてきた。

「へえ……こんなトコがあったんだ……」

フィーは、辺りを見回し感心していた。

「とりあえず、先に進んでみるか」

それにフィーは頷き、二人はゆっくりと歩き始めた。思った通り、壁のすぐ内側を通るように通路があった。大きな窓の面は、少し通路が上がり、また下がっていた。そこを過ぎると、下り坂になっていた。それを繰り返して、おそらく一階であろう所に着いた。

するとそこには、また蓋があった。誠司が一人で蓋を開けると、階段があり、さらに地下まで続いている。そこは真っ暗だった。懐中電灯で照らすと、そこはコンクリート壁でなく、自然の土が剥き出しになっていた。

足下を照らしながら、ゆっくりと階段を下りていく。そのあとに、離れないように誠司の服を掴んだフィーが続く。

地面に足が着き、光をあちこちに向けてみた。そこは、大きな横穴だった。かなり続いているらしく、奥が見えない。

「どこまで続いているの？」

「わからない」

誠司は首を振った。

「行ってみようか」

誠司はゆっくりと歩き出した。フィーは渋々ついていく。

明かりは懐中電灯しかないので、前後は完全なる闇だ。前方を見ても、振り返ってみてもなにも見えない。

単に暗闇であるという恐怖と、先になにがあるのかわからないという不安が、渦を巻き二人の心を支配していた。

それでも、一步一步進んでいく。フィーは、誠司の服を掴んで歩いていた。

「ねえ、ここなんだろう？」

「さてね。でも、俺が思うに、ここは防空壕だと思うんだけど」

「え……？ 冗談でしょ？ 単なる思いつきよね」

「まあね。でも、こんなのが壁にあるんだけど」

そう言って、誠司は壁に光を向けた。

「……………っ」

フィーは息をのんだ。そこには、漢字と片仮名で書かれた文章があった。所々薄くて内容はよくわからないが、それはなんとなく――

「これ、辞世の句だと思うんだけど」

誠司は、なんでもないかのように、あっさりと言ってのけた。それに、フィーはさらに震え上がる。

「まあ、想像だけだね」

しかし、今さらそう言ったところで、一度そう思ってしまったフィーには聞こえていない。フィーの中では、ここは防空壕だという事になってしまっていた。しかし、実際にここはそうなのだが……。

さらに奥に進んでいく。すると、そこには石室があった。明らかに今までとは違う雰囲気がある。

「……ここは？」

誠司は石室を光で照らした。そこには、真ん中にテーブルがあるだけで、他にはなにもなかった。そして、そのテーブルの上には、ぽつんと木箱があった。

「これって……」

フィーは、最初に自分とヨハンが鍵を見つけた場所を思い出した。そこも、同じように隠し扉の先にある部屋で、同じようにテーブルの上に木箱があったのだ。ただ違うのは、フィーとヨハンの時は、そこに白骨があった事だった。

二人は、その箱を開けた。

「あ……………っ」

「鍵だ」

そこには、古い鍵が入っていた。

「やった！」

フィーは、誠司に抱きついて喜んだ。

「あ、ああ……」

誠司はそれに戸惑っていた。

「早く、学校に行こう」

「あ、ああ……」

二人は鍵を手に入れて、来た道に戻っていった。来た時とは違って、鍵を手に入れた喜びからか、それとも慣れてしまったのか、フィーは一人で足早に進んでいった。

とにかく、二人は鍵を手に入れたのだった。

*

鍵を手に入れた二人は、再び学校に来ていた。ちょうど下校時間だったようで、生徒がそろそろと帰っている。二人は、唯一の顔見知りである楓夏菜を捜した。

「夏菜ちゃん、どこにいるんだ？」

「訊いてみた方が早いんじゃないの？」

「でもさ、名前以外なにも知らないんだぜ。学年もわからないのにさ……」

「そっか……」

仕方なく、二人は校門の近くで見ている事にした。しかし、なかなか現れない。

「ねえ、もしかして、もう帰ったんじゃないの？」

「そうかもな……」

二人が諦めかけたその時、楓夏菜が現れた。

「夏菜ちゃん」

フィーは慌てて駆け寄った。

「あ、あなたたちは……」

夏菜はあぐりと口を開け、驚いていた。

「鍵を手に入れたから、もう一度……」

フィーがそこまで言った時、夏菜はフィーの口を塞いで、誰もいない所まで連れていった。それを見て、離れた所で見っていた誠司は慌ててそれを追う。

「フィーちゃん、それはここで言っちゃマズイって。あたしが番人だって事ばれちゃうかもしれないでしょ」

夏菜は、できる限り小声で言った。

「ごめんなさい」

フィーは、柄にもなくしょんぼりとした。

「ああ、ごめんなさい。別に怒ってるわけじゃないの。ただ……」

「伝統、だろ？ やっと追いついた」

誠司は、一瞬見失い、少し二人を捜してしまったのだ。軽く肩で息をしている。

「その通り。伝統は守らなくっちゃ」

(伝統ってすごい力があるんだな。みんな、なにがなんでも守ろうとする)

誠司は、鬼無里村の姉妹を思い出した。

「だから、ちょっと強い言い方になっちゃった。ごめんね」

「悪いのはアタシだから……」

「で、鍵を手に入れたって？」

「そうそう」

フィーはいつもの調子に戻り、さきほど手に入れた鍵を取り出した。

「ホントだ……」

夏菜は、それをしげしげと見た。

「じゃあ、今晚、あの部屋に行ってみる？」

「もちろん」

フィーは即答した。

＊

そして、夜がやってきた。毎度ながら、あっさりとは侵入できる。相変わらず、フィーはビクビクしている。

三人は、それでもなるべく足音を立てないようにゆっくりと、例の階段下までやってきた。その前に立つと、なぜだか緊張してくる。

「いくわよ」

夏菜は大きく息を吸って、扉に手をかざした。よくよく考えると、この扉を開ける瞬間を見るのは初めてだった。

手をかざすと、壁に鍵穴が現れた。夏菜は、ゆっくりとそこに鍵を差し込む。すると、扉の輪

郭に沿って壁に線が入った。ゆっくりと押すと、壁は音を立てずにゆっくりと内側に開いた。

三人はその中に入った。その中には、相変わらずなにもない。

フィーは迷わず、問題の棚の所に行った。

「いい？」

フィーは誠司の方を向いた。誠司は無言で頷く。

フィーは、ゆっくりと鍵を鍵穴に差し込もうとした……が、

「ダメだ……」

フィーは首を横に振った。鍵は、うまくはまらなかった。

「そっか……」

誠司もさすがに肩を落とした。

「仕方ない。また、別の世界に行って、探そう」

フィーは大きくため息をついた。

「……そうね。それしかないか」

三人は、力が抜けたようにその部屋を出た。

「残念だったね」

夏菜は、どう言っているのかわからず、とりあえずそう言った。

「次こそは、絶対ここの鍵を見つけようぜ」

「……うん」

フィーも、前向きに考える事にした。

(もしかしたら、この鍵はヨハンの役に立つかもしれないしね)

そう考える事で、フィーは前向きになれた。

「じゃあ、さっさと移動しましょうか」

「そうだな」

誠司とフィーは『時の口』のある場所に急いだ。

「ちょっと待ってよ」

夏菜がそれを追いかける。

「どうしたの？」

「別に、用があるってわけじゃないんだけど、あなたたちがどうやって移動してるのかな、って思って……それで……」

「夏菜ちゃん、ここに穴があるの見える？」

誠司が訊いた。夏菜は首を振る。

「夏菜ちゃんには見えないんだけど、ここには『時の口』っていう、いろんな世界に繋がっている穴があるんだ。それを通して、俺たちは移動するんだ。こういう風に」

そう言って、誠司とフィーは『時の口』に入った。

「じゃあね」

「また、来るから」

誠司とフィーは、そのまま世界を移動した。

「消えちゃった……」

夏菜は、口を押さえながら、ただただ驚いていた。

「蒸し暑い……」

誠司は、移動するなり、愚痴をこぼした。

「確かに」

フィーもそれに同意する。

「ここはどこなんだ？」

辺りを見回すと、鬱蒼と熱帯の植物が生い茂っている。

「さあ……？」

「多分、まだ、陽が高いしな……」

空を見上げて、がっくりと肩を落とす。明かりはわずかにもれているのだが、鬱蒼と覆っている木で、直接空を見る事ができない。だが、この明るさは、夕方というわけではないだろう。おそらく、正午過ぎ、といったところだ。

「眠れそうにないな」

誠司は大きなあくびをした。

「眠いんですけどね……」

フィーもつられるようにして、あくびをする。

「とりあえず移動しようか……と言いたいのだが、こんな所じゃ、なんの目印もないし、迷ったらずいよな……」

誠司は腕を組んで考え込んだ。

しばらく考えて、

「これしかないか」

誠司は近くの木に近づくと、その木に絡まっているつた蔦を引きちぎって、木に結びつけた。どうやら、それが目印らしい。

「まあ、これくらいしか思い浮かばないけど、ないよりはいいだろうし。時間はかかるかもしれないけど、近くの木にも同じようにすれば、この場所がわからなくなる事はないと思うんだ」

「じゃあ、さっそくしましょか」

フィーも同じように蔦を木に結び始めた。

「でも、俺たち半袖だな……。フィー、長袖の服って持ってない？」

「長袖？」

フィーは、誠司の方を振り返った。

「そうだな……」

フィーは、自分の荷物の中をガサゴソと探し始めた。

「あった」

フィーは、薄手のシャツを取り出した。

「あとさ、手袋とかない？」

フィーは首を振った。

「さすがに、それは……」

「そっか。じゃあ、そのシャツを早く着て……」

「暑い」

「でも、ここがジャングルだとしたら、半袖はまずいよ。どこにどんな虫がいて、どんな病原菌があるかわからないんだ。そうならないように、長袖を着ていた方がいい」

「……わかった」

そこまで言われて、フィーは渋々ながらもシャツを着た。

「さてと、手袋がないんなら、怪我しないように気をつけないとな。どんな小さな傷でも、ここじゃ命取りになる」

「わかった。気をつける」

そう言って、フィーは作業を再開した。誠司はそんなフィーを見て頷き、自分も再開した。

あらかた結び終え、近くまで来ればだいたいの場所はわかるようになった。ここからは、歩きながら同じ作業をしていく事になる。誠司とフィーは、時々あくびをしながらも、ゆっくりと進んでいった。

しばらくはなんともなかったのだが、それでも眠気も手伝って、次第にゆっくりになっていった。

「ねえ、この辺で寝ない？」

「変な虫に襲われてもいいならご自由に」

「それはヤダ」

「だろ？ だったら、どこか拓けた場所まで我慢しないと」

「でもさ、こんなジャングルの中にそんな所ってあるの？」

「さあ？ どこかないか、木に登って見ようかと思ったけど、ここまで鬱蒼としてたら、てっぺんまで登っても、あまり見えないだろうな……どれも同じような高さだし」

「そっか……そうだよな」

(なんか、すごい。アタシ、すんごく落ち着いていられる。きっと、一人だったらこうはいかない。舜平だったら、どうなのかな……)

フィーは、誠司の背中が大きく見えた。

「にしても、方角もわからないしな……まあ、わかったところで、どうなるってもんでもないけど」

愚痴をこぼしながらも、ゆっくりと前進していく。わずかに短い草が踏み倒されている所がある。最近、誰かがここを通ったのだ。それは、亜依を背負ったヨハンなのだが、誠司たちは、そんな事を知るはずもなかった。

「とりあえずさ」

「ん？」

フィーは誠司を見る。

「とりあえず、この草が踏まれてる場所を辿ろうかと思うんだけど……」

「そうね。誰かが通ったんだとしたら、その先にはなにかあるかもしれないしね」

「まあ、人だといいいんだけどな」

「どういう事？」

「獰猛な肉食獣じゃなければいいな、と思っただけ。それに、これがどのくらい続いているのかもわからないし」

「……うっ……」

そう言われた途端、急に不安が襲ってきた。

「でも、今は前向きに考えよっか。このすぐ先には拓けた場所があって、これはそこにいた人がどこかに移動した跡だって」

「……そうね。それがいい。賛成」

二人は、そこを今まで同様、木に蔦を結びながら進んでいった。しかし、行けども行けども景色は変わらない。草が踏み倒されていなければ、同じところを延々と歩いているのでは、とさえ思ってしまう。

どのくらい歩いただろう。ピークを越えたのか、眠気は吹っ飛んでいった。それでも、疲労感だけはどうしようもなかった。

「ねえ……まだ……あ？」

「いや、どうやら到着だ」

突然、二人の視界が拓けた。

「……………」

誠司は、目の前の光景に言葉を失った。

「どうしたの？」

誠司のうしろにいたフィーが顔を覗かせた。

「うわあっ……………」

フィーは感嘆の声をあげた。

二人の目の前には、小さいながらもピラミッドがあった。

*

小さいといっても、近付くとそれなりの高さはある。ただ、エジプトのピラミッドと違うのは、頂点が平らになっているという点だった。目の前のそれは、四角錐ではなく、側面が台形になっているのだ。

「これって、一応ピラミッドなの？」

フィーが首を傾げる。

「まあ、そうだろうな。俺も見た事はないし……でも、南米とかのなんたら文明のピラミッドはこういう形だったような……」

「……って、じゃあ、ここは南米？」

「まあ、そうかもしれないし、違うかもしれない。なにせ、地図もないし。誰にも会わないし……」

二人は大きなため息をついた。

「とりあえず、怪しい場所は探さない」と

「そうね。早く鍵を探さない」と

二人は、ピラミッドの中に足を踏み入れた。

「……………」

「……………」

二人は息をのむ。懐中電灯で中を照らすが、石の壁が続いているだけだ。

誠司は懐中電灯を持って進んでいく。そのすぐ後ろをフィーが続く。

カツン……カツン、という二人の足音が響く。

誠司は、迷わないように右手を壁につけたまま歩いている。

しばらく歩くと、分かれ道があった。

「どっちに行く？」

誠司は後ろにいるフィーに訊く。

「そんなの、アタシに訊かれても……」

「……だよな……どうしよっか……」

誠司はそれぞれの道を照らしてみた。しかし、どちらも違いはない。

耳を澄まして音を聴いてみるが、どちらからもなにも聴こえない。

「どうすんだ？」

腕を組んで考えるが、結論は出ない。

「なあ、フィーの能力でわからないもんなのか？」

フィーは、申しわけなさそうに首を横に振った。

「どうしてかわからないけど、全然なにも感じないの。ちょっと前までは――あなたと会うまでは見えてたんだけど、最近は全然……」

「そっか……どうせわかって、まだ問題は残るんだけどな」

「問題……？」

「そう。こういう場合は、どっちの道に行ったかわかるように目印を置いておいた方がいい。このまままっすぐ道があるならなくてもいいかもしれないけど、どこでどう曲がってるかわからない。だから、もしかしたら、戻っているつもりでも別の道に入ってるかもしれない。それを防ぐためにも、なんらかの目印が欲しいんだ。できれば、チョークかなにかで矢印を書けばいいんだけど……でも……ここがもし世界遺跡とかだったら、マズイしな……」

誠司の言葉を、フィーはじっと黙って、時々頷きながら聞いていた。

(ホント、なんか頼りになるんだよね……)

誠司はしばらく考えたのち、

「右に進もう」

「え……？」

突然の決断に、フィーは驚いた。

「どうしてまた、右なの？」

「ああ……」

誠司は、一呼吸おいて、

「今さ、右手を壁につけて歩いてるんだ」

(そうなんだ……)

フィーは、その事に気付いていなかった。

「だから、このままずっとそうやって行って、帰りは左手をつけて帰ってくる。これなら迷わないと思うんだ」

「なるほど」

フィーは、しきりに頷く。

特になんというわけでもなく基本なのだろうが、基本こそなにもわからない場合は有効だ。下手に考えるよりは……。

ずっと分かれ道は右手がついている方向へ行くというルールを決め、二人はさらに奥へと進んでいった。

景色が変わらないので、どのくらい歩いたのかさっぱりわからない。それに、今どの辺りにいるのかもわからない。無闇やたらに入っていれば、確実に迷っていたらろう。最初にルールを決めて正解だった。

しかし、景色が変わらない場所を歩くというのは、飽きてきて、余計に疲れる。単調な作業の繰り返しというのは、想像以上に神経に悪い。昔、囚人に穴を掘ってはまたそれを埋めるという作業を繰り返させ、精神的にまいらせたという話があるが、確かに効果的だろう。精神的な拷問だ。だが、この場合と誠司とフィーが決定的に違うのは、目的があるかないかだ。目的があれば、なんとか正常を保てる。しかし、目的がない場合は……。誠司とフィーは、鍵を探すという目的のお蔭で、なんとか正常を保っていた。

しかし、長い間歩いていたせいで、体力は限界だった。単調な景色が、忘れていた眠気を思い出させる。

「ねえ、ここで寝ない？」

フィーは大きなあくびをする。

「……そうだな。ここなら、大丈夫だろう。でも、あんまり石に身体を接しないほうがいいぞ」

「……え？ どうして……？」

「ああ、石って、結構体温を奪うから。ちょっとオーバーかもしれないけど、起きたら凍死なんて事もないとは言いきれないし」

フィーは、それを聞いて震えた。

「まあ、寝袋に入っていれば大丈夫だって」

「でも、あなたはどうするの？」

「まあ……大丈夫さ。気にしないで寝てくれ」

「でも……」

「まあ、いいから、いいから」

「わかった。アリガト」

そう言って、フィーはゆっくりと目を閉じた。

「さてと、どうかちゃんと目覚めますように……」

誠司は、祈ってからその場に横になった。

*

どのくらい時間が経ったかわからない。それに、今は昼なのか夜なのかもわからない。

誠司は、なんとか目覚める事ができた。フィーは、よほど疲れていたのだろう、可愛い寝息をたて、まだ眠っている。

「なんとか、生きてるみたいだな」

誠司は、今回ほど目覚める事が嬉しいと思った事はない。どちらかといえば、学校に行く時などは、朝なんて来なければいい、目が覚めなければいい、とさえ思ってしまう。だが今回は、そんな誠司に、目覚めるのって幸せだな……と思わせる。

誠司は、自分の身体を確かめてみる。なんとか体温は大丈夫だったようだ。しかし、少し体温が低いように感じる。特に、手足の先端が冷たい。氷に手を突っ込んだような感覚だ。自由に動かない、とまではいかないが、なんともない、というわけでもない。誠司は、自分の手足を擦った。しばらく擦って、なんとか体温は戻ってきた。

フィーを起こさないように気をつけながら少し動いてみる事にした。その場でランニングしてみると、ゆっくり眠ってすっきりしたのか、誠司の動きは軽やかだった。

(ちょっとだけだけど、ジャングルを歩いて体力ついたのかな……って、そんなわけないか。でも……この旅ですっかり体力ついたような気がするな……)

そんな事を考えつつ、体育の時間でさえサボるストレッチをし始めた。

(う～ん。なんだか気持ちいい)

「……ん……」

その時、わずかにフィーが動いた。そして、少しモゾモゾして、ゆっくりと目を開け、ゆっくりと身体を起こす。

「わりい、起こしちまったか？」

「……ん……んん……」

フィーは、キョロキョロと周りを見回す。自分がどこにいるのか定かでないのだろう。

「おはよう」

「あ、ああ、そうだ……」

誠司の声で思い出し、フィーは頷く。

「アタシ、ジャングルで……」

「お目覚めですか？」

誠司が演技をしているかのような口調で言う。

「あ、え……ええ」

「それはよかった。スッキリと目が覚めたら、先に進もうか」

「そうね」

　　そう言い、フィーは大きく伸びをした。

「じゃあ、行きましょうか」

「もう、いいのか？　もうちょっとゆっくりでもいいぞ」

「大丈夫。早く鍵を探さないと」

「フィーがそれでいいなら……じゃあ、荷物をまとめるか」

　　二人は、荷物をまとめ、壁を右に進んで行った。もちろんの事、景色は全く変わらない。いい加減、うんざりしてくる。

「……………」

「……………」

　　二人の間にも会話はなく、足音だけが響いている。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……あ～っ！　もうっ！」

「なんだよ。急に叫ぶなって」

「静かすぎる。なんか喋ってよ」

「疲れるからやめようぜ」

「その前に、精神崩壊しちゃうわよ」

「早く鍵を探すんだろ？　だったら、余計な体力使わずに急いだ方がいいと思うけど」

「……そうだけど……でも、静かすぎるのは、ちょっと……」

「まあ、確かに静かすぎるのも問題か……でもな……さっきも言ったけど、あんまり余計な体力は使いたくないんだよな……」

「でも、静かすぎて精神崩壊したらどうすんのよ」

「すぐにそうはならないって。でも、確かにそれはそれで問題だな……」

　　とかなんとか話しているうちに、目の前に道はなかった。

「……行き止まり？」

「アタシにもそう見える」

「なあ、前の分岐点って……」

「かなり距離があったような……」

　　二人は、大きくため息をついた。

　　しばらく生命が抜けたように立ちすくんでいたが、やがて、ゆっくりと来た道に戻り出した…
…その時、誠司のピアスがわずかに光った。

「ねえ、ピアスが光ってるんだけど」

「……え？」

誠司は、フィーに言われて初めて気付いた。

「ホントだ……」

不思議に思いながらも戻り始めると、光が弱くなっていく。

「……」

誠司は、再び行き止まりの方へ行く。すると、光が増していった。

「なあ、この先になにかあるんじゃないかな……？」

「なにかって、なに？」

「それはわからない。でも、なにかあるはずなんだ」

「……」

誠司は、壁になにか仕掛けがないか探し始めた。

「ねえ、鍵はどうすんの？」

「もしかしたら、鍵かもしれないだろ。だから、可能性のある事は全部しとかないと」

「そうだけど……」

言われて、フィーも渋々しゃがみこんで床を調べ始めた。

しかし、いくら探してもおかしい部分はなかった。

「はあ……疲れた」

誠司は突き当たりの壁にもたれかかった。すると、

「……っ」

フィーは息をのんだ。

「か、身体が……」

フィーは、慌てふためきながら、誠司を指さす。

「……え？」

しかし、誠司は自分の異変に気付いていない。

「身体が、しず、しず……」

「しず……？ なに？」

「沈んでる」

「……え？」

しかし、すでに遅かった。誠司の身体は、壁にめり込んでいくように消えていった。

＊

「……ん……んん……」

誠司は、暗闇の中で目を覚ました。空気が澱んでいて、息苦しい。壁に隙間はなく、完全密封されている。この空気もいつのものかわからない。ずっと閉じ込められた空気なのだ。

辺りを見回すが、なにも見えない。

「……ん……？」

誠司は、わずかに光るものを見つけた。ふと見ると、自分のピアスも光っている。共鳴してい

るようだ。誠司は、ゆっくりとそれに近づいていった。

足下はおろか、なにも見えないため、ゆっくりと手を前に突き出しながら探るように進んでいく。ゆっくり、ゆっくり……。

近づくとつれ、その光は強くなっていく。すぐ側に来た時、ようやく足下が見えた。そこは、石室の中心だった。そこに飾られている石像の目が光っていたのだ。

誠司は、ゆっくりとそれに手を伸ばした。すると、そこに埋め込まれていた石がポロリと手に落ちた。

「これは……」

誠司は自分の手にある石をじっと見た。それは、誠司の先祖、椎崎誠介と椎崎容子の墓石の後ろにあった石——誠司のピアスの石と似ていた。

「これって、なんなんだ？」

その時——

——ゴゴゴゴッ！

突然、部屋が揺れ始めた。

「え……？ おい、どう、なって……」

誠司は石像にしがみついて揺れに耐えている。

——ドシン！

石室を構成していたブロック状の石が落ちた。

(……ヤバイんじゃない……)

そう思った次の瞬間、壁が次々と崩れ始めた。しかし、天井が崩れないのがせめてもの救いだろう。

壁のブロックが次々に落ちていく。年月が経って脆くなっていたのだろう、崩れて砂になるブロックもある。

壁が崩れているだけなので、石室の中央はなんともない。ただ、砂埃だけはどうしようもないが。それでも、ブロックの直撃を受けるよりはましだ。誠司は、それがおさまるまでじっとしていた。

しばらく経って、ブロックが落ちるのがおさまった。もう少し待つと、砂埃もおさまった。それらがおさまって最初に目に入ったのが、心配そうにしているフィーの顔だった。フィーは、涙を浮かべながらじっと誠司の方を見ていた。

誠司の姿を確認すると、勢いよく走っていった。

「バカ、心配したじゃない」

誠司の胸に顔を埋めながら、誠司の身体を叩く。

「ゴメン」

「ゴメンじゃないよ。急に消えちゃって。そうしたら、急に壁が崩れ始めて。アタシー人になっちゃうかと思った。また、誰もいなくなっちゃうんじゃないかって。すごく淋しかった。すごく悲しかった……」

フィーは、誠司の胸で泣いた。弱気な姿は見た事があったものの、ここまで儂げに見えたのは

初めてだった。

「ゴメン」

再び謝り、壊れそうなフィーを優しく抱きしめた。

*

しばらく抱き合っていたが、フィーも落ち着くと、改めて崩れた場所を見た。ブロックが崩れて砂が積もっているが、なんとか通れそうだった。そう、その先には通路があったのだ。

二人は、崩れていないブロックの上を歩いて進んだ。そこから先は一本道だった。それでも、最初に決めたルールを守って進んだ。

しばらく進むと、木でできた扉があった。二人は顔を見合わせ、ゆっくりと誠司が扉を開けた。

扉を開けると、そこには小さなテーブルがあり、小さな箱が置かれてあった。

フィーがその箱の中を見ると、鍵が入っていた。

「やったー！」

フィーは跳びはねて喜んだ。

次の瞬間、ピラミッドが大きく揺れ始めた。さっきの誠司の時とは比べものにはならないほどの揺れだった。その揺れで、壁だけでなく天井の岩も落ちてくる。

「早く出るんだ！」

誠司は、フィーの手をとって走り出した。左手が壁に接するように進む。もし、ルールを決めていなければ、間違いなく迷っていたし、瓦礫の下敷きになっていただろう。たとえ迷わなくても、瓦礫の下敷きは避けられないかもしれない。

年月のわりには意外と頑丈にできているようで、揺れは続いているのだが、壁の崩壊はそれほどでもない。それでも、確実に崩れている。ときおり、パラパラと砂が落ちてくるのだ。そして、その場所は確実に岩が落ちてくる。

最初ほどの揺れではないにしろ、揺れは続いている。

二人は、振り返る事もなく、ただひたすら出口を目指して走った。普段ならとっくにバテいても不思議ではない距離を走った。それも全力疾走だ。しかし、今は疲労を感じていなかった。ただ出口へ走っていた。

目の前に光が見えた。

出口だ。

しかし、その少し手前の天井の岩が崩れかけている。揺れに合わせるように、ジワジワとずれている。

ードンッ！

その時、大きな揺れが再び二人を襲った。その揺れで、ずれていた岩は全て崩れた。

「危ない！」

「きゃあっ！」

誠司は、とっさにフィーをかばうように覆い被さった。

ピラミッドは、休む事なく崩れていく。

「……………ん……………」

誠司は小さく唸り声をあげた。

(どうやら、生きているみたいだな)

誠司は自分の様子を見る。どうやら、運良く岩が斜めに落ちて、その隙間にいたため無事だったようだ。

(そうだ、フィーは！)

誠司は、慌ててフィーを見た。身体を揺すってみる。息をする音が聞こえるので生きてはいるようだ。しかし、気絶しているのか反応しない。

誠司は、フィーの肩に手をまわして岩の隙間から外へ出た。

「ありがとう」

誠司に支えられているフィーが小さな声でお礼を言った。

「ああ、気にすんなって」

*

なんとか、ピラミッドを脱出した二人は、目印を辿って『時の口』へ戻った。

「ん？」

『時の口』がある場所で、フィーは手紙を見つけた。

(これって……………)

フィーは、誠司に気付かれないように、こっそりと手紙をカバンにしまった。

「行こっか」

二人は『時の口』を通り、急いで学校へと向かった。

その頃はまだ夕方だった。しかし、生徒の姿は見当たらない。二人は、こっそりと忍び込んだ

。幸い、廊下には誰の姿もなかった。それでも、足音をたてないように気をつけながら例の階段の所まで来た。

扉がある所に手をかけると、自然に扉が開いた。

二人は、緊張したまま中へと入っていった。そして、閉ざされた扉をさっき見つけた鍵で開けようとしたのだが、明らかに形が違っていた。

「今度もハズレか……………」

誠司は肩を落とした。

「どうするよ」

「どうしよう」

二人は途方に暮れてしまった。その時、扉が開いた。

「あ…………っ！」

扉を開けたのはもちろん夏菜だ。夏菜は、誰もいないと思っていたので、そこに二人がいた事に驚きを隠せなかった。

「あー、ビックリした……」

夏菜は、胸を押さえながら部屋の中に入った。

「ホント、心臓が飛び出るかと思っちゃった……で、二人がここにいるって事は、鍵が見つかったの？」

夏菜の質問に、二人は無言で俯いた。

「そっか……。今回も違ったんだ……」

夏菜も残念そうに俯く。

「いっそ、壊しちゃう？」

「え……？」

「だから、この棚、壊したらどうかな、って……」

誠司とフィーは、その言葉に我が耳を疑った。

「夏菜ちゃん……。でも、それは……」

「伝統は大切。でも、これは……」

夏菜が棚を見る。

「これは、その伝統にはないから……」

「でも……」

「やっぱりダメだ。もう一度探すよ」

そう言うと、誠司は部屋を飛び出した。

「ちょっと……」

フィーは慌ててそれを追いかける。

夏菜は、それを茫然と見ていた。

*

「ちょっと」

誠司とフィーは、誰かに呼び止められた。

振り向くと、そこには男が一人立っていた。

しかし、二人には見覚えはなかった。

「あの……俺たち？」

「ああ、君たちに用があるんだ。できれば、誰もいない所がいいな……。そうだな……あそこがいいな」

その男は、二人の返事も聞かず、一人で歩きだした。

誠司とフィーは顔を見合わせ頷き、その男についていった。

しばらく歩き、着いた所は、海辺の公園だった。しかし、そこには人はいない。

「僕の名前は、藻音時也」

(藻音だって……)

誠司は、名前を聞き、一步下がった。

「警戒しなくてもいい。僕は君たちに危害を加えるつもりはない」

「じゃあ……」

「その前に、君たちの能力を教えてもらおうか。特に、君」

時也は、誠司を指した。

「え……俺の能力……？」

「そうだ。君の能力だ」

誠司は一瞬迷ったが、

「俺の能力は、時空を渡る能力です」

時也は、それを聞いて大きく頷いた。

「なるほど。それでか……」

「なにがです？」

「で、そちらのお嬢さんは？ 見たところ、元来の能力ではないみたいだが？」

「……」

フィーは、息をのんだ。

「アタシは……」

「それを与えたのは、藻音時弥だろ？」

フィーは、小さく頷いた。

「藻音時弥は、僕の兄さんだ」

「……」

「……」

「言ってなかったね。僕の能力は『消去』。ただし、元来の能力は消せない。つまり、兄さんが与えた能力を消す能力だ」

「そんな人がどうして……？」

「僕はね。兄さんのやり方には反対なんだ。そうだ、君たちの名前は？」

「あ、俺は椎崎誠司です」

「なるほど、椎崎か……。で、そちらは？」

「アタシは、木元綾乃」

「……え？ そんな名前だったの？」

それに驚いたのは、誠司だった。

「そう、そんな名前だったの」

それに驚いたのは、誠司だけではなかった。表には出さなかったが、時也も少なからず驚いていた。

「君は、両親のどちらかの顔を知らないんじゃないか？」

フィーは首を振った。

「いいえ。両方の顔を知らないわ」

「君は、両親を恨んでいるかい？」

その問いに、フィーは大きく頷いた。

「当然でしょ。アタシを捨てたのよ。それを恨まないでどうするのよっ」

「そうか……」

時也は残念そうな顔をした。

「君の両親を許してやってほしい。君の両親は、君を守るために仕方なくそうしたんだ」

「え……どういう事……？」

「君の本当の名前は、吉田綾乃だ。君の親……というより、君の一族は、僕が仕えている神崎の一族に狙われていた。それを知っていたからこそ、君の両親は君を手放したんだ。だが、結局は見つかってしまったようだね」

「アタシが……そんな……」

フィーは、愕然とし、膝を崩した。

「で、フィーの両親はどうなったんですか？」

誠司が訊く。

「亡くなった。五年ほど前だったかな。強盗を装った連中に殺された。もちろん、兄さんの息がかかっている連中だ。その事件は、強盗殺人として世間では知られている」

「……………思い出した。確か、そのくらい前に……留守の間に忍び込んだ強盗が、家の人が出てきて、それで殺した……っていう……」

「そう、それだ」

「そんな……………」

フィーは、大粒の涙をこぼした。その涙は次々溢れてきて止まらない。

「で、用はそれだけですか？」

泣き崩れるフィーの肩に手を置いて、誠司が訊く。

「言っておこうと思ってね。元来の能力でない能力は、能力者の身体を蝕む。まあ、詩稀の出の者ならまだ大丈夫なんだが、そうでない者だと、非常にマズイ」

「詩稀……？ って、あの詩稀村？」

「そうだ。どうやら、君は知っているようだね。僕も詩稀の出だ。本来、詩稀村は能力者が集まった村だ。だから、自然とその子孫にも能力者が多い。まあ、そのお蔭で、僕もこんな能力があるんだけどね」

「じゃあ、俺は……？」

「君は、椎崎容子の子孫だろ？ 彼女の旧姓は、神崎だ」

誠司も膝を崩した。

「君は、最初から中心にいたんだよ」

誠司はなにも言えなかった。あまりの事に、ただ茫然としていた。

神崎璃織魚は、天井を見上げた。いつもなら見える景色が、見えない。

(グビディになにかあったのかしら)

ただ、それだけが気がかりだった。そこへ、

「璃織魚様」

藻音時弥が、久しぶりに訪ねてきた。

「璃織魚様、余計な事は、なさらないでいただきたい」

そう言う藻音の手には、あのグビディの人形があった。しかし、中にある限りなにも見えないので、璃織魚はそれを知らない。

「このような人形で、またわたしの邪魔をしようというのですか」

そう言われて、初めて気付いた。

「グビディをどうしたのです？」

璃織魚は震えていた。どうにか止めようとするが、止まらない。

「失礼しました。そこからは見えないのでしたね。あなたの人形は、わたしの手の中にあります。邪魔になりそうなので、捕らえました。大丈夫ですよ、なにもしていませんから。しかし、お望

みとあらば、焼却しても構わないのですが。都合のいい事に、吉住健一がいますので。やつの能力で焼却……いいかもしれませぬね」

「やめて！」

璃織魚は、今まで出した事もないくらいの大声で叫んだ。

*

「ん……？」

自室にいた吉住健一の所にも、璃織魚の声は届いた。それを聞いた健一は、ただならぬ事態に、慌てて璃織魚の元へ向かった。

*

「やめて！ グビディには手を出さないで！」

璃織魚はポロポロと涙をこぼした。

「いいザマですね。本来なら神崎家を継ぐあなたが、今ではこんな所に閉じ込められている。しかも、神崎家に仕えているわたしに対してさえ、なにもする事ができない。まさに、あなたはナイトのいないお姫様なのですよ」

璃織魚は、涙が止まらなかった。

時弥は、嘲るように笑った。

「まあ、鳥籠の中のお姫様には、ナイトなど必要ないでしょうがね」

「そこでなにをしている」

そこへ、叫び声が響いた。

「おやおや、そういえばナイトがいましたね」

そう言って、時弥はその声の方を向いた。そこには、吉住健一の姿があった。

「そんなに慌てて、どうしたんだ」

「そこでなにをしている」

「誰に向かってそんな口を利いてるんだ」

「何故、あんたが璃織魚様の所にいるんだ」

健一は、時弥の胸倉を掴んだ。

「お前に言う必要はないだろう。……さっさと手を放せ」

健一は、しばらく時弥を睨んでいたが、やがて諦めて手を放した。時弥は、乱れた襟をただした。

「まあ、お前如きが関わったところで、なにも変わりはない。そこで、這いつくばったまま、彼女のナイトをしているがいい」

そう言い残し、時弥はその場を去った。

「……………ちくしょう」

健一は、床を叩いて、力なく呟いた。

「私なら大丈夫ですから……」

扉越しに璃織魚が言うが、健一の耳には届いていない。健一は、藻音時弥に対して、全く無力だった自分が恥ずかしかった。どんなに従うまいとしても、それが目的の為だとわかっている、従うしかない自分が腹立たしかった。

「璃織魚様、申し訳ありませんでした」

健一は、そう言うだけで精一杯だった。悔しさのあまり、涙が一粒床に落ちた。

「ありがとう……」

見えはしないが、容易に想像できてしまう健一の姿に、璃織魚も涙を浮かべた。

＊

「時弥、なにをしていたのです？」

時弥が部屋に入って来るなり、神崎莉緒が訊いた。

「なんでもありません」

時弥は、莉緒の前に跪いて答えた。

「なにか隠していないでしょうね」

「滅相もありません。莉緒様に隠し事など」

時弥は、顔色を変える事なく答えた。

「……そうか」

莉緒は、そう言って窓の外に視線を向けた。

「あの二人はどうなっている」

「はい、順調に進めています」

「そうか」

「では、わたしはこれで」

時弥は、一礼して、部屋を出ていった。

「時弥は、なにか隠している……」

莉緒は、外の景色を眺めたまま、なんとなくそう思った。事実、莉緒には、璃織魚の存在は知らされていなかったのだ。それは、先代――莉緒と璃織魚の父親である神崎禎昭の命令だった。

(時弥はなにをしているの?)

神崎莉緒でさえ、藻音時弥は謎でいっぱいだった。

*

一人の女性が、倉沢俊昭の病室へ入っていった。それに気付いたのは、吉住可南子だけだった。

「あの人は……」

女性は倉沢俊昭の枕元に立った。

「倉沢さん……」

心配そうに顔を覗き込む。倉沢俊昭は、まだ意識を取り戻していない。

可南子は、女性に気付かれないように、静かに病室へ入った。

「吉住さん、ですね」

女性は、動じる事なく、穏やかに言った。逆に、可南子の方が驚いてしまう。

「宍神さん、宍神梢さんよね？ 主人から聞いた事があるわ。それにしても、よくわかったわね」

「吉住健一さんには、小さい頃からお世話になってましたから。感謝しています」

宍神梢は、ゆっくりと語る。

「それはどうも。伝えとくわ」

「ところで、彼は大丈夫ですか？」

「大丈夫そうに見える？」

「いえ、そういう事じゃなくて」

「大丈夫よ。主人から言われてるから。あの人が来る事はできない」

「そうですか……。それはよかった」

宍神梢は、心底安心したような顔をした。

「しばらくここにいたいのですが……」

「いいわよ。あなたなら安心だし」

「ありがとうございます」

宍神梢は、ニコリと笑った。可南子は、それを見ると病室を出ていった。

「倉沢さん……」

宍神梢は、ずっと倉沢俊昭の顔を見ていた。

＊

吉住健一は、自室に戻らず、ずっと神崎璃織魚の部屋の前にいた。

「自分の部屋に戻った方がいいのでは？」

「心配していただきありがとうございます。ですが、ここにいたいのです。あいつが璃織魚様になにをするか……」

「ですが、私に触れる事も、ましてや見る事さえできないのですから」

「しかし……」

「いつも心配して下さって、ありがとうございます」

「それは、自分で決めた事です。言ってしまうえば、おれは、璃織魚様を利用しようとさえ考えているのです」

「ですが、あなたはそれを私に打ち明けた」

「……璃織魚様に隠し通す自信がありませんから」

「……………」

「璃織魚様……」

「なんですか？」

「もうすぐです。もうすぐ、外へ出る事ができます」

「……………」

「そうなれば、神崎家の実権は璃織魚様のものに……」

「私は別に……」

「璃織魚様が実権を手に入れば、全ての争いに終止符が打たれるでしょう。おれは、一刻も早くその時を迎えたい……。それが、おれの最終目的なんです。そうしなければ、おれは詩稀村のみんなに申し訳が立たない。もちろん、こんな事で罪が消えるわけではないんですが、でも……それでも、できるだけ事はしたいんです……」

吉住健一は、この時、初めて自分の胸中を他人に明かした。それまでは、ずっと自分の中にしまい込んでいた。

「……………」

「すみません、璃織魚様。余計な事でしたね。忘れて下さい」

「疲れているのですよ。お部屋に戻ってはいかがですか？」

「……………」

健一はしばらく黙って考えた。

「……そうですね、そうさせてもらいます」

健一は、力なく立ち上がり、自室へと歩いていった。

*

自室へと戻った健一は、ベッドに横になって天井を見上げていた。
(ついに、璃織魚様に言ってしまった……)

健一は、璃織魚に自分の考えを言ってしまった事を後悔していた。
(だが、隠し通す事もできなかったんだ、仕方ないさ)

自分で自分を励ます事しかできなかった。

だが、自分の目的を中断するという考えは、頭の片隅にもなかった。璃織魚は健一を批判しなかった。璃織魚ならわかってくれる。協力してくれる。そんな感じを受けた。

璃織魚が言った通り疲れていたのだろうか、次第に瞼が重くなり、健一はそのまま眠りについていた。

*

健一は夢を見ていた。もう、何回目になるのだろうか。幾度となく繰り返し見た夢。忘れてくても忘れられない出来事。過去に犯してしまった罪。それが、現在の健一の原動力ともいえるものだった。あの詩稀村で起こった惨劇が、全てを変えてしまった。

そう、あれは三年前――

*

その日、吉住健一は詩稀村の北にある北玄山にいた。詩稀村は、四つの山に囲まれている。北に位置するのが北玄山。東に位置するのが東青山。南に位置するのが南朱山。そして、西に位置するのが白西山である。村への入口である鳥居は、南朱山と東青山の間にあるのだ。

北玄山には小川があって、その途中には湖がある。健一は、その湖畔に座っていた。その側には、不思議そうな顔をしている宍神梢がいた。

「健兄、どうしたの？」

梢は、健一の事を健兄と呼ぶ。もちろん本当の兄妹ではないのだが、兄妹同然に育てられたのでそう呼んでいる。

「どうしたのって、なにが？」

「こんな所に来てさ」

そう言って、梢は不満そうに湖を見た。

「こんな所って、この村じゃ結構いい場所なんだけどな……」

「だからなの。もう飽きたよ。ずっとここなんだもん」

「いいじゃないか。おれは、ここが好きだけどな……」

そう言って、ゴロンと寝転がった。

「別に、好きとか嫌いとかじゃないんだって……」

「梢も寝転がってみろよ。空が綺麗だぞ……」

「もう……。そんな事したら、服が汚れちゃうじゃない」

「いいから、いいから」

「もう……」

そう言われて、梢も寝転がった。

「あ、でも……綺麗……」

「だろ？」

「うん」

二人は、しばらく空を見ていた。ゆっくりと雲が形を変えて流れていく。

「ところでさ……」

空を見上げたまま、梢が言った。

「なんだよ」

健一も、空を見上げたまま答える。

「健兄は、なんであたしをここに連れてきたの？」

「別に。特に意味はない」

「なにそれ」

「なんだか、深刻そうな顔してたからさ。ちょっと気分転換でも……なんてね」

「そっか……。じゃあ、健兄にお礼言わないと、だね」

「いいよ、別に。それに、梢に話もあったしね」

「……話？」

「そう。大事な話」

「なによ、それ」

「おれさ、結婚しようと思う」

「え？ ちょ、ちょっと、いきなりそんな事言われても、あたしは……その……だから……

あの……ねえ？」

「なに勘違いしてるんだ。梢とじゃないってば」

「そうなんだ……」

梢は、残念そうに言った。と同時に、梢の淡い片思いはここに終わりを告げた。

「……おめでと」

「ありがと」

「で、どんな人？ 綺麗？」

「まあな。その人は医者を目指しててさ……」

「看護婦じゃなくて？」

「そう、医者」

「珍しー」

「そうか？ 梢の偏見じゃないのか？」

「偏見とは失礼な」

「それは悪かった」

「まあ、それはいいんだけど。で、どこで知り合ったのよ」

「ありきたりだけど、病院だよ。研修医として来てた彼女に一目惚れってやつさ」

「そうなんだ……。で、その人も健兄に一目惚れ」

「まあ、そうだな」

「よかったじゃん」

「まあな」

「ところで、その人には詩稀の事、言ったの？」

「いいや。まだ言ってない」

「能力の事は？」

「それも言ってない」

「それってマズイんじゃないの？」

「そう、かなりマズイ。でも、どう言うんだ？ いきなりだけど、実はおれは詩稀村っていう不思議な能力を持つ人たちの村の人間で、おれも火炎の能力があるんだ……。なんて言えないだろ、普通」

「確かに、そのままズバリとは言えないよね……」

「で、結婚の報告と、その事についての相談をだな……」

「なるほど、それであたしを連れ出したのか……」

「悪い」

健一は起き上がって、顔の前で手を合わせた。

「でもさ、詩稀や能力の事を知らないままで結婚してもさ、不幸になるだけだと思うんだけど……？」

梢も起き上がる。

「そうなんだよな……」

「だからさ、健兄がちゃんと言わないと、結婚なんて事、無理だよ」

「だから、そこんところをなんとかならないかな……？」

「まあ、考えるけどさ、難しいと思うけど？ 無闇やたらと、詩稀の事を普通の人間に教えるわけにもいかないしさ」

「……やっぱ、無理か」

「やってもいないうちから落ち込まないの」

梢は、健一を励ますように、肩をポンポンと叩いた。

「でもさ、改めて考えると、前途多難だな……」

「まあ、仕方ないんじゃない？ 願わくば、その人がちゃんと理解して受け入れてくれれば……ね」

「まあ、大丈夫だとは思うんだけどな……でも、やっぱりな……」

「ほら、ちゃんとしろ。あたしからできるアドバイスはただ一つ。実行あるのみ！」

「……やっぱ、梢に相談しても無駄だったか……」

「まあ、そうかもしれないけど、一人で抱えてるよりはよかったですよ？ 誰かに話すとずっとするじゃない。健兄は、自分の中だけで解決しようとしすぎるんだよ。もっと、周りの人間に弱音を吐いてもいいと思うよ」

「まさか、梢の口からそんな説教が出てくるとは思ってなかった。ありがとう」

健一は、満足気に笑った。清々しい笑顔だった。

（そうだよ。自分の中だけで抱え込んでいても、なにも進まないんだよ。あたしがいい例じゃない。ずっと言わずに温めておいたらさ、いきなり失恋だもん。こんな気持ち、あたしだけで充分だよ。あたしを傷つけたんだから、絶対、なにがなんでも幸せにならないと赦さないんだからね）

梢は、健一が幸せになるようにと、ただそれだけを願った。

その頃、詩稀村では信じられない事が起こっていた。突如、藻音時弥を筆頭とした神崎側の人間が、吉田側である吉住家を襲撃していた。この時、吉田の本家は詩稀村から出ており分家があるのみだった。しかし、分家に能力者はおらず、実質、吉住家が詩稀村内に限れば権限を持っていたのだ。

時弥の襲撃は見事に成功した。あまりに突然の事に、吉住家は抵抗する事ができなかった。この瞬間、吉住家が滅び、詩稀村の全権は神崎家が握る事になった。

*

健一は、そんな事があつたとも知らず、梢に悩みを打ち明けてすっきりとした気分で帰路についていた。しかし、下山した瞬間、いつもと違う光景が飛び込んできた。

「ど、どうなってるんだ」

まるで、浦島太郎にでもなった気分だった。少しの間、北玄山にいた間に、村はすっかりその姿を変えていた。

健一は、愕然として膝を崩した。

「一体……」

そんな健一に気付いて、村の人間が健一の周りに集まってきた。

「やあ、君がまだいたんだね」

不敵な笑みを浮かべながら、藻音時弥が前へ歩み出た。

「も、藻音……」

「やあ、なにがあつたか、わからないようだね」

「藻音、お前がなにかしたのか！」

健一は立ち上がって、時弥の胸倉を掴んだ。

「まあ、落ち着けよ。わたしは、君の能力をかってている。共に神崎家のために……」

「なにをした！ お前は一体なにをしたんだ！」

「仕方ないな……教えてやるよ」

時弥は、健一の目を凝視した。

「お前の家族を殺した」

その言葉を聞いた時、健一の目の前は真っ暗になった。

時弥の胸倉を掴んでいた手は、力なく離れた。

健一の思考が止まった。なにも考えられなかった。

(殺した？ おれの家族を殺した？ ははっ……嘘だろ？ 冗談だろ？)

その瞬間、健一の心は消えた。

(ヤバイな)

時弥は危険を察し、一人神崎家へと走っていった。その事に気付く者はいなかった。

次の瞬間、健一は自分の能力を解放した。

健一を中心に熱風が発生した。

「うわあー！」

直接熱風を浴びた村人たちが悲鳴をあげた。健一を取り囲むようにいたのだから、無事ではすまない。

しかし、悲劇はこれからだった。健一の能力はここからなのだ。

熱風は周りの木々を燃やした。それをきっかけに、健一の周りから火柱があがった。

本来ならば、掌を突き出して、そこから炎を発するだけの能力なのだが、それは、無意識にリミッターをかけているからであって、リミッターがはずれた今、その程度ではすまない。

村のあちこちで火柱があがった。。村は、あっという間に火の海と化した。

村人のほとんどは、逃げる暇もなく、その炎に焼かれた。その様子は、まさに地獄絵図だった。

幸か不幸か、村人たちは恐怖や熱さを感じる暇もなく焼失していく。その場に残るものは、灰だけである。建物に人の形が焼け残ったとしても、その建物も飴のように溶けてしまう。そこには、なにも残らない。

そして、能力を限界まで使った健一は、そのまま気を失った。

この時既に、村はほぼ全焼していた。

たとえ健一が気を失っても、新たに火柱があがらないだけで、残り火は、まだ燃え続けていた。

*

宍神梢は、北玄山の湖からその様子を見ていた。近づこうにも、炎で遮られて近づけない。不思議な事に、村を囲む四つの山は全く燃えていない。それぞれの麓に立つ柱が、炎を防いでいるらしい。

梢は、何度か近付こうと試みたが、炎に押されて無理だった。いっそ、自分の能力——分解を使おうとしたが、健一の炎には、太刀打ちできなかった。梢の能力を上回る勢いで炎が襲ってくる。

梢は、無力だった。ただ見ているしかなかった。

*

健一の炎により、村は全焼した。いや、一部だけは残っていた。神崎家である。神崎禎昭の時空を閉ざす能力で、空間に裂け目を作り、健一の炎を防いだのだ。結果、生き残ったのは、神崎家にいた者たちと、宍神梢、そして吉住健一という事になった。

ここに、詩稀村は滅んだ。しかし、事前に散っていた者たちがいた為、能力自体が滅ぶ事だけは避けられた。

*

それから、吉住健一は、神崎禎昭の屋敷を訪れた。時弥は当初困惑したが、吉住家を滅ぼしたのは、健一以外の者は能力がなかっただけで、健一自身は利用できるかと前々から考えていた。神崎禎昭もその事を理解しており、彼はあっさりと健一を迎え入れた。以来、健一は神崎家で暮らす事となった。しかし、神崎禎昭はそのあとすぐに他界した。

ちなみに、穴神梢は、小さい頃から神崎家で暮らしていたので、いつもと変わる事はなかった。

*

「また、あの夢か……」

この夢を見た目覚めは憂鬱だ。

三年前の事以来、ずっと罪悪感に悩まされていた。そんな健一を救ったのが、当時から結婚を考えていた相手、たけだ岳田可南子だった。

事件からしばらく経った頃、可南子の方から健一にプロポーズをした。健一は、自分の能力や詩稀村の事を全て可南子に話した。可南子は黙って健一の話聞いた。健一の話聞いても可南子は、自分の気持ちは変わらない、と言った。健一は心の底から、ありがとう、と言った。それからすぐ、二人は結婚した。

しかし、健一はそれから神崎家から離れる事はなかった。神崎グループに所属し、神崎禎昭亡きあとも、それは続いている。

「もうすぐだ。時弥が行動を起こした今、もう止める事はできない。全てが動き出してしまったんだから……」

健一は起き上がり、携帯電話で藻音時也に電話した。

二回コール音がし、時也が出た。

『もしもし』

「久しぶりです。吉住健一です」

『お久しぶりです、健一さん。どうしたんですか？』

「いや、時也さんはどうしてるかなと思って」

『元気ですよ。この前、時空の能力者の一人に会いました。連れは、どうやら兄さんが仕掛けたようですけどね。健一さん、本題はこれでしょ？』

「さすが。全く……その通りです。で、どちらですか？」

『少年の方です。確か、椎崎の人間だったと思いますが』

「なるほど、椎崎誠司ですね。で、彼には？」

『安心してください。もちろん、なにもしていません。ちょっと、自分の境遇について話しましたけど』

「そうですか……」

『大丈夫ですよ、彼なら。実際に会って、確信しました。今、どのくらいまで進んだかはわかりませんが、もうすぐその時が来るでしょうね』

「ええ」

『もちろん、その時は力を貸しますよ。どうも、兄さんのやり方にはついていけない。兄さんはやりすぎなんですよ』

「……………」

『それに、兄さんは神崎だけでなく、世界を手に入れようとしている』

「ええ」

『詩稀の人間は本来、時代の裏側で活躍していればよかったです。しかし、今はそんな必要もない。詩稀の人間は、普通の人間として穏やかに暮らしていればいい。そう思うんですよ』

「確かにそうです。おれも、そう思ってます」

『だから、そんな兄さんを赦す事はできない。これからは、過去の確執をとっぴらって、詩稀が一つにならなければならない』

「ええ、その為に、おれたちは璃織魚様を救出しなければならない」

『その前に、兄さんに利用されている少年少女を助けなければ』

「お願いします」

『言われずとも。ああ、そういえばこの前、梢ちゃんに会いましたよ』

「梢に？」

『元気そうでした』

「そうですか」

『梢ちゃんの出番もそろそろですね。そして、倉沢さんも』

「ええ。ホント、倉沢さんには迷惑をかけてしまってますが」

『できる限り、兄さんが接触しないように努力します。兄さんが手に入れてはいけませんからね、あの力は』

「お願いします」

『わかりました』

「急に電話をかけてすいませんでした」

『いいんですよ。また、あの夢を見たんでしょう？』

「全く、その通りです」

『もう、過ぎてしまった事です。忘れる事はできないでしょうが、仕方のなかった事です。第一、あれは兄が悪いんですから』

「わかってるんですが」

『罪の意識があるなら、償いたいとおもうなら、今こそしっかりしないと』

「ええ。心配をかけてしまって……」

『構いませんよ。では、これで』

「では」

健一は窓の外を見た。空が朱色に染まっていた。

*

宍神梢は、倉沢俊昭の病室で目を覚ました。いつの間にか眠っていたらしい。途中で吉住可南子が来たのだろう、毛布がかけられてあった。外は暗くなっていた。面会時間はとうに終わっているだろう。それでもこのままにしておいてくれたのは、梢が眠っていたからなのか、それとも詩稀の人間で健一の妹のような存在だからなのか、梢には判断できなかった。

*

健一が結婚して神崎家を出たあと、梢も同時期に神崎家を出た。それ以来、普通の人間として生活していた。それなりに恋もしたが、健一以上の人には巡り会えなかった。

そんな矢先、藻音時也と街で会った。とても、偶然とは思えなかった。

「梢ちゃん、久しぶり」

梢は、無言で頭を下げた。

「せっかく、こうして会ったんだからもうちょっと愛想よくしてほしいな」

「それは、すいませんでした」

梢は素っ気なく答える。梢は藻音兄弟が苦手だった。いや、健一の家族を殺した神崎家に関する全員が嫌いだった。もちろん、時也は直接は関与していない。話では、時也は兄の時弥に反抗していると聞く。それでも時也にこんな態度をとってしまうのは、ただの八つ当たりにはすぎない。もちろん、時也もそれはわかっているのだから、別に気にしない。

二人は、近くの公園のベンチに腰かけていた。

「兄さんが動き出した」

時也のその言葉で、梢は全てを察した。

「じゃあ、もうすぐしたら……」

「君の能力が必要になってくる。そして、あの倉沢って人も」

「でも、あの人は……」

「そう、神崎グループの傘下の会社にいる。兄さんが知っていてその会社を吸収したのかは、わからないけどね」

「合併じゃなくて吸収か……ちゃんとそう言うなんて、あなたらしいじゃない」

「そいつはどうも。でも、兄さんは気付いていないようだ」

「それはよかったじゃない」

「まあね。でも、そろそろ気付くだらうね、本格的に動き出したんだから」

「じゃあ、危ないじゃない」

「だから、倉沢さんに連絡しておいた」

「でも……」

「だから、こうして梢ちゃんに会いに来たんだ」

「そう……やっぱり偶然じゃなかったんだ」

「今すぐ倉沢さんの所に行って、彼を護ってほしい」

「言われなくてもそうするわよ。で、あなたは？」

「時空の能力者に会いに行くよ」

「そう……じゃあね」

梢は立ち上がった。

「会えてよかったよ。そうそう、なにか健一さんに伝えておく事はないかい？」

「……ないわ」

そう言い残し、梢は街の雑踏の中に消えていった。

*

梢は、突然その事を思い出した。倉沢俊昭の無事が確認された安心からなのだろうか、無性に健一に会いたい、という気持ちでいっぱいだった。

梢は、病室を出て、医局へ向かった。可南子がいるかどうかはわからないが、とりあえず行ってみる事にした。

——コンコン！

「はあい」

ノックすると、中から女性の声が返ってきた。可南子の声だった。

梢はドアノブに手をかけた。

「失礼します」

そう言い、ゆっくりとドアを開けた。

部屋の中には、可南子の姿しかなかった。

「お一人……ですか？」

梢は、部屋を見回して言った。

「ええ……。今日は夜勤でね。まあ、そうでなくても倉沢さんの事があるから、ここに泊まりこんでるんだけどね」

そう言って、机の上に置いてあったマグカップに口をつけた。そして、今、気付いたように、

「あなたも飲む？」

可南子は、マグカップを手に持って言った。

「いえ、結構です」

「そう……ちょっと、眠くてね……。で？ なんの用？」

「別に、用はないんですけど……」

「そう……。じゃあ、ちょっと世間話でもどう？」

「……………」

「ほら、立ってないで座って」

可南子は、他の机の椅子を自分の横に置いた。

梢は、無言のままそこに座った。

「私の事、嫌い？」

「……………」

「そう……………」

「……………」

「ごめんなさいね」

「どうして謝るんですか」

梢は、呟くように言った。

「どうして、あなたが謝るんですか」

「そうね、ごめんなさい」

「……………いいです」

「最初ね、主人から詩稀の事や能力の事を聞いた時は、ホントにビックリしたわ」

可南子は、唐突に話始めた。

「でもね、それ以上に、主人に惹かれてたから……………」

「あたしだって……………」

それから先の言葉は言えなかった。

「ええ……………主人もそれは知ってたの」

「え……………？」

「主人は、あななが自分の事を好きだって事、知ってたの。だから、あなたに最初に話したんだ、って言ってたわ」

「……………」

「でも、もちろん言い訳はしない。憎むなら憎んでくれて構わないわ」

「あなたって卑怯ですね。……………そんな事言われて、あなたを憎んだりしたら、あたし、まるっきり子どもじゃないですか。それに、そんな事したら健兄に嫌われちゃうだろうから……………。だから……………」

「そうね、卑怯だったわね」

「健兄を不幸にだけはしないで」

「わかってるわ」

「じゃあ、あたしは病室にいます。いてもいいですよ」

「構わないわ」

梢は部屋を出ようとして、

「でも、普通は面会時間を過ぎてますよね。なのにどうしてですか？ あたしが健兄の妹のような存在だからですか？ それとも、罪の意識でもあるからですか？」

「どちらでもないわ。私の独断と偏見。あなたがあなただからよ。あなたと倉沢さんが、あの人がやろうとしている事に必要だから。その事に協力するのに、理由はないわ」

「……………そうですか」

それだけ言って、梢は病室に戻っていった。

8 この景色が見れたんだからいいんじゃないか

亜依は、あの光景を思い出していた。ピラミッドの中で見た光景を……。誠司が誰かと抱き合っていた。

信じたくなかった。認めたくなかった。

付き合おう、なんて言ったわけじゃない。なにも言っていない。別に、誠司に非があるわけではない。だから、誠司がなにをしようと、誰といようと関係ない。関係ないはずなのに……。胸が痛かった。

「どうしたの？」

暗い顔をしている亜依に、ヨハンが訊いた。亜依は、世界を移動してから、ずっとなにかを考えているようにしている。ヨハンは、その原因がわかっていたのだが、あえて言わなかった。時空の能力者の中でも最高位である亜依の能力を弱める事も、藻音時弥から与えられた任務だった。それはフィーも同じで、偶然にもフィーが誠司に抱きついた事、そして、亜依がそれを見てしまった事で、その任務が達成されようとしていた。

(なんなんだ、このイヤな気分は……。任務が達成されるんじゃないか。あとは、鍵を見つけて地図を手に入れば……。なのに……)

ヨハンは、しっくりとこないものを感じていた。

(くそっ、どうして喜べないんだ)

明るく振る舞いつつも、心の中は葛藤が繰り返されていた。

(誠司さん……)

思うだけで、亜依にはなにもできなかった。

そんな二人の目の前には、荒野が広がっていた。

*

草原に、誠司とフィーはいた。

「どこだろう、ここ」

「さあ……」

誠司の問いに、フィーが首を傾げる。それ以上、会話は続かなかった。フィーも誠司も、藻音時也が言った言葉で頭がいっぱいだった。

――君の両親は、君を守るために仕方なくそうしたんだ。

そんな事でも赦せなかった。淋しい思いをさせた事は……。

――君の本当の名前は、吉田綾乃だ。君の親……というより、君の一族は、僕が仕えている神崎の一族に狙われていた。それを知っていたからこそ、君の両親は君を手放したんだ。だが、結局は見つかってしまったようだね。

急にそんな事を言われても、どうしていいのかわからなかった。

(アタシの名前が……。そんな……)

——五年ほど前だったかな。強盗を装った連中に殺された。もちろん、兄さんの息がかかっている連中だ。その事件は、強盗殺人として世間では知られている。

そして、本当の両親を知らされたが、その両親は既に亡くなっていた。ショックを隠す事なんてできなかった。

——君は、椎崎容子の子孫だろ？ 彼女の旧姓は、神崎だ。

(神崎？ 神崎ってあの詩稀村を支配していた……？)

誠司は、その事に疑問を抱いていた。

(でも、あの藻音時也とかいう人は悪い人間には見えなかった。という事は、あの藻音という人物はその兄の時弥なのだろう。あの車の人は、その時弥から逃げていた……きっと、そうに違いない。とすると、やはりそいつが黒幕か……？)

いくら考えても、本当のところはわからない。

(それよりも……ホント、どこなんだ？)

*

亜依とヨハンは、荒野を歩いていた。周りにはなにもない。

(この景色、どこかで……)

亜依には、見覚えがあった。記憶を辿っていくが、思い出せない。

「どうしたの？」

ヨハンは、考え込んでいる亜依を、不思議そうに見る。

「なんでもない」

亜依は首を振った。しかし、その表情は変わらない。

「なにかあるんなら、相談にのるよ」

ヨハンは、誠司の事だと思っていた。もちろん、亜依は誠司の事が気になって仕方なかった。しかし、考えれば考えるほど辛くなっていくので、違う事を考える事にしたのだ。それが、今現在の景色だった。

「大丈夫。たいした事じゃないから」

「でもさ……」

「ありがとう」

笑顔でそう言われると、ヨハンはなにも言えなかった。

しばらく、お互いに無言のまま歩いていた。行けども行けども景色は変わらない。

「なんなんだ、ここ」

ヨハンがぼやく。しかし、亜依はそれを聞いておらず、ずっと記憶を辿っていた。

(前にもこんな事が……)

そう考えていた時、目の前に街が見えた。

「あー！」

その、亜依の突然の叫び声に、ヨハンは驚いて尻餅をついた。

「ど、どうしたの……」

「ごめんなさい。ずっと考えてたの」

「考えてた？」

「ええ。この景色、どこかで見た事がある気がしたから」

その言葉に、ヨハンは期待した。

(もしかしたら、鍵の場所が見えたとか……)

しかし、ヨハンの期待は呆気なく裏切られた。

「ここ……前に誠司さんと一緒に来た事があるんです」

「……………」

ヨハンは絶句した。

亜依は、改めて辺りを見渡した。

「間違いありません」

亜依は確信した。間違いなくここは、以前、誠司と一緒に来た世界だった。ここで、亜依は本当の両親と再会したのだ。そんな思い出の場所だった。

亜依の足は、自然と早くなった。気付けば、駆け足になっていた。ヨハンは、慌ててそれを追った。

*

誠司は辺りを見回すが、同じ景色が続いているだけだった。

「なあ、フィー」

フィーの方を見ずに声をかける。

「……………」

しかし、フィーからの返事はない。

「なあ、フィー。フィーってば……さ……」

フィーの方を向くと、フィーはなにかを考えているようだった。

「もっしもーし」

フィーの目の前に手を出して動かす。しかし、フィーはなんの反応も示さない。仕方なく、肩に手を置いて揺すってみる。

「フィー、フィー」

「え、あ……なに？」

ようやく、フィーが反応した。

「どうしたんだよ、さっきからボーッとしちゃってさ……」

「ご、ゴメン」

「まあ、いいや。とりあえず、ここにいてもしょうがないから歩こうと思うんだけど……どうする？」

「それでいいんじゃない？」

そう答えるが、心ここに在らず、といった感じだった。

「じゃあ、行きますか」

二人は、とりあえず歩き出した。しかし、行けども行けども景色は変わらない。ただ、草があるだけだ。

「緑って大切かもしれないけどさ、こうもあるとウンザリしてくるよな……」

誠司は、愚痴りながら進んでいく。フィーは、そんな誠司の言葉は耳に届かないようで、浮かない顔をしながら、無言でついていっていただけだった。

*

久しぶりに、亜依はあの街にいた。亜依はその街の名前を知らない。しかし、この街に名前はなかった。ここは、コリアート地方と呼ばれる場所で、小さな集落が点々としている。ここは、その中の一つにすぎないのだ。

「あのさ……」

ヨハンは街の大通りをビクビクしながら歩いていた。亜依は慣れたもので、堂々と歩いている。一度来た事があるだけに、周囲の目が気にならない。街の様子は、前回と変わっていなかった。

「大丈夫ですって。別に食べられたりしませんから」

そう言われると、余計に怖くなってしまう。

「ところでさ、どこに向かっているの？」

「ここをずっと行った所に、知ってる人が住んでるの」

亜依は、嬉しそうに言った。そして、足取りも軽く、亜依は足早に歩いていった。

*

草の海を進んでいくと、遠くの方に崖のようなものが見えた。

「とりあえず、あそこに行ってみないか。あそこなら、遠くまで見えるだろうし」

「賛成。とつとつ、こんな場所抜きたいもん」

二人とも歩き疲れていたが、それでもピラミッドの時よりはました。状況はジャングルと大差ないが、周りが、空が見えるという事が大きな違いだった。

「その前にさ、ちょっと休まないか」

「賛成」

フィーは、そう言うなりその場に倒れた。その時、髪を束ねていたゴムをはずした。誠司も草の上に寝転がった。

「ここは、どこの世界なんだろうな……」

誠司は、独り言のように言った。

「そろそろ、鍵を見つけないな……」

フィーも独り言のようにぼやいた。

「空って高いな……」

誠司は、久しぶりに落ち着いた気分になっていた。その時、風が吹いた。

「ああ、涼しい……」

フィーの髪がなびく。

「こうやってると、なにもしたくなくなるな……」

「同感……」

「もうちょっと休んでから行こうか」

「賛成……」

*

亜依とヨハンは、クラスター家の前にいた。

(なんだか、あの時を思い出すな……)

亜依は、いささか緊張しながら、扉をノックした。

——コンコン！

「……………」

「……………」

しばらく待ったが、反応がない。もう一度ノックしてみる。

——コンコン！

「……………」

「……………」

やはり反応がない。

「留守なんじゃないの？」

ヨハンがそう言った時だった。

「あんたら、なにか用か？」

背後から少年の声がした。亜依が振りかえると、そこには、農作業の道具を持った少年が立っていた。

「あなたは確か……ラ、ラ……」

考えるが思い出せない。

「ラミン」

「そうそう、ラミンくん。お久しぶり」

「ああ……そういえば、前に会った事があったような……」

ラミンは、道具を地面に置いて、腕を組んで考えた。

「あー！ 思い出した。確か、一年ほど前に突然来た……」

「ちょ、ちょっと待って。あれから一年も経ってるの？ ……そういえば、ラミンくん、少し大人になってるような……」

亜依は、ラミンをしげしげと見た。

「やめてくれよ、恥ずかしいから」

「ごめんなさい。ところで、お父さんは？」

「父さんなら、ここにはいないよ」

「いないって……もしかして……」

亜依は、いけない事を訊いてしまったように思った。

「大丈夫だって。父さんは、ちゃんと生きてるよ。ただ、今は家にいないだけ」

「そうなんだ……よかった」

「色々あってね、今はドラゴニアって街にいるよ」

そこまで言って、ラミンはようやくヨハンの存在に気付いた。

「そういえばさ、前に来た時って、別の人じゃなかったっけ？」

「ええ。前に来た時は誠司さんと一緒だったかな……。今は、このヨハンさんと旅をしてるの」

自分の名前を紹介されて、ヨハンは軽く頭を下げた。

「あんたも、いろんな人と旅をしてるんだな……」

ラミンは、その事に感心していた。

「で、アイさん、だっけ？」

「覚えててくれたの？ 嬉しい」

「そうじゃないって。今さっき思い出したの」

「そう……でも、あたしはラミンくんの名前、忘れちゃってたけどね」

申しわけなさそうにしながらも、笑みを浮かべた。

「まあ、そんな事はいいんだけどさ。今回も父さんに用があるの？」

そう言われて、亜依は考えた。

「ねえ、ラミンくん。こんな鍵、見たことない？」

亜依は、今までの金庫の鍵を見せた。ラミンは、それをジーッと見て、

「さあ……？」

そう言って、首を傾げた。

「あ、でも、父さんなら知ってるかもしれない。せっかくだから、行ってみる？ ……って、無理か……」

「どうしたの？」

「いや……ドラゴニアまでって、どう頑張っても二十はかかるんだよ」

「二十日って事？」

「そう。畑仕事もあるから、そんなに留守にできないんだ」

「そうか。そうだよ。あたしたちも、正直、そんなに時間はないし……」

亜依はどうかとヨハンを見た。急に視線を向けられたヨハンは、どうしていいのかわからず視線を泳がせた。

「でも、父さんならなにか残してるかもしれないから、ちょっと探してみるよ」

そう言って、ラミンは家の中に入っていった。

「あ、あたしも手伝います」

亜依は、慌ててそれを追う。ヨハンもそれに続いた。

＊

少し休んだあと、誠司とフィーは崖まで行ってみた。そこには、大きな木が一本立っていた。それ以外はなにもない。よく見ると、木の根元に墓標のようなものがあった。

「これ、誰かが……」

そう言った誠司の言葉に、フィーは震え上がって誠司の腕にしがみついた。

「大丈夫だって」

フィーの手に自分の手を重ねて言った。フィーの手は震えていた。

「フィー、見てみなよ」

「え……？」

誠司に言われ、フィーは顔を上げた。

「うわあ〜」

そこからは、あの草原が一望できた。残念だったのは、一面が草原で、他になにもなかった事だった。

「でも……なんにもないね」

フィーは、残念そうに言った。

「まあな。でも、この景色が見れたんだからいいんじゃないか」

誠司は、そこからの景色に見惚れていた。

＊

ラミンの家の中には、それらしいものはなかった。そこで、家の脇にある倉庫を探してみる事にした。

「ここになにかがあるのか、あんまり知らないんだ。父さんが昔使っていた物とかがいっぱいあって、よくわからないんだ」

「じゃあ、もしかしたらあるかもしれないんだ」

ヨハンは、その言葉に期待を抱いた。

「じゃあ、探してみましよう」

その言葉をきっかけに、三人は倉庫の中を探し始めた――その時、亜依のポケットから光が放たれた。その光は、倉庫の奥の方を指している。亜依は、ポケットの中から鍵を取り出した。

そう、母親からもらった鍵だ。その鍵に付いている小さな石が光っていた。亜依は、母からその鍵を受け取った時、必ず役に立つ日が来るから、と言われた事を思い出した。

(役に立つって、この事だったの？ お母さん……)

ラミンは、その石を不思議そうに見ていた。それはヨハンも同じだった。

亜依は、その光の先へゆっくりと歩いていった。木箱が積まれていてなかなか前に進めない。しかし、近づく必要もなかった。

ゆっくりと、石から放たれている光が上に移動していく。その先には、同じように、石の付いた鍵があった。鍵の方が移動したのだ。

鍵は、ゆっくりと空中を移動し、やがて亜依の手の中に収まった。その瞬間、亜依とヨハンの姿はその場から消えた。そこに残ったのは、啞然としているラミンだけだった。

*

亜依が鍵を手に入れる少し前――

誠司とフィーは、とりあえず崖の上を歩いていた。草原と反対の方向は荒野が続いていた。どうもそこは、崖というよりは丘だったようだ。下から見れば、その切り立った断面から崖のように見える。

しばらく歩いていたのだが、亜依が鍵を手に入れた瞬間――二人の姿が消えた。

亜依とヨハン、そして誠司とフィーは、吉田邸の庭にいた。

「.....え？ あ、亜依.....」

どうなったのかわからない状況の中で、まず声を出したのは誠司だった。

「せ、誠司さん.....」

その声で誠司の存在を認識した亜依は、どうしていいのかわからなかった。

「フィー、どうしてここに.....？」

「ヨハンこそ、どうして.....」

フィーとヨハンにもどうなっているのかわからなかった。

「フィー、知り合いか？」

誠司が不思議そうな顔をした。

「え、あ、その.....」

フィーは言葉が出なかった。

「ヨハンさんのお知り合い？」

亜依も誠司と同様の質問をヨハンにする。

「え、いや、だから.....」

ヨハンも言葉が出ない。

「どういう事なのか、説明してほしいんだけど」

誠司の言葉に、フィーとヨハンは顔を見合わせる。二人はしばらくそうして、やがてため息をついた。

「仕方ないか.....」

フィーは覚悟を決めたように言った。

「いいのか、フィー」

フィーは、ゆっくりと頷いた。

「いいわ、最初から話すわ。アタシの本当の名前は木元綾乃。あなたはアタシの名前は知ってるわよね」

フィーは誠司を見た。そう言っているフィー——いや、綾乃は、誠司と旅をしていた時とまるで性格が違うように感じられた。元々強気な性格なのだが、ヨハンとの旅でガイコツを見てから、恐怖には敏感になったのだ。それも、誠司との旅の行き先がそういう場所ばかりだったのだから仕方ない。そんな綾乃の言葉に誠司は頷く。

「で、こっちは竹内舜平。アタシがヨハンって名乗るように言ったの。えっと、富所亜依さんは舜平の事知ってるのかしら？」

亜依は無言で頷いた。

「富所さんは、一度『博愛館』に行ってるから。成海とも会ってる」

「そう.....。そうなんだ」

「君たちは何者なんだ？ だいたい、どうして.....」

「順番に話すわ」

綾乃がそう言った時、

「立っているのもなんだから、腰を下ろさない？」

亜依がそう言った。

「それもそうだな」

誠司が賛成して、四人は芝生の上に座った。

「話を中断させてごめんなさい」

亜依の言葉に綾乃は首を振った。

「じゃあ、話すわね」

綾乃はゆっくりと話し始めた。ある日、自分たちの所に藻音時弥という人物が来た事。彼からそれぞれ能力を与えられた事。そして、彼から富所亜依と椎崎誠司を利用して地図を手に入れるように言われた事――全てを話した。亜依と誠司は、黙って綾乃の話を聞いていた。それを聞いて、亜依は自分の中のモヤモヤが解消されたような気がした。

「なるほどね、フィーとそっちは……ヨハンだっけ？」

「綾乃でいいわ」

「オレも舜平でいい」

「そう……。とにかく、二人の後ろには藻音時弥がいたわけか……」

綾乃と舜平は同時に頷いた。

「俺たちは、藻音時弥の思い通りに動かされていたって事か……」

誠司は悔しそうに言った。

しばらく沈黙が続いた。

「そうだ、綾乃たちは鍵を持ってないのか？」

舜平がその沈黙を破った。

「持ってるけど……」

「じゃあ、貸してくれ」

「舜平、鍵なんてどうするの？」

「この庭に金庫があるんだ。そこに地図がある」

「ちょっと待て。まだ藻音時弥の思い通りに動くつもりなのか」

誠司が舜平を止める。

「そんなつもりはないさ」

「じゃあ、どうして」

舜平は誠司の顔を見て、

「途中で投げ出すなんて、オレにはできない」

そう、強く言い放った。

誠司はじっとヨハンの顔を見ていた。

「それは俺も同感だ」

そう言って、ヨハンに鍵を渡した。

誠司から預かった二つの鍵と、亜依が先ほど手に入れた鍵で、ヨハンは金庫の鍵を開けていた。しかし、まだ金庫はあった。亜依が持っている二つの鍵は、そこには合わなかった。

「まだ鍵が必要なのか……」

舜平は吐き捨てるように言った。

亜依はゆっくり目を閉じた。

「……………見える……………」

亜依は呟くような、誰にも聞こえないような声で言った。

「見えるってなにが？」

誠司が訊いた。

「誠司さん、鍵が見える」

「鍵？ どこに、どこに見えるんだ？」

「待って」

そう言って、もう一度集中した。

「……………どこかの部屋。そう、この建物のどこかの部屋。……………部屋には絵がかけられてる。それ以外にはなにも……………あ、棚がある。なんていうんだろ。お酒の瓶がいっぱい並んでる。そこ、そこにある」

「わかった。綾乃、舜平、その部屋を探そう！」

そう言うと、誠司は走り出した。二人も頷いて誠司に続いた。そのあとに、亜依が続いた。

*

屋敷の中に入る。目の前には大きな階段があった。その階段を上りきった所には、誰かの肖像画が飾られていた。

「あの絵……………」

綾乃が呟いた。そして、頭を抱えてうずくまった。

「綾乃、どうしたんだ？」

心配して、舜平が声をかける。

「富所さん、椎崎さん。二人は鍵を探して。オレは、綾乃の側にいるから」

「わかった。行こう、亜依」

亜依は、誠司の言葉に頷いた。それを確認すると、誠司は玄関に入って右手のドアに手をかけようとした。

「誠司さん、そこは違います」

「え……………？」

「あたし、そこには入った事があるんです。そこじゃありません」

「そう……………」

誠司はドアから離れ、逆の部屋に向かった。

ドアを開け中に入ると、そこには大きなテーブルがあった。

「ここじゃありません」

亜依は首を振って言った。

「じゃあ、二階か……」

その部屋を出て、誠司は階段を上った。上りきると、左右に分かれていた。

「どっちに進む？」

誠司が亜依に訊く。亜依は目を閉じた。

「誠司さん、こっちです」

亜依は右を指した。

誠司は、それに従い、右に進んだ。その先には、廊下を挟んで二つずつ、四つの部屋があった

。

「どの部屋か、わかる？」

亜依は頷いて、

「ここです」

そう言って、右手前の部屋を指した。そこは、吉田武暁の部屋だった。

亜依と誠司は、その部屋のドアを開け、中に入った。

中には、調度品の類はほとんどなかった。唯一あるのがコレクションボトルが飾られている棚だけである。この屋敷は、吉田家がいなくなってから全く手がつけられていないようだ。以前のままになっている。

「誠司さん、あれです」

亜依が棚を指した。

「わかった」

誠司は棚に近付き、抽斗を開けた。すると、そこには鍵が入っていた。誠司がその鍵に触れた時だった。

「うわぁっ……」

階下から舜平の声がした。

亜依と誠司は顔を見合わせ、急いで声の元に向かった。そこには、苦しそうに胸を押さえている舜平がいた。その横では、綾乃も同じようにしている。

「綾乃、舜平」

「大丈夫ですか」

二人は、なにが起こったかわからず、あたふたとする。

舜平は、胸を押さえながらもがいている。綾乃は、ビクンと大きく痙攣したかと思うと気を失ってしまった。

「お、おい……」

「綾乃さん……」

誠司が綾乃の身体を揺する。

「おい、おいてば」

その間にも、舜平も大きく痙攣して気を失った。

「しゅ、しゅんぺい、さん……どう、して……」

亜依は手で顔を覆って涙を流す。

「なんなんだよっ」

なにも出来ず、誠司は床に拳を思いっきり叩きつける。

「ちくしょう、ちくしょう、ちくしょー！」

誠司が叫ぶ。その声が屋敷中に響き渡る。亜依の慟哭がそれと重なる。

「うわああああん！」

*

どのくらい泣いただろう。どのくらい叫んだだろう。二人とも声が出なくなっていた。

「……んっ……んっ……」

「……おう……しょ……」

声がかすれて、言葉がわからない。

亜依は誠司の胸に顔を埋めた。誠司は、そんな亜依を優しく抱きしめた。

二人は、しばらく抱きしめあっていた。亜依は顔を上げて誠司の顔を見る。誠司と視線があった。自然と二人の唇が重なる。初めてのキスは涙の味がした。

その時、わずかに綾乃が指を動かした。

「あ、綾乃」

誠司が先に気付いた。

「綾乃さん」

亜依が綾乃の側に移動した。

「……ん……ア、アタシ……」

綾乃は何度も瞬きをした。

「大丈夫なのか？」

「大丈夫？」

誠司と亜依が同時に訊く。

綾乃は、二人の顔を交互に見る。まだ、意識がはっきりしないようだ。

「アタシ……どうなったの？」

「綾乃は、急に倒れたんだ。舜平も」

それを聞いて、綾乃は慌てて舜平の姿を探した。舜平は、綾乃のすぐ横に横たわっていた。

「舜平、舜平……」

綾乃は、一心不乱に舜平の身体を揺する。誠司は、綾乃を舜平から引き離す。

「気を失ってるだけだと思う。それよりも、綾乃は大丈夫なのか？ どうしちまったんだよ」

綾乃は無言で首を振った。

「そういえば……」

「どうしたの？」

亜依が誠司に訊いた。

「藻音時也が、なにか言ってなかったか？」

綾乃は、それを思い出した。

――元来の能力でない能力は、能力者の身体をむしば蝕む。まあ、詩稀の出の者ならまだ大丈夫なんだが、そうでない者だと、非常にマズイ。

綾乃は、なんとか意識と取り戻した。それは、綾乃が吉田家の出身――つまり詩稀の人間だからだ。しかし、舜平は違う。普通の人間だ。

「舜平！」

綾乃は、舜平の顔を覗き込んだ。息はしているようだが、目覚める気配はない。

「舜平……」

綾乃は、舜平に覆い被さって泣いた。

「舜平、死なないで。目を開けてよ……」

綾乃は、舜平の唇に自分の唇を重ねた。

「お願い、目を開けて……」

「……ん……っ」

その思いが届いたのか、舜平がわずかに息を洩らした。

「舜平……ねえ、舜平」

綾乃が舜平に声をかける。

それに応えるように、舜平の身体がわずかに動いた。そして、ゆっくりと目を開ける。

「舜平、舜平……」

綾乃は、手を舜平の顔に添え、声をかけ続ける。

「……あ……や……の……」

舜平の口がそう動いた。綾乃は涙が止まらない。

「……あ……や……の……」

たどたどしいながらも、はっきりとそう言った。

「舜平、よかった、舜平……」

綾乃は舜平を強く抱きしめた。

「よかった……」

「ああ」

亜依と誠司も喜びを隠せなかった。

*

その後、舜平は完全に目を覚ました。そして、四人は金庫の所まで歩いた。

「開けるよ」

誠司はみんなに言って、ゆっくりと鍵を鍵穴に差し込んだ。そして、ゆっくりと回すと扉が開いた。

「……これが、地図……」

その中には、一巻きの紙が入っていた。誠司はそれを取り出し、ゆっくりと封を解いた。

「これは……」

そこには、日本の地図があった。しかし、西日本だけだ。

「どうしたの？」

綾乃が誠司に訊く。

「なんだったの、その紙？」

その言葉に誠司は首を傾げた。

「なにして、地図じゃないか。綾乃たちはこれを探してたんだろう？」

誠司が言うが、綾乃は、

「それ、地図なの？ 白紙にしか見えないけど……」

そう、綾乃には見えていなかった。そして、舜平にも。

「見えないのか？」

綾乃は頷いて、目を凝らした。

「あ……うっすらと、なにか見える……」

「綾乃さん……」

亜依が心配そうに綾乃を見る。

「能力が消えかかっているんだ。舜平は……舜平は見えるのか？」

その言葉に、舜平は首を振る。

「オレは全く見えない」

「……能力が消えたのか……」

「そんな……」

亜依が口元を押さえる。

「そっか……」

意外な事に、舜平はあっさりとその事実を受け止めた。

「別にいいの、それでも。アタシと舜平の能力は創られたものだから」

綾乃も自分の運命を受け止める。

「アタシたちはいいから、あなたたちは行って」

「でも……」

誠司は戸惑う。

「その地図は半分なんですよ。じゃあ、もう半分はあそこにあるんじゃないの？」

「わかった。綾乃と舜平はこれからどうするんだ？」

「……わからない。能力がなくなったんなら、きっと『時の口』は通れない。でも、ここは日本だし、そのうち自分たちでなんとかして家に帰るわ」

「そうか……」

「だから、心配しないで」

誠司は頷いた。

「富所さん、迷惑かけてばかりでゴメンね」

亜依は首を振った。

「オレと綾乃なら大丈夫だから。行ってらっしゃい」

その言葉に、涙が溢れてきた。誠司が亜依の手を握る。

「行こう」

亜依は小さく頷いた。

「綾乃、舜平……行ってくる。二人とも元気でな」

そう言うと、誠司と亜依は『時の口』に入った。綾乃と舜平は、笑顔でそれを見送った。

*

『時の口』を通過して、亜依と誠司は境東学園にやってきた。亜依にしてみれば、始めてみる母の母校だ。しかし、亜依もその事は知らない。

「行こう」

誠司と亜依は手を繋いで学校の中に入っていった。そんな二人を夕陽が優しく照らしていた。生徒がいない学校に入ると、誠司はまっすぐ階段下に向かった。

「ここなの？」

その場所に、亜依が首を傾げる。そして、亜依は母からもらった鍵を取り出す。

そこにある古い鍵のうちの一つは、その扉の鍵だった。

「……………っ」

扉が開く瞬間、亜依は息をのんだ。

その時、夏菜がやってきた。

「あ……」

夏菜は、予想もしていなかった人間に驚いたようだった。

「あなた、その鍵は……」

夏菜は、亜依が持っている鍵に釘付けになった。

「やあ、夏菜ちゃん」

しかし、その声は届いていない。

「あなた、その鍵、どうしたの？」

「……え、これは、お母さんから……」

亜依は、驚きながらも答える。

「お母さん……？」

夏菜は、納得がいかない顔をした。

「夏菜ちゃん、紹介するよ。彼女は俺の本当のパートナーの富所亜依」

誠司は、夏菜に構わず亜依を紹介する。

「そんな事はどうでもいいの。問題なのは、どうしてあなたがこの扉の鍵を持ってるかって事なの」

夏菜の剣幕に亜依が一步下がる。

「だから、これはお母さんから……」

「じゃあ、あなたのお母さんは、過去の番人……」

今度は、亜依を無視して考え込んだ。

「亜依、早くこの鍵を……」

誠司は、夏菜に聞こえないように耳打ちした。亜依は小さく頷いた。そして、棚に鍵を差し込んだ。鍵はゆっくりと回った。そして、扉は開いた。

「あっ……」

声を上げたのは、夏菜だった。

その中は吉田邸と同じだった。封を切ると、日本地図の東半分が現れた。その瞬間、その場に『時の口』が現れた。

「夏菜ちゃん、これで、伝統も元に戻ったよね」

夏菜は無言で頷いた。

次の瞬間、亜依と誠司は『時の口』に吸い込まれた。夏菜の目には、突然消えたようにしか見えなかった。

亜依と誠司の新しい旅が始まろうとしていた。

DU FINO

ある夏の日、三朝実央は今は誰もいない椎崎誠司の部屋の前にいた。

「また、いなくなっちゃった……」

夏休みが始まる少し前、先に帰ってくれ、と言った誠司。あれから、忽然と姿を消してしまった。誠司がどこかに行ってしまったのはこれで二度目だ。春休みの時も、いつの間にか姿を消していた。そして、夏休みにも……。気が付けば、消えていた。

ぽつんと、自分だけがそこにいる。夏休みだというのに、それとも夏休みだからなのか、誰の気配もない。まるで、世界に一人しかいないかのようだ。

しばらく誠司の部屋のドアを眺めていたが、だんだん馬鹿らしくなって、そこをあとにした。

「想い、想われ、振り、振られ。想い、想われ、振り、振られ。想い、想われ……」

そう呟いて歩きながら、実央は顔の前で、額、顎、左頬、右頬、と十字を切っていた。まるで、なにかの儀式のようだ。

「はあ～……」

実央は大きなため息をついた。

どのくらい歩いたのだろうか、気が付くとショッピング街まで来ていた。

(みんな、幸せそうだな……)

街行く人は、悩みなんかないかのように、みんな笑顔で楽しそうに歩いている。そんな人たちを見ていると、なんだか自分だけが不幸なように思えてくる。

「なんて顔してるんだろう……」

ガラスに映る自分の顔を恨めしそうに見る。実央の右頬には、ポチッと赤い小さなニキビがあった。

どこの誰が決めたのだろうか？

だいたい、根拠はなんなのか？

医学的には、なにかあるのだろうか？

だが、どうしても気になってしまう。しかも、的確にその場所にソイツは現れる。

額のニキビは想いニキビ。

顎のニキビは想われニキビ。

左頬のニキビは振りニキビ。

右頬のニキビは振られニキビ。

そして、鼻のニキビは両想いニキビ。

信憑性なんか全くない。そう思っても、どうしても気になってしまう。そう思ってしまう事に、理由なんかないだろう。自分でもどうしてだかわからないのだから。

実央は、自分の右頬を押さえた。

(なんだか、みっともないな……。恥ずかしい)

他の部分にもあれば――もちろん、一つもない方がいいのだが――こんな思いをする事はないだろう。右頬だけに、それも一つだけあるのがいけないのだ。こんなんじゃ、振られた事が一目

でわかってしまうではないか。もちろん、この場所にニキビができたのは偶然だ。偶然なのだが、あまりに的確すぎる。

(神様のバカヤロー！)

ガラスに映った自分を見ながら、心の中で叫んだ。

(不公平だ。世の中不公平だ)

実央は、ガラスから目を逸らした。あまり長く見ていると、余計に落ち込んでしまう。これ以上落ち込みたくない。

実央は、ギュッと目を閉じた。自分の心を落ち着かせるために、自分の過去を忘れてしまうように。そして、しっかりと前を見て歩き出した。

(なんにもなかった。なんにもなかったのだ。あたしは振られたんじゃない。そう、あたしは.....)

自分に言い聞かせるように繰り返す。何度も何度も.....。

辛い事を忘れるには、笑いのが一番！

(Happy go lucky. そうだよネ)

この春、詩稀村を訪れた椎崎誠司は、詩稀村の事を色々と調べた。以下の文章は、椎崎誠司が書いたものである。

この春、詩稀村を訪れた。そこには、俺の先祖の墓があったからだ。そこで、俺は初めて詩稀村という存在を知った。

俺は、その村に興味を覚え、調べてみる事にした。

詩稀村という名前は、本来は《四季》と記されていたらしい。それが、どうなっ
てかはわからないが、《詩稀》という表記に変わったのだ。しかし、それも三年前の火
事で全焼した。その時、村人のほとんどが亡くなった。だが、その事件を察してか、
数年前から一部の村人は以前から村をあとにし、各地に散らばっていた。

どうして村人は特殊な能力があるのだろうか？ 気になって調べてみたが、それら
しい記述はなかった。当然だろう。秘密にひっそりと生活していた詩稀の人間が、外
部に知れるような事をするはずがない。しかし、俺は詩稀村の廃墟の中からそれら
しいものを発見した。そこにはいくつか焦げ跡があるものの、読めないほどではな
かった。そこには、信じられない事が書かれていた。

昔、人間が誕生した頃、その進化過程において特殊な能力を持つ者が現れた。その
者たちは自然と集まり、集落を築いた。彼らは神が住む国として、出雲に彼らの村を
作った。それが四季村である。

彼らは、時の天皇に仕え、様々な政に参加していた。表に出る事はほとんどなく、
出たとしても伝説としてのみだった。

しかし、彼らの能力を恐れ、人々は彼らを疎外し始めた。そこで、彼らは出雲の地
を離れ、遠く離れた東北に安住の地を求めた。

新たに村を作った彼らは、能力の事を隠して、ひっそりと普通の人間として暮らし
始めた。それが、彼らの一番幸せな時期だった。

そのうち、村に巨大な力を持つ者が現れた。それが神崎家と吉田家である。二つの
一族は、互いに村の派遣を奪おうと争いを始めた。わずかな村人は、その際に村を離
れた。この事により、村以外でも能力者が現れる事となった。

村に起こった争いは、終わる事なく続いた。それぞれの一族に右腕として組みする
一族までもが現れ始めた。それが、〇〇〇と〇〇〇だった。（この〇の部分、焦げ
ていて名前が読めなかった）その大きな二つの一族に、それぞれに組みする二つの一
族によって、派遣争いは勢いを増していった。

以来、争いは続いた。そして三年前、原因不明の火事により、詩稀村は全焼した。

これが、そこに記されてあったほしいの内容である。

ここで、椎崎誠司の文章を一時中断させてもらい、○の部分に入る言葉を記しておきたい。その部分には、それぞれ《藻音家》と《吉住家》という文字が入る。その事を彼が知るのはまだ先の事だろう。

では、椎崎誠司の文章に戻そう。

俺は、自分の先祖である椎崎誠介と容子という人物について調べてみた。俺はその情報を見て驚いた。椎崎誠介の妻である椎崎容子は、旧姓が神崎だったのだ。そう、あの神崎家の人間だったのだ。その神崎家の人間が、村以外の能力者である椎崎誠介と結婚したのだ。そこに、何故か吉田の名前があった。これは吉田家の画策だったのでは、と思う。

ここで、もう一度中断させていただきたい。このままでは、吉田家は自分たちを優位にするために神崎家の人間と外の人間を結婚させようと思われてしまうだろう。しかし、それは誤解というもので、事実は彼らの意思だったのである。神崎容子は、数少ない時空の能力者だった。そして、昔に村を去った者の子孫である椎崎誠介も同じく時空の能力者だった。そこで、その能力が悪用されぬよう、そして後世のために、当時の吉田家当主であった武暁様は、彼らの手引きをしたのである。以来、彼ら椎崎夫妻と吉田家はいい関係を築いたのである。これが真実なのである。

では、椎崎誠司の文章に戻ろう。

しかし、例えそれが吉田家の画策であろうとなかろうと、俺には関係ない。

二人の間には、三人の男の子と二人の女の子、五人の子どもができた。その中の一人、二三子が富所家に嫁いだ。その子孫が亜依だ。

そうして、時が過ぎていき、俺と亜依は出会った。

神崎家と吉田家がどうなったかだが、神崎家の方は政財界に進出し、巨大な神崎グループを創設した。その力は絶大で、世界は神崎グループが動かしている、という言葉もあながち大袈裟ではないのかも知れない。

吉田家はというと、こちらは表に出る事はなかった。しかし、それでも着実に富を得ていた。しかし、それも五年前の強盗事件によって終わった。その事件により、吉田家の全員が死亡してしまったのだ。

これにより、詩稀村から始まった神崎家と吉田家の争いは終わったのだ。

度々だが中断させてもらい、訂正をしておこう。椎崎誠司の知らない事実がその裏にあるのだ。
それは、その強盗事件を仕組んだのが藻音時弥である事だ。もちろん、実行したのは彼ではない。だが、それを指示したのは彼なのだ。

そして、これは最近になってわかった事だが、吉田家は完全に滅びていなかったのだ。その血を継ぐ者が存在したのだ。しかし、その者は自分が吉田家の人間である事を知らなかった。なにより、その者には、なんの能力もなかったのだ。その者の名は、木元綾乃。藻音は、彼女に強制的に能力を与えた。そして、なにも知らない彼女を、自分の道具として利用する事を考えたのだ。それを止める事はできたのだが、最終的な目的のためにできなかった。今になって後悔するのだが、それは後の祭りだった。今できる事は、その目的を果たす事だけなのだ。

少し私情が入ってしまった。申しわけない。

では、椎崎誠司の文章に戻ろう。

各地には、まだ詩稀村の能力者が散らばっているらしい。伝承によれば、詩稀の能力者が終結する時は、世界の危機の時らしい。

その時、時空の能力者である俺はどうするだろう。今はまだわからない。

だが、その時は全力で立ち向かうだろう。

その時が来ない事を願う。

2001年4月

椎崎誠司

彼の文章はここまでだ。彼は、表面上の歴史を丁寧に追っている。しかし、その裏に隠された真の歴史までには至っていない。だが、これから先、彼はその事実を知る事になるだろう。その時、彼はどうするだろうか。それが少し楽しみでもある。

2001年7月某日

吉住健一

0 事実は事実として受け止める

十三年前――

神崎家に新しい生命が誕生しようとしていた。しかし、その生命の灯は今にも消えようとしていた。

「禎昭様、このままでは……」

医者言葉に、神崎禎昭は無言で頷いた。女の子が誕生したが、全く息をしていなかった。それどころか、心臓のこどう鼓動も弱い。

「仕方あるまい」

そう言って、禎昭は妻である莉緒の顔を見た。莉緒は、優しく微笑んだ。

「この子が助かるのなら……」

「いいのだな」

「……はい」

禎昭は頷いて、

「地下へ」

周りにいる医師たちに言った。

その医師たちによって、莉緒は地下へと運ばれた。

「さらばだ、莉緒」

そう言って、禎昭は莉緒に手をかざした。莉緒は、小さく頷いた。

「さようなら」

それが、神崎莉緒の最期の言葉だった。神崎莉緒は、一人の女の子を出産して、その子の生命を助けるため、息を引き取った。

「すまない、莉緒……」

禎昭の目から一筋の涙が流れた。

*

「禎昭様、なにか御用ですか？」

その夜、神崎禎昭は、宍神梢を部屋に呼んだ。

「お前の能力が必要だ」

「……わかりました」

梢は悲しそうな表情をした。

宍神梢の能力は、`分解`。ありとあらゆるものを分解する事ができる。しかし、能力を使うと自分にも反動が来るため、できる事なら能力を使わないようにしている。事実、彼女は過去に一度しか使った事がない。

「どうすればいいんですか？」

「もうすぐ、ここに一人の男がやって来る。その男を一度分解し、その体内にこれを入れるのだ」

禎昭はそう言って、梢に小さな石を見せた。

「先に言うておくが、この事は誰にも言うてはならぬ。わたしの許可なく能力を使つてはならぬ。いいな」

「はい」

梢がそう答えた時、一人の男が部屋に入ってきた。

「失礼します」

そう言うて入ってきたのは、青年と呼ぶにはまだ早い感じの、少年と言つた方が合うような男だつた。彼は、どこか脅えているようだつた。

「緊張せずともよい。お前を悪いようにはしない」

その言葉に少年は震えた。自分を抱くようにしてなんとか震えを止めようとしているのだが、それに反して震えは止まらない。

「倉沢俊昭とか言つたな……」

「はい」

少年――倉沢俊昭は震えた声で言つた。

「リラックスしたらどうかね。さっきも言つたが、君を悪いようにはしない。だが、なにもしないというわけでもない」

禎昭は不気味な視線を俊昭に向けた。

梢は、この倉沢俊昭がこれからされる事を思うと、幼いながらも悲しくなつてきた。まだ、十一歳になつたばかりの彼女にも、自分の能力の恐ろしさが、そして、この神崎禎昭という男の怖さを充分理解している。

「さて、君が行つた事だが、とても見逃す事はできない。しかし、君のその技術を失う事は痛手だ」

俊昭は、目を閉じて俯いた。

「我が社の金をたかが機械の操作で自分のものにしてしまう……あんな物でそんな事ができたとはね……考えもつかなかつたよ」

倉沢俊昭が行つた事は、神崎グループのコンピューターにアクセスし、金額を書き換えて、それを自分のものにしたのだ。しかし、八十年代後半にそれを行う者など皆無に近かつた。だが、それを、この倉沢俊昭はやってのけたのだ。しかし、神崎禎昭に見つかつてしまった。

「……だが、それは不問としよう。だが、もちろん無条件というわけにはいかない。どうかね、条件をのむかね？」

「……条件とはなんですか？」

「なあに、簡単な事だよ。君の体内に鍵を隠す。それだけだ」

「……鍵を……隠す……？」

俊昭は首を傾げた。当然だろう。てっきり、解雇を言い渡されるか、もしくは、どんなに恐ろしい処罰があるのかとビクビクしていたのに、全てを不問にすると言われたのだ。それを聞いて

、気が抜けた感じになった。

「……わかりました」

俊昭は条件をのんだ。

「そうか、よかった」

禎昭はニヤリと笑った。

「君はこれからうちの会社で働いてくれればそれでいい。ただし、二度とこういう事はしない事だ。もし再びすれば、君は十九の若さで人生を終わらせる事になるぞ」

その言葉に、俊昭はゴクンと喉を鳴らした。

「わ、わかりました」

「では、梢」

禎昭は自分の横にいた梢を見た。梢は頷いて俊昭に歩み寄った。

「え、え……？」

俊昭は、なにが始まるのかわからず、うろたえた。

俊昭の前に立つと、梢は右手で俊昭の身体に触れた。

「……え？」

俊昭は、信じられない、といった表情で自分の身体を見た。

「ど、どうなって……」

俊昭の身体は、梢の能力により、分子レベルにまで分解されていた。身体が梢の右手を中心に徐々に消えていく。あっという間に分解を終えると、禎昭から渡された小さな石を中心に置き、分解した身体を修復し始めた。

それは、数分の出来事だった。

「終わりました」

梢が疲れた声でそう言って手を離すと、俊昭は糸が切れたようにその場に崩れた。

「ご苦労だった。休んでいろ」

「はい」

梢はゆっくりと部屋を出ていった。

＊

それから数時間経ち、俊昭はようやく目を覚ました。

「ようやくお目覚めかね」

禎昭は、大きなソファに座ったまま、見下すような目で俊昭を見た。

「……一体、なにが……」

俊昭は、頭を押さえながら立ち上がった。

「あ……」

俊昭は、慌てて自分の身体を確かめた。

「安心しろ、どうもなっていない」

「……あの子は、あの女の子は、一体……」

「君の体内に鍵を入れさせてもらった」

それを聞いて、もう一度自分の身体を確かめる。

「別に、今までと身体は変わらない。鍵は、君の細胞内に直接入れた。その鍵を出す事ができるのは、あの子しかない」

「俺は一体どうしたら……」

「言ったはずだ。君はこれからうちの会社で働いてくれればそれでいい。無論、今日の事は他言無用だ。わたしと君だけの秘密だ。もしこの事を誰かに話した場合、君の命はその瞬間に幕を下ろす。わかったか」

禎昭は、ずっと俊昭の目を見た。その圧倒的な視線に押されて、俊昭は言葉が出てこなかった。

「……………はい」

なんとか深呼吸し、そう言うのが精一杯だった。

「ならばもう帰っても構わぬぞ」

俊昭は、なにも言わず、ただ頭を下げてから部屋を出た。

「これで、扉が開く事はない」

そう言うと、禎昭は葉巻に火を点けた。

＊

宍神梢は自室に戻ると、ベッドに腰を下ろした。

(この能力、なんなんだろう……)

梢は、自分の両手を見ながら考えていた。

梢が過去に能力を使ったのは一度だけ。初めて能力に気付いた時だった。それまでは、梢にはなんの能力もないものと思われていた。しかし、ある時、突然、開花したのだ。

それは、梢が六歳の時に遡る。

幼い頃から両親がいなかった梢は、神崎家で暮らしていた。しかし、神崎禎昭の父である神崎禎臣は、彼女を養女とはせず、あくまでも他人の子どもとして扱った。それは、梢に能力がなかったからである。少なくとも、その時点ではそう思われていた。もしなんらかの能力があるとわかっていれば、そうはしなかっただろう。それでも彼女を預かったのは、梢には間違いなく神崎の血が流れているからだった。

そう、彼女は神崎禎昭の腹違いの妹なのだ。しかし、本人たちはその事を知らない。唯一その事を知っているのは神崎禎臣だけなのだ。その事が、悲劇を招いた――

＊

「お兄ちゃん、遊んでよ」

梢は、自分と同じくらいあるクマのぬいぐるみを抱えていた。梢は、禎昭の事を〈お兄ちゃん〉と呼んでいた。それは本能的に感じていたのではなく、いつも一緒に遊んでくれるお兄ちゃん。ただ、それだけの存在だったのだ、この時までは。

「梢、お兄ちゃんは忙しいから……悪いけど、一人で遊んでくれないか」

禎昭は怪訝そうに言った。この時、禎昭は既に二十三歳、梢とは十七も離れているのだから無理もない。梢が小柄で禎昭は実年齢よりも上に見られる為、傍目には親子のようにも見える。

「そんな……」

梢は頬を膨らませる。

「ゴメンな、梢」

そんな梢を見て、禎昭は優しく梢の頭に手を乗せた。

「えへへえ」

梢は嬉しそうに笑う。梢だって、禎昭が忙しいのはわかっている。それでも構って欲しいのだから、頭に手を乗せる、それだけでも満足だった。

「じゃあ、わたしは出掛けてくる」

そう言って、梢の前から去っていった。梢は、淋しそうにその背中を見ていた。

「どうしたの、梢ちゃん」

「あ、時也兄ちゃん」

神崎家の隣に屋敷を構えている藻音家の次男である時也とは、四歳しか離れていないので親しかった。時也も、梢の事を本当の妹のように思っていた。

「時也兄ちゃん、遊ぼうよ」

「いいよ。なにをして遊ぶ？」

「そうだな……」

梢は、人差し指を口にあてて考えた。

「う～ん、おままごとがいい」

「じゃあ、梢ちゃんがお母さんで、僕がお父さんだね」

「うん。それでね、このクマちゃんが子ども」

梢は抱えていたクマのぬいぐるみを抱きしめて、無邪気な笑みを浮かべた。そして、二人は梢の部屋に向かった。

＊

「じゃあ、お父さんは仕事に行ってくるね」

そう言って、時也はドアを開ける仕種をした。

「行ってらっしゃい」

梢がそれを見送る。

「行ってきます」

そう言って、実際に部屋のドアを開けて外へ出る。すると、廊下には兄である時弥の姿があ

った。

「……に、兄さん……」

時也は驚いて声も出ない。

「楽しそうだな、時也」

時弥は、威嚇するような目で時也を見た。その視線に怖じ気づいて、時也は口をパクパクさせるだけだった。

「禎臣様がお呼びだ」

時也は、怯えながらもコクンと頷いた。

「じゃあ、梢ちゃんに言うておかなかくっちゃ……」

そう言ってドアを開けようとした時也を時弥が止めた。

「禎臣様を待たせるわけにはいかない。梢なんて気にするな」

そう言って、無理矢理に連れていった。

*

「遅いな……時也兄ちゃん」

梢はずっと時也が帰ってくるのを待っていた。

「お父さん、お仕事遅いね」

梢は、クマのぬいぐるみに話しかけた。

「うん、遅いね」

梢は、クマの頭を動かしながら言った。

「遅いな……なにかあったのかな……？」

梢は、クマのぬいぐるみを抱えて部屋を出た。廊下を見渡すが、時也の姿はない。

「どこ行っちゃったんだろうね」

クマのぬいぐるみに話す。

「一緒に探そうか」

梢は、あてもなく屋敷の中を歩いていた。時也がどこにいるのか見当もつかない。

「どこかな……」

だんだんと涙が滲んでくる。

「どこ行っちゃったんだろう……」

もう泣いてしまうというその時、時也の声がした。

「禎臣様、それはどういう事ですか！」

「あ、時也兄ちゃん……」

梢は小走りでそこに向かった。

そこは、神崎禎臣の部屋だった。扉が閉まっているので開けようとしたが、突然の声に驚いて、怖くなって開ける事ができなかった。

「禎臣様、どうしてその事を隠していたんですか！」

時弥が叫んだ。

「まあ、落ち着け」

「父さん、落ち着けと言われても、落ち着くなんてできませんよ。どうしてですか。どうして、わたしにまでその事を隠していたんですか」

神崎禎昭が口を開いた。

「言う必要はあるまい」

「言う必要がない？ありますよ。わたしに無関係の事じゃない。梢がわたしの本当の妹だったなんて、そんな大事な事をどうして。どうせなら、墓まで持って行けば.....」

(.....？ あたしが、お兄ちゃんの妹.....？)

梢は、首を傾げた。

「お前の結婚が決まった。だから、もう隠しておく事はできない。むしろ、言っておくべきだと判断した」

「父さん、わたしはあなたを軽蔑する」

「お前がどう思うと構わん。だが、事実は事実として受け止めろ」

「.....」

禎昭は黙った。整理しようとするが、そう思えば思うほど整理できない。

「禎臣様、それならどうして梢を.....いや、梢様を自分の娘として受け入れなかったのですか」

時弥が訊いた。

「.....そうだ。そうだよ。父さん、どうしてだ。あなたこそ、その事実を受け入れてないじゃないか」

「能力がない者はいらない。能力がない者を、神崎家の人間と認めるわけにはいかないのだ」

その言葉に、三人は硬直した。

「父さん、あなたは.....」

「それが神崎家というものだ。吉田とは違うのだ！」

三人は、唇を噛んだ。

「もう、いい」

時也は、そう言うと、扉を勢いよく開けた。普段は温厚な時也だが、今回の禎臣の言動には、我慢ができなかった。

「.....っ！」

時也は、言葉を失った。そこには、突然、扉が開いた事に驚いている梢がいた。

「梢.....様」

さっきの話を聞いた時也は、梢の事を、梢ちゃんと今まで通りは呼べなかった。

「時也兄ちゃん、どうしたの？」

「梢様、聞いていらしたのですか？」

慣れない事に戸惑いながらも、敬語を使おうとする。

「.....？」

梢は首を傾げた。

「よく、わかんなかった」

「そ、そうですか。それならいいんです」

その無邪気さに少し安堵する。

「どうしたの？ なんだか変だよ、時也兄ちゃん」

梢は、急に態度が変わった時也を不思議そうに見た。

「な、なんでもありませんよ、梢様」

その目を直視できず、時也は戸惑う。

「……………ん？」

言われても、梢は理解できなかった。

「梢……」

「あ、お兄ちゃん」

時也に続いて、禎昭が部屋から出てきた。

「梢……」

禎昭は、梢の事をじっと見つめる。

「……………ん？」

梢は首を傾げる。

「どうしたの？ 時也兄ちゃんも、お兄ちゃんもなんだか変だよ？」

梢は、無邪気に振る舞う。

「梢、こっちに来なさい。禎昭もだ」

禎臣は、二人を呼んだ。

「……はい」

「はあい」

「時弥、お前はさっさと出ていくがいい」

「わかりました」

時弥は、頭を下げて、退室した。冷静を装っていたが、内心は納得のいかない怒りが煮えたぎっていた。

「さて、梢よ。お前に言っておく事がある」

「父さん……」

禎昭は、禎臣を止めようとするが、それは無力だった。禎臣は、それを無視して続ける。

「梢、お前は禎昭の本当の妹だ。そして、正真正銘、神崎家の人間だ」

「……………？」

(あたしが……？)

梢は無邪気な目をしたまま、首を傾げる。

「父さん……あなたは……」

「わかったな、梢。お前は今日から神崎家の人間として、それなりの振る舞いをせねばならん。いいな」

禎臣は、強い口調で言った。

「……う、うえええん」

梢は、禎臣の気迫が怖くて涙を流した。

その瞬間、梢の能力が発動した。

机や椅子をはじめとする家具があっという間に分解された。禎昭は、自分の空間を閉ざす能力で、自分が分解される事はなかった。しかし、禎臣は防ぐ事ができず、右腕を失った。

能力を使用した梢は、疲れ果ててその場に倒れた。その時、梢は能力の反動として髪の毛を少し失っていた。

その後、梢は家出をし、しばらく吉住家で生活した。

1 あんなに優しそうなのに……

地図を手に入れた亜依と誠司は、一度、綾乃と舜平がいる洋館に戻る事にした。

綾乃と舜平は、突然、二人が戻ってきた事に驚いたが、なにも言わなかった。能力を失った二人には、地図は白紙にしか見えない。

「これがオレたちが探していた地図なのか……」

舜平がしきりに感心する。

「って、なに感心してるの？ 見えてないんでしょっ」

「ああ、見えないよ。でもさ、オレたちが必死になって探したものだぜ。なんにせよ、感動じゃないか」

「そうだけど……」

無理に明るく振る舞う二人を見て、亜依と誠司は心苦しかった。

「それよりもさ、その地図ってなにが書いてあるの？ やっぱり、財宝の在処とか？」

綾乃が目を輝かせて訊く。

「さあな。全然わからん」

「あたしにも……」

誠司と亜依は首を振る。

「そっか……」

綾乃は、残念そうに肩を落とす。

「それって、日本地図なんだよな」

「そうだけど、それがどうかしたのか？」

「なんか、目印とかってないのか？」

「目印……？」

舜平に言われて、誠司は改めて地図を見た。すると、あちこちに点があった。

「これ……」

誠司は、その点の一つを指した。点は、東北地方の方に四つ、中部地方に一つ、関東地方に一つ、関西地方に四つあった。それとは別に二つ枠があって、それぞれに一つずつ点があった。

「なるほど……全部で十二個か……」

舜平がフンフンと頷く。

「とりあえず、そこに行ってみたら？」

「行くって、どうやって？」

「なに言ってるの。あなたたちは空間を移動できるんでしょ。だったら、簡単じゃないの」

「そうだけどさ……」

それはわかっているのだが、どうも誠司は乗り気になれない。

「念じればなんとかなるって。能力がなくなったアタシたちの分までやってみてよ」

「誠司さん……」

「ああ、そうだな。行こうか、亜依。最初はここだ」

誠司は、東北地方を指した。

「どうして、ここなんですか？」

「ここら辺には、詩稀村があるんだ。だから、全ての始まりのここから行こうと思うんだ。どうかな？」

「ええ。じゃあ、そうしましょ」

亜依は、誠司の提案に賛成した。

「じゃあ、いってらっしゃい」

「気をつけてな」

「ああ、行ってくる」

「いってきます」

亜依と誠司は強く念じた。そして、二人は『時の口』へ飛び込んだ。

*

二人は、詩稀村の鳥居の前にいた。鳥居の向こうは、木々が鬱蒼としていて薄暗く、遠くまで見渡せない。鳥居の脇には、岩が一つある。まるで、扉の守人のようだ。

「誠司さん、ここが……？」

亜依の疑問に誠司が頷く。

「ああ、ここが詩稀村の入口だ」

そう言い、誠司はその朱色の鳥居を見上げた。そして、覚悟を決めたかのように唾をゴクンと飲み込んだ。

「亜依、これから先、少し怖いかもしれないけど、大丈夫か？」

亜依は、予想もしていなかった誠司の言葉に、言葉が出なかった。

「……？ どういう事ですか？」

「それは……なんというか、行けばわかるんだけど……」

誠司は言葉を濁す。行かなければならないのだろうが、そのためにはあの道を通らなければならない。そう、あの首なしの地蔵が並んだ道を……。

「誠司さんは来た事があるんですね？」

「ああ、あるけど……」

「だったら、危険はないですよ」

「あ、ああ……。危険とかじゃないんだ。ただ……」

「大丈夫ですって、ね」

亜依はそう言うが、誠司としてはあの道は通りたくない。

「仕方ないか……」

それでも、村に入るためには仕方なく、誠司は進む事を決意した。

*

鳥居を一步越えると、そこは別世界のような空気が漂っている。どこかひんやりとしていて、どこか重い……そんな空気だった。

そんな空気の中、村への一本道を歩くと、すぐに首なし地蔵が見えてきた。

「……ひっ」

亜依は思わず声を洩らす。

「……だから、ここはイヤなんだよ」

誠司は落ち着いた声で言う。以前に来ているので、ある程度は覚悟していた。それでもやはり、怖いものは怖い。

「大丈夫。なにも起こらないから。ちょっと、長いけどね」

亜依は、誠司の腕にしがみつこうようにして歩いた。ずっと地面を見て、なるべく地蔵を見ないようにしている。

(なんだか、フィーみたいだな……)

誠司はなんとなくそう思った。

しばらく進むと、地蔵も姿を消し、森も途切れ、明るさが戻ってくる。そして、目の前に広がるのは雑草が生えている土地だった。

三年前まで、確かにそこには詩稀村という名前の村があった。しかし、ある事件をきっかけに村は焼失してしまった。その事件のきっかけとなった人物は、藻音時弥である。彼の命令により吉住家が滅ぼされた。そのショックで吉住健一的能力が暴走……その結果、詩稀村は滅びた。その成れの果てが、二人の目の前に広がっている。

「……ここが、その詩稀村ですか？」

「ああ、そうだ。ここが詩稀村があった場所なんだ」

「詩稀村があった場所……？ なにかあったんですか？」

「ああ……三年前、原因不明の火災で村は燃えてしまったらしい」

誠司は自分が独自に調べた事柄を亜依に話した。しかし、それは詩稀の人間が事実を隠すための事後処理の結果だったのだが。詩稀の人間は、能力の事を最後まで隠そうとしたのだ。その結果、歪んだ事実が真実として世間には認知された。

「とりあえず、行ってみたい場所があるんだ」

そう言って、誠司は歩き出した。亜依は、なにも聞けないまま、それに従うしかなかった。

*

誠司は、以前訪れた時に疑問に感じた柱――四本あるうちの一本、東青山の麓の青い柱――にやって来た。その時誠司は、柱の中程にキラリと光る物を見つけたのだ。

「あれなんだけど……」

誠司はそれを指した。そこには、なにかがキラリと光っている。

「なんですか、あれ……？」

「わからない。でも、なにかが……」

誠司がそう言いかけた時だった。突然、二枚の地図が光を発した。

「え、え……？」

誠司は驚いてなにもできなかった。亜依も、口をポカンと開けていた。

地図は、そんな二人を後目に、一つに繋がった。

突然の事に、二人はなにが起こったのかわからなかった。

「……………」

「……………」

二人が沈黙している間にも、地図は誠司の手に戻った。

「……繋がったんだけど……」

誠司は間抜けな声で言った。

「……そうですね」

亜依も間の抜けた声で言う。

二人は、ただただ手にある繋がった地図を見ていた。

「どうなってんだ……？」

じっと見ていると、地図でいえば海にあたる所に、文字が浮かんできた。

「せ、誠司さん……」

それに気付いたのは、亜依だった。

「誠司さん、ここに、なにか文字が……」

言われて、誠司もそこを見る。

「これは……」

そこには――《神の扉 十二の鍵を以て封印せん》とあった。

「神の扉……？」

誠司は首を傾げた。

「十二の鍵って、あたしたちが見つけたあの鍵でしょうか？」

「……さあ？ ……でも、なんだか違うような気がする」

「じゃあ……？」

「それはわからない。でも……なんとなく」

誠司は、曖昧な言葉しか言えなかった。なにかを感じるのだが、それがなんなのか、断定はできずにいた。

そんな事を考えていた時、亜依が持っている鍵に付いている石が光り出した。それに共鳴するかのよう、柱も光を発した。

そして、次の瞬間、亜依の姿は消えた。

その直後、誠司のピアスが光った。それに共鳴するかのよう、南朱山の赤い柱の石が光を発した。

そして、誠司の姿も消えた。

*

柔かい風が吹く。

その風に、桜の花びらが舞う。

詩稀村の桜は満開だった。

村人は、桜の美しさに酔いしれていた。

しかし、一人の少年は浮かない顔をしていた。

その少年の名は――

「時弥、なにをしているんだ」

その声に、少年は振り返る。

「禎臣様……」

藻音時弥は慌てて立ち上がる。

「また、親の墓を見ていたのか」

「申しわけありません」

「さっさと忘れろ。このままでは、藻音家も危ないものだぞ。藻音家の主はお前なのじゃからな」

「……はい」

時弥は、不安そうに、しかし力強く返事をした。

亜依は、その様子を木の蔭に隠れて見ていた。

(それにしても、どうなったんだろう……?)

亜依は、気がついた時にはここにいた。鍵が光った事は憶えているのだが、それ以外は思い出せない。

ここに来た時は、驚いたのだが、次第に状況を見ていくと落ち着いてきていた。

(でも、ここは……?)

亜依は辺りを見回した。見た事のない場所だったが、唯一、見覚えのあるものがそこにはあった。

(あの柱は……)

亜依の視線の先には、青い柱があった。

(じゃあ……ここは、詩稀村……?)

亜依は困惑した。ここが詩稀村だとすれば、自分は能力を使った事になる。しかし、あの場所に『時の口』は存在していなかった。

(でも、どうして……?)

しかも、現在の詩稀村は廃墟というか、草むらだった。だが、今、目の前に広がっているのは、長閑な平和そうな光景だった。

(ここは、過去の詩稀村……?)

そう、亜依は、過去の詩稀村に来ていた。

*

まだ人が住んでいた頃、詩稀村は穏やかな村だった。裏では熾烈な権力争いがあったにせよ、そんなものは一部分で、基本的には平和な村だった。

(なんだか、いい感じだな.....)

亜依は改めて辺りを見回した。

(それにしても、あの子が綾乃ちゃんや、舜平さんを利用した藻音とかいう人なの?)

亜依には信じられなかった。さっきまで悲しそうな目で自分の両親の墓を見ていた子どもが、そんな事をするなんて.....。

(あんなに優しくそうなのに.....)

いったい、なにがあって、どうしたら、ああも変わってしまうのだろうか。亜依はその事を考えたが、結論は出なかった。

亜依は、村を歩いてみる事にした。

(誠司さんと一緒ならよかったのにな.....)

四方を山に囲まれて、閉鎖的な感じがするが、それが逆に時間に追われない、ゆっくりとした環境を作っている。

(それにしても.....)

亜依は、奇妙な事に気付いた。道ですれ違う人にお辞儀をしても、相手は気付かずに過ぎ去ってしまう。態度から、無視をしているわけではないようだ。どうやら――

(あたしが見えてない?)

亜依は、一つの結論に達した。

そう、村の人には亜依の姿は見えていない。しかし――

「お姉ちゃん、誰？」

亜依は、一人の小さな女の子に声をかけられた。どうやら、見える人もいるようだ。

「あたし？ あたしは亜依」

「あたしは梢っていうの。お姉ちゃん、どこから来たの？ あたし、見た事ない」

「あたしはね、この村の人じゃないの。ずっと遠くから来たの」

亜依は、女の子――梢と同じ視線になるようにしゃがんだ。

「ずっと遠く？」

「そう、ずっと遠くから」

「そうなんだ。じゃあ、お姉ちゃんはお客さんだね」

「そうね。お客さんだね」

「どうしたんだ、梢」

そこに、藻音時弥がやってきた。

「あ、時弥兄ちゃん。この人、お客さんなの」

「この人が、客.....？」

時弥は、不審者を見るような目で、亜依を見る。

「あ、いえ……別に、お客というわけでは……」

「どうしてこの村に？」

「いえ、別に、用があるというわけでは……」

「なら、失礼します。帰るぞ、梢」

「……うん。じゃあね、お姉ちゃん」

「バイバイ」

亜依は、笑顔で梢に手を振った。

(時弥さん、さっきと全然違う……)

亜依は、最初に見た時と、今、見た時の印象の違いに戸惑っていた。

優しいような、悲しそうな顔をしていた時弥。

なにかに憤りを感じているような時弥。

どちらが本当の時弥なのだろうか。

(どっちが本当の……?)

*

自室に戻った時弥は、自分の気持ちが抑えられなくなった。外では、藻音家の主としての威厳というものがある。しかし、まだ十二歳の少年には、それは重すぎた。

時弥は、自分の部屋の中でだけ、本当の自分である事ができる。

だが、最近では、外と中のどちらが本当の自分なのかわからなくなる時がある。強気な口調の自分、まだまだ弱い自分——どちらが本当なのだろうか？

「ちくしょーっ！」

時弥は、ソファに置かれたクッションを殴る。

「どうしてなんだ？　こんなんじゃ、こんなんじゃ全然ダメじゃないか」

時弥は、ボスッ！　ボスッ！　と殴り続ける。

「こんなんじゃ、禎臣様に愛想を尽かされてしまうじゃないか。代々神崎家に仕えてきたのに、自分の代で終わらせてしまうじゃないか」

また、クッションを殴る。

「どうして、どうしてこんな能力なんだ？」

時弥は、自分の両手を見た。

「もし、時空の能力があれば、堂々としていられたのに。どうして、こんな使い物にならない能力なんだ……」

拳を握る。

「授与なんて能力、必要ない。時也の消去も無意味な能力じゃないか。せめて、あいつに時空の能力があれば……それでもよかったんだ。なのに……」

時弥は悔し涙を流した。それは、止まる事なく、溢れ続けた。

*

(それにしても、どうしたらいいんだろう……)

そう思いながら、亜依はあの柱に向かっていった。

(急に一人でこんな所に来て……どうしていいのかもわからない……)

涙が出そうになったが堪えた。

(きっと、あそこに行けばなにかがわかる)

根拠のない考えだが、今はそれを信じるしかなかった。

柱に着くまでに、何人かとすれ違ったが、全く気付いていない様子だった。

(どうして？ さっきのあの子とは話せたのに……)

亜依は、そんな疑問を感じたまま、柱の所までやってきた。

なんぴと何人も寄せ付けないかのように、立っている。亜依はそれを見上げた。

すると、柱の中程に、あの光る物はなかった。

(あれ?)

亜依は首を傾げた。

(どういう事なんだろう……確かに、あったのに……)

もう一度よく見るが、やはりそんな物はなかった。

亜依は心細くなって、不安が消えるかもしれないと、柱に触れようとした……その時、
「柱に触っちゃダメだ」

誰かの声がした。

振り向くと、そこには藻音時弥がいた。

「触っちゃダメだ」

どこか優しい声で言う。

「ご、ごめんなさい」

亜依は、慌てて手を引っ込める。

「大きな声を出してゴメン。でも……」

「いいんです。あたしが悪かったんですから」

亜依は、優しく微笑んで言った。

「あんたは一体、何者なんだ？」

唐突に時弥が言った。村を支配する者として、ある程度、威厳のある口調で言う。

「どうして、ここにいるんだ？」

「あたしは……」

「どうして、この領域に入る事ができるんだ？」

亜依の言葉を遮るようにまくしたてる。

「あんたは、もしかして……」

時弥は、そこで言葉を切る。能力の事を外部の人間に知られてはいけない、それが、時弥の言葉を止めた。

「あんたは、能力者なのか？」

考えた末、時弥はその言葉を口にした。

亜依は、黙って頷いた。

「そう……なのか……」

時弥は啞然とした。

柱の根元には柱自身が結界を張っており、能力者しか――それも、悪意のない者のみしか入る事ができない。

亜依がそこにいた時点でそうは思っていたが、見た事もない人間に戸惑い、その考えを肯定する事はできなかった。

「でも、あんたは村の人間じゃ……」

亜依は頷いて、

「あたしは、この村の人間じゃありません。あたしは、この時代より、もっと先の人間だから」

その言葉に、時弥は目を丸くした。

「ちょっと待ってくれ。あんたは、未来から来たのか？」

亜依は頷く。

「じゃあ、あんたの能力って……」

時弥は亜依をじっと見た。亜依は、その視線の強さに押されて、一步下がる。

「あんたって、もしかして……時空の能力者なのか？」

時弥は、一步一步、亜依に近づいていく。亜依は、後退りする。

「……え、ええ、そうですけど……」

時弥の勢いに押されて、少し脅えた声になる。

「そうなのか。なあ、一つ訊きたいんだ」

「な、なんですか？」

「詩稀村はどうなるんだ？ 未来も、神崎家が支配しているのか？ 教えて欲しい」

時弥は、さらに詰め寄る。

「そ、それは……」

亜依は考えた。

(本当に、言ってもいいのかな……？ 第一、詩稀村は……言えない、言えないよ)

滅んでしまった事を伝える事は、亜依にはできなかった。

「どうなんだ。教えてくれ」

「未来は、わからないからいいんだと思います。わかってしまったら、人は生きていけないんだと……だから、言えません。ごめんなさい」

それが、亜依に言える最高の答えだった。

「……………」

時弥は膝を崩した。

「大丈夫ですか？」

亜依が手を差し伸べる。

「大丈夫、なんでもない」

差し出した手を払いのける。

「さすが時空の能力者。自信に満ちた答えだ。こんなくだらない能力を持った人間とは違う……
という事か。そうだよな。能力の最高位である時空の能力なんだもんな」

「そんなんじゃ……」

「いや、そうさ。無意識で感じるんだ。優位にあるんだ、あんたの方が。こんな能力、なくても同じさ」

その時だった。

「時弥様、こんな所にいらしたのですか」

一人の青年が、息を切らしながら走ってきた。

「どうしたんだ」

「満仲の家が燃えているんです」

「なに、満仲の家が……？」

それを聞いた瞬間、時弥の顔から血の気が引いた。

「村の人間で、どうにか火を消そうとしているのですが、一向に消えなくて……それで、時弥様の能力で……」

「それはできない」

時弥は、青年の言いたい事を察して、それを拒否した。

「ですが……」

「能力を使いこなせていない今、能力を使えばその者は死んでしまう」

「わかっています。ですが、満仲の一族が消える事は村にとって……」

「満仲の一族は閉じ込められているのか？」

「はい」

時弥は唇を噛んだ。

「仕方ない……だが、誰に……」

「時弥様」

青年は、真剣な目で時弥を見た。

「だが……」

「構いません。村のために……」

「……………」

青年は、じっと時弥を見た。その真剣な目に、時弥は言葉が出なかった。

「……わかった。すまない」

「構いません。この命で、村が救えるのなら」

その言葉に、時弥は心を決めた。

「時間がない。急ぐぞ」

時弥が言うと、青年はその場に腰を下ろした。そして、ゆっくりと目を閉じた。

「すまない」

そう言って、時弥は青年の頭に手を置いた。

時弥が目を閉じると、頭に乘せた手が光り出した。

光は、青年を包み込む。

それが数十秒続いた。

そして、光は消えた。

青年は目を開け、スッと立ち上がった。

「行ってきます」

言うと、青年は来た道に戻って行った。

「すまない」

藻音の目からは、ツウーっと涙が流れた。

そのやりとりを、亜依は茫然と見ていた。

「……時弥さん？」

亜依は、恐る恐る声をかけた。

「……………」

時弥は、青年が走っていった方向をじっと見ている。

亜依も、同じように見る。その先には、一筋の煙があった。

(あそこが、燃えているんだ)

次第に煙は細くなり、やがて消えた。

「ありがとう」

時弥は、涙を流しながら呟いた。

「時弥さん……」

亜依が時弥に声をかけようとした時、突然目の前に小さな光る石が現れた。

その石はゆっくりと亜依の手に降りてきた。

そして、亜依が触れた瞬間、眩い光が亜依を包んだ。

光に気づき時弥が振り向いたが、既に亜依の姿はなかった。

2 今はお前の相手をしている場合じゃない

亜依が時弥と出会っていた頃、誠司も詩稀村にいた。

(ここは……)

誠司は、ぐるりと見回した。

(詩稀村か……)

誠司も、あの柱を見て、そう確信した。

(でもって、ちゃんと村の形状があるって事は……)

一瞬考えて、

(過去か)

改めて、全体を見回した。

(にしても、亜依はどうなったんだろうな……)

そんな事を考えながら、村を散策する事にした。

(せっかく来たんだから、楽しみましょうか)

村の道を歩いていくが、村の人は誠司に気付かずにすれ違っていく。

(どうなってるんだ?)

不思議に思いながらも、気にせず村を歩き続ける。

途中、異様に大きい家が二つあった。そのうちの一つは静まりかえっていたが、もう一件の方から、一人の少年が飛び出してきた。

「うわっ」

急に飛び出してきたので、転びそうになった。

「ゴメン」

そう言い残しながらも、少年はそのまま走り去った。誠司は、その方向を見ていた。

(そういえば、この村の人と話したのって、これが最初なんだよな……)

*

少年は、彼を止めるために走っていた。

(早まった事、するなよ)

少年は、彼を家を目指していた。

(間に合ってくれよ)

少年は汗だくになりながら走っていた。

(鬱陶しい)

少年は、能力を解放した。その能力により、汗が一瞬のうちに蒸発する。

「よう、健一じゃないか。なにをしてるんだ？」

途中、同じくらいの年齢の少年に声をかけられる。

「時弥か。今はお前の相手をしている場合じゃない」

吉住健一はそう言って、その場を走り去る。

「おい！」

後ろから藻音時弥が声をかけるが、健一は振り返らずにそのまま走っていった。

「なんなんだ？」

時弥は、健一の様子に首を傾げた。

＊

貝通丸捨巳は、自室に籠って精神統一をしていた。

(積年の恨み、今こそ晴らさん)

合わせた手の周りの空気が揺らめく。次第に、それが全身に及ぶ。

最初は熱だけだったが、徐々に暖められて、周りの空気が燃え始める。炎があがり、全身を包む。

石綿で作られた座布団の上に座っているので、床が燃える事はない。

「出陣！」

低い声で叫ぶと、カッと目を開け、スッと立ち上がった。

＊

古来より、満仲の家は歴史を司っている。

それは、村の歴史ばかりではなく、人類の歴史全てだ。

満仲の一族は、代々、記録の能力者だった。他の家でも記録の能力者が出る事はあるが、満仲の一族は確実にその能力を持って生まれるという、特殊な一族なのだ。逆を言えば、他の能力を持っていたり、能力がなかったという事がない。

記録の能力とは、その名の通り、全てを記録する。彼らの脳は、無限に記録でき、それを自在に引き出す事ができる。

満仲の一族の長は、死ぬ前に自分の記憶を一族全てに話して聞かせる。一族の全員に話すのは、もし一族が襲われても、誰かが生き残れば記録は引き継がれるからだ。満仲の一族が犯してはならない禁忌は、記録を絶やす事だ。

そうやって、記憶は受け継がれていた。

もちろん、年が経つにつれて記録する量は増えていく。過去の記憶も忘れる事はない。その保存期間は永遠だ。故に、長い時間を要する。

そのため、この世に生を受けた瞬間から、いや、母体の中にいるうちから記録させなければならない。

それでも、全てを記録するには二十年は必要だ。しかも、同時に現在の情報も記録しなければならない。そのため、平均的に三十年は必要となる。

そして、その頃には、自分の子どもにも記録させなければならない。子どもが記録を終えるま

で教えるのだから、自分が記録に要した時間――三十年は必要となる。

満仲の一族は、それをずっと繰り返していた。

しかも、記録は自分の目で見、耳で聞いたもの全てを記録する。彼らの前で、不用意な言動はできない。

なので、時として特定の人物には不利な情報を記録する事もある。それ故、彼らは狙われやすい。有史以来、彼らは幾度となく襲われていた。

歴史を後世に伝えるために一生を費やす。

しかも、その能力のために、狙われる事が多い。

彼らは、不幸な一族なのだ。

彼らは、歴史を未来に伝えるためだけに生きなければならないのだ。

*

貝通丸捨巳は、満仲家の隣である久藤家に向かっていた。

捨巳が久藤家を恨んでいるのは、別に個人的になにかがあつたわけではない。ずっと昔になにかがあつたらしいという事しかわからない。

現在では、その理由は既に忘れられてしまっている。

だが、それに関係なく、両家は睨み合いを続けている。

捨巳は、それにケリを着けようとしていた。

*

久藤家では、その噂を聞きつけて、当主である陰志がその時を待っていた。

陰志は、糸を操る能力を持っている。

この能力は、暗殺向きであつて、正面から戦う場合にはあまり有効ではない。しかも、捨巳の火炎の能力とは、相性が悪すぎる。

明らかに不利なのだが、それでも戦わざるを得ない。

実のところ、捨巳の能力もそれほど殺傷力はない。攻撃としてはダメージを与えられるが、致命的なものは無理だ。

能力のリミッターを解除すればそれも可能となるが、そんな事をすれば、オーバーシヨートで能力を消失しかねない。

そういう観点から見れば、最も殺傷力が高い能力が二つある。それは、風を操る能力と水を操る能力だ。この二つの能力を使えば、人を殺すなど容易だ。

風の能力を使い、相手の周りの空気を遮断してしまえば窒息してしまう。

水の能力を使い、相手の体液――血液や細胞内の水分を操作すれば、ほとんどが水である人間をどうにかするなんて簡単だ。

だが、それらの能力者は、現在のところいない。しかし、藻音時弥の能力でもある授与で与え

られたそれらの能力には、そこまでの力はない。少し自然の水を動かしたり、風向きを変える事ができるだけだ。この二つの能力を使いこなすには、天性のものが必要なのだ。

そのため、争いがあまり大きくなりすぎずにすんでいる。

*

誠司は、嫌な予感がして、健一のあとを追う事にした。しかし、すでに健一の姿はどこにもなかった。

(どこに行ったんだ……?)

その時、誠司は煙を見つけた。

なにかが燃えているらしい。

誠司は、急いでその場所に向かった。

誠司の目に飛び込んできたのは、燃えている屋敷だった。屋敷全体が火に包まれており、中に人がいたとしても助からないだろう。

そして、その前で茫然としているのが……健一だった。

炎に包まれたその場所に、二人の男が立っている。

お互い、睨み合ったまま動こうとしない。

その時、一人の男がやってきた。

男は、炎に掌を向けた。

すると、掌から水が出てきた。

しかし、火は一向に消えない。

その様子を気にする事なく、健一は呟いた。

「あの馬鹿、満仲の一族を殺しやがって……」

健一は右手を握りしめた。その手から煙が上がる。

「鍵のありかを記録しているかもしれなかったのに……」

健一の手が炎に包まれる。

「二人とも、消えるがいい！」

そう言うと、健一は大地に拳を打ち込んだ。

すると、ボォォンという爆音と共に、二人の男がいた場所から火柱が上がった。

しかし、それは一瞬で、しかも遮断されたかのように音は広がらなかった。そのため、それに気付いた人間は少ない。

その数秒後、そこには焼け焦げた大地があるだけだった。

そして、その場に立っている人間は、健一と誠司だけだった。

誠司は、啞然とその様子を見ていた。

なにか言おうとするが、言葉が思い浮かばない。

そんな事をしているうちに、誠司の前に小さな石が現れ、誠司の姿は消えた。

3 あなたに頼みがある

吉住健一は、莉緒の部屋の前にいた。

周囲に誰もいない事を確認して、ゆっくりと中の様子を伺う。

音を立てないように、ゆっくりと部屋のドアを開け、隙間から中を覗く。

(よし、誰もいない)

誰もいない事を確認して、部屋の中に足を踏み入れる。

そろりそろりと、忍び足で窓際にある机に近づいていく。

健一は、そこにあるはずの物を手に入れようとしていた。

(あの二人には、必要不可欠だからな)

そう思いながら、ゆっくりと机に手を伸ばす。

(ん……?)

しかし、そこにはなにもなかった。

(どういう事だ?)

慌てて、引き出しの中も探す。

しかし、そこにもなにもない。

(もしかして、読まれていたのか?)

健一は、一つの考えに行き着いた。

どうやら、その行動は読まれていたらしい。

(それも無理はないか。莉緒様の能力は物語を創造する事。おれの行動も既に……)

その時だった。

「気付いたようだな」

背後から男の声がした。

「お前がこれを狙っている事など、既にお見通しなんだよ」

健一が振り返ると、そこには案の定の人物がいた。その手には、健一が探していた物――懐中時計があった。

「時弥……」

そこには、藻音時弥がいた。健一は、悔しさから唇を噛んだ。

「これをどうしようというのかはわからないが、みすみす渡すのも癪なんでな」

「時弥、黙ってそれを渡してもらおうか！」

健一は時弥の懐に飛び込むが、時弥はヒラリとかわしてしまう。

健一は止まる事ができず、床につんのめる。

「くっ！」

顔を上げ、時弥を睨つける。

「なんだ、その目は」

時弥は倒れている健一を見下ろす。

「そいつをよこせ」

健一は、睨みながら言い放つ。

「お前に反逆は赦されない」

そう言って、健一の腹部を蹴りつける。

「ぐふっ」

健一は腹部を押さえて顔を歪める。

時弥は、そんな健一を見て笑みを浮かべる。

「これにこ懲りて、おとなしくしてるんだな」

そう言い残し、時弥はその場を去ろうとする。

「待てよ」

健一は、ふらつきながらも立ち上がる。

「血気盛んだな」

時弥は、そんな健一を嘲笑う。

「どうしても、そいつが必要なんだ」

健一は右手に力を集中させる。

(ヤバイな)

時弥は、危険を感じてその場から逃げ出す。

「逃がさない！」

健一は右手を突き出す。すると、そこから炎が現れる。

炎は、確実に時弥を目掛けて進んでいく。

炎は廊下いっぱい広がっていく。

廊下に敷かれている絨毯が焦げる匂いがする。

あと少しで時弥に追いつこうとした時、時弥は廊下を曲がり、間一髪で避けた。

(危ない、危ない)

時弥は冷汗を拭った。

しかし、危機が去ったわけではない。時弥は、その場から逃げる。

「時弥、その時計を渡せ！」

健一は、それを追いかける。

屋敷の廊下を縦横無尽に走り続ける時弥に、健一の攻撃はことごとく避けられてしまう。

こうなっては、能力を使う意味がない。

「くそっ」

(どうして、あいつは……知らないとはいえ、厄介だな)

健一は苛立ちを隠せずにいた。

時弥は時弥で、こうまでして逃げるさしたる理由はない。ただ、莉緒の命令で動いている。

そう、確かに最初はそういう理由だったのだが、今ではそれは理由にならない。

ただなんとなく、懐中時計を健一に渡したくない……という、ちっぽけな意地だった。

その意地だけで時弥は逃げている。

しかし、逃げる事で自分の目的から遠ざかっているとは気付いていない。

時弥が行っている事は、目的の妨げでしかないのだ。

自分の手で自分の首を絞めているともいえる。

*

時弥は、屋敷の外まで逃げた。こうなれば、健一の思うがままだ。時弥もそれはわかっている

。

(攻撃してこい、健一)

時弥は後ろを振り返る。

(よしっ)

時弥の思惑通り、健一は自分の後ろをピタリと追ってきている。

さらに、明らかに攻撃の準備をしている。

(そうだ、そのままだ)

時弥はそのまま自分が決めた地点まで逃げる。

ここまで来て、どうして自分が逃げているのか理解した。

楽しいのだ。

時弥は、この状況を楽しんでいる。

今までにないスリルがここにはある。

それがたまらなく楽しいのだ。

(あいつの能力、実際に対決する事になるとはな)

時弥は逃げながらも笑みを浮かべた。

(本当に使えるのか.....実験にはなるな)

時弥は二時間前の事を思い出していた。

*

――二時間前。

時弥は、神崎莉緒に呼び出された。

「なんですか、莉緒様」

「時弥、あなたに頼みがある」

莉緒は時弥を見据えて言った。睨むような、力強い目だ。

何度見ても思う事なのだが、目の前にいる人物がわずか十三歳の少女だとはとても思えない。もっと、自分よりも年上に思える。それほど、高圧的なものを感じるのだ。

「頼み.....ですか？ それはどのような」

最初の頃こそ、自分が仕えている身なので頭を下げていた節があったが、最近では、莉緒に対して頭を下げる事が自然に思えるようになっていた。それは、前述の理由にある。

「この時計を死守してもらいたいのだ」

そう言って莉緒が差し出したのは、例の懐中時計だった。

その懐中時計は、莉緒が作り出した世界に投影された藻音時弥の精神体である m o r t o を消滅させた f o r s t r e k i の発動体として使われたものである。

故に、藻音にとっては、あまり見たくないものでもある。

「この時計を……守るのですか？ それはいったい誰から……？」

さすがの時弥も困惑していた。その表情には、いつもの冷静さが無い。

「時期的に、吉住健一がこれを手に入れようとするはず。だが、決して渡してはならない。あなたは、いかなる手段を使ってもこれを守るのです」

莉緒は、時計をずっと見つめた。

「これを、吉住健一から守る？」

時弥は、想像もしていなかった人物の名前が出た事に驚きを隠せなかった。それ以前に、どうして守らなければならないのかがわからない。

「しかし、どうしてあいつがこれを？」

「知る必要はない」

莉緒は感情がこもっていない口調で言い放つ。

「わかりました」

時弥は疑問を感じつつも、それを承諾した。というより、莉緒の目が拒否を赦さなかった。
(さて、いかなる手段を用いても構わない……か)

時弥は、これからの事を頭の中でシミュレートしてみた。

しかし、何度考えても健一には勝てない。

そもそも、炎の能力自体は殺傷能力としては中級とはいえ、健一はその能力の中では最高能力者だ。その力は、侮る事はできない。いくら中級とはいえ、健一の能力は上級だ。

三年前には、その能力を目の当りにしている。その時、健一は全てを、詩稀村全体を焼失させてしまった。

その時は、危機を察してなんとか逃げる事ができた。

だが、今回はそうはいかないだろう。

本気になった健一を前に、なにもする事がないのだ。時弥の能力では、健一に対抗する事ができない。

*

(さて、どうしたものか……)

時弥は、健一に対抗する策を考えようと街へと繰り出した。

街には様々な人間がいる。

しかし、時弥から見れば、それらの人間は能力のないただの道具だ。それ以上でもそれ以下でもない。

能力者を知りもせず、ましてや受け入れようもしない最低の種族。

能力者が本気を出せば一瞬で消え去る儂い種族。

自分たちは、ほんの気まぐれで生かされているとも知らないで……。

そんな事を考えると、自然に笑いが込み上げてくる。

「ワハハハハハッ！」

突然笑い出した時弥を、街の人々は奇異の目で見ると、時弥もそれは当然だと思い、気にはしない。

「どうしたんだよ、おっさん」

十代後半くらいだろうか、ダボダボの服を纏い、ニット帽を被った少年が時弥に話しかける。

「なんでもないさ」

笑いながら、時弥は答える。

そんな時弥を、興味津々に少年は見続ける。

「まあ、いいや。キジルシのおっさんよ、金あんだろ？ 出しなよ」

少年がそう言うが、時弥は全く動揺しない。

(なんだ、そういう事か)

と、簡単に納得する。

(こんなヤツなら、実験にはピッタリだな。世の中も、こんなヤツが減って、喜ぶだろうしな)

その考えに、また笑ってしまう。

「なんだよ、おっさん。金出せ、つってんだろ」

普段からそうなのだろうか、苛立たしそうに言う。

「君、ちょっと仕事をする気はないかい？」

「……はあ？」

少年は、思いも寄らなかった言葉に驚いた。

「もちろん、謝礼ははずませてもらう。なんなら、君が金額を指定してくれても構わないんだが」

少年は一瞬考えた。だが、

「どんな仕事なんだい？」

ほぼ、やる気だ。口元を歪める。

「ちょっとした事さ。ある人物と闘ってもらいたいんだ」

「それって、ケンカか？」

少年は、楽しそうに唇を舐める。

「まあ、そう考えてもらって構わない」

「いいぜ、やってやるよ」

この言葉が、自分の人生を終わらせるなど、その時は思ってもいなかったに違いない。だが、それは自分の最期を決めた。

「そうか、ありがたい」

時弥は、ニヤリと不気味な笑みを浮かべた。

*

少年をスカウトしたあと、時弥はすぐさま少年を屋敷に連れてきた。

「お、おい。なんか、ヤバイ事なんじゃねえのか？」

少年はその屋敷を見て、自分が思っていたものとは違う、なんだか自分たちとは違う世界に足を踏み入れてしまったように感じていた。そして、事実それは違う世界だった。

「君がこれから闘う相手は、普通の人間じゃない」

「え、ど、どういう事だよ」

少年は狼狽える。

「少し、普通の人間にはない力がある。わかりやすくいうと、超能力のようなものだ」

「そんなの聞いてないぜ。そんなの相手に、俺が闘えるわけねえじゃん」

「安心しろ。そのために、君に能力を授ける」

その言葉に少年は目を丸くする。

「おっさんも、超能力者なのか……？」

「まあ、同類だな。だが、その能力は全く違う」

時弥は淡々と告げる。

「さて、君はどんな能力が欲しい？ どんな能力でも与えてあげるぞ」

少年は唾を飲み込む。

「物を動かすヤツとか……そんなんでもいいのか？」

「サイコキネシス……念動力ってヤツか。それもいいが、もっと実践向きの能力の方がいいと思うぞ。先に言っておくと、相手の能力は炎を操る能力だ。相手は、炎を自在に操る事ができる」

時弥は、楽しそうに少年を見る。

「……………」

少年は、腕を組んで考え込んだ。

沈黙がその場を支配する。

やがて、少年が口を開いた。

「やっぱさ、火には水だよな。なあ、水を操る能力ってのはダメか？」

その言葉に息をのんだのは、時弥だった。

昔の、消し去ってしまいたい過去が蘇る。

昔、時弥は村を守るために一人の青年に能力を与えた。

その能力こそ、水を操る能力だった。

だが、その青年は……。

「どうしたんだよ、おっさん」

時弥は、少年の言葉で現実に戻された。

「あ、ああ。大丈夫だが……」

「じゃあ、それにするよ」

「わかった」

時弥は、それを承諾した。

(これは実験だ。あの時から、自分の能力がどれだけ成長したか……これではっきりする。しかも、あの時と同じ能力だ。比較しやすいじゃないか)

「じゃあ、そのままじっとしていてくれ」

そう言うと、時弥は少年の額に手をかざした。

少年は、無意識に目を閉じた。

(どうなるか、楽しみだな……)

そして、時弥はその少年を彼の能力が最も発揮される場所——庭にある噴水に待機させた。

時弥は今、そこを目指して走っている。

*

「いいぞ、出てこい」

その声を合図に、少年は物蔭から飛び出した。

突然の事に、健一はその場に立ち止まる。

「健一、お前の相手はこいつがする。こいつに勝てれば……」

しかし、時弥が言い終わらないうちに健一が動いた。

「なんでもいいさ」

そう言うと、握りしめた右手から炎が上がる。

「頼んだぞ」

少年にそう言うと、時弥はさらに逃げる。

「なんだか知らねえけど、たんまりと金が貰えるんでね。悪いけどおっさん……」

と、少年が言い終わる前に攻撃を仕掛ける。

「そこをどけっ！」

右手を前に突き出すと、そこから火柱が発生して、それが少年を襲う。

「うわっ」

慌てて、とっさに両手を前に突き出す。

そこから水が現れ、それとぶつかり、水蒸気が発生する。

しかし、炎の方が威力は上だった。

「馬鹿だな。時弥から与えられた力が、通用するはずがないだろう」

残った炎が、水蒸気爆発を起こす。

爆煙が立ちこめる。

健一は、腕で目を覆う。

やがて、風で煙が散っていく。

「哀れだな」

そこには……少年が一人、倒れていた。

「あいつに加担した自分を恨むんだな」

そう言って、健一は再び時弥を追いかけた。

残された少年は、消え逝く意識の中で考えた。

人生って、結局なんだったんだろう……。

結局、自分がしたい事を見つける事ができなかった。ただ、遊んでいただけだった。

自分を確かめる事ができたのは、自分の身が危険にさら晒されている時だけ。それ以外にはなにも感じなかった。

だから、それ以外を探した。模索したが、見つからなかった。それでも、手当たり次第に試すしかなかった。

(その結果がこれか……)

少年は後悔していなかった。むしろ満足に思っていた。

(まあ、普通じゃない死に方だから、いいのかもな……)

と、そんな事を考えた。そして、少し口元をゆる弛めた。それは、力無き笑みだった。

最期に普通と違う事をした。それだけで満足だった。

そして、少年は息を引き取った。

それは、爆発によるものなのか、それとも時弥の能力によるものなのか……それを判別する事はできない。

*

時弥は、背後で起こった爆発に振り返った。

(どちらかが……いや、おそらく健一は無傷だろうな)

その煙の方をしばらく見ていた。

(そういえば、あいつの名前、知らないな。まあ、どうでもいいか)

そして、再び走り始める。

その時、背後から熱を感じた。

時弥は、慌てて方向を変える。

すると、今まで時弥が走っていた所が黒く焼けている。

「時弥、その時計を渡せ」

健一が追ってきていた。

時弥の予想通り、健一は無傷だった。

(さてさて、これからどうしたものか)

時弥は、落ち着き払って、冷静に考えた。

だが、直接闘えば確実に死んでしまう。それだけはできない。

(いっそ、渡してしまうか)

考えついた最後の手段は、それだった。

「健一、渡しても構わないが一つ訊きたい。お前はこれでなにをするんだ？」

「お前に言う必要はないな」

健一は時計から目を離さない。

「そうか、なら……」

「いくぞ、時弥！」

健一は時弥に飛びかかる。

「時計をよこしやがれ！」

二人は地面を転がる。

「くっ」

普段、闘い慣れていない時弥は、その衝撃に息ができない。

「でいっ」

健一の右拳が時弥の頬を直撃する。

時弥は、その衝撃を殺す事ができずに、まともに受ける。

「いいだろう。教えてやるよ」

健一は、時弥の上に馬乗りになる。

「その時計が、おれの目的に必要なのさ」

「も、く……てき？」

口の中が切れてしまったのか、うまく話す事ができない。

「わかっただろ。だから、その時計は渡してもらおうぜ」

健一は、時弥の手から時計を奪う。

「これで、次の段階に進める。じゃあな、時弥」

時計を手にした健一は、さっさとその場から去っていった。

(目的だと？ あいつ、いったいなにを考えているんだ？)

時弥は動けぬまま、それを見ているしかできなかった。

4 一族の因縁に決着を

亜依と誠司は、詩稀村の西部にある白西山の柱の所にいた。

村が現存しているので、現在に戻ったわけではない。

今度は別々ではなく、二人一緒だった。

「誠司さん……」

「亜依……」

二人は、互いがいる事に安堵を覚えた。

初めて出会った時から、なにか安心できるものが二人の間にはあった。

それをはっきりと感じたのは、綾乃や舜平と旅をした時だった。

それなりに楽しくはあったのだが、どこかアンバランスのような、しっくりとこない違和感の
ようなものを感じていた。

改めて、二人でいる事が安心できる事を知った。

「亜依は、どこへ行ってたんだ？」

まず、誠司が訊いた。

「あたしは、昔の詩稀村に行ってたんです。そこで、藻音時弥さんと出会いました」

「え、藻音時弥と？」

誠司は、苦虫を噛み潰したような表情をした。

「はい。でも、なんだか優しそうでした。無理に強がっているような……」

「あの、藻音が……」

誠司は腕を組んで考え込んだ。

「あたしが過去の詩稀村にいた時、誠司さんはどこにいたんですか？」

今度は亜依が訊いた。

「ああ、俺も昔の詩稀村にいたんだ。そこで一軒の家が燃えていて……」

それを聞いた亜依は、口を手で覆った。目は信じられないと言っているかのようだ。

「誠司さん、それ本当ですか？」

「ああ、本当だ」

「あたし、それを見ていました。遠くからですけど」

「なんだって」

誠司が大きな声で言った。

「藻音時弥さんですけど、それを消すために誰かに……」

「ああ、そういえば誰か来たような……でも、誰だかわからないけど、炎を出すヤツが全てを燃
やしちまったんだ。俺は、そこで消えたから、そのあとの事はよくわからない」

誠司が悲しそうな表情で言う。

「じゃあ、あの人も……？」

亜依の目からは涙が溢れた。

「わからない」

誠司は、そういう事しかできなかった。

*

「そういえば」

亜依が思い出したように言った。

「誠司さん、あたしが消える直前に、これが現れたんです」

そう言って、亜依はあの小さな石を見せた。

「ああ、それなら俺も持ってる」

同じように、誠司も自分の手の上に乗せる。

「なんなんでしょうか、これ……」

「わからない」

誠司は首を傾げた。

しばらく考えたが、結局なにかはわからなかった。

「とにかく、その火事があった場所に行ってみないか？」

「そうですね」

亜依が誠司の提案に同意する。

二人に、なにか考えがあったわけではない。ただなんとなく、そうしなければいけないような気がしたのだ。

それは、本能的な直感だった。

その直感に従って、二人は火事があった場所――満仲の家を目指した。

*

その頃、満仲家では、いつもと変わらない生活をしていた。

彼らの仕事は歴史を後世に伝える事。

そのためだけに存在している。

彼らの一族は特殊で、必ず記録の能力者しか生まれない。

詩稀の有史以来、それ以外の能力者が生まれた事はないとされている。

だが、この能力は満仲の家だけからしか出現しないというわけではない。それ以外の家からでも、稀に記録の能力者が生まれる。

他の家で生まれた記録の能力者は、満仲家に預けられる。そして、満仲家で満仲の一族と同じように詩稀の歴史を記録していくのだ。

記録という能力は、第三者からは重要な能力だが、本人たちからすれば、最悪の能力なのだ。

記録の能力を持ったばかりに、人生の全てを奪われてしまうのだ。

故に、記録の能力は、呪われた能力という別名を持つ。

だが、貴重な能力という事で村の中では優遇されている。神崎家と吉田家に次いで権力を持つ

ている。しかし、当の本人たちは記録の作業に忙しく、そんなものはどうでもいいのだ。そういう位置にいただけで、その効力を行使する機会など皆無だ。

神崎家と吉田家もその事をわかった上でそうしているのだ。

*

亜依と誠司は、そんな満仲家の門の前に立っている。

家の周りには誰もおらず、それらしい異変もない。

二人は、黙ったまま満仲家を見ている。

「特に変わったところはないな」

「そうですね」

二人は、どっしりと構えている門をじっと見ていた。

門からは、白い砂が敷き詰められた庭と、その真ん中ほどにある池が見える。

敷地を取り囲んでいる塀からは、松が顔を出している。

そんなものを見ていると、なんだか自分たちが場違いに思えてくる。

「とりあえず、戻るか？」

誠司はそう言ってから気付いた。

(でも、戻ってどこにだ？ 現代か?)

「そうですね。柱の所に戻りましょうか」

亜依は、それを柱まで戻ると解釈したのだ。

「ああ」

それだけ言い、二人は白西山の柱の所まで戻っていった。

二人がそうした瞬間、事件の引き金は引かれた。

*

満仲の家に二人の人物が向かっていた。

一人は、貝通丸捨巳である。

捨巳は、積年の一族の抗争にケリをつけるべく、満仲家の隣である久藤家に向かっていた。

「久藤陰志、今日がお前の最期だ！」

捨巳は、ギラついた目で前を見据えた。

もう一人は、吉住健一である。

健一は、貝通丸捨巳が行動を起こす事を聞きつけ、それを阻止しようとしていた。

捨巳が出向くという事は、久藤の家が戦場となってしまう。そうなれば、自然と満仲家にも被害が及んでしまう。

それだけは、避けなければならなかった。

もし、満仲の一族がいなくなってしまうと、健一の目的が遂げられなくなってしまう。

いや、直接的に関係はないのだが、確実に彼らは情報を持っている。

その情報が、どうしても必要になってくる。

計画を立ててはみたものの、詳しい事がいまいちわからない。

その情報を得るためにも、満仲の一族が消えてもらっては困るのだ。もちろん、その情報を聞き出したあとなら、どうなっても構わない。

だが今は、そうするためにも、貝通丸捨巳と久藤陰志の対決を止めなければならないのだ。

*

同様に、久藤陰志も対決の準備をしていた。

彼の周りには、様々な種類の糸が並べられている。

その種類は、縫い糸やミシン糸に凧糸。はては、ピアノ線やギターの弦までである。

彼の能力は糸を操る能力。

糸に限らず、糸状のものであれば操る事ができる。

それらを駆使して、相手に立ち向かうのだ。

だが、その中でも使うのはピアノ線がほとんどである。それさえあれば、たいていの事ができる。

陰志は、それぞれの指に嵌めた指輪に糸を絡めていく。

糸を操れるといっても、身体に触れていなければ操る事はできない。

もっと強い能力者であれば離れていても可能だが、久藤陰志のレベルではそれはできない。

だが、身体に触れた瞬間、糸は生き物のように動き出す。

なので、労する事なく糸は指輪に絡まっていく。

「貝通丸の一族との抗争も、今回で終わらせる」

陰志はそう言って、ゆっくりと目を閉じた。そして、深呼吸をして精神を集中する。

そして、時が来るのを待つ。

じっと精神を集中して……その時を待つ。

*

貝通丸捨巳は、久藤の家の前までやってきた。

彼は門を睨むように見る。

その目は、決意に満ちている。

「久藤、一族の因縁に決着を！」

捨巳は、門の所から叫んだ。

彼は、不意打ちなどというものは嫌いだった。なので、正々堂々と宣戦布告文まで事前に送りつけている。健一がこの事を知ったのも、これがあったからである。

久藤陰志も、それを受け入れた。

これは、両者納得の上での事なのだ。

「来たか」

捨巳の声を聞いて、陰志はゆっくりと立ち上がった。

あくまでも落ち着いている。

その落ち着き払った様子は、まさに嵐の前の静けさである。

不気味ささえ感じる。

だが、その静けさの中にも、鬨志がメラメラと燃えている。

水の装いをしているが、内面は炎のように燃え盛っている。

玄関の所まで行くと、門の所に捨巳が立っていた。

捨巳は、陰志の姿を確認すると、掌を突き出した。

そこから、炎が出現する。

だが、いきなり放つ事はない。相手が確認してから、その行動に移行する。

貝通丸捨巳の能力は、炎を操る能力だ。吉住健一と同じ能力だが、健一と比べれば相手にもならないくらい弱いものだ。それでも、それ相応の威力はある。

捨巳が放った炎は、陰志を目掛けて伸びていく。

しかし、陰志はそれを難なく避ける。

久藤陰志は、その暗殺能力故に、素早く移動する訓練を積んでいる。なので、これを避けるくらいは朝飯前だ。

「お前の力はそんなものか」

陰志は、嘲るように言う。

「まだまだ、これからだ」

そう、今まさに、二つの一族の抗争は始まったばかりなのだ。

*

久藤陰志は、一度、自分の屋敷の中に隠れた。

元々、暗殺を主としているので、その方が自分のペースで進められる。

慣れている分、有利でもある。

だが、能力の相性というものがある。

陰志がどんな糸を操ろうと、貝通丸捨巳の炎で全て断ち切られてしまう。

それを防ぐには、一瞬で決めなければならない。

しかし、相手が攻撃をしてくるとわかっている場合、常に警戒しているので、不意打ちを狙ったとしても、即対処されてしまう。

この状況では、蔭に隠れたところで、隙を狙う事はほとんどできない。

ただそれは、糸のみを使用した場合の事だ。糸以外のものであれば、勝機はある。

例えば、糸になにかを括りつければ、その問題は解消される。

陰志は、果物用のナイフを糸の先に括りつけた。それをいくつか用意する。

彼の能力では、あまり重い物を括りつける事はできない。全力で集中すれば動かさなくもないが、スピードは出ない。なので、これくらいが重さの限界だ。

相手が眠っている状態や、自分に気付いていない場合ならもっと殺傷能力があるものを括りつけられたらと思うが、これ以上は望めない。

括り終えた陰志は、ゆっくりと隙間から捨巳の姿を捜す。

捨巳は、庭の中程にいて周囲を警戒している。

能力の温存だろうか、今は能力を使用していない。

これまで用意したのも、相手が炎に包まれていては防がれてしまう。

陰志は、その点を心配していたが、現在の状況を見て、ほっと胸を撫で下ろした。

そして、ついに陰志が動いた。

陰志は、床板を外し、床下に潜り込んだ。最後まで油断はできない。できる限り、相手の不意をつかなければならない。

ゆっくりと床下を移動する。

蜘蛛の巣が邪魔するが、所詮それも蜘蛛の糸という糸だ。陰志は能力を使い、それを事前に除去する。

ゆっくりと進み、やがて捨巳の姿を確認する。

捨巳は、周囲を警戒しているが、足下は全く見ていない。

(チャンスだ)

陰志は、握りしめていた果物ナイフを空中に投げる。

それは、捨巳がいる方向とは全然違ったが、そんな事は関係ない。糸が結びつけられたナイフは、糸に制御され捨巳に向かって飛んでいく。

捨巳がそれを見つけた時には、すでに遅かった。陰志が放ったナイフは、捨巳の左のふくらはぎに刺さっていた。

だが、間髪入れずに次のナイフを投げつける。

ふくらはぎに刺さったナイフに気を取られていた捨巳は、次の攻撃に気付かなかった。それを抜くのと、別のナイフが右足に刺さるのが同時だった。

「ぐっ……」

捨巳は、苦痛の声を出す。

陰志は、続け様にナイフを放つ。

しかし、捨巳も馬鹿ではない。自分の能力を解放して、自分の周りに炎の壁を創る。

その炎に触れて、糸は断ち切られる。

「ちっ」

床下で、陰志は舌をならした。

だが、捨巳に傷を負わせる事はできた。完全とまではいかないが、一応は成功したとっていいだろう。

まだ、戦いは始まったばかりにすぎない。そして、これから戦いは動きを見せる。

*

亜依と誠司が白西山の柱に着いた時の事。亜依が、煙が上がっているのを見つけた。

「誠司さん、あれ」

誠司は、亜依が指さした方を見る。

そこは、満仲の家がある方角だった。

「そんな……」

誠司は、息をのんだ。

「まさか……じゃあ……」

誠司は一つの考えに至った。

「ここは、俺がさっきまでいた時間なのか……」

その考えに、愕然とする。

「亜依は、これを見たんだよな」

誠司は、亜依の肩に手を掴んで訊く。

「ちょっと、痛いですよ……」

誠司は、慌てて手を放す。

「ご、ごめん」

亜依は、一つため息をつく。

「はい、確かに見ました」

「で、亜依はなにを見たんだ？」

「なにって？」

誠司の質問に、亜依は首を傾げる。

「ここで一緒になった時に、あの人がどうのこうの言ってなかったか？」

「あ……っ」

言われて、亜依は思い出した。

「はい、確かに言いました」

「あの人ってなんなんだ？ 藻音時弥は、いったい、なにをしたんだ？」

今度は、優しく肩に手を乗せる。

「それは……」

亜依は、その時の事を誠司に話す。

誠司は、それを頷きながら黙って聞いていたが、すぐに腕を組んで考え込む。

(どういう事だ？ 藻音時弥が涙を……？ いったい……)

誠司にとって、綾乃と舜平をああいう目に遭わせた藻音時弥が、自分の能力を使う事をためらい、しかも、相手を思いやって涙を流すという事が信じられずにいた。

誠司は、ずっと悩んでいた気分だったが、今はそうはいかない。

今は、それが藻音時弥の気まぐれだと思ふ事にした。

「とにかく、急ごう！」

「はい」

誠司の言葉に、亜依は笑顔で頷いた。

それと同時に、二人は満仲の家を目指して走り出した。

*

奇襲を受けた捨巳は、一層、周囲に目を配った。

じっと見据えて、攻撃の方向を探る。

しかし、防御のために出した炎の壁が、それを邪魔してしまう。だが、今これを解除すれば、捨巳は格好の的となってしまう。

これ以上傷を増やさないために、捨巳は防御を選んだ。

揺らめく炎の隙間から、なんとか気配を探ろうとする。

だが、やはり難しい。

捨巳が創り出した炎の壁は、捨巳のための壁であると同時に、陰志のためのカーテンにもなっているのだ。

一方の陰志は、床下から捨巳を見据えていた。彼からは、捨巳の居場所は一目瞭然だ。炎で囲われてはいるものの、勢いさえつけられれば、ナイフを飛ばす事で可能だ。

だが、勢いをつけるには、周回させて飛ばさなくてはならない。そうすれば、見つかってしまうだろう。

陰志は、動く事ができなかった。

沈黙が続く。

その状態がどのくらい続いたのだろうか、沈黙が破られた。

先に動いたのは、捨巳の方だった。彼は、能力の消費を覚悟で、大きく動いた。

捨巳は、自分の周りに創っていた炎の壁を周囲に膨脹させた。

円状に炎が広がっていく。

当然、炎に触れた物は燃えていく。

捨巳の炎は庭の木々を焼き払い、やがて家屋をも焼こうとする。

陰志は、その行動に慌てて、一度家の中に逃げ込む。

この捨巳の行動は、全く予想していなかった。だが、よく考えてみれば、切羽詰まればやりかねない事なのだ。

過去に決着を着けようとするならば、これくらいの事は考えておくべきだった。

家の中に逃げ込んだ陰志だったが、その家もすでに燃え始めている。

それどころか、炎が家全体を包み込んでいる。

つまるところ、陰志は隠れる場所を奪われたのだ。

(くそ……どうするんだ……)

それでも、陰志は家の中でどうにかしようとする。

ナイフでは捨巳に防がれてしまう。

捨巳に防がれないようにするには、もっと軽い物を飛ばさなくてはならない。軽ければ、周回させる事なく、勢いよく炎の壁を突き抜けて攻撃できる。

陰志は、武器を探した。

しかし、そう簡単に見つからない。

家は、炎に包まれてしまっている。

あと、どのくらいここにいる事ができるのだろう。下手をすれば、このまま焼け死んでしまう。

それに、炎の中では糸が燃えてしまう。

それでなくても、ほとんどの糸は燃えてしまっている。

これ以上、無駄にはできない。

その時、陰志の目に、古い箱が飛び込んできた。それは、大工道具を入れている箱だった。

(もしかしたら……)

陰志は、期待に胸を膨らませてゆっくりと箱を開けた。すると、そこにはお目当ての物が入っていた。

(これなら大丈夫だ)

陰志は、それを残されたピアノ線に括りつける。

それは、全部で五本。これが最後の武器だった。念のために、余分にそれをポケットに入れる。

そして、捨巳がいる場所へと向かう。

陰志は燃え盛る柱に隠れ、狙いを定め、それを捨巳に放った。

陰志が放ったそれは、捨巳を目掛けて一直線に飛んでいく。

途中、炎で糸が切れるが、括りつけられたそれは、そのままの勢いで飛んでいく。

捨巳は、それを避けきれなかった。

それは、捨巳の身体に突き刺さる。

その衝撃に、捨巳は膝をつく。その瞬間、わずかに炎の勢いが弱まる。

うずくまり、自分に刺さった物を見る。それは、釘だった。そう、陰志は、釘を括りつけて放ったのだ。

陰志は、その瞬間を逃さなかった。陰志は、余分に持っていた釘を糸に括りつける。

しかし、糸も燃えてしまっているのだから、短くなった糸同士も結ばなくてはならない。これは、意外に時間のかかる作業だった。いくら能力を使って糸を自由に操り、複数の箇所を同時に結べるといっても、一瞬にはできない。

そのわずかな時間に、捨巳も体勢を立て直す。

そして――

それは同時だった。

捨巳は陰志の姿を見つけ、そこに向かって炎を放った。

陰志は準備を終え、釘を捨巳に向かって投げつけた。

炎は陰志を直撃した。

釘は捨巳の目を傷つけた。

両者は、その場にうずくまった。

捨巳の炎が消える。しかし、すでに家屋に燃え移ってしまった炎は、消えずにそのまま燃えている。

これは、炎を放った捨巳本人も気付いていなかったのだが、その炎は、すでに隣の家である満仲家も燃やしていた。

満仲家の住人は、運悪く整理をしている真っ最中だったので、炎に気付くのが遅れてしまった。そして、そのまま、満仲の本家は滅んでしまった。

炎は、久藤家と満仲家の間の壁を壊してしまっていた。

捨巳は、よろけながらもなんとか立ち上がる。傷を負った右目を手で押さえている。そこからは、涙のように血が流れている。

陰志も、なんとか立ち上がる。捨巳の炎の直撃を受けたその身体は、火傷を負って皮膚がただれている。

「久藤陰志……！」

唸るような声で言う。しかし、炎にかき消されて音は届かない。

「貝通丸捨巳……！」

同じように、陰志も唸る。

二人は睨みあったまま、その場から動こうとはしない。ただ、睨みあっている。

二人の周りでは、炎が燃え盛っている。今この場で動いているものは、この炎だけだった。二人は、静かに立ちつくしている。

吉住健一が到着したのが、まさにその時だった。

健一は、目の前の光景に唖然とした。

それと同時に、時弥によって能力を与えられた青年——月ヶ瀬稔も到着した。

稔は、現場に着くなり能力を使って火を消そうとする。

しかし、本来のものでない能力は弱く、捨巳の炎には全く敵わない。

水を放出したとしても、炎に触れるとすぐに、水蒸気になってしまう。

それでも稔は、火を消そうと続ける。

陰志と捨巳には、そんな光景は見えていない。完全に、二人の世界にいた。

捨巳は、炎を放とうと空いている左手を握りしめる。

陰志は、使う予定のなかった鋼線を取り出した。陰志が今までこれを使わなかった理由は、扱いにくいからだ。柔らかい糸とは違い、鋼線は隅々まで能力を行き届かせないと自由に動かせない。普通より、疲労が激しいのだ。

そしてもう一つの理由は、火傷をしないためだ。鋼線を伝わる熱で、多少なりとも火傷を負ってしまう。だが、今はもう関係ない。

（まさか、これを使う事になるとはな……だが、これで全てが終わる）

道は、ついさっき歩いたばかりなので、迷う事などない。目的地を目指して、一心不乱に走り続ける。

しかし、時とは無常なもので、もうすぐ満仲の家が見えるという所まで来た時、それは起こった。

それは一瞬だった。

一瞬、大きな火柱が上がった。

(あれは……)

誠司は、その火柱に見覚えがあった。それは、吉住健一が起こしたものだだった。

彼の能力で、その一面にはなにも残らず、全てが燃えてしまった。

そのあと、どうなったかは知らないが、亜依の話だとそこに一人の青年が向かったという。おそらく、それは、誠司が見た掌から水を出していた人物だろう。

その人は、炎の海の中にいた。その中で、必死に火を消そうとしていた。

だが、その中にいたという事は、おそらく……。

(ちくしょう！)

誠司は、それを思い出すと、悔しくて仕方がない。

亜依はその事を知らないで、なにが起こったのか、そして、どうして誠司がそんな表情をしているのかわからず、ただ首を傾げていた。

それでも、二人は走る事をやめない。

そこに絶望があると知っていても、今は走る事しかできなかった。

*

陰志は捨巳を見据える。

捨巳も陰志を見据える。

そして、柱が崩れた瞬間、それを合図に二人は動いた。

「でやっ！」

「だぁっ！」

叫び声と共に、二人は相手に向けて能力を放った。

だが、それより一瞬だけ早く、能力を解放した人物がいた。

吉住健一だ。

陰志と捨巳の攻撃が相手に届く前に、一帯を巨大な火柱が覆った。

それは一瞬だった。

一瞬で、そこにあったもの全てを焼きつくしてしまった。

久藤の家を……。

満仲の家を……。

久藤陰志を……。

貝通丸捨巳を……。

そして、月ヶ瀬稔を……。

全てを焼きつくした。

そこに残ったのは、焼け焦げた地面だけだった。

健一は、それを茫然と見ていた。

「こんなところで計画が狂うとはな……他を探さなくては……」

怒りに満ちた目で大地を睨んだ。

そして、踵をかえして、その場を静かに去っていった。

結局、久藤陰志も貝通丸捨巳も勝利を得る事はできなかった。決着の前に、全てが終わってしまった。

月ヶ瀬稔は、詩稀の歴史を守る事ができなかった。結局は手遅れだった。全てが無駄に終わってしまった。

そして満仲の一族は、なにもわからぬまま……。そして、彼らが記録した歴史は消えてしまった。

全てが、途中のまま終わった。

*

満仲の家があった場所に着いた時、そこにはなにもなかった。

焼けた地面だけがそこにはある。

「遅かった……」

誠司は膝を崩した。

「そんな……」

亜依も膝を崩し、両手で顔を覆って涙を流した。

悲しくて、悔しかった。

こうなる事は、予想していなかったわけではない。

なのに、なにもする事ができなかった。

もしかすれば、誰も犠牲にならなかつたかもしれない。

だが、歴史は変える事ができない。それがわかっているだけに、余計に悔しかった。

誠司も自然と涙が溢れてきた。

「ちくしょう！」

両手を地面に叩きつける。

「ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう……」

何度も何度もそれを繰り返す。

地面に涙が落ちる。

「……よう、ちくしょう、ちくしょう……」

涙が落ちた地面が黒くなる。だが、すぐに染み込んで元に戻る。

その時、突然、明るくなった。

誠司は、服で涙を拭い、その方を見た。

亜依も同じように見る。

そこには、小さな石が浮かんでいた。

「あ……っ」

それは、誠司の方へゆっくりと移動する。そして、誠司の目の前で止まった。

涙で目の前が滲む。

それでも、石ははっきりと見える。

やがて、誠司の手に収まる。

「これって……」

誠司の手に収まった瞬間、石から光が発せられた。

そして、二人の姿は消えた。

5 俺はあれを赦せない

亜依と誠司の二人は、詩稀村にある最後の柱、北玄山の柱にいた。北玄山の柱は漆黒で、どこか不気味な感じがする。ただ、今回も二人一緒なので、少し和らいでいた。

「どうなってるんだ？」

誠司は、さきほどから自分たちが体験している不思議な出来事の事を考えていた。

その手には不思議な石がある。この石が現れると、二人の姿はその場所から消えてしまう。そして、気付いた時には他の柱にいるのだ。

「この石って……」

石を見ながら呟く。

「誠司さん……」

じっと石を見つめている誠司に、亜依が声をかける。

誠司は、心が別世界に行ってしまったかのように、焦点があっていない。

「誠司さん……」

考えに集中していて、亜依の声が届いていない。仕方なく亜依は、誠司の服の裾を引っ張る。

「誠司さん……」

「ん？ あ、なに？」

三度目にして、やっと誠司が気付いた。

「誠司さん、あれ……」

亜依が集落の方を指した。誠司もその方向を見る。そこには、一軒の家があった。今まで見た家とは違い、小さかった。というより、今までの家が大きかったのだ。なので、普通くらいの大きさの家では、小さく感じてしまう。

「で、あの家がどうか……」

そこまで言った時、誠司もそれに気付いた。そこには、一人の少年と青年がいた。

誠司には見覚えがあった。直接会った時よりは幼いが間違いない。

「藻音時也……」

そして、その藻音時也と一緒にいる青年は、月ヶ瀬稔だった。

*

「稔さん、ありがとうございました」

「時也君、そんなに畏まった言い方をしなくても……」

稔は照れ臭そうに言った。

年下である時也が、年上である稔に敬語を使うのは至極当然である。

だが、一族の身分というものがこの村には根強くある。なので、詩稀の有力者である神崎家に仕える藻音家は、一般の村人で、しかも能力のない稔からすれば、雲の上の人間なのだ。

そんな藻音家の人間に稔は勉強を教えていた。なので、時也にとって稔は先生なので、自然と

敬語を使っている。それが、稔にはくすぐったい。

「じゃあ、また明日ね」

「はい」

時也は、笑顔で手を振って、稔の家をあとにする。

だが、この明日はもうやってこない。

*

亜依と誠司が見つけたのは、まさにこの時だった。

「あの人が生きていう事は……」

亜依が嬉しそうに誠司を見た。

「ああ、まだ事件は起こっていない」

二人は、満仲の家を目指して走り出した……まさにその時、懐かしい顔が二人の前に現れた。
小さな小人が空中に浮かんでいる。

「ようっ！ あんさんら、久しぶりやな」

その小人が、言葉を発した。

二人は慌てて止まった。

「……グ、グビディ……」

「……グビディさん……」

二人は、心臓が止まりそうになった。

「ほんま、久しぶりやわ」

グビディは、再会を喜ぶように、嬉しそうに言った。

「あんさんら、これ以上は干渉したらあかんで」

現れた瞬間、グビディはそう言った。

「グビディ、干渉するな……ってどういう事だよ！」

誠司は、目の前に浮かんでいるグビディを掴む。

「ちょ、ちょい、放して～や」

グビディが苦しそうな声を出す。

「だったら、ちゃんと説明しろ！」

そう言って、グビディを放す。

「ふう～、ほんま、あんさんって乱暴やな。せっかくの感動の再会やっちゅうのに」

「グビディさん、どうして今まで来てくれなかったんですか？」

亜依がグビディを見て安心して、泣きそうな声を出す。

「ちょい、お嬢ちゃん、泣かんといてや。わいが泣かせてしもうたみたいで、気分悪いやないか」

グビディが亜依の涙に戸惑う。

「……ごめんなさい」

「いや、別に謝ってもらおうとか思って言ったわけやないし……そうそう、お嬢ちゃんには笑顔が一番やさかい……な。ほら、わろうて～や。スマイルや、スマイル」

グビディは、ニッコリと笑顔を浮かべる。それが、どうにも無理をしているようで、少し不気味である。

「そうだよ。ホントにどうして今まで出てこなかったんだ？」

誠司が亜依の肩を抱く。

「それはやな……って、あんさんら、えろう仲よ～なったやんか」

と、二人を見て言う。

「そんな事はどうでもいいんだよ。だから、どうしてなんだ？」

「そうそう、それやったな。出てこ～へんかったんやのうて、出てこられへんかったんや。でもな、やっと出てこられるようになったんや、ちょっとの間だけなんやけどな」

と、少し淋しそうに言った。

「ちょっとの間って、どういう事だよ」

誠司が訊く。亜依は、涙を浮かべたまま黙っている。

「今までも、なんとかして、あんさんらに伝えなあかんとは思ってたんやけどな、妨害されて出てこられへんかったんや」

そう言って、グビディは柱を見る。

「せやけどな、あの柱の力のお蔭で出てこられたんや」

誠司も漆黒の柱を見る。

「あの柱がどうかしたのか？」

「あのな～！ 詩稀村を守護している柱はな、すごいねんぞ。あの柱のお蔭で、村は災いから護られてきたんや。全部、あの柱のお蔭なんや」

神々しいものを見るように、グビディは柱をじっと見つめる。

「へえ～、あの柱にそんな力があつたんだ……」

誠司は、その事実を聞いて感嘆する。亜依も、その事実には驚きを隠せない。

「そうやで、あの柱はすごいんや。第一、あんさんらもあの柱の力で同じ時間を移動してんのやで」

その言葉に、誠司は息をのんだ。

「まあ、知らんかった事やし、しゃ～ないけどな。前にあんさんら、懐中時計、持ったやろ？」

誠司は少し考える。

「あのな～。forstreckiを……」

「ああ、あれか」

誠司はポンッと手を叩いた。

「その懐中時計がないと、あんさんらは時間を移動でけへんのや」

「そうだったのか……」

誠司は驚いたように頷く。

「じゃあ、あたしたちがこうやって時間を移動しているのは、どうしてなんですか？」

「それはやな、全部、柱の意思なんや。柱は、あんさんらに過去を見せとんのや」

グビディの言葉に、亜依と誠司は言葉がなかった。

「……それって、どういう事だよ」

誠司は啞然としながら、呟くように言った。それはまるで、なにかに脅えているかのようだった。事実、誠司は柱の力に脅えを感じていた。

「そのまんまの意味や。これは、柱があんさんらに見せとる映像や。せやから、どのみちあんさんらは干渉する事はでけへん。あんさんらは見てるだけしかでけへんのや」

その言葉に、二人は愕然とした。

干渉できないという事は、あの火災を止める事ができない。という事は……今まで自分たちがしようとしていた事が、根本的に無駄だったという事になってしまう。

「でも……でも、村の人とはちゃんと話せましたし……」

「それはやな、相手が能力者やったからや。他の能力のない村人には、見えてもないはずや」

言われて、亜依は思い当たる節があった。それは、誠司にも同様だった。村で人とすれ違っても、その人はなんの反応を示さなかった。

「わかったやろ？ せやから、あんさんらは干渉でけへん。ただ、見てるだけなんや。おとなしゅう、黙って見とり」

「……………」

「……………」

二人は、ただただ茫然としていた。

自分たちの無力感がイヤだった。

目の前で人が死んでいくのを見ているしかできない自分が、それがわかっているのになにもできない自分が……イヤだった。

そんな自己嫌悪の中、誠司が口を開いた。

「じゃあ、どうして柱はこんな事をしてるんだ？」

誠司の問いに、グビディは頷いた。

「まあ、そこに行き着くのも時間の問題やったし、ええやろ。それに、あんさんらは知らなあかん事がよーさんある。柱の力がなくなってわいが消えるまでに、全部話しとかなあかんさかいな」

そこでグビディは、二人をじっと見据えた。その目には決意が秘められていた。

「あんさんら、小さな石を持っとるやろ」

そう言われて、二人は自分たちが持っている石を見せる。

「それだけやあらへん。あんさんの耳にもあるやろ。それに、ポケットにも。お嬢ちゃんも、ポケットにまだ入っとるはずや」

その言葉に、誠司は左耳のピアスを触る。ピアスの石は、誠司が椎崎誠介と容子の墓石の裏にあったものだ。

誠司は、その時の不思議な状況を思い出した。石を見つけた時、墓石の周りの時間が止まって

いた。そして、誠司が石に触れると、勝手にピアスに収まった。

そして、ポケットも探る。そこには、ピラミッドで見つけた石が入っている。

亜依も自分のポケットを探る。そこには、母親の富所梨架からもらった鍵が入っているだけだ。そして、その鍵には、小さな石が付いたキーホルダーがぶら下がっている。

それともう一つ、ラミンの家で見つけた石が入っている。

「これが……なんなんだよ」

「その石はな、r o z a r i o ゆうてな、鍵なんや」

「鍵……？」

その言葉に、誠司は首を傾げる。だが、亜依の反応はそうではなかった。

亜依は、地図を取り出して広げた。

「誠司さん、これじゃないんですか」

そして、地図に書かれている文字を指した。確かにそこには《神の扉 十二の鍵を以て封印せん》と書かれている。

「そうや。そんで、あんさんらは鍵を集めて、D i o を解放せなあかん。それが、あんさんらの使命や！」

そう言うと、グビディは二人をじっと見つめる。二人はなにも言えず、石とグビディを交互に見た。

「……ちょっと待て。D i o ……神様が封印されてるってどういう事だよ。お前は、そのD i o の使いなんだろ？ D i o が封印されて、どうしてなにもしないんだよ」

誠司は一息でまくし立てるように言う。

「あんさんの言う通りや。けどな、わいにはなんもでけへんのや。わいは、D i o の能力で自由に動ける。けど、わいがD i o を自由にさせる事はでけへんのや。わいかて悔しいんや。できるもんなら、やりたいわ。でもな、でけへんのや。せやから、それをする事ができるあんさんらみたいな時空の能力者に頼むしかないんや」

グビディは、涙を流していた。元はただのぬいぐるみだが、能力によって生き物と大差ない。今はぬいぐるみではなく、グビディという一つの生命体なのだ。

「グビディさん、あたしたちにしかできないって、どういう事ですか？」

グビディの涙を見て、亜依の目にも涙が浮かんでいる。

「お嬢ちゃん、あんさんまで泣かんでええんやで」

グビディが亜依を慰める。

「……ありがとうございます、グビディさん……」

亜依は静かに涙をこぼす。

「あんさんらは、全部知っというもらわなあかんのや」

「グビディ、どうしてそんなに慌ててるんだ？ なにか理由でもあるのか？」

「……あるんや。m o r t o がD i o を解放して、利用しようと企んでるんや。せやから、それよりも先に、なんとしても鍵を集めて、D i o を解放せなあかんのや」

グビディは、必死に訴える。

「D i oの能力を悪用させたらあかん！ そのためにも、なんとしても鍵を集めて、わいらで解放せなあかんのや！」

その勢いに、二人は戸惑ってしまう。

「なあ、D i oが俺たち以外のヤツに解放されたら、どうなるんだ？」

誠司が、素朴な疑問をぶつける。

「D i oはな……」

グビディは、そこで言葉を止める。言おうかどうか、迷っていた。だが、言わなければならないと決断した。

「D i oは、一人の女の子なんや」

「……はあ？」

「……ええ？」

誠司と亜依が、意外な言葉に間抜けな声を出す。

「D i oが女の子？ なんだ、それ」

神様と聞いて、すごい存在を想像していた誠司にとって、それが意外以外のなにものでもなかった。それは、亜依も同じだった。

「D i oの本当の名前は、神崎璃織魚様ゆうてな、神崎家の地下に監禁されてるんや」

「ちょっと待て、その女の子が、どうして神様なんだ？ 第一、どうやって……どうして監禁されてるんだ？ それに、誰がそんな事を……」

「まあ、待ちいな。順番に話すさかい」

なおも言葉を続けようとする誠司をグビディは止める。

「でもな、先に言っとくけど、全部、なにもかも知ってるわけやないんや。わいは、璃織魚様の指示で動く人形やさかいな。本来の空間では、わいはただのぬいぐるみや。せやから、璃織魚様の側にずっとおられるし、璃織魚様の事もよ一わかる」

グビディは、淋しそうな顔をする。

「でもな、所詮はぬいぐるみや。せやから、わいは、全部はわからん。わかるのは、璃織魚様は全ての能力を持っている事だけや」

「全部の能力って……どういう事なんだ？」

「そのまんまの意味や。璃織魚様は、ありとあらゆる能力を使える。せやから、璃織魚様はD i oなんや。わかるやろ？」

亜依と誠司は無言のまま頷く。

「せやけど……せやから、璃織魚様は監禁された」

「だから、どうしてなんだ？」

「そうです。どうしてそんな事……」

「璃織魚様を監禁したのは、璃織魚様の父親である神崎禎昭様なんや」

「……おい、どうして、どうして父親がそんな事をするんだよ」

誠司は、グビディに掴みかかる。だが、グビディは小さいので、どうも握り潰そうとしているようにしか見えない。

「ちょっと、落ち着きな。わいにそんな事言われてもな……でもな、禎昭様は璃織魚様を助けようとしたんや。その結果が、これなんや」

「わかんねえよ！」

「せやから、落ち着きいて。ちゃんと話すさかい」

誠司は、グビディを放す。

「……ほんま、最後までじっと聞かれへんのかいな、もう……」

「悪い」

誠司は素直に謝る。

「それでええねん。でや、なんで禎昭様がそんな事をしたかやけど——」

誠司は、今度は落ち着いて、グビディをじっと見ている。

「——全ての能力を持って生まれた者は、その能力に耐えられへんのや。それで、過去にぎよおさんのD i oの能力を持ったもんが死んどる。でもな、助かる方法があつてな、身体が変化するまで、能力をr o z a r i oに封印するんや。そんで、身体が変化した頃にそれを元に戻せば、D i oの能力は定着するんや。で、その能力を利用しようと動いとるもんがおる」

グビディは力強く言った。

「それが、藻音時弥なのか？」

誠司は、今までずっと考えてきた事を告げた。

「そうや、藻音時弥が悪用しようと思んどる」

だが、それを疑問に思ったのが亜依だった。

「でも、あたしは、藻音時弥さんがそんなに悪い人だとは思えないんですけど……」

それは、子どもの頃の時弥を見た亜依だからこその言葉だった。

「あんな純粋な人に、そんな事はできないと思うんです」

「でもな、人って変わるんだよ」

「いいえ、変わりませんよ」

珍しく、強い口調で言う。

「どんなに変わったように見えても、心の底は全然変わってないんです」

「それはそうかもしれないけど……」

子どもの頃の時弥を知らない誠司には、亜依の発言が信じられない。

「でもな、亜依。現実に藻音時弥はD i oの能力を狙ってるんだ。それは変わらない事実なんだよ」

誠司は、なんとか説得しようとするが、

「そうだとすると……たとえそうだとすると、なにか理由があるはずですよ」

と、亜依は頑なに言う。

「それに、本当に利用しようとしているのかわからないじゃないですか。実は、違う人かも……」

誠司は、亜依の肩に手を置いた。

「わかったよ。でもな、藻音時弥が動いている事は事実なんだ。綾乃や舜平の事は……あれは藻

音時弥のした事だ。少なくとも、俺はあれを赦せない。それだけはわかってほしい。それに、今はそんな事を議論している場合じゃない。誰がしているのかはあとでもいい。それよりも、早く鍵を集めるんだ」

誠司の言葉に亜依は頷いた。誠司は、優しい目で亜依を見る。

「グビディ、続きを話してくれないか」

誠司はグビディに向き直って言った。

「すまんな、それ以上は、わいにはわからんのや……」

グビディは、申しわけなさそうに俯く。

「そっか……」

誠司は、残念そうに呟く。

その時だった。

「あっ！」

亜依が驚きの声をあげた。

「もう、時間みたいやな」

そう言ったグビディの身体は、透き通っていた。

「なんとしても、rozarioを集めてや。頼んだで……」

そう言い残し、グビディの姿は消えた。

残された二人は、しばらくグビディがいた場所を見ていた。

そこには、柱が悠然と聳えている。

「石を探せ……か」

誠司が呟いた。

「なんだか、最初の時みたいです」

柱を見たまま、亜依も呟いた。

その時、二人は同時に煙を見つけた。

「結局、止められなかったな……」

「そうですね……」

なにもできないと言われても、やはり止められなかった事は悔しい。

そう思っているところに、石が現れた。それは、亜依の前に浮かんでいる。

亜依は、ゆっくりと手を伸ばした。そして、優しくそれを握る。

すると、光が二人を包んだ。

そして、二人の姿は消えた。

*

二人が消える少し前、一人の青年が村の歴史を守ろうと、奮闘していた。

月ヶ瀬稔は、いつものように時也に勉強を教えたあと、北玄山の湖にいた。

ここは、彼にとって、憩いの場所だった。他の村人も、知っている場所なのだが、あまり来ようとはしない。この日も、稔以外の姿は見えない。

この湖で、稔はいつも考える。

どうして、詩稀村の人間なのに、自分にはなんの能力もないんだろうか……？

能力がないくせに、藻音家の人間と親しくしているなんて、おかしいんじゃないだろうか……？

空を見上げて、ずっと考えていた。しかし、その答えが出る事はない。

現実には、自分にはなんの能力もないし、そのくせ藻音家の人間である時也と親しい。それは変えようのない事実なのだ。

堂々巡りを繰り返すだけなのだが、それでも考えずにはいられない。

考えるだけ考えて家に戻ろうとした時、稔は煙を見つけた。そして、その場所を見て愕然とした。

「あそこは……」

その場所は、詩稀村の歴史を司っている満仲家の場所だった。

稔は、必死に走った。

遠目に満仲家を見ると、村人たちが必死に火を消そうとしているのが見えた。

「急がないと」

目指す場所は、藻音時弥がいる所。

現在、詩稀村には水を操る能力がある者はいない。だが、時弥の能力である授与で能力を与える事ができる。

(この命に代えても、なんとしても守らないと……)

稔は藻音家を目指す。

だがその途中、東青山の柱で時弥を見つけた。時弥は、一人でそこにいた。

稔は、時弥に駆け寄った。

「満仲の家が燃えているんです」

稔は叫んで走り寄る。

「なに、満仲の家が……？」

時弥は信じられないといった表情で稔を見た。

「村の人間で、どうにか火を消そうとしているのですが、一向に消えなくて……それで、時弥様の能力で……」

「それはできない」

時弥は、稔の言いたい事を察して、それを拒否した。

「ですが……」

「能力を使いこなせていない今、能力を使えばその者は死んでしまう」

「わかっています。ですが、満仲の一族が消える事は村にとって……」

「満仲の一族は閉じ込められているのか？」

「はい」

時弥は唇を噛んだ。

「仕方ない……だが、誰に……」

「時弥様」

稔は、真剣な目で時弥を見た。

「だが……」

「構いません。村のために……」

「……………」

稔は、じっと時弥を見た。その真剣な目に、時弥は言葉が出なかった。

「……わかった。すまない」

「構いません。この命で、村が救えるのなら」

「時間がない。急ぐぞ」

時弥が言うと、稔はその場に腰を下ろした。そして、ゆっくりと目を閉じた。

「すまない」

そう言って、時弥は稔の頭に手を置いた。

時弥が目を閉じると、頭に乗せた手が光り出した。

光は、稔を包み込む。

それが数十秒続いた。

そして、光は消えた。

稔は目を開け、スッと立ち上がった。

「行ってきます」

言うと、稔は来た道に戻って行った。

*

時弥から能力を授与された稔は、満仲の家を目指して疾走した。

満仲の家は、その間も燃え続けている。

(ちくしょう……！)

すぐにでも行きたいのに、それができない。苛立ちはつのるばかりだ。

稔は、できる限り、息が続く限り走り続ける。

たとえ、息が切れても、切れていない、大丈夫だ、と自分に言い聞かせる。

(これなら、駿足の能力の方がよかったかもな……)

と、少し後悔していた。しかしすぐに、やはりこのままでいい、と思った。

(とりあえず、今は満仲の家を守るんだ！ できるなら、脱出して、逃げていてくれるといいのだが……)

と、期待を抱くが、それは虚しくも散る事になる。すでに、満仲の家は火に包まれていて、誰も逃げ出す事ができずにいた。

*

満仲の家では、一族のみんなが逃げ惑っていた。気付くのが遅すぎた。火の海と化したそこからは逃げる事ができない。まして、記録する事が本分の彼らに、それを防ぐ術があるはずもない。ただ、黙って……最期を迎えるしかできなかった。

彼らは、一つの場所に固まって、その時を待った。

だが、彼らに絶望はなかった。

この村で起こった最近の出来事は失われるが、今までの歴史は村の外にいる分家が受け継いでくれる。それだけが、彼らに残された希望だった。

そんな希望を胸に……彼らはこの世から去って逝った。

*

その外では、久遠陰志と貝通丸捨巳の対決が行われていた。

そして、全てが終わろうとしている。

*

月ヶ瀬稔が到着した時、すでにそこは火の海だった。

「満仲の家は……」

満仲の家をじっと見るが、家は完全に火に包まれていた。逃げ出した様子もない。火を消そうとしていた村人たちも諦めたのか、誰もいなかった。

「ちきしょー！」

稔は、空に向かって雄叫びをあげた。

そして、火の海に飛び込んだ。

両手を火に向ける。

すると、そこから水が放たれる。

時弥から授与された能力——水を操る能力だ。

それを使って、どうにか火を消そうとするが、火は一向に消える様子はない。

貝通丸捨巳の能力がそれほど高くないとはいえ、本来の能力でない、授与された能力では、やはり歯が立たない。

だが、諦めるわけにはいかなかった。

ここで諦めてしまえば、なんのためにここまで来たのかわからなくなってしまう。

わざわざ、死を覚悟で能力を授与された自分が無意味な存在となってしまう。

そんな思いを胸に、稔は能力を使い続ける。

授与された能力自体はレベルが低いとはいえ、水を操る能力自体はかなり高位の能力である。そのため、容赦なく稔の体力を奪っていく。

眩暈で膝をつくが、それでも能力を使い続ける。
そうさせるのは、彼の、村への……一族への想いだった。
自分が生まれ育った場所を守りたい。
仲間を守りたい。
その想いだけで、稔は能力を使い続けている。
普通なら、とっくに気を失ってもいいくらいだ。
それでも、必死に自分を奮い立たせる。
これが、稔にできる村への愛情表現——恩返しだった。

*

意識が消えそうになる中、稔は必死に火を消そうと能力を使い続ける。
だが、火は消える気配がない。
「そんな……無力、なのか……」
消え入る声で眩き、稔はその場に倒れた。どれだけ気力で補おうと、限界は訪れる。
(……なんだか、昔の事ばかり浮かんできやがる……これが、走馬灯ってヤツなのか……？
ハハッ、ここまでって事か……)
稔は、昔の事を思い出していた。
稔は、小さい頃に村に連れてこられた。そう、彼は村の生まれではないのだ。だが、稔の先祖は村の出身で、彼の父親はレベルは低いが、水を操る能力を持っていた。しかし、稔は能力を得る事ができなかった。
普通の人間として生活していたが、稔が生まれてすぐに、両親は事故で亡くなってしまった。
その時、親戚は手に余るので施設に預けようとしたのだが、友人を名乗る村の人間が稔を引き取ると言ってきたのだ。
親戚は、その願ってもない申し入れを受け入れた。
こうして、稔は村へとやってきた。
その時、友人と名乗った人物こそが、満仲家の当主——満仲源次だった。
それを聞かされたのは、稔が十歳になった時だった。
そして、稔が十三になると。彼は満仲の家を出て、満仲家が所有している小さな家で生活し始めた。それが、稔のけじめだった。
以来、稔はそこで生活を続けた。
そして今——稔は、その満仲の敷地内で息を引き取ろうとしている。
能力の使用で身体が動かない今、黙って炎に包まれるのを待つしかなかった。
だが、そうはならなかった。
爆音と共に、全てが消え去ってしまった。
なにも感じる事もなく、そこにあった全てが消えた。

亜依と誠司は詩稀村の柱にいた。柱の力で過去を見せられていた二人は、元の世界に戻された

。

柱の周りに建物はなく、ただ雑草が辺りを覆いつくしている。

そこに人がいたようには、とても想像できない。

「……あの景色はなんだったんだ？」

誠司は亜依に対してというわけではなく、誰ともなしに呟いた。

誠司は、柱によって見せられた景色を思い出していた。

詩稀の歴史が失われた瞬間。

一人の村を愛した青年が消失した瞬間。

そして、怨みのこもった目で見つめていた少年。

全てが夢のようで現実だった。

「……なんだったんでしょう」

誠司の言葉を受けての言葉だが、目は虚ろだ。虚空を見ている。

亜依もまた、柱によって見せられた景色を思い出していた。

一人の少年の苦悩。

その少年の涙。

そして、村を愛した青年の決意。

夢のような現実。

それら全ては幻ではなく、現実にあった出来事。

「柱は、どうしてあんなものを見せたんだろう……」

やはり、誰ともなしに呟く。

「……どうしてでしょう」

無意識にそれに答えるが、相変わらず目は虚ろで現実を見ておらず、どこか遠くを見たまま。

そのまま、時間だけが流れる。

山からの風が辺りの草を揺らす。サワサワとした穏やかな音が辺りを支配する。

その中に不自然に聳える柱の下に、二人はいた。

亜依と誠司は、虚ろな目のまま、そこに立っていた。

草の海に聳える黒い柱の下に彼らはいる。

山からの風が、亜依の髪を揺らす。亜依は、ほとんど無意識に髪を押さえる。

それでも、虚空を見ており、現実を見ていない。

二人は、どうすればいいのかわからずにいる。

自分たちが持っている石の事は、突然現れたグビディに聞かされたが、それでD i oを解放すると言われても、どうしていいのかわからない。

とりあえず石を集めなければいけないという事はわかった。そして、その場所を示すのがあの地図だという事も。

だが、今はそういう気分にはなれない。

それでも、

「亜依、行こうか」

ゆっくりとした口調で、誠司が沈黙を破った。

「そうですね」

亜依はハッキリと答えた。

「どこに行きますか？」

そう言いながら、亜依は地図を取り出して広げる。

詩稀村がある場所に、八つの点がある。他には、東京辺りに一つと、長野県辺りに一つ、そして欄外に二つある。

「どこに行きますか？」

「う～ん……」

亜依の問いに、誠司は腕を組んで唸る。

しばらく地図を睨んでいたが、

「ここにしないか？」

そう言って指したのは、長野県辺りの方だった。

「ここは……」

「そう、久しぶりに会いに行こうよ」

誠司は、笑顔で言った。

行き先を決定した二人は、『時の口』へ飛び込んだ。

*

亜依と誠司は、長野県にやってきた。

「ここは……」

到着するとすぐ、亜依は感嘆の声をあげた。

辺りを見渡すと、そこは見覚えのある場所だった。

「やっぱり、ここだったんだな……」

そこは、山の中だった。

最初の旅の時、亜依と誠司がやってきた場所だ。そこに来るまでは、絵本のような世界にいたので、旅の中で初めて現実の世界に来た場所なのだ。

「思い出すな、あの時を……」

誠司は、懐かしそうに亜依を見た。

「ええ」

亜依は、笑顔で返す。

この山を下りようとした時、二人は、それぞれの顔見知りである姫川桜と水沢達之と出会ったのだ。

その二人と一緒に、麓の鬼無里村に行ったのだ。そして、そこで奇妙な事件に巻き込まれた。運命に縛られた悲しいその一族の事件は、誠司がすぐさま解決した。

亜依と誠司は、その家に向かっている。

「あれから、どうなったんでしょうね」

「そうだな……確かに気になるな」

と、二人は楽しそうに会話しながら鬼無里村に向かう。

しばらく歩くと、見覚えのある家が見えてきた。

「今もいるんでしょうか？」

亜依が当然の疑問を口にする。

「言われてみれば……」

言われて、誠司は気付いた。

あの時は、当主である北原淀の葬儀が行われたあとだった。という事は、今は誰もいない可能性がある。

誠司は、意を決してドアをノックした。

ーントントン！

ノックをしてしばらく待つ。しかし、誰も姿を現さない。

「やっぱ、誰もいないのか……」

「そうみたいですわね」

二人は残念そうに言う。

仕方なく、家の周りを廻る事にした。

旧家特有のどっしりとした、存在そのものに重みがある感じが眼前にある。その圧倒さに二人はため息をつく。

「すごいですね……」

亜依は、家を見上げて呟く。

「確かにな……」

誠司も見上げる。

隣接した家がなく、孤立した場所に建つ家というのを見た事がない二人にとって、目の前の光景は異世界に近いものがあつた。

家に沿って裏に廻った二人は、見覚えのある顔を見つけた。その人は、しゃがみこんで花壇をいじっている。

「紗子さん……」

亜依は思わず声を出した。

その声で二人に気が付き、紗子が振り向いた。そして、一瞬だけ無言になる。

「……あら、あなたたちは……」

紗子は驚いた顔で二人を見た。

「お久しぶりです」

誠司が挨拶する。慌てて、亜依も頭を下げる。

「久しぶりね……」

紗子は二人に歩み寄る。

「インターフォンを鳴らしたんですけど……勝手に入ってきちゃって……」

誠司が詫げる。

「ごめんなさいね、ずっとここにいたから……」

そう言って、紗子は立ち上がる。そして、手についた土を払い落とす。

「じゃあ、改めて……いらっしやい」

紗子は笑顔で言った。

その優しい笑顔に、二人は落ち着くものを感じた。

「ところで、どうしてここに……？」

紗子が訊いた。

「それが……」

亜依はどう言っているのかわからず誠司を見た。

誠司は誠司で、どう言っているのかわからずにいた。

「とにかく、せっかくだからお茶でも飲んでいく？ まあ、ホントに緑茶なんだけど」と、二人の様子を見て明るく振る舞う。

*

家に招き入れられた二人は、客間である和室にとおされた。二人は、萎縮したようにきちんと正座をしている。

そこへ、お盆に湯呑みと急須を乗せた紗子が入ってきた。

「二人とも、そんなに畏まらなくてもいいのに……。もっとリラックスして」

と、笑みを浮かべながら言う。

そして、自分も座るとお茶を淹れる。

「粗茶ですが」

そう言って、二人の前に差し出す。

「いただきます」

二人は、緊張した面持ちで一口飲む。

「……どう？ 落ち着いた？」

笑顔で紗子が言う。

「……はい」

「ありがとうございます」

誠司と亜依は表情を弛める。

それを見て、紗子も一口飲む。

「……おいし」

そして、笑みを浮かべる。その笑顔で、二人の緊張もほぐれた。

「あの……俺たち……」

と、誠司が話を切り出そうとしたが、

「無理しなくてもいいのよ」

と、紗子が優しく言う。

「はい、大丈夫です。お茶を飲んで落ち着きましたから」

「そう、よかった」

「で、俺たちがここに来たのは、こういうものを探して……」

そう言って、rozarioを見せる。

「こんな石を探してて、それで、地図があって、そこに、この辺にあるって印があって……」

と、だんだん、しどろもどろになっていく。

「なるほどね……」

そう言って、誠司が持っている石を手取る。そして、光に透かす。

「綺麗な石ね……」

様々な鉱物の研究をしている紗子は、興味津々の目で見ると、

「今まで、見た事もないものね……」

と、誠司に返す。

「で、それを探してるんだ？」

「……はい」

誠司は小さく頷く。

「ごめんなさいね、力になれなくて」

「いえ、そんな……」

と、亜依が言ったのと同時に、

「紗子さん、図々しいですけど、お願いがあるんですが……」

と、誠司が言った。

「なにかしら？」

紗子は首を傾げる。

「俺たち、この辺を探してみたいんです。だから、その……」

誠司は申し訳なさそうに俯く。

「いいわ。今晚は泊まっていて」

と、紗子は先読みして言う。

「ありがとうございます」

誠司は、深々と頭を下げる。

「いいのよ。どうせ、こんな広い家に一人でいるんだもの」

「え、そうなんですか？」

そう驚いたのは亜依だった。

「紗子さん、あれからずっと……？」

「ええ。一応、奇跡の石の後継者って事になっちゃったからね。美津子に負担はかけられないし

、研究はここでもできるしね……と、言いたいんだけど、実際はここには美津子が住んでるの。だけど、ちょっと今、旅行に行っていて、それでこっちに来てるの」

と、努めて明るく振る舞う。

「だから、大丈夫。初めてのお客様だしね」

と、笑顔で二人を見る。

「ありがとうございます」

亜依と誠司はお礼を言った。

*

亜依と誠司は村を散策していた。

しかし、それらしいものは見つからない。

「だいたいさ、どうやって見つけるんだ……」

と、言った誠司は、過去にも同じ事を言った事を思い出した。

「……って、forstreckiを探してここに来た時も同じ事言ってたな」

「そうですね」

亜依も思い出して笑う。

「あの時はグビディさんが突然現れて……」

そう言って目の前を見るが、グビディが現れる気配はない。

「……現れないよな。でもさ、絶対見つかるさ」

誠司は、自信ありげに言った。

「でも、どうやって……」

亜依が不安そうに言う。

「思い出してみなよ……って、亜依の場合はわかんないけどさ。俺の時は、近付くと石が光ったんだ」

そう言って、ピラミッドで石を見つけた時の話をした。

その話を聞いている間、亜依は浮かない顔をしていた。

「どうかしたか？」

誠司が心配になって訊くが、亜依は首を振る。

「そっか……」

亜依は、あの光景を思い出していた。あのピラミッドで亜依は、誠司と綾乃が抱きあっているのを見たのだ。そのあと、色々とその時の状況を聞いたが、それでもこの気持ちは抑えられずにいた。

「あたしの時も同じです」

無理矢理に笑顔を作って、ラミンの家の事を話す。

「そうなんだ……ラミンの所にね……俺も行きたかったな……」

誠司は悔しそうに言う。

「まあ、亜依も同じなら、大丈夫なんじゃないか？」

「そうですね」

二人は、辺りに注意しながら村を歩いていた。その様子は、傍目からは仲のいい若いカップルが散歩しているとしか見えなかった。

＊

陽が暮れるまで探したが、どこにもなかった。

「鬼無里じゃなくて、別の所なのかもな……」

と、怨めしそうに地図を見る。二人がいる辺りに九つの点がある。そのうちの八つは二人が持っている石である。

「でも、この辺に間違いはないんだけどな……」

そう、誠司の能力からしても、ここである事には間違いはないはずなのだ。だが、実際は見つける事ができずにいる。

「そろそろ陽も暮れてきましたし、帰りませんか？」

言われて誠司が腕時計を見ると、すでに七時を過ぎている。真夏という事もあって、実際の間隔と時間は一致しない。

「もうこんな時間か……そうだな」

そう言って、二人は北原家に帰ってきた。

「ただいま」

二人は声を揃えて言った。すると中から、

「おかえりなさい」

と、紗子の声が返ってきた。

二人は顔を見合わせ笑みを浮かべた。

(なんだか、本当の家に帰ってきたみたい)

(ずっと一人暮らしだったから、なんだか久しぶりだな……)

と、二人は温かい気持ちになっていた。

＊

ダイニングに来るように言われ向かうと、テーブルの上に様々な料理が並べられていた。

「すごいです……」

「すごい……」

亜依と誠司は、その料理に目を奪われた。肉じゃが、ほうれん草のお浸し、岩魚の塩焼き……など。決して珍しい料理というわけではないが、二人にとって最近では滅多に食べないものだった。亜依にとってはそれほどでもないが、一人暮らしの誠司にとっては本当に食べる機会が少ないものばかりだった。それらを見ていると、

「……ん？ どうしたの？」

茫然としている二人を不思議そうに見る。

「……ごめんなさい。なにか嫌いなものでもあった？」

と、心配そうに言う。

「……い、いえ」

亜依が慌てて否定する。

「それとも、和食より洋食の方がよかった？」

と、再び心配そうに言う。

「……そ、そんな事ないです」

今度は誠司が否定する。

「じゃあ、どうしたの？」

紗子は首を傾げる。二人は、じっとテーブルを見ている。

「……………」

紗子はますます不思議そうに見る。

「ホントに、嫌いなものとかない？」

もう一度訊く。亜依と誠司は無言で頷く。

「じゃあ……なにか、変なものでもあった？」

二人は首を振る。そして、亜依が口を開いた。

「……あの、なんだかすごく懐かしくて、美味しそうで……」

呟くように言う。目は、ずっと料理を見ている。

「……あ、そ、そうなの。さあさ、冷めないうちに食べましょ。一応、おばあちゃん仕込みだから、味の方は大丈夫だと思うから」

そう言われて、二人は並んで席に着く。その向かいに紗子が座った。

「いただきます」

「いただきます」

二人は、手を合わせた。

「どうぞ、召し上がれ」

紗子が笑顔で言う。

「いただきます」

亜依はもう一度言い、料理を食べ始める。

「美味しい」

と、次々と料理を口に運ぶ。両親と暮らしてはいるが、ここ数日は *h a r m o n i o* として旅をしていたので、きちんとした料理は久しぶりだ。料理を食べながら、亜依は両親の事を思い出していた。

一方の誠司は、ゆっくりと料理に箸をのばす。

「大丈夫よ、そんなに怯えなくても」

と、紗子が笑顔で言う。

「あ、いえ……なんだか久しぶりだから緊張しちゃって……」

と、誠司は照れ笑いを浮かべる。

「そうなの？」

「はい。ずっと一人暮らしでしたから、こういう料理を食べる機会がなくなって……しかも、出来合いじゃなくて、こういう手作りってというのは……」

誠司は、感動しながら料理を口に運ぶ。

「……ん、ん……美味しいです」

「ありがとう」

紗子は嬉しそうに言う。

「あ、あれ……」

誠司は頬を触った。

「どうしたんだろう……」

誠司の頬には涙が伝っていた。

「どうしたの？ 私の料理になにかあった？」

紗子は、心配そうに誠司の顔を見る。隣に座っていた亜依も心配そうに覗き込む。

「誠司さん……？」

「あ、ごめんなさい。肉じゃが食べてたら、なんだか急に……」

誠司は涙を拭う。

「その……なんて言ったらいいのか……なんだか懐かしくて……」

「さあさ、おかわりもあるから、いっぱい食べてね」

誠司は、優しく笑顔でそう言う紗子の優しさが嬉しかった。

その食事は、少ししょっぱい味がした。

＊

食事が終わり、亜依と紗子は居間にいた。誠司は、夜風にあたってくると言って庭に出ている。

「そう……見つからなかったの……」

村を探したが見つからなかった事を報告すると、紗子は残念そうに言った。

「でも、この辺なんでしょ？」

「……多分、そのはずなんですけど……」

亜依が不安そうに言う。確かに、だいたいこの辺なのだが、大雑把な地図なのでこの辺といえ
ば長野県全体くらいはある。それどころか、周辺の県が全て該当してしまう。

「他にアテはないんでしょう？」

亜依は無言で頷く。

「だったら、見つかるまでここにいていいから」

「でも……」

亜依が即座に遠慮するが、
「遠慮なんかしないでいいから。あなたたちには恩もあるし」
「でも……」

亜依は、申し訳なさそうに紗子を見る。紗子は笑顔で頷く。
「ありがとうございます。じゃあ、しばらくお世話になります」
「そんなに畏まらなくていいから、ね」
と、笑顔で言われると、逆に萎縮してしまう。
「はい」
亜依は笑顔で返した。

*

誠司は夜空を見ていた。
「綺麗だな……」
頭上には満天の星が瞬いている。
「あれが、ずっと昔の光だなんて、信じられないな……今、俺が生きている時間の光は、見れないんだもんな……見てみたいな……」
と、誠司は思い出したようにポケットから *rozario* を取り出した。取り出すと、*rozario* は互いに共鳴するように光っている。それを掌に乗せて空に掲げると、まるで新しい星のようだ。
「これが、俺が生きている時間の星の光だ」
キラキラとした純粋な目でそれを見つめる。全てを忘れて童心に戻ったような、そんな目だ。
「どこにあるんだ？ 教えてくれよ、な」
誠司は *rozario* に話しかける。しかし、返事をするはずもない。
「……なんて、これが返事するわけないよな」
と、残念そうに言う。
「ホント、どこにあるんだろうな」
誠司は空を仰ぎ見た。一つの光が流れ、すぐに消えた。

その夜、亜依は夢を見た。

真っ暗な一本道が続いている。両側には、世界をそのまま切り取ったかのように風景が並んでいる。よく見ると、それは全て絵だった。

亜依はゆっくりと歩を進める。そして、一枚の絵の前で足を止める。

その絵に描かれているのは一人の少女だった。その少女は黒い長袖の服を着て、鍔のある帽子を深々と被っている。そのため表情はよくわからないが、亜依は泣いているように感じた。根拠はないが、そう感じた。

亜依は、その絵にそっと手を触れた。すると、風景が変わった。そこは、どこかの街の通りだった。そして不思議な事に、絵の中の人たちが動き出した。まるで、テレビでも見ているかのように。

周りの人は、少女を避けるように通っていく。そして、通り過ぎると決まってこそこそとなにかを小声で話す。

「なんなのかしら、あれ」

「ホント、早くこの街から出ていけばいいのに」

と、婦人たちが話している。

少女には聞こえていた。しかし、聞こえていないフリをする。平静を装って歩く。

やがて、誰もいない通りまで来た。そこで初めて少女は駆け出す。

そして、自分の家に逃げ込む。

家に入り自分の部屋に入ると、少女はベッドに倒れ込んで涙を流す。

「……どうして……？ ……どうして？ どうして、こんな身体なの……？」

少女は今日も涙を流す。毎日、少女は涙を流す。

その光景を亜依はじっと見ていた。目を離す事ができなかった。

「もう、イヤ！ こんなつらい思いをするなら、いっそ……」

そう言って、少女は机の上にあったペーパーナイフを手にとった。そして、それを握ると目を閉じて祈る。

「生まれ変わる時は、普通の女の子として生まれてきますように」

そう呟いて、少女はナイフを自分に向けて振り下ろそうとした。

「ダメエーッ！」

亜依は思わず叫んだ。

「……………！」

少女は、その手を止めた。そして、部屋の中をキョロキョロと見回す。しかし、誰もいない。

「……………っ！」

少女はカシャリとナイフを落とした。

「……天使様？ 生きろとおっしゃるの？ 天使様は、私に生きろとおっしゃるの？」

亜依の声は確かに少女に届いていた。亜依の声は天使の声として少女に届いた。

「……わかりました。天使様が生きろとおっしゃるなら、私……生きます」

少女は宙を見て言った。亜依と視線が合った。

亜依は、安心してその場に座り込んだ。

亜依が絵から手を離れた瞬間、少女の絵に戻っていた。だが、それはさっきまでの絵とは違って、少女は薄紫のドレスを着て、幸せそうに微笑んでいた。

それを見て、亜依は笑みを浮かべた。

「よかった……」

自分の叫びが届いたのかはわからないが、少なくとも気持ちだけは届いたに違いない。そして、それが少女を救った……亜依はそう思っていた。

立ち上がると、亜依は再び歩き出す。両側の絵を見ながら、ゆっくりと歩く。

――校庭に一本だけ立っている桜の木の花びらが散っている絵。

――公園の噴水に座っている少女の絵。

――建設が中断された遊園地の絵。

――忘れ去られて荒れ果ててしまった稲荷の祠の絵。

――丘の上から街を見下ろした絵。

様々な風景がそこにはある。

亜依は、それらをじっと見つめていた。

「あっ……」

亜依は、一枚の絵の前で足を止めた。

「この絵は……」

その絵には、見覚えがあった。

――白い灯台が見える丘からの海の絵。

それは、父である富所史和が描いていたものだった。

亜依はその絵に触れた。

――サワサワ！

触れた瞬間、柔らかい風が吹き抜ける。まるで、その場にいるように風を感じる。

その包み込むような優しい風は、わずかに潮の香りがする。

亜依は目を閉じて、そこにある全てを感じていた。風の匂い、風の優しさ、風の色……全てを感じていた。

しばらく風を感じて、亜依はゆっくりと目を開けた。そこはやはり、あの真っ暗な道だった。

*

「……………」

目覚めた亜依は、夢の事を思い返していた。不思議な事に、全て鮮明に覚えている。

「あの夢……」

(なんだったんだろう……?)

亜依にとっては、すっきりとしない目覚めだった。

*

「お手伝いします」

翌朝、二人は紗子の手伝いをしていた。

「別にいいのに……」

そう言う紗子から無理矢理掃除道具を取り上げる。

「お世話になったんですから、このくらいはしないと」

「一宿一飯の恩義ってヤツです」

誠司も雑巾を手に、床を拭いていく。

「でも……あなたたち、探し物があるんじゃないの？」

「それは、これが終わってから探します」

「でも……」

「いいんですよ。誠司さんも言ってましたけど、一宿一飯の恩義ですから」

亜依が雑巾掛けをしながら言う。

「……ありがとう」

そう言って二人に任せ、紗子は自室でレポートを書く事にした。

紗子は今、この周辺の地層に関する事を研究している。地質学の六つの基本的研究分野の一つである地史学（層序学）である。ちなみに他の五つは、河川や氷河が陸地に与える影響を研究する一般地質学、岩石の性質と起源について研究する岩石学、化石の起源や分類などについて研究する古生物学、大気に含まれる元素分布や仕組みを研究する地球化学、地球の磁気や物理的特性について研究する地球物理学である。

紗子は机に広げた地質図を見ながら、地下でなにが起こったかを推測する。

それと並行するように、紗子は岩石学も研究している。岩石学は火成岩や変成岩、堆積岩などの研究である。

自分の一族は奇跡の石を受け継いでいかなければならないという事もあって、小さい頃から石と接する事が多かった。そのため、自然と石に興味を持つようになった。

なので、最初は岩石学のみだったのだが、地質学を一通り研究した時、岩石学には地史学の知識があった方がいいという事もあり、研究するようになった。実際は、基本的に一通りの知識は必要で、それに関連する天文学や生物学、物理学や科学分野の知識も必要となる。そのため、紗子は勉強をしておして再び大学へと入学した。そして、そのまま研究を続けている。

*

一方、一宿一飯の恩義で家の中を掃除している二人はといえば……。

「はぁ……疲れた……」

誠司は、慣れない事にばてていた。

「誠司さん、まだまだあるんですよ」

床にどっしりと座っている誠司をたしなめる。

「わかってるって。でもさ……この家、広すぎ」

「……確かにそうですね」

亜依も疲れた表情で言う。

「だろ？」

「……でも、お世話になりっぱなしはイヤですから。さあ、誠司さんも頑張りましょう」

亜依は誠司を奮い立たせる。誠司は、ゆっくりと腰を上げる。

「そうだな、もうひと頑張りしますか」

そう言うと箒を手に歩いていく。

「あ、ちょっと待って下さい」

亜依は慌ててバケツを手に追いかける。

*

「なあ、ここだったよな……」

誠司は、ある部屋の前で立ち止まった。

「そうです。確かこの部屋でした」

そこは、以前ここに来た時に事件が起こった現場だった。この部屋に鎮座されていた奇跡の石が消えたのだ。

現在、奇跡の石はそこにはない。

「あの石、どうなったんだろうな……」

「そうですね……」

「紗子さんに訊いてみるか」

そう言うなり、誠司は箒を置き、紗子の部屋を目指して歩き出した。

「え、あ、ちょっと。誠司さん……」

バケツを手に追いかける。が、すぐにバケツは必要ないと気づき、慌てて元の場所に戻り、誠司のあとを追う。

*

「紗子さん」

誠司が障子越しに言う。

「あら、お掃除ご苦労様」

そう言いながら障子を開けるが、

「……………」

誠司の真剣な顔に声を失う。

「……どうしたの？」

「紗子さん、奇跡の石はどこにいったんですか？」

誠司は直球に訊く。

「……それは……」

紗子は言葉を濁す。

「実は……」

そして、誠司の目をじっと見る。

誠司はゴクリと唾を飲み込む。

亜依はオドオドしながらそれを見ている。

「実は……」

「実は？」

「実は……この部屋にあるの」

「……………」

「……………」

二人は一気に緊張がほぐれ、言葉を失う。そして、理解するのに時間を要した。

「この部屋にあるって……」

「ほら、あそこに」

紗子は机の上を指す。そこには、緑色の石が置かれている。

「あ、ホントだ……」

「でも、どうしてここに？ あそこに置いておかないといけないんじゃ……」

誠司は思わず質問する。

「そんな事ないわよ。だいたい、おばあちゃんだって、あの石を持って縁側によくいたしね」

「そういえば……」

誠司は、以前にその写真を見た事があるのを思い出した。

「でしょ？ それに、研究資料でもあるわけだし」

「け、研究資料って……」

「あら、亜依ちゃん。前にも言ったけど、あの石にはアレキサンドライトって宝石が含まれているのよ。こんないい資料があるのに、使わないなんてもったいないじゃない」

「それは、そうかもしれないですけど……」

紗子の言っている事は正論だが、亜依はどこか納得できずにいた。

「ったく……心配して損しましたよ」

誠司はふてくされる。

「あら、心配してくれたの？」

「……そりゃ、まあ……」

「アリガトね」

「……………」

言われて、誠司は照れくさそうに俯く。

その時、

「あっ」

亜依はポケットを押さえた。

「どうしたんだ、亜依」

「こ、これ……」

そう言って、ポケットから r o z a r i o を取り出す。

「これは……」

取り出された r o z a r i o は光を放っていた。

そして、それに共鳴するように、

「奇跡の石が光ってる……」

と、誠司が言った。そう言った誠司も、自分が持っている r o z a r i o を取り出す。が、わずかに反応してはいるが、その光は亜依のもの比べると弱い。

「どうなってるんだ？ まさか、これが……？」

「ねえ、どうしたの？」

光る石と二人を見て、紗子が訊く。

「……紗子さん。あの奇跡の石が俺たちの探していた r o z a r i o だったみたいです」

そう言っている間に、亜依が奇跡の石に近付いていく。誠司と紗子は黙ってそれを見ている。

亜依が手をかざすと、石全体を覆っていた光が中心部に集束していく。

やがて、中心にある光が動き出す。それは、徐々に亜依の手に引き寄せられるように動く。

そして、奇跡の石から飛び出し、亜依の手に収まる。それと同時に光が消える。

「ど、どうなってるの……？」

紗子はただただ茫然としている。

「やった！ これで九つ目だ！」

誠司は飛び跳ねて喜ぶ。

「……………」

亜依はじっと自分の手にある r o z a r i o を見つめている。

まさに、三者三様の反応だった。

＊

二人は九つ目の r o z a r i o を手に入れた。という事は、もうここにいる必要がない。それが二人には淋しかった。

「紗子さん……」

亜依は泣きそうな瞳で紗子を見る。

「ほら、あなたたちはあなたたちのする事があるんでしょ」

紗子はそれを優しく励ます。

「紗子さん、お世話になりました」

「誠司君も頑張ってるね」

紗子は優しい笑みをおくる。

「いってらっしゃい」

紗子は二人にそう言って手を振る。

「紗子さん……」

その言葉に亜依は涙を流す。

「紗子さん、いってきます」

誠司の目にも涙が浮かんでいたが、それを気付かれる前に歩き出す。

「いってらっしゃい」

「いってきます」

「いってきます」

亜依は涙を流しながら、誠司は涙を見られないように後ろを向いて、それぞれ鬼無里村をあとにした。

*

鬼無里村から戸隠山に戻り、二人は次の行き先を考えていた。

「さて、次はどこに行く？」

誠司が地図を広げて言う。

「そうですね……やっぱり、ここじゃないですか？」

そう言って亜依が指したのは関東地方だった。

「どうして……って、訊くまでもないか。あとの二つはどこなのかわかんないからな……」

誠司は途方に暮れたように、欄外にある二つの点を見る。

「じゃあ、こっちだな」

「ええ」

そう言って、二人は『時の口』に入ってしまった。

7 詩稀を支配する者に仕える身として Ⅰ

吉住健一は自分の部屋にいた。その手には、あの懐中時計がある。

「もうすぐだ。もうすぐで……」

健一は懐中時計をギュッと握りしめる。

「さてと、これを彼らに渡して頑張ってもらわないとな」

そう言って、健一は街へと繰り出していった。

*

亜依と誠司は、コンクリートジャングルにいた。見渡す限り、高層ビルが建ち並んでいる。

「……………」

「……………」

二人はその光景に絶句した。

「……ここにあるんだよな」

「……多分」

「……………」

「……………」

二人はその途方もない広さに唖然としていた。基本的に大雑把な地図なので広いのは仕方ないが、今回はそれに加えてビルの高さというものがある。だいたい、ビル群の中から小さな石を探すなど、砂丘に落とした指輪を探すようなものだ。いくら光を発して反応するといっても、元が小さなものである。光も近付かないとわからない。それを頼りに探すには、ここは広すぎた。

そんな二人に近づく男がいた。男は二人を確認するとニヤリと笑った。そして背後に立つと、

「富所亜依と椎崎誠司だね？」

と、声をかける。

突然名前を呼ばれた二人は、ビクリと縮み上がる。そして、怯えた表情でゆっくりと振り返る。

「初めまして、だね」

男は動揺している二人を気にする事なく言う。

(ん……?)

ただ、誠司はその男をどこかで見た事があるような気がしてならなかった。しかし、思い出せない。

「初めまして。おれの名前は吉住健一。詩稀の能力者さ」

と、男——健一は淡々と言った。

それを聞いた二人は、驚きを隠せなかった。いきなり声をかけられたのもそうだが、それが詩稀の能力者と言われたのだから、その驚きも半端でない。

「そんなに驚かなくていい。おれは君たちの味方だ」

「味方……ですか？」

亜依が首を傾げる。

誠司は健一を警戒するようにじっと見ている。どこかで見た事がある男。そして、その時の印象は悪かった。そんな記憶がどこかにあるのだ。

(どこだ。どこで……)

誠司は記憶の糸を辿っていた。

(もうちょっとなんだ。もうちょっとで……)

しかし、あと少しというところで辿り着けない。そこで、誠司は健一に質問してみる事にした。それで、なにかがわかるかもしれないと思ったからだ。

「いくつか訊きたい事があるんですが、いいですか？」

誠司は思い切って言う。

「なにかね？」

健一は臆する事なく言う。何事にも動じない余裕がそこにはあった。

「詩稀の能力者と言いましたよね？ あなたの能力ってなんですか？ ……それと、どうしてここに？」

誠司は健一をじっと見たまま言う。健一はそれを聞いて笑みを浮かべる。それは、不敵なものではなく、素直に感心したような嫌味のない笑みだった。

「……なるほど、いい質問だ。いいだろう、答えよう。えっと、おれの能力はなにか、だったね。おれの能力は炎を操る能力。まあ、百聞は一見に如かず。こういう事ができる」

そう言って、指先から小さな炎を出す。

(……まさか)

それを見た誠司は、ある光景を思い出していた。それは、思い出すのもイヤな記憶だった。

(あの時の……)

だが、その能力を見た時、記憶の中の顔と目の前の顔が一致した。

「なるほど、思い出したよ。ずっと気になっていたんだ、どこかで見た事があるってね。なるほど、確かにあったよ。つい最近の事だったのに、すっかり忘れていた。そりゃそうだろうな。あれは何年か前の光景だったんだから」

「誠司さん……？」

淡々と語る誠司を不思議そうに見る。

「あれはどのくらい前かはわからないけど、面影は残っているよ。あんたは、あの時の子どもを大人にした感じなんだ」

そう言って、健一を睨む。

「俺はあんたが赦せない」

怒気のこもった低い声で言う。

「ほお……なにが赦せないのかな？」

健一は惚けるような感じで言う。

「あんただろ？ あの家を燃やしたのは」

亜依は、その誠司の言葉にハッとす。その光景を直接見た事はないが、話の流れでわかってしまう。

「あの家？」

「そうさ。あんたは満仲という家を燃やした。そうだよな」

「……………」

健一は絶句する。健一は初めて焦りを表に出した。だが、しばらくして平静を取り戻し、口を開いた。

「どうしてそれを？」

そこにはもう焦りの色はない。わずかだが余裕がある。

「そんな事はどうでもいいだろ」

「そうだな、どうでもいいな。だが、君は勘違いをしているな。おれは確かに満仲の屋敷を燃やした。だが、その時には既に満仲の一族は死んでいた。おれは、詩稀を支配する者に仕える身として、詩稀の歴史を消失させた久藤と貝通丸に制裁を加えたのみ。まあ、そこに余計なヤツもいたみたいだが。さあ、これが真相さ」

「……………」

誠司は、悪びれた様子のない健一の態度に言葉がなかった。

「そうそう、もう一つの質問にまだ答えていなかったね。どうしておれがここにいるのか。それは、知っていたからさ。君たちは必ずここに来るってね。この近くに鍵がある。そして、この辺りに時空を移動する扉があるってね。できるなら今すぐ鍵をもらいたいところなんだが、どうもそれは全て揃わないと意味がないようなんでね。今はまだ預けておこう。だが、時が来れば……………」

「質問を追加させてもらう」

健一の言葉を誠司が遮る。

「なにかな？」

「あんたは、どうしてこの場所を知っていた。どうして俺たちがここに来ると知っていた。そして、鍵を集めてどうする気だ」

「なるほどね。もっともだね。それは……璃織魚様のためさ」

(そして、おれの目的のため)

と、心の中で付け加える。

「璃織魚様……？ 確か、D i oの能力者だったな。それでか……。あんたは、D i oを解放してどうする気だ？」

「やれやれ、質問が多いな。まあ、いいだろう。おれは、璃織魚様をあそこから出してさしあげたい。そして、詩稀村の争いにピリオドを打ちたい。これで満足かね？」

「……なるほどね。要は藻音時弥と同じだろ？」

「君から見ればそうだろうね。だが、おれはアイツと同じにされたくはないな」

そう言って、ポケットを探る。

「そうそう、君の質問のお蔭で本題を忘れるところだったよ。忘れないうちに渡しておこう。質

問は、その後にでも聞いてあげるよ。さあ、これだ」

そう言って、ポケットから懐中時計を出す。

「それは……」

「ああ……」

誠司と亜依は言葉を失う。

「そうさ。君たちが持っていた懐中時計さ。さあ、これを使って、時間を越えて鍵を集めてもらおうか」

健一はそれを無理矢理亜依に持たせる。

「さて、質問は？」

「……………」

しかし、誠司はなにも言わない。いや、あまりの事になにも言えないのだ。

「質問はないようだね。まあ、頑張ってくれたまえ」

そう言うと、健一は人混みに消えた。

残された二人は、ただただ立ち尽くしていた。

その時、二人の前に『時の口』が現れた。通常では有り得ない事だ。

二人は顔を見合わせる。

「どうする？」

「どうしましょう？」

そして、しばらくの沈黙の後、

「行こう」

「はい」

二人は『時の口』へ入った。

＊

街の雑踏の中を一組の少年少女が歩いていた。一見すれば普通だが、少女は人間ではなかった。

「なあ、ミィユ」

「なんですかあ、ご主人様あ」

ミィユと呼ばれた少女はゆっくりとした口調で話す。

そう、この少女は天使見習いなのだ。一人前になるための実習として人間界に来ているのだ。ここでの行いによって、彼女は天使にも悪魔にもなれる。いまはどちらでもない、強いて言えば中性だ。

「本当に、なにかあるのか？」

「はあい」

少女は屈託のない笑顔で答える。

「あの時みたいな感じがするんですう」

「あの時……ね」

少年はミュウが言う「あの時、の事を思い出す。

少年は、過去の世界からやって来たという男女に会った。そして、一緒に f o r s t r e k i というものを探した。結局それは見つからなかった。

(楽しかったからな……)

少年は空を見上げて笑みを浮かべた。

(会えるなら会いたいな……)

「ご主人様あ？ どうしたんですかあ？」

じっと空を見上げている少年を不思議に思い、ミュウも空を見上げながら言う。

「なんでもないさ。さあ、行こうか」

そう言って、少年は歩き出す。

「はあい」

ミュウは笑顔で後を追う。

少年は少しだけ期待していた。

あの時のようにまた出会える……と。

そして、その願望は叶う事となる。

それは運命の悪戯のようでもあり、ただの運命のようでもあった。

強い運命が、再び二組を引き合わせる。

*

亜依と誠司は『時の口』を通り、世界を移動した。そこは公園だった。

(ん？ ここって……)

誠司はこの場所を知っているような気がしていた。

亜依も同じで、記憶の糸を辿りはっきりさせようと辺りをキョロキョロと見回していた。

「あの……誠司さん」

亜依は思い切って口を開いた。

「ん？ なに？」

「ここって、見た事ありませんか？」

亜依は思っていた事をはっきりと誠司に言った。

誠司は少し驚いて、

「亜依もそう思うのか？」

その言葉に亜依は驚く。

「せ、誠司さんもなんですか？」

「あ、ああ……」

二人は互いの顔を見合わせる。

「なあ、ここがどこだか思い出せないか？」

亜依は力無く、申し訳なさそうに首を振る。

「あたしも思い出そうとはしているんですけど……」

力無く言ったその言葉に、誠司は胸が苦しくなった。

まさにそんな時だった。

「あっ……」

どこからか声がした。

亜依と誠司は同時にその声の方を向く。そして、同時に目を丸くする。そして、今までの疑問が一気に解消する。

「紅祐……」

「ミユちゃん……」

それは、二条紅祐と見習いのミユだった。

二組は、互いの姿を確認して駆け寄る。

「よお、久しぶりだな、紅祐」

「久しぶりです、誠司さん」

「久しぶり、ミユちゃん」

「お久しぶりですう、亜依さん」

それぞれがそれぞれに再会を喜ぶ。

「ん……？」

しかし、誠司は今の中に引っかかるものを感じた。

「なあ、紅祐って俺のこと誠司さんって呼んでたっけ？」

確かに以前はタメ口だった。だが、今はどうもそうではない。

「どうしたんだ？」

誠司は率直に疑問をぶつけた。

「そ、それは……」

紅祐は答えに困る。

紅祐はあれからこの時代の誠司と会っている。そのため、目の前の誠司がいくら自分と同年代だとしても、タメ口で話すのはためらわれた。

「まあ、いいじゃないですか」

と、言うが。

「いや、別にいいんだけどさ。……なんだか、紅祐らしくないっていうか、気持ち悪いっていうか……」

「まあ、気にしない、気にしない」

「ああ、そうだな」

正直、気になるが、気にならないと思いきむ事にした。

「そうですって」

という紅祐の言葉に、どこかむずがゆい誠司だった。

*

「そろそろ会ってる頃かな？」

ソファに座り、コーヒーカップを片手に男が言った。

「そうですね、そろそろでしょうね」

その向かいに同じように女性が座っている。

「父さん、どうしたの？」

「唯依か。今日はな……」

男は自分の娘に懐かしそうに昔話を始めた。

＊

四人は紅祐の家に向かっていた。

久しぶりの再会という事で、のんびりと過ごそうという事で意見が一致したのだ。

亜依と誠司は内心急ぎたい思いもあったのだが、それでも紅祐と出会えた喜びの方が大きかった。

「あれは……誠司さんと亜依さん……」

それを、遠くから見ている男がいた。しかし、四人がその存在に気付く事はなかった。

何事もなく、四人は紅祐の家に到着した。

＊

「ふうん、そうなんだ……」

誠司から昔の事を聞いた唯依は、早速その現場に向かっていた。もちろん弟の誠也には内緒だ。何故なら、誠也は能力者ではない。そんな誠也にこの事を説明する事は厄介以外のなにものでもない。なので、唯依は一人でそこに向かっている。

「それにしても、父さんと紅祐が知り合いだったなんてね……」

道すがらブツブツと独り言を言う。その表情は笑顔で、とても楽しそうにしている。

「でもやっぱり、驚かすのはいけないよね。だから、こっそりと……」

と、にやりと笑う。

「さてと、急ごうっと」

自分にそう言うと、唯依は駆け出した。

＊

紅祐の部屋で、誠司は紅祐に今回の目的を話した。そして、できる事なら前回のように協力して欲しい、とも頼んだ。

「なるほどな……」

紅祐は誠司の話を聞いて頷いた。しかし、いまいち理解しきれていない。

「……………」

ミユはそれをずっと黙って聞いている。紅祐と同じように腑に落ちない表情だが、その理由は紅祐とは全く違う。

紅祐はただ単に話が理解できていないだけだが、ミユは天使になりたい見習いなのだ。天使とは、昔から神の使いだと言われている。天使になりたいミユだ。神の能力を持つのが人間の少女だと言われれば、困惑するのも無理はないだろう。

「どうしたの、ミユちゃん」

そんなミユに気付き、亜依が優しい声をかける。

「な、なんでもないですよ。ちょ、ちょっとお、むずかしいお話だったのでえ」

と、あたふたと慌てて誤魔化す。

「……ん？」

と、誠司はミユを見つめた。

「な、なんですかあ？ ほ、本当になにもないですよ」

「そういえばさ、ミユって天使見習いなんだよな」

「そ、そうですけどお」

落ち着こうとするが、ミユはなかなか落ち着けない。どうしても、少しどもってしまう。

「ミユって、ここに来る前に天界にいたんだっただよな？」

亜依は誠司の言いたい事がわかりハッとする。

「そうですけどお……」

ミユは、首を傾げて不思議そうな顔をする。なにをいまさらといった感じだ。

「じゃあ、ミユはなにか知らないか？」

誠司はミユに訊く。

「そうだよ。どうして今まで気付かなかったんだ。神様＝天界。天界＝ミユが生まれた場所。ミユが生まれた場所＝ミユ。つまり、神様＝ミユに訊け……って事だよな」

と、紅祐はわけのわからない方程式を完成させる。

「で、でもお……。天界はよくわからないんです」

と、ミユが小声で申し訳なさそうに言う。

「え？ ミユ、天界の見習い学校で勉強したんじゃないのか？」

紅祐にそれを言われ、ミユは涙を浮かべる。

「ごめんなさいです。実はあ、私は落ちこぼれさんでえ、ドジドジさんでえ、ぽけぽけさんだったです」

と、ポロポロと涙を流しながら言う。

「だからあ、わからないんです。役立たずさんでごめんなさいです」

「い、いや、別にそんな事は……」

慌てて誠司はフォローしようとするが、いい言葉が浮かんでこない。ただ、どうにかしようとあたふたしているだけだ。それは紅祐も同じだった。

「ミユちゃん、そんな事ないよ。ミユちゃんはちゃんとみんなの役に立ってるよ」

と、ミユの肩を抱きながら亜依が優しく語りかけるように言う。

「……本当ですかあ？」

「本当よ」

優しい笑みでミユを見つめる。

「……本当に本当ですかあ？」

「本当に本当よ」

「それなら嬉しいですう」

と、涙でクシャクシャになった顔で笑顔を作る。

それを見て、紅祐と誠司はホッと胸を撫で下ろす。

「泣いたらすっきりしたですう」

そう言って笑顔を浮かべるミユ。しかし、問題は振り出しに戻っただけで、これっぽっちも進んでいない。

「で、だ」

仕切り直すように誠司が言う。

「ミユちゃんがわからないとなると……手がかりなしってか……」

と、ため息まじりに呟く。その時、

「はわあーっ！」

ミユが奇声を発する。

「ど、どうしたんだ、ミユ」

紅祐はミユを見る。

「あのお、今さっき思い出したんですう」

「思い出したって、なにをだ？」

「はあい、ご主人様あ。あのですねえ……」

「ああ、もっと早口で頼む」

ミユのゆっくりとした口調に耐えかねて誠司が口を挟む。

「ごめんなさいですう……」

ミユは申し訳なさそうに頭をペコリとさせ、何度も謝る。結果、これによってさらに話が遅れる。

「わ、わかったから、続きを頼む」

「はあい」

ようやく話が元に戻る。

「あのですねえ。むかあし、サレン様から聞かされた事があるんですう」

「なあ、そのサレン様ってのは誰だ？」

その名前は紅祐も初耳だった。

「サレン様はあ、紅の羽の大天使なんですう。私の憧れなんですう」

そう言うミユの目は、今まで見た事がないくらい輝いていた。

「私はあ、サレン様みたいな天使になりたいんですう」

ミユはうっとりとしたような、キラキラとした目で遠くを見つめながら言う。

「まあ、それはそれとして、結局のところどうなんだ？」

誠司が言う。しかし、ミユは遠くを見たままで動かない。どうやら声も聞こえていないようだ。

「おい、ミユ」

見かねた紅祐が身体を揺するが、ミユはなんの反応も見せない。ただただ遠くを見ている。

「おい、ミユってば」

紅祐は少し強めに揺する。

「は、はわわあ……どうしたんですかあ、ご主人様あ」

と、すっとぼけた表情で言う。どうやら、自分が遠い世界に旅立っていたのには気付いていないようだ。

「まあいい。で、そのサレン様からなにを聞かされたんだ？」

紅祐がミユの肩を掴んだまま訊く。

「それはですねえ、天界にあるオルゴールなんですう」

ミユは得意満面に言う。

「オルゴール？」

その予想もしなかった事に誠司は首を傾げる。それは亜依も紅祐も同じだ。

天界などというあまりにも現実離れした場所にオルゴールとは、なんとも不思議な感じがする。その物自体は不自然でなくとも、組み合わせ次第では奇妙な物となってしまう。

「そのですねえ。そのオルゴールには不思議なあ、綺麗な石があつてえ、不思議な力があるらしいんですう」

「不思議な石？ それって……」

誠司は亜依を見る。亜依は黙ったまま頷く。

「なあ、その石を持ってくる事は出来ないのか？」

誠司はミユに訊く。

「……はううう……難しいかもですう。見習いはそう簡単には天界には行けないんですう」

ミユは申し訳なさそうに言う。その態度は萎縮しきっていて、見ている誠司たちの方が申し訳なく思えてくる。

「そう……なのか」

誠司は身体中の力が抜けるのを感じた。

「天界への扉がわからないんですう」

見習いは天界へ戻ろうと思えば戻る事ができる。しかし、見習いが地上に降りるのは実習のようなものだ。天界としてはあっさりとして帰ってこられては意味がない。そこで、天界への入口は閉じられている。

「じゃあ、扉があれば行けるんだらう？」

誠司の頭にある場所が浮かんだ。

「そうですけどお」

「じゃあ、ミユに持ってきてもらおうじゃないか」

「でも、誠司さん……」

紅祐が遠慮がちに言う。

「扉だったらあるじゃないか」

言われて、亜依は思い出した。それからしばらくして、紅祐も思い出す。

「そうか、あそこがあるんだ」

紅祐はポンと手を叩く。

「そういう事」

「なんだか、盲点でした。すっかり忘れてました」

亜依は感心したように言う。そう言われて、誠司は少し胸を張る。

「というわけだ。さっそく行こうか」

「そうですね」

「行きましょうか」

と、亜依と紅祐が賛同するが、当のミユはその場所がまだわからずにいた。

「ほら、あの場所だよ」

紅祐が言うが、指示語ではミユは理解できない。ミユはコテツと首を傾げる。

「憶えてないか？ ミユが扉を開いたじゃないか」

ミユはしばらく考え込んで、

「ああ、あの場所ですかあ」

ようやく、ミユも理解した。

「そうそう」

紅祐は嬉しそうに頷く……が、

「……それってえ、どこですかあ？」

と、ミユはてへっ……と、笑顔で訊き返す。

「って、おい。もしかして、まだわかってないのか？」

誠司が少し強めの口調で言う。

「はわわわあ……ごめんなさいですう」

ミユは目を潤ませながら必死に謝る。

「誠司さん、そんな風に言ったら可愛そうじゃないですか」

亜依が言う。

「ああ、悪い。ミユ、ごめんな。そんなつもりじゃないんだ」

と、誠司なりに必死に謝る。

「はにゅう～」

ミユは涙を溜めた目で紅祐を見る。紅祐は笑顔で頷く。それを見て、ミユは笑顔を取り戻した。

「あのね、ミユちゃん」

ミユが元に戻るのを待って亜依が言う。

「二人が言ってる場所ってというのはね、前に誠司さんとあたしと四人で行った祠の事なの。ほら、あの不思議な紅い石を……」

と、亜依が話している途中で、

「はわあ〜！」

と、ミユは奇声を発する。

「思い出しましたあ。そうですう、そうですう。あそこには扉があるんですあ」

と、今度こそ本当にミユも理解した。

「やっとかよ。まあいいや。とりあえず、そこに行ってみようぜ」

「そうですね。行こう、ミユ」

「はいですう」

こうして、四人は祠に向かった。

7 詩稀を支配する者に仕える身として II

誠司、亜依、紅祐、ミユの四人は、あの祠にやってきた。

「変わってないな……」

誠司は思わず呟く。

その祠は、誠司と亜依が以前に来た時となんら変わっていなかった。ミユが扉を開いた時のままで、祠の扉は風に吹かれてキィキィと揺れている。

「それはそうですよ。あの時からそれほど経ってませんから」

言われて、誠司と亜依は懐中時計を見る。懐中時計の時計の部分には蝶番があり、そこを開けると今いる場所の年月日が表示されているのだ。

前回、二人がここに来たのは、『セイレキ 2021/07/21』だった。

そして今回は……『セイレキ 2012/08/27』だった。

どうやら、前回から一月ほどしか経っていないようだ。

「そう……なのか……？」

と、誠司は首を傾げる。誠司も亜依も、前日の日にちを憶えていない。しかし、それも無理はない。誠司と亜依が再び旅に出たのは、前回から四ヶ月ほどが経った頃だ。それも、それぞれが綾乃と舜平と出会ったのが、だ。二人が実際に再会したのはもう少し経ってからなので、いくらなんでも記憶は薄れてしまっている。

「まあ、それはいいとして」

と、誠司はミユを見る。誠司に見られたミユは、はにゅ？ と首を傾げる。

「ミユ、そのオルゴールの石とやら、頼めるか？」

「はいですう」

ミユは強く頷く。

(なんだか、心配だな……そうだ)

と、どうにも心配な誠司は、名案を思いついた。

「俺たちも天界に行けないのか？」

そんな誠司の言葉に驚いたのは、意外にも亜依だった。

「ええっ！」

急に大きな声を出した亜依に、誠司が驚く。

「そんなに大きな声を出して、どうしたんだよ」

「どうした……って、天界っていわゆる `あの世、じゃないんですか？」

と、亜依は震えた声で言う。

「やっぱ、そうなのか？」

と、誠司はミユを見る。ミユはフルフルと首を振る。

「違いますよお。天界は天使の世界なんです。ああ、悪魔さんや墮天使さんもいますけどお。私は会った事はないですけどお、神様もいるそうです。だから、あの世とは違うんです」

「だってさ」

と、誠司は亜依を見る。

「そ、そうなんだ……」

と、亜依は安心して力が抜けたのか、その場にへたりと座り込む。

「で、俺たちは行けないのか？」

誠司は最初の質問に戻す。

「わからないですう。今までにい、人間界の人が来たというのは学校でも習いませんでしたからあ」

「まあ、当然だろうな」

と、自分で質問しておきながら勝手に納得する。

「という事はさ、俺たちが最初って事だよな」

誠司は嬉しそうに言う。

「ええ……でもお……」

「行った人間がいなくて事は、行けるか行けないかってのはわからないって事だろ。それに、俺たちの能力はあらゆる世界に行けるものだ。という事は、行ける可能性が大って事だ。だろ？」

と、誠司は行く気満々だ。

たしかに、理屈では正しい。天界も数多ある世界の一つなのだ。

「というわけで、行こうか、ミユ」

「ちょっとまって下さいよ。じゃあ、俺はどうなるんです？」

と、紅祐が不安そうに言う。紅祐にはそんな能力はない。ただの天使が見えるだけの普通の人間だ。

「そうだな……留守番だろ、やっぱ」

と、誠司はいともあっさりと言い放つ。

「……やっぱり、そうなるんですね」

と、紅祐は残念そうに肩を落とす。

「じゃあ、あたしも待ってます」

「どうして？ 行こうぜ。天界なんて、滅多に行けるものじゃないだろう」

「だって……」

亜依は俯く。

「まあ、無理にとは言わないけど、亜依は本物の天使に会いたくないか？ それに、天使の世界って見たくないか？ 興味ないか？」

と、諭すように誠司は言う。

「あのう……」

と、ミユは言いにくそうに呟く。

「なに？」

「ああ、いええ……なんでもないでう」

と、ミユは口をつぐんだ。

ミユが言いたかったのは、自分も一応は天使である……という事だった。しかし、まだ見習いという事で、言うのをためらったのだ。

「わかりました。行きます」

しばらく考えた末、亜依は天界に行く事を承諾した。亜依とて、天使やその世界に興味がないわけではない。ただ、どうしても死者の世界というイメージがあったのでためらわれたのだ。

「じゃあ、行こうか」

誠司は元気よく言った。

「はあい」

それに続くようにミユが言う。

「行きましょうか」

迷いを吹っ切った亜依もそれに続く。

「……………」

しかしただ一人、紅祐だけは違った。紅祐だけは行く事ができない。必然的に留守番という事になる。

「ご主人様あ……」

ミユはそんな紅祐を見て哀しそうな顔をする。紅祐を幸せにするために来たのに、自分が淋しい思いをさせてしまっている。ミユは心が痛んだ。

「俺は別にいいから。ミユ、これはお前はお前にしかできないんだ。だから、しっかりな」

と、ミユの哀しそうな顔を見て、紅祐は強がって、淋しそうな素振りを見せないように努める。

（すまないな、紅祐）

誠司は心の中で謝罪する。ここで言葉にしてしまうと、紅祐の気持ちを踏みにじる事にもなりかねない。なので、誠司はそれを口にはしなかった。

「ほら、さっさと行けよ、ミユ。二人とも急いでるんでしょ？ だったら、これ以上のんびりしてられないんじゃないんですか？」

「あ、ああ。そうだな」

紅祐に促されるように、誠司は一步を踏み出す。

亜依も紅祐の気持ちを察して、

「行きましょう、ミユちゃん……」

と、亜依は紅祐を見たまま動かないミユの肩を持つ。

「でもお……」

ミユは淋しそうに紅祐を見る。

「行け！ 行くんだよ、ミユ！」

紅祐は、なかなか行こうとしないミユを叱咤する。

「ほら、行くんだ」

紅祐は笑顔で優しく言う。

「わ、わかりましたあ……」

後ろ髪を引かれつつも、ミユも行く事を決意する。

「ご主人様あ、すぐに戻ってきますからあ、待ってて下さいねえ……」

ミユは淋しそうに振り返る。

「ああ、わかった」

紅祐は笑顔で手を振った。

「行こう！」

誠司の声をきっかけに、ミユを先頭に三人は『時の扉』に入っていく。

「うわあ……」

誠司は感嘆の声を上げる。

「すごい……」

亜依も感嘆の声を上げる。

『時の扉』に足を踏み入れた瞬間、一行の目の前に広がったのは、虹色に輝く光景だった。そこには、上も下も右も左もなかった。ただ、虹色に光る空間が広がっていた。

「こっちですう」

ミユが二人を見て言う。

「ちゃあんとついてきて下さいねえ。でないとお、迷っちゃうかもですう」

と、さり気に大変な事を言う。

「あ、ああ。わかった」

それを聞いて、誠司は慌ててミユの側による。亜依も同じようにする。

三人が寄り添ってしばらく歩くと、小さな扉が目の前に現れた。

「ここですう」

三人は、その扉をくぐった。

*

扉をくぐり、ミユと亜依と誠司は天界にやってきた。

亜依と誠司にしてみれば初めてだが、ミユにとっては生まれ故郷だ。同じように目を輝かせているが、その質は全く異なるものである。

「すごい……」

亜依は目の前の光景に目を輝かせている。目の前には一面の花畑が広がっているのだ。

「ここはあ、花の大地みたいですよ」

ミユが嬉しそうに言う。

「花の大地？」

と、誠司がすかさず訊く。

「そうですよ。花の大地はあ、私が生まれた場所なんです」

「ミユが、ここで……」

誠司は改めてその場所を見渡す。視界いっぱい色とりどりの花が咲き誇っている。

「そうです。私が生まれたのは、あそこです」

と、ミユは遙か彼方を指す。そこには、そこからでもわかるような、大きなバラがあった。しかし、花は閉じている。

「あれって、バラだよな？」

誠司が確認するように訊く。

「そうですよ。私は、あのホーリーローズから生まれたんです」

と、それを聞いた誠司の思考が一時中断される。

「……………って事は、ミユって、花から生まれたのか？」

と、驚きの声を上げる。

「あっ……」

亜依もそれを聞いて初めて気付く。

「じゃあ、天使って花から生まれるの？」

*

と、三人がそんな話をしている頃、留守番の紅祐は祠の前でじっと待っていた。と、そんな紅祐の側に少女が歩み寄る。

「へえ～……これが『時の扉』か……」

紅祐は驚いて声の方を見る。

「……っ」

そして、もう一度驚く。

「ゆ、唯依……」

そこにいたのは、椎崎唯依だった。

「ど、どうして……ゆ、唯依がここに……？」

と、紅祐は驚きのあまり上手く話せない。唯依はそんな紅祐を見てクスリと笑い、

「いいじゃない。娘のあたしが父さんと母さんの勇姿を見に来ても」

と、笑顔でサラッと言う。

「だけどな、会っちゃったらマズイんじゃないのか？」

「大丈夫。そんなヘマはしないから」

と、そこで言葉を切って、唯依は祠を覗き込む。

「ねえ、ここに『時の扉』ってというのが開いてるの？」

と、紅祐に訊く。実のところ、唯依にはその存在が見えていない。ただ、そこにあるという事を聞いただけなのだ。

「さあな」

紅祐は素っ気なく答える。見えていないのは紅祐も同じなのだから仕方ない。紅祐にしてみれば、二人は突然、祠に消えたようにしか見えないのだ。

「やっぱり、時空の能力者しか見えないんだ……」

と、唯依は淋しそうに呟く。

「ああ～あ。あたしも天界って行ってみたかったな……」

と、空を見上げて呟くのだった。

7 詩稀を支配する者に仕える身として III

一方、天界の三人はそのオルゴールがある場所にやってきていた。そこは教会のような建物だった。

「ここに、オルゴールがあるんです」

と、ミユがゆっくりと建物の扉を押し開けた。

建物の中は、普通の教会の様をしていた。ただ違うのは、十字架やキリストがなく、ステンドグラスもはまっていないという点である。しかし、ステンドグラスははまっていないが、周りに咲き誇っている花々が光を発して、それが建物のガラスをステンドグラスさながらにしている。

奥には、祭壇が設けられており、そこには天井から一筋の光が射し込んでいる。

ミユはゆっくりとその祭壇に歩を進める。亜依と誠司は建物に見とれてその場を動く事ができなかった。それほどまでに、魅了するものが建物にはあった。

ミユは祭壇の前に立ち、深く一礼する。

「お久しぶりです、ダウ様あ」

と、誰もいない場所に向かって言う。すると、その空気が歪み、人の形を成した。彼こそが緑の羽の大天使ダウだった。ダウは顎髭を撫でながら、

「花の期の見習いミユか。久しぶりだな」

と、優しい目をして言う。それにミユは、

「はあい、お久しぶりです」

と、笑顔で応える。

「しかし、相変わらずだな」

と、ダウは茫然としている亜依と誠司を見た。

「人間がここに来るのは初めてだな」

ダウは二人をじっと見る。しかしそれは睨んでいるのではなく、見定めているといった印象だ。

「……なるほど」

しばらく二人を見ていたダウは、ゆっくりと頷く。

「お前たち……」

ダウの言葉に二人は固まる。鉄柱で貫かれたかのように身体が動かない。二人はゴクリと唾を飲み込む。

ダウはそんな二人を見据える。それは、先程とは違い、険しさがあった。

「お前たち、即刻この地より去れ！」

ダウは、冷たく言い放った。

この言葉に一番驚いたのはミユだった。ダウなら快く迎えてくれると思っていたミユにとって、これほどショックな事はない。

「ダウ様あ……」

ミユは懇願するような目でダウを見る。しかし、ダウはミユを見ようとはしない。
「ここはお前たち人間が来る場所ではない。天界は人間に侵されぬ絶対不可侵の場所。ましてや、見習いが転生した人間でも、見習いと一緒に暮らしているわけでもないただの人間が来るような場所ではない」

「……………」

その言葉に、誠司はなにも言い返せなかった。いや、言い返す気も起きなかった。
(そうだよな、そうだったんだよな……)

と、誠司は全てを受け入れていた。予想できたはずなのに、好奇心が上回りその可能性を無視していた。そんな自分を素直に反省していた。

「どうやら、わかったようだな」

ダウは誠司の顔を見てそう判断した。

「そういうわけだ。お前たちはこの石を持ってさっさとここを去れ！」

「……え？」

「……えっ？」

二人は同時に声を出した。二人はその言葉をすぐに認識できなかった。

「聞こえなかったのか、この石を…… r o z a r i o を持って、さっさと元の世界へ帰れと言ったのだ」

そう言ったダウの表情は柔らかかった。

「ありがとうございます」

「本当にありがとうございます」

二人は深々と頭を下げた。そこへ、オルゴールを持ったミユが歩み寄る。

「はあい、どうぞですう」

誠司がオルゴールの石に触れた瞬間、それが光を発した。

「間違いないよ。確かにコレは r o z a r i o だ」

二人は、十個目の r o z a r i o を手に入れた。残す r o z a r i o は、あと二つ。

*

(やばいかも……)

祠の前にいた唯依は、なにかを感じた。能力のない普通の紅祐とは違い、唯依も能力者だ。はっきりとまではわからないまでも、うっすらと感じるものがある。

「じゃあね」

と、それだけを言い、紅祐と別れた……次の瞬間、祠からミユが姿を現した。それに続いて、亜依と誠司も現れる。

(唯依のヤツ、ギリギリじゃねえか)

と、紅祐もホッとすする。しかし、唯依がわざとギリギリまでいたという事を紅祐は知らない。ちょっとした意地悪だ。知らぬが仏というヤツだ。

「ご主人様あ、ただいまですう」

と、ミユは紅祐に抱きつく。

「お、おい、やめろって……」

紅祐は恥ずかしそうに引き剥がそうとする。

「照れるな、照れるな」

誠司はそれを茶化す。

「誠司さん……そんな事、言わないで下さいよ」

紅祐はなんとかミユを引き剥がす。

引き剥がされたミユは、不服そうに頬を膨らませる。

「紅祐くん、ミユちゃんは淋しかったんだから、少しくらいいいじゃない」

「そうですよお。ミユ、淋しかったんですからあ」

「なにが淋しいだ。ほんのちょっとじゃないか。一時間やそこらで淋しくなってどうするんだよ」

そう言った紅祐に亜依が、

「そうかな……？ たったそれだけの短い時間かもしれないけど、そんな短い時間でも離れていたら淋しく感じるなんて、ミユちゃん、よっぽど紅祐くんの事が好きなんじゃないの？ それだけ紅祐くんが好きだって事だと思うよ。そんな風に無下にしたらミユちゃんが可愛そうだよ」

「そうですう。亜依さんの言う通りですう。ミユ、ご主人様の事が大好きなんですう。だから、ずっと一緒にいたいんですう。離れ離れは淋しいんですう」

それを聞いて、紅祐は顔を赤らめる。

「ミユ、ご主人様の事が大好きなんですう」

「バカ。恥ずかしい事、言うなよ」

紅祐は顔を真っ赤にして言う。

「照れるな、照れるな」

「誠司さん……」

「じゃあ、俺たちは急ぐからさ。あとはご自由に」

「そうね。あたしたちがいたらお邪魔だろうし」

亜依も悪戯な笑顔で言う。

「そんな……亜依さんまで……」

最後の頼みの綱と思っていた亜依にまで言われて、紅祐は味方を失う。

「じゃあな」

「じゃあね」

「ちょ、ちょっと……」

すぎるような紅祐を後目に、亜依と誠司は『時の扉』に入った。

「誠司さん……。亜依さん……」

紅祐の声は虚しく響くだけだった。

「ったく、なにやってんのよ」

そこへ、再び唯依が戻ってきた。

「ゆ、唯依。どうしたんだよ」

突然現れた唯依に動揺する。

「どうした、じゃないわよ。ずっと見させてもらったの。ラヴラヴね、あんたたち」

と、唯依も茶化すように言う。

「うるさいな。……ったく。ホント、親子だよな……」

と、ぼやく紅祐。

「なんにしても、頑張ってもらいたいんだけどな、未来を変えないためにも」

「そうね。父さんと母さんには色々と頑張ってもらわないと。でないと、あたしが存在しなくなったら困るからね」

「なんだか、意味深な発言だな」

「いいじゃない」

「がんばれですう」

三人は、ずっと『時の扉』を見ていた。

想いは一つ。二人の目的達成だった。

亜依と誠司が未来へと旅立っていた間。現代ではある事件が起こっていた。

ついに、藻音時弥自身が動き出したのだ。

「なるほどな……。ここにいたのか」

時弥はある病院の前にいた。その建物を見上げ、口許を歪める。

「さて、誰に犠牲になってもらうかな」

嬉しそうに呟きながら、時弥は病院内へと入っていった。

*

病院内は静かだった。

病院などには来ない時弥は、これが普段からそうなのか、今日は特別なのか、その判断に困っていた。

結局、判断できぬまま奥へと進んでいく。その先には特別室しかない。なので、普段は入る人がいない場所だ。

しかし、看護婦たちは誰一人としてそれに気付かない。いや、気付いた看護婦が一人だけいた。

倉沢俊昭を担当している看護婦、浅井若菜である。普段から特別室への訪問者には気を付けるよう彼の担当医である吉住可南子から言われていたので、どんなに忙しい時でも注意するようにしていた。

「すみません。どちらの患者さんへのお見舞いですか？」

若菜は時弥に近付き訊く。

今までに何度も繰り返した行動だ。いくつかある特別室には他の患者さんもいる。今まではそれらの患者さんのお見舞いに来た人たちばかりだった。

若菜は今回もそうだと思っていたが、可南子に言われているので、念のために訊いているのだ。

「この病室に倉沢という男が入院しているそうですが、彼の病室はどこですか？」

時弥は丁寧な口調で言う。

それを聞いて若菜は、

「この人……吉住先生に報せない」と

と、青ざめて呟いた。

しかし、それが間違いだった。

「吉住……？」

時弥はその名前を聞き逃さなかった。

「今、吉住と言ったな」

時弥は表情を一変させて言う。その勢いに若菜は狼狽える。

「え、えっと……」

若菜はどうすればいいのかわからない。

「確かに吉住と言ったはずだ。……くそっ。あいつがここまで絡んでいたとは……。あいつの目的とは、やはり……」

と、自分に確認するように呟く。

若菜は、その隙に可南子に報せようと回れ右をする。……が、時弥に腕を掴まれ動けない。

声を出せばいいのだろうが、恐怖のあまり声が出ない。

(よ、吉住先生……。助けて下さい……)

心の中で救いを求めるが、所詮はそれは心の中での事。現実として伝わるはずがない。若菜は青ざめ、震えている事しかできなかつた。

「あなたは、吉住を知っているんだな」

時弥は強い口調で訊く。

若菜は震えたままゆっくりと頷く。

「なるほどな。という事は、当然、倉沢俊昭を知っているな」

若菜は再び震えたままゆっくりと頷く。

「なら、好都合だ。あんたにお願いするのでしょうか」

そう言って、時弥は若菜の額に掌を当てる。そして、若菜の身体が光に包まれる。

「……っ……う……あ……」

若菜の口から言葉にならない声が洩れる。そして、ビクンと大きく痙攣する。

ガクガクと何度か痙攣し、やがて光が消えると同時にその場に崩れる。

「その命、わたしの計画のために捧げてもらおう……」

時弥は、口許を歪める。

＊

特別室がある棟は、訪れる人が少ない。お蔭で、時弥の行動は誰に見咎められる事なく進行していく。

時弥の『授与』によって意識を失っていた若菜だが、十分後には意識を取り戻していた。

しかし、今までの記憶は一切無く、時弥の人形と化していた。どうやら、時弥が能力を与えた際の衝撃が洗脳をもしてしまったようだ。

「まったく、嬉しい誤算だよ。まあ、ある程度は計算の上だから、当然と言えば当然だろうがな」

時弥は、確信は出来なかつたが、万が一できるのではないかと、衝撃を普段より強めにしていたのだ。

それは、相手が吉住健一の味方であり、説得では到底無理だと判断したからである。完全に敵対する者の側の人間なのだ。その場合、もっとも手っ取り早いのは相手を支配してしまう事だ。そうすれば、誰に忠誠を誓っていようとも、全く意味のないものになってしまう。

「さて、お前には倉沢俊昭の体内にある r o z a r i o を取り出してもらおう」

時弥は、目が虚ろな若菜に言う。

「かしこまりました」

若菜は感情のない声で言い、倉沢俊昭の病室へ向かう。

若菜は、特別室がある棟の一番奥の病室の前で立ち止まった。

「なるほど、ここか……」

時弥はドアを見るが、誰の病室であるかは表記されていない。

「なるほど、誰も入っていないように、か……。吉住にしては、小憎らしい事をやるじゃないか」

時弥は感心したように言う。

その間にも、感情がなくなった若菜は、病室のドアの鍵を開ける。

「鍵まで掛けているとはな……嚴重だな。本当に用心深いヤツらだ」

若菜はドアを開け、病室に入っていく。それに続いて時弥も中に入る。

病室にはなにもなかった。

病室にあるのはベッドだけだった。そこでは、倉沢俊昭が眠っている。全く、止まってしまった空間だ。この病室で動いているものは、規則正しく落ちている、倉沢俊昭に栄養を送る点滴だけである。

「もう、こんなものは必要ない」

時弥は、点滴を引き抜く。

「わたしから逃げようとは……まあ、無駄な努力だったな。所詮、逃げる事なぞできなかったんだ。手間取らされたのは事実だがな。だが、それもこれで終わりだ。お前はここで死ぬ」

時弥は冷たい目で倉沢俊昭を見下ろす。

「さて、さっさとこの男を分解するんだ」

時弥は命令を下す。

「かしこまりました」

若菜は言われた通りの行動を実行すべく、倉沢俊昭の側に立つ。そして、胸の上に手をかざす。

しばらくは変化がなかったが、やがて若菜が手をかざしている部分が歪み始める。

「この能力を与えるのも見るのも初めてだからな。どうなるのか楽しみだな」

時弥はほくそ笑んだ。

最初はわずかに歪んでいただけだったが、時間を経るにつれはっきりとしてくる。

そして、その歪みは倉沢俊昭だけでなく、能力を使用している浅井若菜にも見る事ができる。

能力の反動ともいべき現象だった。

数多くある詩稀の能力の中で、若菜が与えられた能力——《分解》だけは現在確認されている能力では唯一、使用した時に反動があるのだ。これは、オリジナルの能力者であっても同じで、現在この能力を使える唯一の人物である宍神梢も例外ではない。

ただ、オリジナルの場合は、反動が少ない。それは、元々の潜在能力の一種であり、遺伝的に

も伝えられているため、身体が影響を逃がそうとするからだ。

しかし、授与によって与えられた場合、対象者はそのような耐性を持っていない。そのため、反動がそのままの状態にくる。

制御されているオリジナルの場合であれば、反動は1 / 100以下……もしくはそれ以下にまで抑える事ができるのだが、普通の人間の場合はそのまま100%で返ってくる事になる。

つまり……。

「……うっ……うあっ……」

若菜はうめき声のような、絞り出すような声を出す。

能力の反動だ。

表情も引きつっているが、能力の使用を止めようとはしない。いや、止めたくとも止められないのだ。

身体は正直な反応を示しているのだが、時弥に操られた状態なので、心が拒否してしまう。

しかし、意識はないので本人は苦しさを感じていない。

ただ、身体だけが反応しているのだ。

「なるほど、こうなるわけか」

時弥は、知識としては知っていたが、実際に分解の能力を見た事がなかった。

それは、現在その能力を使えるのが宍神梢だけだという事もあったが、なによりも分解の能力には反動があるため、滅多に使われない能力なのだ。

「……うっ……あっ……」

若菜は苦しそうな声を発するが、時弥はそれを全く気にしていない。見知らぬ人物の、ましてや吉住に味方する者だ、どうだろうと時弥には関係のない事なのだ。

それよりも、滅多に見る事ができない能力を見れるという好奇心の方が圧倒的に上回っている。

時弥が感心している間にも、倉沢俊昭の身体は徐々に分解されていく。

目には光に包まれているようにしか見えないが、原子単位ではすでに分子結合が解かれている状態である。もちろん、それは能力を使っている若菜も同じである。

「さあ、仕上げだ」

時弥のその声をきっかけに、二人を包んでいた光が一瞬だけ強くなる。そして……消えた。

そこには、なにもなかった。

倉沢俊昭の姿はもちろん、浅井若菜の姿もなかった。

ただ一つ、ベッドの上に残された物があった。時弥はそれを見つけ、拾い上げる。そして、それをウツトリとした目で見ると見る。

「なるほど……これが rozario か……」

時弥の興味は、その rozario に集中していた。彼の頭の中から、倉沢俊昭と浅井若菜の存在は、すでに消えていた。

「まだ一つだが、残りはおそらく吉住が持っているのだろうな。まあ、上手く頭を使えば残りも手に入るだろう。所詮は吉住だからな……はっはっはっ……」

こうして、藻音時弥は病院をあとにした。

「……どうなってるの？」

吉住可奈子は倉沢俊昭の病室を訪れ驚愕した。そこには、倉沢俊昭の姿はなく、残されていたのは浅井若菜の名札が付いたナース服だけだった。

「これって……」

可南子はすぐに夫である吉住健一に連絡した。

「あなた……」

可南子は状況を伝える。

『……わかった。すぐに行く』

「ごめんなさい」

『可南子が謝る必要はないさ。しかし、梢は……。梢にも連絡しておいてくれないか』

「わかったわ」

『じゃあ、すぐに行くから』

そう言って、健一は電話を切った。

可南子はすぐに宍神梢に連絡する。

「梢さん、倉沢さんが……」

可南子は梢にも現在の状況を伝える。

『そんな……どういう事？』

梢が困惑している事は電話越しにでもわかる。

「梢さん、すぐ来てくれるかしら。主人も来るから」

『わかりました、すぐに行きます』

それだけを言うと、梢は電話を切った。

二人に連絡した可奈子は、改めて病室を見た。

「どうなってるのかしら……。若菜ちゃんは……」

詩稀の能力者ではない可南子にとって、聞いていても現実味がないので、状況を完全に理解する事ができないのだ。

*

「どうなってやがる」

可南子から連絡を受けた健一は、病院へと急いでいた。

「梢があいつに協力するはずがない。……時弥のヤツ……浅井さんまで巻き込みやがって……。赦せない。ああ、絶対にな」

健一は怒りを煮えたぎらせていた。

「そうだ、時也さんにも連絡しておかないと」

思い出したように健一は藻音時也に電話をかける。

一回のコールで時也は出た。

「時也さん、健一です」

『健一さん、どうしたんですか？ なにか、慌てている様子ですけど』

「理由は後で話します。とにかく、病院へ来てくれませんか」

『病院へ……？ まさか、あの人になにか？』

「とにかく……」

『わかりました。すぐに向かいます』

そう言って、お互い同時に電話を切る。

「畜生！ どうなってるんだ！」

健一は病院へと全力疾走を続ける。

*

宍神梢はタクシーの中にいた。

あまりに遠くにいたため、これしか選択肢がなかったのだ。運良くタクシーが走っているわけもないので、仕方なく電話で来てもらう事にした。幸い、近くを走っていた車両があったので来てもらった。

そのタクシーに乗り込み、病院へ向かっている。

今のところ渋滞には巻き込まれていない。

(倉沢さん……)

梢は顔の前で手を合わせて祈っていた。

「どうしたんですか、お客さん」

その様子を見てタクシーの運転手が話し掛ける。

「ちょっと、知人が……」

梢は大雑把な言葉で誤魔化した。

どうやら、その言葉を自分なりに解釈したらしく、運転手はウンウンと頷く。

「なら、急いだ方がいいですね」

そう言って、アクセルを踏み込む。もちろん、運転手は真相に辿り着くはずもない。真相にはそんな想像では到達できないのだから。

「有り難う御座います。お願いします」

*

誰もいない病室で吉住可奈子は待っていた。必ず来てくれる可南子だけの騎士。そして、頼れる仲間ともいえる友人二人を。

(早く来て……)

可南子は祈る事しかできない。既に二人の命は無いだらう。そして、可南子になにができると

いうわけでもない。それは、三人が来ても同じだろう。しかし、それぞれがその場所へと急いでいた。

分解されたものは再生する事ができない。唯一できる能力があるが、稀少な能力故に詩稀村にはいない。いや、詩稀の外にはいるのだが、どこにいるかは定かではない。そして、それも構成成分が四散してしまっている今となっては効果がない。

*

それから三十分が経った。最初に到着したのは藻音時也だった。

「どうしたんですか」

病室へと入ってくるなり言う。

「……時也さん」

時也の目に飛び込んできたのは、泣きじゃくっている可南子の姿だけだった。病室のは他の姿はない。

「倉沢さんは……こういう事か」

時也は、病室に兄である時弥がいるものと思いこんでいた。しかし、その考えは間違いだった事に気付く。そして、この状況はそれよりも悪いという事にも。

「倉沢さんは、もう……」

可南子は無言のまま頷く。

「だが、どうやって……」

そう言ってから、そこにあるナース服に目がいく。

「これは、もしかして……」

それを手に取り、名札を見る。そして、改めて愕然とする。

「若菜さん……」

時也の目からは涙が溢れる。

ちょうどその時、健一と梢が到着した。

「時也さん……」

梢が声を掛けるが微動だにしない。

「可南子、大丈夫か？」

健一は可南子に近寄り優しく肩を抱く。

「あなた……」

可南子は健一の胸に顔を埋める。

「倉沢さん……」

梢は今は誰もいないベッドに向かって言う。

「赦さない」

梢がポツリと呟く。

「あたしは藻音時弥を赦さない。あたしがこの手で裁く」

梢は力強い目でじっとベッドを見る。

「当然だ」

可南子の肩を抱いたまま、健一が続く。

「兄さん、あなたはしてはならない事をしてしまった。もう、赦す事なんてできない」
時也の目にも強い決意があった。

紅祐とミュウと別れ、『時の扉』に入った亜依と誠司は、丘の上にいる。

しかし、丘といえども草などはなく、目の前は断崖絶壁だ。遠くの方に草原が見えるが、それはずっと遠くの事。

ただ、風は気持ちよかった。涼しい風が二人を撫でるように吹いている。

二人は、風に全てを任せるように手を広げた。

「気持ちいいな……」

「気持ちいいですね……」

二人は、風と一体になったような、風に包み込まれたような……不思議な、それでいて気持ちよかった。

「それにしても……」

しかし、誠司にはそれとは別の思いがもう一つあった。

「どうしたんですか？」

亜依は、遠くを見るような、なにかを思いだそうとしているような誠司を不思議そうに見る。

「ああ……」

誠司は、なにかを思いだそうと頭がいっぱいで生返事をするだけだった。そして、またすぐに考え込む。

亜依は、そんな誠司を優しく、じっと、ひたすら待っていた。

それからどのくらいの時間が経っただろうか、少なくとも十分や二十分といったものではないだろう。はっきりと確認はしなかったが、一時間ほどは経っているだろう。いや、気分としてはもっと経っているようにも感じられる。

(誠司さん、どうしたのかな……)

さすがの亜依も、それだけ時間が経つと心配にもなる。いや、ずっと心配はしていたのだが……。

「そうだ」

その時、誠司はついに思い出した。

「そうだ。ここは、フィーと一緒に来た場所だ！」

誠司がそう言った瞬間、亜依の表情は暗くなった。しかし、誠司はそれに気付いていない。

「なるほどね……」

誠司はその時の事を思い出していた。

(あの時は、すぐに移動しちゃったからな……)

前回、フィー——綾乃と一緒に来た時は、すぐに強制的に移動させられてしまったので、この場所をじっくりと見てはいないので、初めての場所に近い。それでも懐かしく感じるのは、少ないながらも綾乃との思い出がここにはあるからだろう。

だが、逆に亜依にはそれがいい気分ではない。ヤキモチと言ってしまえばそうなのだが……。

「じゃあさ、早く探そうぜ」

そう言って、誠司は歩き出す。

「はい」

亜依は嬉々として歩き出す。亜依にすれば、綾乃と誠司の共通の思い出がある場所には、なんとなくいたくないというのが本音なのかもしれない。

誠司は、草原の方には行かず、荒野の方に歩いていった。

「誠司さん……あっちの草原には行かないんですか？」

ここに来た事のない亜依は、迷わずにこの方向を選んだ事に疑問を感じずにはいられない。

「ああ、あっちにはなにもないよ。前に綾乃と来た時はあそこだったんだけど、なにもなかったんだ」

「そうなんですか……」

亜依は俯いて言った。

*

しばらく歩くと、街に着いた。

「ちょっと、フィー。どうしたの？」

と、少女の声がした。

「フィーだって？」

誠司はその言葉の中のフィーという名前に反応してその声の方を見る。

亜依はそんな誠司を見て暗い表情になる。

自分でもヤキモチだとはわかっている。わかっているが抑えられない……それがヤキモチなのだから。

誠司は反射的に声の方に歩いていく。

亜依は、渋々ながらもそれについていくしかできなかった。

*

「ねえ、フィーったら。どこに行くのよ」

少女は何度も呼びかけるが、フィーは全く耳を貸そうとはせず、黙々と歩き続ける。

「ねえ、フィオナったら！」

少女はフィーの前に回り込む。

「お願い、そこをどいて」

「だったら、理由を教えて」

「ごめんなさい。言えないの。ゴメンね、シス」

フィオナは、シスを払いのける。

「ねえ、フィオナ！」

虚しい叫び声だけが響いた。

シスは街の外れで立ち尽くしていた。

*

誠司が到着したのはちょうどその時だった。

(フィオナ……？ ジョセフィーヌじゃないのか……)

と、誠司は落胆の色を隠せない。

(……なんだ、違ったのか)

と、亜依は一瞬喜んでしまう。正直、人違いで嬉しかったのだ。ホッと安心した。しかし、すぐにそんな事を思ってしまった自分がイヤになった。

(ごめんなさい、誠司さん)

と、心の中で反省する。

誠司は、シスに近付いていった。

「どうしたの？」

その馴れ馴れしさにシスは驚きを隠せない。もちろんそれだけでなく、突然話しかけられたというのもあったのだが、やはり馴れ馴れしいというのがネックだった。

その馴れ馴れしさは、この世界に二度ほど来ているからのものである。

同じ世界であっても来た事のない場所ならともかく、誠司は綾乃と一緒にこの付近に来た事がある。それだけで、誠司には懐かしく、親しい場所なのだ。

「あなたは、誰ですか？」

シスは驚いた表情で訊く。まあ、当然の反応だ。

「ああ、悪い。俺は椎崎誠司っていうんだ。まあ、旅行者ってところかな」

「旅行者……？」

シスは首を傾げる。

「……わかんないかな。言い換えると、冒険者ってところだな」

「ああ、冒険者ね……そうなんだ……」

それを聞いたシスは、物珍しそうに誠司を舐めるように見る。

「で、そちらの女の子はパートナーってわけか。可愛いね」

亜依は頬を赤らめる。

「ああ。俺のパートナーの富所亜依だ。俺にとって、最高のパートナーだ」

(誠司さん……)

亜依は、その言葉を聞いて涙を流した。

「お、おい。どうしたんだよ、亜依」

その涙を見て、誠司は心配そうに亜依に訊く。

「ゴメンなさい。大丈夫だから。なんでもないから」

「ホントか？」

亜依は涙を流したまま、無言で頷く。

誠司はどうも腑に落ちなかったが、納得する事にした。

*

そこは、湖の畔だった。美しい若草が湖の周りに茂っている。

その若草を撫でるかのようによい風が吹く。

そして、その風は湖面に小さな波を生まれさせる。

その風は、フィオナの髪をなびかせる。

「待っててね」

フィオナは、乱れた髪を整えながら湖を見つめている。

ここは、フィオナの秘密の場所だった。この場所の事は誰にも言っていない。もちろん、それはシスに対してもだ。

*

それは、数ヶ月前に遡る。

フィオナの夢に、人影が現れた。それは、人の形をしているだけで、詳しい姿はわからない。声もどこか中性的で男か女かさえわからないものだった。

それを、フィオナは神様だと確信した。彼女にとって神様とは謎の存在であり、性別もないというものだった。その考えに、夢に出てきた存在はピッタリと合致したのだ。

『ここより東に湖がある。その湖の底には、今は滅びた街が沈んでいる。我は汝をその街の守人とする。その代償として、我は汝の願いを一つだけ叶えよう。如何や』

夢の中でその人影はそう言った。

あまりに突然の事にフィオナは戸惑った。が、すぐに……、

「わかりました。私、引き受けます」

フィオナは願い事と引き替えに引き受ける事にした。

『汝の願いは？』

フィオナは緊張を隠せなかった。夢の中なのだが、手足の震えが止まらなかった。それでも、なんとか口を開く。

「私の願いは……お父さんとお母さんに会いたい。そして、また一緒に暮らしたい」

それが、フィオナの願いだった。

*

亜依と誠司は、シスに連れられ、フィオナが行ったであろう場所を目指していた。

「多分、こっちに行ったから……」

とはいうものの、先頭を歩くシスにも正確な場所はわからない。ただ、同じ方向に行けばわか

るだろうという安易なものだった。

フィオナがいる湖は、普段は誰も近付かない場所にあるので、シスはその湖の存在を知らない。知っていれば多少は違ったのだろうが、今回はシスにはなにもできない。

三人は、目的地がわからないまま、ただフィオナが向かった方向を歩いていた。

「この先って、なにかあったかな……？」

と、シスが思わず呟く。

「あのさ……」

その呟きを聞いて不安を感じた誠司が訊く。

「なんですか？」

「シスってさ、この辺の地理に詳しくないの？」

「……はい」

シスは申し訳なさそうに俯く。

「この辺は、誰も近付かない場所なんです」

「なるほど、未踏の地ってヤツか……そりゃ、困るわな」

誠司は思わず肩を落とす。

「誠司さん、そんなにがっかりする事はないと思いますよ」

そんな誠司に亜依が言う。

「どういう事だ？」

「これです」

亜依は掌を誠司に見せた。掌には r o z a r i o が乗せられている。

「これは……」

r o z a r i o は光を発していた。

「はい。この光が強くなっている方向に行けば……」

「よしっ」

暗闇の中に、一筋の光を見つけた誠司は、思わず大声で叫んだ。

＊

「あれはなんだろう……？」

湖を覗き込んでいたフィオナは、光る物を見つけた。それは、今まで見た事もないものだった。

フィオナは何度もここを訪れているが、そんな事は一度もなかった。

その光に興味をおぼえたフィオナは、思い切って湖に潜る事にした。

湖は透き通っているので、イヤな感じはしない。

「よ、よし」

さすがのフィオナも一瞬だけ躊躇、自分を奮い立たせるために声に出す。

「潜るんだからね。そして、あの光がなんなのか調べるんだから。そうだよ、私は神様にここを

守るように言われたんだから。うん、神様がいるんだから大丈夫。大丈夫」

フィオナは大きく息を吸い込むと湖に飛び込んだ。

その飛び込みは見事で、指先から吸い込まれるように、音をほとんど立てずに、湖に入った。

ゆっくりと潜っていくと、湖底には確かに街があった。

その街の中心には大きなお城があった。

(うわぁ～……すっごおい)

フィオナはその光景に心から感動していた。今まで何度も覗き込んでいたが、どうしてだか不思議と街の存在は確認できなかった。なので、街の守人と言われてもピンとこなかった。だが今回、初めて潜って、その存在を自分の目で見て、あの神様は本物なのだと確信した。

(神様って本当にいるんだ……)

そんな事を考えながらフィオナはお城を目指して進んでいく。

「……ん……んんっ……」

フィオナは口許を押さえる。

(どうしよう、息がもたない……)

水深が深くなるにつれ、肺が圧迫されて呼吸が苦しくなる。

それに加え、ほとんど泳いだ事のないフィオナにとっては、さらに苦しさが増す。

泳ぐといっても、近くの川で少し泳ぐ程度だ。それなりに深い、このように深く潜る事なんてできない。

(どうしよう……)

フィオナは空気を求めて上へ上がろうとするが、急に暴れるように動いたため余計に苦しくなってしまう。

(どうしよう……このまま死んじゃうのかな……? でも、そうすればお父さんとお母さんに会えるんだ……)

フィオナは、今は亡き両親の事を考えた。

その事が功を奏したのだろうか、落ち着きを取り戻したフィオナはゆっくりと湖面へと上がっていく。

(もうちょっと……)

*

「こっちの方みたいですわね」

フィオナが湖に潜っている頃、亜依と誠司そして、シスもその湖を目指していた。

そこは岩場が続いており、よほどの暇人か物好きでなければ通ろうとも思わないだろう。

「こって、なにかあるのかな……」

シスはぼやきながらも岩に間を進んでいく。

「ったく、どうしてこんな所にあるんだよ」

「そうですよね。ちょっと大変ですよ」

誠司と亜依も、ぼやきながら進んでいく。

しばらくすると、突然目の前が拓けた。

「うわあ……」

「すごいです……」

「こんな場所があったなんて……」

三人は一様に目の前に光景に感動する。

*

「ぷはあっ」

フィオナは湖から顔を出す。そして、思いっきり空気を吸い込む。

ほんの少しなのに、何年も空気を吸っていなかったような気分になる。

(空気ってこんなに美味しかったんだ……)

と、イヤでもそうってしまうのは当然の事なのかもしれない。

そんな気分には浸っていた時、

「あっ、フィオナ」

と、シスの声がして、フィオナは顔を上げる。

フィオナの目に映ったのは、ポカンと口を開けているシスの顔だった。

「シス……こんな所でどうしたの？」

フィオナもあまりの驚きで、間抜けな声になってしまう。

しかし、すぐに大変だと気付いた。

(ここは神様から守るように言われた場所。という事は、あまり人に知らせちゃいけないんじゃない……だったら、シスにだって……)

そんな事を考えながら改めてシスを見る。シスなら大丈夫だと信じたかったから。だが、その信頼は崩れる。

「シス、その人たちは誰なのっ？」

そこにはシスだけでなく、見た事もない人物が二人いた。しかも、その二人は妙な格好をしている。すくなくとも、フィオナはその格好を見た事がない。

「ああ、この人たち？」

怪訝なフィオナに気付かないシスは、アッケラカンとその質問に答える。

「フィオナ、この人たちはね、さっきここで会った……」

「どうして、そんなわけのわからないヤツらなんかと一緒にいるの？」

フィオナは、いつもの冷静さを完全に失っていた。

「どうしたのよ、フィオナ。なんだか……いつもと違うみたい」

シスは憤慨しているフィオナに戸惑いを隠せない。

「ねえ……」

シスはフィオナにすがるような視線を送る。

「……………」

しかし、フィオナはふくれっ面のまま亜依と誠司をね睨め付ける。

「……………」

「……………」

亜依と誠司はフィオナに睨め付けられて、微動だにできない。

(な、なんなんだ……?)

(なんででしょうか……?)

二人は、自分たちがどうして睨まれなければならないのかわからず、首を傾げる。しかし、その態度がフィオナを刺激する。

「なんなのよ、あんたたち！ どうしてこんな所にいるのよっ！」

「お、俺たちは……」

なにかを言い返そうとするが、フィオナの勢いに押されて言い返す事ができない。

「フィオナ、この人たちは……」

「シスは黙ってて」

フィオナは説明しようとしたシスに強く言う。

「帰って！ 今すぐこの場から消えて！ さあ！」

「……………」

「……………」

「ちょっと、フィオナ……」

シスは心配そうに見つめる。

「そうだな、すぐに帰るよ」

今までの沈黙を破って、誠司が口を開いた。

「ここにあるrozarioroを手に入れたらな」

そう言って、湖を見る。そこには、キラリと光るものが見える。

「あっ……」

誠司の言葉に亜依もそれを見つけた。

「じゃあ、そういう事だから」

そう言って、誠司はフィオナをすり抜けようとするが、

「ダメっ！」

フィオナは誠司にしがみつくようにして止める。

「ちょ、ちょっと……」

突然の意外な行動に、誠司は驚きを隠せない。止められるとは思っていたものの、せいぜい手を広げて止めるくらいだと考えていたのだから。

「あれはダメなのっ！ 私と神様との約束なんだから！」

フィオナは懇願するように叫ぶ。

(神様……? Dioが……? いや、そんなはずはない)

一瞬、誠司はDio——神崎璃織魚を思い浮かべるが、すぐに違うと思ひ直す。

(そうさ、彼女がそんな事をするはずがない。じゃあ、誰だ……?)

誠司は湖を見つめながら考える。

(藻音時弥か……? しかし、どうやって……?)

時弥が思い浮かぶが、どうもしっくりとこない。

(綾乃たちみたいに……でも、どうしてだ? どうして、納得できないんだ?)

「フィオナ、悪いけど俺たちには時間がないんだ。だから頼む。どいてくれ」

誠司は無理矢理フィオナを押しつける事ができない。それが、優しさ故の弱点であり、長所でもある。

*

「そろそろ潮時か……」

その様子を離れた所から見ている影があった。

「フィオナ……」

誠司たちを見て、心苦しくなったシスはフィオナに頼もうとする。

「いくらシスの頼みでもダメなの」

フィオナはブンブンと必死に首を振る。なににも揺るがない頑なさがそこにはあった。

「どうしてよ。どうしてそこまでして……」

「神様は約束してくれたから。だから、私は……」

「約束？」

「私はお父さんとお母さんと一緒に暮らしたいの。神様はその願いを叶えてくれるって約束したから。だから……」

「フィオナ……フィオナのお父さんとお母さんは……」

シスはそこで一度言葉を切る。

「フィオナの両親は……もう、死んじゃったんだよ」

シスは涙を浮かべていた。

「そ、そんな……」

誠司が呟きを洩らす。亜依は言葉が出ず、ただただ口許を押さえるだけだ。

「だ、だったらどうだっていうの？ 神様は約束してくれたもん。だから、だから……」

だんだんと声が小さくなっていく。それに加え、涙で声がかくぐもる。フィオナは誠司に抱きつくようにして泣く。

「だから……だから……」

「フィオナ……」

誠司はフィオナの頭を優しく包むようにして抱く。

「フィオナ、死んだ人はなにがあっても戻ってこない。神様だって、そんな事できっこない」

(イヤになるほどの正論だな。綺麗事だけど、それでも今は正論でいくしかない。ゴメン、フィオナ)

誠司は、心の中で出来る限り謝罪する。

そんな誠司に抱かれていたフィオナの力が徐々に抜けていく。

「……………てるよ」

誠司の身体を滑るように崩れ、まるで足にしがみついているような格好になったフィオナがポツリと呟いた。

「……………かってるよ」

その声は小さい上に涙でくぐもり、さらに聞き取りづらい。

「フィオナ……？」

シスがフィオナに近寄り、側にしゃがみ込む。

「どうしたの、フィオナ？」

優しく肩に手を添える。

「……わかってるよ。そんなの、わかってるよ」

フィオナはポロポロと涙を流す。

「……そんなの、言われなくてもわかってるよ。でも、信じたいんだよ。それくらい、いいじゃない。それくらい信じたっていいじゃない」

その声は涙のせいもあり、弱々しく聞こえる。

「フィオナさん……」

いつの間にか誠司の側に寄っていた亜依が口許を押さえて涙を流す。

「フィー……」

シスに肩を抱かれ、フィオナは誠司から離れる。

「フィオナ。フィオナは一人じゃないんだから。フィオナにはシスがいるじゃないか。だから……」

「だから、強く生きろって？ そんなの綺麗事じゃない」

フィオナは誠司の目をじっと見つめる。そこに弱さは感じられず、フィオナの強い意志が感じられた。

(こんな目が出来るんだ。もう、大丈夫だろうな……)

誠司はそれを見て安心する。

「じゃあ、俺たちは俺たちの用事をさせてもらうか」

そう言って、誠司は湖に近寄る。

(にしても、あそこって事は潜らなきゃいけないんだよな……)

と、湖底を見ながらためらいを隠せなかった。

(泳げなくはないけどさ、大丈夫かな……)

どうしても不安は拭えない。

(よし、行くか)

それでも、心を決めて湖に飛び込んだ。

バシャンという音で亜依は我に返った。

「誠司さん……」

「あっ……」

フィオナも声を洩らす。

(私はあそこを守らなくちゃいけなかったのに……)

*

「ねえ、潜っちゃったけど、大丈夫なの？」

ここではない場所で、女が隣にいる男に言う。

「大丈夫さ。彼が気付く事はないさ」

二人とも、誠司たちがいる世界にはいない。普通の、現代のオフィス街にある喫茶店にいる。手を握っているのも、傍目には普通のカップルにしか見えない。

「まあ、あの少女もそれなりの仕事はしてくれたからな……」

「あら、あなたにしては優しい意見ね」

「まあね。でも、彼女は約束を守れなかったからね、こっちの約束も守る必要はないね」

「それって、あの子にとってはよかったんじゃないの？」

「それはどうかな。せっかく、親と同じ場所に行かせてあげようと思ったのにな……」

と、男は笑みを浮かべる。

「そうね。彼女にとってはどっちがよかったのかしらね……？」

と、女も笑みを浮かべる。

男は久遠隼人、女は相模原渚という。

*

誠司が湖に潜り、三人だけが湖畔に残された。

(誠司さん、大丈夫かな……)

亜依は祈る思いで湖を見ていた。

フィオナとシスも、心配そうに湖を見る。だが、フィオナはそれとは別に、神様との約束を破ってしまったという負い目が加わっている。

そんな三人を空から眺める影があった。それは、ほんの小さなものなので、見つけれられる事はない。わずかに地面に影を見せるが、草が生えている場所では見つからない。

その影こそが、フィオナが見た神様であった。しかし、その影はどう見ても土人形である。土人形が空中に浮かんでいるのだ。

*

その土人形を通して、久遠隼人と相模原渚は、この世界の様子を見ている。

そう、二人も詩稀の能力者なのだ。

詩稀村が無くなる以前から村を離れていた。しかし、その存在は詩稀の有力者には知られていた。その理由は、その能力の特殊性のためだ。

久遠隼人の能力は物質の再構成。既存の物質を全くの別物に変えてしまう。しかし、別の物に変える事ができるといっても、原子までは変換できないので、元の物質と性質は変わらない。つまり、鉄からは鉄製の物しか構成できない。

相模原渚の能力は時空介入。『時の口』を経由して、別世界、別時間であっても小さな物なら移動させる事が出来る。それに加え、能力だけを移動できる。つまり、離れた場所から別世界に能力を届ける事ができる。今回も、この能力で久遠隼人の能力を飛ばしているのだ。

そんな二人が見ている事など露ほども知らない三人は、ただただ湖を見ていた。

もちろん、その事は誠司も気付いていない。

その誠司はというと……。

*

(なんだ、この湖は?)

湖の湖底を目指して泳いでいた誠司は、目の前の光景に思わず息を洩らしそうになった。だが、なんとか口を押さえる。

(どうしてこんなものが……?)

誠司の目の前には、街があった。

(こんなの、上から見た時は……)

そう、上から見た時にはなにもなかった。ただの透き通った湖だったのだ。

だが、いざ潜ってみると、そこは全く違った。

(光の屈折……? いや、それにしてもおかしすぎる)

できるならゆっくり考えたいが、そんなわけにもいかない。

(早く戻らないと、息がもたないな……)

その事を考えるのは後回しにして、誠司はとにかく *rozarrio* がある場所を目指した。

(あそこか……)

近付くにつれ、光がはっきりとしてくる。それは、街の中心にあるお城にあった。

(ちくしょう、急がないとマズいな……)

いくら誠司でも、そろそろが限界だった。

(でも、もうちょっと……)

なんとか息を我慢して、お城を目指す。

(や、ヤバイ……)

——ゴボッ!

誠司は口を開いてしまった。

そして、そのまま誠司は意識を失った。

*

湖面に泡が浮かんだ。

「誠司さん……」

亜依は思わず手で口を覆った。

普通で考えれば、なにもない所から泡が現れるなんて事はない。今の状況で考えられる事はただ一つ。それは誠司が吐いた息だという事。そして、水中で息を吐いたという事は……。

「誠司さん！」

亜依も湖に飛び込んだ。

*

(ここはどこだろう……。俺はどうなったんだろう……)

誠司は、ぼんやりとした頭で考えていた。なんだか温かいもので包まれている感触がある。しかし、それ以外の事はなにもわからない。自分が生きているのか、死んでいるのかさえ。

(これが天国ってヤツなんだろうか？ それにしては、味気ないな……。もっと派手で綺麗な所だと思ってたのには……)

目を開けると、真っ白だった。

(そんな場所って、天界なんだろうか？ 実際、天国ってものはこんなもんなんだろうか……。それとも、これが地獄ってヤツなのかな……。それにしては、眩しいよな、この光)

誠司は、眩しさに手で目を覆った。それほどに眩しかったのだ。

それでも、次第に目が慣れてくると、視界がはっきりとしてきた。

(な、なんだ……？)

目の前に広がっているのは、石でできた街だった。その街の一番高い場所に、誠司はいた。

「ここって……」

誠司は改めて自分がいる場所を見た。

「ここって、あの城……？」

そう、誠司がいる場所は、あの湖の底にあった城だった。

「どうしてだ？ どうして、俺はこんなところにいるんだ？」

そう、誠司は息が続かなくて溺れてしまった。それはなんとか思い出せた。

「それ以前に、どうして息ができるんだ？」

自分の場所が認識できて初めて、誠司は最大の疑問にいきついた。

慌てて自分の身体を触る。

「死んでるわけじゃない……よな」

周りにも触れて自分を確かめる。

「大丈夫……だよな」

*

(誠司さん無事でいて……)

亜依はその事だけを思い、湖を潜っていく。

(……苦しい)

しかし、それは亜依にとって過酷以外のなにものでもなかった。しかし、それでも誠司の事だけを考えて潜り続ける。

(誠司さん……誠司さん……誠司さん……)

しかし、やはり限界というものは容赦なく訪れる。

(……だ……め……)

――ゴボッ！

誠司の時と同じように空気を吐き出す。

(ミイラ取りがミイラになるって、こういう事なんだよね……)

と、亜依はぼんやりとしていく意識でそんな事を考えていた。

そして、亜依の意識は消えていく。

*

「あ……っ！」

「あっ……！」

湖面に浮かび上がった泡にシスとフィオナは同時に声を上げた。

「ダメだったんだ……」

シスは悲痛な面持ちで湖を覗き込む。

「神様の怒りよ。ダメだって言ったのに。なのに、行ったりするから……」

フィオナはそうは言うが、心の中では二人を心配していた。

(でも神様。あの二人を助けてあげてください。お願いします)

フィオナは胸の前で手を組み、神様に祈った。

*

そのフィオナが神様と思っている存在は、遙か上空でそれを見ていた。そして、その主は別の世界でそれを見ている。

「所詮はここまでか……」

隼人はため息をついた。

「でもまあ、やれるだけはやったんじゃない、あの子たち」

「だが、役不足だな」

*

誠司は、亜依がそんな事になっているとは知るはずもなく、城を散策していた。

「それにしても不思議だよな……。どうしてここは空気があるんだ？ それ以前に、どうやって俺はここに……？」

そんな誠司の疑問の一つは、すぐに解決される。

——ブーン！

「な、なんだ？」

奇妙な音に誠司は辺りをキョロキョロと見る。そして、光が降りてくるのが見えた。

「なんだ、あれは？」

誠司は光の方へと走っていった。

「あそこは……」

そこは、誠司が目覚めた場所だった。

駆け寄ると、そこには誰かがいた。

「あっ……」

それが誰かを認識して、誠司は思わず声を上げる。

「亜依……」

そこには亜依が横たわっていた。

「亜依、亜依。おい、しっかりしろって」

誠司は亜依の身体を優しく揺する。

「……ん……んん……」

うめき声のような声を出す。

「あい……亜依……」

とりあえず、生きている事だけがわかった。しかし、目を覚まそうとはしない。

「あい……あい……亜依……亜依……」

誠司は声をかけ続ける。

「ん……んん……」

「あ、い……」

誠司は思わず笑みをこぼした。亜依の目元が動いたのだ。

「亜依……」

もう一度、優しく声をかける。

その声に反応するかのよう、亜依の目はゆっくりと開かれた。

「……よかった……」

「せい、じ……さん……」

「よかった。本当によかった」

誠司の目からは涙がこぼれる。

「誠司さん、あたし……」

「……よかった……」

亜依は自分がどうなったのかわからず、困惑の表情を浮かべる。

「ああ、ここは湖の底だ」

それを察した誠司が居場所を言う。

「湖の……底？」

「ああ、湖の底にある城だ」

言われて、亜依は思い出した。確かに、湖の底には建物があつた。しかし……。

「どうして、そんな所に？ それに息だって……」

亜依も同じ事を疑問に思う。

「それは俺にもわからない。でも、とにかく俺たちは生きている」

*

それからしばらく経ち、なんとか亜依も状況を完全とはいかないが理解した。

そして、自分たちが持つ rozario の光を頼りに、ここにあるはずの rozario を探す。

光の強弱を頼りに進むが、城の中は複雑で行き止まりが多い。隠し扉があるのでとは調べるが、今のところそれらしいものは発見できていない。

「どうなってるんだ？」

どうしても愚痴が出てしまう。

(いっそ、壁をぶち壊してしまおうか)

そんな考えさえ出てしまう。

「誠司さん、ここ……」

「どうした？」

亜依がなにかを見つけた。

「なんだ、これは？」

そこには、石が突起したスイッチのようなものがあった。

「……押してみるか？」

その問いに、亜依は無言で頷く。そして、誠司は、その突起を押した。

——ドンッ！

どこか遠くで大きな音がした。

——ゴゴゴッ！

地響きのような音が近付いてくる。

——ゴーオッ！

すぐ近くで音がする。

そして——

次の瞬間、二人の足元がなくなった。

「うわーあっ！」

「きゃーあっ！」

悲鳴を上げ、二人は落ちていった。

*

「大丈夫かな……」

シスも神に祈っていた。

「さあ……？」

フィオナはわざと気のない返事をする。

(もう、フィーったら……)

シスもフィオナが素直になれていない事には気付いていた。

*

そこは真っ暗な部屋だった。いや、小さな光がそこにはあった。

「んん……っ」

誠司は頭や腰をさすりながらゆっくり起きあがった、そして、周りを見る。

(どうなったんだ……？ ……………そうだ、亜依は……？)

誠司は亜依の姿を捜した。

「ん、んん……」

「亜依、大丈夫か？」

誠司は亜依の身体を抱き起こす。

「……誠司さん……ええ、大丈夫」

「よかった」

「ありがとう。……ここは？」

「わからない。どうやら落ちたようだけど……」

誠司は改めて部屋を見回した。

「あっ……」

そして、誠司は初めて光を見つけた。

「なんだ、あれは？」

誠司はゆっくりと光に近付いていく。しかし、rozarioはそれに反応していない。

「rozarioじゃない……だったら、いったい……」

恐る恐る近付いていくと、そこには……。

「指環？」

そこには指環が浮かんでいた。

(どうしてこんな所に指環が……？ しかも、どうして……)

浮かんでいるのか、光っているのか。疑問に思うが、どうにもそれに慣れてしまっている自分に気付く。

(俺も相当ノーマルじゃない世界の間人間になっちまったんだな……)

どうしてだか、落ち着いている自分にも気付く。

(なんだか不思議だ)

なんだか懐かしいような、それでいて不安な気分だった。

それは亜依も同じだった。

(なんだろう……前に感じた事があるみたい。でも、初めてののような感じもする。なんだか、これから先、出会うような……)

その亜依の勘は的中する。

*

そんな事を考えていた時、久遠隼人と相模原渚は顔をしかめていた。

「どうしてだ。どうして、あいつらがアレに出会うんだ」

「大変ね、どうするの？」

渚は心配そうな表情で隼人を見る。

「どうもこうもない。アレはなんとしても手に入れなければならない」

「そうね。だったら……」

「わかってる」

隼人は渚を介して空に浮かべていた土人形を操る。土人形はものすごい速さで湖に飛び込んでいく。

——ドボン！

湖が波打つ。

「なに？」

「なんなの？」

フィオナとシスは驚くが、その時には既に視界から土人形は消えていた。波紋しか確認できない。

土人形は、速度を増して海底の城を目指す。しかし、所詮は土。水に触れて溶けていく。

(まあ、なんとかなるか)

しかし、隼人は慌てる事なく落ち着いている。

そんな隼人の自信の通り、土人形は溶けきる事なく城へと辿り着いた。

隼人は土人形を城の石を利用して再生させる。

土人形を回復させ、隼人は土人形を亜依と誠司がいる場所へと急がせる。

*

誠司は指環へと手を伸ばす。

「うわっ」

その時、指環が一層強い光を放った。それに驚き、誠司は目を覆う。

その瞬間だった。

隼人の土人形が指環を飲み込む。そして、湖を脱出する。そして、そのまま姿を消す。

*

「ついに手に入れた」

隼人は自分の手の中にある指環を掲げる。

「やっと計画が始まるのね」

渚も嬉しそうに言う。

「ああ、あとは……能力者と適合者だな」

*

「どうなったんだ？」

指環が消えて真っ暗になった部屋。光に慣れたせいもあって、真っ暗ではなにも見えない。

「誠司さん、どこにいるの？」

「亜依、俺はここだ」

真っ暗な部屋で二人は互いに呼び合う。その声を頼りに、手探りながら近付いていく。

手を前に伸ばしてゆっくりと動く。

「あっ」

「はっ」

二人の手が触れる。

「亜依」

「誠司さん」

二人は手を絡める。

その頃には暗闇に目も慣れ、お互いの顔がわかるようになっていた。お互いの笑顔を確認して嬉しくなる。

しかし、それも長くは続かなかった。

――ゴゴゴウッ！

と、大きな音をたてて壁が……いや、城全体が、そして街が崩壊を始めた。

(どうするんだよ)

(どうしよう)

二人は慌てふためくだけだ。閉ざされた部屋から逃げ出す術などあるはずもない。

(このままじゃ押し潰されてしまう)

誠司は死を覚悟した。それは亜依も同じだったようで、誠司の手をギュッと強く握る。

「亜依……」

「誠司さん……」

二人はゆっくりと抱き合う。

崩れた壁の隙間から小さな石が落ちてくる。それこそ r o z a r i o だった。

しかし、二人はそれに気付かない。

それでも、力は発動した。r o z a r i o の光が二人を包み込む。

十一個の石がその力を発動させ、二人を強制的に移動させた。それは、まるで r o z a r i o が意思を持っているかのようだった。

r o z a r i o に導かれるまま、二人は最後のステージへと移動した。

全てが始まり、そして.....全てが終わろうとしている。最後のステージ、それは神が封印されている場所、神崎邸。

TRI FINO.

少女は、ある日不思議な能力に気付いた。

ごく普通の生活だった。

それまで、彼女は自分に能力がある事を知らなかった。いや、両親も想像していなかっただろう。

彼女――坂木あやは、詩稀村すら知らない能力者だった。

彼女と詩稀村の繋がり、人類の起源にまで遡る。

詩稀の人間と詩稀以外の人間との子ども――それが、あやの先祖だった。もちろん、それから数えきれないくらいの年月が流れている。しかし、それまで能力者が現れる事はなかった。第一、その詩稀の人間は、自分が詩稀の人間だという事は最期まで言わなかった。普通の人間として生き、普通の人間として死んだ。

そんな事を露とも知らないあやは、ある事をきっかけに能力に目覚めた。

それは……初恋。

あやが十三歳の時、初めて恋をした。

それ自体は、珍しくはなかった。ただ、同じクラスの男の子が気になるな……それくらいのものであった。だが、その彼女の心の変化が秘められた能力の扉を開けた。

それ以前にも、兆候はあった。だが、それがソレだったとは誰も気付いていない。それというのは、あやは歌が上手いという事だった。あやの歌に、誰もが感動する。中には、涙を流す者もいる。それが兆候だった。

感受性が豊かだった彼女は、無意識に能力を解放していた。

以来、あやは歌う事に自信を持ち、自然と歌手を目指すようになった。それともう一つ、役者もいかな……と考えていた。その役者の中には、声優という職業も含まれていた。

あやは、オーディションを受けるなり、審査員の全員一致でデビューが決まった。その審査員の中には、涙を流す者までいたのだ。それほど人を感動させたのだから、納得もいくだろう。

デビュー曲が街中に流れると、一瞬で人々の心をとらえた。それは、少女の切ない恋の歌だった。その歌に、街の人は涙した。まるで、自分がその歌の少女になったような錯覚にさえ陥っていた。

もちろん、発売とともに大ヒット。特に、女性に人気があった。それは、あやの歌が女性の恋の歌だったから。それだけだ。

すぐに、次の曲が発売された。

今度は、しっとりとした、癒されるような曲だった。

その曲も大ヒットした。今度は、女性に限らず、老若男女に関係なく浸透していった。

そのお蔭で、あやはドラマにも出演した。それは、よくある恋愛ものだった。彼女は演技の勉強などした事はないので、それほど上手くはない。だが、その役に感情移入をする人が増えた。

それから、あやのたつての希望で声優にも挑戦した。演技の方法は役者も声優も変わらないのだが、声だけで伝えなければならないこの仕事はさすがに無理だろうと周りは思っていた。ドラ

マでの彼女の役は人気が出たが、決して演技が上手かったというわけではない。

だが、あやの役は好評だった。同業者も演技力はそれほどはないと思っていたが、感情が上手いのだ。ストレートに伝わってくる。耳にではなく、心に直接届くのだ。

そう――それが彼女の能力だった。

彼女の能力は〈遠声〉。

人の心に話しかける能力。

彼女の言葉は、心に直接届くのだ。

そんな事は当然知るはずもなく、詩稀の人間が彼女に気付くまでそんな生活が続いた。

そう、詩稀の人間に出会って、彼女の運命はがらりと変わる。

*

「あの少女……」

その少女の能力に気付いた最初の人物は、室田孝志だった。

二十年前の事故のあと、突然、能力に目覚めた。しかし、その事は誰にも言わなかった。当時は、自分がおかしくなってしまった、という恐怖でいっぱい、そんな気にはなれなかったのだ。

以来、能力を行使する事はなかったが、もしその能力の事を母親にでも話していれば、それが健一に伝わり、悲劇が起きていただろう。

彼の恐怖心が世界を救ったのだ。

そんな事は露とも知らず、自分の能力について知ったのは、一連の事件が終わったあとだった

。

孝志は、椎崎誠司の所によく行くようになった。

孝志にとって誠司は、自分の命の恩人であり、自分の兄のようでもある。

能力に否定的な母親の前では、能力については禁句とされていたので、落ち着ける場所といえ、誠司の部屋しかなかったのだ。

もちろん、遊びに行っているだけではなく、誠司に学校の勉強を教えてもらってもいた。

だが、勉強といっても、誠司には雑学を教える事しかできない。なにせ、自分はほとんど勉強していなかったのだから。

なんとか誠司の所に行く理由を作ろうと、孝志は独自で勉強した。そのお蔭か、孝志の成績はよかった。

そうであるから、母親も引き止められない。

孝志は大学進学と同時に一人暮らしを始めた。できるだけ早く、親元から離れて自由に暮らしたかった。

母親は、即座に賛成した。彼女自身、能力の事に関わりたくなかったのだ。

独立した孝志は、誠司の所で自分の能力について調べた。

結果、孝志の能力は〈風を操る能力〉だとわかった。

詳しい事は、誠司にはわからないが、孝志が能力を使うと、風が動くのだ。

事実、彼の能力はそうなのだが、普通と違う特質な〈風を操る能力〉の持ち主だった。

それを教えてくれたのが、宍神梢だった。

梢が言うには、孝志の能力は、空気を操作して能力の伝達を阻む事ができるらしい。

実際、梢の〈分解〉の能力を使って実験をした。すると、確かに梢の能力の伝達を防いだのだ

。

だが、それ以来、能力を使う事はなかった。その必要性がなかったからだ。

「能力を使う時だな……」

孝志は、ビルの巨大モニターを見ながら呟いた。

モニターには、新曲のプロモーションビデオが流れている。

「唯依ちゃんくらいの歳だな……」

そのプロモーションビデオは、坂木あやの新曲のものだった。

「おそらく、能力の事は知らないのだろう」

孝志は、そのまま誠司の家に向かった。

＊

誠司の家は、静かな住宅街にある。

庭には花壇があって、年中色々な花が咲いている。

孝志は、インターフォンを押した。

しばらくして、一人の少女が玄関から顔を出した。彼女は、誠司の娘だ。

「どちら様ですか……あ、室田さん。いらっしゃい」

少女は、室田の顔を見ると口許を緩めた。

「唯依ちゃん、お父さんはいるかな」

「はい。あ、どうぞ」

唯依と呼ばれた少女は、孝志を招き入れる。

「じゃあ、お邪魔します」

「父さん、室田さんだよ」

唯依は、二階に向かって叫ぶ。

「わかった」

声が返ってくる。

「上がってもらってくれ」

「だそうです」

唯依は、孝志の方を向いた。

孝志は頷いて、階段を上る。

＊

孝志は何度か来ているので誠司の部屋は知っている。その前に立つと、ノックもなしにドアを開ける。

誠司は、なにやらテレビを見ていた。音からするに音楽番組のようだ。

「やあ、久しぶり」

誠司は、孝志の方を見ずに言う。だが、これは珍しい事ではない。むしろ、きちんと挨拶する方が珍しい。だから……それが理由というわけではないが、孝志もノックをしない事で細やかな反抗をしている。

「お久しぶりです」

孝志は頭を下げずにそう言い、誠司の横に座り、テレビ画面を見る。

そこには、曲に合わせて踊っている少女が映っている。

孝志は誠司の顔をじっと見た。

「これなんだろう？」

誠司は、画面を見たまま言う。

「わかっていたんですか」

「いいや、最近気付いたんだ。それで、君が来るのも、そろそろだと思ってね。じゃあ、行こうか」

そう言って、テレビの電源を切って立ち上がった。

孝志も慌てて立ち上がる。

部屋を出ると、唯依が立っていた。

「行くの？」

と、一言。

「ああ」

「あたしも行っていい？」

「構わないよ」

こうして、唯依も行く事になった。詩稀の最高能力者の元に――

＊

「そういえば、奥さんはどうしたんですか？」

道すがら、孝志が訊いた。

「ああ、亜依は誠也と一緒に出かけてるよ」

その言葉を受けて孝志が、

「というより、出かけさせたんでしょ」

と、言った。

「まあね」

誠司はそれを否定しなかった。

「意地の悪い人ですね」

「巻き込むわけにはいかないからな」

「それはそうですけど」

唯依は、そんな会話をしている二人の後ろを歩いている。別に、二人に遠慮をしているわけでもなんでもない。ただ、黙って聞いている方が面白いからだ。

そうこうしているうちに、目的の場所に着いた。

「いつ以来ですかね」

「唯依の時、以来だろうな……二年ぶり、くらいかな。正直、ここにはあまり来たくないんだが」

「確かに、ここに来る理由がない方がいいんでしょうけどね」

誠司は苦笑いを浮かべた。

目の前には、巨大なビルが建っている。神崎グループの本社ビルだ。

三人は、緊張した素振りもなく、さりげなく当たり前のように入っていく。

そして受付で、

「椎崎と申しますが、会長に面会したいんですけど」

と、それだけを告げる。

椎崎と名前を出せば、どんなに忙しくても最低、面会までは至らなくても会話くらいはできる。それは、相手の方が椎崎が訪れる理由をきちんとわかっているからである。

「会長室でお待ちです」

「ありがとう」

そう言うと、エレベーターのボタンを押す。

しばらくすると、扉が開いた。

三人は、それに乗って最上階の会長室へ向かう。

最上階は会長室しかない。フロア全体が会長室なのだ。

チン、という音と共に扉が開く。すると、目の前に一人の女性が立っていた。

その女性は三十代前半で、知らない者が見れば会長秘書に見えるだろう。しかし、彼女こそが、この神崎グループの会長なのだ。

「お久しぶりです、璃織魚さん」

そう、彼女こそ神崎璃織魚、その人だった。

あの二十年前の事件のあと、彼女は神崎グループを継いだ。最初の頃こそ梢がサポートしていたが、慣れてくると一人で全ての業務をこなすようになった。

それでも、たまに梢に相談をしてはいる。家族のいない璃織魚にとっては、梢は唯一の親族なのだから。

「こちらこそ、御無沙汰していました」

丁寧な口調で返答する。

「さあ、中へどうぞ」

璃織魚は先頭に立ち部屋に入る。

部屋の真ん中には、大きなソファがテーブルを挟んで向かい合わせに並んでいる。

誠司と唯依と一緒に座り、孝志はその向かいに座った。

璃織魚は、コーヒーカップを持って現れた。

「唯依さんもコーヒーでよかったかしら？」

そう言いながら、三人の前に置いていく。

「あ、はい。ありがとうございます」

誠司はリラックスしているが、孝志は少し緊張している。唯依に至っては、ガチガチになっている。

「で、今回の目的ですが……」

誠司は、早速本題に入った。

「そうですね。今回はなんなのですか？」

唯依は、孝志の横に腰を下ろした。

「詩稀の能力者が能力を使用しています。おそらく、本人は気付いていないでしょう。というよりも、その事を知らないと思います」

「あなたがそう感じるのならそうなのでしょうね。で、あなたの考えは？」

「孝志の能力でなんとかなるでしょう」

誠司は孝志の方を見た。

孝志も、自分の能力が必要だという事はわかっていた。しかし、勝手に動くわけにはいかない。

誠司は、あの事件のあと、詩稀の者に能力を使わないようにしようと提案した。詩稀の最高能力者の璃織魚がそれに賛成し、その案は可決された。

それ以来、能力をどうしても使用しなければならない時は、璃織魚に許可をもらわなければならない事になった。

だが、ほとんどの村を去った能力者は能力を使用しておらず、あの事件に関わった者たちで残った者も数えるほどしかいない。

だが、それを決める事で、長年の詩稀の中の問題は解消された。

「そうですか」

璃織魚は、隣に座っている孝志を見た。

「そこで、お願いがあるのですが、その本人をここに呼んで欲しいんです。もちろん、いつでも構いませんが」

「わかりました。で、その人物は誰ですか？」

「歌手の坂木あやです」

＊

あやは、突然、神崎グループの会長に呼ばれた事に戸惑っていた。

オフだったのだが、突然マネージャーから電話がかかってきた。

『オフのところ悪いんだけど、今から事務所に来てくれないか』

彼女のマネージャーは、二十代半ばで、少しオドオドした性格だ。なので、仕事を自分で取ってきた事などない。元々、仕事は向こうから来るので、その必要はないのだが。

慌々事務所に行くと、玄関の所に、ハンカチで汗を拭いているスーツ姿の男がいた。彼こそ、彼女のマネージャーだ。

そしてすぐ、車に乗って……そこで初めて目的地を知らされた。

そういったわけで、あやは神崎グループの本社ビルの前にいる。

玄関には、すでに璃織魚本人がいた。その横には誠司がいる。孝志と唯依は待合室にいる。

「坂木あやさんね、初めまして」

璃織魚は握手を求める。あやはその手を握る。

「こちらこそ……あの……それで……」

あやは、戸惑いを隠せない。

「ちょっとね、お話があって電話をさせてもらったの。それにしても、いきなりでごめんなさいね」

璃織魚は、あのあとすぐに電話をかけ、あやを呼び出した。まさか、その日いきなりに来れるとは、さすがの誠司も驚きを隠せなかった。

「マネージャーさんですね。少し彼女をお預かりします。できれば、マネージャーさんには席を外していただきたいのですが……」

璃織魚は、汗を拭いてオドオドしているマネージャーに言った。

「あ、はい」

マネージャーは、誠司をチラリと見た。

「大丈夫ですよ。別に、なにをするわけでもありませんから」

嘘だった。

「ちょっとした、個人的なワガママです。知り合いが彼女のファンで、できれば私もお会いしたかったですし。もちろん、仕事としてのギャラはお支払いします」

「は、はあ……」

「よろしければ、監視カメラがある部屋で用事を済ませます。それをチェックする……という事でどうでしょうか？」

「は、はあ。それなら……」

マネージャーは、汗を拭きながら答えた。

「じゃあ、行きましょう」

あやは、璃織魚に連れられて、応接室に向かった。マネージャーは受付の案内で、別室にビデオが設置された部屋に向かった。

孝志と唯依もそれに続く。

「ここで少しだけ待っていてもらえるかしら」

応接室に案内されたあやは、ソファに座って無言で頷いた。誠司は部屋に入らずドアの所にいる。

「そうそう、飲み物はなにがいいかしら。コーヒー、紅茶、ジュース……お好きなものを言って」

あやは少し考えたが、

「じゃあ、紅茶で」

「わかりました」

そう言うと、璃織魚は部屋を出た。そこには、孝志と唯依がいる。

「ちょっと、飲み物を取ってきますので」

そう言って、璃織魚は別室に向かった。

「ねえ、璃織魚さんって、いつもああなの？」

唯依が誠司に訊いた。

「できる限りの事は、自分でする人だから。それに、誰も彼女のコーヒーや紅茶にはかなわないからね」

しばらくして、璃織魚が戻ってきた。

「じゃあ、行きましょうか」

孝志がドアを開ける。

「ありがとう」

璃織魚のあとに続いて、三人も中に入る。

あやは、驚いたように三人を見る。入るとすぐ、孝志は能力を解放した。

「あ、あの……」

「ああ、この人たちなの、あなたに会いたってというのは」

璃織魚は、彼女の前に紅茶のカップを置いた。その横には、ミルクとレモンも置く。

その様子を、マネージャーは別室で心配そうに見ていた。だが、声は聞こえない。本来、音声も聞こえるのだが、孝志の能力で音が遮断されているのだ。

「さて、早速だけど用件を言おう」

誠司が話し始める。

あやは、怯えた表情で見る。

「君の能力を封印させてもらう」

「……え？」

あやは、予想もしなかった言葉に驚いた。

「ちょ、ちょっと待ってください。能力ってなんですか？ それに、封印って……？」

あやは慌てる。

「知らないのも無理はない。君の先祖で能力を持っていたのは、ずっと昔の一人だけなんだから」

その言葉に驚いたのは孝志だった。

(いつの間に、そんな事を……いや、訪ねていったあの時には、もう……)

孝志は、誠司の行動の早さに感心した。

「君は、〈遠声〉の能力を持っている」

「トオコエ？」

あやは首を傾げる。

「その能力は、人の心に声を伝える能力だ。もちろん、耳にも聞こえるが、そんなのは比じゃない」

「そ、そんな……」

言われて、あやは力が抜けた。

思い返せば、思い当たる節がないわけではない。ファンレターには、必ずとっていいほど、心にジーンとききました。心が震える感じでした。心が涙を流しているような、そんな気持ちになりました……などと書かれてあった。

「それで、どうするんですか？」

あやは、意外なほど冷静だった。

「孝志、頼む」

孝志は頷いてあやの前に立った。

「これから、彼が君の能力を使えないようにする」

あやは身体が震えるのを感じた。

「大丈夫。怖がらなくていい。痛くないから。怖ければ、目を閉じていればいい」

しかし、あやは目を閉じなかった。代わりに、コクンと頷いた。

「やってくれ」

孝志は、あやに掌を向けた。

視覚では認識できないが、そこからわずかに風が動いている。そして、その風が彼女の能力を包み込んでいるのだ。

特質だからこそできる技だった。

これで、彼女の能力は外に伝わらなくなった。

「終わったよ」

誠司が優しく言った。

あやは、紅茶を一口啜った。

「おいしい」

笑顔でそう言う彼女は、普通の女の子だった。

「ああ、紹介していなかったね。娘の唯依だ。よろしく」

誠司は、あやに唯依を紹介する。

「椎崎唯依です。よろしく」

「唯依も、詩稀の能力者なんだ」

「……詩稀ってなんですか？」

「そうだったね。詩稀について話しておこう」

誠司は、これまでの詩稀の歴史をあやに話して聞かせた。もちろん、二十年前の事件の事も話した。

「……そんな人たちがいたんですね」

あやは、素直に驚いた。

「そんな一族の一人だったんだ、あたし」

自分の事を知った彼女は、嬉しそうに笑った。

*

能力を封印してから、彼女の人気は落ちた。

ほぼ、能力に頼っていたのだから仕方ない。

唯依は、心配になって彼女の携帯電話を手にし、彼女の番号を押した。これは、能力を封印した時に教えてもらったのだ。

あやは、すぐに出た。

『もしもし』

「もしもし、あやちゃん。あたし。唯依」

『ああ、唯依ちゃん』

その声は、心なしか元気がなかった。まるで、心が乾いているような……。

『どうしたの？』

「別に用はないんだけど、ちょっと気になって」

『ああ、最近、落ち目だもんね』

「あ、いや、そういうつもりじゃ……」

『わかってる。でも、能力がなくなってから、本当に……自分の実力ってこんなもんだったのかな……』

「ねえ、家に行ってもいい？」

唯依は、一つの決断をした。

『え、別にいいけど……』

「じゃあ、これから行くから」

『でも、あたしの家、知ってるの？』

「あ……っ」

言われるまで気付いていなかった。唯依は、あやの自宅の場所を知らない。

『ふふっ』

あやは笑った。なんだか、元気が出るような気がした。単純な事に、不安が吹き飛んでしまうような感じがした。

「笑わないでよ」

『ゴメン、ゴメン』

「もう……」

『えっとね……』

あやは、自宅の場所を言う。

「うんうん……」

唯依は、メモをとりながら聞く。

『じゃあ、待ってるから』

「うん」

そう言って、電話を切った。

唯依は、父親の誠司の部屋に向かった。

「父さん、お願いがあるんだけど……」

「行ってきたらいい。ただし、璃織魚さんには断っておけよ」

背中を向けたまま言った。

「うん、ありがとう」

唯依は、スキップをしながら家を出た。

「やれやれ」

誠司はため息をついた。

*

一度、璃織魚の所に寄り、事情を話して能力を使う許可をもらった。

急いで、あやの自宅に向かう。

あやの自宅はマンションの一室だった。マンションの入口のインターフォンを押し、呼び出す。
マンションのドアが開き、唯依は中に入る。

あやの部屋がある階までエレベーターで上がる。

エレベーターのドアが開くと、すでにあやが待っていた。

「こっちよ」

あやのあとに付いて歩く。

あやの部屋は、綺麗だった。ゴミがなく片付いているのはもちろん、内容が女の子っぽかった。
。

「かわいい部屋」

「ありがとう」

あやは素直に喜んだ。

「それでね……」

唯依は、なんとか目的を言おうとした。

「ただ、元気付けるためじゃないみたいね」

「うん」

唯依は小さく頷く。

「ちゃんと、許可ももらってきたの」

「また、あたしになにかするんだ」

「ゴメンナサイ」

唯依は、心苦しくなった。

「いいのよ。どうせ、このままじゃダメになっちゃうし」

あやは、吹っ切れた。

「あたしは、唯依を信じる」

「ありがとう」

唯依は、あやの優しさに感謝した。

*

唯依は、あやを椅子に座らせると、あやの胸元に右手を当てた。

「あなたの心は乾いてしまっている。潤いがないの。だから、なにもできない。やる気が出ないの」

そう呟きながら、右手に集中した。

なにも見えない。しかし、確実にあやの心に水が送られている。

心に潤いを与える。

唯依は〈水を操る能力〉の特質能力者だった。

物理的でない水を操作できる。

その能力で人の乾きを癒せる。

心の才能の芽に水を与えて成長させる。

そんな事ができるのだ。

「おしまい」

唯依は、優しく語りかけた。

「ありがとう」

そう言ったあやは、さっきまでとは全然表情が違った。

「これで、大丈夫。実力が出せるから」

「実力？」

あやが訊く。

「そう、実力。あたしの能力で、あなたの心の乾きを潤すと同時に、才能の芽にも水分をあげたから。すぐに芽は成長して、大きな樹になるわ」

あやは、真剣な目で聞いていた。

「そうしたら、本当の才能が出せる。あやちゃんなら大丈夫だよ」

「ありがとう」

あやは涙を流した。

「あれ？ どうしたんだろう」

それは、自然に溢れてきた。

あやは照れ臭くなって、あははっ、と笑った。

*

それから――

あやは、今までとは違った雰囲気の曲を発表し、人気を取り戻していった。

以前ほどとはいかないまでも、確実な実力でそれに迫ってきている。

最近では、様々なジャンルで活躍しており、以前は不評だった役者としても成功をおさめている。

*

「よかったね」

唯依は、あやが出演している番組を欠かさず見ている。

「姉ちゃん、知ってるの？」

隣で見ていた誠也が言う。

「え……？ うん、友達だよ」

「うっそー、姉ちゃんがあんな人と……」

誠也は心の底から驚く。

「ねえ、父さん」

唯依は、誠司を見る。

「ああ、本当さ」

「父さんも会った事あるの？」

「まあね」

「そんなー。ねえ、母さんは？」

「あたしはないわ。でも……」

亜依がそう言った時、ピンポンとインターフォンが鳴った。

「はい」

そう言いながら、唯依が玄関に急ぐ。

「いらっしゃい」

唯依は笑顔で玄関のドアを開ける。

「久しぶり」

そこには、テレビに映っている少女――坂木あやがいた。

室田孝志はある墓の前に立っていた。周りには誰もいない。

「菜々……」

その呟きがその場を支配する。

「今年もやってきたよ」

孝志の頬を涙が伝う。

それと同時に、雪が降り始める。それが、さらに音を無くしていく。

「そういや、あの日も雪が降ってたっけ……」

孝志は当時の事を思い出す。

それは、思い出したくもない出来事だった。その日、菜々が事故に遭った。そして、それが直接的な原因となり……他界した。

*

——「あたし、風になれるかな？」

——「風？」

——「そう。あたし、風になりたいんだ」

——「どうして？」

——「あのね、風になってどこまでも飛んでいきたいんだ」

——「どこまでも……？」

——「そう、誰かの心を吹き抜けていくような」

*

「風、か……」

そんな会話を思い出す。

楽しかった思い出。

一番輝いていた日々。

そんな日々を振り返っていると、自然と思い出されてしまう。楽しかった日々の、今では悲しい贈り物。

「貴女の言葉は風となり 僕の心を吹き抜ける 時にそれは向かい風となり 僕の行く手を遮り 僕の心を傷つける 時にそれは追い風となり 僕に道を指し示し 僕の心を勇気づける それは全て君の風 それは全て君の優しさ 君の風に包まれて 君の優しさに包まれて 僕も風となる」

孝志は、菜々に贈った詩を口ずさむ。それは、彼女への最後のプレゼントとなった。

青春と俗に言われる時代。

淡く切ない日々。

様々な思い出。

改めて思い出すと辛くなってくる。

楽しかった日々とあの日の落差が激しすぎたから。

「あれから十年も経ったんだね」

孝志は優しく墓石を撫でる。まるで頬を撫でるように優しく……。

「菜々は風になれたのかな？ ……ううん、なった。菜々は風になったよ。だって、菜々は俺にとって風だったんだから。菜々の風は俺の中でずっと吹いているんだ。菜々との思い出を忘れない限り、ずっと……」

涙が溢れて溢れて止まらない。

出会いを思い出す。

再会を思い出す。

そして……。

別れを思い出す。

涙が止まらない。

＊

――ザクッ！

その時、砂利を踏む音がした。その音で現実に戻る。

孝志はゆっくりと振り向く。

「椎崎さん……」

そこには、花束を持った椎崎誠司がいた。その隣には亜依もいる。

「遅くなってすまないね」

そう言って誠司は墓の前にしゃがみ、線香に火を付ける。そして、手を合わせる。その横で亜依もしゃがんで手を合わせる。

「いいですよ。お二人とも忙しいでしょうし」

二人が顔を上げるのを待って孝志が言う。

「それに、来ていただいただけで……」

孝志は涙を堪えようとする。それを、誠司は的確に見抜く。

「泣きたい時は泣けばいいのさ。我慢する必要なんかない」

「……すみません」

その言葉に甘えるように、孝志は涙を流す。それは悲しさもあったが、二人が来てくれた事への嬉しさもあった。

「もう、十年なのね」

ずっと黙っていた亜依が口を開く。その目には涙が浮かんでいる。

室田孝志と愛藤菜々は、二人からすれば弟・妹のようなものだ。

そんな妹のように思っていた菜々が、十年前の雪の日、あの事故をきっかけに菜々は帰らぬ人となった。亜依と誠司も悲しみを隠せない。

その時の事を思い出すと、孝志は自分を責めずにいられない。

その事故は、孝志が待ち合わせに遅れたために起こったようなものだった。もし遅れなければ菜々はその場にいなかったし、もちろん事故にも遭わなかった。

「菜々……ゴメン」

当時、何度も口にした言葉。

言っても言っても言い足りないくらい言った。

それでも孝志は、その言葉しか知らないかのように言い続けた。

「孝志くん、自分を責めちゃダメよ」

亜依が孝志の肩に手を添えて優しく言う。

当時もそうだった。

見ている方が心苦しくなってくる。それほどまでに孝志は自分を責めた。

「ありがとうございます」

孝志は涙がこぼれないように空を見上げた。それでも涙はこぼれる。

――ヒュウ！

そんな涙を吹き飛ばすかのように風が吹いた。

「菜々……」

その風が菜々に思えた。菜々が泣かないでと言っているかのように思えた。

孝志は無理矢理笑顔を作る。そんな孝志を誠司と亜依は心配そうに、それでも優しく見つめる

。

(そうさ、菜々は風になったんだ。そして、ずっと一緒にいる。そうだよな)

孝志は空を見上げた。

(菜々は風になって、俺の心の中で吹き続けているんだ)

心は晴れ。

風力は七。

俺は、人の多い駅前で彼女を待っている。

今日は、お菓子業者の画策により広まった不思議な日だ。

なんでも、チョコレートの力を借りて愛を告げる……なんて、イマドキやっている人はいるんだろうか？

だが、それを否定する気は毛頭ない。貰えたら嬉しいもんね。

でも、この日ってそんなにいい事があった日じゃないんだけどね。どうも、血に縁があるように思えて仕方ない。

にしても、全然来ない。まあ、約束の時間まではまだあるんだけど……。

気付けば、雪がちらついている。

そういえば、最近サボってたな……。

ふと、俺の仕事の事を思い出した。

どうも、俺の一族は〈記録〉とかいう面倒なものがある。嫌でも、詩稀の人たちの歴史を未来に伝えなければならないらしい。しかも、本家は絶えているので、俺たち分家がそれをしなければならないらしい。

そんなこんなで俺も過去の歴史を記録している。

でも、たまには整理しないとごちゃごちゃになってしまう。で、俺がサボっていたのはこの作業だ。

つうわけで、待ち時間を利用して整理する事にする。

やる気が出た時にしておかないと、そろそろヤバイから。

俺は、目を閉じて記録を探した。

詩稀村の歴史自体は、すでに整理し終えている。

で、二人の時空の能力者の出来事……これがまだだ。

まあ、今日はこれを整理しよう。順番的にもそうだし、ね。

時空の能力者の一人は、亜依という名前。彼女は、本当の両親を知らずに育った。

それがあの日、神崎璃織魚が操る人形、グビディと出会った。

これは偶然といえば偶然で、運命といえば運命だった。

それと同時期に、もう一人の時空の能力者である誠司もグビディに出会った。

どうも、璃織魚自身はその二人に関して、なにも知らなかったような節がある。

で、運命の悪戯とでもいふべき出来事を経て、二人は互いの存在を知った。

それから、二人は `f o r s t r e k i` とかいうものを探すように言われて旅に出る。

最初に行ったのが不思議な森で、そこで出会った少年に教えられた魔女に、探し物はイシであると言われて、それを手がかりに旅を続ける。その時、亜依は自分が大事にしていたロケットがなくなっている事に気付く。

探し物が増え、次の場所は山中で、二人はそれぞれの知り合いと出会う。

その近くの村——鬼無里村で、四人は事件に巻き込まれる。が、なんとか事件を解決して別の世界に移動する。

で、行き着いたのが二十年後の世界。そこで、不思議な少年と天使見習いの少女と出会う。

少女の力を借りて、誠司は自分の能力を固定する。まあ、覚醒とも言える。

次の世界で、亜依は両親と再会する。同時に、ロケットも手に入れる。

実は、そのロケットについていた石と、誠司がしていたピアスの石が f o r s t r e k i というヤツだった。

それを使って、世界を滅亡させるとかいう m o r t o ってヤツを倒す。

これにて任務完了……ってなわけで、元の世界に戻った。

でも、それで終わってはいなかった。

二人の先祖である誠介と容子が隠した地図を探す事になった。

これは、詩稀の能力者の一人である藻音時弥から能力を授けられた綾乃と舜平が二人を巻き込んだ。まあ、なにせよ結局は関わる事になってしまった。

でもって、綾乃は誠司と、舜平は亜依と一緒に探す事になる。

それぞれ、隠し場所と思しき場所は見つけるが、鍵が掛かっている。そこで、二組は鍵を探す事にする。

まあ、色々な冒険があって、なんとか鍵を集めて二枚の地図を手に入れる。

と同時に、綾乃と舜平は能力を失ってしまう。元々、元来のものじゃなかったから、それは仕方ない。

二人の意思を継ぐように、亜依と誠司は地図に印された場所に向かう。

そこで最初に向かったのが、問題の元凶というべき詩稀村。

詩稀村にある不思議な柱の前に立った瞬間、地図が一つになって文字が現れ、二人は姿を消した。

ちなみに、元凶となった事件は神崎禎昭にある。彼の娘が詩稀でも最高と呼ばれる能力の持ち主だった事が始まりだ。

それはさておき、消えた二人は、それぞれ過去に飛ばされてしまった。でも、本来なら存在していないので、普通人には認識できなかった。それを認識できるのは、能力を持った者だけ。

そこで……。

そこまで整理した時、知っている声がした。

「ゴメン、良太。待った？」

俺の待ち人、久藤加奈が息を切らせて走ってきた。ちなみに、彼女も詩稀の関係者なのだが、なんの能力もない。むしろ、自分がそういう一族と関係がある事すら知らないのではないだろ

うか。それが少し……いや、かなり羨ましい。

「全然、今来たところだよ」

なんて、お決まりの台詞を言う。

「嘘ばかり」

加奈は、にこやかに言った。

「肩に、雪、積もってるよ」

「えっ」

慌てて、肩を見る。が、そこにはなんにもない。

「う、そ。まんまと引っかかった」

加奈は嬉しそうに笑う。つられて、俺も笑みを浮かべる。

「ほら、これあげる」

突然、加奈が小さな箱を差し出した。

「ありがとな」

俺は、それを素直に受け取る。

「まあ、ギリだけどね」

なんて、誤魔化し笑いをする。

「というわけで、今日は良太のおごりね」

そう言って、俺の手を引っ張って走り出す。

「お、おい……」

ってなわけで、せっかくやる気が出た整理だったが、続きはまたの機会になりそうだ。

まあ、いつ頃やる気が復活するかは謎だけど。

0 この身体を守るのがワタシの役目

「もう、終わりかしら」

ロッキングチェアに座った少女はポツリと呟いた。

風に揺れるレースのカーテン越しに窓の外を見る。外は真っ青で綺麗だった。

「もう、この景色を見る事はないのかしら。もう、役目も終わりのようだし」

少女は、失っていた記憶を取り戻しつつあった。

『ダメっ！ まだこの世界にいるんだもん！』

そんな少女の中のもう一人の少女がそれを拒む。

「ねえ、あの人に言われた事は守ったわ。これでお終いにしましょう」

少女はまるで母のように優しく言う。

『でもでも、まだこの世界にいたいよ。このままずっと生きていたいよ』

少女は頑なに拒み続ける。

「ダメなの。あの子にちゃんと返してあげないとね。そうでしょ？ 莉緒ちゃん」

『ダメじゃないもん！ 頑張ったもん！ だから、ご褒美にずっと生きていていいんだもん！』

莉緒の中の莉緒は、突然に幼くなっていく。それは、消えていこうとしているかのように。

「もうお終いな。この身体をちゃんと璃織魚に……娘に返さないとね。そして、詩稀の能力者を守らないと、ね。だから、莉緒ちゃん、わかってね」

『わからないもん。莉緒はそんなの知らないもん。この身体は莉緒のだもん。莉緒の身体だもん。だって、莉緒は莉緒だもん』

「莉緒……いいえ、もう一人のワタシ。約束だから。そして、ワタシの願いだから」

『でも……でも、莉緒は死にたくないもん』

「いいえ、莉緒ちゃん。ワタシは死んだのよ。あの日、璃織魚を助けるために、ワタシは魂をこの身体に入れたの。そして、璃織魚に変化が現れるまで、その年齢になるまでこの身体を守るのがワタシの役目。そして、璃織魚は変わろうとしている」

『それでもイヤだよ』

「ごめんね、莉緒ちゃん。全部ワタシが悪いの。ワタシに自信がなかったばかりにあなたを生み出してしまった。ごめんなさいね」

莉緒は自分の身体を抱きしめた。

「あなたは、ワタシにとってもう一人の娘だから。誰がなんと言っても、あなたはワタシの娘だから……」

『……うわあああああん！』

莉緒は泣いた。

これから起こる事を知ってしまった。知りたくなかったのに。

それでも……それでも、莉緒は望んだ。

この身体を璃織魚に返そう。

それが、莉緒が今まで生きてきた意味。役目。証。

そんな莉緒の想いとは裏腹に、神の力を得ようとする者同士による争いは起こる。それはもはや止められない。

*

その家の前に一人の男が立っていた。

男は家を見上げると、インターフォンを押した。

——ピンポン！

『はあい』

女性の声が返ってくる。

「初めまして。わたくし神崎禎昭の使いでやってまいりました橋田一範と申します」

その男はそう名乗った。

『神崎禎昭さんの……』

女性は意外な名前に驚きを隠せなかった。

「はい。突然で申し訳ないと思っております。ですが、禎昭様がどうしてもお会いしたいそうなのですが……」

『わかりました。すぐに支度しますので』

「はい。しばらくここで待たせて頂きます」

しばらくして、一組の男女が家の中から出てきた。

「お待たせしました」

男の方が言った。

「いえ、突然の事で申し訳ありません。それでは行きましょうか、富所さん」

そう言うと、橋田は車に乗り込んだ。

そして、富所夫妻も車に乗り込む。

車は神崎禎昭の元を目指して走りだした。

神崎邸――

そこで、全ての決着がつこうとしている。

「時弥……」

吉住健一が声を発する。彼は目の前に立っている藻音時弥を睨み付けている。

その健一の横には、彼の弟である藻音時也と、現神崎家当主である神崎禎昭の妹である宍神梢、そして吉住健一の妻である吉住可奈子がいる。四人が四人とも、時弥に対して敵意を抱いていた。

「三対一か……分が悪いな……」

と、時弥は余裕を見せるかのように笑みを浮かべる。時弥は能力者でない可奈子は敵にすら値しないと考え、数えない。

*

「なんだか面白い事になってるね」

「そうね」

その様子を、少し離れた場所から、久遠隼人と相模原渚が見ていた。

「これは、かなり都合がいいね」

「お誂え向きってヤツね」

渚が笑みを浮かべる。

「うまくいけば、ここで全てが始まるかもしれない」

「うまくいくといいわね」

二人は、ただこの争いを傍観している。二人にしてみれば、どちらが勝とうが興味はない。むしろ、rozarioにさえ興味はない。それは、二人がDioの存在を知らぬが故の行動だ。それを知ってさえいれば、二人とて参戦せずにはいられないだろう。しかし、村の外で育った二人は、その事を知る機会などなかった。

*

「卑怯だとしても言いたいのかい、兄さん」

「いや。お前たちを卑怯だなんて思わないさ。矮小なヤツらにはお似合いだからね」

「兄さん、あなたって人は……」

時也は唇を噛んだ。

「まあ、だからといって、このまま普通に闘えばこちらが不利。それはいただけない。だから、街でこいつらを雇わせてもらった」

その声を合図に、高校生くらいの少年たちがゾロゾロと現れる。その数は、ざっと十人くらい

はいるだろう。

「兄さん、あなたって人は……。いや、あなたはもう人じゃない」

「おいおい、実のアニキに対してそれは酷いな」

「あなたなんて、もうアニキじゃない！」

そう言って、時也は飛びかかる。

「時也さん、待つんだ」

健一が止めようとするが、その制止を振り切って時也は進む。

「おい」

時弥は一人の少年に合図を送る。

「はい」

その少年は頷くと、一歩前に出た。

「そこをどけえっ！」

時也はそのまま、まっすぐ突っ込んでいく。

「バカだな、お前は」

その嘲笑と時也は吹き飛ばされるのは同時だった。

時也は、その少年の拳をまともに食らい、吹き飛ばされた。

「グハッ……ゴホッ……ガハッ」

時也は腹を押さえて嗚咽する。

「時弥、お前いったい……」

健一は一歩下がって時弥を睨む。

「驚いたかい？ ちょっと肉体的な能力を上げてやっただけだよ。筋力アップってヤツだ。お蔭で、こいつらは普通じゃ考えられないくらいの力を出せるんだ。その代わりに、おつむの方がちょっとヤバいけどね。まあ、強くなれるんだから、思考能力なんていらなよな」

時弥は、自分を取り囲む少年たちを、まるで道具でも、人形でも見るかのような目で見ると、事実、そこにいる少年たちに思考能力などなく、ただ時弥に従うだけの人形になってしまっているのだが。

「時弥、そんな事をすれば……」

「おいおい、お前がこいつらの心配をする必要はないだろう？ それよりも、自分の心配だよな」

時弥は手をクイツとさせ、一人を健一に喉ける。

「ちくしょう」

健一は能力を放つ。

(悪いな。もう、人格がなくなっちゃえばおしまいだ。人形は燃えてなくなれ！)

健一の両手から炎が飛び出し、時弥が喉けた少年を包む。

しかし、少年は炎に包まれてもなお止まらない。

「なにっ」

健一は驚きを隠せない。

「言っただろ。こいつらに思考能力はない。ただの人形なんだ。人形は熱さを感じない。痛みを感じない。そして、恐怖を感じない」

*

「なるほど、予想以上にいい能力だな」

「そうね」

「だが、このままだと計画が狂いそうだな……」

「あなたが心配するなんて珍しいのね」

「そうかもな」

「そうよ。で、どうするの？」

「まあ、もう少し様子を見ようじゃないか。こんな鬨い、滅多に見られるものじゃないからね」

「そうね」

*

「ふざけやがって……」

健一は口許を拭う。

「健兄……」

健一に加勢しようと梢が前が出る。

「待て、梢は可南子を守ってやってくれ。時也さん、あなただけが頼りだ」

そう、時也は時弥の能力を消す能力がある。

「当然ですよ。任せて下さい」

時也は目を閉じて能力を使用する準備を始める。

「その能力を使わせるわけにはいかない」

兄である時弥は、もちろん時也の能力の事など承知している。

「行けっ」

それを合図に、全員が一斉に飛びかかる。

(おいおい、マジかよ)

健一も思い切った時弥の行動に啞然とする。しかし、それを思っている余裕などない。危機は目の前に迫っている。

「ふざけんじゃねえ！」

健一は目の前全てに炎を放つ。それは、今まで制御していたようなものではない。あの時、満仲の家と久藤の家を焼失させた時と変わらないものだ。しかし……。

「なに？」

健一は目の前の光景を疑った。誰一人として燃えてはいない。

「どうなってるんだ？」

その驚いている健一を見て、時弥は笑いが抑えられなかった。

「お前はやはり愚かだな。同じ能力ばかり揃えても意味があるはずないだろう。その中には壁の能力を持つ者が数人いる。一人一人の能力は矮小だが、集まればなんとかなるものだな」

その言葉通り、最初に動いた二人以外は手を前に突き出している。

「なるほどね……」

時弥の言葉を聞いて納得する。壁の能力はあらゆる能力を防ぐ能力。それが元来のものでなくとも、元々の能力が高いためにそれなりの力がある。それが複数集まれば、たとえ健一の能力が強くとも破る事は困難だ。

「だが、これで勝機が見えた。要は、攻撃の二人を倒せばいいってわけだ」

健一は改めて炎を出現させた。

「健一さん、こちらの準備はOKです」

「よし、これで終わらせる」

健一は炎を手に集中させ、時弥の人形たちに突っ込んでいく。その横を時也が併走する。

「時也さん」

「健一さん」

互いにアイコンタクトで行動を開始する。

「時弥、お前の負けだ！」

そう叫ぶと、健一は炎で周囲を覆った。

「無駄だ。その人形共にはなんの意味もない」

その口調は、まるで傍観者のようだった。事実、時弥は傍観者であろうとしている。最高のショーを特等席で見ている感覚なのだ。

「その余裕がいつまで続くかな」

その健一の言葉が合図だったかのように時也が能力を発動させる。

「兄さん、終わりだ」

時也は目の前で壁を形成している少年の壁に触れる。

「君たちは自分たちを恨むんだね」

そう言うと、時也は力を込める。

すると、壁があっという間に消えてしまう。

「あれが、消去の能力……」

梢はそれを見て驚きを隠せない。今まで知ってはいたものの、能力を消すところを見た事はなかった。時也の消去は、兄である時弥の授与で与えられた能力に対してのみ使えるものだったので、今までその機会がなかったのだ。能力の発動は、これが初めてといってもいいかもしれないほどだ。

「兄さん、あなたの野望は終わりだ」

「そういう事だ、時弥。お前はここで負ける」

壁の能力を失った少年を健一の能力が襲う。

「……………」

その少年は、声もなく焼失する。そこにはなにも残らない。

「きゃっ」

梢はその光景に目を手で覆う。健一の味方である梢がそうするほど、それほどまでに残酷な光景だった。

同じようにして、他の能力者も焼失した。

*

「くそっ」

手駒をなくした時弥は背を向け逃げる。

「待て！ 時弥あ！」

健一は咆哮を上げながら時弥を追う。

「なんてな」

そう言うと、時弥は急に立ち止まり振り返った。

「なっ……」

健一がそれに驚いた事は云うまでもない。慌てて止まる。

「時弥、やっと観念したか」

健一はジリジリと歩み寄る。

「そうだな。だが、ここでわたしを殺せば、鍵の在処はわからぬままだぞ」

しかし、それに対して健一は、

「馬鹿かお前は。そんなもの、時空の能力者に探させればすむ事。そんな脅しにもなっていない脅しなどなんともない」

「くっ……」

時弥は苦虫をかみつぶしたような表情をする。

(なるほど、そういえばそうだな。わたしとした事が、ここで目算を誤るとはな……)

時弥の計画が狂い始める。

「お前はなにがしたいんだ」

「時間稼ぎか？ それほどまでに生に執着するのか」

「目的とはなんだ」

時弥は健一の言葉を無視する。

「いいだろう。冥途の土産ってヤツだ。教えてやるよ。詩稀の統一だ」

「詩稀の統一だと？」

「そうさ、詩稀を我がものにする。吉田家の正当後継者がいない今、この吉住が全てを掌握するんだよ」

それを聞いた時弥は、笑いが止まらなかった。

「はははっ。やはり所詮は吉住だ。事態を把握できていない。詩稀は吉住のものにはならない」

「なんだと？」

そう言ってから、健一はそれに気付いた。

(あの娘……)

「健一、お前は大きな勘違いをしている。吉田家の正当後継者がいないだと？ 甘いな。吉田の一族は今でも生き延びている」

(まあ、生きていられるかどうかはわからぬか)

と口には出さないが付け加える。

「あのお前が能力を与えた娘が吉田だと言うのだろ？ だが、時空の能力を与えられた人間が生きているとは考えにくい。どうやら、時也さんの能力は発動していないようだしな」

通常であれば、レベルの高い能力を与えられた人間は死に至る。それは、肉体がその能力に耐える事ができないからだ。

しかし、能力者は遺伝的にその情報があるため耐性がある。

「さて、そろそろ準備ができたようだな」

時弥は唐突に呟く。

「第二ステージといくぞ」

――ビュン！

その声を合図に、健一に向けなにかが飛んできた。

「くっ……」

健一は地面を転がりそれを避ける。

「今度はなんだ？」

体勢を立て直して立ち上がろうとするが、

――グラッ！

と、地面が揺れる。

「うっ……」

健一は思わずよろける。

(どうなってやがる？)

見ると、時弥が立っている場所はなんともない。

(時弥の人形か)

――ビュン！

戸惑う健一などお構いなしに攻撃は続く。

「どこだ。どこから攻撃を……あっ」

そう思った時には遅かった。健一の目の前には矢があった。

――ズブッ！

「くっ……」

矢は健一の左肩に命中した。

――ビュン！

矢は休む事なく放たれる。

「くそっ」

健一はそれを避けようとするが、

――グラッ！

と、地面が揺れて体勢を崩す。

――シュッ！

それが幸いしたのか、矢はかすただけだった。

「四射一中か……」

健一を狙っていた少女は残念そうに呟いた。

少女は能力者ではない。だが、時弥に協力している。

少女は弓道の全国大会を目指していた。しかし、腕の骨折により断念。治ってからも練習を続けたが、成績は散々なものだった。

しかし、時弥はそんな少女に目を付けた。挫折してしまった人間ほど仲間に引き込むのは簡単だ。居場所を失った人間は居場所を与えられると安心する。そこから、従順な人形となる。

時弥はその自分の中の法則に従って少女を自分の側に引き入れた。少女も居場所がある安心さ、必要とされているという安心さから時弥に従っている。

(それにしても不思議な人)

しかし、少女の気持ちはそれだけでなく、純粋に時弥に惹かれてもいる。それはまさに、健一の側にいる梢のような存在だ。

(あの人のために、あたしはこの矢を射る！)

少女は弓を引き絞って狙いを定める。

弓矢の少女とは別に、少年がすぐ側にいた。彼は時弥に能力を与えられた能力者だ。

彼の能力は振動。その名の通り、触れた物を揺るがす事ができる。

「……………」

その少年も既に思考能力はない。ただ、時弥に言われた事を遂行するのみだ。

「まったく、あんたは揺らしすぎよ。狙いがずれちゃうでしょ」

「……………」

少女は少年に言うが、少年はその言語を理解する事ができない。

「まあ、いいわ。あたしの腕、じっくりとその身体で味わいなさい」

少女の思いの一つに、仲間への復讐というものもあった。

彼女が故障した際、仲間たちは彼女を嘲笑した。

『これで私たちがレギュラーね』

『いい気になってたんだ。じっくりと反省しなよ』

『まあ、自業自得ってヤツなんじゃないの。所詮はこの程度だったのよ』

(あの時からあたしへの態度は一変した。期待のホープだからと散々もてはやしておいて、そのくせ、怪我をしてもう的に当てる事さえ困難だと知ると……赦せない。あいつらに思い知らせてやる。そうよ。あたしはあの人と一緒に世界を手にするの。そして、あたしを馬鹿にしたヤツらを消してやるんだ)

あの時の出来事を思い出すと怒りが収まらない。だが、その怒りが彼女の原動力になっている。

。

「だから、今あたしはあの人を射る！」

少女は矢を放った。

――ヒュン！

矢は風を切り、健一を目指して飛んでいく。

「今度こそ皆中させてやる」

少女はギラギラした目で健一を睨む。そして、二射目の準備を始める。

*

少女が放った矢は健一めがけてまっすぐに飛んでいく。

「危ない」

――ズブッ！

「可南子！」

そこへ、可南子が割って入る。

「おい、可南子。可南子」

可南子の背には矢が突き刺さっている。

健一は可南子を抱き寄せる。

――ヒュン！

――ズブッ！

「あっ……」

可南子は小さく呻く。

二射目も可南子に命中したのだ。

「どこだ。どこから……」

健一は矢が飛んできた方向を見るが、誰の姿もない。

(慌てるがいいさ。お前からはヤツらを見る事はできない)

時弥は余裕の笑みでそれを見ている。

(これは使える能力かもな)

時弥は振動の能力を与えた少年を見る。そう、彼が空気を揺らして光を屈折させ、自分たちの姿を見えないようにしているのだ。

――ヒュン！

――ズブッ！

健一がそんな事をしている間にも、少女が放った矢が可南子に突き刺さる。

(くそっ。どうすりゃいいんだ)

健一も逃げたいのだが、地面が波打っている状況で動く事は困難だ。しかも、可南子を抱えてなど無理だ。矢を受けた肩で支えられるかも不安だ。

「あな……た」

弱々しいが可南子が口を開いた。

「可南子」

健一は可南子の顔を覗いたその瞬間、

――ヒュン！

――ズブッ！

四射目の矢が可南子に突き刺さった。

＊

「よし、四射皆中！」

少女は自分の成績に喜んでいて、そこに、人を射たという罪悪感はない。

「あの人の邪魔をする者は、みんな死んじゃえばいいのよ」

少女は口許を歪めた。

その上空に、土人形が浮かんでいた。が、例の如く誰も気付いてはいない。

＊

「あらあら、大変ね」

「アイツも相当に悪いね」

「でも、だからこそ」

「そう、だからこそあの能力が欲しい」

「そして、計画の実行……よね」

「ああ」

いつものように喫茶店でコーヒーを飲みながら、隼人と渚はそれを観戦していた。

＊

「可南子……可南子……」

健一は矢が突き刺さった妻の身体を揺する。しかし、なんの反応もない。

「おい、可南子……。目を開けろよ。おい……可南子」

「……………」

健一の間からは涙が溢れる。

「うわあああっ！」

健一は空に向かって吼えた。

――ブォォン！

という轟音と共に火柱があがる。周囲の空気が揺らいた。

(ヤバイな……)

そう直感した時弥は、

「逃げろ、咲羅！」

と、少女に向かって叫んだ。

その瞬間だった。少年が歪ませていた空間が元に戻った。健一の歪みが少年の歪みを相殺したのだ。

「見えたっ！」

健一は二人に向けて能力を放った。

「可南子の仇！」

*

「逃げろ、咲羅！」

(えっ……)

時弥の声を聞いて、弓矢の少女――咲羅は時弥を見た。そして気付いた。

(歪みが消えている)

瞬間の判断だった。咲羅はその場から逃げた。

その刹那だった。健一の能力がそこを直撃した。

「あっ……」

咲羅がそこに見たものは、燃えている人間だった。たとえ思考能力が消えていて人形のようにだとしても、やはり人間に変わりはない。人形だと思いながらも、咲羅は少年の事を人間として見ていた。

「……っ」

咲羅は少年の名を呼ぼうとするが、聞かされていない事に気付く。

咲羅は無意識に走っていた。

『逃げろ』

その時弥の声に支えられて、咲羅は逃げる。どこまでも、どこまでも……。時弥との再会を夢見て。そして、その願いは叶う時はいずれやってくる。しかし、それは咲羅が望む再会ではないのだが……。

*

(なんとか逃げ切れたようだな)

時弥は、走り去る咲羅の姿を確認して安堵する。

(どうしてだろう。わたしはどうしてあの少女を……)

時弥にも不思議だった。今までどのくらいの間を人形のようにして扱い、捨ててきたのかわからない。だが、咲羅に対しては違った。それは恋とか愛とかそういうものではない。

(同じ……か)

時弥は自分に重ねていたのだ。期待されながらも周囲の期待を裏切ってしまった自分。その劣等感が咲羅と重なった。

＊

「ちっ、逃がしたか」

健一は舌打ちするが、追わなかった。いや、追えなかった。可南子をおいてこの場を離れる事など、健一にできるはずもなかった。

「健兄」

そこへ、梢と時也がやってきた。

「……っ」

目の前の光景を見て梢は口を覆った。

「可南子さん……」

そう言ったのは時也だった。梢は衝撃のあまり、なにも言えない。

「兄さん、あなたはどれだけの人を犠牲にするつもりなんですか」

「愚問だな。詩稀の人間以外は人とは見ていない。ただのナマモノだ。それがどれだけ消えようと、関係などない。この程度の犠牲、これから手に入れる力と比べるまでもないだろう」

そう言うと、時弥はその場から走り去った。

「兄さん！」

時也がそれを追おうとするが、

「あたしが行きます」

梢がそれを制した。

「梢……」

健一が梢を見る。梢は、それに無言で頷く。

「頼む」

健一は可南子を抱き寄せる。

(ちょっと羨ましいな……)

そんな事を考えつつ、梢は時弥を追った。

＊

「ねえ、理想通りになっていくと思わない？」

「確かにね。神様っているんだな」

「悪魔の間違いじゃないの？」

「それは人間が勝手に区別したものだろ？ 実際に悪いのは神様かもしれないぜ」

「納得」

喫茶店シフォンに二人の笑い声が響いた。

＊

「藻音時弥。神崎の血を継ぐ者、宍神梢があなたを消去する」

梢は時弥に追いついた。

「くっ……梢か。厄介なヤツだ」

(こいつの攻略に人形を残しておけばよかったか……)

時弥は作戦ミスを悔やむが、今からどうなるというわけでもない。

(所詮は女。なんとでもできるさ)

と、悠長に構える。

「時弥、女だからってなめてかかると後悔するわよ。いいえ、後悔なんてする暇もないわね」

梢は時弥を睨め付ける。

「笑止。いくら神崎の一族とはいえ、従うつもりなど毛頭ない。当主である禎昭様とて、病に倒れている。もはや、神崎も終わりだ。これから、詩稀は藻音が支配する」

時弥の言葉に笑いがこみ上げてくる。

「確かに、兄は余命幾ばくもないかもしれない。だけど……いいえ、だからこそ、兄が護ろうとした希望をあたしが守る」

そう言うと、梢は構える。

(対抗しうる有効な手段は……ないな)

一度は悠長に構えた時弥だったが、自分の方が分が悪い事に気付いていなかったわけではない。むしろ、気付いていたからこそ、そう装っていた節がある。だが、それもここまでだった。

(使えない能力なぞ、いらなかった)

時弥は自分の能力を呪い続けていた。それが原動力となってここまできた。

「藻音時弥。あなたの計画は終わりです」

梢が能力を解放する。

しかし、時弥は逃げなかった。

「……梢様。あなた様も誰かの人形になってはいませんか」

それが、時弥の最期の言葉だった。時弥は梢に分解され、消えた。

こうして、藻音時弥の計画は終わった。

*

『梢様。あなた様も誰かの人形になってはいませんか』

時弥が残したその言葉が頭の中に響き渡る。

「あたしは誰の人形でもない。あたし自身の意思で行動しているんだから」

自分に言い聞かせるようにその場を去った。

*

「計画実行！」

隼人が能力を発動させた。

梢が分解した時弥と地中の金属成分を混ぜ合わせて再構成する。

「これで、第一段階は終了だな」

「次は適格者を捜さないかね」

その間にも、時弥は再構成されていく。そして、そこに残ったものは、小さな十字架だった。その十字架は空中へと消え、喫茶店シフォンに移動した。

「こんなものでどうかな？」

隼人は自分の手にある十字架を見て言う。

渚はその十字架を持ち上げてじっくりと見る。

「いいんじゃない。銀色の十字架……ちょっとお洒落かも」

と、二人はクスクスと笑っていた。

*

「健兄、終わったわ」

梢は健一に報告する。

「rozarioは？」

その問いに梢は首を振る。

「なにもなかった。きっと、どこかに隠したのね」

「あの二人に頼るしかないのか」

健一は可南子をじっと見つめる。

「犠牲が多すぎる。これで神の能力を得られなければ、無駄になってしまう。なんとしても神の能力を手に入れるんだ」

健一は梢と時也を見て言う。その目を見た梢は、健一に恐怖した。

「ここは……どこなんだ？」

誠司は辺りをキョロキョロと見回す。

「どこなのでしょうね」

隣で亜依も同じように見回す。

二人の目の前には大きな屋敷がある。

誠司は地図を広げる。関東地方に十二の点があった。

「俺たちが持っている r o z a r i o は十一個。最後の一個がここにあるんだ」

亜依を見ると、亜依は無言で頷いた。

——タッタッタッ！

と、誰かが走ってくる。それは、二人と同じくらいの少女だった。その少女は、弓を持っていた。なんだか、この場には相応しくない出で立ちだ。

「あの……」

誠司は声をかけるが、少女はそれに気付かず、必死の形相で走り去ってしまった。

「どうなってるんだ？」

誠司と亜依は首を傾げるだけだった。

*

神崎莉緒は自室の窓から二人の姿を見つけた。

「もう、これでお終いにするんだよね」

と、淋しそうに自分に呟いた。

「お終いにしなくちゃいけないんだよね」

確認するようにもう一度呟く。その目には涙が溜まっている。

だが、莉緒は凜とした表情を作り、二人の元へ向かう事を決めた。その手には r o z a r i o があった。

*

「この屋敷の中から……ってというか、勝手に入れば住居不法侵入だよな……」

と、正論ではあるがどこか場違いな事を考えてしまう。第一、吉田邸に入った時はそんな事など微塵も感じていなかった。それは、吉田家の人間である綾乃がいたからではあるが。

「行こう」

と、誠司が一步踏み出した時だった。

「あなた方が時空の能力者ですね？」

と、声がした。

「誰だ」

と、誠司は亜依をかばうように身構え、辺りをキョロキョロと見る。しかし、声はすれど姿は見えない。

「そう身構えないで下さい。ワタシはあなた方に危害を加えるつもりなどありません」

そう言って、物蔭からその声の主が姿を現した。

「驚かせてしまって申し訳ありません」

「……………」

「……………」

そう言うその声の主は誠司と亜依は絶句する。何故なら、その声の主はその喋り方は全くといっていいほど似つかわしくないのだ。

「あなたはいったい……」

誠司は年上に訊くかの様な態度で言う。しかし、どう見ても目の前にいるのは十代前半の……子どもなのだ。しかし、雰囲気はそれとは違う。

「ワタシの名は神崎莉緒。神崎家当主、神崎禎昭の妻です」

「……………」

「……………」

その見た目は少女の口から出た言葉に再び二人は言葉を失う。

(神崎禎昭の妻……?)

(こんなに小さい女の子が……?)

二人の頭に疑問符が浮かぶ。どこをどう見ても子どもである。信じられない。

「戸惑われるのは無理もない事ですね。この身体はワタシのものではありませんから。それよりも、今は早く璃織魚を解放してあげて下さい」

そう言うと莉緒は、二人に手を差し出して広げた。そこには小さな石があった。

「r o z a r i o……」

誠司はそれを手にしようとしたが、それをためらった。

「どうして、あなたは涙を流しているのですか？」

誠司は唐突に言った。

「え……？」

その言葉に莉緒は手を目に持っていく。

「……涙？」

その手は涙を感じた。

「どうして……？ どうして涙なんか……」

不思議そうな顔をするが、莉緒は首を振り、

「いいえ、あの子が悲しんでいるのかもしれませんがね」

と、笑顔をつくる。

「あの子って誰ですか？」

亜依が訊く。

「そうですね。あなたたちには話しておいた方がいいでしょうね。では、娘の所に行きながらでもお話ししましょう」

そう言って、莉緒は屋敷の中に入って行く。rozarioroは、莉緒がまだ持ったままである。

亜依と誠司は顔を見合わせてから、それについていった。

「あれは、今から十三年前の事です」

そう前置きして莉緒は話し始める。

「ワタシは一人の娘を出産しました」

(一人……?)

誠司は疑問に思わずにはいられなかった。D i oである璃織魚は閉じこめられている。だとすれば、目の前の人物は誰だというのだろうか？ 目の前の人物はどう見ても十代前半である。

「ですが、その子はその能力故に命が消えようとしていました。ご存知かもしれませんが、D i oの能力者はその能力の強大さ故に命を失い事が多いそうです」

「ええ、その事は聞いた事があります。なんでも、身体に変化が訪れると定着するそうですが」

以前、グビディから聞いた事を確認するように言う。

「その通りです。そして、そろそろ璃織魚の、あの子の身体に変化が訪れる頃ですから」

「変化ってなんですか？」

亜依が訊くが、莉緒はそれには答えず、

「順を追って話しましょう。璃織魚、あの子が助かるためには、あの子の身体と魂を離さなければならなかったのです」

「身体と魂を引き離す？」

誠司はその非現実的な事に首を傾げる。

「ですが、魂を失うと身体は死んでしまいます。ですから、その身体に誰かの魂を入れなければならなかった」

「じゃあ……」

亜依は言葉をのんだ。

「そうです。ワタシの魂を璃織魚の身体に入れたのです、娘を助けるために。ワタシもそれを望みましたから。この身体こそ、璃織魚の身体なのです」

「……………」

「……………」

二人はなにも言えなかった。言えるはずもなかった。

「ですが、誤算がありました。ワタシの魂をそのまま入れると不自然だという事で、あの人、禎昭はワタシの魂をリセットしました。本当の赤ん坊と同じように。ですが、それはうまくいきませんでした。ワタシの自我が残りました。そして、それとは別に莉緒としての新しい自我が生まれました。その自我によって、ワタシの自我は眠らされていました。結局はリセットなどできず、新しい人格を生み出してしまったにすぎないんです」

「信じられない……」

誠司はそう言うのが精一杯だった。

「それでもよかったんです。結果的にこの身体を護ればそれでよかったのですから。ですが、莉緒の人格はこの身体を自分だけのものにしようとするようになりまして。それで、藻音時弥

を利用して、あなた方の邪魔をしようとしたのです。ですから、彼を憎まないで下さい。彼の意思もあったでしょうが、彼も犠牲者なのですから」

莉緒は時弥を被害者でなく犠牲者と言った。莉緒は気付いていた。時弥の命が消えた事を。

「藻音時弥が犠牲者……？」

誠司には納得がいかなかった。

「あれのどこが犠牲者だっていうんです。アイツのせいで、どれだけの人が不幸になったか……」

誠司は我を忘れて怒鳴る。無意識に綾乃の顔が浮かんでくる。

「誠司さん……」

亜依はそれをなだめようとするが、誠司はそれを振り払う。

「俺は納得できませんね。いくらあなたがなにを言おうと、俺にはアイツが犠牲者だなんて、思えません」

そんな誠司を、亜依は悲しそうに見ていた。亜依は、莉緒の言葉に納得をしていた。それは、幼い頃の時弥を見たから……時弥の苦しみを覚えてしまったから……だから、その言葉に納得していた。

「そうですね。納得できないかもしれませんね。ワタシも、いくら自分を被害者と言っても、ワタシのもう一人の人格が……いいえ、それは逃げなのかもしれません。……どう弁解しようとも、ワタシがそれを行ってしまった以上、それはワタシに責があるという事。ですが、彼は……時弥はワタシたち神崎に操られた犠牲者なのです。それだけは……わからなくても理解しなくても結構ですから、知って下さい。お願いします」

その言葉に、誠司は俯いたままにも答えなかった。いいや、答える事ができなかった。すぐに気持ちが整理できる事など、できるはずもなかった。

「話がそれましたね。えっと……」

莉緒はそこで言葉を切り、どこまで話したかを思い返す。そして、

「……ワタシはこの身体を護るため。そこまで話しましたね」

と、自分だけで納得する。

亜依は耳を傾けるが、誠司は気持ちの整理が出来ないまま、モヤモヤとしていた。

「亜依さん……でしたね。あなたの質問の答えですが……」

そう言い、莉緒は亜依をじっと見た。

「ワタシの役目もそろそろ終わりなんです。璃織魚に変化が訪れる頃ですから。もう、能力を戻しても大丈夫でしょうから。主人の容態が悪化しているのがその証拠です。もう、主人では抑えきれないほど、あの子の能力は強まってきているのです」

莉緒は悲しそうに俯く。

「変化ってなんですか？」

誠司は、未だ解決されない疑問を口にする。

「……変化。あの子くらいの年齢に起こる変化です」

それを聞いて、亜依はハッとした顔をする。しかし、誠司は首を傾げる。

「その変化……それは、第二性徴です」

それを聞いて初めて誠司は納得する。

「おわかりいただけたいですね。……さあ、ここがあの子の部屋です」

と、莉緒は重々しい扉の前で立ち止まった。

「ここにD i oが……」

誠司は舐めるようにその扉を見る。扉の向こうに神（の能力者）がいると思うと、足が震えてくる。

「……………」

亜依も自分の腕をさする。その腕には鳥肌が立っている。

「さあ、r o z a r i oをあの穴に」

そう言って指した所を見ると、扉の真ん中に円上に十二の穴が空いている。

「ここに、これを……」

「入れるんですね……」

二人はそれぞれが持っているr o z a r i oを手にする。

「そうだ、このピアスもそうだったな」

誠司が身につけているピアスの石は、椎崎誠介・容子の墓で入手したr o z a r i oなのだ。

「そういえば、鍵も……」

そして、亜依が母親の梨架から渡された鍵についていた石もr o z a r i oだったのだ。

忘れず、自分たちが身につけていたr o z a r i oもはずす。

「これが最後のr o z a r i oです」

そう言って、莉緒は手にしていたr o z a r i oを二人に差し出した。

誠司はそれをじっと観る。そして、莉緒の顔を見る。

「わかりました……」

そう言い、誠司はr o z a r i oを手にする。

「一つだけ訊いてもいいですか？」

「为什么呢？」

莉緒は首を傾げる。

「この身体は娘さんの、神の能力を持つ璃織魚さんのものなんですよ」

「そうですが」

「じゃあ、その璃織魚さんの魂が戻ったら、あなたの魂はどうなっちゃうんですか？」

「……………」

莉緒は俯いたままなにも言わない。

「……消えるでしょうね」

「……………」

それを聞いて亜依は口許を押さえる。

「……ワタシの魂もそうでしょうが、この新しく生まれた人格の莉緒も……」

莉緒はそこで言葉を切る。

「……ですが、これは仕方のない事なのです。最初から承知の上でしたし。ワタシとあの人、神崎禎昭の願いは娘が幸せに生きる事。そのためなら、ワタシどもはどうなっても……」

「そんなのおかしいです」

亜依が突然大声で言う。

「そんなの……自分の娘のために死ぬなんて、そんなのおかしいです。間違ってますよ。それが、自分の娘の幸せのためなんて、余計に間違ってますよ。だって、お母さんもお父さんもいないなんて……そのどこが幸せなんですか？ 幸せってというのは、両親が揃っている事なんじゃないんですか？ そうじゃないんですか？」

「……………」

「……………」

莉緒と誠司はなにも言えなかった。娘のために命を捨てる莉緒と、両親が揃っていない誠司にとって、亜依の言葉は胸に突き刺さった。

「そんなのおかしいよ。そんなの、絶対に幸せじゃないよ！」

亜依は涙ながらに言う。両親を知らず、最近になって再会した亜依にとって、両親というものは絶大な存在だった。

「亜依……だけどさ……」

誠司はなんとかなだめようとするが、

「それが幸せかもしれないって言いたいんですか？ でも、璃織魚さんは本当にそれを望んでいるんですか？ 自分の親の命と引き替えに外に出たいと願っているんですか？ 今のままなら璃織魚さんも莉緒さんも生きている。でも、でも……」

涙で喋る事ができない。

「でもな、亜依。それって本当に生きているのか？ 外の世界を知らずに、暗い牢獄に閉じこめられて……それって、生まれ出ていないって事なんじゃないのか」

「……………」

亜依は、誠司の言葉になにも言えない。ただ、俯いているだけ。誠司は、
(にしても、さっきのってオペラ座の怪人みたいだな……)

とか考えていた。

「さてさて、お取り込み中に悪いんだが、早く解放しようじゃないか」

突然声がした。

「……………っ！」

「……………っ！」

誠司と莉緒はその方を見て驚いた。そこにいたのは、吉住健一だった。

「どうして、あなたがここに……」

そう呟いたのは誠司だった。

「莉緒様、時弥が持っているはずの r o z a r i o はどこに……」

そう言いながら健一は誠司の手を見た。

「さすがだな。残りは時弥の分だけってとこか？」

「……………」

しかし、誠司は答えない。

「まあいい。力づくでも手に入れるのみ」

そう言って、健一は莉緒に近付く。

「rozarioは、既にワタシの元にはありません」

健一を睨め付けるように莉緒が言う。

「全てのrozarioは、harmonioの手にあります」

それを聞いて健一は亜依と誠司を見る。そして、にやりと笑みを浮かべた。

「なるほど……さすがだな。既に全ての鍵を集めていたという事か。これで、神を神崎の手から解放できるというわけだ」

健一は満足げに言う。

「つまり、もうあんたに用はない……そうなるな」

健一は殺意の目を莉緒に向ける。

(え……っ?)

それに驚いたのは梢だ。梢は、莉緒の存在意義を知っている、健一側では唯一の人間だ。

「健兄……それだけはダメ！」

梢は健一の腕にしがみつく。

「何故止める。梢、お前も所詮は神崎の人間だったという事か。実際、お前からすれば莉緒は姪になるわけだしな」

「違う！ そんなんじゃないの！ 莉緒様を殺してはダメ！」

梢は懇願するが、健一はそれに耳を貸さない。

「邪魔をするようなら、お前であろうとも殺す。神崎は、可南子の仇なんだからな」

と、自分の腕にしがみつく梢を冷ややかな目で見ると、そこには、今までの表面上だけの優しさすらない。その目にあるのは、復讐という名の殺意だけだった。

「健兄……」

梢は力無く膝をついた。目からは涙が溢れる。今まで健一に対して抱いていた気持ちを思い返す。淡く切ない片想い。しかし、願い叶わず失恋。それからもずっと好きであり続けた想い。それらが渦巻くように思い出される。

(だけど、それは全て終わった事。あたしは、過去に生きない。未来に生きる。そう、あたしは兄に託された希望を、未来を護らなくちゃ)

梢は涙を拭き立ち上がる。

「あなたは、もうあたしが知っている健兄じゃない。この穴神梢、神崎の一族として、いいえ、詩稀の一族として神への反逆者である吉住健一、あなたを討つ！」

梢が健一の前に立ちはだかった。

「はっはっはっ……梢、なにを馬鹿な事をしているんだ。今ならなかった事にしよう。さあ、こっちへ来るんだ」

健一は両手を広げる。しかし、梢は健一を睨んだまま動こうとしない。

「梢さん」

莉緒が声を掛ける。

「莉緒様、早く璃織魚様を……」

梢は健一を裏切り、莉緒の気持ちを肯定するように言う。

「それよりも、あなたの身が心配です。誠司さん、あなたが持っている r o z a r i o を一つ、梢に渡してくれませんか」

莉緒には梢の決意を枉げる事はできなかった。だが、なにもできないわけでもない。梢の助けになる事はできるかもしれない……そう考えた。そして、自分の娘である璃織魚の力、r o z a r i o の力に頼る事を考えついた。他力本願かもしれないが、それが唯一最善の方法なのだ。

「え……？ あの……？」

誠司はなんの事やらわからず戸惑う。

「大丈夫です。梢を助けるために、お願いします」

莉緒は真剣な目で誠司を見る。

「わかりました」

誠司は頷き、梢に r o z a r i o を一つ渡す。

「ありがとう」

梢はそれを受け取り、握りしめた。

「梢、それをこっちへ渡すんだ」

「吉住健一、あなたには絶対に渡さない。兄、禎昭が護ろうとした希望は、妹であるあたしが護ってみせる！」

（兄さん……莉緒様……璃織魚様……あたしに力を）

梢は r o z a r i o に願った。額の前に持っていき、祈った。

「そうか、お前は裏切るといのか。ならば、望み通り死ね！」

健一は手を突き出し、炎を発生させる。その炎は梢目掛けて進んでいく。

「梢様！」

――ポウッ！

燃えるような爆発するような奇妙な音がする。

時也が梢をかばうように飛び込んだ。

「時也さん……」

梢の目の前には、火傷を負った藻音時也が倒れている。梢は時也を抱えようとしたが、皮膚がただれていてできなかった。

「時也さん、どうして……」

梢は時也の側に膝をつき涙を流す。

「……………梢様……ご無事でなによりです……あんまり、心配させないで下さいよ」

時也は力無く笑う。

「時也、どうしてお前も裏切りを……」

健一は予想だにしない事に動揺を隠せない。

「健一さん……そんなに驚く事じゃないでしょ。……僕は藻音家の人間です。代々、神崎家に…
…仕えてきた一族……なんですよ。……僕だって……神崎のために……生きて……きた。……あ
あなたの側に……いたのだった……て、そこに……梢様がいたからこそ。……僕は……梢様……を護
るため……に、そこにいた……だけ。それだけ……なん……ですよ」

時也は絶え絶えに話す。

「時也さん、もう喋らないで」

梢の涙が時也に落ちる。

「……梢様、希望を護って下さい……ね……」

そう言って、時也は目を閉じた。それは、眠るように安らかだった。だがしかし、その眠りか
ら彼が目覚める事はない。

「時也さん！」

「時也！」

梢と莉緒の慟哭がその場を支配する。

「時也……おまえはずっとおれを……ったく、馬鹿な話だ。おれは、結局一人だったって事か。
いや、可南子だけか、おれの味方は……」

健一は自嘲するように笑う。その笑い声は、通路に虚しく響いた。

「吉住健一……」

そう言いながら、宍神梢がゆっくりと立ち上がった。

「もう、終わらせましょう。これ以上、あたしたち以外の犠牲者が出ないように」

梢は右の掌を健一に向けた。左は、通路の壁につける。

「なんの真似だ、梢。お前ごときの力でおれの攻撃を防げるとでも思っているのか」

そう言いながら、健一は両手に炎を集める。

「莉緒様、harmonioの二人も下がって下さい」

「わかりました。梢、ありがとう」

「礼なんて必要ないですよ、莉緒義姉さん」

梢は莉緒に笑みを送る。

(梢……あなた、初めて義姉さんって……)

莉緒は、このような場面ではあるが、自分を認めてくれた梢が純粋に嬉しかった。自然と涙が
滲む。

「さあ、harmonioの二人も下がりました」

目に溜まった涙を拭い、亜依と誠司に言う。

「でも……」

亜依は不安そうに梢を見る。なにも言わないが、誠司も同じ気持ちだった。なにしろ、誠司は
健一の能力を目の前で見ているのだ。故に、その強大さを知っている。

「ここは梢に任せましょう。ワタシたちがいれば、逆に足手まといになってしまいます。それに
、梢なら大丈夫ですよ。あの人の妹なんですから」

莉緒は自慢そうに言う。

「わかりました。亜依、ここは下がっていよう。そして、祈ろう。絶対、大丈夫だって」

亜依は無言のまま頷いた。

「準備はできたか、梢」

健一は梢を見下すような笑みを浮かべる。

「ええ、いつでもいいわ。吉住健一、これで終わりよ」

梢は挑発するように健一を睨む。

「そう、これで神崎の歴史に終止符が打たれる。神崎の最期だ！」

健一の雄叫びが通路に響く。それはまるで、獣の雄叫びのようだった。

(r o z a r i o.....あたしに力を)

梢は r o z a r i o に願った。

(璃織魚、梢を護ってあげて)

莉緒は両手を合わせて祈った。

(絶対、大丈夫)

(絶対に大丈夫)

亜依と誠司は信じた。

それぞれの思いが交錯し、 r o z a r i o が光る。

(r o z a r i o ……あたしに力を)

(璃織魚、梢を護ってあげて)

(絶対、大丈夫)

(絶対に大丈夫)

「え……っ？」

その思いは、声となって扉の向こうの璃織魚に届いた。それは、まるで近くで喋っているかのように、鮮明に聞こえる。

さらに、不思議な事に扉の向こうの景色がはっきりと見える。

「どうなってるの？」

このような事は、初めてだった。今まではぼんやりとした光景と雑音で聞き取りづらい声だけだった。だが、声の方は最近になって徐々に鮮明になってきてはいた。それは、禎昭の能力の弱体によるものである事は、璃織魚は知らない。

だが、今回のそれらは、それまでとは比べものにもならない。

「神崎璃織魚さんですね。僕の声が聞こえますか？」

どこからか男の声がした。璃織魚は、その声に全く聞き覚えがない。

「失礼、初めましてなんですよ。僕の名は富所史和。h a r m o n i oです。そして、あなたの目の前の扉の前にいる亜依の父親です」

璃織魚はなにもない空間をキョロキョロとする。

「あなたはどこにいるんですか？」

「少し離れた場所。神崎邸の近くにはいません」

今度は女性の声がした。

「あなたは誰なんですか？」

「ごめんなさいね。私は富所梨架。亜依の母親でh a r m o n i oです」

「あなたもh a r m o n i oなんですか？」

「ええ」

「僕たちは、あなたの父君、神崎禎昭氏の病室にいます」

「璃織魚……もう大丈夫だ。今まですまなかったね」

しわがれた声が優しく語りかける。

「……お父さん？」

それは、初めて聞く父親の声だった。

「璃織魚、今まで辛い思いをさせてしまって、すまないと思っている。赦してくれとは言わん。……言い訳にしか聞こえないだろうが、全てはお前のためだったんだ。お前の命をなんとかして救おうと、わたしは莉緒を犠牲にした。そして、お前の十数年をも犠牲にした。これは、赦されるべき事ではない。だから、わたしはその報いを受けている。璃織魚、わたしはもうすぐ死ぬだろう。その時は、お前が全てを受け継いでくれ。きっと、梢が助けてくれるだろう。そして、そ

こにいるharmoniоたちが、全てに調和をもたらしてくれる」

「でも、お父さん……」

璃織魚は目の前の光景を見た。今まさに、死闘が始まろうとしている。それは、璃織魚の目から見ても、誰かが死ぬであろう事が予想される。

「ああ、その光景ならわたしにも見えている。どうやら、harmoniоの一人が無意識にその能力を発動しているようだな」

「そのようですね。亜依は無意識に発動させていますね」

史和は、禎昭に同意するかのようにつづけた。

「あの子自身が持つ能力〈時空を響かせる能力〉。時空を越えて声と映像を送る事ができる能力。どうやらそれは、禎昭さんの能力をも凌駕するようですわね。もちろん、禎昭さんが今の状態でなければどうかわかりませんが」

「いいや、わたしが全快の時でも敵わないだろうな」

「そうでしょうか」

梨架はクスクスと笑う。

「璃織魚、あとは任せる。莉緒、わたしは先に逝く。娘を頼んだ」

(わかりました、あなた)

今まで沈黙を続けていた莉緒が言った。正確には莉緒とは心の中での会話なので思ったという事になるのだが……。今までの会話は全て莉緒の耳にも……。いや、脳に直接届いていた。そして、それは梢にも。

(兄さん……)

梢は兄の最期に悲しみを隠せない。

「梢、今は目の前の敵だ。健一を倒さぬ限り、璃織魚は護れない」

(わかりました、兄さん)

「それでこそわたしの妹。梢、莉緒、璃織魚を頼んだぞ……」

禎昭はゆっくりと目を閉じた、しかし、呼吸をしており、なによりも扉が開かれていない事からも、彼の命はまだ尽きていない事がわかる。だが、それが風前の灯火である事に変わりはない。

(あの子は、ワタシが目覚めさせます)

莉緒は禎昭に誓うように言った。それは、自分に言い聞かせるかのようでもあった。

(璃織魚、ごめんなさいね。ワタシもあなたを苦しめてしまった。でも、あの人、あなたのお父さんが言ったように、全てを梢に任せます。だから璃織魚、梢を護ってあげてちょうだい)

それが、璃織魚の聞いた初めての母の声だった。その声は、今まで表に出ていた新しい人格の莉緒とは全く別の声だった。今の莉緒の声には、それまではなかった母親独特の優しさがあった。

「お母さん……」

璃織魚は、涙が溢れてくるのを感じた。

「あれ……？ 変だな……」

璃織魚は不思議そうに涙を拭う。

「どうして涙なんか……どうしてだろう……」

(璃織魚……)

「お母さん……」

(いいのよ璃織魚。泣いてもいいの)

莉緒は娘に諭すように言う。

「うん……」

璃織魚はその言葉に甘えるように泣いた。

「あの子たち、頑張ってるわね」

「そうだな」

富所梨架と史和は病室の窓から外を眺めていた。

「申し訳ない事をしていると思っているよ」

そんな二人に神崎禎昭は力無い声で言う。

「これが運命だったのでしょ。でも……」

「あの子たちは、その運命さえも変えてしまうかも知れない。もしかしたら、運命なんてもの、あの子たちには通用しないのかもしれない。僕はそう思います」

「申し訳ない」

禎昭は何度も謝る。

「あの子たちだけではない。君たち二人にも辛い思いをさせてしまった」

「過ぎた事です。私たちは幸せですから」

「そう言ってもらえると心が軽くなる……」

「でも……僕たちが神崎さんに出会っていなければ今頃はどうなっていたんでしょうね……。あの子は彼に出会う事がなかったんでしょうか……」

「わからんな。運命が出会わせるかもしれんし、そうでないかもしれん」

「でも、父親の心境としては複雑なんじゃなくて？」

意地悪な笑顔で梨架が言う。

「そうだな。自分も同じなのに、どうして男親ってのはこう……弱いですね」

「同感だ。自分の娘を助けたい一心で全ての詩稀の人間を巻き込んでしまった」

「大切な娘ですもの。私だって同じ事をしたと思います」

「だが、わたしの我が儘で君たちは娘と会う時間が減った。本当に申し訳ない事をした」

禎昭はゆっくりと目を閉じる。

「それは僕たちが選んだ事です」

「そうです。私たちは自分の意思で自分の娘を犠牲にしました。あの子ならわかってくれる……そんな我が儘をあの子に押しつけたんです」

「君たちは、自分を悪者にしすぎるな……人選ミスだったか……」

「それはあなたも同じですよ。僕たちにどうこう言う資格はないんじゃないですか」

「そうかもしれん。結局は、子どもを護るとか言いながら、実は護られているのはわたしたちなのかもしれんな。護ってやるという気持ちで、わたしたちは支えられている。今、無性にそう思うよ」

「弱気な発言ですね」

「そうだな……弱い。本当に弱い」

神崎禎昭の病室を出た富所史和と梨架は、病院の敷地内の公園にいた。

「長かったな……」

「ええ。でも、短くもありましたね」

ベンチに座って空を見上げていた。

「あれからどのくらいだろうか……」

「十八年ほど経つんでしょうね」

白い雲が様々な形を作っている。

「もう、そんなに経つのか……」

「そのくらいじゃないですか」

＊

二人は出会った頃の事を思い出していた。

今の出来事の出発点。発端は人類の創世記だが、この出来事の発端はこの二人が出会ったことだろう。

そう、二人の出会いは――

＊

太陽の光が眩しい。

なんの変哲もない春の日差しが街を活気付かせる。

少女は、そんな街を鍔の大きな帽子を目深に被ってコソコソと歩いていた。それでも、彼女は
この街では有名で、どうしても住人の目から逃れる事はできない。

そんな行為が気休めにもならない事は本人もわかっている。だが、堂々と歩く事なんてできる
はずがない。

そう、有名だったからだ。有名すぎた。

吸血鬼として。

彼女は吸血鬼として、住人から後ろ指を指されて生活していた。

彼女はその度に住居を変えていた。

しかし、それはどの街に行っても変わる事はなかった。

最初は普通に接してくれる。しかし、それは彼女の事を知らないからであり、それを知ってしま
うと態度は豹変する。

第一、彼女の秘密もどこからか洩れてしまう。

誰かが意図的にしているのだろうが、その犯人はわかっていない。彼女も、捜そうとはしな
かった。

彼女は伝説やおとぎ話に登場する吸血鬼とは異なる。ニンニクや十字架はもちろん平気だ。

しかし、日差しに弱いところは同じであるが、日差しを浴びると灰になるなんていう事はなく、苦手というだけだ。現に、今も太陽の下を歩いている。

そういう体質なのだ。

彼女は血液嗜好症という病気である。その名の通り、血液を欲する病気。治療法は不明。原因も不明。

彼女はこの病気に悩まされ続けてきた。死を選択しようとした事もあった。しかし、今も生きている。そして、彼女はある青年に出会って光を得る。

*

桜の花が散っている。

道は桃色の絨毯が敷かれたように染まっている。

その側に、イーゼルを立ててキャンバスに向かっている青年がいた。

左手にパレットを持ち、流れるような動きで右手の筆を滑らせていた。そう、動かすというのではなく、滑らせるといった表現がピッタリだった。

その動きは滑らかで大胆。加えて繊細。力強さと儂さが共存している。

瞬く間に、キャンバスは絵の具に染まっていく。

そして、絵はあっという間に完成する。

そこには、美しい桜並木が描かれている。

道行く人がそれをチラリと見る。

その口は、おっ……と発しているのだろうが、音としては発せられていない。あまりの素晴らしさに声も出ない、そういった事なのだろう。

彼は絵を描く事を職業としている。しかし、無名である。

誰かのゴーストというわけではない。しかし、絵を発表しようとはしないのだ。

それでも、彼の絵を欲する人はいる。そういう人に絵を売る事によって、彼の生活は成り立っていた。

それでも世に名前が出ないのには理由がある。それは、彼が絵を売る時に言う言葉によるものである。

——絶対に、見せびらかさないで下さい。そっと、ご自身だけで楽しんで下さい。お願いします。

そう儂そうな表情で言われ、絵を買った人は世間にこの絵の素晴らしさを公表しようとはしなかったし、それこそが彼の望みでもあった。

努力で得たものでない才能を振りかざすのがイヤだったのだ。

そんな彼は、少女との出会いで光を得る。

*

「もうイヤだよ……」

少女は、幾度目かの死を選択しようとしていた。

死を望んだ事はいくつかあったし、それはことごとく失敗に終わっていた。その中でも最も彼女の印象に残っているのが、天使の声が聞こえた時である。それが本当に天使の声だったのかどうかはわからない。だが、彼女はそう思っている。

「天使様、ごめんなさい……」

そう呟くと、少女はナイフを喉元に当てた。その時だった。

「お嬢さん、死んではいけないでイすよ」

ふと、そんな声がした。

「誰？ ……天使様？」

少女はキョロキョロと辺りを見回す。そして、宙に浮かんでいる小さな人形を見つけた。

西洋のおとぎ話にでも出てきそうな小人を象った人形は、ペコリとお辞儀をして、

「誠に申し訳ないですが、天使様じゃないんでイす。わたくしめは、プーポと申しますでイす」と、名乗った。

「プーぽ？」

「あなたを出会いの世界へご案内するのが、わたくしめの役目なのでイす。さあ……」

そう言うと、プーポは少女の手を引き、彼女の家の庭先に連れていった。

「ここに、穴があるのが見えるでイすか？」

言われて、少女は目を凝らす。

「あっ……」

すると、うっすらとではあるが、そこに穴があるのが見えた。

「これって、どういう事？」

少女はただただ驚くばかりである。

「さあ、あなたはこの中に入って、世界を旅するのでイす」

「え……？ それって、どういう……」

わけもわからないまま、少女は穴へと入っていった。

＊

「なんだろう、この変な感じは……」

青年はイーゼルに向かったまま、虚空を眺めていた。

彼のキャンバスには、空に浮かぶ黒い穴が描かれている。一見、ただの抽象画にしか見えない。しかし、これは紛れもなく彼が実際に見ている風景なのだ。

彼は、これまでも幾度となくこの穴を見てきた。故に、彼にしてみれば靈感のある人が幽霊を見るように、自分の生活の一部として捉えていた。

いつものように絵を描いていた彼だったが、突然奇妙な感覚がしたのだ。なにかが迫ってくるような、そんな……そう、嵐の前の静けさのような感覚だ。

「なんだ。なにが起ころうとしている？」

青年は目の前の光景を凝視する。

この穴でなにかが起こりそうな、そんな予感だった。

そして、その予感は的中する。

彼が見ていた穴から、小人を象った人形が出てきた。

その異常な光景に彼は驚かなかった。

ただ、ああ、ついになにかが起きるんだ……と、他人事のような感覚だった。

「わたくしめはプーポと申しますでイす。あなたを出会いの世界へ案内するため、やって参りましたでイす」

「わかった」

不思議な感じだった。

なんの迷いもなかった。

気付くとそう答えていた。

「了承していただいて大変嬉しいでイす。ありがとうございますでイす。では、参りましょうでイす」

青年はプーポが差し出した小さな手を取った。

「これから、奇跡が始まるのか……」

青年はそんな事を呟き、穴の中に入っていった。

*

「ようこそ、出会いの世界Renkontō-Mondoへでイす。ここは、人と世界そして時間が交わる場所なのでイす」

暗闇の中にポワッとプーポの姿が浮かび上がる。

「あなたたち二人は、様々な世界に行き、ある物を探すのでイす」

その声と共に、二人の人物の姿も浮かび上がった。ここに連れてこられた少女と青年だ。二人は、突然の事に戸惑いながらも、お互いの姿を確認する。

目深に帽子を被った少女。

スケッチブックを手にした青年。

少女は青年の真っ直ぐな瞳に惹きつけられた。

青年は少女の隠れた表情に惹きつけられた。

それぞれ、同じ様で違う気持ち。それでいて純粋な気持ち。

「さてさて、二人はこれから一緒に旅をしてもらう事になるのでイす。まあ、ありきたりでイすけど、自己紹介なんてしてはどうでイすか？」

プーポに言われ、お互いの顔をじっと見る。

しかし、見つめあうだけで、どちらも口を開かない。プーポはそんな二人をじっと優しく見守るように見ている。

「僕は……」

先に口を開いたのは青年の方だった。

「僕は、富所史和。まあ、見てわかるかもしれないが、絵を描いている」

そう言って、手に持っているスケッチブックを少し持ち上げる。

「私は……」

少女も口を開こうとするが、これまでの恐怖心でなかなか言葉が出ない。

「あの……私は……」

それでもなんとか勇気を振り絞る。

「私は久門梨架……です」

この時、二人の物語は始まった。

*

「まあ、とりあえずお互いの名前はわかりましたでイすね。それ以上の事は、これからの旅の中でわかっていけばいいでイす。さて、これから二人に探してもらうものなのでイすが……」

「ちょっと待ってくれ」

史和がプーポの言葉を遮る。

「なんでイすか？」

「どうして僕たちなんだ。どうして、その役目が僕たちなんだ」

そう言ってから、史和は自分の言葉に疑問を感じた。

――どうして自分はこんな質問をしたのだろう。

――そうだ。わかってるんだ。自分たちでなければいけない。

――自分たちが自分たちである理由。

――自分たちがこんな自分たちである理由。

史和は無言で俯いたまま動かなかった。

「わかっているのではないでイすか？ 自分たちが運命であり必然であるという事をでイす」（そうかもしれない。わかっているんだ。頭でではない。身体でわかっているんだ）

史和はなにも言わなかった。その態度が全てを肯定していた。

「どうやら、理解しているようでイすね。納得はしていないようでイすけど。それでも構わないでイす、理解していただけただけで結構でイすから」

プーポはそこで言葉を切って、改めて二人を見る。

「久門梨架、富所史和。あなたたち二人には、これから未来に起こる悲劇を防ぐための準備をしてもらいたいのです」

「準備？」

「そうでイす。そのために、あなた方の先祖が所有している `forstrecki` を探し出して欲しいのでイす」

「その `forstrecki` とはなんなんだ？」

「それは、世界を護る意思……それを発動させる石でイす」

「それは、どこにあるんだ？」

「わからないのでイす。それについてはこれから説明しますでイす」

そう言うと、プーポの姿が消えた。が、すぐに別の場所に現れた。

そして、なにもない空間に二人の画像が写された。

「この二人は、あなた方の先祖でイす」

史和はその言葉に引っかかるものを感じた。

(なんだ。なにかが……)

そして、気付いた。

「僕たちの先祖……確かにそう言ったな」

「言いましたでイす」

「どういう事なんだ？」

「そのままの意味でイす」

「……………」

史和は隣にいる梨架を見た。

「つまり、僕たちは同じ一族ってわけか」

「そうでイす。そして、同じ能力を有する関係でもあるのでイす」

「能力……？」

「順を追って説明しなければわかってもらえないのでイすので、今は黙って聞いていて欲しいでイす」

そう言われ、史和は黙り込む。梨架は、同じ能力という言葉が頭の中で繰り返していた。

「あなたたち二人は、時空の能力者なのでイす。詳しい能力はわからないのでイすが、この世界に来る事ができると云う事が重要なのでイす。そして、あなた方の先祖である、椎崎誠介さんと容子さんご夫妻も同じ時空の能力者でイした。もちろん、あなたたちとは比べものにならないほど、強い能力を持っていたのでイす。その二人が手に入れた f o r s t r e k i が失われてしまったのでイす」

史和と梨架は黙ってその事を聞いていた。史和は何度も質問しようとしたが、なにを質問すればいいのか整理できずにいた。

「そういうわけで、あなたたちにはそれを探してもらいたいののでイす。でないと、世界が大変な事になってしまうのでイす」

「大変な事？」

史和は訊かずにはいられなかった。

「いったい、なにが……」

「わからないのでイす」

プーポは史和の言葉を待たずに言う。

「わたくしめには、なにも知らされていないのでイす。わたくしめを生み出した能力者もわたくしめは知らないでイす。情報も時間が交錯していて、あやふやなのでイす」

「あやふやって、どういう事だ？ そんな不確かなもので……」

その理不尽とも云える発言に史和は怒りを表に出してしまう。

「怒らないで下さいでイす。でイすが、これだけは確かなのでイす。近い未来に世界は変化の時を迎えるのでイす。そして、変化には必ず危機が伴うのでイす。そして、あなた方にしかそれをくい止められないのも事実なのでイす。でイすが……」

「なんですか？」

「でイすが、その詳しい方法はわからないのでイす。そして、最も重要なのでイすが、あなたの能力は極微弱なのでイす」

そう言って、プーポは梨架を見る。

「でイすが、あなたしかこの時代この世界にはいなかったのでイす」

プーポは残念そうに顔を伏せる。

「とにかく、今は謎だらけなのでイす。わたくしめに言えるのはこれだけでイす。とにかく、世界から f o r s t r e k i を探して下さいなのでイす」

「行きましょう」

梨架は笑顔を作って史和を見た。

「仕方ないんだろうな」

「申し訳ないでイす。なにかわかれば、すぐに報せるでイす」

史和は納得したのを示すように頷いた。

「で、どうすれば世界を移動できるんだ？」

「それは、穴を通ればいいのでイす。ここに来る時に見たはずでイす」

「あれか……」

史和はほんの少し前の事を思い出した。あれからさほど経っていないはずなのに、何年も経ってしまったかのような気分だった。それだけ、この世界での時間が濃く感じられた。

「あれは『時の口』と呼ばれているものなのでイす」

「『時の口』……ねえ。言い得て妙だな。僕たちを呑み込んだんだからな」

「頼みますでイす。今はあなた方しかいないのでイす」

「わかったよ。とにかく、あの石を見つけだせばいいわけなんだな」

「そうでイす」

プーポは嬉しそうに頷く。

「じゃあ、行きましょうか」

史和は梨架に手を差し伸べる。

「……………」

梨架は戸惑いを隠せなかった。今まで人を信頼しては裏切られてきたのだから、それも仕方のない事なのだろう。

(でも……)

梨架は今までと違うなにかを感じていた。それは、『時の口』に入る前に感じたものと同じだった。

――光がそこにある。

「はい」

梨架はその手を取った。

「行ってらっしゃいでイす」

プーポの見送りの中、二人は最初の世界を目指して『時の口』に入ってしまった。

――世界を護るための準備。

そのために……。

「頼みますでイす」

なんの変哲もない街。

大勢の人でにぎ賑わう街。

そして、見慣れた街。

「あっ……」

世界を移動した瞬間、梨架は口を押さえた。彼女にとって最も来たくない場所。そこに二人はいた。

「どうしたんですか？」

史和は隣で青ざめているパートナーに声を掛けた。

「……………」

しかし、梨架はそれに気付かない。ただ、目の前の信じられない光景に戸惑うばかりだ。

最初は、なにも気に留めていなかった街の人たちも、誰からともなしにその存在を見つけた。

「……化け物だ。化け物が帰ってきた」

誰かのその声を発端に、街の視線が一点に集中する。

「イヤッ……！」

梨架はそれに耐えられず走り出す。

「な、なあ」

史和はわけもわからないまま動けなかった。

「どうなってるんだ？ 第一、化け物って……いったい」

標的を失った街の視線は彼女と一緒にいた者にも注がれる。

「お前、あの化け物と知り合いか」

「という事は、お前も化け物だな」

「化け物が仲間を連れて来たの？」

「ふんっ。あんな化け物、我々が滅ぼしてやるさ」

「覚悟しろ、化け物め」

街の声が史和の心に突き刺さる。

「ば、化け物……」

それを鍵に史和の脳が揺さぶられる。

「う、うわあああっ！」

史和は絶叫しながらその場を走りだした。

*

「どうして？ どうしてまた……」

この街は、梨架が昔に過ごしていた場所だった。だが、すぐに自分の秘密がばれて他に移る事になってしまった。

もう来る事なんてない街だった。

なのに……。

なのに、来てしまった。

——望んでいない。

——こんな事、誰も望んでいない。

——どうしてなの、天使様。

——どうして？

——天使様……。

涙が止まらなかった。止めるつもりもなかった。

——このまま、涙と一緒に流せてしまえばいいのに。

——いらぬ記憶なんて消せばいいのに……。

*

「うわあああつ！」

史和は蹲った。

頭が割れるように痛む。

万力で締め付けられるかのようだ。

——なんだ、この痛みは……。

——なんだ、あの言葉は……。

——なんだ、この嫌悪は……。

——なんだ、この悪意は……。

——なんだ、この敵意は……。

「うあああああああああああつ！」

雄叫びを上げ、史和はその場に倒れた。

そして、夢を見た。いや、それは記憶の残滓だった。

忘れた記憶。忘れようとして忘れた記憶。消してしまいたい過去。

それらを街の音が呼び起こそうとしていた。

*

闇を漂う。

なにもない闇。

光を与えられない者たち。

世界から排除された異物。

普通でない者……。

世界は彼らを試す。

――光が欲しい。

――どうして私はこんな身体なの？

――光が欲しい。

――どうして僕はこんな風に生まれたの？

――人が怖い。

――人が信じられない。

――人が嫌いだ。

――人は嘘に包まれている。

――視線が痛い。

――どうしてそんな目で見えるの？

――視線が怖い。

――どうしてそんなに注目するんだ？

――一緒にいたいだけなのに。

――一緒に扱って欲しいだけなのに。

――私はみんなと同じ。

――僕はみんなと変わらない。

――排除しないで。

――特別じゃない。

――私は普通の人間。

――僕は普通の人間。

――なにも変わらない普通なのに。

——どこも変わらない普通なのに。

————当たり前を望むのは罪ですか？ いけない事ですか？

*

街の外れで梨架は目を覚ました。

「いつの間にか、眠ってたんだ……」

梨架はゆっくりと起きあがった。

「なんだったんだろう……？ 変な夢だったな……」

空を見上げる。

広い。

「あの人の声が聞こえた気がする」

*

公園の片隅で史和は目を覚ました。

「眠っていたのか……」

史和は頭を押さえながら起きあがる。

「なんだったんだ……？ 奇妙な夢だった。ただ、声だけが聞こえた……」

空を見上げる。

大きい。

「彼女の声聞いた気がする」

*

同じ空の下、それぞれが互いの闇を共有した。

心の叫び。

心の痛み。

心の悲しみ……そして、涙。

「そうだ。あの人は……？」

「彼女はどこだ？」

二人は、それぞれの事を思い出した。

「捜さなくっちゃ」

「捜さないと……」

二人はそれぞれに駆け出した。

*

「どうやら、大丈夫だったみたいでイすね」

プーポはRenkonto-Mondoで二人の様子を見ていた。

「記憶の闇に捕らわれた時は心配したでイすが、抜け出せてよかったでイす。でイすが、吹っ切れたわけでもなさそうでイすね。まあ、それでいいのかもしれないでイす。過去のない人間はいないのでイすから。どんなものであるにしろ、それは大切なものでイしょうから」

*

「どこにいるのかしら……」

梨架は史和の姿を捜した。この街で自分の秘密を知らない唯一の人。

(だけど、隠せるものなのかしら……)

不安がよぎる。

隠せるものでもない。いつかはわかってしまう。

——自分は普通の人間じゃない。少なくともそう扱われてきた。

(明かせない。そんな事をすれば、あの人は去って行ってしまう。誰も私の周りにいなくなってしまう。そんなのはイヤ……)

だが、どこかに希望があった。

(でも、あの人ならわかってくれるかもしれない。なんだかそんな気がする。だって、あの人は私の光かもしれないから)

*

「どこにいるんだ？」

史和は梨架の姿を捜した。この街で自分を知っている唯一の人。

(彼女はどうしたというんだ?)

疑問が浮かぶ。

この街を知っているようだった。街の人も彼女を知っていた。来た事があるのだろうか。

——化け物……心に突き刺さる言葉だ。何度も言われた言葉。

(イヤな事を思い出させてくれる。人は落差が激しい。まさに掌を返す生き物だ)

だが、希望を見つけた。

(それでも彼女は信じられるかもしれない。どうしてだかそんな気がする。彼女は僕にとって光となってくれるかもしれない)

それぞれの想いを胸に二人は最初の場所を目指していた。

*

「よかった……」

梨架が史和を見つけた。

「また会え……た」

そして、倒れた。

「どうしたんだ」

史和も梨架を見つけた。が、その瞬間に彼女は倒れた。

史和は急いで彼女に駆け寄る。

「おい、大丈夫か」

声を掛けるが彼女は反応しない。

史和は胸に耳を当て鼓動を確かめる。

——トクン……トクン！

「よかった……」

規則正しい鼓動が聞こえる。

——スウ……スウ……！

呼吸も大丈夫だった。

(とにかく、ここじゃまずいな)

周囲を見回す。確かに往来の真ん中というのはよくない。しかも、二人を街の住人が遠目で見ている。

(どこか……どこかないのか……)

史和は初めて訪れた街で作られた小さな地図を頭に思い浮かべる。

(どこか……ないのか……あっ)

そして、ある場所が思い浮かんだ。

(公園)

さっきまで彼がいた場所だった。

(あそこなら)

史和は目を覚まさない梨架を抱えると公園へ急いだ。

その間もずっと街の視線が彼らに降り注がれていた。

*

「ここなら大丈夫だろう」

史和は公園の木蔭に梨架を寝かせた。

相変わらず目は覚まさないが、呼吸は乱れていない。

「どうしたんだろうな……まあ、いきなりの事で精神的に参ってしまったんだろうか……それとも、なにか……？」

史和は梨架の顔をじっと見た。安心したような顔だった。

「化け物……か」

史和はその言葉の意味を考えていた。

＊

—一天使様が助けてくれるの。

—一天使様が護ってくれるの。

—一天使様が笑ってくれるの。

—一天使様が……天使様が……。

—一なのに……私は不幸だ。

「天使様……」

その声に史和は梨架を見た。

「よかっ……た」

その言葉はきちんと言えなかった。

(涙……?)

梨架の目からは涙が溢れていた。

「……ん……ううん」

小さな呻き声で梨架は目を覚ました。

「……………」

梨架は自分の状況がわからずキョロキョロと見回す。

「私……」

そして、自分が泣いている事に気付いた。その途端、急に顔を赤らめ、

「ごめんなさい。私……本当にごめんなさい」

史和にしきりに謝る。

「泣きたいなら泣いていいから」

梨架は史和の顔を見る。史和はニッコリと笑ってみせた。

「……ありがとう」

梨架は史和の胸に顔を埋めた。

「でも、泣いているところは見られたくないから……」

そう言った梨架に、史和は無言で優しく背中をポンと叩いた。

「……………ありがとう」

＊

散々泣いて、梨架は顔を上げた。

「本当にありがとうございました。いきなりで……ごめんなさい」

梨架の言葉に史和はクスリと笑い、
「礼を言うか謝るかどっちかの方がいいんじゃないかな。まあ、僕には両方不要だけど」
そう言って笑う史和に、梨架は自分の天使様を見た気がしていた。

*

「さあ、行こうか」

そう言って史和は立ち上がり梨架に手を差し伸べる。

「ありがと……あっ」

と、手を取ろうとするが頭がぼやけて体を起こせない。

(ダメだ……こんな時に……)

こういった事は初めてではない梨架は、自分になにが起こっているのかわかっている。しかし、史和がそんな事を知っているはずがない。史和は心配そうに梨架を見ている。

「大丈夫？」

「ええ、大丈夫だから……」

梨架は精一杯の強がりと言うが、どうしてもふらついてしまう。

「もうちょっと休んでいようか」

史和が隣に腰を下ろす。梨架は樹にもたれ掛かるようにして座る。

「でも……」

「いいから。急がなきゃいけないんだろうけど、急がなくてもいいから……って、意味がわからないか」

と、優しく笑う。

「本当によくわからないですね」

と、その笑顔につられて梨架も笑う。

「そうそう。笑っている方がいいよ、絶対。女性の笑顔にはなにも敵わないんだから」

梨架は照れたように俯く。

「で、なにか隠してない？」

史和はふと感じた事を言う。

「……………」

梨架はなにも言わない。

「その沈黙は肯定ととっていいんだよね」

「……………ごめんなさい。言えません」

「わかってる。訊かない。だけど、どうしても辛くなったら言って欲しい。それだけ言いたかったんだ」

「ありがとうござい……」

言い終わる前に意識を失う。

「おいっ」

史和は身体を揺すが、梨架は全く反応しない。

「おい、大丈夫なのか」

史和は声を掛け続ける。しかし、梨架は目を閉じたままピクリとも動かない。

「おい、どうしたっていうんだよ。なにか言ってくれよ。頼むから」

史和の目から涙がこぼれ、梨架の顔に落ちる。

「頼むよ。目を開けてくれよ。出会っていきなりお別れなんて、淋しすぎるじゃないかよ。

なあ……頼むから」

史和の手から力が抜けていく。

「せっかく……せっかく出会えたんだ、光に。僕を導いてくれるかもしれない光に。なのに……
どうしてなんだ。どうして……」

史和は両方の拳を強く地面に叩きつけた。右手に痛みが走る。しかし、やめなかった。ずっと、自分の無力さを感じ、叩きつけ続けた。

「どうしてなんだ……どうしてなんだ……どうしてなんだ……どうして……」

史和は呪文のように繰り返す。

「どうしてなんだあっ！」

史和は天に向かって咆哮を上げる。されど、梨架は目を覚まさない。

「本当にこれで終わりなのか？ 僕たちは、まだ出会ったばかりじゃないか。なのに……」

史和は目を開けない梨架の身体を抱きしめた。

——ツウ……！

史和は自分の左肩の方から流れる赤い液体に気付いた。

(これは……血なのか？)

その液体は、史和の左肩から流れている。そこには、梨架の顔があったはず。史和は梨架の身体を引き離した。

「なっ……」

史和は絶句した。引き離した梨架の口許が赤く染まっていた。

「ど、どういう事なんだ……？」

史和は我が目を疑った。

「彼女が僕の血を……」

梨架の顔を見るが、完全に目覚めてはいない様子だった。寝惚けている……そう表現した方がいいだろう。

肩に触れると、間違いなく自分の身体に傷がある。彼女が噛んだのだ。

しかし、痛みはない。もともと彼の左半身には痛覚がないのだから当然ではあるが。

「……ん……んんっ……」

しばらく茫然としている間に、梨架は目を覚ました。

「……ごめんなさい、急に……」

謝ろうとして、自分が犯してしまった事に気付いた。

左肩から血を流している史和。彼は遠くを見るような目をしている。

そして、自分の口に感じる血の味。梨架は全てを察した。

「ごめんなさい」

彼女はなににも優先させて謝罪した。

「こんな事、するつもりなんてなかったの。でも……無意識に……」

上手く言葉が出てこない。史和も驚いているが、彼女も動揺していた。

「どういう事なのか、説明して欲しい。ただ、これだけは先に言わせてもらう」

梨架は唾を飲み込んだ。

「僕は逃げない。全てを受け入れる。全てを信じる。そして……僕の事を先に話す」

梨架は予想していなかった言葉に戸惑いを隠せなかった。

こんな事が今までなかったわけではない。その時は、相手は自分に恐怖して去っていった。すぐに恐怖の表情をするが、偽善で慰める者もいた。でも……史和はどれでもないような気がしていた。

「あなたの事って？」

梨架の咽はカラカラに乾いていた。

「そう、僕が普通じゃないって話を」

「あなたが普通じゃない？」

梨架は思わず訊き返してしまう。

「そう、僕は普通じゃない。サヴァン症候群という一種の病気さ。それが本当に病気かどうかはわからないけど、少なくとも僕はそう感じている」

史和は淡々と話す。

「僕はね、左半身の感覚がないんだ。痛みも熱さも……なににも感じない。動かす事はできるから、日常生活に支障はそれほどない。その影響だろうか、僕には絵の才能があった。どんな絵でもすぐに描けるんだ。どんなに少ししか見た事がない風景でも忠実に」

そして、梨架を見る。

「僕は普通じゃない。この身体のせいで、世間からは珍獣扱いさ。これが僕だ。それで、君は？ 教えてくれないか？」

梨架はためらう事なく口を開いた。初めて自分から言おうと思った。

「私は、血液嗜好症。ヴァンパイア・シンドロームとでも云えばいいと思う。血を好む体質なの。もちろん、西洋の物語に出てくる吸血鬼みたいな事はない。ただ、血が欲しくなるだけ。だからさっきも……」

「なるほど。君はこの街に来た事があるんだね？」

「ええ、昔……少しの間だけど住んでいたの。すぐに引っ越したんだけど、この身体のせいで。化け物って……」

「僕も同じだった。枠に詰めようとする環境だから、突出した才能を持っていた僕も化け物って言われた事がある。周囲からは奇異の目で見られた……。本当に辛かった」

「同じなんですね」

「……………」

史和はなにも答えなかった。

「血が欲しければ、僕の血を飲めばいい」

「えっ……？」

唐突だった。

「言っただろ。僕の左半身は痛みを感じないって。だから、大丈夫」

「でも……」

当然ながら梨架は戸惑う。

「大丈夫。肩じゃなくて、指先を少し切るくらいならだけど」

「ありがとう」

「なんだか、礼を言われると不思議な気分だ。そんなに難しく考えずに、輸血だと思えばいい。気楽にさ。好きな時に……でも、死なない程度にお願いしたいけどね」

「はい」

梨架は笑顔を作った。

「じゃあ、僕の血を飲んで少し休んだら行こうか」

「そうですね。色んな世界に」

「このスケッチブックに、色んな景色を描いていきたいからね」

「はい」

公園の樹の下で並んで座っている二人は、通り掛かった人が見れば普通の恋人同士に見えるだろう。

しかし、二人は世間から化け物として排除された。そして、世界は二人を必要とした。なんとも奇妙な運命を背負った二人。

出会うべくして出会った二人。

出会わなければ闇の中にいた二人。

それぞれがそれぞれの光。

「さあ、たくさんの世界を見よう」

「ええ。そして、世界を救うための準備をしましょう」

二人は『時の口』へと入っていった。

*

「懐かしいな……」

「懐かしいですね」

二人は空を見上げる。

「そろそろ病室へ戻ろうか」

「そうですね」

二人は懐かしい記憶と一緒に、禎昭がいる病室へ戻っていった。

4 人は神によって創られた試作品 Ⅰ

「どうかしたのかね？」

禎昭は二人が病室へニコニコとした笑顔で戻ってきたのを見て訊いた。

「別に……なにもないですけど」

史和は突然の禎昭の言葉に驚いて疑問符が浮かぶ。

「なにもないはずないだろ。人の病室にそんな笑顔で入ってくるとは。さあ、白状したまえ」

禎昭は意地悪げに言う。その口調は病人のそれとは思えないほど軽い。

「禎昭さん……そんな子どものような……」

そう言いつつ、梨架は頬を赤らめる。

「あなたたちこそ、子どものような反応じゃないですか。さあ、わたしの最期の頼みだと思って……」

「縁起でもない事を言いますね」

「まあ、事実だしな。最期くらい笑顔で終わりたいものだろ」

「本当に縁起でもない」

笑い声が室内に響く。死期が迫った人がいる病室とは到底思えない。

「さあ、白状したまえ」

禎昭は再度訊く。

「仕方ないですね」

その態度に梨架が折れた。

「私たちが出会った時の事を思い出していたんですよ」

「出会った時の事？ ……時空の能力者として初めて会った時の事か？」

「ええ、そうですよ。僕たちの初対面の時を思い出していたんです」

「どんな出会いだったんだね？」

二人は禎昭にその話をする。禎昭は黙ったままじっとその話を聞く。

「……なるほどね。そんな出会いだったのか……」

「ええ。彼は私の天使様ですから」

「ノロケか……勘弁して欲しいものだな」

禎昭は楽しそうに笑う。

「そういえば、禎昭さんと初めて会った時って……」

「そういえば、大変でしたね」

「そうだったかね。わたしはあまり覚えていないのだが」

「毫碌しましたね。それとも、死期が近いせいでしょうか？」

史和が皮肉っぽく言う。

「仕方ないだろう。あの時はそれどころではなかった。それに、会社の事でも大変だったしな」

「言い訳にしか聞こえませんか」

「そうですね」

慌てる禎昭を見て二人は笑う。

*

それは、今から十三年前まで遡る。神崎璃織魚が生まれた年だ。

神崎禎昭は、神の能力を持って生まれた娘を救おうと、妻である莉緒を犠牲にしてその魂を次元の隙間に閉じこめた。

その際、rozarioと呼ばれる小さな石に能力を封印して璃織魚の負担を軽減させた。

富所史和と梨架が詩稀村を訪れたのが、ちょうどこの時期だったのだ。

「ここが僕たちの能力の起源の村か……」

目の前の朱色の鳥居を見上げて言う。

「なんだか不気味ですね」

「そうだな……」

改めて鳥居を見る。

そして、その先の景色を見る。

「やっぱり不気味ですね」

「そうだな……」

二人の視線の先には、薄暗い森の小径にそって数えきれない数の地蔵が立ち並んでいる。しかも、終わりが見えない。

「いったい、なんででしょうね、これ……」

「そうだな……」

と、先程から上の空のように聞こえる返事が気になり史和を見ると、

「あーっ！」

「そうだな……」

史和はスケッチブックを広げて、目の前の景色を描いている真っ最中だった。

「なにしてるんですか。まったく……いつもこうなんですから」

梨架は呆れた風に言うが、毎度の事なのでそれ以上はなにも言わない。言っても無駄だという事がここ五年ほどの付き合いで学習していた。

「まあ、その一途さが好きなのかな……？ でも、これって一途っていうのかな……？」

少々疑問があるものの、そんなものは些細な事でしかなかった。

四年前に結婚し、その年の暮れに長女を出産していた。だが、事情が事情だけに、二人はその子を梨架の実妹である雅恵に預けている。

「ホントに、子ども不幸な親よね、私たちって……」

そんな事を考えながら、梨架はずっとスケッチブックに集中している史和を見ていた。

「まあ、この人の好きな事だし。見守ってあげたいし」

小一時間が経った頃、史和はスケッチブックから顔を上げた。

「出来たの？」

ワクワクした表情で訊く。

「ああ」

そう言って、それを梨架に見せる。

「どれどれ……」

梨架がそれを見るが、

「あれ？」

首を傾げる。そこには、ロッキング・チェアに座った少女が描かれていた。

「ねえ、目の前の風景を描いていたんじゃないの？」

「ああ、もちろん描いたよ」

そう言って別のページを見せる。そこには、スケッチながらもモノクロで撮られた写真のような絵があった。

「すごーい」

梨架は感嘆の声を上げる。

「毎回そんな反応をされると、本当にすごいのか自分じゃわからなくなるんだけどな」

「なに言ってるんですか。本当にすごいから毎回同じ反応するしかないんじゃないですか。本当にすごい……」

そう言われて史和は照れる。

「でも、この絵はなんなの？」

梨架はさっきの絵を見る。

「ああ、これか……。僕にもわからないんだ。ただ、ふと浮かんできたんだ。それで、描き留めたんだけどね」

描いた本人も不思議そうにその絵を見る。

「そうなんですか……」

梨架はもう一度じっくりと見るが、やはり見覚えはない。

「なんなんだろうな」

「なんででしょうね」

二人はただただスケッチブックの絵を見ていた。

小一時間ほど経った頃、

「まあ、そのうちなにかわかるだろうさ。とにかく、時間がないんだ。せっかくここに来れたんだし、自分たちの起源の村でも見ていこうよ」

「そうね」

そして、再び朱色の鳥居を見る。

「やっぱり不気味ね」

「確かにね。でも、なにかありそうでワクワクしないかい？」

「そう……？」

「こう、男の子特有の冒険心ってヤツなのかな。なんだか、こう血が疼くっていうか……上手く説明できないんだけど」

じれったそうに拳を握って振る。

「なんとなくわかるような気もするけど……やっぱりわからないかな」

「もう……もどかしいな……」

「なんでもいいですから、とにかく行きましょう」

「あ、ああ」

史和はなにかもどかしさを感じたままだったが、梨架に急かされて渋々と云った表情でついていく。

(本当に子どもなんですから)

梨架は表情には出さないが笑った。

4 人は神によって創られた試作品 II

鳥居をくぐると、そこには地蔵の列がある。相当に古いもののようで、苔生しているものもある。

梨架は史和の手を握って寄り添う。史和はその手を優しく握り返した。

両脇は薄暗い森が広がっており、そこからなにが現れても不思議ではない。ここは能力者の村なのだから、秘密保持のためにどんな罫があるかも知れないのだ。

そんな森の小径を二人はビクビクしながら歩いている。

「……………」

「……………」

その間中、二人の間に会話は無い。ずっと黙ったまま。

「……………」

「……………」

それでも終わりはあるもので、地蔵の列もいつの間にやら終わっている。それでも、二人の間に会話は無い。

「……………」

「……………」

さらに行くくと道の終わりがやってきた。

「……村だ」

「……村ね」

二人は立ち止まった。

そこには小さな集落があった。

周囲を山に囲まれ、それぞれの四方には青、朱、白、黒の柱がそびえ立っている。

史和は早速スケッチブックを取り出してその風景を描き始めた。

「またですか……」

旅を初めて以来、珍しい場所や心に響く風景などがあると必ずこうしている。

梨架は後ろからスケッチブックを覗き込む。普通なら気が散るなどと言われそうだが、集中していて周りが見えていないので、そういう事はない。そのスケッチブックには恐ろしい早さで絵が描かれている。躊躇う事なく鉛筆を動かし、目の前の風景を描いていく。それでいて、これだけでも完成かと思われるほど正確で緻密なのだ。

「時間がないのは誰のせいかしらね」

まるで無邪気な子どもを見る母親のような目でそれを見る。

「さすが天才さんね」

それからしばらくして、史和はスケッチを終えた。

「ごめん。いっつも……どうしても、つい……」

梨架が自分を待っていた事に気付いて謝る。

「別にいいですよ。それに、こうして謝るのは何回目かしら？」

梨架はクスクスと笑う。

「どのくらいかな？」

「数えきれないくらいよ。もう忘れちゃった」

少しむくれてみせる。

「本当にごめん」

「さあ、行ってみましょう」

梨架は話を切り上げ、村へと歩を進めた。

「あ、ああ」

*

村に入るが人の姿が見えない。そこで、とりあえず目に付く柱に向かう事にした。

「誰もいませんね」

「どこかに集まっているのだろうか」

その史和の直感は正しかった。史和がスケッチブックに描いた少女がこの世に現れようとしていたのだ。そのため、村の主だった住人は神崎家に集まっていた。

そんな話をしながら、二人は青い柱に向かう。

「それにしても、すごい柱だな……」

柱に辿り着いた二人は柱に見とれる。

「本当に、すごい柱ですね……」

「ああ、なにか不思議な力のようなものを感じる。もっと、近付いてみよう」

そう言うと柱に触れる。

「……………っ」

史和が呻く。

「どうしたんですか？」

梨架が慌てて史和を支える。

「……………あ」

史和に触れた梨架も呻く。

(なんだ、この威圧感は……能力が逆流するみたいだ)

(なに、この締め付けるような力は……押さえつけられるような……)

史和は柱から手を放す。

「はあ、はあ、はあ……」

「はあ、はあ、はあ……」

二人は荒い息をする。

その時――

――ヒュンッ！

――パシッ！

なにかが飛んで来て、なにかに当たる音がした。

そして……、

「柱が……」

「光った……」

青い柱が一瞬だけ光った。

二人は茫然と柱を見ていた。そこに、一人の青年が歩み寄ってきた。

「あなたたちは、旅行の方ですか？」

少し離れた所から茫然としたままの二人に話し掛ける。

「……え、ええ」

なんとか梨架が答えるが、

「そうですか、ようこそ詩稀村へ。能力者のお二人さん」

「……………っ」

「……………っ」

二人は絶句する。

今まで自分たちが能力者だという事は秘密にしてきた。今までも様々な人たちに会ってきたが、誰にも話した事はなかった。ただの旅行者として旅をしていたのだ。それが、目の前の青年は自分たちを能力者とはっきりと言った。

「驚いているようですね」

「え、ええ。どうして僕たちが能力者だと？」

「ここは詩稀村。能力者の村ですから」

その当たり前とも思える返事に言葉がない二人。しかし、

「……と言いたいところなんです、そうでもないんですよ。詩稀村にも能力者でない人はいるんですよ。かくいうおれも能力者じゃないんでね」

「じゃあ、どうして……」

梨架の質問に青年は自分の足元を指す。

「この先に入れるのは能力者のみだからさ」

見ると、確かに青年は少し離れた場所にいる。

「柱に近づけるのは能力者のみ。悪意のない、ね。とにかく、あなたたちがどういう能力を持っているのかは知らないが、悪い人ではなさそうだ。おれは月ヶ瀬稔。初めまして」

そう言って手を差し出そうとするが、

「おっと、この先には入れないだった」

そう言って慌てて手を引っ込める。

二人は柱から離れて月ヶ瀬稔と名乗った青年に歩み寄る。

「初めまして、僕は富所史和。こっちは妻の……」

「梨架です。よろしくお願ひします」

そう言つてそれぞれ握手する。

「改めて、ようこそ詩稀村へ」

＊

二人は月ヶ瀬稔の案内で詩稀村を歩いていた。

「こんな話を知っていますか？」

唐突に稔が言う。

「なんですか？」

史和が訊き返す。

「人は神によつて創られた試作品の一つだつて話さ」

一呼吸おいて稔は話を続ける。

「その昔、神は命を創造した。しかし、神は命を創造するにあつて、実験を行った。様々な人類を創造しようとした。人形に例えようか。ある人形は鉄で創られた。またある人形は紙で創られた。さらにまたある人形は木で創られた。そしてある人形は竹で創られた。他にも石で創られた人形もいた。他にも様々な素材で人形を創つた。そして、それを運命の川に流した。そして生き残つたのが木と竹だつた。木は繁殖を続けた。その繁殖の蔭で竹は細々と過ごしていた。そう、木は人類。そして、竹は詩稀の人間だ」

「……………」

「……………」

その話二人は言葉がなかつた。

「そういう話を昔聞かされたのさ。昔話さ、ただの。まあ、この話をそのまま信じるなら、詩稀の人間は人類とは異なるものとなる。言い換えれば、詩稀は人類の別口の可能性なんだ」

そして、史和を見て、

「富所さん、あなたは会わねばならない人がいる」

「会わなければならない人？」

「そう、あなたの本家筋にあたる人。神崎禎昭に」

「誰なんです、その人は」

「あなたの先祖……曾祖母にあたる椎崎二三子の実家、神崎家の次期当主さ」

そう言つると目の前の屋敷を見た。

「ここがその神崎の屋敷だ」

どうやら稔が向かつていたのはそこだつたらしい。

「ここが……………」

「そう、ここがそうだ」

そう言つたり、稔は敷地内に入つていく。

「あなたたちは会わなければならない。さあ、一緒に来て欲しい」

二人は互いの顔を見合わせて考える。

「選択の余地はない」

それは今までにない強い口調だった。

「行かざるを得ない……」

「……みたいね」

*

屋敷の中は騒々しかった。

「なにかあったのですか？」

梨架が目の前をスタスタと歩く稔に訊く。

「それはこれから話す。とにかく、あなたたちは絶好のタイミングでここに現れたんだ。……

さあ、ここだ」

そう言うなり、

――コンコン！

ドアをノックする。

「……………」

しかし、中から返答はない。

「月ヶ瀬稔です。入らせていただきます」

――カチャッ！

返答を待たずに開ける。

そこには、大きな机に両手で頭を抱えた状態で座っている男がいた。

「彼が神崎禎昭だ」

二人が室内に入ると、稔はドアを閉める。

「よく来てくれた。まさに最高のタイミングだ」

禎昭が俯いたまま言葉を発する。その声は悲しさに満ちていた。

「最高のタイミング？」

史和が稔に訊く。禎昭に訊いても到底答えないと思ったからだ。その期待に応えるように稔が答える。

「彼はたった今、奥様を失った。そして、娘である璃織魚様が危険な状態に……」

「稔、それ以上はやめろ」

禎昭が強い口調でそれを制する。

「それ以上は言うな」

「わかった。……そういうわけだ。あとは本人から聞くんだな」

それだけ言って、

「これで役目は果たしたはずだ。あとはあなた次第だ。せいぜい、力になってもらうんだ」

部屋を出ていった。

残された二人は顔を見合わせて、これからどうしようか思案する。

「……すまなかった。そして、すまないついでに頼みがある。時空の能力者である二人にしか頼めない」

その言葉を聞いて二人は凍ったように動けなかった。

「……どうして、僕たちが時空の能力者だと？」

それに対して禎昭は平然として、

「確かに時空の能力は珍しい能力だ。だが、それはわたしも時空の能力を持っているからな。時空を閉ざす能力をね」

「じゃあ、あなただって……」

「それができないのだよ。わたしは君たちと違って時空を越えられない。『時の口』を見る事は可能だが、挟間に行くだけで世界へは行けないのだよ」

「どうしてですか？」

梨架が訊く。

「簡単な事だ。パートナーがいらないからだよ。たったそれだけの事だ」

「パートナー……ですか」

史和は納得したように頷く。

「……そう、君たちも知っていると思うが、時空の能力者はパートナーなしではその能力を発揮しきれない。現在の時間には影響を与えられるが、時空を移動する事ができない」

「確かにそうですね。……ですが、それと僕たちに頼みたい事というのが繋がらない。あなたはいったい僕たちになにをさせようというのですか」

禎昭は史和の顔をじっと見る。

「……………君たちなら大丈夫そうだな」

禎昭は自分の中だけで納得すると、

「頼みというのはだな……」

そう前置きして、禎昭は璃織魚の事について話し始める。

……………。

「……なるほど、そういう事ですか」

「そういう事でしたら、私たちも協力します」

「ありがとう」

禎昭は二人に深々と頭を下げる。

「礼を言われる事でもないですよ。僕たちは未来を護る準備のためにこうして旅をしているのです。きっと、これが最終目的なのでしょう。世界はこのために僕たちを選択したのだと思います」

「私もそう思います。ですから、これが私たちの役目なのですから……」

「いや、それでも礼を言わせてもらおう。本当にすまない。ありがとう」

そう言った禎昭の目には涙が光っていた。

*

「それから僕たちは r o z a r i o を探し始めて、なんとか一つは見つきましたが、あとはさっぱりでしたね」

「そうそう、だからそれ以降は他の方法も探すようになって……」

「本当に君たちには苦勞をかけてしまった。君たちの娘にも淋しい思いをさせてしまったようだしな。改めて礼を言わせてもらおう。ありがとう」

「礼はまだ早いですよ。これから終焉に向けての最後の闘いがあるんですから」

「そうだな、気は抜けんな。わたしはなにもする事ができないが、信じるしかないだろうな」

「それで充分だと思いますよ」

「私たちも娘を信じなければいけませんしね」

5 あたしに限界はない

「梢、おれを裏切った事、後悔しながら死ね！」

そう叫んで、健一は炎を放った。

(璃織魚様、あたしはあなたを信じます)

梢はじっと目を閉じて神経を右手に集中させた。

「吉住健一、あなたの野望は終わりです」

梢がそう言った瞬間、梢が炎に包まれた。

「梢さんっ！」

「梢さん！」

亜依と誠司は同時に叫んだ。

「……………」

莉緒は心配そうな顔をするが、なにも言わない。莉緒は梢を璃織魚を r o z a r i o を信じていた。

「梢、これがおれを裏切った報いだ」

健一は勝ち誇ったように笑う。

相変わらず、梢がいた場所に炎が留まっている。

「梢さん」

それを見かねて亜依が駆け寄ろうとするが、

「ダメ！」

莉緒が一喝し、

「ダメだ、亜依」

と、誠司が亜依を抱き留めたのが同時だった。

「でも、でも……………」

亜依は泣き叫んで誠司を振り切ろうとするが、誠司はそれを赦さない。

「……………大丈夫ですよ」

と、炎の中から声がした。

「え……………？」

それを聞いて、亜依は急に冷静になるのを感じた。

(よかった…………)

内心では心配していた誠司もそれを聞いて安堵する。

「吉住健一、あなたの攻撃はあたしには通用しない。こういう風にね」

フツと炎が消える。そこには、無傷の梢が立っていた。

「ど、どういう事だ……………いったい……………」

健一は驚きを隠せない。

健一には自信があった。先程の攻撃で梢は焼失しているはずだった。

健一は手加減をしていなかった。苦しまないように、一瞬のうちに焼失させるつもりでいた。

健一は自分を護りたかった。自分と一緒にいた時の梢の顔が忘れられなかった。そのせいで、迷いが生じるのが怖かった。その迷いのせいで仕留め損ねるのが怖かった。後悔しそうな自分が怖かった。

だが……。

結果として、健一の思惑通りにはいかなかった。結局、目の前には梢が立っている。しかも無傷で。

「……どうなって……」

梢はその怯えるような驚愕の表情を見てクスリと笑う。

「どうしてあたしが無事なのか。そう訊きたいんでしょう？ 答えは周りを見ればわかるんですよ、健一さん」

梢は飄々と言う。

「周り……だと？」

健一は、初めて梢の周りを見る。つられるように垂依と誠司も梢の周りを見る。

梢の周りにはなにもなかった。

「……………っ！」

健一は息をのんだ。

「こ、これは……」

目の前の光景が信じられなかった。ここは通路だったはずだ。そして、梢の手が届く所に壁があったはずだ。だが……そこにはなにもない。梢を中心に通路が消え去って、ただの空間が広がっている。

「わかっていただけました？ これがあたしの進化した能力です」

「し、進化した能力……？ いったい……」

健一は口をあぐりと開けて目の前の光景を見る。しかし、その目はまだ信じられないと言っているようだ。

（あたしも半信半疑だったんだけどね。でも、やっぱりすごいな、璃織魚様は。それと、この石もね）

そう言い、自分の手にある r o z a r i o を見る。

「さて、これであなたの攻撃はあたしには通用しない。どうするの、健一さん」

梢は未だ狼狽している健一を射抜くような目で見ると、しかし、健一はそんな視線に気付かないほど心が別の場所にあった。

（どういう事だ？ どうなってやがるんだ？ いったい、いつの間に梢の能力が……？ いや、神の能力の影響なのか？ これが神の能力なのか？ そうだ。そうとしか考えられない。そうに決まっている。でなければ……でなければ梢におれの能力が負けるなんて事は……）

健一はどうにか自分を納得させようと試みる。しかし、どうしても心のどこかで目の前の光景を否定してしまう。それは、この状況を認めてしまえば、自分の無力をも認めてしまう事になるからである。それ故に、健一は現実に戻れないでいた。別の世界へ逃避する事で、なんとか自分を保っている。

*

「璃織魚、ありがとう……」

「え……？」

誠司は莉緒の弦きを聞き逃さなかった。

「莉緒さん、どういう事ですか？」

思わず訊いてしまう。

「あの能力は璃織魚の能力によるもの。あの子の能力が一時だけの進化を可能にしたの」

「そうなんですか……」

と、誠司は莉緒の言葉の中に疑問になる言葉を見つけた。

「一時だけの進化って……？」

「そう、この場限りの進化に過ぎないわ」

*

(まったく、どうなってるんだ？　これが神の能力なのか……ならば、なおさら手に入れねばならないな)

健一は改めて神の能力を手に入れたいと願った。

(すごい、すごすぎる。これなら、健兄にも勝てるかもしれない。ううん、絶対に勝てる。負ける気がしない。負ける要素がない。この能力で璃織魚様を護ってみせる)

梢は改めて神の能力者を護る事を誓った。

「梢、神の能力の庇護を受けているようだが、おれは諦めるわけにはいかない。いや、なおさら手に入れたくなったよ、神の能力を。必ず手に入れてみせる」

健一は梢を凝視する。

「だが、その為にはお前は邪魔だな。そう、既にお前はおれにとって邪魔な存在でしかない！」

そう言い放つと、健一は両手に炎を集めた。

「こちらこそ、あなたは敵でしかない。今までがどうだったであろうと、あなたは敵にすぎない！」

梢はまだ壁がある場所まで下がる。

「それがお前の弱点だな。いくら反動を外に逃がせるようになったといっても、その物質がなければ無意味」

「そうね。でも、大地がある以上、あたしに限界はない」

両者は互いに睨みあう。

微動だにせず、タイミングを計るかのように呼吸を整え、その時を待つ。

(厄介な敵だな)

健一は対抗の糸口を探してみるが、一向に見つからない。探せば探すほど絶望が増す。

(これしかないか。……直球あるのみ！)

健一は心を決めた。

「これで最後だああっ！」

健一は全力で能力を放った。それは、今までとは比べる事が出来ないほどの大きさだった。

「健兄……」

梢は淋しそうに呟く。

「梢！」

「梢さんっ！」

「梢さん！」

莉緒、そして亜依と誠司の叫びが響く。

——シューウウツ！

と、奇妙な音がする。

炎は、梢の手の寸前で消失していく。それに対応するように、梢が手をついている壁が消えていく……が、炎を全て分解する前に壁の方が分解されてしまう。それほどまでに、健一が放った炎は大きかった。

(どうしよう……)

梢は慌ててしまい、冷静な判断が出来なかった。

そんな梢に、容赦なく炎は迫る。

(こうなったら……)

梢はそのまま能力を使い続けた。分解の反動を逃がす事ができないため、その反動は自分の身を襲う。それは、まるで炎で燃やしているかのように梢の髪の毛が無くなっていく。

(く……っ)

だが、健一の能力は尽きようとしていた。

(これが限界か……)

万が一のために伸ばしていたお蔭で、ショートヘアになるだけでした。結局、健一は梢の能力を凌駕する事ができなかった。

「ここまでです、吉住健一」

そう呟くと、梢は健一に向かって走りだした。

「う……っ」

健一は能力の消耗で眩暈を感じ膝をついた。その健一の額に梢の右手が添えられる。

「お終いです」

梢は地面に左手をつき、能力を解放した。

「さようなら、健兄」

そう言った梢の目からは涙が溢れた。

「梢、情けは無用だ。おれを殺せ……」

健一は力無く呟いた。

「いいや、殺してくれ。……おれを、可南子のところへ連れていってくれ、頼む」

健一は地面を見ながら言う。

「さあ……」

健一は梢を促す。

「健兄……」

そう呟いた梢の涙が健一に落ちる。

「……ずるいよ。……健兄はずるいよ……」

梢の涙は止まる事なく落ち続ける。

「……そんな事言われたら、できないよ……ずるいよ……」

通常、このような事を言われてそのまま実行できる者など皆無に近い。その例に洩れず、梢にも健一にトドメをさす事ができずにいた。

そんな梢に莉緒が歩み寄る。そして、優しく肩に手を置く。

「……梢、彼の望むようにしてあげなさい」

「……………っ」

莉緒の口から出た予想外の言葉に梢は息をのむ。

「といっても、あなたにはできないでしょうね。あなたは優しいから。できればワタシがその役目を引き受けたい。ですが、この身体はあの子のもの。それを血の匂いに染めるわけにはいきませんから……」

「ならば、その役目わたしが引き受けよう」

どこからともなく声がした。そこにいた全員が辺りを見回す。

「あっ……」

最初に気付いたのは亜依だった。

「お父さん、お母さん……」

そこには、神崎禎昭を両側から支えている富所史和と富所梨架がいた。

「久しぶり、亜依。急に行っちゃうんだもん」

梨架が頬を膨らませて子どものように笑いながら言う。

「あまり心配させるなよ、亜依」

史和も安心した優しい笑みを浮かべて言う。

「……お父さん、お母さん……どういう事？」

亜依は意外すぎる組み合わせに驚きを隠せなかった。それは誠司も同じだった。

「……あな……た？」

その驚きは、莉緒にとっても同じだった。もう一人の子どもの人格になった時から、禎昭は近くにいなかった。莉緒の側には、その代わりに藻音時弥がずっといた。

本来の莉緒はそれを淋しく思ったが、それはどうにもできなかった。

「……兄さん」

梢は涙でグショグショになった顔のまま実の兄である禎昭を見る。その表情には、どこか安心したようなものがあった。

「……莉緒、今まですまなかったな。お前には迷惑を掛けてしまった。能力がここまで制御できないとはな……完全なら、苦しめる事などなかったのにな」

禎昭は娘の姿をした妻に向かって言う。そして、亜依を見て、

「……富所亜依さん、あなたにも迷惑を掛けてしまった。史和さん、莉緒さん……お二人にも迷惑を掛けてしまって。そして……椎崎誠司さん、あなたにも」

史和、梨架、誠司とそれぞれの顔を見回して言う。そして、吉住健一を見て、

「吉住健一、君の計画もここで終わりだ。神の能力は誰のものにもできない。それを手に入れようとする事が無駄な事なのだ。これでわかっただろう」

「この身で実感した。トドメをお願いします」

「吉住、さらばだ」

そう言うと、禎昭は懐から取り出したナイフを健一に突き立てた。

「……………っ！」

梢は小さな叫び声を上げ目を背けた。健一に恋をし、兄のように慕ってきた梢には、それを正視する事など到底出来なかった。梢はその場に崩れた。

亜依もそれを正視する事はできなかった。人間の死というものに当然ながら慣れていない亜依にとって、それを受け止めるのは早すぎた。亜依は誠司の胸に顔を埋め、涙を流していた。

亜依を抱いている誠司も、それを見続けるのは酷だった。例えそれが憎いと思っていた、敵視していた健一に対してでも……。

史和と梨架も互いに寄り添い、それを悲しい目で見ている。二人とて決してこういう場面に慣れているというわけではないが、それを正視していた。

莉緒は梢に近づき、地面に膝をついている梢の肩を抱いた。

禎昭は自らがトドメをさした男の顔をじっと見ている。禎昭に表情はなく、ただ視線だけがあるのみだった。

健一は息をしていなかった。閉じられた目は、二度と開く事はなかった。だが、表情は満足そうだった。できる限りの事をした満足感だろうか、それとも無駄な事に全てを賭けた自分の愚かさに対する満足感だろうか、それとも別のものなのだろうか。それは、もう誰にもわからない。おそらく、健一自身もわからないままだった。ただ、なにかに満足していた。

しばらく沈黙が続いた。その静寂に響くは誰とも知れない嗚咽のみ。その小さな音だけがその空間に存在していた。

その空気を莉緒が破った。

「さあ、璃織魚を解放してあげましょう。これからの未来のために」

「でも……」

その言葉に亜依は表情を暗くする。そして、涙を流した顔のまま莉緒と禎昭を交互に見る。

莉緒は、亜依が言おうとしている事を察し、

「亜依さん、ワタシたちは構わないの。あの子のために全てをなげうつ。それでいいの。二人で決めた事だから」

と、笑顔で言う。

「でも、璃織魚さんは……」

「亜依、これは仕方のない事なの」

意外にも、亜依をそう諭したのは母親である梨架だった。

「これは変えられない運命なの。神崎夫妻だって悲しくないはずないじゃない。もし私たちだったら……と考えると、胸が痛くなる。でもね、私たちだって、同じ状況なら同じ事をしたわ。いいえ、実際私たちは亜依に淋しい思いをさせてしまった」

「そうだよ、亜依。僕たちは禎昭さんたちをなんとか助けられないかと、ずっとあらゆる世界を旅してきた。でも、僕たちにはなにもできない事がわかった。ただできる事……それは、神崎夫妻の願いを叶えてあげる事。璃織魚さんを、この世界に出してあげる事。そして、それをできるのは亜依と誠司君しかいないんだ」

史和は亜依と誠司を交互に見る。

「……わかりました」

誠司はその言葉に頷いた。

「亜依、俺たちにしかできない事があるなら、そうしようじゃないか」

「でも……」

「俺だって、この人たちを死なせたくない。でも、悲しませたくもない。それになにより、このために命を失った人たちを無駄にしたくないんだ」

「……………うん」

そう言った誠司に応えようと、亜依は自分を納得させるように頷く。

「さあ、これを……」

梢は借りていた *rozario* を誠司に手渡した。

「さあ、その十二の鍵で璃織魚様を解放して下さい」

「*harmonio*、今こそわたしたちの娘をこの世に出してあげて欲しい」

禎昭が亜依と誠司に頭を下げた。

「それが俺たちの役目だというなら。それが俺たちが旅をしてきた目的だというなら……俺は実行します」

誠司は決意を込めた目で禎昭を見る。

「……ありがとう」

「感謝します」

莉緒と禎昭は何度も頭を下げる。

「亜依はどうする？」

「……………」

亜依は無言のまま頷いた。

「ごめんなさいね、辛い役を押しつけて」

莉緒が歩み寄って言う。

「いいんです。……やります」

亜依は小さな声で言った。

「ごめんなさい」

莉緒は何度も謝った。

*

亜依と誠司は扉の前に立った。梢の分解の反動で周辺は分解されているが、ここだけは分解されていなかった。

(いよいよか……)

誠司は自分が持っている六個の r o z a r i o を穴に入れていく。

(……)

亜依は無言のまま六個の r o z a r i o を入れていく。

やがて、十二個全ての r o z a r i o が穴に入れられた。

……………。

しかし、なんの反応もない。

なんの変化もない。

沈黙だけがそこにはあった。

だが、やがてその静寂は破られた。

r o z a r i o から光が放たれた。

その光は莉緒に集中する。

「あなた、今度こそさようなら……」

莉緒は涙を流していた。

「ああ、今まですまなかった。ありがとう」

禎昭は莉緒の涙に応えるかのように言った。

光に包まれた莉緒の身体は宙に浮かんだ。

その様子を、亜依と誠司、史和と梨架そして、梢は茫然と見ていた。

ただ、禎昭だけは目を閉じていた。彼には自分の妻が消えてしまう瞬間を見る事などできなかった。過去に一度同じ様な事を経験しているものの、それは耐える事ができるもののはずがなかった。

地上から一メートルほどの所まで浮かび上がった莉緒の身体に、さらに強い光が集まった。と同時に、r o z a r i o が穴から飛び出し、莉緒の身体の上で円を描いた。

「さよなら、莉緒……」

禎昭は目を閉じたまま涙を流していた。

「義姉さん、さようなら……」

梢も涙を流していた。

やがて、宙に浮かんでいた莉緒……正確には璃織魚の身体がゆっくりと降りてきた。

禎昭はふらつきながらもそこに駆け寄る。そして、その身体を抱きかかえる。そして、
「璃織魚……」

と、呟く。

「璃織魚様……」

梢もそこに歩み寄る。

亜依と誠司、史和と梨架は無言のまま立ち尽くしていた。

D i o が解放された瞬間だった。

*

地面に横たわった璃織魚の上で円を描いていた r o z a r i o が、ゆっくりとその動きを停止させる。そして、円が小さくなり、一繋がりになった。

その輪は、亜依の方へと移動を始める。

「……え？」

それは、亜依の手に収まった。

「え……？ どうすれば……」

と、困惑する亜依。そこへ、禎昭が言う。

「r o z a r i o は、君を所有者と認めたんだ。それをどうするも自由だ。それにはもう、なんの能力もない。それは持っていた能力は全て、璃織魚に戻っていったからな。だから、それはただの石だ」

「これが、あたしのもの……？」

亜依は自分の手にあるそれを見る。それは、ビーズで作った指環のようだった。

亜依は誠司の方を見る。

そして、それを右手の薬指に…… r o z a r i o の指環は亜依の右手薬指に収まった。

*

「んっ……」

禎昭の腕に抱きかかえられた少女の口から音が洩れた。それは声と云うには声になっておらず、本当に音だった。

「璃織魚……璃織魚……」

禎昭はゆっくりと少女の身体を揺する。今まで自分の目の前に姿はあっても、そこに少女はいなかった。

生まれてすぐ、璃織魚の魂を隔離したため、実際は初対面という事になるのかもしれない。

少なくとも、璃織魚の目を見た事は一度もない。その璃織魚の目がわずかに動いた。それを禎昭は見逃さなかった。

「璃織魚……」

禎昭の声に梢もそれに気付いた。璃織魚の顔を覗き込むように見る。

「……璃織魚。璃織魚！」

禎昭は尽きようとしている命の灯火を必死に振り絞って叫ぶ。それは、暗闇の中にいる璃織魚に向かうべき場所を示すかのように、こっちへおいでと道を指し示すかのように、璃織魚の意識を呼び覚ますかのように……禎昭は叫んだ。

その声に反応するかのように、再び目が動いた。

「ん……………」

それと同時に口から音が洩れる。

「璃織魚様……」

梢がその名を呟く。

亜依と誠司、史和と梨架は少し離れた場所から見ていた。

そして、やがてその瞬間は訪れた。

璃織魚の目がゆっくりと開き始めた。その瞬間、その場にいた全員が息をのんだ。感動のあまり声が出なかった。

「……お父さん……梢さん……」

少女はゆっくりとではあるが自分の側にいる人物の名を呼んだ。

今、神の能力者が本当に目覚めた。

「璃織魚……今まですまなかった……」

禎昭は涙を流していた。娘との初対面。言い表せない感動が彼を動かしていた。だが、その彼の命は尽きようとしている。

「お父さん……」

璃織魚は初めて触れる父親に抱きつく。禎昭も璃織魚を抱き返す。しかし、その力も徐々に抜けていく。

「……お父さん……？」

璃織魚は悲しそうな表情をして父親を見る。

「……兄さん……………」

梢も禎昭の異変に気付いた。

しかし、その時には既に……禎昭の命は尽きていた。

璃織魚の腕の中で禎昭は息を引き取った。愛する娘と対面し、その娘の中で死を迎えた。それは、彼にとって最高の幸せだったに違いない。

「禎昭さん……」

それを見ていた梨架は史和の胸に顔を埋めて涙を流していた。

「ちくしょう！」

そこに誠司の叫びが木霊する。

「誠司さん……」

その声に驚き、亜依は誠司を見る。

「どうしてなんだよ！ どうしてこうなっちゃうんだよ！」

誠司はぶつけようのない怒りに苦しんでいた。

「どうしてこんなに簡単に死んじゃうんだよ！ だいたい、こんな能力さえなければこんな事にならなかったんじゃないのかよ！」

誠司はただ叫んでいた。

「そうですね……」

父親の亡骸を抱えた璃織魚がゆっくりと言う。そこには、十三歳の少女ではなく、神を思わせる強さがあった。

「詩稀を司る者として、これより能力の使用を禁じます」

そう言って璃織魚は誠司を見て、

「これでいいですよね」

「え、ええ……」

誠司はそんな璃織魚に気圧されてしまう。

しかし、このような規則を施行させたとしても、詩稀の主立った能力者はほとんどいない。

神崎家の系統で生きているのは神崎璃織魚と宍神梢。そして、神崎家の血を引いている富所史和と娘の垂依そして、椎崎誠司だけである。

吉田の系統で云えば、木元（吉田）綾乃がいるが、彼女に能力はない。

その他の富所梨架などの能力者だけである。

久遠隼人と相模原渚の存在を、詩稀の人間は知らない。もちろん、それは彼らに限った事ではなく、散り散りになってしまっているため、全ては把握できていない。

だが、詩稀と普通の人間との混血により、その能力は弱体化……もしくは消えつつある。遺伝子のように血で受け継がれるため、突然能力者が生まれる事があるが、それは稀であるため、重要視されていない。

それでも、この規律は詩稀の人間に伝えられる事となる。当然ながら、神の能力者の命令であるため、詩稀の人間は逆らわない。宗教じみてはいるが、璃織魚が詩稀の象徴である事は揺るぎないのだ。

そして、神崎禎昭の死後、彼の遺言通りに神崎璃織魚が神崎グループの会長に就任した。しばらくは宍神梢は公私ともに手伝う事となる。それは禎昭が願い、梢も望んだ事だった。

そして七年が経ち、璃織魚が成人を迎えると梢は会社を自らの意思で去る事となる。

こうして、神崎璃織魚を取り巻いた事件は幕を下ろそうとしている。

「もうすぐ終わるのね」

「そうだな。懐かしいな」

赤いソファに座った男女が遠くを見るような目で懐かしそうに話す。

「どうしたの？」

そこに少女がやってくる。

「唯依か……。もうすぐ、旅が終わるんだ」

男が少女に言う。

「旅？」

「そう、あたしとお父さんの旅」

「ああ、二十年前の話か」

「そういう事」

唯依は嬉しそうに二人の間に割って入った。

「どうなったの、教えてよ」

「じゃあ、お母さんの能力でその時代の声を届けてもらおうか。頼むよ、亜依。まあ、せっかく璃織魚さんの許可はもらっているわけだし」

「わかりました。あまり使いたくない能力なんですけど、仕方ないですね」

そう言いながら、亜依は能力を解放する。すると、世界の声が聞こえる。それは様々な声が重なって明瞭とは云えない。

「ちょっと待ってね」

亜依は目的の声に集中する。

『でも、璃織魚さんは……』

「これ、お母さんの声？」

「そうよ。なんだか不思議ね、こういう風に自分の声を聞くのって」

「その違和感から、あまり使いたくないって言い張ってたんだよな」

「それだけじゃないですけどね。あたしとしては、伝達の中継だけやっていればよかったですから。その方がいいですよ、今でも」

亜依は苦笑する。

『亜依、これは仕方のない事なの』

会話は何事もなく続いている。

「これって、誰の声？」

「お祖母ちゃんの声さ。懐かしい声だな」

「それって、すごく失礼じゃないですか。あたしのお母さんなんですからね」

亜依はぷくうっと頬を膨らませる。

「ごめんごめん」

『これは変えられない運命なの。神崎夫妻だって悲しくないはずないじゃない。もし私たちだっ

たら……と考えると、胸が痛くなる。でもね、私たちだって、同じ状況なら同じ事をしたわ。いいえ、実際私たちは亜依に淋しい思いをさせてしまった』

「別にいいの」

つい、会話をしてしまう。

『そうだよ、亜依。僕たちは禎昭さんたちをなんとか助けられないかと、ずっとあらゆる世界を旅してきた。でも、僕たちにはなにもできない事がわかった。ただできる事……それは、神崎夫妻の願いを叶えてあげる事。璃織魚さんを、この世界に出してあげる事。そして、それをできるのは亜依と誠司君しかいないんだ』

「これって、お祖父ちゃんの声？」

「そう」

誠司は完結に答える。

『……わかりました』

「これって……お父さん？」

「そうよ」

亜依が答える。誠司は顔を赤らめた。

「自分の昔の声を聞くのって恥ずかしいな」

『亜依、俺たちにしかできない事があるなら、そうしようじゃないか』

「……恥ずかしいよ、お父さん」

「同感だ。どうしてこうも恥ずかしいセリフを言ったんだか」

「若気の至りですね」

亜依は口に手を当てて笑う。

『でも……』

「お母さんの声も若いね」

「今だって若いでしょ」

「……そうだね。そうしといてあげるよ」

『俺だって、この人たちを死なせたくない。でも、悲しませたくもない。それになにより、このために命を失った人たちを無駄にしたくないんだ』

「……唯依、言いたい事はわかってるから言わなくてもいい」

誠司は先手を取って言うが、

「恥ずかしいね」

「だから言うなって」

三人はクスクスと笑う。

「ただいま」

そこに誠也が帰ってきた。

「どうしたの？」

誠也は三人が笑っているのを不思議そうに見ていた。

「どうしたのさ。仲間外れにしないでよ」

「ごめんごめん。悪い悪い」

笑いながら言う誠司。

「全然悪いと思ってないだろ、父さん」

「ごめんなさいね」

亜依も笑いを堪えられない。

「母さんもかよ。姉ちゃん、なんなのさ」

「な・い・しょ」

「ったく……うちの家族は最低だ」

誠也はふてくされて自分の部屋に向かった。

誠也がいなくなると、笑い声はピタリと止んだ。

「ホント、悪いとは思うんだけどな」

「ええ。こうでもしないと、誤魔化せないですからね」

「ホントだよ。誠也も能力者なら問題ないのに」

「仕方ないだろ。詩稀の能力を持って生まれる方が世間的には不自然なんだから」

「わかってるけど」

「なら、なにも言わない。わかった？ 唯依」

「わかってます」

——ピンポン！

「は～い」

インターフォンの音に亜依が玄関に向かう。

「誰だろう」

唯依も玄関に向かう。

「おそらくは……」

誠司はソファに座ったまま客が来るのを待っていた。

「お邪魔します」

低い落ち着いた声にする。

「お邪魔します」

まだ子どもっぽさを残した声が聞こえる。

「おじゃましますう」

間延びした声にする。

(ほれ、予想通りだ)

客人たちが部屋に入ってくる。

誠司は改めて客人たちを見る。

「やはり来たようだな」

「ええ、声が聞こえましたから」

落ち着いた声で室田孝志が言う。

「まあ、座って下さい」

亜依がそれぞれに席を勧める。

「あの……声ってなんですか？」

そう言ったのは二条紅祐だ。

「そうか。君は詩稀の人間ではないからな。聞こえなくて当然か」

「ミィユも聞こえませんでしたあ」

「そうね。ミィユちゃんも聞こえないわよね」

唯依は、紅祐とミィユを不思議そうに見る。

「あのさ、室田さんが来るのはわかるんだけど、どうして紅祐とミィユちゃんが来るの？」

「まあ、確かに不思議に思うか。それは、彼に頼んだから……それだけの事だ」

「そういう事なんだ、唯依ちゃん。誠司さんに頼まれて、彼らをここに一緒に連れてきたってわけさ」

「ふう～ん」

とりあえず納得する。

納得できていないのは、呼ばれた紅祐の方だった。

「あの……どうしてここに呼ばれたんでしょうか」

紅祐は恐る恐るといった感じに訊く。

「そうだったね。声が聞こえないんじゃないかな。だから、今日はみんなに来てもらったってわけさ」

そう言って孝志を見る。孝志はそれに気付いて頷く。

「さて、時間が勿体ないな、さっさと始めようか。亜依、頼むよ」

「わかりました」

そう言って亜依は再び能力を解放する。

「これで大丈夫よ」

誠司はコホンと咳払いをして、

「時空の能力者のお二人さん、初めまして」

＊

突然の声に亜依と誠司はキョロキョロと辺りを見回す。

「誰だ」

誠司は天井に向かって叫ぶ。

『警戒しなくてもいい。君たちの敵じゃないから安心していい』

＊

「散々、警戒されてますね」

孝志はため息をつく。

「まあ、仕方ないさ。この時間の俺たちは亜依の能力について気付いていないんだから」

「そうですね。あたしも、この時は無意識でやってましたから、自分に言われて始めて気付いたんですから」

「まあ、そういうわけで、紅祐とミュウ、二人からなにか言ってくれないか」

紅祐は亜依と誠司に見られて戸惑う。

「この時間の俺たちは、君にしか会っていないんだから」

「わかりました」

紅祐は照れながらも同意した。

*

『誠司さん、亜依さん』

聞き覚えのある声にハッとす。

「紅祐？ 紅祐なのか」

『お久しぶりです』

二人は天井を見上げる。この声は詩稀の能力者にも当然聞こえているが、原理を知っているので、普通に聞いている。

「どうしたんだ、紅祐」

『旅が終わったみたいだな。成功、おめでとう』

「どうしてその事を？」

『ああ、ある人に教えてもらったんだ。で、その人からの伝言なんだけど。亜依さん、あなたの能力で世界の人みなにお礼を言ったらどうかって』

その言葉に亜依は首を傾げる。

「あたしの能力？」

「亜依の能力って……時空を見る能力だったよな」

「ええ。それでどうやって……」

二人は首を傾げるのみだ。

「それは僕から説明しよう」

史和が唐突に言った。

「亜依、誠司くん。君たちには、君たちだけの能力がもう目覚めている。それとは気付かない間に」

「俺たちだけの能力……ですか？」

「そう、二人の時空を見る能力と時空を渡る能力は、本来は椎崎誠介さんと容子さんの能力だ。二人は、それを利用させてもらったにすぎない。だが、二人には二人だけの能力がある。それは、rozarioに閉じこめられていた能力だ」

「rozarioに……」

亜依は自分の指を見る。

「そう、その中には二人の能力が封印されていた。亜依には時空を響かせる能力。誠司くんには時空を止める能力がね」

「時空を響かせる能力……」

「時空を止める能力……」

二人は自分の両手を見る。

「そんな能力が……」

「あったんですね」

「二人は無意識に使っていたのさ。憶えはないかい？」

言われて、誠司は思い当たる節がある事に気付いた。

(墓地の周りの時間が止まっていた……それに、あの子を助けた時も……)

「お父さん、あたしは……」

「亜依は本当に無意識に使っていたから。でも、詩稀のみんなはそれに気付いているわ」

亜依はその場にいる詩稀の人間、神崎璃織魚と穴神梢を見る。二人は、ゆっくりと頷く。

「確かに、あたしたちはその能力のお蔭で救われました」

「はい。お父さんの声を聞いたのもあなたの能力のお蔭だと」

「そういう事だから亜依、能力を意識して解放するんだ。そして、旅でお世話になった人たちにお礼と旅が終わった事を報せてあげるのもいいんじゃないか」

「亜依、そうしよう」

『だが、問題がある』

再び最初の声がした。

『その能力は詩稀の能力者に対してのみ有効だ。だから、璃織魚さん……』

「わかっています」

『お願いします』

「さあ、私が能力……時空を伝導させる能力を使います。それを媒介にして、亜依さんの能力を詩稀以外の人にも伝えます」

亜依はコクンと頷いて目を閉じた。そして、自分の中にある力に集中する。

(お願い……あたしたちの声をみんなに届けて)

亜依は念じた。心から念じた。

(届いて……)

8 秘密じゃなくて内緒だもん

木戸紗子は縁側に座って景色を眺めていた。

『ありがとうございます。あたしたち、ちゃんとできました』

ふと声がして空を見上げる。

『紗子さん、本当にお世話になりました。お蔭様で、俺たちの旅も終わりました』

「そう、よかったわね……」

紗子は嬉しそうに微笑んだ。

*

ラミンは、久しぶりにスラッドに会っていた。

『ラミンさん、スラッドさん、あたしたち成し遂げました』

二人は空を見上げる。

『ラミン、スラッドさん、ありがとうございます』

「やったんだな、あの二人」

「そうみたいだね、父さん」

二人は笑顔で空を見上げていた。

*

木元綾乃、本名——吉田綾乃と竹内舜平は、吉田邸にて生活を続けていた。孤児だった二人にと

っては、これは自立でもあった。その事は『博愛館』の館長にも連絡して了承を得ている。

『舜平さん、綾乃さん、あたしたちやりましたよ』

『フィー、ヨハン、俺たちはやったぜ』

「終わったのね」

「終わったみたいだな」

「よかった」

「ああ、本当によかったよ」

二人は空を見上げる。

*

楓夏菜は、仲間と一緒に休日を楽しんでいた。

『夏菜、俺たちの旅が終わったぜ』

「そう、よかったじゃない」

「ねえ、旅ってなに？」

「それより、この声は誰？」

彼女の仲間である星霜トキと呉羽彌季が訊く。

「なんでもないって」

「秘密はなしだろ」

「そうですよ」

「秘密じゃなくて内緒だもん」

夏菜は空を見上げて、

「そうでしょ、不思議な能力者さん」

*

フィオナとシスは湖に沈む城を覗き込んでいた。

「あの人たちどうなったのかな？」

「さあ、あれ以来神様の言葉も聞こえなくなったし」

その時だった。

『フィオナ、シス、心配掛けてごめんね』

『ったく……。まあ、なんとか無事だったからさ、安心してくれよ』

「その声は……」

「あの人たちだ」

途端に二人の表情が明るくなる。

『今は自分たちの世界に戻ってきた』

『旅の目的も達成したんだから』

「よかった」

「本当によかったよ」

『ありがとう』

『心配掛けて悪かったよ』

二人は湖に映る空をじっと見つめていた。

*

「終わったんやな」

『まあな』

『これでよかったんでしょ』

「そうや、ほんまおおきにな」

『礼なんていいさ』

『そうですよ。そんなつもりでやったわけじゃないですから』

「せやけどやな、無理矢理させたんはホンマやさかい、それだけは謝らせてや。堪忍な」

*

二人の声は様々な世界に届いた。

9 ありがとうございます

「さてと、なににせよこれで終わったんだよな」

誠司は、璃織魚の意志の強さに少し戯けて誤魔化する。しかし、それが本音でもあった。

突然にmortoを倒せと言われてたり、地図を探せと言われてたり、rozarioを探すように言われたり……そして、神を解放しろと、なにに関しても突然だった。

「そうですね……」

亜依も大きく伸びをする。

だが、それでもこなしてきたのは一人ではなかったから。隣に大切な人がいたから、だからここまでこれた。

「じゃあ、帰るとするか」

「そうですね。今度はちゃんと会いに来てくださいよ」

亜依は前回の事があるので、ちゃんと誠司に言う。

「わかってるよ。イヤってくらい行かせてもら……いえ、行かせていただきます」

誠司は亜依の両親の視線に言い直す。

「誠司君、いつでも好きなだけ来てくれよ」

「そうそう。亜依も喜ぶますから」

「もう……お父さんもお母さんも……」

亜依は顔を赤らめる。

「みなさん、ありがとうございます」

そんな四人に璃織魚は礼を言う。

「まあ、いいんじゃないの」

「あたしたちの事なら気にしないでいいですから。そうだ、これからはお友達……だよな」

そう言って、亜依は璃織魚の手を握る。

「はい」

璃織魚は笑顔で返事をする。

「みなさん、本当に有り難う御座いました」

梢がその横で頭を下げる。

「これから大変でしょうけど、頑張って下さいね」

史和が言う。

「はい、ありがとうございます。富所様ご夫妻には本当に感謝してもしきれません」

「梢さん、なにかあったらいつでも言って下さいね。私たちでよければいつでも協力しますから」

「はい、ありがとうございます」

「さてと、久しぶりに普通の生活か」

「そうですね」

「さあ、帰ろう」

梢と璃織魚が見送る中、四人は『時の口』へ入っていった。

*

二十一世紀最初の夏、神の能力者が解放された。それを成し遂げたのは二人の少年少女だった。その二人の名は――富所亜依と椎崎誠司とあった。

KVAR FINO.

こうしていると、あの時に見た夢を思い出す。

あの時……あたしが、舜平さんと一緒に旅をしていた時、熱を出して入院した時に見た夢。

舜平さんと旅をしているはずなのに、思い浮かぶのはあの人の顔。

旅の最中もずっと考えていた。

あの人ならどうするだろう。

あの人ならどう言うだろう。

あの人なら……。

目の前にいたのは舜平さんなのに。

だけど、あたしの頭の中にはあの人しかいなかった。

舜平さんには悪いとは思うけど、仕方ないくらいあの人が頭から離れない。

あの人の笑顔。

あの人の照れた笑い。

あの人の嬉しそうな顔。

あの人の困った顔。

あの人の怒った顔。

あの人の悲しそうな顔。

あの人の全ての表情……頭から離れない。

運命の出会い……そう言われるものなんだと思う。

運命の出会いなんて、決められていたものだって嫌う友達がいる。言われてみるとそうなんだと思う。運命という事は決められていた事になる。それは偶然でなく、決められた道に従っているだけになる。

それでも、この出会いは運命なんだと思う。過去から決められていた事でもいい。そんな事、どうだっていい。

あたしはあの人に惹かれた。あの人を好きになった。あの人を愛した。その気持ちに嘘はないし、他からの関与もない。あたしの意思。

今、あたしは幸せだ。

大好きな人と一緒にいられる。

あたしの横には、あの人がいる。

可愛い寝顔。

その寝顔をじっと見る。

やっぱり可愛い。

――チュッ！

あの人のほっぺにキスをしちゃった。

大好き……愛してます。

あの人に寄り添い、目を閉じる。

おやすみなさい。

これからはずっと一緒にいられるんだよね。

ーピンポーン！

その年の夏、室田孝志は愛藤菜々と椎崎家を訪ねた。

「は〜い」

という声と一緒にトタトタと走る音がする。

やがてカチャリとドアが開き、そこから女性が顔を覗かせる。亜依だ。

「孝志君、菜々ちゃんも。いらっしやい」

と、笑顔で迎え入れる。

もう、今では当たり前の光景になってしまった。

孝志が菜々を亜依と誠司に紹介したのが、ほんの数日前とは到底思えない。最初の頃は二人ともガチガチに緊張していた。だが、亜依と誠司が意外なほどリラックスして迎えた事もあり、すぐに打ち解けたのだが。

孝志は自分の家には菜々を招こうとはしない。それは恥ずかしいのではなく、母親が苦手だからだ。早く自立したいとさえ思っている。そんな孝志の唯一とも言える拠り所が椎崎家なのだ。

孝志は小さい頃、誠司に命を助けられている。それ以来、孝志は誠司を兄のように慕っている。誠司も一人っ子だったので弟が出来て嬉しく、孝志をかわいがっている。それは亜依と結婚してから変わらない。亜依も一人っ子なので弟が出来て喜んでいる。孝志の方も、亜依を姉のように慕っている。

「孝志兄ちゃんだ……」

孝志と菜々が家の中に入ると、小さな女の子がトテトテと走ってきた。亜依と誠司の娘の唯依だ。

「唯依ちゃん、こんにちは」

孝志は唯依を抱き上げる。孝志にとってみれば、唯依は妹のような感じだ。

「きゃはははっ」

唯依は嬉しそうに喜び、

「菜々姉ちゃん、こんにちは」

と、菜々に微笑みかける。

「こんにちは、唯依ちゃん」

と、頭を撫でる。

「こら、唯依。お兄ちゃんが大変でしょ。ごめんなさいね、孝志君」

「いえ、全然問題ないですよ。ね、唯依ちゃん」

と、笑みを浮かべる。

「ねえ〜」

と、唯依も真似をするかのように笑顔を返す。

「ところで、今日も誠司さんに用事かしら？」

母親である亜依は、唯依と孝志が仲良くしているのが少し羨ましくなって本題を切り出そうと

する。

「え、ええ」

そう言って、孝志は唯依を降ろす。

孝志がこうして訪ねてくる事は、今に始まった事ではない。自分の家にいるよりも、椎崎家にいる時間の方が長い。亜依と誠司も本当の弟のように接しているので迷惑と思った事はない。むしろ、歓迎している。孝志の母親も了承済みだ。

「でも、ごめんなさいね。誠司さんは、今誠也と一緒に公園に行ってるの」

「そうなんですか……少し待たせてもらっていいですか？」

「ええ、いいわよ」

そう言うと、亜依は二人をリビングに通した。

「麦茶でいいかしら？」

「あ、はい。ありがとうございます」

そう言い、孝志と菜々はソファに腰を下ろす。

しばらくして、氷が入ったコップ三つと麦茶が入っている瓶をお盆に乗せた亜依が戻ってきた

。

「好きなだけつ注いでね」

そう言うと、それをテーブルに置いた。

「で、今日はなんの用なの？」

コップに麦茶を注ぎながら亜依が訊いた。

「いえ、別に用ってものはないんですけど」

「あら、そうなの。じゃあ、誠司さんに言われるのは覚悟しなさいよ。用もないのにここに来る時間があるなら、二人きりでデートでもしてきたらどうだ……ってね」

と、言うのと、菜々が頬を赤らめる。

「……確かに。覚悟しておきます」

「まあ、あの人も二人が来てくれて嬉しいんだけどね。誠司さんって意地悪なところがあるから」

と、亜依は嬉しそうに話す。

「ラヴラヴなんですね」

と、孝志が茶化そうと言うが、

「あら。あなたたちだってそうでしょ」

と、返されてしまう。孝志と菜々は見つめあったまま、なにも言えない。

「もう、そんなに照れないの。あんまり照れるから余計に苛めたくなくなっちゃうのよ」

と、笑う。

その間、菜々は亜依の右手をじっと見ていた。

「ん？ どうしたの？」

それに気付いた亜依が訊く。

「あ、いえ。その薬指の指環はなにかなって」

言われて、亜依は薬指を見る。そこには、ビーズのようなもので作られた指環がある。左手の薬指に嵌っているマリッジリングからすればオモチャのような代物だ。

「ああ、これね」

それを見て、亜依は懐かしそうな顔をする。

「これはね。大事なもののなの」

それを聞いて菜々は、

「ご主人からのプレゼントですか？」

と、そう解釈した。が、予想に反して亜依は、

「いいえ」

と、首を振った。

「え？ 違うんですか？」

と、菜々は心底驚いた。それは、孝志も同じだった。孝志も今まで訊かなかったが、てっきり誠司が贈ったものとばかり思っていた。

「これはね。大切な思い出なの」

「思い出……ですか？」

孝志が訊く。

「そう。信じてもらえるかどうかはわからないけどね、あたしと誠司さんの思い出」

それを聞いて、孝志は自分の不思議な能力の事を考えた。孝志には不思議な能力がある。だが、それがなんの能力なのかははっきりとしない。それに、孝志の意思で自由に操る事が出来ない。さらには、能力を使用する事は自分たちの能力の原点である詩稀村の最高能力者、神崎璃織魚によって禁止されている。

「じゃあ、それはあの時のものなんですか？」

と、孝志は思わず言ってしまった。

「ええ、そうよ」

と、亜依。しかし、菜々だけはさっぱりわかっていない。

「どういう事なんですか？ むろ……じゃなかった。孝志君は知ってるの？」

「あ、ああ……」

孝志はつい口走ってしまった事を後悔した。しかし、時既に遅し。

「もう、九年ほど前の事よ。誠司さんと孝志君が知り合ったのもその頃だから、ね」

と、亜依はそれとなく誤魔化す。

「ああ、そうなんですか」

「そうなんだ。前に聞いたような気がしてて、それで……」

「というわけなの」

と、亜依もなんとか誤魔化そうと必死になる。

(迂闊だったかな……詩稀の事は秘密だったんだっけ)

と、心の中でペロツと舌を出す。

「まあ、その時に色々あってね。その時にもらったの。神様の贈り物かな」

「……なんだかよくわかりませんが、素敵ですね」

と、そのキラキラと光る指環を眺める。

「これって、なんていう石なんですか？」

その言葉に亜依は言葉が出ない。

(rozarioって……どう言えばいいの?)

「えっと、あたしにもよくわからないの」

「そうなんですか。綺麗ですね」

「ええ」

(どうにか納得してくれたかな)

と、ホッと胸を撫で下ろす。

「ねえ、孝志兄ちゃん、菜々姉ちゃん。一緒に遊ぼうよ」

その時、一人で淋しく遊んでいた唯依がせがむ。

「そうだね。唯依ちゃん、ゴメンね。お兄ちゃんと一緒に遊ぼうね」

と、亜依を見てウインクをする。

(唯依ちゃん、ナイスタイミング)

と、孝志は唯依の頭を撫でる。

「きゃはっ」

撫でられた唯依は嬉しそうに笑う。

「菜々姉ちゃんも一緒に遊ぼうよ」

「うん」

「よかったわね、お兄ちゃんとお姉ちゃんが遊びに来てくれて」

(ホント、唯依に助けられちゃったな……)

と、亜依はコップに麦茶を注いで一気に飲み干す。

(これは大切な冒険の思い出だもんね)

亜依は自分の右手薬指に嵌っているrozarioをずっと眺めていた。

Renkonto-Mondo —Dio-liberig[^]i— FINO.

世界が矛盾で満ちようとも
人が矛盾に支配されようとも
時は止まる事なく流れ続け時代は進む

それは希望か絶望か
誰もその答えを知る事はない